
異聞 真田信繁伝

どたぬき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異聞 真田信繁伝

【Nコード】

N6031T

【作者名】

どたぬき

【あらすじ】

某所で書いていた小説の移転品です。とりあえず、指摘された内容は書き直したので、まあ、だらだら書いていくので、長く、生暖かく見ていってください。後、一応はフィクションのつもりなので改めて作品を見るのにある程度の差は多めに見てください。

真田信繁・・・通称真田幸村の数奇な人生についてかかれた小説です。奇想天外なその人生の始まりは、日本最後の戦国の戦い（大阪夏の陣）から始まっていた。その前後において何が行われ、そして

どつなつて言つたのか書かれた小説です。

序節（前書き）

某所で書いていた小説の移転品です。とりあえず、指摘された内容は書き直したので、まあ、だから書いていくので、長く、生暖かく見ていってください。後、一応はフィクションのつもりなので改めて作品を見ル野にある程度の差は多めに見てください。

序節

異聞 真田信繁伝

異聞 真田信繁伝

序節 真田信繁と言う男

真田信繁、通称真田幸村は信濃の国の当時領地を任されていた真田昌幸の息子として信濃の地で生まれた。それからしばらくして祖父が無くなった為、父真田昌幸の相続により上田城城主となった。

上田城は小さく、こじんまりとした城ながら、領地は平和で民は穏やかだった。だが時は戦乱の戦国時代。武田軍を破った織田に昌幸は服従する事で、その地を守っていた。その間真田信繁と兄信之は父の元、武田家の秘伝の軍略書や様々な戦略所を読み漁り、数多くの学問や武道にいそしんでいた。

当時の軍略書の多くは軍の動かし方や、虚の突き方。兵士達の混乱時の心理などに及び、その中には孫子の兵法書などに更に日本独特の注釈が加えられたものを用いられていた。その書物は当時、武田家から落ち延びた物達が保管していたものの殆どに及び、そんな腕を磨きながらの平和な日々は長く続かず、信繁は援軍の代償として上杉軍に人質として向かった。そこで、上杉景勝と会い、その容姿と才覚を気に入られ仮初ながら領地を与えられていた。当時豊臣五大老の一人であり、その最中その有能さは、豊臣家臣一堂に知られる事となった。そこで、そして時代が過ぎるうちに織田信長は明智光秀に打たれ、豊臣の世になった時、豊臣秀吉から真田の性と上田の地を保障された真田家は、豊臣方に恭順する際、無理やり真田信繁は人質にされ、豊臣家内に人質として捕らわれてしまう。その頃に結婚させられており、無理やり豊臣方に付くようにさせら

れてしまう。だがその中で真田家は晴れて一大名としての地位を手に入れ、その地を守り続けるはずだった。

豊臣秀吉が死んでしばらくすると気に入られていた秀吉がいなくなり、また養子騒ぎも一服した為、真田家の元に返される事となった。それからしばらくし、豊臣方筆頭の石田光成と、徳川家康との間で関が原の合戦が行われる事となった。その時に、昌幸は数少ない兵士達を見ながら考えていた。信義どおりなら確かに石田につくべきだが、彼は今までかき集めた情報で戦況を考えていた。・・・大方東がもしかしたら勝つかもしれない。西は統制が取れなければあるいは・・・それに、従順を決め込んで東に付けば今までの恩義に報いる事はできない。それを考え、当時徳川に嫁をもらっていた兄信之を徳川方に帰らせた。

父の手元には下らなければ国を滅ぼすという手紙が何通も徳川方から来ていた昌幸はある妙案を思いつく。それがこの地を無視するなら通し、それ以外なら抵抗するというものだった。だがこの地に徳川秀忠は軍を引き連れ上田城に向かつていった。それを見た真田昌幸は籠城を決め、蹂躪されるかもしれない住民を城に集め、近くの森に退避するように指示を出したが、誰一人として森に逃げるものはいなかった。それを見た昌幸は民兵達を加え、それでも10倍近くある兵力差のまま、第二次上田の戦いは始まった。

それは信繁の初陣でもあった。この戦いは兵法を尽くして戦った真田方の大勝利で終わった。それはある意味小さな勝利でもあり、誰も、何も報酬は無いかもしれないが、それは大きな勝利であった。それは関が原の戦いの直前で行われた為、徳川秀忠は関が原に参戦する事はなかったが、石田光成に後方を突いてほしいと頼まれていた真田昌幸は、この戦闘で兵を動かす事ができなかった為、結局関が原に参加できなかった。その為、関が原の戦いは結局東方が勝つのであった。

その後、もう一度大軍を率いてやってくる徳川軍に、民を巻き込む事を恐れた真田昌幸は、涙を飲みつつ無条件で降伏するのであ

た。そこで、数多くの徳川方の武將に切腹をさせられそうになるが、徳川に行った兄に一命を救われる事となり、九度山の山奥に幽閉される事になる。そこで父真田昌幸は、一生上田の民を案じその生を終えていった。

その息子真田信繁はその無念さに山奥で僧侶達と暮らしていたが、ある日、豊臣方が人を集め、徳川と戦うと使者に聞いた真田信繁はいても立つてもらわれず、急いで山を下りていった。そこで旧武田軍の人々などに誘われ、大阪冬の陣を向かえる。

そこで最初真田信繁が勢いで押し切る合戦を提案したが、淀君が反対した為、籠城をすることとなった。そこで父譲りの戦略で、大阪城の布陣の欠陥を見抜いた信繁は真田丸での戦いで、徳川軍を打ち破るも、戦い自身は大きな堀があり攻めあぐねた大軍の徳川軍と互角であった。だが、本丸周辺への砲撃が始まると、豊臣側から講和を受けるとの報を徳川に出し、堀を埋める事を約束させ、戦争は終わった。それから行くところがない真田は武功もあつて、大阪城郊外に小さな武家屋敷を構え、一時的な平和を味わっていた。

第一節 1614年二月（前書き）

1614年二月のある日、真田信繁ていにある男が尋ねて来る。その男は見知った男でもあった。

第一節 1614年二月

第一節 1614年二月

「叔父御。今日はどうした。」

目の前の若い侍はじつと厳しい顔で、目の前のヒゲモジヤの男を見つめていた。ヒゲモジヤの男はその形相に脂汗を垂らしながら、若い侍を見つめていた。お互い胡坐をかいて座ってはいるが、剣呑さはすさまじいものがあつた。

「今日は・・・お前のためにいい話を持ってきたんだ。」

「なんですか？叔父御！」

口を開くと、その怒号はこの建物いっぱい響き渡つた。

「先日は確か、80万石でえ・・・徳川に寝返れ！・・・でしたっけ？」

「いやあな。」

「あの話はお断りしたはずです。」

「いやあ・・・お前もあの上田の地は懐かしがる。帰りたいと思わんか？」

ヒゲモジヤの男は懐から手ぬぐいを取り出すと、汗でびっしょりとなつた額をぬぐつた。

その間も若い侍は、そのヒゲモジヤの男を睨みつけていた。

「それだけじゃない、武田のあの地をほしいと思わないか。」

「・・・それで！」

「徳川殿は信濃一國を約束してくださつた。一緒におぬしの兄のところに行かないか？」

その瞬間、侍は立ち上がり、怒りの形相でヒゲモジヤの男は座りながらも部屋の隅までずり下がつた。

「叔父御！ふざけるのもたいがいにせい！」

「だから！だから話を聞け！」

その怒号は声は小さい屋敷すべてに響き渡つたのだ。声の持ち主である若い侍の男は目の前にいる髭モジヤの男を蹴りだしていた。

「信繁！聞け、あの上田の地に、いや、お館様の意思……いや、親父の無念を晴らすいい機会だぞ！」

「叔父御殿がそんなに不忠者だと思わなんだぞ！二君に仕えろとか言う、そんな……そんな！馬鹿者だと俺は思わなかつたぞ！」

信繁と呼ばれた若い男は刀を手につけ、怒りで顔を赤くしていた。「わ、分かつたから刀を納めろ！」

「真田様！刀をお納めください。いくら徳川側として来た叔父殿とはいえ切つてしまえば、主君に泥を塗りますぞ！」

坊主頭の男が老化から走つて部屋に飛び込むなり、信繁と呼んだ男に覆いかぶさり、押さえ込む。そして奥からもう一人の男が叔父と信繁の間に割つて入る。

「算！離せ！！この不忠の輩は……いや！この真田の名を汚したこの叔父御はこの真田信繁が成敗してくれる！」

信繁は怒り心頭の顔でじつとそのヒゲモジヤの叔父を睨みつけた。「この信繁！八十万石で裏切らず！信濃一国で寝返れば不忠者にならないと思つたか！何たる！……いや、ここで成敗してくれる！」

「わ、分かつた。もう言わん。だから……わしは、わしは帰るぞ！せつかくの提案蹴つた事を後悔するぞ！」

庭に蹴りだされた叔父はそのまま、玄関に走つていった。その様子を見ていた信繁はその焦つて逃げ出す姿をじつと見つめた。

「はあ……はあ……せい……すまない。」

そう言つて信繁は刀にかけた手を収め、じつと部下を見つめた。

「この算、出すぎた真似をしてすいませんでした。」

「いや、いいんだ。だがすまない。」

そう言つと信繁はどかつとその場に座り、縁台から外を見つめた。「お前たちのことを考えたら、本当なら、上田のあの地に帰るのがいいんだろつが……。すまない。」

そう言つて信繁は外を見つめた。外の天気ははれていて掃いたが、

まだ少し肌寒い天気であった。ふとその寒さに父と共にいた上田の地を思い出していた。この頃の信繁は若いながらも実践などを多く積み、顔は丹精ながらも凛々しくその風貌はもはや熟練の域に至っていた。身体は中背ながらすつと細く、だからといって必要なところには筋肉が付いていた。

ただ、その瞳の中に眠る信念は、今でも揺るぎなく、爛々と燃えさかっていた。

「おれは、ただ、そういうことが許せなかったんだ。」

「いや、そのような事は。」

「そんな事をするとか色々なものを・・・失ってしまう気がしてな。」

寂しそうな声がこの小さな庭いっばいに響き渡る。

「いいんです。我々は、そういうあなたについてきたんですから。」

「そんな事を言うのなら、この話受ければよかったのに。」

その声に声のほうを振り返ると、庭にあのヒゲモジャの男が立っていた。その瞬間、今まで押さえてきたことが押さえきれなくなつた。

「叔、父、御！切られに来たか！そこに居直れ！」

そう言つと、信繁は裸足で庭に飛び出すとその勢いで刀を抜き、切りかかった。それを叔父は脇差を抜くとその刀を打ち払つた。

「！」

息を呑みじつと叔父を見つめた。確かに切るつもりはなく、寸止めの予定だが、それでも打ち払われるだけの打ち込みをした覚えはなかった。叔父も戦場には出るが、それほど強い人ではない。それがこの打ち込みを抜刀して直後に打ち払えるとは思えなかった。

「時として名を捨て、実を取る事も必要ですぞ。」

「・・・おぬし・・・。」

算が立ち上がり、じつと叔父御殿をみつめた。信繁は、今までの少し寂しげな瞳から一転、洗淨にいますときと一緒の、ときすまされた瞳になった。

「おぬし、叔父御殿ではないな。」

打ち払われた刀を構えなおし、それまでの激情から一点じつと冷静に叔父を見つめる。

「……ほう……。」

その叔父のような格好をした男は、すり足でじりじりと間合いを詰めていく。

「何でそう思ったかな。」

「その物腰、そして、その構え。普通の侍ではやらん。」

確かに武士にしては、その構えが独特であった。ふつつの武士では、脇差しは根本を握り、打ち込みを強くする傾向があるが、この男は柄の中程を握り、少しばかり、間合いをのばしている。そして何より、脇差しを前に構えず、だらりと下げていた。信繁は相手に合わせるように構えを解かず、少しずつ間合いを詰める。

「何者……。」

身構えた信繁はじつとその様子を見つめている。

「そこまで警戒されるなら、こんな無粋な真似、しないほうが良かったな。」

そう言つと、脇差しを納めて叔父らしい男は廊下に腰をかける。

「そういう貴様は何者だ！」

「敵意はない……。客のつもりだが？むしろ、茶の一杯でも出して欲しいところだ。」

そう言つと廊下に座った叔父の格好をした男は髭を引き剥がすとぼろっと取れた。

「もしや……いや……もしや、半蔵殿か？」

「半蔵？」

青海入道はいぶかしがるとその顔を見つめる。その間に叔父御に見えた男は、口から綿を取り出している。その顔はもはや、叔父とは似ても似つかない感じに変わった。顔は細く、中背中肉、外見に特徴らしい特徴がないところが特徴みたいな風貌の男がそこにいた。

「有名な人だよ。せい、奥の台所にいる連中から、水を持ってくるように行ってくれ。家に確かお茶はないし、それぐらいしか出せないから・・・ただ器だけは来客のを頼む。」

「わかった。いいんだな。」

「ああ。」

そういうと算は奥に引き下がっていった。

「お茶を出すまでも無いか。」

「茶を立てたくとも、茶ツ葉と、茶具は性に合わぬゆえ、持ってはおらぬ。それに・・・水で茶菓子を出しても、味気なかるう。」

「確かに・・・それは失礼した。」

「何の用かな。伊賀の忍者が。」

落ち着いた声で信繁は目の前の男を見つめていた。昔、上田の城にいた頃に幾度か戦ったことがあるが、その中でも目の前にいる男は、格が違うようにも感じられた。伊賀の忍者はこの当時、暗殺から何から何まで請け負う暗殺集団としても知名度がある忍びの者達だった。数多くの異名があるため、いい話は出た事がない。

「ん？そこまでとは見識あふれるお方だ。私に敵意はない。あなたは敵意のない人間に刃を向けるのかな？」

真田より落ち着き払う半蔵に気圧された様に、信繁はしばらく睨みつけた後に刀を納め、廊下に座った。

「それで、何の用かな？」

「何の用かと言われて、察しは着くであろう。」

「徳川につけと。」

「まあそういうわけではないが、おぬしがどうして戦っているのかお館様が知りたいとおっしゃって置いてなあ。」

「それで・・・。」

「先ほどの話を聞かせてもらった。」

「人が悪い。」

「やはりお館様が思った通りのお人だ。それでこそ、真田という男よ。」

「だから！・・・なんだと言つのだ！」

そう言つて信繁はじつと相手の様子を見つめる。さっきの叔父御見たいな濁つた瞳ではなく、その瞳はまっすぐこちらを見つめていた。

「私はお前のようなヤツにこそ我らの下に来て、真にこの日の本の国を平和にして欲しいと思つている。」

「それはどういう意味だ。」

「我らの中にも、さっきの男みたいな情けない自分の保身しか考えない人間は多い。」

男は大きいため息をつく

「私は、あんな物で釣られる男ではない。」

「だからこそ聞きたい。お主は何の為に戦つておるのだ？」

「それは・・・。」

「それは？」

「仕えたる君主の為だ。」

「それが・・・あの淀殿か？」

ふと、信繁は怒りで顔がゆがんでいる淀殿の顔を思い浮かべる。

昔は聡明な美人とも思ったが、今ではその面影さえもない。

「まあそついわれても仕方が無いが、それでも君主の為だ。」

そう言つて信繁は外を見つめる。その見た先には外堀を埋めている最中の大阪城を見つめていた。淀君には先の大坂の戦いで、いろいろ無茶を言つてきて、勝てる戦を逃した経験がある。

「おぬしの父上もそつだつたか？」

「父上は分からないが俺はこの道を貫きたい。」

「そつか。今日はおぬしに見て欲しいものがある。その為に・・・。」

「なんだ？」

「江戸まで来て欲しい。」

「は？」

当時は徒歩や船が殆どの為、大阪から江戸まで向かうと一ヶ月以

上はかかる。この当時遠距離旅行は無茶な行為の代名詞ともいわれている。

「まさか、この私に江戸にこいと。」

そう言うと、信繁は刀に手をかけた。

「ああ。この話が来た時に、信繁殿がこのような答えをするのは分かっていた。だからもう一つ考えがあった。」

「ほう？」

「おぬしに、江戸に来て見て欲しいものがある。その為に私はここに来たのだ。」

そういいながら微笑む彼の表情には一点の曇りも無かった。

「もし来ないといったら。」

「絶対に来てもらおう。」

「それはどういう意味だ。」

そう言うと自分の脇差を取り出し、鞘ごと信繁の前に置いた。

「この事に・・・拙者は！自分の命を賭そう！」

「それほどまでに見て欲しいものは何だ！」

信繁の狼狽した怒号が響く。言いしれぬ自信を持つ半蔵を前にして自信が揺らぐ。

「それは・・・ここでは言えん。だが来てくれている間は命はこちらが保障する。」

微笑みながら出した声に、一瞬信繁はたじろいだ。この刀を目の前に鞘ごと置くのは、この当時ある種の覚悟を示すものだった。そしてあの微笑み、死を覚悟しているとさえ思われた。

「そこまでしてどうして俺を江戸に？」

信繁は不思議そうにその表情を見つめるが。

「お前が豊臣に忠誠を誓うように、私はお館様の夢の為に一命を賭しておる。そのお館様の命令だ。来ればわかる。お主に悪いようにはせん。約束しよう。」

そう言って男はじっと信繁を見つめた。そのまま、じっとお互いを黙ったまま見つめていた。その静寂は長く、空気がピンと張りつ

めた、そんな緊張感だった。その時、向こう側からどすどすと歩いて来る音が聞こえる。

”本当にこれだろうな!”

”ああそうだ。拙者が持ち出した最高の器だ。これでいい!”

”でも何で俺がやらなきゃいけないんだよ!”

”家でただ酒飲んでるんだ!そのぐらい行ってこい!”

向こうから、大声での会話が聞こえてくる。その声に触発されお互いは庭に顔を向けた。このまま、正面を向いていれば何かの拍子に斬り合いかねないほどの緊張感がそこにあった。

「ここに帰ってくる事は出来るか?」

「ああ。それは約束しよう。」

「その間にここを攻めるつもりか?」

「いいや。その間お館様が豊臣を攻めない事も約束しよう。」

「本当だろうな。」

「ああ・・・。万が一でもあれば、私が、豊臣方に立って、お館様を説得もしよう。」

緊迫した空気が二人の間に流れる。もし本当ならそこまで高く見られているということだが・・・。

「・・・むげにおぬしの命を散らす事はない。」

そう言うと刀にかけた手を収めると、音のしたほうを見る。そこにはお盆に器をのせた

男がやってくる。

「そう言ってくれて・・・良かった。」

「ただし、幾つか条件がある。」

「ほう?」

「まずは旅費はお主持ちと言う事。そしてもう一つは、部下を連れて行っていいか?」

当時旅行にかかる金はかなりの高額で、特に侍ともなれば、ぼったくられたりして、食費一つでもかなりの金額になることも多い。

「慎重なおぬしの事だ。それぐらいは覚悟していた。只、少数にし

てくれ、へんに目立てば、どちらも危ういからな。」

「わかった。」

算がその場に來た頃にはお互いの緊張した空気は和らいでいた。

「真田様、一応持ってきましたぞ。器はどれがいいか分からなかったから適当なのを持ってきました。」

そういうと二人の間に湯飲みの小さな器が二つおかれた。その中には水が入っている。器が目の前に持つてくるまでには先ほどの剣呑さが微塵も感じられないほどの落ち着いた空気であった。

「真田殿、おぬしのところに家人はおらぬのか？」

「いやあな。ここは仮住まいと思っておる。だから部下と呼べるのは6人ぐらいしか、この家にはおらん。」

そう言つと、算は、軽くお辞儀をする。当時の武家屋敷は戦鬪をいつ行つてもよいように部下を数名ほど、家に住まわせていた。特にその部下に家人（妻や子供）がいれば、食事などの世話を武家屋敷を持つ人の家族を中心に行い、それを中心とした世帯が完成するのが普通であり、当時において小姓などを持つ大きな家以外では女性が器を持つてくるのがふつうとされた。

「今は、この真田家の部下である算と申す。先ほどは失礼した。」

「いやいや。あの振る舞い、さすがです。」

「算、今から出立するぞ。」

信繁は器に注がれた水を一気に飲み干すとその場に置いた。

「ハイ？何処へ？」

「江戸だ。」

「へ？」

「江戸だ。」

「江戸つて……確か、徳川の居城ですよ。かなり……遠い……ですよ。」

「ああ。」

「お待ちください。いきなり徳川の居城に行つて何になります？」

「あの男がこいと。」

その瞬間、笥の動きが止まった。

「いやあ、待ってくださいよ。それだけで急に言われて行けるわけ無いですよ。」

「だそうだ。」

そう言つと、信繁が振り返ると男の顔は何も変わってはいない。

「いや、お忍びの旅だ。船に乗ってゆったりと駿河について、そこから観光がてらに江戸まで行くのはどうだ。せつかくお主も外に闊歩しておるのだ。私もおぬしもいつ死ぬか分からぬ身だ。旅を楽しむのも悪くは無かるう。」

「そういうものか？」

青海ですら半眼になる言葉に二人は呆れてしまつが……。信繁にとつては普通だった。

「真田様。そんな甘言に引つかかってどうするんです。」

「おぬしも行くんだぞ？」

「はい？」

「そうだ、笥、青海を探してきてくれ。一緒に行こうぜ。江戸へ。どうせこの館でうじうじするより、出来れば兄貴の顔がみたい。」

「え、いやまあ、そういうのは嫌いじゃないですけど……。わざわざ、いつ戦があるか分からないこの時に行く事ないですよ。」

笥は焦つて引きとめようとしていた。確かに今までいくらでも無茶な事は言ってきたが、ここまで無茶な事は初めてだった。その様子をじつと二人は見つめていた。主のその目は

江戸に行く事だといつぱい……。と笥には見えた。

「分かりましたよ。只、出立には幾つか準備があるので、明日まで待っていただきたい。青海にもそう伝えておきますし、後のものは留守を頼んでおきます。」

「分かり申した。」

そう言つと男は深々と笥にお辞儀をした

「でだ。」

「はい？」

「改めて聞こう。お主、名はなんと言う？」

そう言つて、真田信繁は手を差し出した。

「・・・拙者、半蔵と申す。今後ともお見知りおきを。」

次の日の朝早く、朝もやに包まれ、ちようど周辺は霧で見通しが悪い中、まだ朝日も昇らぬうちに真田家の仮住まいの屋敷の門の前には数人の男がいた。その中心に真田信繁と二人の男、そして複数の家人がいた。

「大助。しばらく出掛けるから、お母さんを頼んだぞ。」

「うん。」

そう言つと小さな、その子は母親のすそを握りながらも激しく頷いた。このころの真田信繁には妻がいて、子供がいた。だがほかの男達には妻とかはいない独り身の者ばかりだった。

「あなた。」

「すぐ帰つて来る。それまでは頼んだ。」

「はい。」

そう言つとで見送りに来たただ一人の女性はしつかりと頷いた。

「後の者も、よろしく頼んだ。」

「根津、留守を頼む。」

「分かり申した。」

そう言つと家人の一人が深々と頭を下げる、顔立ちは真田信繁に似ていた。

「いいんでしょうか。江戸なんて。」

「いいんだよ。只、何かあったら根津、お前が俺の代わりとして、秀頼様にお仕えしてくれ。」

そう柔らかく微笑むと、根津甚八の手を柔らかく握つた。根津甚八は信繁と同じような体型をしており、よく間違われるので、彼自身いろいろと重宝していた。

「・・・分かりました。だがここで死ぬような真田様はとも思えない。ただ道中は最近いろいろあるといます。用心なされよ。」

「船に乗るのは、初めてだな。」

「でも、確か、徳川の船はここに入っては来れまい。」
「そういぶかしがって算は聞いて来る。」

「それは大丈夫だ。外堀普請の際の材料の一部を商人に頼んであるが。」

「それで？」

「その商人に帰る時期を少し遅らせてもらっている。だから我々はその船に用心棒として乗り、駿河まで行く。そこから歩きた。」

「江戸まで直行じゃあ良くないか？」

信繁は腕を組みながら考えていた。それを少し足を速めながら、半蔵は答える。

「それだとさすがに、関所におぬし達の姿を見ると、変に勘ぐる者が多い。だから、あえて途中で降りて、せつかくだから美味しい物を食べながら旅をしようというのだ。」

「お主のような者からそんな言葉が聞けようとは思わなかった。」

青海が意外そうな顔をして前を歩く半蔵に並ぶように早足で歩く。「お主に何らかの生きる楽しみや酒の美味さがあるように、拙者も生きる楽しみはある。酒も好き、風景も茶も子供も好きだ。まあ、博打はあんまり好きじゃないがな。」

「そういう会話をしながら、」

「そろそろか？」

「そういう算の鼻に潮の香りが匂ってきた。堺は港町としても有名で、大阪城周辺と隣接していた。」

「俺は海は始めてでな。」

「そうか。山の生まれだからな。」

青海は納得したように頷くと周囲を見渡す。近くで帆を張った船は一艘しかなかった。大型の船だ。もう荷入れは終わっているらしく、人足達の姿はなかった。

「半蔵様。」

商人らしい男が駆け寄って来る。

「この方達が。」

「ああ、そうだ。」

「よろしく頼む。」

信繁は軽くお辞儀をする。

「でも、こいつら大丈夫なのか？」

青海は不振そうにひ弱そうに見える商人のほうを見る。

「並の水軍よりも海にいるこいつらは、よっぽどの事がない限りこの船は沈みもしないよ。」

そう半蔵は言うと手に持った荷物を甲板に向かって投げつける。

「それは失礼した。すまない。青海……。」

「……すまん。」

「いえ、いいですよ。ほかの武士の方々に、こういつてくれるのは半蔵様だけですから。」

「そうですか。」

そう信繁は軽く頷いた。

「だが拙者……船旅は初めてですよ。」

「早くお乗り込みください。もう少して、霧は晴れ、下手すれば、どなたかに見咎められますぞ。」

商人は周囲を見渡し焦り始めた。空が白んできたからだ。

「分かり申した。」

そう言うとき全員は駆け足で船に乗り込むと、そのまま出航をはじめた。そうこれが、これから起こる真田信繁の波乱万丈の人生の始まりとも言える運命の船出だったのだ。

第二節 東海不思議旅（前書き）

ついに駿河に着いた真田一行は徒歩で江戸を目指すべく東を目指す。
そこで出会ったのは・・・。

第二節 東海不思議旅

第二節 東海不思議旅

「これが、駿府・・・富士山はこっちから見たことはないが、きれいなものだ。」

真田信繁は港に着いて背筋を伸ばしていた。

「ですな。船から見る富士山よりも、やっぱり陸から見る富士山のほうが、きれいですな。」

「そうだな。船は狭い。」

青海はそう言うと、身体を乗り出す。

「・・・そういいながらも、お前達は毎日酒を飲んでたじゃないか。」

半蔵は呆れながら、船から下り、船長でもある商人に金を渡していた。

「仕方ないだろ。二週間やることが無いんだから。」

青海はあきれたように周囲を見渡す。

「甲板掃除も暇つぶしみたいなものだ、せつかくだから磨いていけばよかったのに。」

信繁は呆れたように船を見つめる。

「そういうあんたはずっと、本を読んでたくせに。」

青海は呆れたようにいった。

「ま、私の暇つぶしにはなりましたがね。甲板磨きは。算はそう言つて腕をまくつた。」

「・・・その代わりにあなたは飲みながら甲板を磨いてるから、こぼれた酒拭いてるだけに見えたけどな。」

半蔵は、悪態をつくとそのまま街中に歩いていく。

「で、こっからどうやって行く？」

信繁は周囲を見渡すが、港町であり家康のお膝元である駿府は、

江戸や京都と同じぐらい活気に満ち溢れていた。

「そうだな。三島から箱根山中を抜け、そのまま相模沿いから街道がある。そこを通ってから、江戸まではほぼ平地だ。」

「・・・おう、何か神社めぐりもいいなあ。あっはっはっはっは。」
青海は豪快に笑った。

「坊主が神社周りとは。あっはっはっは。」

算もにやけたように歩いている。大通りも人通りも多く、町も活気に満ち溢れている。

「・・・本当に大丈夫か？」

信繁は半蔵の横を歩くように歩くと、箱根のほうを見た。

「とういとうと。」

「あの辺は確か風魔の根城じゃないか？」

「それは・・・まあ・・・崩れさえいなければ大丈夫だろう。」

「そうか。」

風魔とは旧北条家に使えた忍軍で忍術などの陰陽術で有名な忍者たちで構成された忍軍である。これに対し半蔵などの伊賀忍軍、その近くにある甲賀忍軍は一応陰陽術は学ぶが道具による潜入などに重きを置いている。北条家の滅亡に伴い風魔忍軍も滅亡したと言われている。

「そ、その、風魔の崩れって何なんでしょうか？」

算は不安になったように周囲を見渡した。

「崩れ。まあ、相場に予想がつく。忍軍が無くなって、生きるに生きていけなくなって山賊になる。定番だ。」

「そんな。山賊ですか？」

「それからこのお方を守るために俺達がいるんじゃないか。」

青海は意気揚々と信繁の後ろを付いて行った。

「ですよね。」

「まあ、私もいる。気にするな。」

そう言つと、前を歩く半蔵は吸い込まれるように一つの酒屋に入っていく。それに付き添うように三人は酒場の中に入った。

「よう、おやじ。」

「いらつしゃいませ、半蔵様。」

「こいつらも含め、一杯頼んだ。」

「は、はい。」

そう言つと店主は店の奥に小走りで向かつた。

「ここは？」

「ああ。なじみの店だ。」

「そうか。親父！酒頼んだ！あと、つまみも。」

「は、はい！」

奥の親父さんは店の奥から大声をかけた。

「また飲むのか？青海。」

「まあな。こういふところの酒は飲む為にあるんだよ。」

「お主の事だ。これだけが目的じゃあ、あるまい？」

「簡単なものだ。」

そう言つと半蔵は周囲を見渡す。そこには忍足立ちが酒盛りをしていたりして、店自身はかなりにぎわっていた。

「おい、南側どうよ」

「いやあな、近く通るとき。村の連中とかが、最近山賊見たとか言つてたんだ。それで一応近くの侍とかには言っておいたけど、しばらくはな……。」

“そうか、でも北は険しすぎて上れないからさ。俺、南行くよ。”

「……ふ。」

信繁は口の端を緩ませた。半蔵は軽く頷くと、店主のいる店の奥を見つめた。

「お待たせしました。」

奥から店主がやってくるとお盆に徳利と空の杯を持ってきていた。

「どうぞ。調子は。」

半蔵は徳利を机に置くと、杯に酒を取り分けている。

「いやあ、最近は繁盛してますよ。どうもね。南回りに山賊が出たらしく、ここから、甲州回る人が多くて、この辺、結構人通りが多

いんですよ。」

「そうか。」

「でも、山賊ってどんなやつなんだ？」

信繁は興味深そうに聞いて来る。

「いやあね。それがどうにもその話だけが無いんですよ。」

「は？」

算は間の抜けた声を上げながら、二人に酒を配っている。

「どうも、山賊に襲われたって奴がいるんですけどね。お待さんもいたんですけど、どうもその話だけが出てこない。この宿場で今、その話で持ちきりなんですよ。」

「そうか。」

半蔵は頷くと、店主が持ってきた小魚を棒に刺した物を手に取ると、口に一気に啜えた。

「ならどうする？」

「ん？」

信繁は頷くと、腰に下げた竹の水筒から水をぐつと煽った。

「北は二週間ぐらい余分にかかるが、甲州から抜ける道もある。だが、甲州にはもしかしたら、武田崩れの山賊がいる場合もある。まあ、今回は南にも山賊がいる事もあるから、どっちも変わらない。」

半蔵は酒を煽り、一堂も見る。

「武田崩れの山賊なら俺らでも顔が利くんじゃないのか？」

算が軽い調子で周りを見ながら答えた。

「いや、顔を知っていればいいが、大抵こういう崩れは武将とかではなく、戦場で逃げ出した兵士とかが多い。だから顔を知っていればかもとして襲われるだけだ。」

「そうだな。確かに甲州は行って見たいが、山賊はいやだな。」

「だな。」

青海は酒を一気に煽り、魚を握り締めるとぐいつと飲み込んだ。

「でも、お館様がいた頃はそんな事はなかったのにな。」

「そうは言っても、もう今じゃあ、昔の物語だ。悔しいけどな。」

青海はそう言つと徳利を握り、残つた酒を一気に飲み干した。

「もう、さすがに慣れたよ。」

諦めたような声で、手に持った杯を算はぐいっと煽つた。

「そうだな。」

信繁は寂しそうな顔で周囲を見渡す。

「どうする？」

「……。俺は南に行つて見たい。鎌倉とか見てみたいしな。」

半蔵の問いに信繁は大きく頷いた。

「そうですね。」

算は頷くと立ち上がる。

「じゃあ行くか、せめてもう少し進んだ宿場までは行きたいからな。」

「わかつた。」

そう言つと半蔵は立ち上がると店主にお金を渡した。そしてその

まま店を出た。

出発して4日の朝になると山道だった。この山の中腹に湖があり

その先には箱根の険しい山があつた。信繁御一行はその道を見上げると、只、淡々と上り始めた。彼らにとって山とは慣れた土地であり、歩くのに不自由はしない。

「大体どれぐらいかかるんです？山越えるのに。」

「それは、2日だ。最短で、最高条件が揃つてぎりぎりだ。」

半蔵は空を見上げるが、空はまだ寒空で、普通の人間が険しい山に入る事は無い。

「なら、三日か。まあ南岸越えたとどれくらいだ？」

信繁は周囲を見渡して聞いた。山に雪は積もつてないものの、所々に雪が固まつていた。

「3週間といったところか。まあそれでも険しさは変わらない。」

半蔵は懐から干し芋を取り出すと、口に啜えた。

「それなら、山に行くか。」

そういつ、青海はと歩くペースを上げた。

「それは真田様が決めることだ。」

「それはそうだが、やっぱり酒とかだと山より海のほうが……つまみが旨い。」

「だな。」

その言葉に全員が頷くと、四人はそういつつ歩くペースを上げた。

「で、この辺に集落とかはあるのか？」

信繁は山を見渡す。

「結構道沿いに多くあるぞ。まあこの辺はともかく中腹から先は誰もいなくなるからな。」

半蔵はまっすぐ前を見て、山を登っていた。

「そうか。やっぱり。」

「どうしてだ。」

「いや、どうも人の気配を感じる。」

その言葉に後ろの二人に緊張が走る。さすがに戦に慣れた二人のため、いきなり周囲を見渡すことは無かった。半蔵もその表情は変えることは無かった。

「もしかしたら狩人かなんかじゃないのか？」

半蔵は少しだけ声を下げて信繁に声をかけてみる。

「いや、だとしたら不自然な所が多い。こっちに動きを合わせて動く必要は無い。」

「……そうなんですか？」

筧も、二人の緊張に合わせ、じっと足元に視線に合わせ、相手に視線を合わせないようにしている。風がないのに周囲の草が揺れ始める。

「くる！」

信繁が、押し殺した声で叫んだ瞬間、坂の上の草から何か黒い何かが飛び出す瞬間、信繁は一步踏み込み、脇差を抜く。

「はあおおお！」

その黒い何か・・・いや、黒い何者かは手に持った手斧を振り下ろす。信繁はその中腹を狙い、脇差で打ち払った。その瞬間、黒い何者かは後ろに飛びのき、手斧を構えた。

「何奴！」

そういい全員が武器を構える。相手はどうも一人らしくその黒い衣装もあつて昼間の今では路上では目立っていた。体の線が細くしなやかに見えた。

「誰かはしらねえが、俺達を襲うたあ、いい度胸だ。」

そういい、青海は得物である棒を構えようと思うが、周囲を見渡してやめて、骨法の構えを取った。

「お前達！出てけ！」

そう聞こえた声は女性とも男生徒も使いない中性的な・・・子供のようがあるが、その殺気はすさまじいものだった。

「は！？ふざけるな。俺達は旅のものだ！敵意はない！」

「その成りで何を言う！」

そう言うとその黒い衣を纏った人間は声を荒げながらも冷静にこちらとの距離を取っていた。

「俺達は只、江戸に向かうだけだ。」

「知るか！」

信繁は脇差を構えると、少しずつ距離を詰めている。

「お前ら侍は！山賊とか何とか言つてまた村を襲う気だろ！」

・・・その言葉に全員が息を呑んだ。

「俺らは村を襲う気はない。解るか？」

信繁は説得しようとしていた。だがその表情はこわばっていた。

「そんなの信用できるか？」

黒装束は叫ぶ。

「どうします？真田様。」

算は信繁の脇を固めるようにじりじりとにじり寄り。しばらく考えたそぶりを、信繁がすると、何かを思いついたように目の前の人間を見つめた。

「そうだな。お前、名前をなんと云う？」

「お前なんかに教えるか！」

「じゃあ、お前。お前の集落に俺達を連れて行け！」

「そう言つと信繁は脇差を鞘に納めた。」

「・・・どうするつもりだ！」

「決まつてる。そんな馬鹿侍なんて俺達が倒してやる！」

「そう言つと、信繁は、皆の一步前に出た。」

「信用できるか！」

「・・・信用してもらつしかないな。」

「その黒装束と信繁はじつと見つめていた。」

「なんでだ。」

「何が？」

「なんで、」

「なんで・・・そんなに、いきなり要求を！」

「おまえらは、山賊に困つてる。俺たちは、まあ、仕事に困つてる。」

「いい飯の種じゃないか。」

「真田殿！」

半蔵が叱責するように声を上げる。

「侍とかはそうだ。いつも弱いやつにつけ込む。」

「・・・そう思つのは自由だが、山賊とかにやられているのはそっ

ちじゃないのか？味方が欲しいはずだろ。」

「そしてまた、しばらくの静寂が周囲を包む。」

「あんたはどつちの味方だ。」

「だれとだれだ。」

「侍と、こつちのだ。」

「さあな、どつち側につくかは、村に行つてからにしよう。」

「この言葉の後にもまた、息をのむ静寂が訪れる。」

「・・・わかつた。お前みたいな強情な奴・・・初めてだ。」

「そう言つと、目の前の黒装束は覆面をとつた。そこには流れるよ
うな黒髪、ほっそりとしたその顔は、誰がみてもはっとする美しさ

だ。その顔の所々は泥や汚れがあり、その無骨さは、周囲に伝わってきた。周囲も同じ意見らしく、全員がその顔を前にして唾を飲んだ。その姿は声と同じく男性とも女性ともとれない何か蠱惑的なところがあつた。

「俺はまだが、名乗ってなかつたな。俺は、しま。」

「真田だ。よろしくな。」

そういうと、しまは後ろを向けると、そくささと歩いていった。まいった。

「いいんですか？ついて行って。」

寛は、信繁に顔を寄せ、小声で話す。

「いいんじゃないか？あれが噂に聞く風魔かもしれん。ならば、それを見に行くのも悪くなくろう。」

「・・・江戸に着くのは遅れますぞ。」

半蔵は信繁を半眼でにらみつける。

「だとしても向こうもある程度の遅れは計算の内であるう？」

「ん・・・んう。仕方ない。まあ、村に行つて事をかたづけたら、江戸に行つてもらいますぞ。」

そういうと、半蔵は懐から干し芋を取り出すと、口でかみちぎる。

「わかりましたよ。」

そういう信繁の顔は少しにやけていた。

「ここが俺たちの村だ。」

「はあ、はあ、ちよつと待ってくれや、俺はさすがに疲れたぞ。」

「青海、情けないぞ。」

肩で息をする青海を笑顔で見つめる信繁はここまできても涼やかだつた。

「さすがに今回はかりは、はあ・・・はあ、青海に味方しますぞ。」

真田様。三刻ばかりほぼ全速力で駆けさせられて、息が切れない御仁がいましようか？」

「そう言う事言うなよ。せい。このぐらい出来ないと山暮らしはできんぞ。」

「で、村の名は？」

その流れをたたききるように涼やかな顔のしまと、半蔵は下を見下ろした。峠を二つ越え、見下ろした峡谷の谷底近くに、川に張り付くように一つの村・・・というか集落がそこにあった。

「さあ、俺は村長じゃないから、わかんね。」

「そうか。」

「というか、小さな村ですな。俺の田舎の村よりもちっさいところ、はじめてだ。」

寛は、驚いたように下を見つめた。

「馬鹿にするな。これでもみんないいやつだ。」

「というよりかは・・・本当に何回か襲撃されているようだな。」

「そうだな。」

半蔵の目線の先に目を向けた信繁はそううなずいた。そこには焼け落ちたまま放置された家が数軒あった。その近くの畑も荒らされた形跡もある。

「あれがそうだ。俺たちが山賊とか言っつて、急におそつてきて、それで、村荒らしていった奴らの跡だ。」

その言葉に全員が押し黙ってしまった。それほどまでに、焼け落ちた家の跡はむごたらしいものだった。

「これは・・・な・・・。」

半蔵は、言葉を飲んで、その焼け跡から目を背けた。

「あんな事した侍どもは信用ならねえ。ま、お前らがそうかどうかはついてからだ。この斜面降りたら・・・ま、半刻ほどかかるからその辺でキノコでも探しながら降りてきてくれ。」

そう言う、しまの下げている風呂敷には、あふれんばかりの山菜が入っていた。

「拙者はこういう事には不慣れだから、真田殿もがんばって、食べれるものを頼みますぞ。」

そう言う半蔵の着物の懐は少しふくらんでいた。

「ん？お前？集めてくれたのか？」

「ああ。これ。確かこれは食べられましたよな。」

そう言うて懐から、松茸を二つほど取り出した。

「ああ！それは！よくあつたな。それ、滅多にとれないから・・・
焼くと言いんだぞ。」

しまが目を輝かせ、松茸を見つめていた。

「まだ修行が足りませんぞ。しま殿。結構ちらほら生えてましたからね。これがまた・・・炙り、茎の吸い物あたりは絶品でしたな。結構いい酒のつまみです。」

「俺は、こういうのには慣れていないから、もう休みたいぞ。」

そう言うて青海は近くの木にもたれ掛かった。

「はっはっは、青海。おぬしが酒よりも休憩が欲しいとはな。」

「確かにそうだが、さすがにもう足腰立ちませんよ。」

青海の言葉に全員が始めるように笑った。

「麓まで来ると、本当に・・・。」

そう言うて麓の集落まで降りてきた一行はその惨状を目の当たりにした。途中で言葉を飲む筈をみて誰も反感を覚えなかった。村は、陰気に包まれ、いや、敗戦濃厚の戦場を見せられるような落ち込みようで、息さえも吐くのが躊躇われる。そんな空気だった。村自体はいくつか建物に刀傷があるが、それほど建物の造りも良く、どの建物もそれなりに立派に出来ていた。日中にもかかわらず、畑に出ている人間の数はまばらで、その顔の暗さは何ともいえない悲しさを追っていた。しまとその一行はその村を早足で駆け抜けていた。

「これはまあ・・・非道いですな。いつ、襲われました？」

半蔵は軽く合いの手を入れる。

「それは、村長に聞いてくれ。」

そう言うてしまは、何かを嫌うように早足で村のある建物に向かう。そこは村の中でもひととき大きな建物だった。

「村長！村長！」

その建物門を素通りし、演題まで行くとそこには、湯飲みで何かを飲んでいるおじいさんが一人ひなたぼっこをしていた。

「なんじゃ。うるさい！」

「ん？村長。こいつらがしつこいから、言ってくれ。何か飯の種になりそうだから、村に連れてけとかいいおつてさ。このお侍！」

「お侍さんかい。」

そう言っただけでひなたぼっこしていたおじいさんは、じつと後をついてきた信繁一行をにらみつけた。

「お主ら侍ならこの通り、報酬払うだけのモノがある村じゃない。

賊……いや、賊以下のあいつらに金目のものは全部盗られました。飯の種になりそうな事なぞ一つもありません。」

そう言う村長の目から、涙がぼろぼろ落ちた……ような気がした。

「これはいつ襲われた。」

そう聞く半蔵の目は真剣だった。

「これは……と言うかお主……いや、そんなはずはあるまい。

まあ先週の事じゃ。」

「先週か。かなり近いな。」

信繁は周りを見渡す。確かに村に男の数が少なかった。

「まあ、そうことじゃ。ここまで来ていただいたからと言って今の状態では、白湯の一杯とて出るのがはばかられます。お引き取りください。」

「そうですね、真田様。帰りましょう。」

算はそう言うのと信繁の袖を引っ張った。

「お前、こんな非道い事になった村ほつとくのかよ！」

「そんな事言いますが、この現状、どうしようもありませんまい。」

信繁の後ろで、青海と算が言い争っていた。

「……襲われたのは、本当一回だけかここ？」

信繁の質問に村長としまの顔色が変わった。

「どうも、その柱の刀傷、先週のだとは思えないんだよな。もつと新しいのもあるんじゃないか？」

「良く気が付かれましたな。そこのお侍さん。確かに、三日ほど前も来て、男どもがかっさらわれていきました。」

「なぜ隠した？」

「・・・ここには本当に飯の種になりそうなものはもうありません。食べ物も奪われ、年頃の娘はすべて連れて行かれ、男さえも先日持つて行かれました。もううんざりなのです。先日ので無からからなけなしの金を渡し、侍を雇いましたが、賊が来れば山中に逃げ出しました。もう誰も信用できません。もう雇うほどのお金も、物も作物もありません。」

その村長の言葉に全員が押し黙ってしまった。しまはその隣で悔しそうに下をおつむいていた。

「そいつらはなんて名乗っていた？」

半蔵は顔を・・・普段感じられる余裕さなぞ微塵も見せない怒りの形相を押し殺した・・・様に信繁には見えた表情で聞いてきた。表面上は・・・細かいところをのぞいてはいつもと変わらない半蔵の顔だった。

「確か、半田山なんとか次郎とか名乗っていましたな。そんな賊の事なぞ、早くも忘れたい物です。」

その瞬間、半蔵はきびすを返した。その方を信繁は力一杯つかんだ。その顔は口元は笑っていたが、瞳の奥は怒りで煮えたぎっていた。

「どこに行くんだ？」

「ん・・・そ・・・そうですね。少々用でも足しに・・・。」

半蔵の顔はすこしこわばっていた。いや、こわばっていたのか怒りで肩が震えていたのか、区別するのが難しかった。信繁自身そうだったため、彼のやろうとする事が一目でわかった。

「じゃあ、俺もその用とやらを足しに行こうか。」

信繁はそう言うと、肩を引き寄せ半蔵と、門の外に出てい行って

しまった。それをみた青海たちはあわてて後に付いていった。

「おい待てよ。用って川はそっちじゃないぜ。」

しまはそう言つと声をかけるが、皆声が聞こえたそぶりもなかった。

「・・・もし、まあそんな人がここに顔を出すとは思えないが、思つた通りなら・・・。しま！」

「はい！」

村長の声につい背筋を伸ばしてしまう。

「あの旅人たちについて行きなさい。」

「はい？」

「そして、用が足し終わったのを見届けたら、もう一回家に来るよ
うに伝えてくれないか。」

「はいい？」

しまはつい抜けたような声を出してしまった。

「わかりましたよ。頭領・・・いや、村長。行ってきます。」

そう言つと、しまは走って信繁たちを追いかけた。

「用って・・・ここまで来る？」

全員は村を一直線に出て、今まで来た道を引き返していた。あつ
という間というか、すぐに村の入口を超えていた。

「半蔵殿。どうするつもりか。」

今までの冷静さが嘘のような、怒りで満ちた早足で坂をあがつて
いく半蔵を信繁は肩をつかんで押し止める。

「すまない。二、三日この村にとどまって、村の者を守ってもらえ
ないか？」

半蔵は今にも駆けて戻ろうとしていたが、その様子を青海達は呆
れていた。

「どうしてだ。」

「私は・・・。」

「戦場の習いだとはいえ、ここまで怒る必要は・・・。」

青海の一言に、半蔵はさらに声を張り上げた。

「戦場！ここが！？ふざけるな！ここが、平定されて26年は経つ。そんな平和な・・・そんな村が、襲われて！何も感じないのか？お前らは！」

半蔵の怒りで、全員が押し黙ってしまった。

「すまなかった。そう言う意味じゃない。」

青海が申し訳なさそうに顔をうつむかせた。戦国時代になって以降、各地で領主や山賊による略奪は横行していた。また、兵士として、領主に若い男を取られていくので、食べ物は何れず、それが飢餓を生み、山賊が発生するという堂々巡りの世の中で、このような襲われる村というのは彼ら戦場に生きるものにとっては、いつでも聞く話でもあった。

「俺たちの戦いが！俺たちが戦ってきた意味が！こんな、村をこんな奴に襲わせるためにやる事じゃない！俺たちは・・・。」

そう言うのと、立て膝を付き半蔵は顔を伏せた。

「俺が聞いたのはそっちじゃない。」

信繁は半蔵の顔をまっすぐ見つめていた。

「俺が聞いたのはなぜ俺たちを置いていく！？」

「これはほぼ”私闘”になる。罪をかぶる音は拙者で十分だ。」

半蔵はそう言うのと、きびすを返した。その肩をひつつかんで信繁は無理矢理正面を向かせる。

「本来俺たちはここにいないはずの人間だ。誰が死闘しようとする浪人が暴れたただけだ。それに・・・。」

「それに？」

「俺も、こんな事を許せるほど心が広い人間じゃない。だから。俺も行く。お主が止めても一人でも行く。」

信繁は、申し訳なさそうにつげる。

「ですな。このような働き場みすみす見逃すのはもったいない。体がなまったところでですぞ。」

算は肩にかけた槍の笠を抜くと槍を構えて見せた。

「だな。このままでは半蔵殿にただの酒飲みに見られる。それに、このような見所が何もない村にいたら、暇で死んでしまいそうじゃ。お主はワシに死ねと。」

青海はそう言うのとにやつと笑ってみせた。

「いや、青海には留守番を頼もうと……。」

青海の方を向くと意外そうな顔で信繁は青海の肩をたたいた。

「え……。」

「誰かいないと、報復とかで来そうで怖いんだ。だからさ。」

「だからなんでわしなんじゃー！ー！」

その声に全員が笑ってしまった。

「……すまない。……取り乱してしまった。ただ、これが本当か、または誰かの陰謀か確認する必要がある。そこでだ。山の根元の三島宿までもどつて、それから、半田山とか言う輩のところに行つて、せめて、村の連中を助けてやりたい。それには……。」

その言葉に全員が顔を寄せていた。その様子にしまは、物陰に隠れていたが何か聞き取れないので、少しずつ気配を消しながら近づいた瞬間、全員がしまの方を向いた。

「うっひひい！」

しまは、声にもならない声を上げた。

「しま殿、あなたも男の用足しに付いてくるほど暇ですか？」

半蔵は引きつった顔でしまを見つめていた。

「いやあな。ほら、いきなり出て行くもんで、つい……ね。」

「半蔵どの、少しはこいつも戦力になるし、それに目標の顔もわかる。……。」

「その童、一緒に付いてこい。」

そう言う半蔵の声にしまは立ち上がった。

「どこに行く気なんだよ。」

「ついてこればわかる！」

半蔵の自信満々の声が響いた。そして……。

「で、ここまできちやっただ。」

しまは目の前の大きな館を前に呆れていた。この領主の屋敷は、地方で統治を任されている代官”半田山義男”がいる駐在所だった。当時は下っ端からたたき上げの現場主義として、治安に大きな手柄を立て、急激な出世をしていた最近の稼ぎ頭の筆頭だった。だがその急激な出世に多くの物がやつかんでもいた。それまでいくつもの不穏な噂が出てはいたが、半蔵は流石に先ほどの村の現状を聞くまでは、取るに足らない物だと思っていた。だが、実際はその出世の手法はあまりにも悲惨だった。

「人を使って調査したところ、かなり悪質な山賊・・・山賊にかこつけた人狩りを行っていた事が発覚した。」

半蔵はじつと向こうの建物を睨みつけていた。

「たとえば？」

信繁は町中で買った槍を肩にかけ、じつと館の正門を見つめていた。

「あの村だけかと思ったら、周囲の村々すべてを山賊狩りと称して襲っていた。さらにそこから村にいた女を片っ端から女をどこかに売りつけたり、男を捕らえて盗賊として処罰する事によって出世の糧としていた。」

「じゃあ、俺の父ちゃんとかは？」

「村の男どもは、まだ処刑されていないはずだ。どうも盗賊として江戸に持っていて見せしめをかける気らしい。」

「そんな・・・父ちゃん!!」

しまは目の前の館を見つめる。今まではふつつの館に見えたのがいつの間にか悪の巢窟に見えてきた。

「それで得た金を使って賄賂を上に通ったり、周辺の下っ端を使って商人に税とか甲斐って金をむしり取っている。」

「そこまで悪党だと、むしろ清々しいな。で、半蔵やれるか？」

「やれる、やれないじゃないぞ。やる!」

半蔵はタスキをきつく締め、裾をまくり上げる。

「しまは山奥で、待ってもいいんだぞ。」

「嫌だ。父は・・・村のみんなは、俺が助ける。」
しまは手に持った木の棒を青眼に構えた。

「・・・こいつを使え。少しは役に立つ。」
そう言うつと脇に刺していた脇差しを鞘ごとに引き抜くと、しまに投げつけた。

「これは・・・いいのか？」

そう言うつて、しまは鞘から脇差しを引き抜く。その刃は通常の脇差しよりも一回りは太く、鉦と勘違いされそうな太さだった。その刃からは様々な、複雑な臭いにおいがした。だがどう見ても外見の無骨な鞘とは違うその刃物は、業物のおいさえした。

「無事に帰れたら返せよ。そいつは貴重だからな。」

「わ、わかった。」

その刃物のおいに少しこわばって、しまはコクコクとうなずいた。

「行くぞ！」

半蔵はそう言うつと手に持った黒い玉に付いた縄に火をつけ、正門に向かって投げつける。

「ん？」

正門の門番がじつとその球体を見つめっていると、急に爆発した。

『お前ら！悪徳代官はおれがゆるさねえ！成敗してやるから表えでるや！』

信繁が大声を上げた。その声に反応して館から侍たちがワラワラと出てきた。

「お前ら。何者だ。」

先頭に出てきた太った男が大声を上げる。この男一人だけ服が上質な物らしく代官みたく見える。

「お前らみたいな下郎に、答える名前なぞはない！」

「何だと、皆の物！こんな奴討ち取ってしまえ！」

そう言うと周りの侍達が信繁達の周りを囲む。

「・・・大丈夫なのかよ。」

しまは、隣に構える半蔵に声をかける。

「目の前に集中しろ。」

そう言いながらも侍達は徐々に間合いを詰めていく。

「殺すなよ。」

信繁は緊張した声で、後ろに声をかける。しまがうなずくと、その次の瞬間、信繁が槍を素早く突いた。突きのために踏み込んだ足がその勢いで砂塵を立ち上らせ、その槍は轟音を立てて、目の前の兵士の肩に吸い込まれるように刺さった。その勢いで兵士が吹き飛ばす。

その次の瞬間には槍を手元に引き戻していた。その様子にさすがに侍達はざわつき始めた。

「来いよ。腑抜けども。」

信繁がさらに挑発するが、その一突きに徐々に後ずさを始めた。「お前ら、一気に囲んでしまえ！こんな奴一人苦戦するなら給金やらんぞ！」

太った男は集団の後ろの方から大声を上げた。

「半田山様・・・。」

部下達の気弱な声が響き渡る。

「ええい。かかれ！かかれ！」

それにハツパをかけた次の瞬間。半田山の横まで一人衛兵が吹き飛ばされていた。また肩を打ち抜かれ肩から血を出していた。

「腑抜けどもが！弱い奴しかやれないのか。」

その瞬間をねらって、脇にいた兵士がしまに手に持った熊手を振り下ろす。しまはそれを見極めると、一步踏み込み相手の獲物を撃ち払った。その一撃に無音に近い音で武器が吹き飛ばされ、熊手は遠くに飛んでいってしまった。熊手の柄の太さは刀の攻撃に備え、木は太めだったがそれをあっさり切り裂いてしまう。

「す、すげえ。」

「しま殿。いくさ中ですぞ。」

しまはその獲物の切れ味に呆然としてしまつが、半蔵は目の前の兵士をじつとにらみつけて、相手の行動を押さえ込んでいた。

「お前ら、それでも侍かよ！」

さらに信繁が掛け声をあげるが、包囲が狭まる事はなかった。さすがに戦場経験が多い者が多く、その強さにその一步が踏み出せずにいた。

「・・・あれ。」

半蔵が顔をあげると、建物の方から白い煙が上がるのが見える。

「わかった。」

そう言つと、信繁は槍を低く、威嚇するような構えに変えた。次の瞬間には槍は目の前の衛兵の肩に突き刺さり、次々に吹き飛んでいった。それにあわせ、半蔵も兵士の根本に潜り込むと次々と素手で吹き飛ばしていった。その行動の早さにただただ驚くばかりだった。

「は・・・はは・・・は・・・。」

しまの乾いた笑いが終わる事には取り囲んでいたはずの兵士達は全員が地に伏していた。

「さすが、半蔵殿。流石の手際。」

そうにやりとする間に半蔵は、つかつかと、半田山らしき太った男の目の前にたつと手に持った刀を半田山の鼻先に突きつけた。

「半田山殿、近隣の村々の方々から聞きましたぞ。まさか、罪人でつち上げるとは思いませんでしたぞ。」

「お主。何者だ。」

「・・・まあ、そうでしょうな。ただ、この惨状をどう説明しましょうかね。上に。」

そう言つて、周りを見渡すと肩とかをやらね、うずくまっている兵士達がいた。

「この無礼者が！この代官である半田山に逆らつと・・・。」
その瞬間、鼻先にあった刀の切っ先が首元に移る。

「それは、本当にですか？」

半蔵の声は冷静そのものだが、その行動は何か怒りに満ちていた。「ふん。もし、今度罪人をでっち上げれば今度、こうなるのはあなたの番でしょう。」

そう言った瞬間、刀を振り上げ、横になぎ払うと、ちょんまげが断ち切られボトツと落ちた。その瞬間、半田山は口から泡を吹いて、気絶してしまう。

「これで、追っ手しばらく来そうにないですな。」

そう言い、館の方をみると、脇道からぞろぞろとぼろぼろの服を着た集団がやってくる。その集団の先頭には青海が先頭を、寛が後ろに付いていた。

「真田様。どうにか見つけましたぞ。」

「よし、青海！行くぞ！」

「お、お父ちゃん。」

「しま！」

そう言って、集団から一人の男がしまを見つけると、ふらふらになりながらも駆け寄ってきた。しまも、涙を流して男に向かって駆け寄り、そして力一杯抱きついた。

「お主達！帰り方はわかるな。」

「は、はい！」

男達がうなずくと全員が周りを見渡した。

「追っ手が来るかもしれん。早く村に戻るんだ。私たちもすぐに逃げろ。」

「でも・・・いいんでしょうか。もう一回村に代官が来るかもしれません。」

「お主達は悪い事をしていないんだろうが！まず村にいったって、お母に会ってこい！」

「お、おれは？」

「お前も、お父と家に帰れ！」

「おう！」

その言葉にはじかれたようにコクコクうなずくとそのまま、ぼろを着た集団としまはそのまま走って行ってしまった。

「我々もいきますかな。かなりの寄り道でしたからな。」

「ああ。」

そう言うつと信繁達は彼らとは違う山中に走り去っていった。

「と言うわけで、罪人どもに逃げられまして。出来れば榊原殿に兵を出していただき、山狩りを願いたい。」

半田山は、そう言うつと代官屋敷に来た追撃部隊を率いる武將の榊原に頭を下げていた。その行為自身を榊原は苦虫とすりつぶしたような嫌な顔をしてみている。

「お主、近隣の村々を盗賊さながらに襲い、罪人と言っては村の若い者をしょつ引いて、女をさらっては、女郎屋に売りつける。これが、代官のする事か！」

榊原は怒鳴り声を上げて目の前の男を睨みつけた。

「な、何をおっしゃるのでしょうか……。」

半田山の顔から汗が滝のようにあふれるが、その顔を決して上げようとしなかった。

「私も馬鹿ではない。顔を上げよ！」

榊原は怒鳴り声を上げる。その声にそろそろと顔を上げると、半田山はその顔に恐怖で顔が引きつっていた。榊原の声が怒りに震えた声が象徴するように鬼のような形相で榊原ははいつくばる半田山を睨みつける。

「流石にこの報告が信じられなくてな。ここに来る途中の村でな。どうされたと思う。」

「さあ……。」

「まさかな。全員が建物に逃げ出して、竹槍構えて出迎えたよ。どうしたかと聞いてみたら、村に兵士が来ると村が焼き討ちにあつとか言われたぞ。」

「それは……私より前の……。」

そう言い訳しようとした瞬間上げていた頭の上に足を叩き下ろし、力一杯踏みしめた。

「確か、私が前にこのあたりを治めていたんだよ！。私はあれを見た瞬間、その場で腹をかつ捌きたくなつたわ！」

「え……あ……は……。」

「盗賊討伐に來た甲斐があつたわ。ひつたてい！」

そう言つと、脇にいた侍は半田山を引きずつていった。

「半蔵殿……。すまない。」

誰もいなくなつた部屋で神原は一人ぽつりとつぶやいていた。

「結局報酬もなく、むだ働きでしたな。」

そう言つ算は、手に持つた枝を火にくべていた。周囲は暗く、夜も更けた森はもう静かであった。しま達に追いつこうとも考えたが、追つ手が来るかもしれない事も考え、わざと別路で、予定通りの江戸に向かう事にした一行だった。

「これ……。うまいぞ。食うか。」

そう言つと、半蔵は串に刺して炙っていた松茸を算に差し出した。それを素直に受け取ると一気に頬張つた。

「確かに旨いですが……。やっぱり、白い飯が食いたいですぞ。」

「いいんじゃないか。こういうキノコでも酒が進む。」

そう言つと青海は手に持つたひょうたんの酒を煽つた。

「半蔵殿。どうしてあそこまでの態度を。お主ほどの男が珍しい。」

「そうだな。ここまで來たら少し、寝るまでの間の酒のつまみだ。聞いて欲しい。」

半蔵は、近くの木により掛かると、思い出したように上を見上げた。

私の故郷は、山の奥でな。昔から食べ物も少なくとも幸せな村だった。だがな、当時の領主は村を弾圧する事しか知らず、よく村が襲撃されては村が総出になつて建物を修復していたのだ。だがそん

な日々が嫌だった。だから先代の村長はいろんな書物を研究してや
つと、そう言う奴らを追っ払った。でも、ずっとなんか事がある事
に襲撃され続けた。俺も一度、村が襲われ、友達が目の前で殺され
たものだ。だがな、それが今の時代、戦国の日常茶飯事みたいな物
だ。だがな、そんな私でも・・・だからこそ・・・こんな事が日常
茶飯事になんかなつちやいけないんだ。そう言って私は村を出たん
ですよ。まあ、いろんな事があつたんですけど・・・その中でも、
誰が相手だろうとそう言う弱い奴をいじめるようなやつは今でも許
せない。

「・・・まあそう言う事だ。俺はそれ以来、そう言う何かにかこつ
けて村を襲撃するような奴らが許せない。まあそう言うわけだ。」

そう言うて下を見ると、青海達は・・・もう眠っていた。

「そうだな。だから徳川に仕えるのか？」

と思つたが、信繁一人は起きていた。

「まだ寝ないのか？」

「まあな。」

うなづく信繁は少し眠そうにも見えた。

「ま、そうだな。何回か撃退した頃になると、村を盗賊の巢かとい
つて軍を何回も差し向けられた。そのときに村を救つてくださった
り、食料を送つてくださったのは徳川様ただ一人だった。俺自身命
を救われもした。だから俺はあのお方しか、この戦国を平定できる
人はいないと、今でも思っている。」

そう言う半蔵の目は、どこか遠くを見つめている目だった。

「・・・俺か。すこしは素直になったようだな。」

「ふふつ。そうか。あっはっはっははははははは。」

「ふっはっはっはははははは。」

少し乾いた・・・どこかヤケになつたような半蔵と、それにつら
れた信繁の笑い声が夜の森に響いていた。

「後は、ここを下れば！相模の海ですよ！」

半蔵の少しはれた声が聞こえる。

「はあ・・・はあ・・・。」

算は肩で息をしながら、最後の気力を振り絞って算用への一步を踏みしめた。その眼下に広がるのは、広大な海とそこを行き交う船達。そしてきれいな砂浜であった。

「おおー！これが、相模の海！」

「流石にここは絶景だつて。真田様、ここで一つ腰を下ろして、休憩しますか。」

「だな。」

そう言つと信繁は近くの岩に腰を下ろし懐から水筒と饅頭を取り出した。

「でもまあ、予定よりは一週間は遅れています・・・流石にまあ、怒られそうですな。」

半蔵は、呆れながらも地面に腰をおろした。

「でもここは少し道よりはずれてはおらぬか？」

信繁はそう言つて海を見つめていた。小唄貝山から見える海は青く、美しいものだった。

「ここは拙者のお気に入りの場所。この道を通るときにはここによつて。海を見つめ、その広さに感動していたものだ。」

その景色はちょうど、砂浜の地平線と海と陸との境界線そして水平線の先の彼方まで 津づく海をみられる場所だ。

「でもまあ、この先の海に・・・いや、あのバテレン達が言うには、彼らはこの海を越えてやつてきた。」

「そうなのか？」

青海が海を見つめていた。その海の先には何も・・・島らしいものはない。

「彼らの意見が正しければ、この日本は小さな島であり、朝鮮のあるところは、これの数十倍も数百倍も大きな陸なんだという。俺はそれが未だに信じられない。こんな広い国なのに、それより一

信繁は下を見つめるとかろうじて、近くの木の下に激突した二人の影を見る事が出来た。「大丈夫かー！」

「ま・・・まあ。」

半蔵の弱々しい声が聞こえてきた。

「おいつつつ・・・。だいじょうぶ・・・か・・・。」

覆い被さった男にしては細い・・・が上半身を起こす。

「お主は・・・。」

「おお。こいつは・・・と言う事は。」

そう言っつて振り返ったのはしまだった。

「あ・・・しま殿じゃないか。どうした？」

信繁の何ともいえないふつうの音が聞こえる。

「ああ。真田殿。やっと会えた。」

しまは立ち上がると、軽々と坂を上ってくる。

「探したぞ。」

「どうした？」

しまは、信繁の目の前に立つと懐から小刀を一本取り出す。そこには真田の家紋が刻まれていた。

「まず、これを返しに来た。」

「ああ。」

そう言っつとしまは刀を突き出し、真田はそれを素直に受け取る。

確かに前に渡したあの脇差だ。

「あと・・・これ。」

そう言っつとしまは懐から手紙を取り出した。そこには感謝状と書かれていた。

「これは？」

「村長様からだ。」

信繁は包みを取り出し、手紙を広げると、その紙一杯に字が書かれていた。

” 拜啓、真田様。村の者を助け出してくださるありがとうございます。村に謝りに来ます。あれから、なぜか、榊原という方が参って、村に謝りに来まし

た。それが真田様のお陰と思い、いても立つてもたまらず、一筆したためました。”

「あ、そうだ。これ、怒って出て行ったお主にとって、村長からなんかこれが。」

”真田様が、助けてくれたから村で歓迎の準備をして待つておりましたが、なかなか来てくれないので、しまを向かわせました。今村で出せる金目のものはありませんが、せめて感謝の気持ちだけでもと思っております。”

「委細承知と言いたいですが……。なあ……。」

”そこでここでさらにご迷惑をかける内容で悪いのですが、しまをどうかあなた方のお供として連れて行っていただけないでしょうか。しまはめざとく、身軽なのであなた様のお役にきつと立てると思います。よろしく願います。敬具。村長、吉田庄右衛門より。”

……。信繁は、手紙を読み終わつた後、じつとしまを見つめていた。同じようにしまから何かを受け取つた半蔵もまたじつと、しまを見つめていた。

「「こいつを連れてく……。ねえ……。」」

そう言う二人の声は重なつていた。

「お主、この手紙の内容はわかっているのか？」

半蔵は半信半疑という顔で、じつとしまを見つめた。

「え……。村長が言うには、そのまま真田様について行けばいいんだろ。よろしく。」

そう言うつと、大きく、真田達に振りかぶるような大きなお辞儀をした。

「せっかく村を救ってくれたんだ。これぐらいしてもバチは当たらないよ。」

「やっぱり……。お主一言も聞かされていなかったんだな。」

半蔵は呆れて手に持っていた手紙をしまの方に見せつける。

「だって俺、字、読めんもん。まあ、書けませんが。」

「どれどれ。」

算が興味深げにその手紙を見つめる。

”この子には、一通りの基礎技術は身につけてはありますが、まだ粗相者で、世の中の事を知りませぬ。この子は女故、女の作法も山中ではなかなか身に付きませぬ。出来ればあなた様には、この子に見事な草としての修行をどうかつけてやってください。もしあなた方がお気に入りなら、しまはそちらでお召し抱えください。”

「女の作法って・・・こいつ・・・女か？」

そう言っ二人はしまを見つめる。確かにきれいな黒髪でほっそりとはしているが服装はまたぎ達が着るような山の服装であり、女らしい格好はしていなかった。また村に行ったときのおばあさん達は確かに・・・ふつうに女性の格好をしていた。しまはその言葉を聞くと、顔を背ける。

「確かに村長は女らしくとは言っただけど、それとこれとは違っ！ほんとに読めんけどそう書いてあったの？」

しまは目を丸くして、手紙を見つめるが、よく分からさそうな顔をしていた。

「まあな。あとは・・・まあ・・・な。」

信繁は、呆れた顔して見つめていた。元々真田領に隣接するところには武田忍軍の総本山があり、諜報活動を行っていた。そのため、草という隠語の言葉の意味は知っていた。ここで言う草とは諜報活動の中でも現地潜入し、地元民に慣れたり、色仕掛けをしたりして情報を投手に伝える役目を持つ一番下っ端の忍者の事である。潜入を行うときの補助をする下忍、その指揮を行う中忍。そして情報を元に作戦を立案する上忍。と言う組織で成り立っている。だから、この立派な草というのは情報をかき集めるためのいわば一番の下っ端の事を言った。それを知っていた信繁は・・・何ともいえない表情になった。

「でも・・・草とかという言う事は・・・あそこは・・・。」

信繁は思い返すように村の様子を思い浮かべようとしていた。

「何だ。知らずに恩を売っておったのか？」

半蔵は肩をすくめると、手紙を懐に入れた。

「え……あ……あの村はどこにでもある……」

「風魔の里だ。」

しまの言葉を遮るように半蔵は言い切った。

「へ？あれが……。あの村が風魔の里？」

「昔行つた事があつてな。懐かしくてつい。普通の村ならいざ知らず、見知つた者がいる里だととても許せなくてな。」

半蔵は遠い目をしていたのを見て、しまは慌てて半蔵の方を見ていた。

「え……あんた村長にあつた事があつたの？」

「ま、あのときはお館様の影で付いてきただけだが、それ以来の仲でな。顔は見せた事はないが、良く手紙はやりとりしておるぞ。」

その言葉に全員が啞然としていた。

「でも普通の村と変わらぬではないか。」

寛があわてて村のあつた方を見つめるがそこはもう森だけだった。「元々忍というのは、山の民出身が多い。だから、練習場とかなくても外がそのまま訓練場と言う事が多いから、たいした施設もない。だから普通の村らしく見えるのだよ。ま、あの辺一帯の村すべてがそうだがな。」

「でも、お前が村長と知り合いとはしらんかったぞ。」

しまが感心したようにまたがって半蔵の方を見つめる。

「その首領の書に書かれているなら、仕方ないから、拙者が責任を取るが……。」

半蔵は呆れた顔をして顔を背けているしまを見ていた。

「だからなに？」

「お父や、お母はいいといったのか？」

「村長から言われた日にとつちやのところについてきただ。そしてら”この村にいても立身出世は出来はしない。だったら、あのお方達について行けば最低でも飯は食える。行ってこい！”だと。だから後悔はしてない。さてどこに行くか知らないが。一緒に行こうぜ。」

「
そう言つしまの顔は晴れ晴れとしていた。

「なら行こうか。せっかくの休憩で友が一人増えるのはおもしろい
事だ。」

そう言つと腰を上げ、信繁は坂を下つていった。眼下に広がる海
岸の先には江戸の町が広がっていた。

第三節 1614年3月下旬 真田信繁と江戸の町（前書き）

ついに江戸に着いた真田信繁御一行は江戸の街にとどまるため、半蔵にある寺の宿坊を紹介される。そこには……。

第三節 1614年3月下旬 真田信繁と江戸の町

第三節 1614年3月下旬 真田信繁 江戸観光を楽しむ

江戸。この当時の江戸は、新規開発中ではある者の、大きさは京都に匹敵するほどの大きな都市であると同時に水運が発達しており、通路には船が多く行き来していた大水運都市であった。ただ、このときはまだ幕府を開いて間もないため、まだ市民が集まるには少し時間がかかり、まだ世界一の都市としての片鱗を見せていなかった。

「だがまあ、京も大坂も見たが、ここは大きい。そして何より新しい！」

信繁は市内に入った一言目がそれであった。

「真田様。これではお上りさんみたいな者。恥ずかしいですぞ。」

と言うかけいもまた、首が落ち着く事なく左右に振れていた。

「ここが、徳川の拠点か。」

そう息巻く青海も落ち着きがない様子ではある。

「それは流石に違う。」

半蔵は、呆れたように町をあるでいた。

「でも……まあ……三島よりでっかいところを見たの初めてだぞ。」

しまは目を輝かせてあらゆるところを見渡していた。

「今、豊臣方が何かしないように半分以上の部隊を駿府の内府（徳川家康の居城、駿河城）に集めてある。だから、あんな半田山みたいな輩が出てくるのだ。だからここは秀忠様の居城というほうが今は正しいのだろうな。」

そう言いながら先頭を歩いていた。

「でもまあ、元は沼地とか聞いていたが、ここまでなるものか？」

「それはまあ、土地の改良に年月をかけてきたからな。」

「で、どこに行こうというのだ。」

信繁は周りを見渡していたがそれ相応に建物が大きいため、なかなか周囲が見渡せない。「まずは宿というわけでもないが、あるお寺で休息してもらおう。我々の手助けをしているあるお方の寺だ。」

当時のお寺はいくつもの役割がある事が多く、一つは拠点。一つは情報収集などがある。基本的にどんな乱暴者がいてもそう簡単にお寺は襲われない上、大名などが入っても怪しまれないため、密会をする場所としても存在している。しばらく歩くとそこには立派なお寺があつた。当時の寺は大きいところなら宿坊を備えている事が多く、泊まる事が可能であつた。

「結構おおきな寺だな。」

「お主らを普通の宿に泊まらせる事はできないからな。ま、しばらくはここが拠点となる。湯船もあるし、疲れを取るには十分だろう。」

「おおー。湯まであるとは、流石、徳川。」

青海が驚いたような顔をしている。

「第一、湯ってなんだ。」

「知らないのか？お主は……。まあ、そうだろうな。普通のことではまず目にかかる事はないからな。」

算は普通の顔で言っているが、にやけが止まらない。当時湯船は大名だけが入れる贅沢の一つでもある。

「そうなのか。お湯って飲むもんだとばかりおもってた。」

「だろうな。」

「どうかなさいましたかな？」

建物の門の奥から優しい老人の声が聞こえてくる。

”天海大僧正様！”

声の方を見ると、赤い衣をまとった老人が、こちらに歩いてくる。

「天海殿。こちらにおいででしたか。」

半蔵は、一歩前に出るとじっと目の前の男を見据える。その顔はなぜか緊張に包まれていた。

「碎軍の半蔵殿。お久しぶりですな。任務の帰り・・・そちらの方は？」

「あ・・・天海殿。その呼び名はこそばゆい。言ってくれるなと言ったはずですよ・・・しばらくしてから引き合わせる予定でしたが、こつも予定外だと困るものです。」

「・・・そうでしたか。では、明日の予定というのは・・・。」
談笑している様をしまが、口を開けて見つめていた。

「何だ。あの人・・・すっごい偉そうだな。」
「だな。すんごいな。」

「偉そうと言うより・・・偉いんだと思うが。」

三人が唾然として・・・と言うか別次元の人間を見ているように目の前の半蔵を見ていた。

「気がついてなかったのか？」

「はい？」

信繁の声に筧が振り向いた。

「あいつ、おおかたここの忍軍の頭領だと思うが。」

「へ？」

「だから、破鳥半蔵だよ破鳥。昔聞いた事があるって言っただろ、あの飛ぶ鳥落とすとか言う男。あいつだよ。」

「「「えーーーーー！」」」

「あの？伊賀の？」

「俺、腕が8本あって、口から唐辛子吐くとか聞いた事あるぜ。」

「伝説の忍者だー！」

三人の大声が重なる。その声に老人がこちらの方を向く。

「ほっほっほ。流石に客人を放置しすぎましたかな。私、仏門で、精進させてもらっている天海と申す。」

「時々城内に来ていただいて、都市計画とかの指南をしていただいているお方だ。」

その半蔵の言葉に信繁は大きく天海に頭を下げた。その姿に筧と青海はあわてて頭を下げる。

「お初にお目にかかる。拙者、真田信繁と申す。以後、お見知りおきを。」

「礼儀正しいお方だ。流石、真田昌幸殿の次男殿。良く相談に来るお方からその武勇聞き及んでござる。」

「それは……。お褒めいただきありがとうございます。」

「そんな謙遜なさらなくてもよい。今日はこちらに？」

「はい。その予定です。」

「それなら、今夜は一献どうぞですか。」

「天海殿。長旅でお疲れのお方を立たせたままでどうします？」

天海は微笑みながら袖口から手ぬぐいを取り出すと額をぬぐった。

「そうでしたな。私も客人の身ながらここには慣れてございます。」

「こちらへどうぞ。」

そう言つと天海は、奥に歩いていった。その声に全員が後をついて行った。そのとき袖口を見た信繁の目の鋭さを天海は見逃さなかった。

「ここは、すごいですな。」

算が歩いて宿坊に向かう途中の部屋で、しゃべり声が響く。

「そうですね。ここは子供らを預かっていまして。ただ預かるでは芸がないので、学びなどをさせております。」

「そうですね。」

この頃の寺の多くでは、孤児を預かったり貴族の三男等を預かりしている。その中でも規模が大きいところでは、学堂（勉強などをする専用の部屋）に多くの子供と一緒に仏門に入門した大人達と一緒に学んでいた。真田信繁もまた、人質だった頃に数多くの寺を回り、学問に励んだあのころの思い出がよぎった。

「まあ俺みたいな落ちこぼれもいるから。学びがそのまま生きるとは限らないものさ。」

青海の軽い声が聞こえてくる。

「ですが、これからは平和な時代がきつと来るはずですよ。そのとき

までにこの子達には読み書きぐらいは出来ない。」

「ですな……。おや」

天海は微笑みながら頷いて……。何かに気が付いたように後ろを振り返ると信繁が、柱に寄りかかり学問の様子を見つめていた。

「信繁殿。どうかなさいましたかな。」

「あ……。天海様。」

子供の一人が声に振り返ると全員が振り返り、天海の元にやってきた。

「てんかい様ー。久しぶりです。」

子供達が周りを囲むと、天海はその子達をなでる。

「みんな。いい子にしていた……。ほら、先生が見ている。戻りなさい。」

「はい。」

天海の声に全員が、学堂に戻っていく。

「信繁殿。子供の学問の邪魔になります。ささ、行きましょう。」

「ああ。」

その声に促されて、何か考えながら信繁はその場を去った。そのとき気になっていたのは学堂のなかで子供が一人だけ、天海の元に来なかった事だ。それは先ほど見た学堂にいた女の子だった。

「うーむ。色々考えさせられる。」

部屋に身内だけになった信繁の第一声がこれだった。しまは不思議そうに信繁の顔を見つめた。その顔は何か思い詰めていたような顔だった。

「いやあな。さつき学堂を見ただろ。」

信繁は周囲を見渡す。そこには青海、算、しまの三人がいた。半蔵は江戸城へ報告に向かっていた。

「はい。」

「そこに女の子がいた。」

「そう言えば……。そうだな。確かにいた。それがどうしたのだ。」

「 青海は何ら不思議でもなさそうに答える。」

「俺が子供の時とかつて言うのは、女は家の事ばかりさせられていたから、学問は男の物だと思っていた。だがここでは女も等しく学んでいる。それは・・・なんていうか・・・。」

「確かに。信濃ではとんと見ないですな。」

「 算は腰を下ろすとぐいっと腰に付けていた水筒の水を飲み干す。」

「確かに平和になれば、と言うか太閤の世でもそろばんは必須ともいえた。だから教わるのは当たり前だろう。」

「 青海も算に習い水筒のふたを開けるが、水の一滴も流れてくる事はなかった。」

「そう言えば俺は今まで世の中が平和になった後の事なんて考えた事はなかった。確かにここには”平和”がある。」

「 ふすまを開け、外を見ると、日差しはほのかに暖かく、花の芽吹きさえ感じた。」

「確かに、京都みたいなどこともいえない剣呑さも、大阪みたいな騒がしさもありませんが、何というかここには独特の落ち着きがありますな。」

「 算は、畳に座り外を見つめる。そこにはまるで平和な光景があった。」

「まるでここには今年の戦なんて、なかったようにさえ見える。ま・
・ 大坂と江戸で争ってるだけだ。ほかの地域なんて関係ないから、こんな感じで平和だとは思うがな。」

「 信繁は空を見上げると、小鳥が飛んでいる・・・そんな平和な午後だった。」

「俺にとつては、戦がなくなれば浪人どもが食いつばぐれるだけだから、豊臣方に付いたようなものだ。」

「 そうなのか？ 豊臣ってそんなお金くれるの？ 」

「 しまは興味深そうに聞いてくる。青海は面倒くさそうにしまの顔をにらむ。」

「そうじゃなくても、主を持たぬ侍にとっては戦は、生きていくために必要な収入源だ。そして出世の機会だ。出世すればおとうやおつかあを楽に出来ると思うから、だから浪人みたいに食いつぱぐれは戦を待つんだ。だが、まあ、平和じゃなければいつ襲われるか分からない生活だから、どつちがいいか分からないがな。・・・どつちがいいのかは分からないものさ。」

「だな。」

算が同意するように大きく頷く。

「本当に必要な物はそれかもしれないな。」

信繁はじつと空を見つめ、つぶやいた。

「天海様がお呼びです。」

寺の小坊主がふすまを開けるとそこには着流しを着た信繁達が、くつろいでいた。

「どなたをかな。」

信繁は足を伸ばしくつろぎながら、そっくり返りながら答えた。

「信繁様だそうです。後のお付きの方は夜に帰ってきていただければ自由にしていいそうです。」

「でしょうな。」

当然という顔で算はうなずいた。

「俺はいつてくるけど、どうする?」

信繁は立ち上がると、軽く服を整えていた。

「ま、その小坊主借りて、ここの本でも読みあさるとしますか。」

大抵のお寺では仏門等を含めて数多くの本が置いてある。その実豊臣の時代くらいから、字が書ける侍や商家の物達の小遣い稼ぎや夜の暇つぶしとして、写本という物がある。それを寺等で買い取る。また、本を寺に寄進する事で、寺とのつながりを深くする風習等もあり、そのため、お寺には本がある事の方が通例となっている。また、本を見に来るためだけににお寺に通う武家が多いのも事実だ。

「でしたらこちらにおいでください。」

「では、信繁様。私はこれで。」

そう言うと算は立ち上がると、小坊主を引き連れどこかへ行ってしまった。

「青海はどうする？」

「どうするかな。俺は寺が暇で、破戒僧になったくらいだ。寺の思入れはない。ま、少し休まさせてもらうよ。」

そう言うと、畳に大の字に寝ころんでしまった。それを見ると信繁は部屋を出て廊下を歩いていく。

「やーい、根暗！」

「根暗じゃないもん！」

「お前、かーちゃんがいないんだって！」

「か・・・か・・・かーちゃんの事なんて言うな！」

信繁が声の方を見るとそこには男の子達が一人の女の子を囲んでいた。その声に反応して振り返った直後脇で突風が吹いた・・・ように感じた。

「おまえらー！いじめてんじゃねえぞ！」

しまは一気に裸足で地面を駆けると、男を飛び出でて一足等に駆け出し跳び蹴りで胴体ごとあいてを吹き飛ばした。

「お前なんだ！」

「ふざけてんじゃねー！お前ら、かつこわるいとか思わないのかよ！」

そう言いながら、女の子の前にしまは立ちはだかった。

「でもな、気持ち悪いもんは気持ち悪いんだぜ！」

脇にいた男の子が睨みつけていた。

「気持ち悪けりゃいじめていいのかよ！」

「・・・。いいよ・・・。」

どことなく底冷えするような声に全員が振り返る。あの女の子の声のようだ。泣いていたときの興奮から一転、声に重みさえ感じた。「もう・・・いいの・・・。」

そう告げると、すたすたとしの脇を越えて、寺のはずれに行ってしまった。その様子にその場にいた全員が見えなくなるまで見守

ってしまった。

「あの子は・・・孤児でしてな。」

天海が信繁のそばで、子供達を見ていた。

「なかなか皆に心を開きません。仕方がないとはいえ、まあ・・・どうしたものか。」

「そうか？」

信繁はその様子を複雑そうに見つめていた。

「そうだ。用とは何だ。」

「ここでは何なんです、こちらで茶をお点てしましょう。」
「そう言つと、すたすたと奥に天海は行つてしまわれた。」

「そう言えばどうして江戸に・・・。」

天海は茶を信繁に差し出した。周囲はそろそろ薄暗闇で、赤みがかつた斜陽が部屋に差し込み、独特の雰囲気醸し出していた。

「半蔵殿に呼ばれたので、何か見せたいとの事だが・・・。頂きます。」

「そうですね。あの方はああ見えても熱血漢な方。もしかしたら説得したいがための一念で何かを見せたいかもしれません。」

「そう言つと天海は勺で自身の湯飲みに湯を注ぐ。その立ち振る舞いは涼しげであつて凜々しく、落ち着き払つたものだった。」

「確かに、あの人はこう・・・情熱にあふれるというか・・・。まじめな方ですな。」

「だからこそその実直さと、だからこそその信頼です。なかなかあれほどの才覚の持ち主は早々いますまい。」

信繁は茶器を置くと、奥に押し返した。

「いいお手前で。」

「感謝します。作法はどこで？」

「太閤の叔父貴の側にいたときに一度利休殿に稽古をつけていただいたのだ。」

懐かしむように遠い目で信繁は天海を見つめた。

「太閤殿・・・秀吉殿ですか。なつ・・・いや、利休殿に稽古と
は流石のお手前。感激いたしました。」

天海は懐から手ぬぐいを取り出すと額の汗をぬぐった。風はまだ
春先にしては少し冷たく、夕暮れという事もあって涼しさというよ
りかは肌寒ささえ感じていた。

「やはり。」

信繁の不思議な感覚は確信に至っていた。

「やはり、太閤のおじきと似た空気を感じる。どことなくこの達観
した感じ・・・。もしか・・・。」

じつと言葉を切り見つめる空気に・・・空気は張りつめ温度もあ
つてか凍り付きそうな、誰も動けないような緊張感が張りつめた。

「叔父貴に匹敵する・・・。浅井家の者・・・。もしか・・・明智
光秀殿か？」

「ほう・・・。どうしてそう思われましたかな？」

落ち着いたような、それでいて今までの穏和そうな声から一転し
た重苦しい武將の殺気とも思える越えに、信繁は正座していながら
膝に手をかけた。正確に言えば、その殺気で膝を握りつぶさんばか
りに痛みを与えねば正気を保てぬほどの殺気だった。

「門で会ったとき、法衣の裏地の一部に浅井家の桔梗紋が飾られて
いた。そしてこのお年・・・。もしかと思ったままで。本当にそ
うならもうかなりのお年の上、最早死んで・・・。」

「何をおっしゃいますやら。」

その落ち着いた声と裏腹に天海は目を細め、その目は人の魂を射
すくめようとしていたようにも思える。

「こうして私は生きております。神仏の思し召しです。」

「どう取れば・・・。いいですかな。」

信繁は押し負けまいとにらみ返そうとするが、その殺気の差はい
かんともしがたかった。

「私は・・・天海です。それでいいと思います。」

「・・・。解り申した。すまない。」

そう言うと信繁は頭を下げた。

「いえいえ……。もういいです。」

そう言うと天海は手を振り、その声に信繁は頭を上げた。湯飲みの湯を一気に飲み干した。それに合わせて信繁は茶器の抹茶を一気にのどに流し込む。あの一瞬、生きた心地はしない。

「何か昔の事を思い出しました。」

信繁は何か遠い目で障子を見つめる。

「と言いますと？」

「昔、太閤の叔父貴が、四国征伐の会議しているところを覗いていたことがあって、いつもは何事もない普通のおっちゃんだった太閤の叔父貴が、その時ばかりは厳しい漢の目だった。」

「それは……。まあ……。そうでしょうな。」

「ただ覗いたのがばれた瞬間見たあの、射すくめられるような殺気は流石天下を統一した男だと思った。それ以来、俺は太閤の叔父貴のことが少し好きになった。」

「そうでしたか。」

「その時の目と殺気のアナタの目が似ている……。そんな気がしました。何か懐かしく思ったのです。」

「そうですね……。」

天海は何か思うところがあつたらしく、しばらく黙っていた。

「色々考えています。私の考えていた危惧はなさそうですね。」

「あなたが豊臣方にいたのでつい、勘ぐってしまいました。すいませんでした。」

「そう言うと天海は大きく頭を下げた。」

「いえ……。いいです。私も悪いのですから。」

「そう言ってくれるとうれしいです。」

「で、お話というのは……。」

信繁は一息つくと、ほっとして、茶を飲もうとするが、そこに茶は入っていないかった。

「本当なら、目的を聞いてから、よければ将棋なぞいかがと。」

「将棋・・・とは？」

「単純に言えば軍議で使われる駒を使った簡単な遊びです。あなたほどのお方ならさぞと思ひまして。」

そう言つて背後から、良く軍議等で使われる丸い駒がいくつか出てきた。それを見た信繁はしばらくその駒を見つめていた。

「それは・・・お断り致します。」

「それは？」

「あなたほどのお方と軍議の真似事でもしようものなら、拙者の疲れは更に増して、明日の夜まで寝込んでしまいそうです。」

その言葉に天海は急に口を手で押さえる。その手の隙間から、白い歯が見え隠れした。

「確かに、ここで泊まりに来たものを病に伏させればこの寺院のものに怒られましようぞ。おもしろいお方だ。」

「あなたほども。」

そう言う二人の会話は、端から見れば柔らかく、お互いはじつと見据えていた。

「気に入った。酒でも・・・あ・・・。」

「どうしましたかな？」

ふと見上げると、もう日が暮れて夜の闇が部屋の半分ほどまで迫つていた。

「そう言えば、私・・・そうでしたな。みだりに酒なぞ・・・。」

「いや、青海は飲んでおりましたぞ。」

そう言つと、信繁は周囲を見渡す。灯りの影も形もない。

「この灯りは食事の後に食房から火をもらつ事になっていましてな。そろそろ、夕食のあまりでも食房にございましょう。行きませんか。」

「はい。」

そう言つと、天海も立ち上がる。

「そつだ。明日、一献いかがでしょうか。久しぶりに飲み会いたい男に出会い申したので、私が特上の酒をご用意いたす。」

「それはありがたい。青海の奴も喜びましょう。」
「……。いや、あなたと二人で飲みたいものです。そうだ。今ならあそこの梅もきれいでしょう。そこで飲みましょう。」
「わかり申した。」
そう言つて、立ち上がつて天海はすたすたと、大きな明かりがある食房のほうへ歩いていった。

” 明智光秀……。本能寺の変で討たれたという、織田家を裏切つた男。どうして生きて……。いや、どうして……。どうして……。どうし……。どうして……。”

「ああー！眠れない！」
そう言つと、枕元の刀を持って信繁は外へ飛び出した。なんかこう、頭をかきむしりながら刀を抜くと、虚空を粉みじんに切り裂くように刀を振り回す。なんかこう……。自分の中の感情がうまくまとまらない。

「どうしましたかな。」

声の方に向くと、寝間着姿の天海が立っていた。

「起こしてしまつてすみません。」

「今日は遅い。明日になれば忙しくはなりましょう。」
軽くあくびをしてはいるが、信繁はその爛々とした瞳を閉じる事を考えられなかった。

「どうも、こう釈然としません。こう、どうもこうもなくむしゃくしゃ致す。」

「ま、普通はそうでしょうな。」

天海はよろよろと柱に寄りかかると、信繁を温かな目で見つめた。
「拙僧でよかつたら素振りの相手いたしましょうか。」

「……。それはお断りいたす。そのような老人に手をかけたとならば、名折れとなりましょう。」

「なら、拙僧にそのご自慢の腕を見せていただければ。」

「ならこれをお使いなされ。」

そう言つと信繁は刀を天海に向けて差し出す。

「私はこちらの予備で行いましょう。手加減は致すが、万が一があつても後悔召されるな。」

「確かに。そうなりますな。ただ私もこの齡。早々相手にもなりませぬ。それでも、わたしは早々弱いつもりはありませぬ。後悔めされるなよ。」

「それでも構いませぬ。」

「わかり申した。」

そう言つと天海は刀を受け取ると鞘から抜かず少しだけ刃を見せて身体の中央に構えていた。それを見た信繁は持っていた脇差しを抜き、構えた。お互い、分かつてはいたようだ。

「お年を召されるあなたの事だ。これで対等だろう。」
構えから一步も動かない信繁を天海は軽く鼻で笑つた。

「この年寄りに恐れをなして攻められぬなら、稽古であつても挑むあれはありますまい。」

「そう言つてくれると嬉しい。」

その瞬間、脇差しを振りかぶると信繁は袈裟斬りで斬りかかる。目を見開いた天海はその刃を鏝止めで受け止めると鞘で強引にいなし、その勢いで刀を抜いた。その瞬間信繁は一瞬の死を覚悟した。身体は鞘でいなされてがら空きになっていた。天海は身体をそのまま勢いのまま回転させて胴を打ち抜く……

「な！」

その直前で刃は止まり、天海はそのまま、ぱつたりと倒れてしまふ。

「だ、大丈夫ですか。」

信繁は脇差しをほおり投げ、天海に駆け寄る。

「流石に腕はあつても、身体が追いつかないようですな。さすがは真田殿。その気迫の打ち込み、私の身体ではいなしきれないようです。」

「天海殿。」

「大丈夫ですよ。こう見えてもそれなりには丈夫に出来ております故。」

そう言うところよると立ち上がると、廊下の縁に座る。

「さすがは天海殿。完敗です。」

そう言うところ、その廊下に座った天海よりも更に低く頭を下げた。

「さて、これはお返しします。では、明日の夜楽しみにしております。」

そう言うところ、天海はふらふらと立ち上がると自分の部屋へ帰っていった。その姿を最後まで信繁は目話す事は出来なかった。

「おはよう。皆の衆。一日ぶりだが、旅の疲れはとれたかな？」

半蔵の元気のよい声で信繁は目が覚める。打ちのめされた感情と整理が付かない苦しみで

目にクマができていた。

「……。早いな。」

算の第一声は目をこすりながらだった。

「ああ……。早ええ。」

青海すらあきれ顔で半蔵を見つめた。

「ふあああああ。おはよう。どうした。半蔵殿。」

「今日はお主達に見て欲しいものを見せようぞ。だから、早く、支度してください。」

そう言うところ、嵐のような半蔵は障子を閉め、どこかへ行ってしまった。

「騒がしいですな。」

「だな。」

そう言うところ着替え、全員は正門の前に集まると、そこには今までの半蔵を払拭するような笑顔でにこにこした半蔵だった。最早その笑顔は気味悪くもある。

「さあいくぞ、やれいくぞ、そらいくぞ」

「あれ？しまは？」

青海は見渡すがしまの姿はなかった。

「ああ。あいつは何かここの小坊主どもが気に入ったみたいで、小坊主達とどこか行きおった。」

半蔵はそう言うつとそくささと部屋を出てしまった。

全員が正門に集まったのを見ると半蔵は何を言うわけでもなく、すたすたと、城のあるほうへ歩いていった。それを見て一同は顔を見渡すとそのまま半蔵について歩いていった。特に信繁は眠そうにあくびをしながら歩いていた。

「どこに行くんでしような。」

寛は呆れたように、意気揚々と歩く半蔵の後に付いていく。

「最低でも、酒とかはなさそうだな。」

「眠い。」

渋々と半蔵について行くつとそこには大阪城もかくやと言うほどの大きな城である江戸城がそびえていた。

「これを見せたくて、大阪からわざわざ連れてきたんですかな？」

「いや。そっちではない。こっちだ。」

そう言うつと江戸城ではなく、江戸城の脇に歩きの固まりを指さした。

「やっとあの船の修復が終わってな。昨日はそれを見てはしゃいでおったものだ。」

「ふね？・・・あれが？」

そう言うつて江戸城に横づけされた船とおぼしきものを見つめる。安宅船や鉄甲船とは違いの穂先が丸く、またその大きさは安宅船とも鉄甲船のそれとも違いかなり大きかった。そして大阪とかで見た船とは違い船底が丸く、また切り貼りした形跡はなかった立派な船だった。

「確かあれは、雅レ穩とかいう船だな。遠くエゲレスの船だ。」

「エゲレス！」

「・・・エゲレス？」

信繁は驚いたようだが、他の三人は不思議そうに船を見つめた。

「これがあの神風を越えてきた異国の船ぞ。」

興奮している半蔵を尻目に他の四人は顔をつきあわせ、信繁を囲んでいた。

”エゲレスって何だ？”

”エゲレスって・・・確か、宣教師どもがいた国の一つって聞いた事があるぞ。確かものすごく遠く、海を6つ越えた先にある国らしい。”

”海を六つってあの海か？はー。”

「何を話しておる？この船はなあ、これからの徳川の未来を背負う重要な船なんじゃ。」

半蔵の興奮は止まらないようだった。

「で、これを見せたかったのかな？半蔵殿は？」

信繁は相変わらず眠そう顔で半蔵を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。何も感じないのか？」

「いやあな。山の生まれのせいか、船にはあまり興味がない。」

流石に算達は啞然とした表情で信繁を見つめる。流石にそれはあんまりだろう。

「まあ、これが本来の目的・・・ではないしな。ささ、こちらへどうぞ。」

船にあがり船室を見ると半蔵は一目散にとに手をかけ、中に入った。中にはいるとそこには中を見回っていた一人の男がいた。

「や。ハンゾウドノ。カエツテいたんですか。」

中の男が気さくそうに話しかける。

「うむ。昨日完成したと聞いて、いても立ってもいられず、見に来たのだ。」

そう言うと半蔵はその男に歩み寄り、いきなり握手をした。その男も平然とその手を開き、握手を交わした。

「このカタは？」

「ああ。この方は・・・。」

不思議そうな顔をして中にいた男は

「拙者……」

信繁は自己紹介しようと思い前に出ようとするところを半蔵が、それを押しとどめる。

「この者はな、拙者の親戚でな。そう……。」

「信繁と申す。そなたは？」

その声に半蔵は軽く息を吐いて呼吸を落ち着けた。

「私、アンジンと申す。」

そう言つてアンジンは深く一例をした。

「この男は？」

算は不思議そうに見つめた。

「この者は、遙か遠くエゲレスから来た”航海士”だ。」

「ほう。航海士なるものか。」

信繁は感心して見つめた。

「へー。これがエゲレスの者か。」

青海はじろじろ見るがその差がよく分からない。

「で、半蔵殿、見せたい物とは？」

そう言つと半蔵は船室の引き出しを開け、茶色い紙を取り出すと、信繁達の目の前に広げた。

「これは？」

算は不思議そうにその地図に書かれたシミを見つめる。何か不思議にくねつた。線がかかれていた。

「これか！これは世界じゃ！」

「……？」

全員がその言葉に首をひねつた。

「正確に言えば世界の地図じゃ。」

当時地図というのは貴族か大名、武将しか持てないあまり知られていない柄だった。当時の武将達は先に忍者や斥候を先行させ、地形を調べるのが戦の習いでもあった。

「世界……か。」

そう言つと信繁はじつとその絵を見つめるが、全くちんぷんかんぷんだった。

「これがどうしたのだ？」

算はその地図を見つめてきよろきよろしていた。絵の所々には見慣れぬ棒や線が引かれていた。

「ここは地図のどこだと思つ？」

半蔵はわくわくした顔で聞いてくる。アンジンは慣れたようにあきれ顔をするとテーブルの側のいすを引きずり出し壁際に置き座り込んだ。

「わからん。」

信繁はそう言つとじつと地図を見つめた。

「ここだ。」

そう言つて半蔵は地図の端にある小さな島国を指さした。

「？」

青海は首をひねった。

「この小さい島の真ん中。それがここじゃ。」

「じゃあ、この大きい枠は？」

そう言つて中央にある、日本の数十倍もある大きな枠を指さした。

「これか。これは明やポルトガルがある”大陸”じゃ。」

「これが大陸？すげー。」

算は純粹な目で地図を見つめていた。

「じゃあ、エゲレスはどこだ？」

信繁はあまり驚いた顔もせずその地図を見つめた。

「お主、驚いておらん。」

半蔵は意外そうな顔をしていた。

「まあな。太閤の叔父きが、”地球儀”を持っていたのでな。地図は見た事がある。その時に日本の本の大きさもじゅうぶん思い知っておる。」

その顔に露骨に半蔵は嫌そうな顔をした。

「イギリスは……。」

そう言つとアンジンは立ち上がり、地図左端の二つある島の二つを指さす。

「ここにあります。」

「お主よく遠いところから来たな。」

信繁は大きく頷くと、アンジンの肩をたたいた。その行為に青海達は不思議そうな顔をしている。

「よく分かりませんが。どうしたんです。」

算は地図をじつと見つめるが、訳が分からない顔をしている。

「よく見てみるよ。」

そう言つと江戸を指さす。

「ここが江戸だろ。で・・・ここが、大阪。」

そう言つと、指を少し動かしたくぼみを指さす。

「へ？そこが大阪？」

「で、ここが・・・エゲレス。」

そう言つて信繁はわざとらしく大きく手を振つて左端の島を指すとそこにはイギリスがあつた。

「大阪から江戸に来るのに2週間かかったのにあそこまで行くのはどのぐらいかかるか。想像も絶する。しかも船で来る奴らは大回りである。」

「信繁様。私には想像も付きません。」

呆れた顔して算は地図を見つめる。

”半蔵様！”

遠くからタラップを駆け上がる音が聞こえた。

「半蔵様！秀忠様がお呼びです！」

そう言つと、袴をつけた男が戸を開け、見渡す。

「分かつた。すぐ参る。・・・。按針殿。しばらく彼らのあいてを頼む。大事な客人だから。粗相の無いように頼む。」

「ワカリました。」

そう言つと按針は大きく頷く。

「信繁殿。あまりこのあたりをうろつかぬよう。船内でお待ちくだ

さい。」

そう言つと、半蔵は戸を開け、走り去つてしまつた。

「そう……。ナニかキキきたいコトはありますか？」

アンジンは、傍らにある椅子を三人分抱えてくる。

「お主、どうしてこの地に来た？」

「……。ワタシですか？ワタシは……。イマならこうイえるかもしれません。あのコロのイギリスはナニカかイヤでした。そこからニゲたくて、フネをナライ、そしてニげた。カミの手をメザして、ワタシはナカマをギセイにして……。そしてここにナガれれつた。」

「神の地？」

「ロングになります。それより……。」

そう言つと船室の真ん中にある机の引き出しから瓶を一本取り出す。

「ノみませんか？これ、イギリスのサケ。ジンです。オランダのフネにモつてきてもらいます。」

「おっ！酒！」

そう言つと青海はアンジンに駆け寄ると、そのボトルをまじまじと見つめた。

「ジカンある、ジンノむ、イチバン。」

そう言つと引き出しから、ガラスのお猪口を取り出し、そこにジンを注いだ。

「で、こつという体たらくな訳だ。」

そう言つとジンのきつい臭いで一杯の船室の窓を開ける半蔵の姿があつた。

「ま、青海は酒が好きだし、算は元々好奇心が強い。外の国の酒ともなればこつなる物だろ。」

そう言つて床をみると、按針含め三名の倒れた姿があつた。外から差し込む光はもう無く夕暮れを越え、夜半になりつつあつた。

「お主はよかつたのか？」

半蔵は不思議そうに信繁を見つめる。

「俺には朝から酒を飲む癖はない。一口で十分だ。」

ト、ト、トン、トン……。

「確かに。」

「それにここは一応敵陣中央。油断なぞせんよ。」

「それは言うな。それを言い出せば拙者もそれなりだから。」

半蔵はあきれ顔で床に散らばる乾物を手ぬぐいで拭き取っていた。

コンコン。

その音に反応し、戸を開けると、そこには天海の姿があった。

「ここにおりましたかな。流石、信繁殿。」

「天海殿……。」

半蔵は驚いたようにと言うより、怪訝な表情で天海を見つめた。

「半蔵殿まで一緒なら好都合。お主に許可を取りたかった。」

そう言うのと、天海は中に入ってくる手には、大きな箱を持地、明かりもなかなかの大きさの物を持っていた。

「どうかしましたかな。」

半蔵は不思議そうな顔をしていた。

「今夜……と言うより……今から、梅の園で信繁殿と茶でも一杯どうかと思ひまして、こうして持参して参った。半蔵殿も一緒にどうかかな？」

そう言うて手に持った包みを開けると、そこには茶道具一式があった。

「……どうしてここまで……。」

半蔵は啞然と言うか、呆れた顔で天海を見つめた。

「拙僧はこの設計とかも行っていますからな。いくつかの裏道くらいは……。」

飄々として天海は床に茶道具をおろすとくすくすと笑っていた。

「一応ここは征夷大將軍の寢床だぞ。一応お庭番も見回っているのに……。」

「ほっほっほ。昔上杉の家中に忍んだときよりはまだ優しゅうございますよ。」

二人の会話を聞きながら信繁は立ち上がり、天海の茶道具を持った。

「ま、それは俺がいなくなった後でやればいい。行きましようか。」

「どこに?」

「今日は梅が見頃でしょう。梅は確か、堀の周辺に生えているので、折角だから花見でもと。」

「ここは近所の寺庭はではありませんぞ。」

半蔵は呆れながら戸を開け、外を見渡す。周囲はもう真っ暗で、手すりに駆けられた提灯以外の明かりはもう無かった。上を見れば月は明るく、甲板は白檀のような白く艶のある光沢を放ち、不思議な空気が漂っていた。半蔵は外に出ると中にいる二人はゆっくりと出て、空を見つめる。

「船室の硝子越しに見る月も好きだが、この甲板から見る月はこっ・
・。なんか・。違うな。」

「ですな。風情がありますな。」

そう言いながらタラップをゆっくり降りて、天海は手招きをする。

「そう言えば、半蔵殿。見せたい物はもう、見せましたかな?」

「いいや、あれは明日の予定です。」

「ならあれのほうが早そうですね。おもしろい。」

「・。・。なんの事ですかな。」

タラップを降りる信繁は少し不満そうに天海の後をついて行く。

「いずれ全てが分かります。それを伝えるためにあなたをここにお連れしたのですから。」

そう言う天海はすたと、江戸城の暗闇の中へ歩いていった。

「ここですぞ。」

そう言うと梅林の中央で地面に座る。

「これは・。・。!」

信繁は息をのんだ。そこは不思議な・・・普通見る事が出来ない
幻想的な景色であった。

梅は満開で、空からは満月の明かりが梅を淡い桃色で咲き、地面からは少し強い蠟燭と、提灯の少し色が付いた明かりの形が下から梅の色を濃く色付けする。その合間にある中程の梅は普段の少し濃い色合いの梅があるだけだった。その色合いは円形の明かりからさも梅に虹が写り込んだような色合いだった。

「天海どの・・・これは？」

「昔、殿がやった花見でな。提灯月という物でな。昔、殿は新月の日に花見がしたいとかもしてな。ちょうど拙僧が花見の場所に連れて行くと新月の暗闇でなにも見えなかった。そこで花の前に座ると提灯を置き、その明かりだけで花見を行った。それが提灯月よ。」
「なかなかの謂われがありますな。」

そう言うつと、信繁は茶道具箱から敷物を取り出すと、木の根元にひいている。

「拙者も初めて見ます。」

そう言うつと感心したように敷いた敷物に寝ころび、上を見上げた。
「よく春にあると、戦場に行った猿も一緒に花見がしたくて春の一日だけ戦場を抜け出し、皆で夜の梅や桜を見たものだ。」

「じくり

「・・・猿・・・やっぱり。」

信繁はのどを鳴らすと天海の顔を見つめた。その顔は提灯の明かりの縁と月明かりがちょうど顔を隠していた。

「今日、ここに呼んだのは。ここなら人に聞かれても早々大事にならぬここが秘密の場所だからだ。」

そう言うつと感慨深そうに空を見つめる。そこには満月が煌々と地面を照らしていた。

「あのお話を・・・。」

半蔵は驚いたような声を上げる。明かりごしに見る半蔵の顔は驚いていた。

「だから丁度いいと。」

天海は言つと茶道具箱を開けそこから茶碗を取り出す。

「そう、夜・・・戦陣に向かう日の事だった。」

天海の声は老人とは思えぬほどに若い男に聞こえた。

あのおとき思えば・・・殺害される二日目の時、朝釣った魚を昼に差し上げたのに、腐つていると言われていた。食事の事件があった私には、そんなに早く腐るとは考えていなかった。あのおとき皆の前で罵倒されていたが、その時私は体を少し口に入れてみていた。丁度その時は内府殿もいたからな。今でも覚えている。それは腐つていると言うよりも何かどろっとした痛みの感じる味だった。その時私はもしやこの中に裏切り者がいる。そう感じていた。それから酒宴が終わり、私は内通者を探すためにあえて命令を断り、領内にとどまっていた。だが、それらしい証拠はどこにもなかった。断つたり先延ばしに出来る命令にも限りがあり、ついに私は畿内（丹波方面）に向かう日が来た。殿に一言謝ろうと安土城に向かうと、京都に向かったと聞いて、私はもう一度謝りたくて私は旬の野菜を持って本陣に向かった。そこで信長様は書面を書いてた。

「信長様、今一度謝りたく参りました。」

「・・・光秀か」

そう言つて信長は筆を止め、顔を上げるとこちらの方に向き帰つた。いつもは厳しい鬼のようなお方だが、私の知っている信長様は心優しい、立派な人だった。ただ、公の場では立場のほうを重んじていた。

「先日の件、平に謝りたく・・・。」

「・・・。そうか。あれはいつのだ？」

「あのおときの鯛は私が漁師に朝に鯛を捕らせそのままお持ちした鯛を使っております。」

「・・・そうか。」

「なので、あのような味になるとは思いませんでした。すいません。」

「その後、密かに他の来客の鯛も食べてみた。その味は上手く流石だと思った。」

「は？」

「おおかた予想は付く。あれは・・・誰かが毒殺とかをはかった物だろ？」

「え・・・あ・・・。」

「それでお前に罪をなすりつけようと・・・それは宮中か？」

「当時私は朝廷との調整役として内通をする二重密偵を行っていて、相手の調略を調べる裏方の仕事を行っていた。」

「いえ、今のところ朝廷は信長様の威光を持ちいらせる事が主眼のようで、ご機嫌取りの声しか聞こえてきませんでした。」

「そうか。」

「頷く信長様は中腰まで立ち上がると顔を思いつきり近づけてきた。だれだと思う？」

「目の前の信長の好奇心にあふれた目とともにやはり信長様も気が付いていたかとのどを鳴らした。」

「いえ・・・それは・・・。私も調べてみましたが分かりませぬ。」

「ただ・・・。」

「なんだ？」

「あのときいくつかの料理は宣教師達が言う”いねがー”を用いた鯛の蒸し物をお出ししたとか。」

「それをお主は知っておったか？」

「いえ。鯛はやはり、酒蒸しがおいしゅうございます。お一人で食べる時ならともかく、あのような多くの物がある酒宴で変わり物をお出しするのは間違いかと。」

「・・・と言う事は？」

「何者かが毒を入れたかと。」

「だろうな。」

「誰かと言われると、おおかた宣教師か・・・。又は朝廷の誰かが

工作を行うか……。」

「やはりな。」

そう言つと信長は机から書状を一つ取り出すと光秀に渡す。

「なら……誘い出してみるか。」

そう言つと信長は口の端を大きく広げ、目をランランと輝かせた

「と、言いますと?」

「京都には南蛮寺（宣教師達が拠点としている教会）はあるか?」

「ハイ。京中にはいくつか。」

「……なら、本能寺にいればあり得るな。とりあえずそなたと私は猿の援護に向かうと言え、誰かがねらう公算が高い。そこを返り討ちにする。」

「分かりました。なら私はわざと狙わせる為にあえて出陣します。」

「頼んだ。」

そう言つと信長様は後ろを向き、書面に向き直した。

その日の夜、何故か不安に感じた私は増援の手配をすませ、桂川を超えようとしたとき兵士達がざわつき始めた。後ろを見ると、煙が上がっていた。不安は的中した。我々が考えるよりも早く誰かが事を起こしたのだ。気が付いたその瞬間私は大声を上げていた

「我が軍は今から反転する!」

その瞬間引き連れていた四千の兵はざわめき始めた。予想されていた事だ。

「敵は！敵はいずこに!」

”あの位置は……。”

「四条河原裏！、本能寺にあり！付いて参れ!」

そう言つと兵をかき分け全力で元々の道をたどっていった。その動きに全員があわてながらも付いてきていた。だが到着する頃にはもう朝方となり本能寺周辺は廃墟になりはてていた。もうそのころには全力に走らせた馬に追いつける物は少なかった。周囲には手勢と呼べるほどの人間しかいなかった。その焼け跡を見ながら注意深

く見渡していた。

「これは……。」

それはあまりに無惨な物だったがその一部の残骸にもっと驚いていた。そこには桔梗紋の旗やそれらをつけた兵士の死体が転がっていたからだ。歩いている兵士達はおどおどした目で、周囲を見ながら歩いていった。むろん京都民達もこの様子を見ている。ふと先を見つめると本能寺があつた。そこは廃墟ではあつたがそこに数人の人間が残っていた。馬を走らせ乗り込むとそこには黒ずくめの……髪の色は分からなかった。黒い布でかぶり物をした黒ずくめの男達がそこにいた。

「おまえは……。」

「来るのが遅い……出はないか。こうして間に合っているのだからな。ふん。」

そう言うつと黒ずくめの男は手に持った何かを私に投げつけた。それは……信長様の首だった。

「vdしあにゴアダウynvそくあd、DなSオヅdナオウウドア
nbvs、」

何を言ったか分からない発音で何か号令をかけると、周囲にいた男達は散り散りなり始めた。

「お前に手柄はくれてやる。それをどう生かすもお前の自由だ。」

そう言うつとその男は本能寺の奥に向かって駆けだしていった。その時の私は軽い・イヤ、頭がくるくる来るほどの混乱をきたしていた。

「あぐううううううあああああああああああ！」

私は声にならない声を発し絶叫した。その時、初めて世界に絶望した日だった。それから

の私は半狂乱となり、信長様を殺した人間を捜すべく兵士達を配置し探させた。だがそれは無駄骨に終わった。そうして焦燥の日々を送る内にある報告が入る。それは秀吉の部隊がここ山崎城に向かっているとの事だった。その時の私は手助けをしてくれると思ってい

だが、偵察部隊の話はそれとは全然違う物だった。どうも秀吉は私
が襲ったと思っっているらしい事が分かった。……。その時あの桔
梗紋の理由が分かったのだ。そう、首謀者は私を同時に消すためだ
けに桔梗紋を付けた兵士を本能寺に向かわせたのだと。だとして朝
廷は考えがたかった。だとすると……。どちらにしろ、この事は
猿に知らせないと。早速手紙を書き、使者を向かわせたが、その使
者が届く前に軍隊は城の目の前にたどり着き、そして、何も言うこ
となく城攻めは始まった。あつという間だった。二倍近くの軍勢と
信長様信任の最強兵団がそこにはあったのだ。勝てる……。いや攻
撃に耐えられる見込みなぞ……。無かったのだ。頼みの使者もなく
城は陥落し、私は秀吉の本へ向かっていた。だが……。だが……。

「どうした。」

信繁は不安そうな顔で天海の顔を覗いた。

「イヤあな。あのときは複雑でな。」

そう言う天海の顔は複雑そうに照れ笑いしていた。

「続けよう。あのとき私は賞金目当てに山狩りを行っていた農民
達に襲われたんだ。だがそこにちょうど半蔵殿が来てくれてな。当
時の半蔵殿は若くてな。ふふふ。」

にやりとすると半蔵のほうを見た。

「丁度家康様に密命を受けてな。影武者を南下させ囮に使い、二人
で信長様の敵を討つべく、山中を探していたのだ。本当に光秀殿が
敵ならば、さらし首にすべきと思っっていたのだからな。」

そして半蔵殿に捕まった私は内府殿と一緒に私は密かに秀吉の目
の前に連れ出されていた。流石に縄をまかれ、身動きはとれないよ
うにされていた。目の前の猿の顔は、顔と目をを赤くし、涙の後が
シワとなり、くつきり見えるほど頬はこけていた。自分も同じ気持
ちだから分かる。悔しくてたまらないのだ。

「光秀！どうしてここに顔を出せた！親方さまをおおつつつ！

どうして手にかけて！」

その様子を私はじっと見るしかなかった。

「まあ、まちなされ。そう断定する必要はないのではないか？」

家康の優しい声が温度と反比例して冷ややかにさえ見えた。

「どうして光秀殿が裏切ったと。」

「それはあ！それはなあ！お主が襲撃したとの報を受け！確かめに参った！」

「……わたしは……。わたしは……。」

私はその声に……。いや、信長様を守れなかった罪は私にある。あえて……。罰は受けるべきだと思えた。

「……。もしかしたら、真犯人は別かもしれませんぞ。」

その家康の声に秀吉はその鬼の形相を家康に向けた。

「どういう事だ！」

「よく考えてください。その裏切りの報告。いつ受け取りました？」

「……。4日だ。」

「よくこんな大将を討たれ、混乱しているときに報告が行きましたな。しかもあり得なく早く。」

「!!!!！」

その言葉に全員が息をのんだ。確かにそうだ。急転直下に引き返したとはいえ、その報告が4日（本能寺の変は2日）に届くとは早馬でも考えづらい。特に秀吉のいた地域は丹波衆の領地を越え、山脈が横たわっていた。そこを往復するのに二日……。いや一日半では難しい。特にこういう崩御の知らせは早馬で伝える事が定例で、のろし等は使えないからだ。

「どう……。いうことだ。」

「私もよく分かりませぬ故。ここで光秀殿の言い分聞いてからでも遅くないかと。」

「わ……。わかり申した。」

そうして私は知っている限りの事を秀吉に話したのだ。

「……。そうか……。すまない……。」

その時の何か震えるような、秀吉のあの顔を私は今の世になつても忘れる事は出来なかつた。私は改めて守れなかつた自分を悔いた。「と言う事は・・・誰かが・・・光秀殿に罪を着せるために・・・こんな！・・・事を！」

家康殿は思案に切れた顔で地面に腰を下ろし私の顔を見つめていた。分かつている。私は・・・ここで・・・死んでいい。

「首を切れ。親方様を守れなかつた責は俺にある！俺の首をお！斬れ！」

そう言つて私は思いつきり地面に顔をたたきつけ、首を差し出した。その瞬間地面をこする音とともに顔面を蹴り上げられ思いつきり後ろに吹き飛ばされた。

「ふざけるなあ！」

そう言つと猿は私の私の身体に馬乗りになり拳と水滴を顔面にひたすらに叩きつけた。

「お前だけがいかつこするんじゃねえ！オラだつて・・・オラだつて・・・！悔しいに決まつてる！お前だけじゃねえ！」

徐々に拳よりも水滴のほうが比率が高まつていった。

「俺だつて・・・俺だつて・・・。お前と一緒に・・・親方あ・・・様を・・・守れなかつた・・・だ・・・。なんのために俺たちは今までやつてきたんだ！」

「落ち着きなされ！」

その言葉に涙一杯になつた顔を内府殿に向けた。

「悔しくないのか！」

「今は！一軍の将！そのまま部下に顔をお見せになるつもりか！」

その言葉に全員がハツとなり顔を上げた。

「・・・す・・・すまない・・・家康殿。」

そう言つと秀吉は自分の腰掛けに座つた。

「おおかた・・・と言つか、確信が持て申した。主犯は・・・宣教師・・・か・・・。」

家康は秀吉の顔を見つめていた。その時の顔も忘れられなかつた。

そう喋りながらも口から血が垂れていた。おおかた、齒を食いしぱりすぎて血が吹き出たのだらう。

「どうして。」

「実はいくつか来る際に草たちに調べさせまして。その中に、何者が持っていた光秀殿の手紙、そして信長様が来る前後に傭兵達を集めていた物達がいたとの報告が。」

「……。」

「そして、なぞの言葉とはおおかた宣教師達の言葉でしょう。我々では理解できませんからな。」

その言葉に全員は固まってしまった。

「なら宣教師どもを根絶やしにしてくれる!」

「それはお待ちください。まだ確証無きままに動くならば、敵は新たな手を考えてくる。」

「ではどうしろと。」

秀吉は呼吸を落ち着けるとじつと睨みつけるように家康を見つめた。

「ここは、光秀殿に死んでもらうしか。」

「……は?」

あまりに明るく家康が突拍子もない事を言うので二人は固まってしまった。

「正確に言えば、光秀殿には死んだ事にしてもらい、世に出ぬ事案件に釈放しましょう。」

「どうして。」

「功績もありますし……。」

「分かった。確かに、光秀殿は責任を取りたがっていた。だが、今まで我が軍を支えてくれた功績とで……しゃくほうする……。ほんとに……すまない……すまない……。」

そう言う秀吉の顔は何ともいえない鬼の顔に目元だけが悲しみで垂れ下がった顔が印象に残っていた。

「それから拙僧は、隠して置いた信長様の首を安全な土地にかくし、弔いをするべく、高野山にこもり、京のための祈り・・・勉強に励んだ。しばらくして、陰陽を習った私は江戸を訪れ、命を救った内府様のために尽力する事になったのだ。」

そのころには各々の場所に寄りかかり、天海を見つめた。だが月は頂点を越え、地の灯火は最早、顔や花びらを照らすほどの明るさは失せていた。

「そうか。叔父貴も大変だったんだな。」

信繁の目にはほろりと涙が浮かんでいた。

「信長様がいた頃の私や・・・いやその頃みんなは何か熱に浮かされたようにあの方について、戦国を駆け抜けていた。本当に・・・駆け抜けていた。」

「ですな。」

半蔵は茶碗の抹茶をぐいと飲み干すと空を見つめた。

「ただ、私はあの方の言ったあの言葉を忘れない。」

天海はあくらを組み空を見つめるその姿が月の光で浮き出させるように注がれていた。

「俺たち武将は前で戦うそれしかできない男だ。だがそんなはぐれ者の俺たちがみんなに喜ばれる仕事ができる。それが俺たちの仕事だ。だから俺はみんなのために戦う。それが吉乃との約束だ。」

その言葉に全員が黙ってしまった。

「その言葉は内府様、太閤様、そして私や織田家家臣全てに伝わっている事だ。そしてそれこそが、今我々戦国の世に生きる全ての者が・・・土がやるべき事ではないのか？だから内府様に力を貸している。全ては信長様の願いのために。」

そう言うと、周囲にある器を天海は片づけ始めた。

「分かった。言いたい事は分かった・・・。半蔵殿。俺に見せたかったのはこれか？」

「これも・・・だ・・・。」

そう言う半蔵の頬に涙が一筋流れていた。

「だがな・・・これで終わったわけではない。これはある意味始まりだったのだ。」

「・・・宣教師か・・・。」

「それを明日・・・。教えてやる。」

そう言つと暗闇の中に半蔵は消えていった。

「何か・・・こう・・・俺の知らないところで起きているみたいなんだ・・・。」

「さて、行きましようか。私もすつきり致し申した。」

そう言つと消えかかっていた蠟燭に火をともすと天海は立ち上がった。

「少し・・・待ってもらえないか？」

「どうか致しましたかな？」

そう言つ天海は不思議そうに信繁を見つめた。

「青海達を置いてはいけない・・・。俺は船室に帰るよ。」

第三節 1614年3月下旬 真田信繁と江戸の町（後書き）

後半部分の一分について、詳しく書いて欲しい方がいれば、細かいバージョンを書きます。その時はご連絡ください。

第四節 半蔵が見せたかった物（前書き）

半蔵の見せたかったもの・・・それは何尚加、考えながら帰る信繁を待っていたものは・・・。

第四節 半蔵が見せたかった物

第四節 半蔵が見せたかった物

「おつそーい！」

しまの声は朝霧の奥から信繁達にきつく突き刺さった。

「なーにやってた!？」

「まあな。ちよつとこいつらが調子乗って酒飲みすぎてな。」

「だって……。あれから真田様があ、帰ってきたらあ、飲もうぜーとか言つて、起き酒させたじゃないっすかあ。」

フラフラになりながら、算は門までたどり着くと門に寄りかかり、真つ赤な顔を押さえこめかみを押さえていた。

「だあかあらあ、俺は言つたんだつて。こいつは強いつて。」

そう言つと信繁に肩を担がれている青海はしまに負けぬ大声を上げていた。

「サケ・・・臭い！」

しまは算に顔を寄せると顔をしかめた。

「にやる、とつとと寝ろ！」

バシッ!

「いた、しいまあ……。ま・・・寝るぞ。俺は・・・。」

算は、蹴られた尻をさすりながら奥へ一人消えていった。

「でも・・・まあ・・・珍しいよあな。信繁え様が起き酒でも・・・酒誘わられたの初めてだ。」

「ま、俺もあの酒は一度飲んでみたかった。押し、しま、手伝つてくれ。こいつ重い！」

そう言つと、しまは掛け寄り青海を反対側から支えた。

「でも、どこ行ってたんだ。本当に。」

「ま、丁度季節だから。ちよつと夜桜でもと探しに行ったけど・・・見つからなくてな。その辺で酒でも飲んでた。」

だがそう言う信繁の顔は笑っていなかった。その表情をしまは口をとがらせて見つめた。

「ま、俺はまだ坊主だからいいけど、次置いていったら本気で怒るぞ。」

「・・・すまない。」

「いいけどさ。」

「そうだ。天海殿は帰っているか？」

「?・・・なに言ってる?天海様は早くにお休みになって今朝も早くに起きてたぞ?」

しまは不思議そうに信繁を見つめる。

「は?よくわかんねえけど。じいさんなんかあ。みてねえぞ。」

青海の口が開くとその臭いにおいが二人の鼻を突く。

「お前は!早く寝ろ!」

そう言う信繁は、青海を部屋に連れ込むとそのままほおり投げ、上から布団を投げかけた。

「ま、これで大丈夫だろ。」

「お連れ様は・・・大丈夫・・・ですか?」

開けた障子を見ると、一人の小坊主がこちらを見ていた。

「まあ、大丈夫だろ。酒に飲まれるほどの男じゃないしな。すまないが起きたら、世話を頼めるか?」

「は、はい。」

「で、信繁様はどうするんだ?」

しまは不思議そうに見ていた。

「そついや、お前、昨日どうしたんだ?」

「まあ・・・朝さ、半蔵殿に言われて、まずは字だと。だから、俺も学堂に籠もってガキと一緒にピーチクしてたよ。」

しまは不満そうな顔をしていた。

「字は読めるようになれば、仕官しやすいからな。やっといて損はない。それに書いてある表札には意外に重要な事がかかっている事が多いから読めれば、便利だぞ。」

「だが、信繁様と一緒に出かけると言ったら、抜け出せたんだ。だから・・・一緒に江戸、まわんねえか？」

あの衝撃の本能寺を聞いた後、船室に帰った信繁は西洋の酒を飲んでいた為、按針達とほぼ寝ずに酒を飲んでた。そのためか、今でもあの船室には按針が寝ているはずだ。まあほぼ徹夜の信繁にとつて今の日光すら目がくらむが・・・。

「ま、いいだろ。ただ、あんまり頭が回らないが・・・いいか？」

「いいよ。行こう。こんな大きな町、見るのは初めてなんだ。ちょっと準備してくるから待つてな。」

そう言うとしまは走って外へ行ってしまった。

「ま、あいつも子供という事か。だが・・・。」

欠伸をすると、信繁は腕を回し首を回す。気合いを入れていないと寝てしまいそうだ。だがあんなにはしゃいだあいつの顔は珍しい。

「ほら、行くぞー。信繁えー・・・様。」

「・・・あいつ、絶対敬意とかという言葉・・・しらんな。」

呆れながらも信繁は近くにあった刀を下げ、入り口に戻っていった。

「本当に・・・人がほんに多いなあ・・・ここ。」

しまは好奇心で周囲を見渡していた。

「まあ、これでも京や堺ほどじゃあないがな。」

人通りは確かに駿河や三島よりは多いが、こういう大都市では多い外国人や宣教師の姿はほとんど無かった。それよりも寺社仏閣の数の多さに驚いていた。新しい都市（岐阜、堺）などではほとんど影も形もない寺社仏閣が多いのも一つ、水路と小舟の行き来が多い事に驚かされる。確かに多くの物を運ぶときは船が楽だが、この水路の多さは驚いていた。

「確かにここは変わっている町だ。だが、はしゃぐなよ・・・！」

しまのいたところを見ればいつの間にかしまの姿がない！

「お前！それは人が廃るつちゅうもんだろ！」

声の方を見ると、数人のごろつきに絡むしま一人の姿が見える。しまの後ろには女の子の姿がある。

「アン・・・馬鹿あ！」

信繁は声の方へ走っていった。

「だからといって、子供一人に大人が囲むんは、人じゃないぞ！」

「このくそガキ！そいつの懐！俺らに見せればいいんだよ！」

ごろつきの内の一人が、いきり立ち、殴りかかる。その瞬間にしまは男の身体の下に潜り込むとすねを思いつき蹴りつける。その蹴りの重さに崩れ落ちようと前屈みになる瞬間下がった顔に拳を叩きつける。その勢いに男は大きく吹き飛ばされた。

「情けなくないだか。お前ら！」

「よくもあ！やりやがったな！」

そう言うところろつき達は腰に差した刀を全員が抜きはなった。

「お前ら、刀を抜くとはどういう事か・・・わかつてるだろうな。」

駆けつけた信繁が刀を抜きごろつき達に突きつける。

「お・・・お前・・・お前ら！」

ごろつきの頭と思われる男は抜いた刀をかたかたと振るわせていた。

「なんで。」

「お前ら！」

「応！」

「逃げるぞ！お、お前、覚えてろよー！」

そう言う頭らしい男は一目散に逃げていった。それを見た全員はそのまま、頭の方へ逃げていった。

「お前、大丈夫か。」

「うん。」

薄汚れた少女はふるえながらコクコクと首を縦に振った。信繁はその様子を厳しく見つめながらしまに駆け寄る。

「信繁様。アリガトな。」

パン！

信繁は無言でしまの頬をひッ叩くと、しまを無視して少女の前にしゃがみ込んだ。少女の握った手を見ると、少女に手にはひもにながったお金が見え隠れした。その視線に気が付いた少女は、握ったままの手を後ろに隠した。

「何する！」

しまは怒つてのび下に詰め寄ろうとする。

「お前、何したか分かっているのか？」

「子供を助けたんじゃない！」

その瞬間、しまは水路にはじき飛ばされるように飛んでいった。

水路は浅く、おぼれる事はなかったが、その顔は腫れ上がっていた。

「お前……。殺されなくなったらそれを持ってどっか行け。・

・わかつたな。」

厳しい顔に気圧され少女はコクコクとうなずき、走って去っていった。

「何するんだ！」

呆れた顔をして立ち上がるとしまの襟首をつかむと、一気に水面から引き上げた。

「お前！あんな危ないマネ、絶対するな！」

「なんで？」

信繁は首根っこをつかんだまま裏路地に引つ張り込んだ。あのままだと野次馬に目をつけらると思ったからだ。

「状況を見る。考える。」

「何を……。」

「あの子供はあのごろつきから金を盗んだ。」

「それが？だとしても困むほどじゃあない。」

「お前は盗みの片棒を担ぐのか？」

「……。」

「お前はお前の村を襲った連中助けているのと変わらないぞ。それは。」

「それは……。」

「それに。人数とか状況を見て考える。あの人数だと、下手すればお前も死んでいた。」

「でもあれは許せない。」

「草とかになるなら、まずは覚える！1に任務だ！2に命だ！」

信繁の迫力にしまはうつむく。

「自分の信条を押し殺せねば、いつかはお前・・・死ぬぞ。」

「・・・分かった・・・。ごめん・・・。なさい。」

「じゃ、行くか。もう少し回ってから。帰るぞ。」

顔を上げると、信繁はそのまま大通りに戻っていた。その後を小走りですまは付いてくる。

「一つ・・・聞いていい？」

「なんだ？」

「信繁・・・様は同じの見たら、助けに行つた？」

しまはそつと信繁の顔を覗くが、その顔はもう通常の物と変わらない。

「さあな。ただ・・・俺ならもう少し様子を見てから飛び込んだ。」

「・・・。本当に・・・そう？。」

帰ってきて部屋を見ると、まだ青海は寝ていた。

「べちゃべちゃ。」

確かに水路に突き落としたのは事実だったが、その水路は水草やもで一杯だった為、しまの身体の各所にもが入り込み、服は文字通り”べちゃべちゃ”になっていた。

「すまん。そこまでもが生えてるとは思わなくてな。」

信繁はすまなそうにしまの・・・。

「ちょ！おまえ！」

「ん？何。」

ちようどしまは上着に手をかけたところだった。

「お前、女ならもう少し恥じらえ！」

信繁は顔を赤らめるとそのままうつむいてしまった。

「ん？ハジ？何それ？」

「……ああ……な。」

呆れた顔で向き返ろうとする瞬間ハツと何かを思い出し、下を向いた。

「ああ……。はじい。端っこねえ。」

「……さすがに……。それは……。」

「でもさ。」

しまは不思議そうに信繁の前に回り込みのぞき込む。その瞬間、しまから顔をそらす。

「お、お前なあ……。」

「水場、どこだっけ？洗えねえよ。」

その言葉に……。信繁はしまを見つめると、まだ服を着たままだった。

「それは裏手にあるだろ……。服……。脱いで行くなよ。坊主達がうるさいぞ。」

「よくわかんないけど……。分かった。」

そう言うと、走って裏手にしまは走っていった。

「ごどもは……。いいですよ。」

その声に振り向くと、天海がにこにこした顔で信繁を見つめる。

「それは……。どういう意味かな？」

「あの無邪気さ。子供は……。やっぱり無邪気がいい。」

「言いようによつては……！」

「まあ、ああいう子が安全に生きられる世こそ、平和な世ですな。邪気なぞ、私たちが……。十分だと思いませんか？」

「……。ま……。確かに……。」

軽く手にかけてた刀を戻すと、近くに腰をかけた。

「昨日は？」

「あれからすぐに戻り、寝ました。」

そう言うと近くの場所を見繕い、天海も腰をかける。

「確かに、ここは平和だ。だが、全ての場所が平和ではない。」

「私も、ここに来る前ではいくつもの争いを目にしました。だが、どんな報償も、子供達の笑顔・・・や、親子の笑い声はそんなに聞ける物ではありません。こういうのが普通になる世なら、きつとやりたことができる世になる事でしょう。」

「あんだ。こうなる前にやりたい事があったのか？」

「拙僧は・・・そうですね。・・・確かに・・・ありません。」

そう言つと天海は裏手の方を見ながら、考えにふけていた。その裏手からは水の飛び散る音が聞こえた。

「そうか。」

「強いて言つなら、あの方と一緒にだった事・・・あの方の願いが私の今の願いですから。だから今でもそうですね。駆け抜けている気がします。」

「そっか。それはいいな。俺にはそう言うのが無い。」

そう言つと、信繁は空を見つめた。空は晴れ渡り、その日差しは暖かだった。

「それはおもしろい。」

「俺は・・・親父に戦を叩きこまれ、上杉の旦那に寒い中を引きずられ、太閤の叔父貴のところへ、さんざん礼儀をたたき込まれ・・・」

「ほお。」

「それから叔父貴が死ぬ頃には城を出され、帰つてこれば戦の日々。勝つても結局は降伏し、親父は泣きながら、寺で死んでいった。そんな俺のやりたい事なんて・・・わかんねえよ。」

「それなのに何でそんなに必死そうな顔をするんです？」

「知らねえ。俺はわかんないけど、何かこう・・・みんなの思いみたいなのは分かる気がするんだ。だから、こう・・・何かしなきゃいけないかったんだ。」

「そう言えば、一昨日の夜、どうしてあんなに混乱したんです？」

天海は思い出したように言った。向こうでは何故か、水を掛け合うような音が聞こえてくる。そう言えば、子供らは休憩をしている

ところだったような……。

「あの日か……。あれは……。ちょうど、満月だったかな。その日は、叔父貴が泣いているのを見つけてすり寄ったんだ。」

「そんなことが……。」

「あの時、叔父貴がこういつていたんだ。」光秀……お前はこういつ時どうするんだよ。お前なら……。」とか言ってたんだ。だから、死んだと思っていた。」

「それはあ……。」

「それを裏切られている気がしてな。だから、やるせなくなった。

何か……思い出を踏みにじられた気がしたんだ。」

「それはすまない事をしましたな。」

「いや、生きている事は……関係ない。それよりも心の整理が付かない俺が許せなかったただけだ。」

”信繁サマー！”

「ご老体にあんな事をしてすまない。」

「信繁サマー！」

信繁が裏手を見つめるとびしょぬれのしまが子供達に追いかけていた。

「何してる。」

「いやあ、井戸とか言うのがあったから、服ごと身体を洗っていたらこいつら来て……。」

「なーに言ってる！お前水浴びて”チベタ！”とか言ってたから。」

「しるかよ。で、お前ら、水をこっちにばしゃばしゃ掛けてきたくせに。」

いつの間にか、信繁を挟んで子供達がにらみ合っていた。

「お前達。そろそろ住職が探す頃ですよ。戻りなさい。」

「あ……天海様。分かりました。」

そう言つと子供達は天海に一礼して、学堂のある入り口方面に走つていった。

「ぬるぬるはとれたか？」

「ああ。」

「なら、奥行つて着替えてこい。折角だから、一緒に習つてこい。絶対に字は覚えてこい。後悔はしないから。」

「あ……はい。」

そう言つと、しまは慌てたように寢床の方に向かつていった。

「いい子ですな。」

「ああ。いい子だ。ま、喧嘩つばやいのが玉に瑕だな。」

「それは……まあ……。」

照れた顔をした信繁を暖かく天海は見つめていた。

「お、信繁様。お帰りなさいましたか。」

声を見ると、本を抱えた算の姿があつた。

「それは？」

「ああ。この書庫にあつた本です。出来れば今日中に幾つかまとめておきたいので、お借りしてきました。」

そう言つと、算は両手に持った本を見せる。そこには幾つかの戦略書の姿があつた。

「大丈夫か？」

「流石に私は青海と違います。ま、暇というのもありますが、飲んだくれではいられませんからな。それにこういふ本はおもしろい。」

あ……そうだ。さ……信繁様。」

「ん？」

「食堂の連中が、信繁様の食事……残しておいたそうです。後で、お食べください。」

「分かつた。つて言うか、もうそんな時間か？」

「上をご覧くださいませ。では。」

そう言つと本を抱えたまま、算は奥に入つていった。空を見つめると太陽は頂点近くにあり、もう昼である事を示した。当時は一日2食なので、朝を食へ損ねるともう晩までは食事はなかつた。

「あ……。」

”お前！何やつてる！そんなトコで脱ぐな！”

”よく分かんないけど、何かあるのか？”

”恥を知れ！恥を！端で着替えてこい！端で！”

”ハジハジハジハジ・・・うるさあーい！”

「確かに飯は忘れてた。」

「行きますか。」

そう言うのと二人は立ち上がり食堂のある裏手に歩いていった。

「遅かったな。」

食堂に着いた二人を待っていたのはお椀の飯をおいしそうに頬張った半蔵の姿だった。

「……………」

二人は啞然となって見つめていた。

「半蔵殿……………」

「いやあ。食堂に来るとちょうど飯が置いてあったのでな。おいしく頂いておいた。カピカピにするのはもったいない。そうだ。相変わらずここの飯は旨い。まだありますかな？」

「いや、まあ……………」

後ろの掃除中だった坊主達の顔は何か呆れていた。

「それ…………おれのじゃあ……………」

「なら遅かったな。惜しかったな。感謝。」

そう言うのと半蔵は膳に向かい手を合わせ、合唱をした。

「で、何のようだ。」

不機嫌そうに半蔵を睨みつけていた。

「そろそろ起きた頃だと思って参った。拙者もまた忙しいのでな。」

「…………俺の昼飯食うやつがか？」

「…………しつっこいな。嫌われるぞ。」

半蔵も半眼で信繁を睨む。

「食い物の恨みは恐ろしいという。あまりそう言う恨みでも買いに行く物ではないか？」

「確かに。」

そう言うと半蔵は立ち上がり、懐から何かを取り出した。

「これは？」

「干し芋。結構旨いぞ。」

そう言うと、幾つかの茶色の固まりを取り出して手渡す。それを信繁は無言で口に入れた。

ふと、故郷の事が思い出された。ちょうど芋が乾いた頃に親父は嬉しそうに持ってきたっけ。

「おぬし……これ……。」

「俺の田舎とかだと、これは非常食だな。いつも幾つかは持っている。どんなときでも生き残れるようになる。」

「そうか……。」

そう言うと干し芋を口の中に入れる。かみしめる味はいつもの・微妙に残るほのかな甘みだ。

「今夜、江戸城の門番には話がつけてある。正面から来い。そこで待っている。ただし、あんた一人だ。」

「わかった。」

そう言うと半蔵は立ち上がり、つかつかと外に出て行った。

「あ……あの……。めし……。」

「ん？」

「どうした？」

天海は不思議そうに坊主の方を見つめた。

「半分ぐらい残ってますから、軽い物……お作りしましょうか。」

「すまないが頼む。」

「ワシの部屋で頼む。」

「はい。」

天海はそう言うと振り返り廊下をすたすたあるいていった。その後を黙って信繁はついて行った。

「どうなさいました？」

「まあ、折角だから、一緒にどうですか。」

「ま、いいが。」

そう言うと天海は近くの部屋に入る。

「おおかた……。」

「分かつてはいる。どっち向きでも覚悟ぐらいはしている。」

「まあ……私もどっち向きでもかまわないと思います。半蔵殿から聞かされる内容は、今まで前提を覆すほど物でしょう。それを聞いた後の決断はあなたにお任せいたします。」

「知っているのか？」

「まあ。」

落ち着いたように座布団を取り出し、信繁の前に置くと、自身も座布団を置き、その上にすくと座った。

「大方は。」

「ただ、私はあなたが気に入り申した。だから……。」

「すまない。」

信繁はその言葉を聞いた瞬間、頭を下げた。

「ん？」

「どうしました？」

不思議そうに天海は、信繁の顔を見つめた。

「俺は……あんたの言うような……気に入られるほどの立派な男じゃあない。上杉の旦那も、叔父貴も、あんたも……みんな……そう言う。俺に……！俺に何がある！」

「……。それですよ。」

天海は落ち着いた顔で見つめてきた。

「普通の人間は気に入ったと言え、喜び有頂天になりました。ただどあなたは違う。」

その言葉にじつと信繁は唾を飲んだ。

「それに重圧を感じ、悩める人間だからこそです。後……もう一つ言うなら気に入ったいらぬは私の自由。あなた様ではありませんん。」

「それは……。」

「相手がどういおうとも、あなた様はあなた様であればいいのです。」

だからあえて申します。もし気になさるようなら、それだけの活躍をこれからなさればよい。お世辞の1回や2回で一喜一憂するようなら、それだけの者だったと言ふ事です。」

「・・・分かった。」

「すみません。お持ちしました。」

「ああ。ありがとう。」

そう言つて信繁は膳を受け取り、たくあんと冷めたご飯を口にしました。その時のたくあんの味は少し・・・いつもよりしょっぱかったのを覚えている。

「よお。信繁・・・殿。どうした？」

部屋に帰つてきた信繁を一番に迎えたのは青海だった。

「あれ、算は？」

「ああ。俺をたたき起こした後、どっか行きやがった。」

「そうか。で、どうした？」

青海は信繁の神妙な顔を見つめていた。

「少し・・・出掛けてくる。頼んだ。」

そう言つて信繁は背を向けた。この頃には夕方でもう日は暮れかかっていた。

「・・・ちよつと待て。」

青海は少し声を荒げていた。何かに気が付いたようでもあった。

「どこ行く気だ？」

「いやあ・・・ちよつとな。」

その信繁の声はどこか上の空で、声に張りはなかった。

「あんたは俺たちの親分だ。どこに行こうが気にしねえ。だがな、一人で背負い込むのだけはやめろ。」

「・・・ああ。」

「行ってこい。予想は付く。半蔵だろ。行ってこい。ただ・・・。」
「何だ。」

「危ないは助けに行つてやる。だから。安心して行ってこい。そし

て・・・そんな不吉な事は決して言っんじゃねえぞ。」

「分かった。」

そう言つと、走つて信繁は去つていてしまった。その背中は・・・何かを振り切つたそんな感じだった。

「ん？青海。」

算は廊下をゆっくりと歩いてくる。その手には大量の本が積まれていた。

「今、誰か走つていかなかったか？」

「ガキじゃないのか？それよりも飯はまだか？流石に腹がすいちまつてな。」

「そう言えば、今日、私が腕を振るつのでな。懐かしの味噌鍋だ。今日は。」

「そつか。今日は味噌鍋か。今日は楽しみだな。」

そう言つて青海は舌をなめずる。

「信繁様が帰つてこれば、喜ぶだろうに。そつだ。信繁様はこつちに来なかつたか？」

「・・・いや。知らんな。それより今日は早く飯にしよう。朝から飯を食つておらんのでな。」

「こちらでお待ちください。」

「分かった。」

信繁が頷くと、兵士はそのまま歩いて帰つた。外を見渡すと、遠くには明かりがついた大きな船があつた。信繁が江戸城の門番に案内されたのは、外壁に建てられた兵士詰め所だった。中の戸を開けると、番所みたいな簡単な置作りとなつており、その縁に座ると、何気なく見渡していた。明かりなどが備えられ、城に目を向けると、城の明かりは煌々と照らされていた。

「待たせたな。」

戸の方を見ると幾つかの書面を抱えた半蔵の姿があつた。手には包みと酒が握られていた。

「どうしてここに？」

信繁は不思議でならなかった。内部仕事を仕掛けるなら、普通城内に入れる物だ。

「まあ……な……。秀忠様はな……。器量がある程度狭いのでな。」

半蔵は荷物を信繁の目の前に積みかさねた。

「……。そうなのか？」

「昔、関ヶ原の後で降伏したときにお主らの首を斬れと言い出したのが、秀忠様じゃ。押しとどめるのに時間がかった。だから、もし見つければ、速攻でお主の首が飛びかねない。」

「確かに。」

信繁はふと九度山を思い出す。あのとき聞いた徳川方の大将が秀忠だった。あの時に戦功を立てられなくて、窮地に立たされたとは聞いていたが。

「だからこういう所しかなかった。すまない。」

半蔵は軽く頭を下げる。

「気にしないでいい。だが用とは？」

「本来ならお主の連れ達も連れてこさせなければ何か勘違いされるとも思っただが、これだけは知られる人間の数を最小に留めたかった。」

「そう言うと半蔵は包みを開けた。そこには乾物の小魚があった。

それを信繁の前に置くと、酒をお猪口についだ。

「で？」

「お主に伝えたかった事……。それは……。宣教師の陰謀についてだ。この話、流石にここでなければ、伝える事は出来なかった。」

「そうか。」

「先日、本能寺の変は聞いたな。あれには続きがある。それは、その時報告を受けた秀吉殿の周りの人間に不思議な人間達が増えていった。当時、織田家という困いしかない小国の大名ともいえる各武将達は一度集まり、領地を再編した。だがこの後、どうも相変わら

ずの手紙操作や偽手紙などで攪乱を始めた。この頃私たちはある噂を耳にしていた。」

その間も信繁は周囲の監視を怠る事はなかった。

「ジャワ王国が、内乱の末滅びたという物だった。しかもその後、ポルトガルに占領された。それを聞いた我々は、先に海外に出た日本人達を通じて、調査を行った結果、ある事が判明した。」

「内乱で疲弊させ……。又は都合のいい国だけ残して……。占領。」

「そうだ。その後の按針の報告では、我々が考える宣教師の神とはなんだ？」

「ん？それは……。デウスか、基督……。」

「それを按針は不思議がっていた。按針の国も基督教を信じてはいたが、デウスという物は知らないそうだ。」

「ん？」

「単純に言えば宣教師でも二種類いる。そして……。一方は……。」「偽物……。か。」

「だが、ここから様子はおかしくなる。どうも、毒殺などをしてきたのは……。本物の方だ。」

「は？」

「どうも彼らは自分の思い通りの国を作る為に国を破壊するのを厭わないらしい。」

「坊主達とは全く違う考え方だな。」

「で、そいつらは、最大勢力である織田家の勢力を削ぐ為に、最初にわざと手紙で攪乱を行い柴田勝家達のいる北陸を狙った。そして文字通り、壊滅した。」

その言葉に信繁は黙ってしまう。ちょうどその時には大阪にいたからだ。

「……。ん？全滅？あの時……。淀君は残ったのではないか？」

「それが……。秘密の一だ。どうも……。我々が不審に思い調査したとき、城の武器庫周辺で、子供達の死体を発見した。しかも三体

だ……。」

「え……。」

「そう。我々の推論が正しければ城の爆破の際、逃げ出した者はいなかった。と言うのも、城の隠し通路は何故か土で埋まっていた。」

「だがあの時三人は救出されていた。」

「それが問題なんだ。その時幾つかの部下達とともに三人は救われていった。だがこうとも考えられる。元々すり替える気なら……あり得ると。」

その時信繁は愕然としてしまった。どう見ても半蔵が嘘をついているように見えなかった。

「どうしてそこまでする必要があった？」

「あの報告以来、秀吉は扱いやすいと考えられ、そのためにつけ込まれたと思われる。」

そう言うつと資料の一部を取り出すと、信繁に手渡した。

「すまない、母ちゃん達を頼んだ。日々城の中が怖い。俺が狙われたのだ。」

この手紙の筆跡に覚えがあった。これは、叔父貴の物だ。

「これは、母上殿が来たときに髪留めに縫いつけられた手紙だ。」

母上というのは秀吉の母の事だ。

「その前後に何故か大阪城に来るように秀吉から頻繁に手紙が来るようになっていた。本来この二人は信頼関係があつく、信長様がいるときには何かの祝いや相談時には、いの一番に駆けつけるほどの仲良しだ。本来来なくても気に掛ける話ではない。」

そう言うつて大きめの書状を見せる。そこには確かに太閤の判子はうたれていたが、筆跡は……少し違っていた。

「ということは……。」

「そう、あの連中は家康様を誅殺する気だったのだ。実際謁見に向かった時に確認もしたが、そのような手紙を出した事はない……そうだ。」

「そうか。ちょうどその頃には何故か俺とかも領土に戻されていた

「からな。」

信繁はあの怖い太閤の顔を思い出ししていた。

「そして、その時に確認したところによると、この頃の太閤は何か決めようとすると部下に阻害され、ほぼ一人では決められなくされてしまった。」

・・・。

「そして秀頼様が生まれた・・・。」

「これもどうも様子がおかしい。わざと太閤殿に会いに行ったとき、変な話を聞いた。それは色々警戒してか、淀君の部屋にさえ近づかなかった秀吉殿との子供が淀君に宿ったのだ。」

「は？」

自分も子をなした事があるから分かる。相手とふれる事が無く子を成すという事はあり得ない。

「ま、キリシタンの連中はばかばかしくもこれも神の子だとかのたまい、あり得るとか言っていたが、それに勘ぐった我々は調べる内に、大方その子は不倫の末に出来た子だという事が判明した。」

「それは・・・。」

最早、それは淀君が謀略の末にやりたい放題していたという事だ。

「それを我々は太閤殿に伝えていた。だがあの方はこういったよ。”あの子は誰の子だろうと関係はない。このような世界で唯一愛せる事が出来る物が出来たのだ。誰の子でもワシの子だ。”とな。」

その頃には信繁の頬に涙が伝っていた。確かに俺も確かに言われた事がある。

「俺も驚いていたが、もうそれ以上口を出す事はなかった。それからもキリシタンが徐々に豊臣家に入り始め、そしてあのようになってしまう。」

「そして、傀儡化させた豊臣家から金とかは船で外国に売り渡され、数多くの資産は海を渡った。」

「それが本当なら・・・。」

「だが、秀頼様を傀儡に淀君が権力を握ればどうなるのか、それは分かり切っていた事だ。我々が戦ってきたのはそんなわけも分らない奴らに国を盗られる為じゃない！だから、無理矢理でも喧嘩をふっかけた。」

「それが・・・関ヶ原・・・。」

あのころはお互いが疑心暗鬼となり、戦国大名の命運が決まったともいえる一戦だった。

「その話を父上が知っていれば結論はちがっていたかもしれないな。」

こんな話、信繁には大きすぎて信じられ・・・いや納得できるところが幾つかあったので、何となく頷いていた。

「その後の情報はまだ集めきれしていない。一説には妖怪を呼び込んだだの、様々な噂があり整理に時間がかかっている。」

「と・・・言う事は・・・もしか俺を妖怪なんかだと思ったのか？」

信繁は何となく思い当たる節を探してはいたが思い出せなかった。

「それはない。」

「は？」

「最初の真田のおじさんが来たときにある確認をしてもらっていた。本物かどうかだ。」

「え・・・あれが？」

そう言えば何か様子がおかしいと思っていたが・・・それか。まず本人かどうか確認を取っていたのか。納得がいった。

「だから二回目では、人間性を試させてもらった。」

「はは、とんだ笑い種だな。散々試されていたわけだ。半田山もか？」

「あれは・・・予定外だ。予定は普通に歩いて行くだけだった。だが、あのような事になったのは自分でさえも悔しい。」

半蔵はそう言うつと自分のお猪口についだ酒を一気に煽った。

「そこでお主に頼みたい・・・。」

「断る！」

その瞬間、半蔵は啞然となった。

「……何を言っているのか分かっていいるのか？」

「例えそうだったとしても、家族は今、大阪で俺の帰りを待っている。そして俺の少なくともかけがえのない家臣達が大阪にいる。そのような状態で、そんな奴らの元にいるのなら、なおさら裏切れば殺される可能性が高い。」

「……流石真田殿だ。……確かに家臣に裏切れとは……言えないか。」

「例え、裏切ったとすれば最早相手も手段を選ぶまい。内部から押さえる者が必要ではないか？」

「確かに……。もう説得しても無駄だろう。」

その瞬間、周囲から殺気が放たれるの信繁は感じていた。そのざわめきは周囲を多い、今にでも襲わんばかりであった。

「そう言えば、あの時帰してくれると言ったよな。あれは嘘か？流石にそれを違えるなら……」

「退け！」

そう言い、半蔵が手を挙げると殺気は何故か退いていった。その言葉に刀に掛けた手を元に戻した。

「元よりお主を殺すつもりは毛頭無い。例え捕らえてもすぐに抜けそうな男に縄なぞ無意味。」

そう言つとあきらめた顔をして半蔵は信繁を見つめた。

「だが……あのような女に忠誠は無意味。」

「分かっている。こつちとかは単なる兵士にしか見ていないだろうよ。今まで散々忠告とかしても聞き入れた事はないからな。だがな、それでも今できた家族を棄てるのは出来ん。ま、戦争が終わったら、手助けでも何でもしてやる。今少しはまってくれ。」

そう言つと信繁は立ち上がった。その戸を開けるともう外は真っ暗だった。

「そこまで明かしてくれた事に感謝する。では。」

そう言つと、信繁は歩き始めようとした。

「しばしまたれい！・・・せめて出口までは案内する。こっちだ。」
そう言つと半蔵は走つて信繁の前に躍り出た。詰め所には空のお猪口と手のつけられていない小魚・・・そして一口も手のつけられなかったしびれ薬がそこにはあつた。

信繁はゆっくりと歩いてきた。月は少し欠けていたが美しかった。
・・・あんな話をされて俺は何をすべきだ。叔父貴の仇か？信長殿の仇か？言つては悪いがそれも戦場の習いだ。

どうと言つ事はないが・・・でもそれでも俺はどうしたらいいのか・・・。

「信繁さまー。探しましたぞー。」

暗闇の武家屋敷通りに声が響いた。

「算。どうした？」

「どこに行つてらつしゃつたのです？探しましたぞ。」

「いやあ・・・月がきれいでな。つい散歩しておつた。」

そう言つとほつとした顔で算を見つめていた。

「今日は、信濃の味噌鍋。拙者が腕によりを掛けた物。そろそろ奥方の料理が恋しいでしょうが今日は拙者ので元気になってください！ささ、冷めてしましますぞ。」

そう言つと信繁の袖をひっぱり、算は小走りで寺に向かつていた。つい信繁の顔に笑みが生まれた。こういう事が幸せな事だとこの時初めて感じたのだつた。

第四節 半蔵が見せたかった物（後書き）

一度不手際で消えたため復旧に遅れが出てすみませんでした。

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か（前書き）

半蔵に答えを突きつけ帰った信繁は江戸脱出を図朗と一度仲間の元へ。そして待っていたのは・・・。

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か

信繁は、ゆつくりと目を覚ます。昨日一日、あまり眠れなかった。ここは江戸城の側。本来ならいつ殺されてもおかしくない敵の本拠地。しかも相手はこちらの位置まで指定している。殺そうと思えばいつでも殺せる。そう言う状況なのだ。だから、仮眠だった為、昨日や一昨日みたいな熟睡感はない。

「お早う。信繁様。」

朝早く、眠そうな顔をしてしまが目を覚ます。

「はえーな。」

その声に顔を向けるとそこには、青海の姿があつた。近くの柱に寄りかかり眠そうな顔で、ひょうたんに入った酒を煽っていた。

「お前。起きてたのかよ。いつもはもつと寝ているくせに。」

「口の利き方には気をつけな。せめて青海おじさんと言え。」

そう呆れると青海は近くの布団に潜り込む。

「どうだった？」

青海の少しいつもとは違う緊張した声が布団の中から聞こえる。

「これが結果だ・・・。」

「そっか。あと少し寝るから後は頼んだ。」

そう言うつと青海は沈黙した。

「ん？何言ってるの？」

しまは不思議そうな顔をした。

「いいのさ。俺はもう少しここで庭でも見てる。お前は字でも習つてこい。」

「わかったよ。」

そう言つてしまは学堂に走っていく。向こうではいつも通り、寺の坊さん達が掃除をしている最中だった。

「お早うございます。ああー。昨日の鍋旨かったですな。」
「そうだな。」

そう言うと内側を見ると算が服を着替えている最中だった。

「頼みたい事がある。」

「はい？」

「半蔵の用件は終わった。だから、出立の準備だ。」

「は。」

その言葉に、着替え中でも算は立て膝を付き、かしこまる。

「ここにいる内は大方天海殿を気使って来ないだろうから、準備ぐらいは出来る。そこで、2週間分の物資の調達を頼む。」

「！。。。は。人数は3人ですね。」

算は全てを理解したように頷くと覚悟を決めたような顔をした。

「いや。。。念のためだ。4で頼む。」

「了解しました。」

そう言うと、算は持ってきた旅でもってきた道具を見渡し計算を始める。元々、算を旅に連れてきたのは護衛の為ではなく、計算が得意な為だった。そのためこのような任務が得意なのだ。しばらく、道具の確認をすませるとそくささと着替え、算は外に出て行ってしまった。

「おまえ。。。なに。。。あるんだ？」

気になったんだろう、算の表情を横で見ても不安そうに遠目から覗き飲んでいた。

「ん？まだいたのか。」

「ああ。」

不安そうな顔をして信繁をのぞき込むがその表情はいつも通りだった。

「どうしたんだ。お前ら。何か。。。こう。。。いつもと違うぞ。」

そのしまの顔は不安に満ちあふれていた。

「ま、いつもはこのぐらいの空気なんだが。。。気にするな。お前は気にせず行ってこい。」

「え……信繁様……。」

「行ってこい。」

その信繁の少し強い押し切りに渋々学堂に歩いていった。信繁は立ち上がると、庭の縁を歩き始めた。これ以上ここにいればしまがまた泣きつきそうな気配だ。だが、そう遠くに離れるわけにはいかない。

「どうするか……ん？」

ふと、庭を歩いていると、棒を振る少女の姿が見えた。当時、女性であっても護身用に剣を習わせる言えも多く、棒などを振るう少女自身は少なくはない。ただ、その場合でも父親とかの親と一緒に事が多い。しかも今は朝も早い。

「どうした。」

信繁は声を掛ける。

「ん……。おじさん。」

眠そうな顔をしてこちらに顔を向けるとその顔に見覚えがあった。来た当初にいじめられていた子だ。

「あ……。そうだ。おじさん。けん……。おしえてくれよ。」

「それが。振ってみろ。」

そう言つと、近くの地面にどかっとな腰を据える。その様子を見て少女は棒を振ってみせる。だがその様子は剣の素振りとは遠く、棒を振っているとしか感じられない振り方だった。

「……。どうして……。剣なんてやってみたいんだ？」

「いつも……。みんなに……。イヤな事されて、嫌なだけだ。だからなんか……。できないかとおもった……。だけだ。」

「そうか……。それは大切だぞ。」

そう言つと信繁は剣を向いた。業物の一つで村正の中でも傑作の4つ振りの一つ”四法院”と呼ばれる刀で、当村上客だった真田家に献上された物だった。むろん後でお代と、鉾物使用の権利を与えられている。その傑作の一降りは戦場を意識された一本で、その刃先は太く、どんな甲冑でも割ってみせる剛刀だった。それを少女の

側で構えると、何も無い外の方に向ける。

「見てる。これが・・・武士の一振りって奴だ。」

そう言うと、刀を上段に構え、その場で一瞬身体をこわばらせた。次の瞬間足を半歩揺り出すと刀を高速で振り下ろす。

「ん！」

その衝撃で少女の髪が巻き上げられ、周囲の草が波を立てそのざわめきが周囲にとどろいた。あまりの刃風に少女は目をつぶってしまった。開けた次の瞬間には何事もないように見えた。だが、その空気の振動は周囲にまだ影響を与えている・・・ように見えた。

「す・・・ご・・・い・・・。」

ふと気になった少女は地面を見つめた。地面には刃風で出来たであろう刀傷が地面にくっきりとついていた。

「本気の素振りだとこんなもんだ。どうだ。分かったか。」

信繁のその言葉に少女は首を横に思いつきり振った。その顔はさすがに青くなっていた。

「・・・ま・・・そうだよな。」

ぼりぼりと信繁は頭をかく。

「まずは構えてみる。」

「は・・・はい。」

そう言うと少女は急いで立ち上がると手に持った木の棒を構える。

「ふーん。そこからいくか。」

そう言うと少女の肩を掴むと片方を無理矢理引きずり、身体を半分傾かせる。

「まずはそのの体制のまま、振ってみな。」

その言葉に頷くと少女は振ってみる。少しだけ力がこもっている・・・気がする。

「その感じを忘れるな。ただ、そのままだと、剣を振っても当たらん。」

そう言うと信繁はまた構える。その姿に少女はびくっと身体を強張らせた。

「見ている。」

その様子を見ながら刀を納め、足のみを踏み込む。その踏み込みのあまりの強さに少女は唾然としてしまう。

「この踏み込みに力を入れられれば振った彼方に力がさらに入る。振ってみる。」

「は、はい。」

少女は慌てて構え、振ってみせる。その様子はぎこちないものの少しは様になっていた。

「もう少し踏み込みを。」

そう言うと少女の前に回り込むと肩をがっしりと掴む。

「よし、足裁きだけ、剣を振る感じでやってみる。」

「は……はい。」

そう頷くと勢いつけて身体を前に押し出す。それを信繁は両手でがっしりと受け止めていた。少女にしては……女にしては……この年にしては……強い打ち込み。その熱い思いをひしひしと感じていた。

「お前……変態か？」

その声に振り返るとしまが呆れた顔で立っていた。

「ん？」

「何か様子が変わったけど……恋人がいないのは分かるが、そこまで小さいのを手込めにするのは……。」

しまは何か汚いものを見る目で信繁を見ていた。

「手込めってなんだよ。ただ……。ま……。だからな？」

「リッスン……。？てごーめ？なに？」

「ま、いっか。関係ねーし。そうそう。天海様が呼んでたけど……ま、ほどほどにな。」

そう言うと、しまは向き帰り、一目散に走っていった。

「何考えてるんだか。」

そう言うと改めて少女の方を見る。

「これで基本は終わりだ。後は……。がんばれよ。」

そう言つと信繁は肩のほこりを払つと、すたすたと宿坊の方へ歩いていった。

「昨日はどうでしたかな？」

天海は落ち着いた顔で茶を点てながら、信繁の顔を見つめた。

「ま、流石に私には家族がいてね。」

そう言つとじつと胸を張り老人を見つめた。

「……。そうですか。確かに家族がおられると色々充実してそうですね。」

天海はそう言つと茶を入れた器をそつと信繁の前につきだした。

「息子さんとかはおられますか。」

「ああ。いる。ちようど一歳になるかならないかだ。」

「そうですね。確にかわいい盛りですな……。お飲みにならないので？」

そう言つと茶道具入れからそつと干し柿を取り出すと、先ほどの茶の横に器ごとやんわりと置いた。

「……ちようど子供の事を思い出して……。」「

天海はその一挙一頭足をじつと見つめていた。

「大丈夫。私はあなたの考えるような野暮な事は致しません。」

そう言つと天海は差し出した茶器を手に持つと少し口に含んで見せた。

「分かった。頂くとしよう。」

そう言つと覚悟を決めたように信繁は茶をぐつと飲み干した。

「どうですか？お味は。」

「なかなかのお手前で。」

そう言つとそつと茶器を天海の前に置いた。

「半蔵殿はどこまで言いましたかな？」

「……。浅井の方の事ぐらいは……。」「

「それ……ですか……。」「

そう言つと天海は遠い顔をした。

「まあ、このご時世です。どれが正しく、どれが間違いかはあなたが判断されるとよい。」

「。。。。。」

その言葉に信繁は押し黙ってしまふ。そう、少しおかしいところもあるのだ。

「あなたはもしかして。。。。。」

「どうかされましたかな？」

「もしかして、あなた様はそれほど家康殿の事。。。。。」

「それはどうか分かりません。ただ。私からすれば、お市の方の娘さん達は生きていて欲しいのです。ま、他愛もない願いですがね。」

「そういうもんかね。」

「私にとってはどちらも昔、大恩があるお方。その家族だけでも願うのはやぶさかではありません。」

「そっか。」

「でもまあ。。最近には本当の事に思えてなりません。」

「？」

「最近のあのお方は何故か様々な陰謀を。。いやこれは他家の方であるあなたに言う事ではありませんな。」

そう言つと落ち着いて自分の分の茶器に茶を注ぐと、ぐつと飲み干した。

「私はある意味死人。いつ死んでも惜しくはありませんが。。。。。」

「そう言うものか？」

「私はこういう局面の時ある言葉を覚えていきます。そのお方はこういう風に言っていました。」

”何も信用できない時はなあ！感で行け！自分を信じて前に進め！何か起きる！”

その言葉に弾けるように信繁は笑った。

「それ以来、人事を尽くしたその時は、私は何も考えず、勘で行くようにしました。」

その言葉に更に信繁は笑ってしまった。何を自分はしているのだ

るうか。

「私はあなたの事を気に入ったと申しました。私はただ、気に入った人間を失う事はないように・・・ただ・・・生きるばかりです。」
そう言うところじつとこちらを見つめた。

「分かった。」

そう頷くと立ち上がる信繁の顔は晴れやかだった。

「ありがとうございます。天海僧正。」

そう言うって信繁は障子を開け放ち、足早に去っていった。

「・・・まだ伝えたい事が・・・ま・・・この方があの方らしいのですが。」

そう言うつと天海は立ち上がり戸棚を探り始めた。

「よ。」

朝焼けも近いとき、青海は眠そつな顔をして信繁を見つけた。

「よう。よく眠れたか？」

信繁は剣を一振りすると青海に向き返る。

「ん。大丈夫だが、お客さんとかは来たのか？」

「それはここにあの人がいる限りはな。」

「そっか。」

頷くと青海は近くの庭の石にどかつと腰を下ろす。

「結局どうなつたんだ？」

「ん。断ってきた。」

明るく言うその言葉に後悔の文字は微塵もなかった。

「そっか。ま、予想通りだわな。で・・・どうするんだ。」

「ここに陣があると見積もっていたのだが、それはここにはないようだった。しかもあの様子では見せる気はない。」

「ならどうするよ。見に行くか？」

「大方偵察がばれないように各地の兵を集める手法をとると思う。」

偵察は大方無駄骨に終わる公算が高い。」

「ならどうするよ。」

「今それを考えている。一番簡単なのは北だと思うが、敵の数も多い上に山を最低2回も超えるのはきつい。」

「でも生きて出るのが、一番だぞ。」

「でも時間が間に合わない。予想が正しければいつでも出立できる準備を行っている。駿河（現在の静岡県静岡市周辺地域）周辺に部隊を展開しているなら、到着（大阪城に部隊展開終了）までに各地の部隊集合を合わせ、全部隊到着終了後一月はかかる。それまでにはつきたい。」

「その条件だと突っ切るしかないぞ。」

青海は髪はないものの頭をかきむしる。北に抜けて日本海まで出て、魚津に向かいそこから船に乗り、丹後につきそこから南下して今日に入り、そこから大阪に行けそうと言えば行けそうだが、そのためには徳川方に付いている上杉領を抜ける必要があり、それが難関でもあるが、駿河の本陣を抜けるよりは多少は楽だ。だがリスクが多いのもまた事実だ。

「だから考えている。ま、とりあえずは北だ。行ってから考えればいい。」

算がそつと音を立てないように現れる。背中には背負子を背負い、一見すると修験僧にも見える。

「準備出来申した。とりあえず集められるだけの食糧とわらじなどの旅道具は集め申したが、これで足りるとは……。」

「一週間分ならどこかで調達すればいい。」

「で……今から出発か。だから……。」

「まあな。」

朝も薄暗く、大阪を出立した日を思い出してしまふ。違いと言えば霧があるか無いかだ。

「あいつはどうする？」

そう言っ部屋の中を見ると、しまが一人で寝相悪そうに寝ている。

「あいつもここにいればきつといい草になれる。それにきつとどっ

ち向きでもあいつの出番は増えるさ。だから気にしないで置いていく。」

「了解。」

そう頷くと三人は立ち上がると正面に向かう。

「江戸はどうだった。青海？」

「まあ、悪い町ではないがこう・・・あの懐かしき大阪の雑多に比べれば、おとなしくて物足りんな。」

「青海にとつてはだろ。私には・・・ま・・・ちよつと本が寂しいですな。昔いた京都とかに比べれば・・・まだまだですな。」

「俺は・・・まあ・・・好きには好きだが・・・いくか。」

そう言つと栓抜きを開け、門を開ける。

「・・・。」

目の前には天海と半蔵の姿があつた。

「は？」

算はあまりの事に啞然となつてしまった。

「昨日・・・お伝えしませんでしたな。お見送りの為、しばらくはついで行こうかと思うと。ただ、急な出立なのは分かっていましたから、支度はしておきました。」

天海はにこりと焦る三人にほほえんだ。その姿は旅仕度らしく三度笠を持ち手荷物を抱えていた。

「でも・・・まあ・・・半蔵殿は意外でしたな。」

「ふん。言つたはずだ。お主を殺す気はないとな。」

半蔵はそれらしい旅道具らしい手荷物は持っていた。だが三人に緊張は走っていた。

「ただで付いていく気はない。」

そう言つと、三人の目の前に書面を三つ投げつける。

「これは？」

「手形の書状だ。内府様直々だ。これでほとんど全ての関所は通れる。」

”え・・・。”

確かに信繁達は獣道を使い多めの日程で行く気はしていた。だが、これがあれば相当に短縮が出来る。街道を安全に通る事が出来て、しかも道は選り放題だ。

「これは？」

信繁は不思議そうに半蔵を見つめる。

「拙僧の分も……。」

「本来なら一条あれば全員通れる。気に召されるな。」

天海の言葉に半蔵は露骨に嫌そうな顔をしていた。

「どうして……。」

「言ったであろう。お主が帰るまでは攻めはせぬと。だから出立の日の朝に早馬をとばし、内府殿には、攻めぬように連絡はしてある。だから……。」

「は!？」

流石にこれに全員が絶句した。

「本来なら大阪城の工事後、すぐに攻める予定であった物を、お主の為だけに待ってもらっておる。」

「いや……。だから……ほんとうにしたのか？」

信繁すらもあまりの意外さに驚いていた。わざと意気込みを調べる為にやってもらっていた物を本等に真に受け行うとは思えなかった。

「それが”約束を守る事”だ。」

流石に全員が啞然とした。

「流石に拙僧でも……驚き申した。」

「まあ……これぐらい出来なくては三河武士の名折れ……との言葉も頂戴してある。」

「流石に……それは……。」

寛達も驚いていた。今までであった武将の中でもこれだけスケールのでかい事は初めてでもあった。

「だから、せめて出て行くまでは見定めねばなるまい。」
半蔵はにやりとするとぐっと拳を握った。

「お前ら、おれえ、置いてくなんて・・・なんて薄情な！」

しまの顔を見ていると・・・うつすらと涙をにじませていた。

「お前はここで勉強しながら草を目指せばいい。俺たちはこれから・・・死ぬかもしれん。そんなのに付き合わせられるか。」

信繁の言葉にしまの顔は更に赤くなつた。

「それは仕えるちゆうー事には何ねえぞ？だかつてそんなに信用出来ないか？」

「そうじゃないが。」

算は慌てて否定する。

「なら・・・連れてけ。それが・・・俺が村長から受けた・・・任務だ。」

そのしまの強張つた顔の裏に頬をふるふるすると震わせ、ちらちらとこちらの表情を伺うしまの姿があつた。

「分かつた・・・なら付いてこい。お前ら・・・全員！」

そう言つと、信繁はひとかたまりの人々を押しつけ、北に向かつて歩いていった。それを走つて算達が追いついてきた。

”もしかしてこれを予想してあれを・・・。”

算は近づいて耳打ちした。

「なんとなくだ・・・なんとなく。」

そう言つと後ろを振り返る。そこには数多くの人間がいる。

”感で行け！感で！きつと何かが起きる！”

その言葉が頭の中をこだましていた。

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か（後書き）

少し短めでしたが、いかがでしょうか。只、不手際で、投稿が重なった事をここでお詫びします。

第六節 徳川家康という男（前書き）

真田御一行は只とりあえず北へ向かった。だが無目的に見える真田御一行に何者かが近づいて来る。それは・・・。

第六節 徳川家康という男

第六節 徳川家康という男

本当に真北に向かった真田信繁一行は朝は、話しながらのゆっくりとした歩みで、しまや少女に様々な事を大人達が聞かせながら歩き、夜の宿泊では半蔵が、子供達に武術や技術を仕込む様子を信繁達が酒を飲んで見た。そう言う旅だった為か、普通の旅人よりは遅い歩みで北に向かっていた。と言うよりも全員が天海の身体を気遣っていた。流石に齡九十を超えるご老体である。気を遣わない者はいなかった。

「でもまあ・・・これはこれだな。」

青海はゆっくりと宿から街道を見つめ、つぶやいた。ちょうど二階を一面借りていた彼らにとって下を歩く人々は、せわしなさそうに見えた。

「どうしたんだ？青海？」

不思議そうに信繁が聞き返す。

「今まで何というか、行き急いでいたからな。こつゆっくりとした時間も悪くないかと思えてきてな・・・。」

「お前らしくもない。」

算の呆れた顔ではあるがその着物は着流しであり、宿で提供された物だ。

「風呂・・・入って来いよ。滅多に入れん。」

「いやあな。半蔵はどうした？」

「あの方なら・・・。」

「よ。拙者の事がお気に入りなら、そう言えば。」

笑いながら入ってくる半蔵の手には川魚が握られていた。

「それは？」

「ああ。近くの漁師に掛け合って酒の肴をゆずってもらった。」

「いいのかよ。」

呆れた顔で半蔵を見ながら笥の背負子の中に手を突っ込む。そこには酒の瓶が一本とっついてあった。

「でもまあ……いつも思うのだが……お主……ワシ以上の飲み道楽……食い道楽だのう。」

青海が呆れた顔で半蔵を見つめる。確かになんだかんだ言っつて半蔵は食料の調達に事欠かない。

「まあな。生きている楽しみの一つだ。気にするな。」

無邪気に笑い、七輪を外側に起きながら火種を取り出す半蔵の姿は無邪気そのものだった。

「おい。でたぞ。」

そう声が聞こえてくると、下の階から一気に駆け上がってくる声に半蔵は邪魔されたようなむっとした顔になった。

「早いな。」

「ああーな。あつついのは苦手じゃ。」

「待ちなさい。まだ頭拭いてないですよ。」

天海僧正の慌てた声が聞こえる。こういう声が聞けるのもまた、この旅の醍醐味だ。

「ま、そう言う事だと思った。」

呆れた顔で立ち上がると、半蔵はふすまを開けるとちようどふすまに手を掛けようとしたしまの姿があった。頭は……何とも言えないほどにぼさぼさだ。

「そうそう、風呂は貴重だ。戻れ、戻れ。」

「そんなこといってもなー。」

「そつだ、天海殿。」

「ん？」

「連れは？」

「あ……まだ風呂ですな……。来い！しま……。あの子に謝るんだ。」

慌てた声が、下に降りていった。天海じいさんもまた……。大変

そつだ。

「さて私は、下に行つて少し、しま達に稽古でつけてきます。後はお願いいたす。」

そつ言つてちらちらと七輪を見ながら半蔵は下へ降りていった。

「でもまあ……。大所帯だな。」

青海は呆れた顔で手持ちのひょうたんを覗いていた。

「でもまあ、こうなる予感はしていました。」

「すみませんねえ。」

そつ言つ声に入り口のほうをみると、天海が手ぬぐいで頬をこすりながらあがつてきた。

「いい湯でしたな。ささ、他の方も入られませい。」

「おう。」

「先行つています。」

「分かつた。」

そつ言つと二人は手ぬぐいを片手に下に降りていった。

「いい風ですな。」

「確かに。」

町は夕暮れで下を見ると、呼び込みの女達が旅人の腕を持って引きずり込んでいる姿が見える。皆が皆、生きるに必死なのだ。

「平和な物だな。」

「ですな。」

「そつだ……。天海殿に相談しておきたい事がありましたな。」

「どうなさいました。」

「あなたほどの博識な方ならお築きかと思うが、この先の道中……。」

「どちらをお通りになるおつもりで。」

天海は側により声を潜める。それに合わせ、信繁は声を小さくする。

「このまま北に行く振りをして中仙道を通るつもりだ。ま、本来はこれが目的で来たような物だ……。」

信繁は遠い山を見つめる。ちょうどこのあたりで西へ向かえばちょうど中山道だ。ふと天海は頭を巡らせてみる。確かに、徳川に従ってはいる物の、あの地域は武田家遺臣団とかがいる地域、そうそう襲撃も出来ない。それに……。

「兄上……ですか？」

天海はちょうど上田の地にいた、真田家の当主の事を思い出す。

「まあな。半蔵とかが関所を通してくれれば後はどうにかしてあそこに行くつもりだった。だが今回の通行書のお陰で、行けそうだったからな。目的を果たすつもりだ……。」

「では……。どういった相談で。」

「まあな。そこでは俺たちの名前は知れ渡っていると思うんだ。」

確かに真田の物が徳川軍に大立ち回りのしたのをむろん上田や信濃の人々は聞き及んでいる事だろう。

「だが、事がおおつぴらになれば半蔵でもかばいきれなくなっていく。」「

むろん、書があるとはいえ、名前を明かせば豊臣方だとばれている人間がいればよからぬ事が起きる可能性がある。

「でだ。名前とかを考えていただけぬか？」

天海はその言葉に頭をひねってしまう。

「どうしてそうなりますか？」

「いやあ……。まあね、偽名を旅の間考えてみたんだが……。なかなか思いつかなくてね。」「

「とりあえず思いついたのを一つ言ってみてはくれまいか？」

天海はいぶかしげなかおをして、信繁の顔を見つめる。

「うーむ……。真田信の繁……。とか？」

その言葉に突っ伏すのをぎりぎりこらえる天海は近くの柱に頭をこすり当てる。

「で……。算がカッケルだろ……。青海は……。セイーカイだろ。」

「少しお待ちください。それではほぼ変わらぬし……。それにあまりに酷い。」「

信繁のあつけらかなとした顔に一抹の不安を覚えてしまう。

「こういう事に不慣れでしてな。それに僧正様に名前を付けてもらえばそれだけでも縁起物という物だ。何か……こう……お願いします。」

そう言うのと大きく信繁は頭を下げた。

「ま……。たしかに名前を付けるのはやぶさかではないが……。わかり申した。考えておきましょう。ただ……。」

「なんですか？」

「流石に……青海殿や笥殿はそのままでもいいかと……。」

「あ……そう……わ……分かったよ。」

信繁のなんともも間の抜けた声は、天海の心に何故か心地よく染み渡った。

次の朝は晴れ渡つては……いなかった。どことなく曇り空であり、雨の予感さえした。春の雨は山に暮らす者にとっては危険でもある。雪解けを加速させ、また山崩れの危険もある。

「で……だ。信繁殿。」

半蔵は声を急に低く下げる。その感じに笥達も身構える。

「急で悪いが……ここにもう一泊……。いいかな。」

「どうか……したのか？」

「俺もまあ……な……。」

半蔵が歯切れの悪い声を上げる。

「で……どうしたんだ。」

半蔵のその顔では想像が付かない。

「それについては聞かないでくれ。俺も信じがたいと思っているんだ。旅費は俺が払っておいたから、飯ぐらいはでる。だからな。」

「ま……かまわないが……。」

信繁はあまり気にしていなかった。と言うのも、このゆっくりとした旅はある意味目的通りだからだ。本当にこの男が忍軍の長ならば、この男の足止めは百日の軍備より効果があるからだ。それに言うて

いる通りなら、帰る時間を遅くすれば、それだけ時間が稼げるとい
う物だ。だが、それでも遅すぎる。

「歯切れの悪い半蔵というのも珍しい。どうしたんだ？」

「いやあ・・・な。あ・・・この天候だろ。危険かなと思ってな。」
確かに空の様子は不安だ。だがこの程度でひるんでは山越え
など出来はしない。少し詳しく言うなら、この頃の街道と言っても
木が切つてある程度な事が多く。街道整備が本格化したのは江戸中
後期がほとんどである。ましてやこの時代で整備とは木がない程度
ではない。それでも獣道よりかは大分歩きやすいのだが。

「ま、そこまで言うなら・・・すまないが頼む。」

そう言うと、履いた草履を元通りにすると信繁は宿屋の中に戻
っていった。

「え・・・今日は行かないん・・・。」

少女が寂しそうに空見つめていた。

「今日は、家の中で勉強だよ。」

天海は優しく諭すと、少女に優しくほほえんだ。

「そうだ・・・。」

信繁は空を見つめながら少し考えると、またわらじを履き始めた。

「青海。」

「おう。」

「ついてこい。魚・・・取り行くぞ。」

「あ、おう。」

青海は頷くと荷物をおいて、外に？けだしていった。

「お・・・俺は？」

しまは驚いたように周りを見渡すと各自、行動を起こしていた・・・
あれ・・・半蔵の姿が見えない・・・。

「ん。こういうときは信繁様の後について行ってこい。」

「おいよ。」

掛け声をあげると、しまは掛けだして外に行った。

「あれ？半蔵殿は？」

算が慌てて周囲を見渡すと半蔵の姿が見えない。

「さあ？」

天海は首をひねるが、いつの間にか・・・姿が見えない。

「そうだ。天海様。せっかくの機会です。幾つかお聞きしたい事が・・・。」

算は背負子をおろすと、そこには手書きの書があった。ふと天海は少女の方を見つめると、うずうずした顔でこちらを見つめていた。「そうだ・・・ミリア・・・。信繁様のところに行つて、魚取りでも見てきておいで。」

「は・・・はい。そうじょう様。」

そう言つと嬉しそうに少女は走つていった。

「珍しい名前ですな。」

算は感心した顔で、嬉しそうに少女が走つていく後を見つめていた。

「ま・・・確かに・・・。で聞きたいのはどこですか？」

「こここの所なのですが・・・そちらの本に書かれていたのは・・・。」

算は本を手に階段を上がるのをそろりそろりと天海がついて行つた。

「でだ。久しいのお。」

信繁は川に仁王立ちしていると青海は呆れていた。

「大阪の河原につつこんだあんたが言つ事じゃあないな。」

「まあな。」

青海は笑っていた。

「よ。」

その声に河原を見つめると、しまがにこにこしてこちらを見ていた。町にも活気が取り戻せて来たらしく、馬の駆ける音とかが聞こえてくる。

「お前らー。魚・・・とれっか？」

信繁は憮然とした顔でしまを見つめる。

「こつ見えてもなー……。こつ見えても……。」

そう言っつて声先細りになる中、川を見つめると確かに川魚が幾つか泳いではいた。

「いじめてくれんな。こつ見えてもお偉いさんの息子なんだ。」

「ま……。お手並み拝見。」

しまは歩いて川側まで来ると、その場で座りじつと川面をもにやにやと見つめた。

「こつやっつてな。」

そう言っつと信繁は川面に乱暴に手を突っ込むと魚はさつと逃げ出していった。

「……。こつやっつてな。」

そう言っつと信繁は荒っぽく手を突っ込むが、魚は手に一匹も入っていないかった。その様子にしまは笑い転げていた。

「ま、見てるや。兄貴達の所で教わったのはな……。」

そう言っつと青海は両手を上に上げ、息を潜めててじつと動きを止めた。

「こつだー！ー！ー！」

そう言っつと身体を大きく動かし、魚を捕ろうとするが、寸前のところで逃げられる。その様子を見ていたしまは更に腹を抱えて笑い転げる。

「まあ、流石……。武士様。俺が手本見せてやるよ。」

そう言っつとしまは河原から石を一つ拾うと立ち上がり、川面をじつと見つめる。その瞬間張りつめる空気みたいな者を感じる。しばらくじつと構えるとしばらく空気が凍り付いたようにしまの様子を見つめていた。

”びしゅ……。 ”

石をしたから這わせるように投げると石は川面にスポットと入ると音も立てずに川に沈んだ。次に浮かんできたのは川魚だった。

「おお。すげーな！。お前。」

感心したように魚を拾い上げるとそれを河原にあげた。

「……。そう言う感じなら行けるのか。やってみるか。」

そう言うつと、信繁は感心してみつめると、何かひらめいたように足を構えじつと水面を見つめる。

「どうした？」

青海は見つめるが、信繁はじつと水面を見つめたままだった。次の瞬間からだがすつと動くと、信繁の手が水面を叩く。

「「は？」」

その次の瞬間、魚が水面から河原に飛び出していった。……しまはおつかなびっくり見てみると魚は気絶しているようだった。

「すごいな。」

青海は感心して信繁を見つめた。

「ドンだけ怖い顔して漁してるんだよ。漁師は。それじゃ疲れるだけだよ。」

そう言うつて川下を指さすと、漁師が魚籠を持って水の中につけていた。

「のぶ……しげさま……。」

その声に河原を見つめると息を切らした少女の姿があった。

「お……どうした。」

そう言うつと少女がと手と手と歩いてくると、信繁達がいる河原に入ってくる。

「僧……上様が……。魚の取り方……。見て……。つて。」

「取ってみるか？」

そう言うつて信繁は河原を見つめると魚たちが岩苔とかをついばんでいた。

「うん。」

そう言うつと、少女はしゃがみ込み手を水の中につけるとじつと待っている。その間にも遠くでは青海や、しまが各自それぞれの方法で魚を捕ろうとしていた。

「それだけじゃあ……。」

少女の手の中を見ると魚が数匹手の中に収まってるのが信繁には見えた。

「何とかしないとお．．．。」

半蔵は焦っていた。その報告は昨日の夜には届いていた。

「内府様つて人はあ．．．。」

馬が街道を全速力で駆ける。このまま行けば一刻前後で次の宿には着くはずだ。

「内府様の姿が見えない。」

「いつからだ。」

「それが．．．半蔵殿の手紙を見てからだ。この報は昨日あたりに届いた。」

「は？」

「で、秀忠様は内密に半蔵を捜しておられる。せめて事情だけでも．．．。」

その言葉を聞いてじっと昨日一日布団の中で考えていたが．．．どういふ事か理解出来ない．．．このまま布団の中にいれば幸せそうだ。

「もしかして．．．。」

走りながらも半蔵はある事が頭をよぎる。

「昨日．．．信繁殿をやつと三島までお連れ申した。もう少しで目的の江戸にお連れ申す。私から見ても好青年．．．。きつと日の本の礎になりましょう．．．。」

確かにそう書いたが、説得は不調。念のために預かった手形を使う羽目になった。

「あの方の事だ．．．大方．．．。」

「こんな小さな魚．．．川に返せよ。」

そう言つて魚籠を持った漁師に手に持った魚を捕られた信繁は意外そうな顔をした。

「どうしてだ。お主も魚を捕るだろう。」

「お侍様だけど、そんな事も知らんのかあ。」

呆れた顔で魚籠の中を見せる。中には大きな魚しかいない。

「そんな小さな子まで奪われたら、親は怒るだろうさ。」

漁師は河原にある大きな石に腰を据えて、腰からキセルを取り出した。

「子供がいなくなれば親もいなくなる。」

その言葉に二人の子供は真剣そうに聞いていた。

「ま、言ったとおり、魚籠は貸してやるけど。少し話を聞いてくれ。」

「お．．．おう。」

「まあな。お侍様は皆が皆．．．戦ばつかすんだけど。なんだかいねえ。」

漁師は遠くを見てたばこに火を入れた。

「．．．。」

「おさむらい．．．。いくさ．．．。」

少女のつぶやきが聞こえる。

「だな。」

しまは大きく頷いていた。

「．．．そうだな．．．。つまらないことさ。最初はな。」

信繁は河原に腰を下ろすと対岸を見つめる。対岸は小さな小屋が幾つか見えた。

「例えば．．．あそこに小屋があるだろ。」

「おう。」

「そのこの住人が対岸を見ると誰かが洗濯していた。でだ。対岸の奴に言っわけさ。」

その言葉に信繁をみんなが見つめた。

「俺んちの川上で洗濯するんじゃないやねえ。汚れる。魚が捕れねえ。」

「ってな。それで怒ったとする。」

「ああな。」

「それで対岸の住人同士が諍いを起こす。で、呼ばれるのが暇な衆さ。それが俺たち”侍”って奴さ。」

「だけんど、戦ばつかしていて、みんな幸せじゃないべ。」

漁師は煙草をゆっくりとくねらせ、川を見つめる。暇になった子供対が、魚相手に苦戦する青海の所に行っていた。

「それはみんな分かっている。最初は喧嘩でも、大きくなれば戦さ。誰かがやられれば、どっちかがいなくなるまで戦は続く。だから終わらない。誰かの名の下に統一しない限りはな。全員が同じ所に付くその時まで。」

「あんちゃん・・・おもしろいな。」

感心したように漁師は信繁の顔を見つめていた。

「そうか？」

「よく分かんないけど。ここは魚を旅館に届ける仕事が多いんだけど。こういうのばかりしていると・・・どっかこつたで刺したただ、刺されただつて聞くと訳分かんなくてな。」

少し悲しそうな顔で、空を見つめる。空は青くて輝かんばかりであつた。

「そつだ。ご老人。」

「ん？」

「折角だから、漁の仕方とか教えていただけませんか。」

「ま・・・普通に採るよかおもしろい・・・。いいだよ。」

半蔵はもう少しで本庄と言う所まで来ていた。

「予測が正しければ・・・。」

「でだ・・・何か聞いていなかったか？行き先について。」

「んー。何か、鶏卵を探しておられたような・・・竿は持って行かなかつたぞ。」

「で、いつからいない？」

「手紙をもらった直後だから・・・十日前ぐらいか？」

頭で思い浮かべる。あのお方の行動はよく一緒にいただけの予想

が付く。だから……。

『ここら辺で休みませんか?。』

聞き覚えのある声が聞こえてくる。半蔵は即座に馬を走らせ、高台で馬を止める。そこから目の届く範囲に街道を進む、馬をゆつくりと歩かせた三人組が見える。老人を馬に乗せ、二人は馬を引いていた。その様子を見て半蔵は頭を抱えた。悪い予感がしたからだ。

「だから……。さっきのところで休めばよかったですように。」

「そう言うな。ほれ……。釣れた魚が逃げてしまっから急ぐぞ。」

老人が疲れ顔の二人の若者を手に持った杖でせつついている。

「でも……。」

「でももくそもない。」

半蔵は念のためにゆつくりと馬をあるかせ、近づく。このご時世・
・確かに多くの地域では平和になったとはいえ、まだ旅人は少なく、街道の宿屋とかも何件かは頼みこんでしてもらっているところだ。だから旅人というだけで珍しい。しかも当時の馬というのはとても高く、街道で馬を借りるのはどんな駄馬でも結構な値段がしたのは事実だ。それだけで珍しい。わざと街道に降りると、静かに馬を歩かせる。向こうもこちらに気が付いたらしく。急にだまり込むと、ゆつくりと歩いてくる……。

「御老じ……。」

「久しいの。半蔵。」

その声に半蔵の偏頭痛は三倍ましとなる事になった。

” お前ら……何で来させた。今は大事な時期だろうが……。”

” だって……。発見したときには行く準備万端で……。”

” 行く気満々で、早馬でとばす予定なのを無理矢理付いてくるだけでも手一杯……。”

「何話しておる。」

老人は後ろ向きでひそひそ話している男達三人の顔を覗きこむ。

「あ……あ……いやいやいや。」

半蔵は慌てて、老人の方を向き返る。

「半蔵・・・流石にあつた直後に背を向けるとかは失礼だぞ。」

「今・・・こんな所で会う自体も失礼です!」

呆れた顔で半蔵は言い返すが、老人には効いた節もない。

「そう言うな。お主の話聞いていても立ってもいられなくてな・・・

・あの小倅どう成長したのやら・・・。」

「いや・・・ま・・・。」

老人の楽しそうな顔とは裏腹に半蔵は焦っていた。

「そう言えば・・・どうしてここにいる?」

「いや・・・ま・・・せつと・・・。」

「どうした?」

不思議そうに効こうとする老人の前に急に半蔵は片膝を付く。

「誠にすいません。」

「ん?」

「説得には失敗しまして。現在は監視中です。」

半蔵は申し訳なさそうに頭を下げる。

「だろうな。予想通りという事か。だろうと思って来たんだ。」

「すいませんでした。」

「でだ。」

「は。」

「半蔵・・・あの男・・・どう見る。」

その時の老人の顔は温厚そうな顔から一転思慮深い瞳に切り替わる。その頃には脇の二人の立て膝を付き、神妙そうに頭を下げる。

「流石に将の器と・・・。」

「だろうな。」

「ただ、家族が肝要と言ってくるあたり・・・。」

「それは違つぞ半蔵」

「は?」

「家族とかを守る思いがない者は結局部下でも何でも切り捨てる愚か者になる。それに比べれば。」

「は。」

「で、真田の小倅は？」

「いや・・・あ・・・何をなさるつもりで・・・。」

「当然だろうが。ここまで来たらやる事は一つだ。」

「結局漁師が一番だな。」

そう言って歩くしまの手には魚が幾つか握られていた。

「そう言うなよ。」

信繁はとぼとぼと歩いていた。少女はその後をにこにこしながら歩いていた。

「そうだぞ。酒の肴とはこうもありがたい物だ。」

そう言う青海の服はびしょぬれだった。

「結局酒かよ。」

しまは呆れながら、手元の魚を見つめる。

「ま、俺が傭兵でうろつろしてた頃がある。」

青海はと遠目に見える夕日を見ながらつぶやく。

「食うに事欠き、一握りの米を仲間と奪い合った事もある。」

「・・・。」

「変な話なものさ。そう言うときに限ってそう言う小魚とかを捕ってくるとかの事には知恵が回らなくてな。」

夕方の涼しさと合間って、寂しさが漂う・・・感じがした。

「それで死んでいった連中をいくらでも知ってる。飯にありつけるのはこの時代当たり前かもしれないが、それで死んでいった奴らがいた事は忘れちゃあいけねえ。」

「そっか・・・。すまない・・・。」

しまは神妙そうにうつむいた。

「ま、ただ普通に酒飲むよりかは、つまみがあっ方が旨いと言うだけだな。」

と青海はがはがはと笑っていた。そう言えば・・・信繁自身あまり青海の過去を聞かされた事はない。

「おま・・・っ、結局ただの酒飲みじゃねえか。」

しまは顔を真っ赤にして青海に詰め寄り、それを見た青海も駆け足で逃げようとする。

「あっはっはっは。肴に追い回されるのもまた、たまらん。」

そう言つて宿に向かつて青海は走つていった。ちようど宿ではまた呼び込みを・・・。

「こちらは部屋が空いていますかな。」

「一部屋だけど・・・空いてるには空いてるよ。」

「で、食事は・・・。」

ちようど自分たちの宿の前で交渉をしている一人の老人とあきれ顔で見つめる二人の付き人の姿を見かける。格好だけを見ると商人にも見える・・・。あまりみすばらしくなく、それでいて、武士みtainな堅さも無い。だが、その商人を見た瞬間信繁には悪い予感を感じた。

「足湯とか・・・。」

「おう。女将。」

青海は店前で交渉している一団を無視するように女将に声を掛ける。

「今日はこいつを頼めるか？」

「これ、これ！」

その声にしまは前に出て魚を突き出す。その瞬間・・・商人の付き人達の異常な殺気を信繁は見逃さなかった。それを小さな身振りだけで商人らしき老人が制した。

「それを見せてもらえるかな？」

老人はしまの前にしゃがみ込む。その時の老人の瞳に何故かしまは固まってしまった。ただ・・・青海はその様子に気が付いていなかった。

「あ・・・ああ。」

そう言つてしまは魚をすつと目の前に突き出した。

「これは・・・。」

「今日俺たちが採ったんだ。」

「そうか・・・おいしそうだね。」

そう言っただけで老人がほえむと、それで一気に老人ではなく、周りの人間の緊張がはれていく。

「これを・・・。」

「ん・・・。」

そう言っただけでその魚の半分を突き出す。

「ん？」

「やるよ。疲れてきたんだろ。今日ぐらい旨い魚でも・・・食べよ。」

「そうか・・・ありがとな。少年。」

そう言っただけで付きだした魚を受け取ると女将に渡す。

「これ・・・おいしくしていただけませんか？」

「あ・・・はい。じゃあお泊まりで。足湯はすぐに持たせますので。」

「そう言っただけで女将は嬉しそうに奥に向かった。」

「さて。俺は上で、涼んでる。じゃあな。」

そう言っただけで青海は、商人に一例を見ると、そのまま店内に行った。その間近づいた信繁はじつとその商人を見て固まっていた。この人と・・・昔会った事がある・・・ような気がする。

「すみません。」

信繁は優しく声を掛ける。その瞬間一瞬だけ、獲物を見るような刺す瞳になった事を信繁は感じていた。普通の顔を見る限りでは温厚そうな顔なんだが・・・。信繁の直感が告げる。直感が合っているならここにいるはずのない人物だ。

「どうかなさいましたかな。」

「もしや・・・。」

「そうだ。こちらの宿にお泊まりになるのでは？」

「あ・・・ああ。はい。」

商人の老人は大きく頭を下げる。

「私。長野で絹糸を扱う商人の徳左右衛門と申す。」

「ああ……。」

その言葉に面食らうように頭を下げる。

「拙者……真田……と申す。」

そう言つて礼儀正しく頭を下げる。

「それは……それは……。」

目を細めてじつとこちらを値踏みするように商人は見つめてくる。

「で、どうしてこちらに？」

信繁は顔を上げると、じつと付き人を牽制するように見つめる。

付き人は何かを警戒するように顔を強張らせた。

「私ですか。商人ですから……。大商いの香りを感じては放浪す

る日々です。」

「そうですか。私は連れが先に中に入ったので、こちらで失礼いたします。」

そう言つと信繁は一礼すると、そくささと奥に逃げ込んでいった。

「流石……。」

老人は小さくつぶやいた。

”あの男……いや……老人は大方……。あの人に間違いない……。”

信繁は湯船に深くつかりじつと考えていた。この地域には川がちかく、宿に温泉は完備されていた。それを見越してこの宿に決めていた。その分周りの宿に比べればかなり高い。

”だとして……何故……。あ……。ま……。そうか……。だから半蔵が慌てて……。”

信繁はぼおつとしながら風呂の縁を見つめる。ちようど岩場で、離れで、落ち着いて考えるにはちようどよい……。温泉だ。

「失礼してよろしいかな。」

遠くから声が聞こえてくる。先ほどの老人だ。

「私は出ましようかな？」

そう言つて信繁は立ち上がるつとする。その時老人のからだが見える。商人にしては所々に切り傷がある身体だ。

「いや、折角ですから。」

老人はそう言つと、小走りで近づくと桶を抱え、湯船にはいる。

「ま、ここでは無礼講と言つ事で・・・お願いします。」

湯船に入った老人うつすらと笑みを浮かべ、ほほえましくこちらを見つめる。その顔に信繁はある確信が持てた。

「ですな。内府殿。」

「・・・。」

「・・・。」

「いつから・・・と言つわけでもないか。」

声が先ほどに比べて濃く、どす黒くなる声が風呂場一面に低く響く。

「ま・・・昔、一度お会いいたしましたぞ。」

「確かに。」

「で、何用かと。」

信繁にはだいたいの予想が付いていた。大方半蔵の穴を埋めに来た・・・気がする。

「物見遊山だ。」

「え。」

そう言つと桶から瓶と猪口を出すと、すつと信繁に差し出す。

「お主とこういういい男を見に来たんだよ。」

「あ・・・ああ。」

「でも本当に・・・いい男に育つたな。」

「それはありがとうございます。」

そう軽くお辞儀すると手を差し出す。そこに猪口を置くと老人が酒をついだ。

「大丈夫だ。さっきそこで入れてもらった奴だ。」

「あ・・・。」

そう言つと老人は自分についだ酒をクイって煽る。

「でだ・・・お主、江戸を見てどう思った？」

「いい町ですね。水路があつて、みんなが幸せだ。」

「ほう。」

「ただ・・・光が濃ければ闇も深い。」

「そうか。」

その言葉に何かを感じ、老人は考え込んでいた。

「だとして・・・それはもう俺の仕事ではないな。」

「どうしてまた？」

「単純だ。俺はもう年を取りすぎた。老体に鞭打ち、戦場を駆けても、昔ほどの動きは出来ない。やはり私は・・・。」

「だとして、あなたは様々な事を成し遂げた。これぐらい。」

「かもしれないが、お主のような男にはかなわないよ。」

そう言つて老人は信繁の身体を見つめる。信繁の肉体は他の者のようにそれほど筋肉があるように見えないが、ちゃんと付いているところには付いている、そう言つて身体だ。

「それでもあなたほどの男なら・・・。」

「分かつていても年を取るのをやめる事は出来ん。それに・・・年を取るのをやめた奴らの悲惨さも知つておる。人間は人間だよ。」

「ですな。」

そう言つと、お猪口に入った酒を少し口に入れる。

「お主、半蔵の報告は受けたよな。」

「はい。」

「それでどうして・・・どうして・・・何も感じなかったのか？」

「感じないわけはありませんが・・・。話が大きすぎて見当が付きませぬ。それに家族が大阪にいます。」

そう言つと信繁はわざと風呂の縁に腰掛け、半身をさらした。

「それは知つている・・・。彼らを江戸に呼べば来てもらえるか？」

「それは・・・。」

「この通りだ。この日の本の為・・・俺の為、徳川の為とは言わん。」

日本の為にお前の力を貸して欲しい。」

そう言つて信繁に大きく老人は頭を下げた。

「頭をお上げください。」

「今の俺にはいくら人材があつても足らん。頼む。」

「……。」

「頼む。」

「私は、あれから旅路の中で考え申した。」

「……。」

「半蔵殿に聞かされた事、この世を覆う大きな闇の事。確かにその前では些細な忠義は霞み、大儀の為には全てを捨てねばならないかもしれない。ただ……ただ……。」

その言葉に老人は唾を飲んだ。

「私が旗揚げしたときに付いてきてくれた皆がいます。そのみんなに恩返しをしたい。そして……。」

その言葉に温泉内は静かな重みに包まれている……そんな感じがした。

「あなたが許しても、きっと息子さんは私を許さないでしょう。」

「それは俺がどうにかしてみせる。」

「二君に仕えたのであればいつかは誰かのそしりを受けましょう。それに、そう言う裏切つた男を貴方が必要するとはどうも思えない。」

「……。」

「……。」

「と言つよりも……。一度確かめようございます。」

「何を？」

「内部から、どこまでが真実なのか。」

「内部からか？連中は手強いぞ。」

そう言つと手に持った瓶を老人はつきだした。信繁はそれに呼応し猪口を差し出す。まるで長年つきあつた仲のようにも見えた。

「だからこそ見える真実があります。」

そう言つて老人を見つめる信繁の顔は真摯に前を見つめていた。

「ふ。負けた。」

その瞬間、老人は大きく笑い出した。

「行ってこい！ワシはいつでもお前を待っている。危なくなったらいつでも庇ってやる！だから行ってこい！そして思いっきり見てこい。」

「はい。」

「やはり。今日は無礼講だ。後でそちらに向かう。今日は一杯やるう。」

”徳左右衛門さまー。そろそろ出ないとゆだりますぞー！”

遠くからの声が聞こえる。きつとお付きの人だろう。

「わ、わかったー、今行く。」

そう言って立ち上がる老人の目もまた、輝いているように……きつと湯があつて湿っぽいせいだろう。老人は立ち上がると、急いで上に歩いていった。

”あれが、徳川家康……か……。”

信繁はつぶやくと、温泉から上がり、じっと待っていた。流石に自分もまた、茹で上がりそうだったからだ。

その夜は、徳左右衛門らがやってきて一緒に食事を取った。突然の事にまわりの連中は喜んでいたが、実際を知る天海や半蔵達は冷や冷やしていた。その日は酒も多分に出され本当に酒宴となつていき、皆は徳左右衛門も含め皆、旨い酒を飲めた。その夜はほぼ皆が寝静まり、信繁はゆっくりと窓から煌々と照る月を見つめ、酒を口に運ぶ。春の夜長は秋ほどではないが、若草が香り、なんとも言えない色合いになる。

「こつ月夜も見飽きれば、ただの夜となる……。」

川の音が細かくサラサラと時折響く。夕方はあれほどせわしないこの宿場も、昔をたどれば戦道。整備されて十数年のこの時ですら、感慨に深い。幾多もの人間がここを駆け抜けていき、また、これから駆け抜けるのだ。俺は……そう言う仕事を……出来るのだろ

うか。

「いや、考えるまでも・・・無いか・・・。」

「そうそう飽きるほど月を見たのか？」

「そう言い、徳左右・・・家康が近づいてくる。」

「そうじゃあないけどな。見る暇が最近はちょこちょこあって。」

「だよな。」

「平和ってなんだと思います。ご老人。」

「ん・・・。」

「平和か・・・。ま、こうやって月を見上げる時間が生まれるという事かな。」

その言葉に二人は宿の窓から見る事の出来る月を見上げた。その月は白・・・に少しなんとも言えない黄色と・・・何か混ざったような色合いだった。

「そんな余裕があれば人はきつと・・・そこまで人々を満たせばきつと盲信に頼らなくても生きていける。」

「昔、わ・・・ある殿様がな。父が死に、就任した直後、葬式をあげようとする寺の坊さん呼んだ。その時の欲深い顔を見て・・・父の死を侮辱されているように感じられた。それに腹を立て、少しの金で追っ払ってしまった。皆は反対したが、それだけを許す事は出来なかった。もしたら、ある内乱が起きた。それは寺が寄進料に腹を立てたのが始まりだった。」

「それで・・・。」

「そしたら、今まで家族のように扱ってくれた家臣達の一部が裏切った。寺を裏切る事が出来ない・・・。説得に言ったときのあいつの顔を今でも・・・もう時代が違うはずなんだがそれでも忘れる事が出来ない。あの何とも言えない複雑な顔を・・・そしてあいつを捕らえ、寺の住職に降伏を求めたときのあの情けない顔を見た時に思った。俺の家臣はこんな・・・こんな情けない奴の為に・・・こんな寺の本分を忘れた馬鹿の為に殺されたのかと・・・。」

その声は今でもどこか、震えていた。

「部下に示しをつける為にお・・・殿様はそいつを斬った。そして寺を焼き討ちにした。私は思うのだよ。盲信が原因で・・・人々が操られる世界なんて・・・どこかがおかしい。」

その言葉の端々で言葉が震えているように聞こえる。信繁は老人を見つめる。そこにいたのはただ、何かを後悔する老人の矮小な姿にも見えた。・・・いや、だからこそ天下統一とかの考えが揺るぎようがない・・・ようにも見えた。

「宣教師の話聞いたとき、私は我が目を疑ったよ。何か人の生や死が侮辱されているようにも思えた。そんな・・・もっと腐った連中がどこかにいる。だからこそ、俺は・・・こうして・・・。」

「空はきれいですな。」

その言葉にハツとなって信繁を老人は見つめた。

「昔・・・上田の地で勝った直後に見た月は・・・もっと赤々しく禍々しい・・・見たくもない月でした。」

その言葉に全員が押し黙ってしまふ。

「血しぶきが天に届いたようなそんな赤い月。叔父貴もそんな月を幾たびも見たのでしょうか。大阪での夜で気が付いたとき、月が赤かったのです。だが今の月は白く・・・黄色く・・・寂しくも柔らかい。」

その言葉に空を見るとその月は白く、煌々と輝いていた。

「だからこそ、この平和こそが必要なのです。」

信繁はじつと前を見つめた。その姿を見た老人の目にはないか、菩薩みたいな姿にさえ見えた。

「こういつ月が見飽きてしまえるような世の中が・・・。」
「だな。」

じつと月を見る信繁の姿はどこか、寂しそうだった。

「これからどうするんだ。」

次の朝、それぞれが旅支度を終え、宿の前に立っていた。

「ワシはこのまま江戸を目指す。」

徳左右衛門は明るい顔で、周りを見渡す。

「私は・・・そうですね・・・一度・・・故郷を目指したいと・・・」

信繁は少し考えてから言った。ちょうどこの道は中仙道。このまま街道を行けば、上田の地にも到着はする。

「なら拙僧はこの辺でお別れですな。」

そう言つて、天海は徳左右衛門の方に歩いていった。

「そうか。」

「今後、きつい道のりですが・・・精進だけは忘れぬよう。後・・・

これを・・・。」

そう言つて天海は書状を信繁に手渡した。

「これは？」

「先日頼まれていた物です。そこに書いておきました。後、しま達には字の勉強をさせるよう、手引き書を算殿にお渡ししておきました。何かの役に立ちましょう。後一つ・・・。」

「ん？」

「この子を・・・せめて堺までお連れ出来ないでしょうか。」

そう言つて少女を前に押し出した。

「いいのか？」

「ハイ。この子は元より独り身みたいな物。この世に頼る物は少のうございます。この事を考えると、一緒にいればきつと何かの役に立ちましょう。」

少女を見つめると、少女はにっこりとしていた。きつとついて行く覚悟もあるのだろうか。

「分かった。預かろう。ただ堺に着いたらどうする。」

「堺に着いたら、廻船問屋に頼み、こちらに手紙を届けてください。その時に判断いたす。」

「分かった。」

「お坊さんが一緒であれば何かとおもしろい。」

わざとらしく徳左右衛門が笑う。むろん何者かは彼自身が一番知

っている。

「では。」

そう言つと、徳左右衛門は深く信繁に礼をして、背中を向けた。その姿に付き人も軽く一礼すると、徳左右衛門と天海は街道を歩いていった。

「じゃあ俺たちは。」

「ああ。このまま上田に行くぞ。」

そう言いきびすを返し、徳左右衛門達と反対方向に歩き始める。

「俺の故郷。上田城の兄貴の所に向かう。行くぞ。」

”おおー。”

全員がときの声を上げ、ついに決まった目的地の元、全員が歩き始めたのだった。

「家康様。」

徳左右衛門が街道の先に進みお互いが確認出来なくなってきた頃、半蔵は息を切らせ走ってきた。

「どうした。」

今までの温厚そんな老人の顔から一転する。

「本田殿から一報が。内堀工事どうにか押し切る事が出来たと。」

「そうか。淀君は？」

「淀君は最初は渋っていたそうですが、最後は不敵な笑みを浮かべていたとか・・・大方あれを使う気では。」

「あれ封じの手配は？」

「手配済みです。前回みたいな真似は絶対させません。」

「分かっている。後、陰陽衆には出来る限り金を撒いてでも。」

「手配はしていますが、今のところは・・・。」

半蔵は不安そうに顔を曇らせる。

「分かっている。出来る限りの不安要素を排除する。全力で・・・

・今度こそ決着をつける。」

「で、真田はどうしましょう。」

「あの男、殺すには惜しい・・・だがあの様子では自害し兼ねん。流石真田、筋だけは通す武士よの。昨日で話を受けるようなら、飼いに殺しするところだった。」

その顔は穏やかというよりは・・・悪人にも見えた。

「監視だけをするように。あの様子では本当に淀君を破らぬ限り説得は出来そうにない。後は半蔵に任せた。定期連絡だけは・・・。」

「分かりました。では」

そう軽く一礼すると、信繁が行った道の方に駆けだしていった。

「今度こそ。終わりにする・・・。今度こそ・・・平和にしてみせる。」

そうつぶやいた老人の執念に似たうなり声は天海の耳にまで届く物だった。

第六節 徳川家康という男（後書き）

プロフィールとタイトルが一分違う事をここで謝罪いたします。

第七節 鬼か妖か（前書き）

徳川家康と別れを告げた一行は人目に付かぬように街道を避け進む。
そこである一軒家にたどり着く・・・。

第七節 鬼か妖か

第七節 鬼か妖か

旅は天海がいなくなっても遅い・・・と言うよりははゆっくりと進んでいた。旅の資金はそれほどでもないが、ちょうど彼らがこれから通行する信濃の周辺は、武田の遺臣が多くまた、信繁いわく”意地汚い”連中のすみかと言う事もあり、人の目を避けるように街道沿いの獣道を旅していた。

「こう・・・山奥の空気は都に比べ、いいですな。」

算のはつらつとした声とは裏腹にいつもは威勢のいい青海はくたびれた顔をしていた。

「俺はなあ、こう見えても都の出だ、やっぱり付いて来るんじゃないかな。」

青海はそう言うのと近くの切り株に腰を掛ける。

「もう動けねーぞ。」

青海の切れ切れの息での叫び声が響く。

「でしような。」

半蔵はあきれ顔で近くの木に寄りかかる。

「拙者もこう・・・少し休みましょうぞ。」

「だな。」

そう言うのと、信繁は少女を見つめる。少女は黙って付いてきてくれてはいるが、その顔に疲労の色が伺える。

「みんな情けねーな。」

しまは元気そのものだった。

「それは・・・生まれも育ちも違う皆がいればそうなる。」

半蔵は冷静に懐から水筒を取り出す。

「でもさ。だったら街道行けばイーじゃん。」

しまはふてくされてその場に腰を下ろす。

「流石にこつから先は一度関所を通らなくてはな……。」

「大丈夫なのか。」

一応街道を通っている物のこの先の碓氷峠を越えるには碓氷関を越えねばならない。いくら、内府直々の書面があるうと早々簡単に越えられる物ではない。またそれ以外のルートを通るのも、幼子を連れては無理な事が多い。

「まあな。あそこを越えればしばらくは大丈夫だが。」

警戒しているのは書面等の手形ではなく、名前の事である。もし名前等で怪しまれば、手形があるうと一発でダメになる。

「そこでだ。算。」

「は。」

「天海殿の書面を出してくれ。」

「は。」

二つ返事で頷くと、算は背負子を下ろし、中から天海の手紙を取り出す。

「前々から気になってはいたが……これは？」

半蔵は不思議そうに手紙を見つめる。

「いやあな。天海殿に頼んで、偽名を考えてもらっておいた。」

「ほう。」

青海は珍しそうな顔を品柄懐から水筒を取り出すと、口の中に注ぎ込む。

「偽名？」

「まあな。俺や半蔵とかは目立ちやすい。だからせめてその分を補うべく、折角僧正様がいるのだ。と言うわけな……。」

喋りながら……書面を覗いていた。

「……と言うわけで俺の名前が……」真田幸村”？

「ほう。」

”真田様はそれなりに由緒正しき父上の幸の名を持ちかつ、田舎らしさを出してみました。これなら、信之殿の遠縁とか言えば通じましょうぞ。”

「でだ。半蔵殿・・・お主にもあるぞ。」
「拙者か？」

半蔵は干し芋をかみながら書面をのぞき込む。

”半蔵殿は呼び方が近く、印象に残る名前をと言っわけで”

「霧隠才蔵”ねえ。確かに似ておるが。」

”青海、寛殿はこのままでもそれほど問題がないと思われる。”

「なんだか・・・まあ・・・確かにそうなんだが。」

「なんか・・・こう切ないですな。」

青海が手紙に悪態を付く。

「じゃあ、これで終わりですか・・・。」

半蔵は足筋を伸ばしながら立ち上がるうとする。

「いや。」

”しま殿はどこか遠縁のご子息として見られそうなので・・・あえて名前ごと変えてみました。”

「え・・・俺の分あるんだ。」

そう言うつと信繁の肩越しに書面を見る。

「これか？・・・よくわかんねえ。」

「これか？猿・・・飛・・・佐助。だな。」

”しま殿は色々動きたがるので・・・どう見ても猿に見え申したので、この名前でもよいかと。まあ幼名ですし、後で変えて頂けてもいかと。”

その分を読むと男達は一斉に腹を抱えて笑い出・・・いや笑いを押し殺していた。

「ういつひひひひ。そりゃあいい。」

「ま・・・確かに・・・私たちですら・・・くくくく。」

「ま・・・だよな・・・つつつつ。」

「お前ら！何笑ってんだよ。」

しま・・・佐助は不満そうに怒りを表す。

「だってこれ・・・男の・・・。」

「それはこれが男の・・・。」

「これはなあ。男の奴だ。」

笑いを一巡通り越して元に戻った信繁にまじめな顔で言われたしまは、かたかたと震えだした。

「・・・な・・・なあ・・・。」

「でも・・・よく考えればこれでいいかもしれない。」
「どうしてだ。」

笑いをぎりぎりで抑え、干し芋を吹き出すのをかろうじて押さえ込んだ半蔵が不思議そうに信繁の顔を覗く。

「変に女が多ければ、それだけで勘ぐるやもしれん。それに比べれば男の格好をしていれば変に勘ぐられる必要はない。」

「確かにな。」

「あ・・・おう。」

半蔵のうなずきを見てしまも言葉を飲み込んだ。

「それに、折角僧正様とか言うお寺のお偉いさんだ。罰は当たるまい。」

「お・・・おう。」

「と言うわけで、お前の名前は猿飛・・・佐助だなよろしく。佐助。」

「分かったよ。佐助だ。よろしく。」

渋々ながら佐助は頷いた。

「後はあるのか？」

青海は期待して周囲を見渡すが、もう・・・該当者はいないはずだ。

「いや・・・ちよつと待て・・・。」

”ミリアは元々按針殿と一緒に船にいた婚約者殿の娘。按針殿がある程度は異国の言葉の幾つかを教えるそうです。拙僧の所にいたのは日本語と、彼曰く進んでいると言われている学問を教える為でした。なので、もし宣教師と会う事があるなら彼女はきつと役に立つでしょう。”

「・・・天海殿。」

”ただ、彼女はあの寺で一人疎外感を味わう日々でした。だから世が広い事を知ればきつといい子に育つと思います。だから、今しばらくはお連れくださいませ。”

「そんな意味が・・・。」

「どうかありませんでした？」

「い、いや。」

信繁は慌てて首を横に振る。

”この子の名前は美井ならきつと偽名でも通じるでしょう。よろしくお頼み申す。”

手紙を読み終わった信繁はじつと少女を見つめる。

「美井。」

「はい。」

少女は反応してコクコクと頸を縦に振る。今までは、あまり反応がない少女の感じも少し明るく見えた。

「これからもよろしくな。」

「はい。」

「それは？」

「この子の名前だ。」

「そうか。」

「よろしくな。美井。」

そう言うと言は美井の頭をなでると、にこりとほほえんだ。

”按針曰く、この少女ある国の・・・どこだか忘れましたがの国の忘れ形見だそう。名前だけは知られていけないと言っておりました。ご注意くださいませ。”

いつもの往来・・・いつもの木の梢、田舎の山奥の碓氷関は関所である。だが関所と言っただけ合っ怪しそうな人間は通す気はない。ここの勤務でも仕事があれば楽ではあるがここは閑職と言われても仕方のない僻地である。今日も旅路を急ぐ旅人の手形を確認する日々である。

「お前ら、名前は？」

「拙者、真田幸村と申す。」

「ん？真田？」

顔を覗いてみるが、よく分からない。

「どうしてここへ来た？」

「あ……いや……。」

「あの……ですね……この方……。」

そう言っつて小さい男がしゃしゃり出てくる。どうも、この集団で旅行しているんだろうか……。

「かの有名な真田信之様の遠縁に当たる方でして。」

野武士……幸村は不満そうにじつと役人を見つめる。その顔はきつとどこか不満があるのだな。

” おおかた職業など色々聞かれるので、こう答えれば、すんなりと通れると思ひ申す。半蔵殿にも徹底していただけるようお伝えください。 ”

「流石に江戸に行ってもなかなか飯が食べぬので、一度聞いた縁を頼ろうとこうして、一家で参っている次第でございます。」

「手形を見せてみる。」

役人の俺たちにはいつもの作業である。

「ほう、これは……。」

確かによく発行されている手形だが……珍しい、内府様の物だ。どうして……内府様の名前がある？」

「それは……。実は……妻が……大奥にいまして……。」
「ほう？」

多くはこの当時新設された世継ぎを生む為の特別組織である。

「そのついで頂いたので。」

「じゃあ、その妻はどこだ。」

「今は大奥でございます。」

「確か大奥つてのは？」

となりの与五平ならよく知っているはずだ。

「ああ。確か、女だけなんだと。だからそこで飯炊きぐらいはするだろうさ。」

「それでか。」

俺は納得したように手を叩く。

「じゃ、まあ通っていいぞ。」

そう言っつて真田一家達は通り過ぎていった。今日も平和な物だ。

こうして立っているだけでおまんまが食えるのだ。彼らもまた生きていくのに必死なのだ。

「でもさ、大奥つてさ。どのぐらい奥なんだよ」

「さあ？」

碓氷峠は今日も平和だった。

「ま、こんな物か？」

「焦ったな。」

青海は汗をぬぐう。

「あせった。」

しまも緊張したようだった。関所の横には番所があり、そこには常時二十人前後が待機している。

「これはまあ、普通の関所だ。むしろこれから先の方がきついぞ。」

「まあな。ここからが勝負だ。またしばらく街道は使えないしな。」

この周辺には街道筋に関所があるのには幾つかの理由がある。一

つは往來の確認。そしてもう一つはこの先に要因がある……。

「どうして……？」

少女は不思議そうに山を見つめる。

「ああ。この先は地獄だ。」

「ん？」

しまも不思議そうにこの先の峠道を見る。笥も額から脂汗がたれる。

「今までののは楽しい旅でも、こつからは死ぬほど難所の碓氷峠だ。」

「今まで出来るだけ食糧を使わなかったのは、ここの為だと言っつて

もいい。気だけは張ってくれよ。」

信繁はそう言って真剣な顔つきで峠を見つめた。

それからの道のりは日々がけや獣の警戒の日々だった。昼は周囲を警戒しながら進んでいた。夜は火を囲みながら佐助や美井達に字や武術、半蔵や信繁からは忍びの技についての話を教えていた。その間の山道は彼女達にとってはある意味修行そのものであった。

「まあ、こういう時も悪くはない。」

信繁はそう言いながら空を見つめた。最後の関所からもう1週間以上は経っていた。時折山の中腹を休みながら進む強行軍だった為、もう日の感覚が薄れつつあった。

「それでもある程度は急いでくれよ。俺も仕事がたまっているからな。」

半蔵は言いながらも空を睨んだ。

「でもこれは……。」

算も心配そうに空を見つめる。雲の流れが速く、また、肌に湿り気が吸い付いていた。

「ああ。確か、このあたりだと……。麓に村があるはずだ。」

「ん……？どうしたの……？みんな……？」

美井が周囲の慌てぶりに不思議そうな顔をしていた。

「雨がそろそろくる。」

しまが珍しくまじめな顔で空を見つめる。

「一刻か二刻（今で言う二時間から四時間）か……。それぐらいだな。」

信繁が空を見つめていた。

「雨具はあるのか？」

「雨具はあるが……このあたりは土がもろい。だから流される危険もある。念のためだ。降りた方がいい。」

そう言いつつ、下を見つめる。周囲の暗さはもう夜半と変わらぬほどである。曇りの雲の流れも速い。

「行くぞ。」

そう言つと信繁は一気に麓まで降り始める。

「は。」

その声に全員が下に向かつて走り始める。しばらくすると・・・日は沈み、夜も暗くなつてきた。当時の人々の多くは新月の暗闇にならなければある程度の物が認識出来る程度に夜に物を見る事が出来ていた。そのため夜走る事へは不安がない。

「でもこのあたりは・・・。」

「ああ。」

青海の不安そうな声とともに周囲への警戒を強めているようだ。

「何かあるのか。」

「昔聞いた事がありましたな。」

寛も不安そうな顔で急いで信繁の横を押さえるように固めにはいる。

「ん？」

「昔ですね。このあたりに、ちょうど武田の残党・・・まあ我々もそうですが・・・ガコの周辺一帯で悲惨な死に方をして・・・。」

寛の青ざめた顔を全員で見つめ、足を止めてしまふ。

「で、この辺一帯でその時の亡霊が出ていると言つんですよ。」

「ぼ、亡霊？」

佐助が驚いた顔で周囲を見渡すが、もう日が暮れた山。周囲に見える物はもうほとんど無い。

「おれ・・・。そんなの話でしか聞いた事ねえぞ。」

「まあ。昔この辺にいたときに話を聞きましたな。ちょうどすぎたあたりだったので見逃していましたが・・・。まあ・・・来るとは思わなかったのでつい忘れていました。」

寛の焦りが周囲に焦りを与える。

「そうか・・・。なおさら急ぐぞ。そんな変な物に邪魔はされたくないからな。」

信繁は焦りで額の汗をぬぐうと、周囲を見渡す、麓近くまで降り

てきている。

「少し待ってくださいよ。」

半蔵は近くの木を見繕うときにすると登り始める。

「あそこに光が。」

半蔵が声を上げると木を飛び降り、指さす。確かにあのあたりは少し明るい・・・ように見える。

「行くぞ。」

そう言つて全員はその明かりの下に全員が走つていった。そこには小屋と言つには大きい。家がそこにあつた。暗くて見えないが周囲には畑もあるみたいだ。

「頼もつ。頼もつ。」

信繁は全員を制し、前に立つて、戸を叩く。

「どなたでしょうか。」

そう言つて出てきたのはみすばらしい感じの・・・夫婦だつた。

「拙者達道に迷い申して・・・一泊お願い出来ないでしょうか。」

そう言い農民らしき男は外を覗く、雨は降り始めていた。雨はぽつりぽつりと降っていて、シトシトと音が鳴るような雨だつた。

「いいだよ。ま、ふとんはねえから、そこだけはんべんな。」

「ありがとうございます。」

そう言つと全員が中に入る。中はそれなりの広さで、全員が寝そべる・・・ほどはない。

全員が中に入ると窮屈にも見えた。中はそれなりの大きさの小屋だつた。そこに男が4人、少女が二人押しかけるわけだ。

「ま、よく来ただな。」

「はい。」

そう言つと中央にあるいろりの前に全員が座る。普段は、二人だけだろうが、こうしてみると・・・やっぱり全員がいるだけの場所がない。半蔵と算は壁に寄り添い、外側にいた。

「あんたら、どうしただ？」

「いやあ、道に迷つてしまつて。ちょうど見たら明かりを見かけて

ね。」

「そつか。大変だったな。」

男は、いろりに薪をくべる。

「はい。」

そう言つと妻らしき女性の人は奥から大きめの鍋を一つ持つてくる。そして奥からあまりであろう物を続々と鍋の中にぶち込んでいく。その間も男はじつと信繁を見つめていた。

格好だけで言えば、信繁の格好は侍と言えば侍そのものであった。

「お前さん……。名前は？」

「俺か……。俺は、真田……幸村と申す。」

そう言つと、信繁は大きく頭を下げる。それに合わせるように全員が頭を下げる。

「で、どうしてこんな所に、来たか？……いや……ここを通る人はほとんどいねえ。推して知るべしか。」

「すいません。」

そう言つて更に大きく信繁は頭を下げる。

「いいだよ。そろそろか？」

「すこし……。」

そう言つて半蔵は鍋のにおいをかぐと懐から何かを取り出し鍋にほおり込む。

「これは？」

信繁も不思議そうに見つめる。

「拙者の身内らで昔開発した……特製兵糧丸だな。で見たら、調味料とかが無かったみたいなのでな。そこで入れてみた。折角泊めてもらったお礼でもある。その御仁も食べてみたら。」

兵糧丸とは、当時忍者達が開発した非常用食糧の一種で、その多くは味噌に何かを混ぜ、固めて丸くて、乾かして、持ち運びが出来るようにした滋養強壯食である。その内容は里ごとや国ごとに違い、味付けや効果も違う。この戦国後期ぐらいになると、兵士に持たせた兵糧丸から”味噌汁”が開発され、”味噌汁”が全国的に広まる

前後とも言える。兵糧丸の食し方には色々あり、”そのままかじる”、”串に刺して焼く”、”鍋の中にほおりこんで、溶かして食べる”、”肉にすりつけて、一緒に焼く”などがあり、ある意味戦国時代が生んだ生活習慣とも言えよう。

「変わっているだな。」

そう言つて箸を取り出すと、男は中の物を一つ取り出し、口にはおり込む。

「こ、これは……。」

「特にこれは……今日みたいな寒い日とかに飲むと非常に旨い。」

半蔵は水に指を突け、なめてみる。思った通りの味らしく、満足そうな顔だ。

「おっかあ。食べてみる。うめえぞこれ！」

男は興奮して手招きすると、妻はゆっくりとお玉と器を持ってくる。

「皆さん。今日はこれしかありませんが、どうぞ。」

そう言つて全員の目の前に器と箸を置いて回つた。しまは食べようと箸を構えるが、それを信繁が手で制した。その後、皆の前庭つて座ると、自分の器に汁を器に入れる。茶色の液体が香ばしい香りを部屋中に満たしていった。

「これは……おめ……これはうまいだ。」

「だろ。」

半蔵は満足した顔だった。

「では、頂かせていただきます。」

そう信繁は器にお玉で汁をよそつと、皆にお玉を回し、食事を始めた。その日は鍋に満足すると、皆がそれぞれの場所で寝始めた。そのままシトシトと雨が降る中、皆が眠り、そして朝になった。

「昨日はほんとに……あれは……。」

「おはようございます。」

男は朝目が覚めるとそこには起きて座っていた信繁の姿があった。農村の朝は早いがそれにも増して朝が早かった。

「おはよう。」

「あんた・・・お侍さんなのはええな。」

「そうですか。」

「やっぱりお侍さんか。」

「はい。」

素直に信繁は頷いた。朝になると雨は晴れたようで、刺す日差しは明るい。だが、その男はじっと考えていた。しばらく下を見つめると、思い立ったように顔を上げた。

「お侍様。ここであつたのが縁だ。お願いがありますだ。」

そう言つて男は改まつて正座をすると信繁をじつと見つめる。その顔に信繁は答えるようにじつとみつめた。

「どうしました？」

「実はこのあたり・・・妖怪だかが山に住み始めたらしく、皆は不安がつていますだ。近くの奉行様に頼むんだけど取り合つてもらえねえだ。」

「ほう？」

「でだ。その妖怪を退治か・・・して欲しいだ。」

「・・・。」

その言葉に信繁はじつと考え込んでしまふ。

「詳しく聞かせて欲しい。」

「やつてくれるだか？」

「それも含めてだ。」

厳しい顔で外から見える山、を見つめる。

「とりあえず、聞いて欲しいだ・・・。それはもう10年ほど前ぐらいたつたと・・・思うだ。昔はあつちの山の所まで、山菜とかを採りに行つただよ。だけど、時折山ん中から大きな音とかするだよ。んでな。」

「時折？」

「んだよ。昔ん時に行つたときに”オウオー。オウオー”って不気味な声がするだよ。」

「狩りとかは行くのか。」

「ああ。昨日の夜の鍋とかに肉混ざってただる。だから狩り似も行くけど昔聞いた妖怪だっけ、その声はもつと大きくて不気味だよんでな。その山ん中歩くとさ。大きな声がしてさ。村のもんはどうしても大きな声にこわがってさ、んでな。そこである時・・・そだな・・・二年ほど前に一度村の若いもんがその山ん中に行っただけんど一行に返ってくる気配がないんだ。それ以来その山の事をみんな怖がって誰もいかねえだ。」

「その山はどこだ。」

「ああ、向こうだ、家の裏手の方の山だ。近くに田んぼもあつて、そこから何か来るかもしれないねえと思うと、不安になるだ。」

「そうか・・・。」

そう言つて信繁は歩いて家を出ると、そこには険しく大きい山がそびえていた。今までの山よりも更一層に山が深いようにも見える。「分かった。」

当時の武士がいかに非道をして、その多くの人々が村を離れない理由の一つはここにある。いかに武士が非道でも、村の外に出れば何者に襲われるか分からないからだ。山賊や獣、妖怪や怨霊と呼ばれる物それらが村の周りにいると思えば、そんないつ殺されるか分からない所に行くよりかは村の方がどんなに非道い事をされてもましに思えてくるからだ。

これが改善されるのは、江戸時代よりもずっと後になる。また武士の多くはこつこつという怪異とかから村を守るのも仕事の一部とされていた。

「だとして・・・どういう手を・・・。」

「どしただ？」

そう言い、信繁は近くを歩いてみる。夜には気が付かなかったが家の隣には畑があり、田んぼらしき物もあつた。田んぼ沿いを歩くと小さいが小川もある。なかなかの環境のようだ。

「ん？どうした？」

声に後ろを振り返ると半蔵が立っていた。

「この旦那にその山に済んでる妖怪とやらを退治して欲しいというな……。」

「ん？それなら受けねば……。」

「受けるつもりだが、少し見ておきたい物もあつてな。」

「何が……。」

そう言つて半蔵は周囲を見渡すが、そう言うほど変わっている物はない。遠目には泊めてくれた家の主人がじつとこちらを見ている。「昔、上田にいた頃の話だ……。」

信繁は近くに腰を据えると、その山をじつと見ていた。半蔵は意を察したのかすぐ横に腰を据える。

「あの時は山賊がいるとか言われてな、言つてみたら村八分にされたよぼよぼの親子がいただけだったと言う事があつてな。それ以来、そう言う話は話半分聞くようにしている。」

そう言つて半蔵も山を見つめる。そこには切り立った岩盤がいくつも見える険しい山だった。

「だとしても彼らの不安も変わるまい？」

「だよな……。後もう一つ不安なのがある。」

そう言つと、信繁は首を山裾に傾ける。そこには朝日に照らされた、集落が目映る。

「この村か……。」

この地は集落からは一刻（二時間）前後かかるであろうと思われ

る。「だから、よけいに勘ぐっているが……。」

「だとしても、どうする。ある程度は急がねばならないだろ。」

半蔵は呆れたように空を見つめる。

「親父とかは言っていた。困ったときに手を貸すのもまた、侍の努めだ。」

「分かつてはいる。だから”どうする？”って聞いたんだ。」

その言葉にごろつと信繁は仰向けに倒れ、空を見つめる。

「とりあえず、やってみようと思う。すぐに結果が出るとも思えないからな。そこら辺をどうするかだ。」

そう言つと晴れた顔で信繁は空を見つめていた。

「親父！」

「はい！」

そう言つと男は走って駆け寄ってくる。

「決めた。受けよう。でだ。幾つか条件がある。」

「はい。」

「一つはしばらくの間ここに泊めて欲しいという事。大方あの山だから山狩りに時間がかかる。その間だけでいいから頼む。」

寝転がりながら大声を出す信繁につい背筋を伸ばして答えてしまふ男であつた。

「はい。」

「もう一つは・・・その間、子供達の世話を頼む。」

「は・・・はい！」

その声に嬉しそうにコクコクと頷く顔に半蔵は一抹の不安さえ感じていた。

「と言つわけで、俺たちはしばらくここにとどまる。」

「はあ？」

開口一番に不思議そうな顔を青海はした。朝もしばらくした後、全員が外の畑に集まっていた。まだ四月中旬なので、まだ畑は耕されてはいないが、いい畑に・・・みえる。

「んあ。妖怪なんて俺たちには関係ないだろうが。」

「だとしても、一宿一飯の恩義。返すのが筋であろう？」

「確かにな。」

青海は洪々と頷くが、その表情は納得していないようにも見えた。

「でだ、幾つか考えてみたんだが・・・。」

「一宿一飯の恩義というわけじゃないが、青海にはちとあの山道はきつい。」

そう言つて裏山を指さす。

「で、青海には旦那さんと一緒にこの畑を耕してやつて欲しい。」

「ん……まあ……暇だからいいがそれでいいのか？」

「まあな。で、箕も一緒をお願いしたい。」

「それはどうして？」

「なんかな……見張りもかねてだ。後、そこに小川があるだろ。」

木を幾つか見繕つて細工物とあがればきつといい物が出る。頼んだ。

「分かり申した。」

何となく意味が分かったのか、箕は頷くと、立ち上がると、近くの山の中にすつと入つていった。

「美井。」

「……はい。」

「青海と一緒に留守番だ。農作業とかも覚えておいて損はない。」

「……はい。」

そう言つと少女はとぼとぼと歩いて行った。

「で、拙者は……当然山狩りだろ。」

半蔵はそう言つて腕をまわす。

「いや……別を頼みたい。裏取りを頼む。念のためもある。」

「……了解。」

そう言つと半蔵は立ち上がり、すたすたと麓に降りていった。

「で？俺は？」

佐助は不安そうに周囲を見渡す。

「俺と付いてこい。山狩りに行くぞ。」

「お、おう！」

そう言つとしまは立ち上がり、信繁の後をついて行った。信繁は家にいた男と幾つか話すと、妻が青海に駆け寄つていく。大方聞き入れてもらったようだ。それが終わると、信繁はしまに近づいてきた。

「とりあえずは話をつけてきた。山狩りなんだが、一緒に山をある

いて見るぞ。」

そう言って信繁は山の麓に向かって歩いていった。

それからしばらく、信繁一行の山狩り生活が始まった。青海は畑を耕したり、巻きを割ったりする仕事だった。算は木を数本切り出してきて、何かを作っているようだった。元々大阪の家中でも家具の幾つか簡単な物は算が作ったりしていた経験もあり、何かを作っていた。

美井は算達の後に付いてじっと作業を見つめていた。信繁達は裾野から少しずつ山頂に向かって歩きつつ調べていった。そして夕方になると半蔵がどこからともなく帰ってくる生活だった。その後半蔵は妻に捕まり、なにやら料理について教えているようにも見えた。「結構かかりますな。」

算の呆れた声と共に算の組み立てた簡素な小屋を見ながら周囲をうかがっていた。

「これは？」

「川が近いので、風呂などはいかがかと。後は土が乾けばできあがりです。後は、暇つぶしで小物などはどうかと思いました。」

「そうか。」

「で・・・そちらはいかがでしょうか？」

「こっちは予想以上に険しくてな。山頂まではなかなか行けん。信繁は呆れたように裏山を見つめる。」

「でしような。わたしでも上りたいとは思えない山ですからな。」
と算はため息をつく。

「で、そっちはどうだ？」

「まあな。幾つか話は聞けたが・・・肯定する物しかない。後はここので・・・。」

半蔵はもったいつけたように信繁に顔を近づける。

「ん？」

「ここのお百姓さんは・・・。」

「どうした？」

信繁もつられて顔を近づける。

「炭団子とかの加工品をしている。だから家が離れていた。大丈夫だ。聞く限り怪しい物はない。」

当時の炭団子、炭というのは早く火がつくとして重宝された燃料である。だが製作に大量の黒い煙が上がる為、村からは距離が離れている事が普通でもある。だがこれの有無は越冬に関わる為、珍重されていた。

「わ、分かった。」

呆れたように信繁は顔を離す。

「ただ妖怪がいる話によく聞いた。それとも一つ……。お主にはつらいかもしれないがこの周辺の谷で昔、武士が落ちたという話があつてな。それももしかしたらと言つところだ。だから村の者は近づかないらしい。だからと言つわけでもないが、このままいなかつたとか言つて帰るべきではないのか？ただの気のせいという可能性もある。」

「お化けが怖いのか？」

「そうではない。」

半蔵は無然とした顔で信繁から顔を背ける。

「なら、明日から手伝つてくれ。大方、数日で決着が付く。」

「了解した。」

「そう言えば算の方に変化はあつたか？」

「こちら無いですね。」

算は平然とした顔で組んだ木の様子を確認していた。

「一応聞いておく。お主は……。どうなのだ？」

半蔵は怪しそうに信繁を見る。ここ数日の成績はないに等しいからだ。

「まあな。幾つか確証が持てる。幾つかの歩行痕と、何者かがいるらしい。妖怪……。かもしれないが、何者かがある……。しかも複数かもしれない。まあ……。村で他の者で山狩りをさせたりしている

かもしれんが、それにしても様子がおかしい。」

「ふむ。それならある程度退魔の装備はしておいた方がいいか。」

そう言うのと半蔵は頭をかき始める。この頃の忍者の多くは最新技術である陰陽にある程度の知識を持っている事が多い。退魔法、天候観測、医療や呪符などである。

「あるなら頼む。」

「わかった。」

そう頷くと、ぶつぶつぶやきながら半蔵は家に入っていった。

「大丈夫ですか？」

算は心配そうに半蔵の背中を見つめる。

「大丈夫。あいつはそう言うところははっきりしている。信頼出来る奴だよ。」

そう言うときちょうど日が暮れて赤くなる山の頂を見つめていた。

次の日の朝、信繁達は近くの小川から山頂を目指し歩き始めた。

「ここは？」

「昨日調べた怪しいところだ。」

そう言い、信繁は近くの木を指さす。そこには枝が不自然に折られた跡があった。

「確かに・・・これは・・・。」

「誰かがいるという事だ。」

そう言うとき、じつと上を見る。そこには所々折れた枝があった。

「だがこれが声の主とは限るまい？」

「まあな。」

そう言うとき信繁はゆっくりとした足取りで音を立てぬようにゆっくりと山を登る。それに合わせて全員がゆっくりと音を立てぬように上っていく。それから一刻も立つだろう、そろそろ中腹と言うところまでやってくる。佐助が急に左右を見渡すと、口に指を当てる。その行動に全員が硬直をする。しーんとなった事を確認すると佐助が近くの岩盤に生えた草むらに腕をつっこむ。

「やっぱり。」

「ん？」

「この先・・・奥がある。」

そう言つて草を押し分けた先に空洞があつた。それを見た瞬間、全員が息をのんだ。

「いくぞ。」

そう言つて信繁は先頭に立ち、洞窟の中に入っていった。中は暗く・・・当時夜目が利くとはいへ洞窟の暗闇を見通すほどではない為、それほど先が見えるわけではない。

「またれい。」

半蔵は懐から小さな鉄の板を取り出すと近くの草を引きちぎり、鉄の板の上へのせ、火をつける。すると、周囲が明るくなった。

「おめ、これ何だよ？」

「ああ。これは簡単な明かり取りだ。こうやると、丁度いい高さになるんでな。」

そう言つて明かりで洞窟内を照らす。どうもここは自然が作り出した洞窟らしいが。

「ここかもしれない。」

信繁が軽く警戒しながら周囲を見渡す。

「ん？どうして？」

「この洞窟・・・他の動物の気配がしない。普通このあたりなら、コウモリとかの生臭い臭いがするが、それが少し乾いている。」

「そうなのか？」

佐助は不思議そうに周囲を見渡す。彼女自身洞窟には縁遠いため、よく訳が分からない。

「だと思つ。警戒は解くなよ。」

「おう。」

そう言つと佐助は腰の刃物を抜いた。半蔵は佐助の前に出ると、いつもよりはゆっくりと歩き始める。

「でも、どうしてこんな所に洞窟が・・・。」

「さあな。只。ひんやりしている。」

信繁もゆつくりと歩いてはいるが、様子を窺う色合いが強い。

「が、人・・・かどうか分からんが、何かはいる。」

半蔵は明かりの先を指さし告げる。その先には木の板らしき物が壁みたく道をふさぐように建てられていた。中からか細い・・・。明かりみたいな物がこぼれている。信繁はそれに気が付くと、乱暴に木の板を叩く。

「どなたかおりませんか！拙者、真田幸村と申す。」

「え、へあ、へ」

奥から女性らしき声が聞こえるのを確認すると、信繁は木の板野周辺を探りはじめる。

「おい、大丈夫なのかよ。」

しまは不安そうに半蔵にすり寄る。

「これで合っている。第一、木の壁があるなら、木と木の隙間で誰かがいるのは分かっているはずだ。警戒しているなら、おびき出せるし、敵意がなければ、それなりの反応があるはずだ。」

そう言って緊張した面持ちで信繁を見つめる。

「だ・・・誰だ？」

板の間の奥から声が聞こえる。

「俺は真田幸村だ。幾つか聞きたい事がある。」

奥の声の主はしばらく沈黙すると板の壁の一部が開き始める。

「入れ。見つけたりたくない。」

そう言つと三人は言われるままに中に入ると適当なところに腰を下ろす。

「で、お前ら、何のようだ。」

「幾つか聞きたい。お前、この辺で暮らしてどのぐらいになる。」

「・・・。わかんない。」

暗がりから聞こえる女性の声は薄明かりの燭台の光を持ってしてもなかなか全容が見えない。

「そうか、じゃあ・・・どうしてここにいる？」

「オラ・・・逃げてきただ。」

そう言つとふと女性の声の主の視線を感じる。不審がつているよ
うだが・・・。

「どこから？」

「南の山からだ。」

「南の。」

「どうして？」

「ん、あそこは・・・夜な夜な変な奴が徘徊してる。最近はこのあ
たりまで来てる。」

そう言つと、声の主は信繁によってくる。漏れ出る光からは鳥の
羽が見える。・・・臭いもきつい。

「・・・？徘徊？じゃあ、時折雄叫びを上げたりしているのか？」

「いや、オラはしてない。第一あいつらに叫び声あげても何も反応
しねえ。」

「村の者に手をかけた事は？」

「・・・ある訳ねえ。」

そう言つと、一度外を確認したらしく、しばらくして元の位置に
戻る。その頃にはしまがおびえたような顔を・・・いや、確実に怯
えていた。

「そつか。麓のもんに頼まれてよ。この辺に妖怪がいると。ならそ
の徘徊している連中だと思いが、いつ見た？」

「そだな。最近こつちに来ているから、今夜あたりに来るかもしれ
ん。」

「そうか。なら、そいつらをも見てみたい。夕方に来る。」

「・・・。お前らそう言つて騙す気じゃ無かろうな。」
暗がりから女性の声の主のきつい視線を感じる。

「・・・。」

その言葉に全員が押し黙ってしまう。

「そつだな・・・。」

”あ、お前ら！”

遠くの声に振り返ってみると、子供達であろう、数人の小さい影が確認出来た。

「ん？」

子供達は一目散に信繁に走ってくる・・・。

ドガッ！

勢いをつけて跳び蹴りを背中にぶち当てる。

「んってー！」

「お前ら、トリさんをどうする気だ！離れる。」

「・・・。お前ら・・・。」

子供達の顔は暗がりで見づらいが、暗がりの中でも、何か鼻をすする音と、目のあたりで輝く反射光があるのは分かった。

「おめえら！何してんだ！」

しまは立ち上がると、睨み詰める。

「・・・ん？村の者に頼まれてな、妖怪退治だと。」

「ん！おめえ！」

そう言う子供達は走ってトリさんと信繁の間に割ってはいる。

「トリさんは・・・妖怪なんかじゃねえ！だから、だから・・・。」

「わかってる。」

信繁は落ち着いて座ったままじっとその子達の瞳を見ていた。

「だからトリさんから妖怪の話聞いていたのさ。・・・だからその妖怪を退治してやるから安心しろ。」

そう言う信繁は強く音が聞こえるほどに大きく胸を叩いた。

「じゃあ、トリさんを連れては行かないんだな。」

「連れるってどこにさ。」

信繁の声に子供達全員が涙を流す。

「お前ら・・・信じていいんだな！信じていいんだな！」

「オラ、大丈夫だ。だから泣かないでくろ。」

トリさんも涙声で子供達に覆い被さり、涙した。

「少し、外の様子を見てくる。今夜・・・ここにいていいな。」

信繁は冷静にそう告げる。

「・・・分かっただ。この子達に迷惑かけねばいいだ。」

トリさんはそう言うのと渋々と頷いた。その声を聞き大きく信繁は頷くと信繁は外に出た。

「どうするよ。あれ。」

佐助は外に出ると不審そうに洞窟を見る。

「あいつも・・・妖怪だろうな。」

「・・・だが悪い奴ではない。どうする気だ？」

半蔵は言葉を続ける。

「うなり声を上げる奴を確認する。俺はここにいるつもりだ。」

「そうか。」

半蔵は大きく頷く。

「でだ、しま、頼みたい事がある。」

「おうよ。」

「下の村人に知られないように青海を連れてきてくれ。青海の事だ、かなり時間がかかるが、あいつが必要だと思う。」

「分かった。」

そう言うとしまは、左右を一度確認すると一目散に山を駆け下りた。

「で、拙者は？」

半蔵は空を見つめる・・・日はちょうど真上にあつた。

「俺と一緒にここにいろ。あいつが不審がる。もし暇があるなら、ある程度の用意をしておいてくれ。」

「どうしてだ？」

半蔵は不思議そうに周りを見渡すが、何も見えない。

「麓を調べていたときに複数の具足跡を確認している。人里を避けてかどうか分からないが、いくつもあつた、だが少し様子がおかしくてな。」

「ん？」

その言葉に半蔵は信繁に顔を近づける。

「それが、どうも足の間隔が普通の奴より短い。だから、けが人だ

と思っていた。だからさっきの場所にいた奴かもと思っていたが・
・。

「それは違った。」

「だな。」

「だと知れば、叫び声の正体が何者かだ。」

「何もなければ・・。」

「だろうな。」

信繁は周囲を見渡すと、山の斜面に経つ険しいところの為、下の川も遠くに見える。

「今晚わざと泊まって確認するつもりだ。」

「了解した。」

そう言つと半蔵は入り繰りにどかつと座り込んだ。

しばらくすると山は夕刻になり、子供達も心配層ながらも帰つて行つた。その間半蔵が木の枝を見繕い、子供達にオモチヤを作り、子供にあげていたりしていた。だが帰ると洞窟にも静寂が訪れる。

「お前、こんな生活いつまでしていた？」

信繁が、洞窟の入り口に座り奥に声をかける。

「そだな、生まれてからか・・もう覚えてねえ。」

「そつか。」

「お前、これが終わつたら、俺たちと上田にこねえか？」

「うえだ？」

「上田にやあ、お前みたいな奴がいてな。そいつん所に行つてみてはどうだ？」

「そだな・・それもいいかもな。あん子には迷惑かけねえ。」

トリさんは感慨深く話していた。

”おおー。おうおーん”

「でも、おめえ、オラみたいな奴が怖くないだか。」

「そういう奴と幾つか出会つた事があつてな。こんな事でこわがりやしねえよ。」

”おおおおおー！んんおおおおうおん”

うなり声とも、叫び声とも付かない声が周囲にこだまする。

「来たか！待ってるよ。」

「・・・オラも行く。オラの事でもあるしな。」

そう言っておくからどすどすと音が聞こえてくる。

「！！！」

入り口を見張っていた半蔵と信繁も一度目を丸くしてしまった。

月明かりを浴びて出てきた姿は確かに二足歩行であった。トリのよ
うな毛むくじやらの足をしていた。トリのような体毛がびっしりと
身体を覆っていた。腕は太く、背中にも羽毛がびっしりと生えてい
た。顔は人に近いが、毛は長く、至る所に毛が生えていた。だが驚
いた事はそこではない。その大きさだった、二尺（196cm前後）
ほどもある巨体と腕や足の太さであった。

「ん？どしたただか？」

トリさんは不思議そうに半蔵達を見つめる。しばらくして信繁は
その身体をなめ回すように見つめていた。

「なんか・・・こつ・・・いいねえ。」

「・・・！お主！」

半蔵が驚いて信繁の顔を見る。だがその間にもつめき声は近づい
ていくる。

「だが、拙者の予想通りなら・・・。たのもしいな。」

半蔵は刃物を抜き払うと声のした方角を見つめる。

「あの声に聞き覚えがあるのか？」

「・・・お主、大阪城にいて、一度も会っていないのか？」

「ん？」

「なら、説明の一手間が省けた。お主、怨霊退治の経験は！」

半蔵は懐から水筒を取り出すと持っていた直刀に水をかけ始める。

「昔はよくやったもんだ。」

信繁は腰の短刀を抜き払うと声の方を睨みつける。

「なら善し！」

半蔵は構えたまま声のした方に明かりを向ける。

「なにがあるだ？」

トリさんは不審そうに明かりの向こうを見つめる。明かりからはぼろぼろの具足を身にまとったゆっくりと歩く人間が近づいてくる。口々にうめき声を上げている。数人は何故か木にかぶりついている。

「死人だ！」

その声に反応して数人・・・数体の死人が声に反応してノタノタと歩いてくる。

「こいつらなんだ？」

トリさんも近くで見るのは初めてらしく、興味深そう見つめていた。

「お主！南の山で何か見かけなかったか？」

「そだな・・・そう・・・そうだな・・・昔の事だ。山で黒い奴が何かしているから、なんだと思ってみてただ。こいつらが立ち上がった。よく分けわかんねえから帰ったけど、それから叫び声がるさくて。」

「そ！れ！だ！」

半蔵は呆れながらも死人に駆け寄ると一気に距離を詰め、斬りつける。しばらくすると死人は動かなくなった。

「気をつける！死人は近づいた者全てにかみつく。」

「了解！」

そう言つと信繁は近づいて来た一体を短刀でぶち当て吹き飛ばす。だがしばらくすると立ち上がり、よろよろと信繁に近づいてくる。

「離れる！」

トリさんの周りに数体の死人がからみつくが、無理矢理ふりほどく。

「死人にかまれると！しばらくするとあいつらの仲間になって復活するぞ！」

「あ・・・ああ。分かった！」

「わ、わかっただ。」

二人はコクコクと頷いた。

「その水は！」

半蔵の様子を見た信繁の危機感ある声が死人の間に響いていく。

「これか！これは清めの水だ！これが一番効く。！」

「なら、悪霊と変わらんか。」

そう言うつと短刀を構えると呼吸を整える。

「行くぞ！村正！」

その掛け声とともに短刀が少しばかり輝きを増す。次の瞬間！信繁に飛びかかる死人に短刀でなぎ払う。その勢いにとばされた死人は動かなくなつた。

「それは？」

「ああ。代々伝わる物でな。退魔の刀よ！」

そう話しながらも数体を信繁は吹き飛ばしていた。

「流石にこの場所じゃあ刀は振り回せねえ。だからこれしかないのが玉に瑕だな。」

確かに周囲には太い木々が生え、刀を振るえる環境ではない。半蔵の刀は森林戦を考えられた少し短めの刀が用いられている。

「おらはどうするだ？」

トリさんが死人数体に距離を取り、はじき飛ばすも効果は薄い。

「自分の命は自分で守る！」

半蔵が答えるが、置いた燭台からの光の先を見ても死人の群れが途絶える事はない。

「だがこれは数が多い！」

信繁はトリさんとの距離を少しづつ縮め、庇うがその数は多い。

「何か・・・手はあるか？」

「・・・何体いるかだな。」

半蔵は答えながら刀を振り回すが、少しずつ、入口に追いやられてくる。

「トリさん！はいれ！」

「分かつただよ！」

トリさんは急いで洞窟の中にはいると信繁はその入口を身体でふさぐ。それに伴い半蔵も入り口を固める。だが数は多く、しばらく模すると二人の顔に焦りの顔が見えてくる。もう戦い初め、半刻（一時間）は経つ。

「早く来いよ……。青海……。」

”ぬうおおおおおおお！”

遠くから死人とは違う野太い声が聞こえてくる。

「青海！」

下の方から走って駆け上がってくる青海の姿が見える。その横では佐助も死人達をなぎ払いながら駆け寄ってくる。

「なんだあ！こいつら。」

「噛まれるなよ。」

信繁は声を上げる。その声にほっとしたところがあるのを半蔵は聞き逃さなかった。

「こいつら！悪霊みたいな奴らだ！青海、あれを頼む！」

「応よ！」

大きな体を揺らし無理矢理入り口まで来ると武器である鉄の棍棒を立て掛け、手を合わせる。

「時間だけは稼いでくれよ。」

「わかった。」

青海は信繁のうなずきを待たず、念仏を唱え始める。その声は周囲に響き普段の青海とは違う一心不乱に念仏を唱える姿に威厳さえ感じられた。念仏が響いてしばらくすると死人達の歩みが徐々に遅くなっていく。倒れる者さえ現れ始めた。

「……これは……。」

「まあな。これが縁でこいつと会ったようなものさ。」

しばらくすると青海が首を縦に振る。それとともに声の根元に向けて歩き始める。信繁は先導して歩き始める。半蔵も明かりを持って前を照らす。周囲は死体の山となっていた。

「これは……。」

半蔵は驚いて青海を見つめていた。

「こいつ腕はいいんだけどな、酒が好きで寺を出てな。それで俺ん所に来たわけだ。」

「そ、そうか。そう言う事が出来るなら早く行って欲しかったな。」

半蔵は呆れて青海を見つめていた。しばらくうろつくくと、死人の姿は見あたらなくなり、周囲に死体だらけになった。

「これ・・・位でいいか・・・。」

青海は息も絶え絶えに信繁に聞いてくる・・・まもなく木の幹に無理矢理寄りかかった。

「ああ。感謝する。」

「すごいな・・・！お主・・・！今までお主の事・・・只飯食らいと思っておったぞ。」

半蔵は感心したように青海を見つめた。

「それはないぜ。」

青海は口を少しつり上げた・・・それぐらいしかできなかった。

「すごいな・・・お前ら。」

トリさんが感心した顔で近づいてくる。

「これ・・・結局何なんだ？」

「これか・・・死人だ。」

「それは分かった。」

信繁も不思議そうに死人の跡を見つめるが、もう普通の死体に見える。

「昔な、戦場跡があるとその死体をよみがえらせる反魂の法を試した奴がいてな。それは理性さえなく只歩き、かみつくだけなんだ。

ただな、かみついて死なせた奴はあいつらの仲間になっちまう。」

「そんなのが・・・。」

半蔵はじつと死体を見つめる。具足の胴の部分には四菱が刻まれている。昔・・・武田の兵士であったのだらうと思われる。

「拙者が見たのは各地でもあるが、一番最近は大坂城だった。」

その言葉に青海達は言葉を飲んだ。

「拙者たちがいた、正門周辺は最初普通の攻城戦だった。だがしばらくして何故か同士討ちを始めた。不思議に思い兵をかき分け近づいてみればどう見ても死んでいる兵士達が立ち上がり、味方に向かって襲いかかっていた。どうも近くで動いている奴に本能的に襲いかかっているようだった。これで混乱した兵士達は一目散に逃げ出した。むろん後続は突撃する。」

そこで混乱した兵士達は撤退を余儀なくされた。むろん死人を確認した我らは退治したが、その時には兵士達の士気はなくなり、攻める事は出来なくなった。そして、冬のあの日。俺たちは引き上げる事にした。」

その言葉に全員が絶句した。

「例え死人がでるにしろ、戦闘中で死人が出た事はなかった。だから徳川軍は慌てて対策を立てようとしますが、それが数多くの人間がいる戦場で出来るはずもなく、裏門は・・・お主が奮戦したお陰で攻めきれなかった。」

その言葉に信繁はうつむいてしまった。正門でそんな事が起きているとは考えた事もなかった。

「そして・・・撤退した。」

「だからお主は死人の事を知っていると聞いた。」

「俺は・・・退治はしてきたが、使った事はない!」

信繁はじつと地面に転がる死体を見つめた。もう動き出す事はない。

「おれが豊臣を嫌いのなのは、これのせいでもある・・・だから・・・。」

そのまま半蔵は押し黙ってしまった。全員がその姿をじつと見るめるしかない月の明るい夜の事であった。

「でもいいだか?」

「幸村兄ちゃんが言ったんだ。いいだろ。」

結局朝まで念のため洞窟で仮眠を取った一行はトリさんを連れて山を下りる事にした。いつまでも逃げていては為にならないと判断

したからだ。むろん子供達にも説明した。最初は不安だったが最後には折れてもらった。

「来いよ。」

信繁は先に行つて家の主の所に向かつていた。

「なにがある？」

「付いてくれば分かるつて。」

そう言つて信繁は旦那を引きずつてきていた。

「どれ……。ああ！よ、ようかい！」

旦那が顔を上げるときに隠れは恥ずかしそうな顔をしたトリさんの姿があつた。

「やつぱだめだあ。」

「すまん。頼む！こいつをここで引きつてもらえないか！」

「確かに退治はしてもらつても……。」

急な事で腰を抜かした旦那はそのままの格好でじつとトリさんを見つめていた。

「すまん。頼む。」

そう言つと信繁は腰を抜かした旦那の前に正座すると頭を思いっきり下げる。それを見た子供達も駆け寄つて頭を下げる。

「「お願いします！」」

頭を下げた声に篋も遠巻きでこちらを見つめる。

「……」

黙つたまま立ち上がった旦那は、そろそろとトリさんに近づぐ。その大きさは極端な物で、かなりの巨体でもある。

「手伝える事なら何でもしますので、置いて……。ください。」

トリさんのか細い声が旦那の頭上から響く。

「……。おらを食わないだか？」

「……。くわねえだ。」

「……。分かつただ。お侍様。退治してもらつたから……。村長には明日、紹介するだよ。家に来い。今日から……。家族だあ。」

声がかすかに震えながらも、旦那は信繁を振り返つた。その声を

聞いた瞬間トリさんは喜び旦那を抱き上げるとそのまま一緒に回り始める。

「あんりがとだよー。」

「感謝する。」

信繁が頭を下げたまま答えた。子供達も嬉しくて、振り回されていた旦那と一緒に回りはじめた。・・・旦那は・・・気絶していた。

第八節 四月下旬 上田（前書き）

長い？旅をした信繁たちもついに信繁の故郷上田にたどり着く。そこで待っていたのは・・・兄、信之であった。それでも又信繁たちは・・・。

第八節 四月下旬 上田

第八節 四月下旬 上田

死人を退治し、トリさんを村人に紹介した次の日から信繁一行は山中にいるかもしれない死人を警戒し、街道沿いの山道を進む事をやめ、街道から直接中仙道を進む事にした。そして一週間後の四月下旬……。

「おおー。懐かしい！懐かしいぞ！」

信繁は街道から見える都ほどではないものの人が多くそれなりの城下町を見つめる。

「おおー。久しいですな。」

「ん？ここは？」

青海達ははしゃいでいるが、半蔵は複雑そうな顔をしていた。

「真田の居城だ。」

「え……。」

佐助は驚いた顔で信繁を見つめる。

「正確には信繁殿の兄、真田信之の城だ。」

半蔵の苦虫をつぶした顔は更にひどくなる。

「……ほんとに？」

佐助と美井はふしぎそうに信繁を見る。長旅で髭がぼさぼさで、どう見ても良家の人には見えない。

「じゃあ……あの言い訳って……。」

「半分本当なんだ……。あのいいわけ……。」

しまは呆れた顔で算を見つめる。

「まあな。」

「ふん……。ここが目的のくせに……。」

半蔵は何かふてくされた顔をしている。

「お主はどうしてふてくされる。」

算の不思議そうな顔を見つめる。

「ここにも忍びの里があつてな。またしばらくは仕事ずけだと思つと少々腹が立つ。」

「？」

しまは不思議そうな顔をしている。

「徳川領地内……まあ大半以上の場所の忍びの里は今、ほとんどが確か……。」

「お庭番……。」

「そう、お庭番という形で併合されておる。」

「へー。」

青海は感心したように半蔵を見つめる。

「でもさ、どうしてお庭番？」

佐助は不思議そうに見つめる。

「ああ……まあ……。雑な物さ。主の庭によく来るだろ。」

「ああ。」

「で、近くの大名とか来たときに職業を聞かれると、お庭番（庭の整備をする者）と言ってごまかす。だから、お庭番。」

「……何かかつこわるい。」

「正式名称なぞ知っているだけで、そいつは暗殺対象だ。……お主とかも知りたいか？」

「い、いや、いい。」

半蔵の苦虫な顔とは裏腹に、算は歩きながら周囲を見渡す。むろん一行は城近くの屋敷に向かつて歩き始める。

「でも、どうして……じゃあ、だからといってここで仕事が増えるんだ？」

「……ん。ここでは言えん。」

半蔵は周囲を見渡すが、もう、武家屋敷の町並みを抜け、目の前には大きなお屋敷があつた。そこには老輩の門番と、若い門番の二人が護衛していた。

「よ。」

信繁は手を挙げて挨拶をする。それを見て、門番は目を丸くしていた。

「の……ぶ……しげ……さま？信一……繁様ですよ……ねえ。」

「せ、先輩、知ってらっしやるんでスカ？」

若い方の男が不審そうに男達を見つめていた。

「お……。信一！」

「あ……。はい！」

「この方達を奥へお通ししろ。俺は伝えに行ってくる。」

「お……。あ……。はい！」

「本当に……。そなんだか。」

しまは呆れて門番達の動きを見ていた。

「これは旨い酒が飲める。」

青海は下をなめずった。大名の本家なら、大抵いい酒を常備しているのは当たり前とも言える事だからだ。

「こちらへどうぞ。」

その声に訳も分からず門番は奥に指さす。そこには大きな門構えがある。家中では時折悲鳴や、叫び声が聞こえる。普通の人からすれば何が起きたかと思つほどの騒ぎだ。

「酒は……。旨いのが飲めればいい……」

青海に同意する信繁の顔は少し緊張してい……。次の瞬間身体を強張らせ、信繁が右方向に構えをする。それを見て全員が不思議そうな顔をする。しばらくすると砂利を走り抜ける足音がする。その音に横を向こうとした瞬間には信繁の姿が無くなり、目の前にはこざっぱりとした髪をおおざっぱにまとめただけの青……。中年がそこにいた。

「……！」

全員が絶句する中、その男は左側だけを見つめていた。

「相変わらず……。」

「久しいな。」

「兄貴……。」

その姿に左を向けば、腕に草履の跡を残して膝を払い立ち上がる信繁の姿があった。

「……その様子で……病気ですか？」

半蔵の呆れた半眼の顔は、全員が見つめていた。

「お……。これは……伝令どの……。いつの間に豊臣に鞍替えを……。」

あっさりとした顔で受け答えるする姿は、どことなく卓越した何かを思い浮かべる。

「いや、お目付役だ。」

「そうだろうな。お主のような信者が簡単には寝返るまい。」

そう言っ懐から手ぬぐいを取り出すと中年の男は汗をぬぐう。

「そうだ……。こいつらは？」

「供の者だ。幼子もいるから、激しいのは無しな。」

そう言つと青海達が啞然とする中、中年の男は大きく一礼をする。

「信繁がお世話になっている。上田城城主……真田信之と申す。

お見知りおきを。」

そのきれいな礼と声と、先ほどの行為とのギャップはあまりにも……啞然とさせるには十分な物であった。

「久しいな。」

応接間の一室、懐かしい畳のにおいをする部屋に二人は向かい合うように座っていた。

「だな。」

信之は大きく頷く。

「で、この城に何のようだ？」

「これだ。」

そう言つと信繁は懐から、大きめの手紙を一条取り出す。

「これは？」

信之は手紙をじつと見つめる。その手紙には大きく”真田信幸へ

”と書かれた手紙だ。

「父上の・・・遺言だ。」

信之は覚悟したようにその手紙を開く。しばらくじっと字を読んでいた。雀のさえざりだけがその部屋に響く。

「そうか・・・。感謝する・・・。」

そう言っつて信繁に大きく信之は一礼する。彼にとっての一番の心残りには父昌幸の事だけであつた。

「葬式は？」

「九度山でそれなりの物をあげた。」

「・・・お前はやっぱり豊臣に付くのか？」

信之は不思議そうに信繁を見つめる。幾つか顛末は聞いていたよ
うだ。

「まあな。それに昔いた大阪城が焼けるのは忍びない・・・。」

「分かるが・・・死ぬぞ？」

静かに・・・それでいて力強い声が、周囲にまで響く。

「戦場では、死はつきまとう。」

「死に行くだけが土道ではないぞ。」

「・・・まあな。だが、一度決め、主君を持ったのだ。・・・それもまた土道。」

「なら止めはしない。」

信綱は一息大きな息をつくとあぐらを少し崩す。

「そうだ、兄貴。半蔵から・・・。」

そう言っつて信繁は声を潜める。

「関ヶ原とかの話は聞いたか？」

「どんな話だ？」

「宣教師とか・・・。」

「まあな。立場上と言った方がいいがな。」

呆れた顔で正面を見つめた。

「でも、信用出来ない面もある。それにそれほど精度も高くない。」

「だと言っつて無視する話じゃあない。」

「分かつてはいるが……。まあ、俺の方も調べてはいるが、なかなか確認までは至らない。お前の方が思い当たる節があるんじゃないか？」

信繁は頭を巡らせ、じつと考える。そう言えば、淀君の側には数人の黒づくめの男がいたような……。それほど気にはしないし、戦場で黒づくめや宣教師は珍しい事じゃあない。

「まあ……。色々あるが……。」

「まあ、言えるのは、今、外の国は……。朝鮮出兵の頃前後もそうだが、海の内こうは大混乱期にあると言う事だけだ。」

「そうか……。」

じつと外を見つめながら信繁はいくつもの思いを巡らせるのだった。

「城、城見せてくんねえだか？」

しまはわくわくした顔で、算と先ほど見かけた門番の所に向かっていた。

「う、上田城ですか？」

若い門番の男は慌てたように近くにある上田城を見つめる。

「そだそだ。」

しまは目をきらきらして隣接するあまり大きいとは言えない城を見つめる。

「……無茶を言う物ではありませんぞ。本来城というのは戦などの緊急時以外は人が立ち入らぬ。ま……。住民の為の避難所でもありますからな。」

算も上田城を見つめるが、みすばらしいとまでは行かない物の、それほど堅牢な城には見えない。

「これが十数年前に、徳川軍5〜6万を3千で追い返した城とは……。」

感慨深く算は見つめていた。

「私はそれ以降に来たのでよく分かりませんが、この辺り一帯では

それが一種誇りになっているようで……。」
「ん？」

「当時上田城には1500しか兵がおらず、もう一つの城も守っていた為、この城の戦闘では住民達も一丸となって戦ったとか……。」

「では統治も大変でしょうな……。」
じつとそのぼろぼろの城を見つめる。この話をしまはじつと感心したように見つめる。

「と言うわけではないでしょうが。このあたりの上司の方や、昔からいる人々は皆下々と仲がよいのですよ。」

「そうですね。」
そう言っ普通よりはこじんまりした武家町を見つめる一同だった。

「でも……ここでゆっくりしていいのか？」

「どういう事だ……兄貴。」

信繁はあぐらをかき、信之が持ってきた大阪城周辺見取り図を囲みながら、目印の付いた木の駒を所々に配置していく。

「今、急速に戦の準備が進んでいる。」

「やはりな。」

「……知っていたのか？」

信之はそう言いつつ駒を置いていく。

「まあな。だが、こうして手をこまねいている訳じゃあないが、先に父上の手紙を渡しておきたくてな。」

「だとしても……そうか……。」

信之ははたと手を止め、じつと駒を見つめた。

「それでか……この動き……？」

「どうかしたのか？」

「いやあな。変な命令が裏で回っておつてな。」

「ほっ？」

信繁は自分の近くに置かれた木の駒を手に取ると確認を始める。

「それに不審がっておったところだ。」

「どんな？」

「大阪入りの直前で何故か全員待機せよというお話だ。部隊もあるから、あまり待機させると費用も馬鹿にはならん。」

「で、兄貴は向かうのか？」

「いや、俺は親父から・・・代々のこの地を守るだけさ。あんなのに興味はない。」

そう言つと”真”と書かれた駒を大阪城側に置いた。

「で・・・戦はいつ頃だと思つ？」

「早ければ・・・5月ぐらいか？」

「急にだな。」

お互い・・・何故か下の盤面に集中し、信之は大きな駒を奥の方に並べる。手垢が多くついていて、かかれた”徳本”と書かれた字がかすれてはいた。

「だからこんな所でとろしていると戦が終わるといふ事もあると思つぞ。」

「でもまあ・・・お前も大物になつた物よ。」

呆れて信之は信繁を見つめる。その様相はあのころと少し・・・大人びてはいるがそれでもあのころの無邪気さは失われてはいないように見える。

「そうか？」

「こうして駒として並べられるだけな。」

そう言つて二人は盤面を見つめる。そこには多くの大名の名前が書かれた駒が各所に置かれていた。

「それだけ成長した俺を褒めてくれてもいいが・・・厳しいな。」

そう言つて、相手の駒の数を数える。今回の駒の数はどう見ても・・・徳川方が4倍以上ある。数万を超える軍隊同士での3倍は覆し難く、また歴然とした差として現れる。

「そうだな。今回の徳川殿は本気だ。前回までの遊びとは違つ。今

回は正式出陣とは別に向こうにも出陣要請があつた。流石にあつちだけは断り切れなかつた。」

「ここで言う”あつち”とは、北部にある忍びの里の”旧武田忍軍”の部隊である。数多くある忍びの里の中でも破壊工作と地脈（鉱山関係や、水脈関係）に詳しく、この地に置いても数多くの温泉の開発を行っていた。」

「それは構わない。」

信繁はきつとした目で見つめる。お互い本気という事だ。

「でも・・・あのお方が相当怒れてはいよう。」

「だな。と言いたいたいところだが、こうして平和が長いとこれはこれで思ってしまう。」

信繁の顔をじつと信之は伺い、頷くのを末と近くの駒をするすると動かしていく。

「ここで言うあのお方とは、”旧武田忍軍”相談役”お吉の方”のことである。」

「だからこそだよ。」

そう言うと言信繁は動かしたのを確認してから、幾つかの駒を動かす。しばらくお互い無言で駒を動かす。しばらくして信之の手が止まる。

「お前・・・。」

「今回籠城線は出来ない・・・だろ・・・。」

「ちよつど動かし終わった駒の後には”徳本”と”真”の駒が隣り合っていた。」

「お前・・・ちよつど工事が終わる前だから、知らないか・・・。」

「まあ・・・お前が向こうで確認するといひ。只・・・この通りならその前に落ちる公算が高い。」

「そう言つて近くの駒ですつと”真”の駒をどける。」

「どつ思つて？」

「・・・出来るが・・・。」

じつと配置図を睨みつける。

「駒が四つか五つ多すぎる。全滅の可能性が高い。」

信之はその盤面を見つめる。

「そこは・・・キツツキが突いて・・・敵でも削るぞ。」

「そっか。」

「確かに・・・。」

信之は黙って幾つかの駒を地図の外に出す。

「これなら行ける。」

「・・・上手くいくか？」

信之は信之が動かした後の盤面を見つめ、唾を飲んだ。そこにもまた・・・”徳本”と”真”が並んでいた。だが、もうどこかす周りの駒はない。だが周囲には多くの駒が取り囲む状況には変わらない。行く、行かないではない・・・やるしかないさ。」

「そっか。なら、今夜は軽い酒宴と行こう。覚悟は決めろよ。」

「ああ。」

そう言う信之の目はどこか寂しそうだった。

「久しいな・・・半蔵殿・・・。」

山奥のある庵・・・夕方にもなるうこの時に半蔵は酒を持って来ていた。

「ああ・・・お吉の方。」

「その名は人が付けた名よ。」

目の前の半蔵をじつと見つめていたその女は威圧するような目でじつと半蔵を見つめた。年齢は妙齡ではあるが、その妖しさはこの庵の雰囲気とは合いそうになかった。その女性の視線に半蔵もあらがうのではなく、何か悲しそうな目で見ていた。

「入りな。せつかくだ。水の一杯ぐらいなら出すよ。」

そう言うとお吉の方は奥にすつと入っていく。その後をついて行った。そこはすぐに畳があり、匂いもよく見える。

「頂きます。」

「一応は上司なのだから、もつと胸を張りな。」

「貴方相手に胸を張るのは……」

「分かつてはおるよ。お互いな。世の趨勢を悲しむのには丁度いいと言ったところだ。」

そう言つと半蔵は畳にあぐらをかいて座る。

「昔やり合つた仲がこうして上司……部下で座るのはいつも複雑よ。」

その昔、関ヶ原が終わつた直後、最後の障害である上田城を陥落させるべく、半蔵達はこの周辺にある”旧武田忍軍”を襲撃した。

その時二人は刃を交え、半蔵は退かされた。だが、半壊までなつた忍びの里はもう、上田城への援軍も出来なくなつていた。結果、真田家は投降に応じざる終えなかつた。

「でもそれが時代。貴方が一番知つておりましように。」

「長く生きた中でもこうして……まあよい。」

そう言つてお吉の方は頷くと茶碗に水をすくい持つてくる。自分の所にも一杯の水が置いてある。

「で……今回は？」

「出来れば今度こそ。大阪に手勢を向かわせて欲しい。そしてあの死人を押さえて欲しい。そのために各地の忍びの里に伝令を飛ばしている。」

「……やはりか。」

お吉の方はしばらく半蔵の顔を見つめる。

「どのぐらい来るかね。」

「今のところ、前回出兵した風魔は村の再興で忙しく、黒脛は動くが伊達政宗の出方しだい。こっちは前回と一緒に部隊は出すが、死人相手の戦闘に不慣れな者が多く戦闘は不利だ。他の里も行っては見るが……。ここしか頼りになる連中はおらん。頼む。」

前回の冬の陣ではこの里の者は戦闘には参加しなかつた。この里の者を人里に晒すわけにはいかなかつたからだ。

「この事には信之殿からの意志もある。」

「・・・そうですね・・・。」

半蔵はうなだれた。

「攻城戦まで持ち込む事が出来れば紛れる事が出来よう。それ以降ならお助けいたします。そう、頭領には進言しておこう。一応私が手勢を連れて行く予定だ。」

その顔に半蔵はばつと顔を上げた。このお吉の方というのは頭領はいるが実質の権力を握る事実上のお頭でもある。

「・・・感謝いたします。」

その言葉に大きく頭を下げた。

「その言葉しかと受け取った・・・だから・・・その代わり・・・出来れば彼らに酒をくれてやってくれ。」

そう言ってお吉の方が横を見ると、酒の匂いにつられた数名の小さな妖怪達が玄関先にいた。

「分かり申した。で・・・杯とかはあり申すかな。」

半蔵は立ち上がると杯を探し始めた。

「酒があると待ってみて・・・これか・・・。」

と、目の前の食卓を見つめる青海の目は嫌そうであった。

「皆の衆、今日は・・・これから旅立つ弟の戦勝祈願だ。無礼講だ！」

「俺は好きだぞ、これ、村じゃなかなか食えんぞ、これ。」

信之の挨拶を横目にしまは興味津々と皿に盛られた小粒の物を見ていた。

「これこれ、その坊様。早々このような珍味はなかなかでないですぞ。」

向かいの奥方らしき女性はにこにこして皿を見つめていた。

「この・・・虫い・・・みたいのは・・・。」

青海のげんなりする顔とは裏腹に算は皿の佃煮に手を出していた。「蜂じゃ、蜂。精が付くぞ。」

そう言い皆が食べる様に青海はそろそろと箸を突き出す。

「いやあな……。昔……。だな。蜂に刺されそうになって……。な。」

「こいつは人を刺す蜂ではござらん。今日の馳走ですぞ。」
そう言つてパクパクと口に放り込む筧とは対照的に青海のに箸は止まっていた。

「ま、それは人それぞれさ。俺も昔はこいつを食うに抵抗あつたし、こつ見えても仏門の身。それは当然だろ。」

「確かに……。そうでしたな。すまない青海。」

そう言い素直に頭を下げる筧とは裏腹に、青海はまた微妙な顔になつた。

「すまん。これは格好を見れば分かるはずなのに……。酒も飲めぬ……。訳ではないな。だとすると……。すまん。」

そう言い、信之は近くの女性を手招きし、耳打ちする。それを聞いた女性は廊下を抜け歩いていった。

「こちらこそ……。お気を遣わせました。」

青海も丁寧に礼をする。

「でも……。お殿様つつつても……。そんな偉そうじゃないだな。」

「まあな。」

信之はさわやかな笑顔で応じる。その様子を微塵にも介さぬまま、周囲の女性達と笑いながら、会話をしている……。

「殿様とかと言つても結局は周囲の人から食わせてもらっている居候見たいな物だ。だから、むしろここの皆とかに敬意を払う。それが真田の教えの一つだ。」

「へー。」

蜂をつまみながら、佐助は感心したようにじつと信之を見つめる。その間にも美井は白米をよく噛みながら食べていた。

「こちらでもどうぞ。」

そう言つて青海のとなりに来た女性はそつと少し大きめの野菜の漬け物を置いて、そそつと部屋の外に出て行つた。

「これは？」

「ああ。家でつけたぬか漬けた。」

「それはありがたい。」

青海は蜂の佃煮の小皿を脇にどけ、ぬか漬けを一口口に入れる・
。

「お・・・これはいい感じだな。」

その味に感服したのか、器一杯に酒を注ぐと青海は一気におおる。
「まあな。京の都には及ばぬが、ここはここでいい所よ。」

信之はそう言い開けた障子から庭と外を見つめる。そこには美しい月と、青々とした木々の波打つ様が見える。涼やかな風が酒宴場に入り込み、若草の香りが一帯を覆う。

「そうだな。」

信繁は落ち着いたのようにじっと空を見つめる。空に雲はなく、月が煌々と輝いていた。

「みんな・・・生きている・・・。だよな・・・。」

ぼつりと言う信繁の声に全員が振り向いた。その声はどこか寂しげで・・・それでいて何かこう悲壮な事を連想させる感じであった。
「早々寂しい事を言うでない。」

声とともに吹いた一陣の風に皆が目を背けると、一人の簡素な着物を着た・・・如毛とを思わせる妖艶な女性と・・・半蔵が庭に立つていた。

「お・・・お吉の方様！」

信繁は驚いたように慌てて正座した。それにしまや青海達は驚いて女性を見るが・・・。普通の人間にも見える・・・。と言いたいところだが、青海は何かに気が付いたようで・・・顔をしかめ、苦虫を押しつぶしたような顔をしていた。

「よいよい。無礼講であろう。儂も・・・一杯貰えぬか。」

そう言うつとワラジを脱ぎ、信繁の横に座る。その様子に周囲の女達は驚いたように少し距離を置いた。

「久しいのお。」

そう言いつつなめ廻すようにじっと身体をしばらく見つめる。

「本当に……いい男に育った。昔はあんな可愛い稚児だというのに……。」

「い……いやあ……それ……ほどでも……。」

信繁は緊張やら何やらで押し固まってしまふ。その異様な雰囲気一同は押し固まってしまふ。……半蔵もちやっかりと端の席に座り、青海の側の酒瓶から酒をついでいた。

「お吉の方様……。からかうの其処までにしていただく。見てご覧なさいませ。信繁がこんなにも恥ずかしくて視線を合わせようとしないじゃありませんか。」

信繁も軽い口調で制しようとしてはいるが、その声に潜む緊張は誰の耳にも明らかであった。

「分かつておる。久しくて……つい……な。ま、こうして元気なら嬉しいという物よ。」

「この御仁は？」

算が勇気を振り絞って声をひねり出す。

「あ……ああ……。このお方は……。」

信之の声を遮り、お吉の方が算達の側に寄る。

「儂はなあ……。ま……。信繁の師匠と言ったところかな？」

「……へ……？」

半蔵はつい間の抜けた声を上げてしまふ。

「昔からよく知っておる仲でな……。赤子の頃はそれはもう……。二人とも可愛かったもの……。」

「本当か？」

佐助が驚いて信繁を見つめるが、その気恥ずかしそうな顔は本当だと……。顔だけでも物語っていた。

「……お前……。おもしろいな。この私に気圧されぬ者がいよつとは……。」

「……関係ねえ。」

「おもしろい子じゃ。」

笑いながらお吉の方はしまを見つめる……。

「お前・・・きつと大物になるぞ。」

笑いながらお吉の方は信繁に向き返る。

「信繁・・・ここに来たついでだ。ここに残れ！」

その言葉に全員がお吉の方を見る。その顔は明るく爽快な笑顔だった。

「・・・。」

一部の人間は啞然とし、一部の人間はぐつと息をのんだ。

「すまねえ。師匠。俺にも・・・こう見えて・・・守る家族と子供がいる。」

「だったら儂が一走り、そいつらを連れてくる。」

急に悲愴な顔になるお吉の方の顔を信之はつらそうに見つめる。

「それだけじゃねえ。こう見えても、馬鹿かもしれないが・・・主もいる。」

「だったらそんな馬鹿、見限ればいい。お主達はやはり両方ともこの地に残つて、おればよい。主が追いかけるなら、お主だけは偽名を使えばよい！この領地にいる限り誰も・・・誰もお主に仇成すものはおらん！」

「師匠・・・俺がいる。」

その言葉に全員がまた絶句してしまう。

「どんな主でも、命がけでついて行くのは親父が言った・・・親父から教わった事だ。親父だけは裏切れねえ。主を裏切った俺を・・・家族やみんなを裏切った俺を・・・俺が許せねえ。」

「信繁・・・。」

お吉の方からひねりである声は・・・かすれ、聞こえる者は少数だけだった。

「師匠がどう言おうとも今回だけは・・・俺は主を違える事は出来ぬ・・・。こうして付いてきてくれる奴らがいる。そして家族もいる、そして・・・それらの出会いの場を作った主がいる・・・。裏切る事はできんよ。」

その思い・・・覚悟は信繁の目を見れば全てが納得出来た。

「ふ……信之殿……」

お吉の方は何かすがるように、信之の方を振り返り、何かを話そうとした。その時の信之の……信繁と似た覚悟の瞳に一瞬たじろいでしまう。

「……知っておったな。」

「それは……」

信之は何かに気が付き目を伏せる。その行為にやっと、青海と寛はこの酒宴の意味を悟ってしまう……。

「なら仕方がない。」

そう言って近くの酒瓶をひったくると、信繁の前にあぐらで座り、酒を注ぐ。

「朝まで無礼講だ。」

「……それは私が言いました。」

信之は呆れたように立ち上がる。

「皆、今宵は全てを忘れ。飲む。飲もうぞ！」

「応！みんな！朝まで騒ぐぞ！」

その声に全員が料理に手をつけ始めた。

「……俺の酒……」

青海の寂しそうな声だけが酒宴の場に寂しく……かき消されていくのだった。

「すまない。俺はここまでのようだ。」

次の朝、出発の準備を終え、正門に立つ一行を前に残念そうに半蔵は見つめた。

「仕方ないな。」

馬に乗った信繁は馬の調子を確認していた。

「でもまあ……すいませんここまでしてもらって。」

寛は深々とお辞儀をする。脇には馬が一体存在する。青海も馬に乗っていて、しまはちょうど青海の背中に掴まり、美井は信繁の背中に掴まっている。

「お吉の方様は？」

「ああ……お吉の方様は今朝早くに洞に向かわれた。用があるそ
うだ。」

「そうか……。」

信繁は残念そうに下にうつむく。

「あのお方の事だ、別れはつらいのだろうよ。」

「そうか。」

信之はそう言っていると信繁に近づぐ。

「これを……。」

そう言い、信之は紙に包まれた固まりを渡す。中を紙を開けて見ると其処には金子が少々入れられてあった。小さな声で耳打ちする声で話を続ける。

”……兄貴”

”これを持って、臯月堂に行け。”

”分かった……感謝する”

軽く礼をすると信繁は信之の側を離れる。

「しま……どうする？」

「ん？」

佐助は信繁に張り付いたまま、半蔵を見つめる。

「拙者と一緒に来るか？」

半蔵はしまに手をさしのべる。しまは寂しそうに首を横に振る。

「……よく考えたけど……信繁様のほうが……俺を必要としてくれている……そんな気がするだ。」

「分かった……止めません。行ってこい。」

「あいよ。」

「兄貴……ありがとな。」

「お前も……。」

そう言つと、言葉を詰まらせ信之は馬を走らせる。それに追走するよつに青海と寛も馬を走らせ、しばらくすると一行の姿は見えなくなっていた。

「どうしますかな？」

後に残った半蔵をじつと信之は見つめた。

「すまないが馬を一頭用立てて欲しい。拙者も行くところがあるのでね。」

そう言う半蔵の顔は信繁達を見ているときとは違い、普通の表情に戻っていた。

「で・・・我々はどうして・・・ここで足止めなんですか？」

算は呆れたように城下町にある、とある一軒の間屋の前に立っていた。ついでに言うつと屋敷から30分もかからないところにある。

「ああ。ここな。臯月と言ってな。よく遊びに来たものだよ。」

そう言うつて店内にはいると若い番頭が待ちかまえていた。

「どういったご用件で・・・。」

中は米問屋らしく、米とかかれた暖簾が目立つ。

「店主を呼んでくれ。」

「いやあ・・・どういったご用件か・・・。」

「だから・・・店主をよべつて。呼べば分かるつて。」

いらついた様子の信繁に番頭はおろおろしていると、奥から、老の店主らしき、着物が立派な男がやってくる。が、信繁の顔を見ると、かたかたと震えていた。

「の、信繁さまー!!」

そう言うつて信繁に向かつて走り抱きつく様は異常でもあった。

「久しいな。」

「ですよね。お、おい！繁八！茶ー持って来い！」

「あ、あ、はいー!!」

番頭は慌てて奥に走っていった。

「ささ・・・皆様はこちらへ。」

そう言うつて店主に奥に一同は通されて中にはいった。

「お久しゅうございます。」

「こちらの御仁は？」

算は不思議そうに目の前の商人を見つめる。

「ああ。昔よく遊びに来た商人でな。家にもよく遊びに来たんだ。んで、これ。」

そう言っつて先ほどの金子を取り出す。

「これがどうかしましたかな。」

不思議そうに金子を見つめる。

「違う違う。こっちだよ。」

そう言っつて紙を引きはがし渡す。全員がその様子に不思議そうに見つめる。

「これ・・・ですか。」

そう言っつと少し顔を曇らせ、周囲を窺う。

「とりあえず、当方が仕入れた情報おぼ。」

そう言っつと周囲の人間に手招きをすると、それに応じ、商人に顔を皆で寄せる。

「とりあえず・・・現在徳川軍は大阪直前の京に入り、部隊を再編中です。」

「な・・・!」

商人の言葉に全員が驚く。

「どうも・・・仕入れた情報が真実なら・・・京に死人が現れ、それを阻止に入つた徳川軍を豊臣軍があれを自分たちの兵士だとのたまい、そのため、その報を聞いた徳川軍が駒を進める事になったとで、現在最終決戦に向けて兵をかき集めています。」

「この者は？」

算は不思議そうに商人を見つめる。

「情報を集めてもらっつているんだ。商人達の情報はあながち馬鹿には出来ない。」

信繁は少し戒めるように算達を見る。

「ついにか・・・。」

青海は息をのんだ。

「だが、そこで兵を止めた模様。本当に戦闘をする気はないらしい

のですが、現在本隊が到着していないので・・・まあ・・・部隊数の差だけで大阪城を圧倒出来るだけの兵力が集まっているらしいのですが・・・。」

「急いで・・・あ・・・それで馬を・・・。」

何かに納得するように算は感心していた。

「それに伴い、現在、伊賀と甲賀の忍軍が部隊を集結、北上予定です。」

「それだけか？」

「・・・今回は何故か、延暦寺の僧侶1200名が安土周辺で待機。」

「術封じか・・・。本気で押しつぶするつもりだ。」

当時陰陽術を用い戦闘などあるが、延暦寺はその研究では当時先端をいつており、数多くの町の建設を担当していた。だがその活用に置いて術の技術は封印や防衛に主眼が置かれているのが仏教系陰陽の特徴でもある。術がなければ、実際数を覆す方法はほぼ無いに等しい。

「豊臣側は・・・。」

「あまり・・・いやそう言えば・・・貿易船が一度港に入ったぐらいか・・・。」

「あまりいい情報ではないな。」

「だとして・・・まあ・・・。」

算達の歯切れの悪い返事はあまりいい報告ではない事の総称でもある。

「信幸様のお手紙を見る限り・・・最後まで貴方をお止めしたかったようで・・・。」

商人の男は少しがっかりとした顔で、信繁を見つめる。

「だとしても戦う。大阪へ。」

「・・・幾つか・・・。」

そう言つと商人は立ち上がり、後ろの戸棚から大きな包みを取り出す。

「それは？」

「お持ちください。昔、九度山送りにされる直前……こちらに
来られまして、もし、もう一度ここへあなた様が来られるようなら
・そして立派な漢に成長しているならこれを渡せと……。」

信繁は息をのみ、包みを開けると二振りの刀があった。

「本来、初陣祝いに渡す予定でしたが、製作が間に合わず……。
「いいさ。」

そううなずき、名を確認する。名は入っていないがその美しさは
異様とさえ思えた。

「村正作二本刀、紫雲、叢雲。そして、こちらも。」

そういつて、商人は今度は下の引き出しからもう後二本の太刀を
取り出す。

「村雨作大業物、霧風と紫光でございます。」

「こんなに多くは使えないって。」

四本の刀を抱え信繁は呆れたように顔をしかめる。

「お父上殿いわく、その刀、もし気に入った者があればその者に渡
せ……だそうです。」

その刀の出来に青海や笈、しま達もぐつと唾を飲んだ。実用性あ
ふれるデザインでありながら、波紋はあっさり目に流れていながら
も、鋼紋の波はしっかりとした稜線を描き、伝う輝きは正に妖刀・
・そのものであった。

「分かった。受け取ろう。」

そう言い、青海に四本の刀全てを渡す。

「後は……ここに来た豊臣の方だと思います。お子様みたいな
若武士の方が来られまして……。」

「ん？」

信繁は何か思い当たるのか、頭をひねっていた。

「もし……こちらに信繁様が寄られるようなら……京に寄る前
に一度伏見城から京に向かうようにと言う話ですが……私にはさ
っぱりで。まさか……あなたが来るとは思わなくて……あの

時は軽く聞き流していたのですが……。」

信繁はじつと考えていた。

「そう言えば……秀頼様は？今いずこに？」

「はい。公式なら確か……今は伏見へ太閤の菩提を祀りに……。」

「

「分かった感謝する。」

信繁は幾つか思い至る事があつたようだった。

「あとは……。」

「今のところはこれまでが限界のようで。」

商人は申し訳なさそうに頭を垂らす。

「急ぎませんと。戦には間に合いません。」

算の焦る声が聞こえる。

「……。」

しばらく信繁は頭を抱え込む。

「すまない。馬があるし……伏見経由だ。」

「は……！」

その言葉に急いで立ち上がると青海達は急いで準備を始める。

「書かれた品は……向ここの商人経由で家に運ばせます。」

「わかった。」

信繁は頷くと立ち上がる。

「御武運を……またこちらに来られ……今度こそ……米菓子
をせびりに来る事お祈りいたしますよ。」

そうほほえむ商人の顔はどことなく……寂しそうな物だった。

「……そうだな……。」

そうほほえむ信繁の顔もまた寂しそうだった。

「それで思い出した。米菓子……あの子達の為に幾つか見繕つて
くれると嬉しい。」

「……承知いたしました。」

そう言うと商人は深く一礼をした。

第八節 四月下旬 上田（後書き）

次回で、江戸旅情編、最後となります。お楽しみください。

第九節 忘れ形見の二人（前書き）

商人から聞いた一言「ある若い武者が信繁様に・・・。」

その言葉を聞いた信繁は指示通りに南回りで大阪に向かう。

その若者とは・・・そして・・・何が待ち受けるのだろうか・・・。

第九節 忘れ形見の二人

第九節 忘れ形見の二人

「でも何でまた・・・伏見経由に・・・。」

馬を走らせ、街道を疾走する信繁一行は西に向かっていった。

「もしかしたら・・・だ。」

懐に美井を縛り付けさせ、信繁は馬を失踪させていた。もう・・・一刻の猶予さえも無いように感じられていた。

「もう・・・戦が始まるかもしれないぜ。」

青海もいつももの気楽さが抜け・・・真剣に前を見据えながら馬を走らせる。戦場慣れした二人とは違い、曲がり角では不安さえ感じさせる。

「意外とそれはない。」

信繁は普段の疾走とは違い、少し速度を落とし、街道を注視しながらの疾走である。

「どうして？」

「家康・・・殿が其処まで卑劣な男とは思えない。」

「だとして、何で伏見経由？」

馬が操るが精一杯の青海の背中にしがみつくとしまは馬の早さにかみつくだけで精一杯だった。

「俺のいる位置を読んでいた若武者の事だ。」

「それがどうして・・・。」

「・・・いるかと思ったが・・・。」

顔を曇らせ、信繁は先を見る。視界の先には坂内の宿手前の村の入り口がある。

「すまない・・・急いでいるところで悪いが、馬をつぶすわけにはいかない・・・。」

信繁は馬の速度をゆるめる。ここまでに四日間、ほぼ走り通しだ

つたため、上田から伏見までに二日かけ、そこから街道沿いに走る事二日目、もう今の時間では空を見ると赤くなり始めていた。それまでか移動の宿場を無視していた為、もう、馬の疲労は限界だった。坂内から人力だけで大阪に帰ろうとしても馬をつぶすより、ここで休んで朝駆けで大阪に帰る方が早い・・・そう信繁は判断した。

「了解しました。」

そう言つて算も馬をゆつくりと歩かせ、じつと宿場町を見据える。只、今から馬を休ませる為に宿場にはいるわけにはいかなかった。単純に今・・・あの宿場には大方戦場に集まる徳川軍の傭兵部隊や、下手すれば旗本部隊がいる公算が高い。そんなところに行けば休むどころではない。

「でもまあ・・・。」

青海はじつと馬をぎりぎりの所で止める。

「こういうときは・・・。」

信繁は左右を見渡す。広く周囲には木々もない・・・。

「少し戻るぞ。」

そう言つと信繁は馬主を返してゆつくりと引き返す。それに三人も合わせる。

「そうだ・・・しま。」

「ん？」

青海の後ろから首だけを横から出して信繁を見つめる。その顔は青かったりもする。

「しま・・・俺たちはここら辺で少し休む。で・・・少しこのあたりで隠れるにいいところを探してきてくれないか？」

「りよ・・・了解・・・。」

しまは気持ち悪そうな顔をして、馬からゆつくりと下りる。

「どうした？いつもは元気なのに。」

「いや・・・さ・・・ここ数日馬で揺られっぱなしでな・・・。慣れなくて・・・気持ち悪い・・・。」

「・・・なら俺が行こう・・・。」

信繁は心配そうな顔で馬を下りようとするのをしまが手で制した。
「それでも俺が行くよ。・・・確か・・・心当たりがあるしな・・・」

「そう言うときはフラフラとした足取りで、来た道を引き返していった。」

「俺たちは馬を隠して待機だな。」

「そう言うのと、近くの木陰を見つけると、馬を引いて木陰の側で馬を止める。」

「でも・・・強行軍だな。本当に。」

青海は算の馬に近寄ると背負子にかけてあった酒瓶のひもをほどき始める。

「それで最後だぞ。」

「分かってるって。」

算は呆れたように言うが、猛暑いこの中身も少なく、ぼろぼろにはきつぶされた草履と

算愛用の本とかの数々があるだけである。

「食糧もこれで最後・・・。」

「分かっている。」

「そう言うって算が懐から取り出したのは木の実が小さな袋に入っている分だけだった。」

「でもまあ・・・。予定よりかなり大回りになって、ここまで残っているって言うのは・・・運がいいという事だ。」

馬たちは近くの草を食べ始めていた。こちらの休憩の意図をくんでいるようだが、それでも馬たちの疲れの色は濃い。

「水は？」

「上田で補給した分もありますが・・・。一瓶・・・ですな。」

「下げていた幾つかの水筒を確認するが、ほとんど空だった。」

「馬にくれてやってくれ。」

「了解。」

算は自分の馬に掛けてあった水筒を取り出すと、水を手に移し馬

の口に寄せる。馬たちはそれを気力がないような感じでぺろぺろとなめる。

「・・・ハング・・・お腹・・・空いた・・・。」

美井もまた疲れたように暗い顔をしていた。

「これ・・・食べ。」

そういうと、先ほどの食糧の袋から木の実を幾つか取り出すと、信繁はそつと美井の前に差し出す。

「信・・・繁の分・・・は？」

美井はじつとその木の実と信繁の顔を首をかくかくさせて見ていた。

「俺の分は・・・気にするな？」

「・・・いい。」

そういうと美井は下を向いてじつと我慢していた。

「おい。とりあえず。廃墟があつたぞ！」

もう普通の顔に戻ったしま・・・それでも疲労の色はまだ濃かった・・・は少し遠くから手招きをする。それに全員が疲れた顔でゆっくりと歩いていくと、今にも崩れ落ちそうなくよく分からないが、昔はお寺だったように見えるぼろぼろの建物があつた。中を見ると幾つかの床が抜けてはいるが、それでも夜露はしのげる。

「とりあえずは休憩だ。」

その言葉に青海は床に寝ころび、篁も建物に寄りかかる。

「でも・・・よかつたですな。」

篁も感心したように屋根を見ると・・・一応屋根はぼろぼろではあるが存在はした。信繁は床を見渡すと、何かを感じ、外に出て行った。

「俺は、ちよつと食糧と水探しに行ってくる。」

「了解。」

しまはそういうとフラフラとしながらも、外へ歩いていった。それにすれ違つように幾つかの木の枝を持っていた。それを黙ったまま、床に突き刺すと周囲の土埃を集め、簡易的な暖炉を作る。

「とりあえずは休めるが……。」

「もう……限界でもありませんな。」

笥は建物内を見る。青海も疲労困憊の色合いを隠す事もないし、美井も疲れがたまっていた。

「とりあえず、今は暖を採って休むぞ。」

「了解。」

まだ夏が近いとはいえ、うっすらと寒く、暖も無しに寝られるほどの暖かさはなかった。

「でもさ。大将……何を探していたんだ？」

流石の青海も顔を信繁に向ける。

「もしかしたらと思っただけ。」

「何が？」

青海の声は流石に怒っているように見える。笥もそれを止める気力はなかった。だが信繁はその答えを躊躇った……。その時、草を踏み歩いてくる音が聞こえてくる。その足音に全員が固まった。

「ん？」

青海も動かなかったが、寝ころびながらも武器を手元に寄せるくらいはしていた。笥も周囲を見るが、もう暗く、少し先も見えない状況ではなかった。

「すい……ません……。」

若い……それでいて気の弱そうな声が聞こえてくる。信繁は堂の奥で柱に寄りかかったまま刀に手を掛ける。

「どなー……たかいらっしやい……ますか？」

流石に返事しないわけにも行かないだろう笥が立ち上がると、扉を開ける。そこには火の光で照らされたほっそりとした後ろの髪を紐でとめただけの長髪の……。この暗さだと男か女かみ分けが付かないが……。人間が立っていた。

「どうしました？」

静かに、それでいて緊張した空気が流れる。

「道に……。迷ってしまいました。そしたら……。明かりが見えま

して。できれー．．．ば入れて貰えないかと。」

「どうします?」

笥は振り返るがその顔は露骨に嫌そうでもあった。

「入れてやれ。」

信繁は刀に手を掛けたまま、じつとその若武者を見る．．．身体は細く、女性を思わせる。だが、雰囲気自身は男．．．小姓としてはありだがそれ以外だときつい。

「分かりました。」

「本当に．．．助かります．．．。」

そう言つと若武者は空いたところに座る。

「あなた方は?」

「たまたまここを見つけて．．．来ただけだ。」

青海は不機嫌そうに口だけを動かす。その声をした方を見るとおつかなびつくりしながら、少しずつ接近する。そして、顔を確認すると、またそろそろと先ほどの位置に戻る。

「そ．．．そうなんですか．．．。」

若武者の顔は引きつりながら．．．。

「お主こそ、どうしてこのような場所に?」

「ま．．．まあ．．．。色々．．．あります。」

若武者はしどろもどろに答える。

「こんこん。」

「おや．．．。」

戸を叩く音に全員が入り口を見ると、疲労困憊のしまの姿がある。「一応さ．．．これは一匹いるんだ．．．だが．．．それだけだったよ。」

しまはずかずか中にはいると、虫の息ではあるが．．．兎が一匹真ん中に置かれる。

「え．．．あ．．．これ．．．。」

その様子に若武者は驚いているようだった。と言うよりかは怯えているように見える。

「……信繁様……この人は？」
「……。」

只、信繁は黙っているだけだった。と言つよりか……何かを思
い出しているように見える……。

「え……信繁……様？」

「あ！ああな。このお方は真田信繁……」
と算が説明途中、名前を聞いた瞬間何故か若武者が立ち上がる。

「信繁……なのか？」

その声とともに若武者は信繁に抱きつく。

「の、のぶしげえー。」

走ってきた若武者は信繁に若武者が抱きつく。その行為に全員が
驚く。その様子に信繁は只ひたすらに困っていた。

「あ……あの……。」

「あ……は……。」

しばらく抱きついた後に、急に驚いてバツト離れる若武者。世の
様子はどう見ても……女性に見える。その様子に更に全員がしら
ーっとした目で二人を見つめる。

「あー。」

算は呆れたようにその若武者を見る。

「その方をお知り合いで？」

「……。」

そう言つと信繁は立ち上がるとその若武者の前に片膝を付く。

「失礼しました。」

その言動に更に全員が驚く。

「え……あ……あの……これ？」

慌てる算の声に信繁が手で頭を下げる指示をする。更に若武者が
何故か、手で制した。

「いいよ。そういうのは好きじゃないよ。」

何というか明るい声がひびく。青海はもう疲れ切っているのか倒
れたままだった。

「この方は……。」

算の焦る声に信繁は慌てた声だった。

「このお方は……。」

その焦る声は夜も深くなり、火の明かりに写る顔は緊張しているのが全員に伝わってくる。

「この方は……豊臣秀頼様だ。」

その言葉に一部の除く全員が驚く。

「は？」

「それはこういう所じゃあ……言っても……ね。」

照れているが……この若武者は否定していない。

「でもどうしてここへ……。」

算もまた、立て膝しているものの、不思議そうな顔をしていた。

「いやあな。上田の時、聞いただろあれ。」

そつえばと算はおもいだす。たしかあの時……。若武者が伏見から来るようにとか……。

「あれを聞いてきて、来れたってことは……やっぱり信繁ー。」

声は甘く女性みたく見えるが、それでも外見は男だ。

「どうしてまた……。」

「こつ見えてもな……まあ……。」

じつと信繁は秀頼を見つめる。

”まあ、結構こつ見えても読みの精度だけは高くてな。仕えた当初鬼ごつこしたした時、すぐに場所を見つける勘の良さは天性の物だ。”

算は驚いたように目の前の若武者を見る。

「ま、予想通りだったからね。」

秀頼は少し胸を張る。その様子を立ったまま……空気を読めな
いまま、しまは見つめる。

「この人……誰？」

その空気を読めない表情でじつとその若武者を見つめる。

「……すまないが……そのお方が……我らが主でもある……。」

「え？」

「豊臣の当主様だ。」

その絞り出すような緊張の声で答えるしまは頭を抱える。

「え．．．確かと豊臣って．．．え．．．あれ．．．。」

「確信はなかったからな。」

信繁は普段の様子に戻り床に座った。

「信じてたよー。」

秀頼はにこにこしていた。

”流石にこれは説明していただかないと。”

算は不満そうに信繁を見る。青海は．．．もう寝ていた。

”まあな。半分予感みたいな物だ。若様はよくお忍びで城から抜けていたからな。何となくだったが当たってよかった。”

”そ、そうなんですか．．．。”

算は呆れた顔で見つめる。

「でも．．．何があったんです？この時期に城を抜け出せば、大事にもなりましょう。」

信繁も優しく秀頼を見る。

「信繁がいなくて．．．寂しくて．．．。つい．．．。」

猫なで声に近いその声音に何故かときめくものを感じてしまう。

「供の者は？」

「途中で撒いちゃった。」

「あ．．．そうですか．．．。」

その言葉に呆れて信繁は秀頼を見ていた。

「もう．．．なんて言うか．．．戦．．．来るんだよね．．．。」

「ですな。」

その声は不安げではあるが、人をひきつける．．．何かがある。

「怖くて．．．。」

その言葉に全員が押し黙る。

「戦が怖いのか？」

信繁の声が優しく響く。

「うん。」

もう全員が自然と腰を下ろし、火を囲む。

「怖いのは・・・お母様だ。」

その声は少し震えているのが分かる。しかも何か言おうとするのを覚に制されている。

「どうしてですか？あれはあれでも必死ではないですか。」

信繁も流石に顔を引きつらせていた。

「・・・。」

何となく、暗い空気へと加速的になっていく・・・気がしてくる。

「昔もそうだったけど・・・最近のお母様の様子はおかしい。」

「どのように・・・。」

「それは・・・何か・・・最近は何もなくて・・・変なおじさんばかりとしかしゃべらないし・・・。」

「それは・・・戦が近いからであって、普段と一緒にでは？」

「そう・・・そうじゃないんだ！何て言うか・・・目が昔みたいに優しくないというか・・・。何か目が・・・目だけじゃない・・・。雰囲気もおかしい・・・何か突然気が触れたように笑うし・・・。」

「そんな・・・母ちゃんが怖いのか？」

しまはいても立ってもいられずに声を掛ける。だがもう誰も制しようとはしなかった。

「いや・・・まあ・・・普段から確かに怖いのですが・・・。」

算も頭の中で淀君の事を思い出す。噂に聞くだけでも恐ろしく突然怒る方のようにその世話で疲れる様子は聞き伝えてはいたが・・・。

「何というか・・・目が爛々としていてもう・・・人の物ではないような・・・。」

その言葉に全員が押し黙っててしまう。

「それに・・・あの黒ずくめの人たち・・・何かこっちを嫌そう
な目で見ると・・・。」

「それは……。」

信繁の声に全員が押し黙ってしまった。

「それは確かにあります。只、当主がいな……。」

そこで信繁はある事を思い出す。そういえば昔……。豊臣秀頼とか言つてなんかよく分からない大男を出したとか出さないとか。だから家臣の間でもどっちが本物か論争になった時があつた。先日の戦いではそれはなかったが、今度もやらないとは限らない。そう思つて改めて信繁はじつと目の前の若武者を見つめる。複雑な人……。そう思えた。頭の中をいくつもの言葉がよぎるが、どういつても慰めなんかにならない。

「どうしたの、信繁？」

押し黙る信繁を全員が見つめる。

「いろんな事があるうとも……。私も昔そうでした。人質とかいわれ……。各地で囚われておりました。」

「そうだったな。」

「そうなのか？」

しまは不思議そうに信繁を見つめる。

「まあな。あの上田城……。見ただろ。あの城で一万や二万の軍を相手になんかは出来ない。だが周りの国はどこも大きいあの地では昔から、俺みたいにな次男坊とかは政略結婚とかみたいな物で、同盟の時に相手方に送られるのさ。何かあつたら殺される為にな。」

その言葉にしまは驚いていた。

「そんな……。事が？」

「まあな。いろんな所に行ったさ。上杉家、織田家、豊臣家。」

その言葉に秀頼を含む全員が聞き入る。

「だって、お前の父ちゃんとか……。お前の事……。大切じゃないのかよ！」

しまはつらそうに信繁につかみかかる。

「逆だな。大切だから相手から見れば人質の価値がある。」

冷たく話す信繁の顔を怒って睨みつけるしま。だけどそんな事を

しても何もならないのは知っていた。しばらく襟を握った手を……押し黙る信繁を見て……しばらくして離れた。

「長男を取るのには、家督のしきたりでダメとなれば俺の出番さ。ま、行く度に親父は泣いてたけどな。」

「……何……言って……いいの……分らない……。」
美井も寂しそうにじつと信繁を見つめた。

「だからといっていいのか、いろんな家の考え方が分かってくる。俺にとって足りない物も特殊な物も……。だから、俺はこうして戦って来れた。そのほんの少しの合間を縫って俺は色々学んできた。」

信繁は近くの柱に寄りかかる。

「だから、どんなに怖くても、俺は、引き返すのだけがいやだった。そこにしか俺の価値は……大人達から見た価値は無かったからだ。」

そのあつさりとした語りとは裏腹のない用に只じつと信繁を見ていた。

「だから秀頼様……。貴方もあの大阪城から逃げ出してはいけない。あの淀君から逃げ出してはいけない。きつとそこに何か……。口では表せませんが……。きつと何かがあるでしょう。」

「ありがとう……。信繁……。」

その言葉に全員がにこつとほほえんでしまった。

「只……。もう少しだけ聞いて貰える？」

「はい。」

もう何かが落ち着いたのだらう。秀頼も近くの柱に寄りかかると火を見つめていた。火の周りの木をちよつとずつ筧がくべていた。

もう夜は深く、建物の隙間から上を見れば星空が輝く。

「なんか、不思議に思っておじいちゃんの死んだ時の話を聞きに伏見に行ったんだ。その時に変な話が聞けた。」

しまも落ち着いたように信繁のとなりに腰を下ろす。ここで言うおじいちゃんとは太閤秀吉の事だ。

「変な？」

「算も不思議そうに秀頼を見つめた。」

「あ・・まあ・・ね。お坊様が言う限り、伏見城に来る前にもうなんか、命を振り絞って伏見まで来ていたらしいんだ・・。そして何かを伝えようとしていたらしい。」

「それは？」

「わからない。ただ・・あ・・そうだ・・これ・・。」

「秀頼は周りを見て口をふさいでいた。」

「すまない。みんな。他言無用で頼む。」

「その言葉にその場にいたみんなが頷く。それを見て秀頼も頷く。」

「もう敵はいない。だから・・秀頼を頼む」と言っていたらしい。」

「・・なんとなく・・信繁の涙が頬を伝った。」

「どうしたの？」

「いや。何となくな・・俺の想像が正しければ・・。叔父貴はすげえなって思っただけだ。」

「只、この敵はもういないってどんな意味が分からなくて。」

「今・・あの時の意味が分かった。」

「信繁の声は震え、頬を伝う涙が止まる事はなかった。」

「ん？」

「俺は何でもういらなんだよ！」

「真田信繁・・この時25歳。目の前の老人に今にも襲いかからんとしていた。」

「貴方の役目は、秀頼様誕生によりいらなくなったのです。だから、貴方はもう、上田の地にお帰りください。」

「老人の横の冷たそうな男はじつと冷たく見つめていた。」

「もう・・すぐにも、上田から使者も参りましょう。」

「だからいらぬかよ！ふざけるな。」

「その様子を老人はもの悲しい顔で見つめていた。」

「家臣でもいい！小姓でもいい！置いてくれ！叔父貴！」

男は叫んでいた。目の前の男は豪華な服装とは裏腹にその風貌はシワだらけで、小さな・・・老人にしか見えなかった。その老人はよろよろと近づくと急に信繁を抱きついた。それに合わせ取り押さえていた男と達は少年から手を離れた。

「お前は・・・もうここにいては行けぬ。あ・・・無い。」

”こんな所に・・・いては行けない。こんな所に・・・。”

徐々に小さくなる声に・・・後半は最早信繁しか聞き取れないほど小さかった。

「お前も・・・秀頼も・・・行長も・・・みんな家族じゃ！」

ここで言う行長とは、小西行長の事である。

”だから・・・生きてくれ！”

「だから・・・だから・・・だからだよ！」

信繁は秀吉の耳元であつても大声を上げる。いや、必死でもあつた。

その声に秀吉は改めてぎゅっと信繁を抱きしめる。

「お前はわしの息子だ！だから・・・だから・・・。」

そのまま更にぎゅうと・・・いや・・・万感の思いを込めて力一杯抱きしめる。その力強さは昔ほどでもないが、周囲はその様子にただただ黙ってしまふ。

「いや！わしの息子であるとともに昌幸殿の息子でもある。今は・・・今は・・・今は・・・帰れ！」

そついう老人の顔は涙でぐしゃぐしゃであつた。

「ま・・・そついわれてな。」

その昔話に全員がじつと聞き入っていた。特に秀頼は頬に涙を浮かべていた。

「叔父貴に言われるままに城を出た時、訳もわからなくて、親父の所に帰つた時にあつけにとられた顔をされたよ。」

「そんな事が。」

算も驚いたように見つめていた。

「あの時は分からなかったけど、あの時、叔父貴はあの城から逃がしてくれていた……んだと思う。だから……だからこそ……今度こそ……立ち向かうべきじゃないか？って思っただけなんだよ。」

信繁は一通り語り終えると、目をつぶる。

「今日は早く寝ましょう。」

「ですな。明日は早うございます。秀頼様。今日はお疲れでしょうからお休みください。」

「うん……あ……ああ……。」

秀頼は頷くと全員が床で横になる。算も全員が寝れる位置にいるのを感じると、火を消した。

「……信繁……。」

秀頼の寂しい……それでいてか細い声が聞こえる。

「はい。」

「今日は……そっちで寝ていい？」

「はい。秀頼様。」

そういつと秀頼は信繁の懷にそっと潜り込んでいた。その時見えた秀頼の顔は……どことなく寂しさに押しつぶされそうな顔をしていた。そう、誰もがその不安に押しつぶされそう……そんな感じであったのである。

「おはようさん。……で……こいつだれ？」

朝、信繁が起きて聞いた第一声がかれであった。ちょうど信繁のお腹のあたりに丸まって寝ていたのが秀頼でもあった。頬を見ると信繁以外では見えづらいいもしれないが、涙の跡がほっそりと付いていた。

「ん？この人か？秀頼様だ。」

「秀頼様？あなたが様をつけるのは相当偉いつて事だろ？じゃ？今は戦寸前だろ？どうしてこんな所にいるんだよ？」

ちょうど背伸びをして筧が起きあがる。空が少し白ずんで、もう少しで日が昇ろうとしていた。

「まあな……。いろんな事があったのさ。それを言い出せば俺たちも一緒だろ。」

そういつてそつと起きあがる信繁の脇で秀頼はぐつぐつと眠っていた。

「じゃ、どうするよ。」

青海は起きて肩を回して扉を開く。馬も起きているらしく、近くの草を煩でいた。それなりに体力も回復している……ように見える。馬でとばして夕方ぐらいには……大阪に着く。

「連れて行く。そうしなければ、あの淀君の事だ。一心不乱に探すだろうさ。」

「でも……若殿がこのような方だと思いませんでした。」

「まあな。好奇心が強くて……子供みたいな人だ。大阪に遊びに来た時によくあつていたんだが、いつあつてもこんな感じだな。よく鬼ごっこにかさせられた物だ。結構なつかれてはいたんだが……幽閉されてからはあつていないからな。」

懐かしそうにすすつと足を更にかがめる秀頼を見つめる。

「そうですね。拙者が聞いていた秀頼像とは違い申してな。」

「それは……追々話す。」

「そういつと仕度を始める。その音に秀頼としまが目を覚ます。」

「お早う……ございます。」

秀頼の礼儀正しい置き方と対照的なしまの起き方に、品の差を感じてしまう。

「んあ……どうした？」

「みんな起きたらとりあえず、大阪に行くぞ。」

「了解。」

「……もう少しゆっくりしようよ。」

秀頼の寂しそうな顔での語りについぐつと来る。夜は暗くて分かりづらいが……よく見ると……ものずごく可愛い……。筧は

その表情について見とれてしまう。

「すいません。私の予想が正しければ……。一両日前後で戦いは始まり申す。その場に貴方が居合わせなければきつと、数多くの者が死ぬやもしれませぬ。」

もし、このまま秀頼が帰らずに近くまで逃げる手はあった。だがこの時徳川軍の誰かに見つければ、その時は即時に殺されるかもしれない。そうでなくとも、戦う前に敗北はあり得る。信繁はそう考えた。

「いっばい？」

「はい。いっばい。」

「分かった……。怖いけど……。行くよ。」

秀頼の泣きそうな顔についてしまはば「っ」と顔を赤らめ見つめてしまふ。

「お前ら、準備だ。」

「「お……。応！」」

その声に全員が答えて動き出す。馬にもう食糧もなく軽くなった荷物を載せ、各自いつもの所定位置に……。

「しま。」

「はい？」

「すまないが、一つ仕事を頼む。」

そういうと懐から小さな袋一つを手渡す。しまが不思議そうに中を見ると、金が……。結構多めに入っていた。

「そいつで、坂本宿で食事でもしてから……。徳川方の陣容を出来るだけ高いところから確認を頼む。」

「でも、俺、お前家、しらねえぞ。」

「大丈夫だ。大阪に入ったらそのまま城に向かってくれ。あ……。それと、旗と家紋を覚えておけよ。」

「分かった。とりあえず、紙は持って行く。」

そういうと、先ほど馬に掛けた背負子から紙と炭を取り出すと、懐に入れる。

「大丈夫か？」

寛は不安そうにしまを見つめる。

「まあ、どこまでの物が来るかは分からぬが、やらないよりかはましだ。」

「拙者は？」

寛が聞く頃には、しまは走り出しても見えないところに行っていた。

「後の物は帰るぞ。青海。」

「おう。」

「美井を頼む。」

「わかった。」

「秀頼様。」

「はい。」

そのきつぱりとした発言でつい背筋を伸ばし両手を伸ばす。

「秀頼様は拙者の背中に掴まってください。馬がこの数しかないので、すまないですが……。」

「いいよ。そういうのは気にしないよ。」

そういうとにこつとした顔で秀頼がほほえむ。

「じゃあ、みんな行くぞ！」

「応！」

全員が馬に乗ると、そのまま走り始める。しばらくしてしまを抜き去ると、そのまま脇道に入り、山を疾走する。分かってはいた。大方……戦国最後の戦……そしてその結末……。分かっていて求められぬ何かが……。そこにはある気が……。信繁にはしただった。

第九節 忘れ形見の二人（後書き）

これで、江戸回遊編は終了します。次回からは決戦大阪城夏の陣編になります。今後とも・・・がんばって生きていきますのでよろしくお願
いいたします。

第十節 4月31日 決戦前夜（前書き）

大阪に着いた信繁は短い時間の中戦支度の為各所を回る。そのなかで事実を付き合わせ、一つの結論に至る。その事実とは・・・

第十節 4月31日 決戦前夜

第10節 4月31日 決戦前夜

「お帰りなさいませ。」

「すまない。時間がかかった。」

門の前で深々とお辞儀をする根津を前にして信繁は、申し訳なさそうに軽く頭を下げる。

「早速お伝えしたい事が……。」

根津は、焦りながら信繁の側に寄るが、その動きを手で制した。

そして傍らにいる女性を唐突に、そしてぎゅっと堅くぎゅっと抱きしめる。

「ただいま……。」

「お帰りなさいあなた。」

そう静かに、声を上げ、妻はじっと抱かれていた。門からずっと見ていた彼女は目の前に来る時までは不安な顔をしていたが、その様子はすぐに晴れていった。その様子をじっと美井は見つめていた。「すまないが、その間に何があったのか、聞きたいから、お前達は奥で待つてなさい。」

「はい。」

そう涼やかに奥さんは答えると、そのまま奥に行った。それに合わせ皆を奥へ手招きをする。それに応じ全員が信繁の部屋に……。

「やっと来たか。」

ヒゲモジヤの……無骨そうな身なりの男が一人、先客で座っていた。

「後、後藤殿。」

そういつと信繁は急いで、座るとその後ろに青海達が付く。”後藤基次”先の戦で武功をたて、侍大将筆頭（実質上の現場監督者）である。また真田丸（城の一カ所に建てられた防衛拠点）の作成の

時には一緒に手助けをしてくれていた信頼出来る盟友でもある。

「久しいのお。」

「は。」

そういつて信繁は軽く一礼をする。それに合わせ皆も礼をする。

「早々堅苦しいのは嫌いだった。でな。」

「そういうと先に妻が置いたのであるう、器に入った水をぐいっと飲み干す。」

「此度の戦、お主ならどうするのか聞きたくての。」

「此度ですか……。」

信繁はじつと考えていた。確かに戦になるならと道中考えていた事もある。だが実際戦が避けられるならそれに超した事はない。

「出来れば、今までに何が起きたのか、ご説明願えないでしょうか。城内で聞くわけにはいかないので。」

「だな。」

後藤は鷹揚に頷くと、腰を浮かせ、そそつと信繁達に近寄る。

「先日……三日ほど前までに徳川軍は大阪に向けて行軍を開始したとの報告があった。交渉は上が行ったようだが、とりつく島もないというよりかは……戦を上が望んでいるようにも思えた。」

「は。」

「でそれに伴い城内で、大野智治による奇襲案が採択され、奇襲が行われ、奇襲郡山城を奪うが、精鋭軍を目の前にして包囲され敗北、智治一人が逃げ帰ってきた。淀君は怒り狂ったが、どうしようも出来る雰囲気ではない。」

「それが……。」

「昨日の事だ。」

その顔は苦虫がかみつぶした顔だが、それ以上の考えはないように見えた。

「でな、淀君とかが、名案を求めて会議しているが、結論が出ないらしい。そこでだ。」

「はい。」

「ここでお主がぱっと、名案なんかくれれば……。」

「……。」
「算達は押し黙ってしまふ。ここまで旅行に出掛けているのだ。そうそう名案なぞ……。」

「今まで、色々見回ってきて、結構見えてきたものがあり申す。」
「ほう?。」

「ただ、今まで思案がまとまり申さぬ。そこで、明日まで待つて欲しい。」

「明日か。」

「髭をしゃくり、後藤はじつと信繁を見つめる。その髭の中でもつぶらな瞳は何とも言えない素直な……いや……何も考えていない目つきに見える。」

「ま、明日の会議も大方問答して終わりだから。明日聞きに来る。」
「はい。」

「そういうと後藤は立ち上がり、手に持っていた器を口元に添えるが……中身は空のようだ。」

「そうだ。」

「ん?。」

「後藤殿。」

「堺には兵を置きましたかな?。」

「いや。あそこには徳川が陣取っていると思う。」

「あそこから食糧を運ばれると、いくら籠城出来ても負けですから、どちらを取るでも、兵を向けるべきでは。」

「分かった。明日伝えておこう。今日はゆっくり骨を休めて考えてくれよ。頼んだぞ。」

「そういうと、大股で後藤は部屋を出て行った。」

「いいんですか?。」

「算は不安そうに信繁の顔を見る。」

「ま、そのためには、お前達に協力してもらおうぞ。」

「は……。」

全員が膝を突き、声を上げる。この飾らない人の扱いこそ、この信繁の際の真骨頂とも言える物なのだ。

「まずは・・・根津。」

「は。」

「今までの留守を守ってもらった事。感謝する。」

「・・・もったなきお言葉。」

「ありがとな。それで、とりあえず何が起きたのか人と落ち話して欲しい。とりあえず、皆で聞いてもらおう。」

「は。」

そうかしく根津は、どかっとな腰を下ろすと、周りを見渡して話を始めた。

信繁様がですすぐの事、徳川方の工事舞台に異変がありました。

・それが、どうも外堀のみならず、内堀の埋め立て工事も始めてしまいました。只・・・これには淀君も顔を真っ赤にして怒っておられました。それが、実際に内堀を掘り返そうとした直後何故か、南蛮の衆と淀君が急に方針を転換、戦をすべからずと言う事で、そのまま徳川軍を返してしまいました。

「結局は？」

内堀はなくなり、平野が広がるばかりとなりました。只、淀君には何かお考えがあるはずなのですが・・・拙者や後藤殿の耳には入らず、訳が分からぬ始末。そして、しばらくして、兵士の脱走騒ぎと聞きました。夜に兵士が脱走したそうなのですが・・・その後今日に行くと、死人が歩いていたら・・・聞きました。しかも徳川殿がそれを退治していたらしいのですが・・・こちらにもその時、脱走した兵士を虐殺している徳川達を止めてこいと言われ、拙者達は出陣したのですが・・・その時・・・その時・・・

「どうしたんだ？」

拙者達が行った頃には最早、事は終わっておりと言うか・・・そこには生きている人を拙者はしばらくの間見る事が出来ませんでし

た。

「そうか……。」

隠れていた傷ついた兵士達はどうか回収したのですが……それが……。

「それが？」

どうも青く顔が青ざめた徳川ではない兵士に襲われたとか。すぐに拙者達は引き返しました。最後には何故か、顔が青ざめた兵士達が南蛮衆に率いられて帰還してきてして……。その現場の悲惨さが伺えます。それから私たち傭兵衆は城近くでの待機を命じられました。またその頃からちらほら……。戦の噂が聞こえていまして……。噂通りなら……。もう旅に出る前後には密かに、南蛮衆に武器を頼み、それはもう城内に届いているとか……。拙者が見る限り、今まで雑賀集や国友銃であつてもあそこまでの鉄砲は見た事がございませんでした。今回それが各部隊に配備されるそうで。

「それは……。今まで聞いた中では一番いい報告だな。」

只訳の分からぬ人形やら不思議なものもたくさん来まして、もう現場は混乱しております。

「そうか……。苦労掛けたな。」

いえ、それで話は終わりませぬ。

「うむ。」

それから今まで……。拙者と後藤殿が聞く限り、ほぼ評定にも顔を出さずなにやら儀式ばかりをしているそうで。聞いた限りでは戦勝祈願だそうですが、不気味な声が、ずっと城内で響いているので、それはもう見張りの衆が怖がって。

「そうか。」

で、それとともに南蛮衆はなにやらしているとか……。

「そういえば秀頼様は？（今朝……。そういえば城近くまで送って入ったものの、どうなる事か……。）」

それが……。拙者も含め、誰が秀頼様か分からぬ始末で……。

「は？」

と言うもの、一応拙者たちで戦があるかもと言う事で幾度か、訓練に秀頼様をと嘆願いたしました。そしたら……。

「そしたら？」

訓練は数日行われたのですが……そのたびに違う秀頼様がでて……。

「はい？」

ある日は金髪の長身の隆々とした上半身裸の秀頼様がでて、次の日には2尺はあろうという大きさの顔だけが細い、とてもまるまるとした秀頼様がでて……。流石に兵士達にこれを見せると兵が動揺するといつて、淀君ごとお止めしましたが、流石にあれを見せられた我々の士気は下がる一方で、それからはもう訓練に呼ぶ事もございませんでした。上はやる気がないとしか……。

「……本当に……本当に苦労掛けたな。」

は。只、それで、戦準備が始まり……。それを察知した徳川軍が上洛。今に至ります。

「分かった。」

深く頷くと、信繁は今まで聞いた根津の情報を思い返す。予想よりも……。いや……。しばらく徳川に行っていただけに分かる。出来るだけ蒸し返さないようにしていたものが、こちら側の失態で蒸し返されている局面もある……。それでか……。半蔵が来た意味を今理解する……。最悪でも内堀埋めの時間稼ぎだけでもか……。消極的でもあるが……。それだけ万全を期す必要があったのだ。いかに向こうが手を抜かずに来ているかが分かる。

こちらは自滅するほどにどたばたなのに、向こうは水の一滴も漏らさぬ構え……。考えれば考えるほど、絶望的だ。だが、それに輪を掛けて分からないのが味方とは……。淀君は何を考える……。まずそこから見定めねば、策略は全て無駄撃ちになる。

「根津！」

信繁は立ち上がると、根津を見る。

「俺と一緒に埋められた内堀を見にいくぞ!」

「俺たちは?」

青海が不思議そうに見つめる。

「お前達は・・・大方戦は街道の兵数から察するに家康本隊はまだ・・・もう数日かかると見た。だからそれまでに戦仕度・・・いや、死に仕度を頼む。」

その言葉に場にいる全員が凍り付く・・・美井を除いて。

「大方徳川・・・いやこの日の本全てが大阪をつぶしに来る戦ぞ。」

その言葉に全員が唾を飲み込む・・・美井を除いて。

「それほどの戦ですか。」

「まあ予想はしていたが。」

信繁は部屋から見える黒塗りの大阪城を見つめる。それに合わせ全員が大阪城を見つめる。まだ昼過ぎで、黒塗りが更に黒く見える・・・美井だけはどこに大阪城があるのか分からなかった。

「先の戦で、徳川の手勢・・・いや徳川だけで滅ぼせぬと分かれれば、どんな手でも使うのが関ヶ原と一緒に・・・いや、下手すれば此度は前よりひどく、酷いものになるう。」

「関ヶ原よりですか・・・。」

寛の言葉は全員の意見を代弁していた。

「だから・・・生きても死んでも・・・悔いがないように各自仕度をしてくれ。」

「分かりました。」

そういうと、寛と、青海は改まり、一礼すると、信繁の部屋から颯爽と出て行った・・・美井を除いて。

「よく分からないけど・・・すごい・・・事が起こるの?」

残された美井一人がじつと信繁を見つめた。

「まあな。この国・・・最後の戦だ。」

「・・・よく分からないけど、すごいが・・・分かった。」

「この子は・・・。」

根津は不思議そうに小さな少女を見つめる。この時代連れ子は珍

しくないが……。

「とある仕官の子息でな。頼まれて……いや拙者の為にと連れてきたのだ……そうだな……。」

ふと、いろいろな事が信繁の頭をよぎる。

「そうだな、折角だ、焼ける前の大阪、見に行くぞ。」

「はい。」

美井は素直に頷く。その言葉の響きにあるむなしさを感じぬままに。

「あれか。」

ふと、小高い丘から周囲を見渡すと大阪城が見える。昔は外堀があり、美しい曲線の堀が一回り小さくなっている……？あれ……。

「あれが大阪城か。」

「はい。」

根津が頷く。

「で、あれは？」

信繁が指を指したところは何故か内堀さえも埋まっていた。

「あれですか。拙者も気が付きませんでした。あの位置……ちようど武器の搬入を行った時に船があつた位置でしたね。」

その言葉を聞き信繁は更に全体を見渡す。山を二つ挟んだ南側はちようど平野が広がったみたいだ、間隔さえある。ここで農業すればさぞ楽にみんなが生活出来るだろう……。只あの城がちようど目立つ……。いや町になるな……。頭を都市計画がよぎる。だがここ、ちようど城の堀と相まって盆地みたいだ……。そういえば先の戦いで、防衛側が粘った俺がいなかったところはちようど谷間だった……。風は……。ちようど南側に吹いている……。死人しひが出た……。

「根津。」

「は。」

「先の戦いで、南口の話は聞いた事があるか？」

「いえ。」

じつと考えながら地形を見つめる。この地形を把握する事。これそのものが、軍師全てにいえる必須事項・・・”地の利”である。例えば生まれ育った地元であってもこれを欠かせば破れる事さえある。そう父から教わった。実際上田の戦いでも戦鬪前に領地を必ず見回り、策を建てた。ここは埋め立ててすぐらしく、人の姿さえない。確かに内堀から、大砲を撃てばここに殺到する徳川軍は手痛い打撃を受けるだろう。だが先の戦いでも天守閣に届くほどの銃は知っているはずだ・・・この程度を分からぬほど淀君は馬鹿ではない。ここに敵軍を足止めしても、東側からこれば終わりだ。だが、堀が機能し、一度南側に迂回しなくてはならないが、その時は・・・。だが、城にある大砲をどう足しても15万を討てるほどはない・・・。と言う事はこの上に更に何かを足すという事だ。何を足す？それが今の段階でも後藤殿の頭に入ってははいない。と言う事はかなり人外じみて・・・死人・・・。今まで何回か死人と戦った事はあれど、あの黒づくめの連中とやらが使う方法に知識はない・・・それが先だ。そういえば、前、何故か涙ながらに去っていった兵士がいたはずだ。その時は聞けない何か・・・。いや・・・きいて・・・。

「根津。」

「は。下八の居場所は知っているか？」

下八というのは、その当時、大阪城につとめていた兵士であったが、何かと信繁とつきあいがあった為、覚えていたはず。確か、冬の陣である南の防衛を担当していたはずだが・・・。

「それは・・・堺とかに今は居を構えているそうですが・・・。」
「いくぞー！」

そういつと馬を町に走らせていった。ここから堺の町までは二刻（4時間）ほどである。

「でもまあ、ここも忙しいな。」

信繁は堺の町を馬に乗り、少しゆっくり目に歩く。

「ですな。」

町は人々がひっきりなしに歩き、手には武器とかを抱えている。この町は対抗がいるよりかなり前から、自治組織がはっきりしており、大阪が淀君の手にあつても、協力であつて服従はしないという態度を取ってきたいわば”自由都市堺”であつた。只、自由都市であると言う事は自分の身は自分で守らねばならない。そう、此度の戦でここが戦場となるなら、堺は徳川相手でも牙をむきうる都市なのだ。だが・・・逆を返せば、徳川でも金を払えばお客様と言う事でもある。それが商売なのだ。だから、こうして入ってきてても誰もとがめなかつた。しばらく馬を走らせると、一見の着物屋の前に来る。ここはそれほど大きくないものの、建物はそれなりのものだ。

「ここは？」

「ここは拙者が聞いた中では一番下はちと親しい・・・確か親戚との事ですが・・・。その家となります。」

「おおきいな。」

美井も珍しそうに着物を見つめる。いかに江戸が大きくとも、堺で扱う繊維量は桁が一つ違うだけあつてその着物はどれをとつても鮮やかだ。

「いらつしやいませ。」

奥から声が聞こえる。大方この規模の店なら番頭と言つたところであろうか。駆け寄つて・・・。

「よ。」

「これは・・・信繁様。」

そういつて大きく一礼をした番頭らしい男を見ると信繁達は馬を下りた。

「久しいな下八。」

「どうかなさいましたか？この忙しい時でしょうか・・・。」

「聞きたい事がある。中に入れて貰えまいか。」

そういつと信繁はじつと下八を見つめる。

「分かりました、よくは存じませんがどうぞ奥へ。」
「そういうと奥へ通されていった。」

「何の用でしょうか。」
「少しこじんまりした部屋である。大方一番小さな矢であろう、奥には幾つかの部屋がある。」

「お主はここで何を？」

不思議そうに根津は聞いてくる。

「ここで・・・番頭をさせてもらっています。城をやめて暇していたところを、この主に拾われまして・・・。」

「そうか・・・それはよかった。」

信繁はほつとした顔で見つめる。その顔は年老いて、しわしわであるが、その暖かみがある顔はどこか人をほつとさせる。脇から、茶を取り出すと人数分目の前に置いた。作動で使うものではなく、もつと薄いものだ。

「用件とは？」

「・・・どうして城をやめた？俺に一言言ってくればどこか紹介したのに？」

「・・・それは・・・あの時は・・・色々嫌になり申して。」

「どこが・・・。」

先ほどまで柔らかく笑顔だった下八の顔がみるみる、誰が見ても分かるぐらい曇る。

「・・・あなたはきつとあいつらとは違います・・・。だから・・・あなた様こそ、あの城から逃げ出してください。今ならきつと逃げ仰せるでしょう。」

その必死そうな顔を見て根津が不安そうな顔になった。それを信繁が軽く手で制した。

「もしかしたらだが・・・あの戦の時・・・何かあったな？」

「そう問いたただす信繁の声に反応はなかった。」

「死人・・・だな。」

その言葉に今度は根津が驚いた。むろん下八も顔をハツと上げる。

「そこまでご存じなら分かるでしょう。あれは・・・いや、城の連中は・・・人じゃありません。」

その顔は嫌悪に満ちていた。

「詳しく・・・聞かせてくれないか。あの日、南側で何が起きて、徳川軍を追い払ったのか？」

「・・・。」

じつと下八は信繁の顔を見つめる。その顔は泣きそうな・・・いや、地獄を見たような顔だった。

「覚悟は・・・。」

「覚悟なぞ出来ている。」

「分かり申した。もしかしたらこれが天命かもしれませぬ。お話し申そう。」

そういう覚悟の声に、根津はただ、見ているしかなかった。

「ちょうど真田丸から歓声が上がリ、勝利の音が響く頃・・・私いた南側は鉄砲とかで門を死守しておりました。負傷兵も多く、それでもぎりぎりの所で踏みとどまっていました。」

その時です。私も要して参りまして、一度持ち場を離れ、用を足しに行きました。その時、急に・・・門の開く音がしたのです。確かにここを越えても城までもう少しありますが、これは一大事だと、鉄砲窓に向かいました。・・・そこには南蛮衆がいて・・・何か手に黄色い粉を撒いておりました。」

「南蛮衆！」

「だと思いません。妙に大きな黒ずくめがいましたからな。それで門の方を見ると南蛮衆が門を開け始めましたそして手に持った粉を徳川にも撒き始めました。」

その顔は悲惨その物だった。

「敵が来ると思い、一目散に逃げました。そしてしばらく奥まで逃げるのですが・・・何の音もしないで・・・少し立ち戻り先ほどの持ち場を見ました・・・。」

そこで下八は目と口を押さえる。

「どうした？」

信繁は立ち上がり、下八に駆け寄る。

「思い出しただけでも吐き気がします。」

「無理なら言わなくてもいいぞ。」

根津も心配そうに見つめる。

「いや・・・お気遣い感謝します・・・。そこで見たのは・・・。

人を食らう人の形をした鬼の姿でした。」

「・・・。」

「その時見たのは生きているものを見ると敵味方構わず、襲っているようでした。只・・・何故か南蛮衆だけが襲われず、高いところからじつと見つめていました。信じられないと思いますが・・・本当です。只、その鬼どもは徳川、豊臣どちらの格好をしたものもありません。・・・しばらく見ていると、噛まれたものはどんどんその鬼になっていきました。」

その言葉に全員が息をのんだ。

「あれは・・・今でも思い出したくありません。すぐ逃げました。

すぐ上の所までいきました。物陰に隠れ、鉄砲口からじつと見て・・・いや・・・逃げれませんでした。死人どもの肉を食らう音がそこから中でして・・・それで、怖くなって、物陰に隠れていました。しばらくして・・・音が無くなり・・・それでも怖くて・・・しばらく待つて顔だけ出すとそこには食い散らかされた死体の山と・・・列になって歩いていったあの死人どもの後ろ姿でした。あれ以来、怖くて・・・誰にも話せませんでした。あんな事があるのでしょいか？」

「いや・・・まあ・・・感謝する。」

信繁は深くお辞儀をする・・・半蔵のいつていた事は本当だったのだ。それはそうだ。死人相手ではいたずらに軍を向ければ只相手の数を増やすだけだ。事実上落とせる城を死人の前に敗北したのだ。それはあんな執念を燃やす。今まで死人を用いた戦術など・・・ありもしなかった。

「それからというものの、城を守る事に疑問を持つようになり……やめました。」

「そうか……。」

根津も頷いているが、その顔は動揺していた。

「戦は……ここまで来ますかねえ。」

下八は根も抜けきったような声で話す。

「徳川殿はここを戦場にはしないし、豊臣もそうはしないだろう……

・只夜盗は来るやもしれん。注意はしてくれ。」

「分かり申した。」

そう頷くと下八は立ち上がる。

「そうだ。」

信繁は立ち上がると懐を探り財布を見つめる。

「……後二つ用件が出来た。頼まれてくれるか？」

「は、はい。」

「一つは……明日ぐらいに拙者の家族をこちらによこす。しばらく

く……戦が終わるまでかくまってはくれまいか？」

「……先ほどの事……城へは？」

「言わん。言えば城のものに俺が殺されてしまいそうだ。」

「確かに……。」

下八は頷くと軽く……気弱そうにほえむ。

「分かりました。戦が終わるまでならお受けいたそう。只、戦が終

わったら……。」

「わかつている。」

そういうと信繁もまた悲しそうな顔で微笑み返す。「

「そういうえば……。後一つの用とは？」

「そうだ。ここに幾ばくか金がある……。これで、この子に少しき

れいな着物と見繕ってはくれまいか？」

そういつて、熱いお茶を息で冷ましながらちびりちびりと飲んで

いる美井を指さした。

「分かりました。」

そう頷く下八から笑みがこぼれた。

「信繁……ありがとう……。」

そう自分の新しい着物を見て美井は嬉しそうだった。あの店によつた後はゆつくりと港まで馬を歩かせていた、堺の町を美井達に見せていた。もしかしたらこれで見納めかもしれない……しばらくすると、何番街が見える。この先に南蛮船を泊める専用の港があった。普通の船と区別がしてあり、一種独特の空気が漂っていた。と言つのも南蛮の船は外洋向けの大きな船で、普通の船と一緒にすると事故が起こるからだ。

「でもまあ、なかなかいいものを……。」

根津はじつと根元に置いた美井の姿を見ていた。少し明るめの赤の着物で、その模様に酉をあしらっている。なかなか鮮やかで前の着物よりはきれいだった。

「見てみる、ほら、懐かしいだろ……。」

「そういえば信繁様……。どうしてここに……。」

不思議そうに南蛮町をあるく信繁をいぶかしそうに見ていた。

「ん？状況を聞いた時にな、大きめの貿易船が来ているとかで、その大きめの船って奴を見てみたくな。」

「ああ。あの黒い。」

根津は納得したように馬を先に走らせる。

「こちらです。」

そう言つと根津は港の開けたところに連れて行く。そこには幾つかの船があり……普段よりは少なめである。むろんこれは戦が近いので逃げ出したのであろう……当然だな。

「あ……あれ……あれ……あ……あ……！あれ！」

港から船を見始めた時美井が急に震えている。根津もその様子に押さえるように美井を抱きしめる。その様子を見た信繁は馬を美井に寄せる。

「どうした？美井。」

「あ……」

美井は身体が震えながらも港に泊まるある船に指を指す。確か苦い用船にしては一回り大きい船、そしてその黒塗り加減が何か……大阪城に似ている気がする……。

「log……lodrigs fantazmu」

「どうした？」

「なにが……」

「逃げよう……パーパが……殺される!」

美井の錯乱ぶりが激しくなっていく、あの船に何かがあるのだから。信繁は根津の馬を叩くと、自身も引き返し走り去る。しばらくも走ると、郊外まで抜ける。その頃には落ち着いていたが、ちょうどそこからも船を見る事は出来る。近くの小高いところに陣取り、馬をつなぎ止める。

「大丈夫か？」

根津を馬から抱きかかえて美井をおろすと、美井をその場に寝かせる。

「ご、ごめん……あの火から……あの火から……」

「大丈夫か？」

「う……うん……」

「この子はどいう……」

根津は心配そうにそう言うと、船の砲を見つめる。貿易船は三隻ほどあるが大きく、ここからでやっと全容が見える。その大きさは確かに異常だ。

「この子が……三浦按針殿の娘と聞いている……エゲレスの子だ。」

「はあ。」

「で何で？船見て痙攣するんです？」

そう言いながら物珍しそうに美井を見つめるが……。よく様子は分からない。

「あの船……イスパニア……。イスパニアの軍艦……。世界最

強……。パーパはその船に追われ、船が壊れ……。あそこにいた。

美井は頭と顔を手で覆い、震えていたが、そこから震えるように、絞るように声を出していた。

「あれは……。イスパニア……。ヨーロッパ……。ここで言う伴天連最強の艦隊……。パーパは……。あれに追われ……。イギリスから逃げた。」

「大丈夫だ。俺たちが守る……。」

「本当？」

「ああ。」

信繁は大きく頷く、その声に美井は手を開く。

「本当に？」

「ああ。」

そう言うとしばらくして手を顔からどけて、じつと船を見つめる。

「あの船がどうして……。ここに……。ここにいるのか分からないけど……。あれはパーパを追ってきた船。そして……。イスパニア最強の船。」

そう言うって美井は特にひときわ大きい船を指さす。

「あれは貿易船だ……。」

「それは違う。あの横の線……。」

「あれか……。」

そう言うって美井を抱きかかえ、少し横が見えるところを指さす。

「あれ……。全部大砲。」

「は？」

根津は驚いて指を指し数え始める。船に横線は三本引かれ、よく見るとそれは船一杯に引かれている。

「しかも、大方、カローネだと思う。」

「カローネ？」

「うん。最新の大砲で、山を一つ越すぐらいは飛ぶ。」

「……。」

その言葉に信繁は押し黙ってしまふ。そんな船が世界にあるんだ。

「それでパーパの船は遠くからぼろぼろに……。」

「そうか……それは確かなのか。」

「うん。」

気むずかしい顔で船を見つめる。そんな軍艦が増援なら確かに勝てる……。だが町に被害を出す事は出来ない。大切な港だからな……。そして何より大砲で城も壊されるわけにはいかない……。

「いきますか。これなら万全でしょう……。この子には悪いのですが、そんな強力な艦隊が味方なら……。信繁様？」

信繁はじつと船を見つめる。只ひたすらに安心していいというわけではない。何か……。策を練っているに違いない。これだけで大砲持ちの15万を相手に勝てるとうてい思わないはずだ。少し整頓してみるか……。大方あの南蛮衆……。確か宣教師だ。南蛮だからとはいえ世界最強の軍艦とかというものを呼ぶほどにすさまじい……。それが三隻……。

だとして……。何かが結べそうな……。頭の中がぐるぐると回る。「イスパニア……。嫌い。自分の事しか考えない……。」

美井は小さくつぶやいた。さっきの根津の言葉に反応したのだから。

「大砲とか地上向けに討つ……。少ない。人、いっぱい死ぬ。」

「それが戦だ……。」

「でも……。あんなのは……。戦じゃないよ……。只……。人が死ぬだけ。」

「だとしても、いこう。さっきの話が本当なら、ここには長居すべきじゃない。」

「は。」

そう馬に戻る信繁の胸に悪い予感がずっと去来していた。

誰でも戦いで死にたくはない。それは当然だ。だが味方の被害を考えず大砲を撃つ戦いは今までした事はなかった……。だが……。あの淀君はそれをしかねない。だがどうする……。死人が制御出来

ても相手に対策がある。半蔵は最低限度、対策を持ち込む。確かに数があればどうか分らないが……。確かに大砲があれば相手を制圧出来るが……。だからといって押さえられるほどじゃない。何しろ味方がいるところで使う事は出来ない。それが大砲の鉄則……。なぜなら大量の死傷者がでる……。そう言えば……。あの本の外堀は広いが、地形上半分盆地みたいな作りだ。埋め立てた時のこともあり、かなり立地的に低いはずだ。じつと夕食後、頭を働かせ、信繁は部屋に籠もるが、結論が出ない。そんな平気がいくつあろうと15万という大群では……。3倍ぐらいある戦力差では覆すだけの切り札ではない。それを集中的に……。集中……。そうか……。だとして粉は……。ア……。そうだ。死体でも動かす事が出来るなら……。相手が死んでいてもいいなら……。相手が死んでもいい状態なら……。大砲は相手も巻き込む……。

「何となく分かった……。だがこれは……。人が行う戦術ではない！」
信繁は怒鳴り声を上げてしまう。だが夜も遅く……。朝には後藤殿が来て、戦略を聞くだろう。でも会議をしていると言う事は……。この事は限られたものしか知らされてはいないのだろう。懐から一つの袋を取り出し、信繁は近くの棚から、地図を取り出す。そこに袋の中にあつた駒をゆっくりと置いていく。駒の配置は戦の後半、外堀後に攻め込まれた時の形だ。

「確かにここなら15万でも誘い込めるし……。それにここなら大砲がどんなに精度が悪くとも、誰かには当たる。被害は甚大だろう。だがこれを行い、相手をここに押しとどめるには……。5万の部隊を持ち込む必要がある……。」

駒を横に並べてみるが、どう見ても数が足りない。しかも薄ければそこを機転に強行突破されてしまう。むろん入り始めたところから大砲を撃つだろうが、それでも……。ちょうどこんな所に山が……。そうか。そう何か頭にひらめくと、淀君の作戦というものを考えてみて……。夜は更けていくのであった。対策とかを考えなければ

自分が巻き込まれ・・・死人にされしまつのを阻止しなくては・・・。

「おはようございます。」

妻の声を聞くと欠伸をしながら信繁は広間に向かう。今は戦仕度で全員を向かわせた為、家人はおらず家族・・・いや、美井がいるか。

「今日はこちらを。」

そう言つて出された膳には赤味噌のみそ汁とご飯・・・そして漬けた漬物と焼かれた魚があつた。

「これは・・・。」

「もうすぐ戦なのでしよう。これで精をつけてください。」

「ああ！ありがたい！」

うつすらと信繁の頬に涙が伝う。家計は戦に向けて苦しく、最早食費はほとんど無かつた。だからこの焼き魚を見た時、つい涙が出てしまった。いや、これからの事に・・・。

「すみません！」

飯に箸を付けようとしたところ、外から声が聞こえると、庭に荷車が入ってくる。

「お！」

外を見るとそこに下八の姿がある。

「信繁様！」

「どうした？」

そう言う中に入ってきた荷車を見る。むしろが掛けてあり、中を見ると幾つかの樽が入っている。その荷車が12ぐらいはある。

「機能、信繁様が帰った後に大旦那から、ここにこれを運ぶように言われて・・・来ました。」

「これは？」

不思議そうに信繁は樽を開けると・・・

「確か・・・真田信之様でしたっけ？あの方からここに運ぶように

言われたものです。」

「そうか・・・そうか・・・そうかそうか！」

何回も頷くと信繁は頬をゆるませていた。

「こんなのをこんなに送りつけて・・・何をするつもりです？」

そういつて不思議そうに樽を見つめる下八の手を信繁は握りしめた。

「これがあれば俺は百人・・・いや・・・千人力だ。助かる。」

「いや・・・まあ・・・」

「どうなさいました？」

妻や子供達は不思議そうにその様子を見つめた。

「そうだ・・・。お前達。」

「はい。」

信繁は落ち着いて妻達を見つめる。その顔は真剣その物だ。

「お前らは逃げてくれ。大方ここも戦場となり、きつとお前達は死んでしまうだろう。」

「それでも・・・。」

「いや、もし俺が生き残ってもお前達が死んでは帰るところがない。そこだ。」

「はい。」

「この人についてしばらく堺で身を隠して欲しい。」

その言葉にじっと旦那の顔を見る妻であったが、何か覚悟を決めたようにきつと唇を噛み・・・しゃもじを握りしめていた。

「・・・分かりました・・・。只・・・せめて仕度はさせてください。」

「ああ。」

そう言つと妻と子供は奥に入つていった。その顔は覚悟はしていたものの、寂しそうでもあった。

「大変ですな。」

「まあな。結婚してすぐだけど・・・それでも・・・愛した女だ・・・せめて生きていて欲しい。」

「そう言えば・・・仕度なら荷物は・・・。」
「そうだな。」

そう言うつと荷車のムシ口を取り除くと、樽を下ろし始める。
「荷物はこいつに載せていってくれ。樽は俺が責任持って運ぶ。」

「分かりました。お前ら！樽を卸してそこに並べろ。」
”はい！”

そう言うつと荷車を押していた人足達が荷物を下ろし始める。

「・・・せめて・・・荷車一つは置いていって欲しいな・・・運びやすいから・・・。」

そう小さく言っている言葉は男達の掛け声に消されていった。

「で・・・これですな・・・。」

呆れたように筧は、庭に置かれた一つの荷車と、無数の樽がそこにあつた。かなり重い為運ぶには手間だ。

「これは？」

「これか？これは塗料だ。」

「は？」

「兄貴からの贈り物だ。」

そう言うつてにたにたした顔で樽を見つめる。

「いつ？」

「あの時商人の所に行つたら。あの時に手配してもらつた。」

「ああ。あの時。」

そう言うつて樽の中身を覗くとそこには赤い塗料があつた。

「・・・。」

筧はつい押し黙ってしまふ。赤い塗料・・・。

「これは・・・もしや・・・。」

「そうだ。ある意味・・・武田最後の戦いだ。」

「赤備え・・・。」

昔戦国に置いて”赤備え”とは伝説みたいなものだった。無敗を誇る最強武田軍の唯一の特徴。それがこの装備を赤く塗る”赤備え

”である。赤く塗った”赤備え”を装備した部隊は武田軍に置いて勇猛であるものという優秀な人間達の証であり・・・誇りであった。「そつだ。これには親父からある伝説があつて俺の胸も赤く塗つてある。」

そつ言つて、今は戦に向け日干し中の甲冑は真つ赤であつた。

「算は昔、甲斐にいたつて。」

「はい。だからこれは感慨深くございます。」

そつ言つと懐かしく、赤く塗られた甲冑を見つめていた。

「昔・・・武田軍は奇襲を主とした部隊だつた。だから全ての甲冑と衣装は夜の闇に紛れるように黒く染めていた。」

信繁は旅でも使つていた水筒を取り出すと中の水を少し口に付ける。

「ある日、拠点を取つた武田軍は、近くの豪族の部隊に囲まれてしまつ。兵力にして500対3000。城の中には数多くの民もいた。」

「それはまあ・・・かなりの差で。」

「その時に信玄公は自分の血を甲冑に掛け、赤く塗つた。そして俺に付けてこい」と言つて戦場に一人飛び出していった。むろんお付きの者も全て後を追い戦つた。その血まみれの信玄公を見た兵士達はその色におののき、その戦に勝利を収める事が出来た。」

「すさまじい話ですな。」

そつ言つて算も縁側に腰を掛け、じつと塗料を見つめる。

「それ以来伝統で、”赤備え”にはある儀式を必要とした。そして・

・・・」
そつ言つと部屋に入つていった信繁は古くなつたぼろぼろの切れ端を取り出した。

「それを俺が行う番だ。」

そつ言つと草履を履き、塗料のふたを開ける。そして刀を抜き放つ。

「なにを・・・!」

筧が止めようとする瞬間、信繁は自分の腕を切りつける。腕からは鮮血が飛び散り、塗料に入ってしまった。

「赤備え」と黒の部隊”これが武田軍常勝の秘訣よ……。「だ……大丈夫ですか。」

そう言っただけでしゃべっている間にも信繁は歩き、赤の塗料に自分の血を注ぐ。

「まあな。どのぐらいの量が分からぬがこれで十分だろう。」

そう言うのと全ての樽に自分の血を注ぎ、そして縁側に置かれた水筒の水を傷口に掛け、傷口を布できつく縛ると、しばらくして血は止まった。

「……これにどんな意味が……。」

「ま、願掛けだよ……後は目立つ事によって囷の意味合いを強くして、他の部隊の援護を行う。何より……これで血が繋がった……父はそう言っていた。だから家族みたいなものだ……。」

息も絶え絶えに信繁は縁側に座るとやり遂げた顔をしていた。

「それは……拙者とかにも……。」

「ああ。そうだみんなの分だ。」

そう言っただけでこりこりとしていた。

「うあ……なんだこれ。」

その声に二人が振り向くと、後藤の姿があった。

「これは何か妙に臭いぞ。」

「塗料ですよ。」

信繁が軽く答える。

「でだ。何か名案あるか？」

「はい。とりあえず策は固まっています……。」

「ますか？」

後藤は不思議そうな顔で信繁を見る。

「これは各侍大将の皆に知って欲しい事がございます。ですから、会議の後でいいので、こちらに寄っていただけませぬか？御前会議では出来れば、少数でもいいので打って出る方針で。」

「分かった。会議が終わった今日昼過ぎにはこちらに来る。」

「そう言つと後藤はさつと去つていつてしまった。戦はすぐそこ。当然だろう。」

「で、傷は……。」

「後はこれを昼前には食す。」

「そう言つて奥の棚から肉をひとかたまり取り出して、切り始める。」

「これは？」

「桜肉だ。駄馬を処分する時のものを譲り受けてきた。」

「これは……。」

「仏教とかの信心が多いこの頃で肉というのは珍しい食材でもある。」

「東洋の考え方らしいのだが、”医食同源”という。何でも同じ所
のものを食べれば同じ場所が直るといふ。そこで肉を食べ、血を増
やすという算段だ。」

「そうですか。」

「そう言つてこの血なまぐさい固まりを見つめていた。」

兵士達を呼び集合所に塗料を運ばせた直後に侍大将達が続々と信
繁の家に集まつてくる。そして手招きして部屋に招き入れると奥の
座いっぱいに鎧を着た男達がひしめき合う状態になった。

「信繁。何するつもりだ。」

侍大将達は不思議そうに信繁を見つめる。

「少し説明したいのですが、その前にお聞きしたい事がございます。」

「

”応”

「先の会議で淀君様はなんと……。」

「ああ。城前に兵士を並べ、大砲で全員をなぎ払えばどうにか勝て
るだろうと。流石にそれで勝てれば誰も苦労はしない。」

「やはり……。」

「信繁は手に持った地図をばさつと広げ皆に見えるように駒を置い
た。」

「これは……。」

「先の作戦を見せるところです。」

そう言つて信繁は城の外堀が欠かれたところに駒を置き、近くの海に硯を置いた。それを侍大将達が食い入るように見つめる。

「あのお方は何も言つてはいませんが、作戦としては……ここで戦鬪を行い、拙者達と敵兵を巻き込み……。」

横の硯から何かをとばす仕草をする。横の硯は大阪湾の西の海にあり、硯の大きさもあつてかなり大きく見える。

「前と横から大砲を撃ち、第一陣を沈めます。」

ごく。誰かの唾を飲む音が聞こえる。

「それ死んだ兵士達を南蛮衆が死人に変え、徳川軍に襲わせる。それで撃退する為に広い広場みたいな場所が欲しかった。何万という死人なら、相手の数が多くとも勝てる正気が見え、我らは死ぬ事により、軍事費は払わなくともよいと。」

「そんな事があり得るのかよ。」

若い侍大将は声を震わせていた。何かこう今まで言われてきた事の符号が合った瞬間であつた。

「だから、南蛮衆が……。」

「それで……。」

ざわざわと周りがなり始める。それらしい事があつても、なかなか形になつてはいないようだった。むろん後藤もまたうなつていた。本当にこれが起こるなら、侍なぞ捨て駒でしかない。むしろ死体を増やす為の肥やしである。

「だから……。拙者は、単純にここまで下がらぬここで決戦をすべきだと思います。」

「淀君の作戦に乗つてもいいのではないのか？」

「それは……大方最悪の出方としては、敵と勘違いしたとか言つて味方相手でも大砲を撃ち、死人化させてしまつてしょう。」

そう言つて指さしたのがその外堀の南に位置する茶臼山であつた。「……。」

「元より、出陣するならここまでで押さえねば大砲を城まで持ち込まれ、すぐに落城されてしまいます。」

「だからここまでで押さええる。俺たちも味方から大砲は撃たれたくない。」

後藤は唸るしかなかった。

「だが・・・相手は15万・・・こちらは6万でむしろ士気も低い。どうする？」

「それをこれからご説明いたす。必ずとは言いません。結局多大な犠牲が必要ですが勝つ方法はございます。只・・・各自これだけは覚えていて欲しいのです。」

「なんだ。」

「城に帰れば死人にされてしまう恐れがあります。彼らにとって味方なぞ本当にならないので、後ろから刺されかねません。」

「ああ。」

「もし、敗れる事があれば、そのまま武器を持ったままでもいいので、山中に逃げてくだされ。そのまま帰ってこなくてもよいと兵士にはお伝えください。」

その顔は迫力さえある顔で信繁は見つめていた。

「わ、分かった。」

「では・・・作戦をお伝え申す。・・・只・・・聞いた限りは各自、覚悟召されよ。」

そう言い、信繁の鬼気迫る顔を全員が見つめるしかなかったのだ。

第十一節 啄木鳥の一突き（前書き）

ついに始まる大阪夏の陣。信繁は作戦を実行するため戦場に向かう。そこに立ちはだかるのは東北最強”伊達正宗” ついに決戦の火蓋が切って落とされるのであった。

第十一節 啄木鳥の一突き

第十一節 啄木鳥の一突き

ゆつくりと銃を構え、5月の夜の風を信繁は感じながら家で一人、じつと色いろいな事を考えていた。もう家には自分一人しかいない・・・これほど悲しい武家屋敷というのも珍しい。部隊への指示や細かい事を算や青海に伝え、自分は一人ある事の確認を与えられた武器を見渡し、考え直していた。

「本当・・・。ここまでたどり着く方がつらかったぜ。」

しまは入り口からずかずかと家にはいると、縁側にどかっと座る。「遅かったな。」

「ああ。よく分からなかった事が多かったから本当に・・・大変だったぜ。」

「とりあえず前に教わっているよな。」

そう言う遠くから、先ほどの会議でも使っていた地図と、丸い駒を取り出す。そしてそれを見ると、駒を着々と配置していく。

「これが・・・敵軍の配置だぜ。」

そう言って配置された駒をじつと信繁は見つめていた。

「そうか・・・かなり・・・きついな・・・。作戦は・・・念のためも含め、全て起きそう・・・。最悪かもな・・・。」

そう言って盤面を見つめる。そこには東、南全てをふさぐような布陣が敷かれた徳川の布陣が描かれていた。だが・・・それは信繁の想定通りの展開でもあった。

「でもさ・・・これって役に立つのかよ。」

「まあな。ここから相手の動きを予想し、作戦を立てるのが俺の役目だ。」

「そうか。それなら俺も役に立ったというわけだ。」

「そうだな。」

そう言いつつ月明かりが照らす中、じつと地図を指さす。

「やはり・・・仕掛けるなら湿地しかあるまい。」

「あの沼か？」

当時の大阪城東側にはまだ整地されていない湿地帯があり、これが防衛に一役買っていた。だが、これは向こうも承知のはずだ。むろん何かを仕掛けてくる。いや、構えてくる。

「ここなら・・・ここか。」

そう言い、決戦地域の南側に眠る村を先の林を指さす。

「後・・・報告は？」

「お・・・応・・・半蔵が言つてた通りに聞くんだな。おまえ。」

不思議そうな顔で信繁を見つめていた。

「三つほどあるぜ。一つは北の村での報告。何か・・・お坊さんがたくさん北の山の中に行つたとか。」

「それは・・・分らんな。次。」

「ああ。その北の村とかだと何故か、水がここ数日少なくなっていて、稲作しているお百姓さんが困っていた頃。」

「・・・ん？」

「でさらに言つと、南に構えていた集団が最近東へ向かつたとか・・・。」

「と言う事は・・・忍者部隊は中央に集まる。最初か次点で戦線投入か。統率力は高いから。」

そう言つて盤面に黒い駒を中央に足す。状況にいい報告は一切無い。

「で最後だ。最後に寄つた南での報告。船の一団が北に向かつていつた事。」

「・・・流石に淀君の浅知恵も見きるか。」

そう言つとつい口に笑みをほころばせる。だが相手は美井が行つている報告が正しければ、海戦慣れした”世界最強艦隊”早々簡単に沈む事はないと思うが・・・。

「と言う事は読んだとおりの展開・・・。」

そう言つとふつと口から小さな笑みが漏れる。

「ん？おかしいか？」

「いや、自分が思い描いた最悪の状況が今……ここにある。」

そう言つと地図を見つめる。15万の軍が来る。大方軍隊が整列しきるには時間がかかる。早期決戦でしか勝機はない。だが、先陣は伊達と藤堂、伊達はもつとも傷の少ない戦国大名であり一番戦慣れしている軍団でもある。そして戦国で名をはせた傭兵一族”藤堂”の部隊。数は大方奇襲確率の高い方に大軍を置いている。予想出来てはいたが、最悪でもある。

「魔、俺は少し休みながらだから楽だったけど、でもまあ……どうするよこれ？」

偵察してきただけ合つてしまでも分かるほどの絶望的な差だ。

「そうだな、奇襲を一度掛ける必要があるか。すまないが、すぐに一つ頼まれてくれるか。」

そう言つと奥から大きめのひも付きの筒を一つ奥から持つてくる。

「これは？」

「これか。これはよく忍者が使う連絡筒でな。半蔵に聞いて作つてみたんだ。これ。」

「ああ。」

先日、半蔵がしまに忍者の技術の説明をしていた時、緊急連絡に使う連絡筒というものの説明を行っていた。それは手に持てるほどの大きさで中に発破が入っており、爆発するようにでている。大きな音と、煙で味方に位置を知らせるものだ。色つきのものもあり、色の作り方は格差との秘密となっている。むろん半蔵は教える事はなかった。

「で、俺なりに作つてみた。」

そう言つて見せている筒は少し大きく隠し持つわけにはいかなかった。

「でもこれ、緊急とか言う割に大きくねえか？」

そう言つてじろじろと筒を見つめる。

「改良したんだ。ある目的でな。」

そう言つて筒を投げてしまに渡す。

「これを持ってここに行つて欲しい。」

そう言つとある村を一つ指さす。

「ここ？」

「ここだ。」

そう言つて指さした村を見つめる。そこは少しへんぴともいえる。

「この近くに小さな林がある。そこで、敵の部隊が見えたらこつに火をつけて・・・逃げ出して欲しい。」

「・・・逃げていいのかよ。」

手に持った筒を見ながらじつと見つめていた。これに早々殺傷力があるようにも思えない。

「そうだ。これ、しばらくお前が使え。どこかで役に立つ。」

そう言つと信繁は刺していた脇差しを投げてよこす。手に筒も持っていた為、慌てて掴んだ。

「これは・・・。」

「そいつは村正作の脇差し・・・」死に名月”。

”死に名月”・・・。」

そう言つてその刀をみつめる。刀に付く名としてはあまりに珍しかった。

「親父はこういつていた。何でその名前かというと、よく侍が切腹とか言つ時に腹に刺すのがそう言う脇差し。」

じつと見つめている信繁は寂しそうな顔をしていた。

「そして切腹する奴がよく言う辞世の句があつてな。その作者はそう言う死に急ぐ奴が大嫌いだった。そこでこれで腹を突くなら好きにしる・・・だから“死に名月”。」

「嫌な謂われだな。」

そう言つて憎々しげにしまはその脇差しを見つめる。

「でな。親父は最後この刀を渡す時にな、自分の腹をかつ捌く予定の刀だ。大切にしろつて言われたんだ。」

その言葉を聞いて改めてその脇差しを見つめる。何となくその刀の重みがました気がする。

「俺も何か忠義に反する事があればそいつで腹をかつ捌く。」
その言葉にしまはじつとその刀を見つめていた。

「だから、俺が自身の腹をかつ捌く時まで、生きる。その役目に失敗すれば俺たちは全滅しかねない。だから・・・成功・・・もしくは失敗でも構わない・・・生きる。」

信繁の頬から涙が落ちていているようにも見えるが、その顔をまともに見ることは出来ない。

「んな事言っんじゃねえよ。俺が絶対成功させて、見事大勝利だぜ。」

「生きていれば立つ瀬もある。覚えておけよ。」

その並々ならぬ覚悟にしまはごくつと唾を飲み込むとともに、しよっぱさも感じていた。

「お前ら！準備は出来たか？」

そう掛け声は黒ずくめの部隊全てに行き渡っていた。その周りでは大合唱の念仏とかが響き渡っていた。

「わしらこれでお役ご免かな。」

疲れ果てた僧正の一人が、近くの気によりかかりへたれながら答えていた。

「分からぬ。この量以上はもう必要ないと思うが・・・。」

半蔵は樽の数を数えさせていた。この数日間、最終調整に余念はなかったがそれでも万全だとはとうてい思えなかった。そこまでさせるほどにあの時の敗北は忘れがたかった。

「妖隊第二陣。皆持ったか？」

その掛け声の方を見るとできあがったばかりの水を持った妖怪達の姿が見える。移動に自身がある部隊ばかりだ。完成まで時間がかったが、親方様の出陣までに間に合う。

「半蔵様、設営地点周辺での釜の準備が出来ました。」

走って来た忍びが急いで報告を持ってくる。周囲はさながら戦場

さながらのようであった。

「分かった。霧隠れは五日、五日に発動させる。その日が一番濃厚だ！只、油断するな。合図があればすぐに出来るようにも伝える！」
「了解しました！」

そう言い先ほど報告しに来た忍びは駆け足手はしって去っていった。

「妖隊第一陣は山野を通り、死人確認が、死人をそいつで払ってくれ。」

後ろの方では水の使い方を説明する忍びの姿があった。頭はあまりよくないらしく、聞き入っていた妖怪の長達が、かみ砕いて妖怪達に説明している。

「こうして追いかける坊さんをわしらが一緒とはな。」

呆れた顔でお宮の方がじつと念仏を大合唱する坊さんと、念仏の対象である水瓶を見つめる。その姿は下から照らす姿は今まで見た姿より更に妖艶に見える。

「お吉の方。」

「でもまあ、このような作戦・・・あまりに大規模で、初めてだ。そこまでの脅威があつた城にはあるのか？」

そう言い見つめる先に暗闇に浮かぶ黄金の破片が火に照らされる様子に見える。大阪城はこの当時、夜の大阪城はある意味平原に浮かぶ黒塗りのでもあり、不気味でもあった。

「大方日の本を揺るがす最大の敵。今までの騒乱の黒幕・・・正真正銘の黒幕があそこにはおり申す。」

そう言い、苦々しい顔であの城を見つめる。あの日会った・・・あの地獄の風景を彼は忘れるわけにはいかなかった。

当時作戦を採るものがいなかった南側の調査の為、半蔵は南側攻めにいた。ついでに言うると真田丸とは、反対側である。当時真田丸はあの銃撃打ち下ろしの為、銃しかとおらず、南側の進捗次第では撤退が視野に入っていた為、様子を見に来ていたのだ。ちょうど戦

線が硬直していた時、彼の目の前で、門は開いていった。しかも内側から。全員はそこから弊誌が出るのではないかと身構えていた。その瞬間何か粉を投げつけられ、兵達がたじろいだ瞬間のことだった。突然前線の兵士達が慌て始め、兵士達の足が止まった。Sの瞬間足に触れるものを感じた俺は下を見つめると下にあつた死体が動き始めた。素早く飛び退くと、その場を離れた。次の瞬間見つめたそこは地獄しかなかった。立ち上がった徳川と豊臣の死体が、所構わずかみつき始めた。直感的に死人と感じた俺は懐から死人対策を取り出すその瞬間殺気を感じ飛び退く。

「ようこそ！観客達よ。」

その声の上を向くとそこには黒ずくめ・・・黒いマントをつけた黒ずくめの・・・宣教師の姿があつた。足下には阿鼻叫喚の姿があつた。それを見た半蔵は反射的に懐から手裏剣を取り出すと投げつける。それを悠々と交わしなお高台に達続けた男の姿であつた。

「貴様！」

「皆の衆。この異教徒どもが！神の裁きを受けよ！」

訳の分からぬ事をしゃべりだす男の目は・・・爛々と輝き、異常でもあつた。

「貴様！名を名乗れ！」

そう言つと近くの槍を拾い上げ、その男に投げつける。それをその男はマントの一振りではじく。

「そうだな・・・指令はこう名乗れと行っていたな・・・。」

そう言つと腰に手を当てて、下の死肉をむさぼる死人達の上で胸を張る。

「俺の名前はなあ・・・トヨトーミヒデヨリだ！」

そう聞く間にも、死人が死人を生む状況になつていて、どんどん徳川の兵達が死人として立ち上がってきている。

「引き上げる！」

そう半蔵が大声を上げると、後ろで怯えていた部隊達も引き上げ始める。手に持っていたお清めの水を刀に掛けると、構える。中に

は徳川の兵士達の死体も混ざっているのがとてもつらかった。

「お前ら！行けい！神罰を下すのだ！」

その掛け声とともに、それまで無軌道だった死人達が、立ち上がり、一斉にこちらに向く。その瞬間体の芯をぞくつとしたものが走る。今まで一の言うことを聞く死人なぞ見たことがなかった。

ふと半蔵の頭をあの日のごとがよぎる、ぎりぎりで増援が間に合い撤退出来たものの、最早攻めることはかなわず、そのまま兵糧攻めを決定していた。その後聞いたが、その時やけくそで撃つた空砲が天守閣に届いた話を聞き無駄ではないと思っただがあの時もまた、講話の使者が来た時に無駄ではないと思えてしまう。そこまでに・絶望じみた徳川方の敗北であった。その日を今でも忘れることは出来なかった。それから始まった寺の再編と死人対策の徹底を行い、今ここに至る。

「何を考えているかは知らぬが……。一応はまとめ役ぞ。頬を伝う涙は拭きな。」

そう言い、懐から手ぬぐいを取り出すと、半蔵に差し出す。それに気が付くと半蔵は頬をなでる。液体が指にびったりと付いてくる。

「これは……。きつと清めの水の……。」「
そう言つて一息つく、半蔵は顔全体で顔をぬぐう。

「感謝いたす。」

「だしても、あの城かどっかには信繁がいるのだろう……。寂しいものよ。」

「確かにそうですね……。我らとしても彼とは戦いたくありません。」

「お主がそう言うとはな。」

意外そうな顔をして半蔵のしんみりした顔がお吉の方には意外だった。その間にも後ろではへばったお坊さんだ達に妖怪達が食事を運んでいた。

「これでも二月ほどは一緒に飯を食らった仲ですぞ。惜しいと思わ

ぬはずはない。」

「そうか・・・お主ほどの男さえ揺り動かすとは・・・流石・・・真田よの。」

そう言うのにたにたした顔でお吉の方は歩いて去って行ってしまふ。その歩みをじつと半蔵は見ながらも、次の作戦の準備を考え始めていた。

「塗り終わってございます。」

そう言うのと信繁の前に並ぶ部隊の鎧は全て赤塗りとなり、その様相はどこを見ても”赤備え”である。青海がかしこまり、各部隊は大坂城前に整列していた。佐助と算の姿はここにはないが、作戦の為、一足先に現場に向かってもらっている。

「よろしい。」

信繁はその返事とともに鷹揚に頷く。こうしないと遠くまで頷いた様子を見せることは出来ない。全員の鎧が同じ色になったことにより、気持ち引き締まったように見える。

「皆に告ぐ！」

信繁の声が大坂城いっばいに聞こえる。その周りには各侍大将達も整列している。

「この戦いは負け戦である！」

その第一声に全員がざわつく。

「だから・・・この先の戦いは生きて帰る保証はない！」

その声に更に全員がざわつく。

「もし命を惜しむもの、残した家族が気にかかるものがあるなら、今から帰れば罪には問わぬ。帰るが良い！」

その声にしばらくざわつくが、誰一人として帰る者はいない・・・いや、帰れないだけかもしれない。

「今ここにいる者を！俺は！豊臣に忠義ある者だとは・・・決して思わぬ！」

その言葉に侍大将達が全員信繁の方を向く。

「この世において最後の一花を咲かせようと言う・・・戦場に生きる強者だと皆を思う！かぶき者だと俺は信じる！だからこそ聞いて欲しい。これから俺たちは15万もの兵がいるこの日の本と戦う！」その言葉に全員が注視していた。

「例え、これから会う者全てが仏でも親でも敵と思えば全てを切り捨てよ！全てを敵に回しても己を信じ突き進め！それでも俺たちを信じてくれる仲間がいるならそいつを助ける！俺たちは死に行くわけではない！死ぬつもりで勝ちを拾う男いや、かぶき者だ！」

その怒号に近い声が、埋められた外堀にいた者達5万の魂に全て響いていった。

「俺たちの生き様を奴らに思う存分見せつけてやれ！俺たちがいたことを存分にこの世にいる奴らに見せつけてやれ！後悔するな、後悔させるな！だから・・・生きて帰れるように・・・全力を尽くせ！余すところを作るな！備えをしたか！万全だったか！無ければその手に全力を携え・・・俺に付いてこい！俺が・・・こいつらが！」そう言っつて信繁が手を広げた先には聞き惚れていた侍大将達がい

た。

「お前達を最後まで輝かせて・・・そして活かしてやる！」

信繁が腕を突き上げるとそれに合わせて誰が言っつわけでもなく全員が怒号をあげる。

「各自！おのが持ち場に着き！存分に戦え！」

そう言っつと侍大将達が各自手を挙げる、そして各自各々の持ち場に向かっつていった。

「よーやるな。おまえ。」

後藤が感心したように駆け寄っつてくる。

「いや。これは・・・お恥ずかしい。」

台から降りると信繁は照れくさそうに頭をか

く。

「これで全員に気合いが入る。後は作戦次第だが・・・。」

「そればかりは相手次第かと。只、忍びの報告だと敵の配置は読み通りで。」

そう言っただけで自分が行く先の南を見つめる。

「そっか。お前・・・忍びなんて部下がいたのか。すげえな。」

そう感心している後藤であったが、その様子は頭が良さそうに見える。

「でもあの通りなら後藤殿の位置が一番危うい。文字通り全滅さえありつります。」

「分かっている。だがな、俺も弱い男ではないさ。お前の作戦で勝てるなら・・・俺は盾になってやるさ。」

そう言う髭面が笑うのを少し信繁は寂しそうに見つめた。

「お前ら！行くぞ。俺たちだけが遅れたとあつては恥だ！行くぞ！」

そう言つと背後の部隊に声を掛け、後藤は去っていった。

「いいお方で。」

後ろを振り返ると青海が声を掛ける。

「だな。」

「でもまあ・・・あのお方らしいですが、よくまあ訓辞を我らに。」

「仕方ないさ。それが出来る奴はここにはいない。」

そう言っただけで周りを見渡す。各自部隊を率いて持ち場まで向かい始める。三日ほどあるので、どうなるか分からないが、それなりの位置に陣取れると思う。

「俺たちもどうなるか、誰が生き残り、誰が死ぬのか分からない・・・それが今度の戦だ。只、こいつがある分だけ俺たちの方が有利だ。」

そう言っただけで手に持った銃を見つめる。先日運ばれてきた・・・美井が言うには見たこともない形の銃だ。

「ですな。」

そう言っただけで青海が腕を上げる。それに合わせ皆が配置となる道明寺に向け出発を始める。

「啄木鳥の一突き、決まればいいが・・・。」

不安がるも、この作戦成功するかは相手次第なのだから。

「配置についてございます。」

半蔵はじつと周囲を見渡す。木を切りあつらえた釜に全員が準備を行い、号令を待っていた。

「これから・・・霧隠れ清めの術を行う！お前ら始めろ！」

半蔵の掛け声とともに全員が釜に火を入れ水を炊き始める。総勢6千の忍軍が全て釜をたき、一部の者がうちわで釜を扇いでいる。ちょうど前後の火は数日間北向きの風がながれることは分かっていたので、それに合わせ水を相当量焚いて一時的に戦場を充満させる・・・これが徳川・・・いや伊賀忍軍最終手段の一つ”霧隠れ”である。霧で視界を封じることにより、銃の使用を控えさせ、あまつさえに火薬を湿気させることで銃を封じる・・・関ヶ原で行った実験により、より広範囲で行うことが可能な対銃の最終兵器である。今回は更に死人対策用に各寺院に頼み、お払いさせた清めの水を使用して戦場に充満させ、死人を封じる為にそれを霧にすべく兵を配置させた。

「各員連絡。戦場予 positioning へ！」

そう言つと各自忍者達が走り始めた。その様子をじつと半蔵は見つめていた。この作戦に当たり、各所に見張りを立て、万全を期してはいるが相手はあの真田である。何が起こるのか分からない。

「つーわけでー。お前ら、行っていいつぺえ！」

伊達政宗は忍者の報告を受けると刀を突き上げる。それに合わせ、全員が行軍を始める。

「皆の者進軍！」

片倉の掛け声が響く。

「でもさ。マジ・・・霧濃くね？」

そう言つて伊達政宗は周囲を見渡すと、合図がでた頃には霧隠れが完成しており、周囲は深い霧に包まれていた。

「と・・・言われましても・・・。作戦通りな分半蔵殿を褒めるべ

きでは……。」

「ちよつとさ……とばしていかね？」

少し苛ついて伊達政宗が聞いてくる。……片倉の腹は微妙にいたくなってきた……気がする。

「お前らさ！俺とあそこまで競争しねえか？」

そう言つて正宗は兵士達に声を掛ける。

「まずだりいからさ。あそこまで走つていったら一番な。」

「おおー！」

そう言つと兵士達が走り出そうと構え始める。

「よーい！行け！」

そう言つと伊達政宗は急に片倉から逃げるように馬を掛けて走り出してしまふ。

「ちよつと待つてくださいよ。これ！どうするんですか？口上で使ふんでしょ？」

そう言つて片倉は脇に置いてあつた巨大な十字架が置いてある砲台を指さす、伊達政宗はそれを知らずか、全速力で走り去つてしまふ。

「ちよつと……待つてくださいよお。」

片倉は情けない声を上げて、少しはやめるように手招きをする。

それに合わせ部隊は少し早く動き出した。と言つより出発をせかした。そして……片倉は懐から胃薬を取り出すと口の中に流し込んだ。

「報告します。」

「おう。」

後藤は道明寺に一番乗りすると、早速斥候を放つていた。

「まだ真田様以下各部隊は着いておらず、銃の準備に少しかかりません。」

そう行つて斥候は近くに座る。周囲を見れば霧が深く、斥候無しでは部隊の状態も分からない。只川が近いことだけは分かる。

「でもまあ……ここまで霧が濃いと作戦うまくいくのかね？」

不審そうにじつと霧の向こうを見つめる。後藤はあの時間いた作戦を思い出す。

「今回の作戦は籠城に持ち込むにしても、戦うにしても最初に敵兵を減らす必要があります。」

そう信繁はそう言って川を指さす。

「古来戦場に置いて一番守りやすいのは川。ですが、川で待ちかまえたのでは相手は警戒します。」

そう言って信繁は川を叩く。

「でもどうするんだ？」

「川で待てば大方相手との銃撃戦が待っていると思います。だから川で待つのは下策。」

そう言って徳川の川の側の部隊を川向こうの道明寺側に渡す。

「なら・・・どうするんだよ。」

若い侍大将が聞いてくる。

「そこで・・・渡った直後の銃を構えていないところを狙い申す。」

そう言って駒を渡った直後の周囲に味方の駒を配置する。

「ここで襲撃か？」

「いや・・・ここを銃で狙います。」

「え・・・。」

そう言って少し距離を置くように信繁は駒を配置する。

「このあたりには村や古墳などで、隠れるところが多く、川の側以外は森となつて申す。ここなら圧倒的有利で叩けます。また、ここで時間を稼ぎ、退くことも出来ます。」

「それは・・・いいのか？」

「数が多い為、これでも引き時を誤れば全滅もありうります。」

その言葉に侍大将達はごくつと唾を飲む。

「只・・・この作戦には致命的な欠点があります。」

そう言って顔を曇らせ、相手の駒を突く。

「この駒・・・動く時にどこに飛び込むのか分かり申さぬ。そのた

めにはここで足止めする部隊が必要です。」

その言葉に全員が息をのむ。相手はいくつの兵力が来るのか分からない上に、その部隊の足止めなぞ出来るわけではない。

「他に作戦は・・・皆もあるか？」

後藤は見渡す。だが誰も口を開こうとはしない。

「俺は気に入ったぜ。これなら、相手をつぶせると・・・俺は信じている。」

そう言っただけで後藤は立ち上がる。

「ま、こつという役目は誰も引き受けたがらない者さ。なら・・・俺がやる。」

そう言っただけで後藤は胸を叩いた。その言葉に信繁はぐつと涙が出そうになるのをこらえるしかなかった。

「お前らはお前らのやることをやれ・・・後・・・俺が何かあったらこいつに全てを託す。お前ら・・・頼んだぞ！」

「見栄をきつちまったものはしかたねえが・・・これはねえべ。」

そう言っただけで後藤は霧の向こうを見つめるが、対岸を見ることは出来ない。晴れならばここからでも対岸を見ることは出来る。ま・・・

相手も川向こうを見ることが出来なければ

こつちに撃つてくることはないが・・・はてさて・・・どうしたものか。じつと後藤は自分の無い頭で考える。

この辺一帯の川は浅く、確かに川を渡っている最中でも足止めは可能であるが・・・。

「報告！」

先行させていた偵察部隊が戻ってくる。

「何だ！」

「敵部隊の一部を確認。どうもこちらと一緒に夜通し進行している模様。」

「な・・・！」

その報告に後藤は唖然としてしまう。計画よりも早い敵陣の動き

とは予測はしていなかった。

「はい。確かに食事の煙がありました。明日早朝にも渡航を開始かと！」

いくつもの斥候を放ち、遠目からの確認をさせていたが・・・後藤は慌てていた。どうするか。天候を見つめる。前聞いた話だと、信繁の作戦は設営には数時間がかかりそうな作戦だ。今も霧は深くこの暖かさから考えて明日も濃霧・・・ふ・・・惚れた男に準ずるか・・・これもまた一妙だ。

「お前ら！川あ渡るぞ！覚悟決めろ！お前ら！」
後藤は周囲に掛け声を掛ける。

「マジはええな、おめえら。俺感激だぞ。」

伊達政宗は息を切らし、周りの連中を見やる。全員息を切らしていた。おかげさまでずいぶん予定地点よりも先の地点で休憩する羽目になっている。

「・・・殿・・・。馬を一頭潰してでもやることですか？」

片倉が後方から呆れながら、休息させている部隊達から抜けて伊達政宗を見る。

「いや・・・ああ・・・まあな。ほら・・・先陣前駆けってかつこいいじゃん。」

そう言って申し訳なさそうに片倉を見つめる。

「それは敵がいる時です！敵がない時に先駆けって何するんです本当に！」

そう言いつつ苦笑いする伊達であるが、部下はこういう性格だからこそ付いてきている。それは片倉も承知であった。だが・・・物資の調達もままならないこの大阪では殿が乗るような馬はなかなか調達など・・・。

「京で買ってこればいいじゃん。馬。」

「ふざけないでください！京って・・・敵陣ですし、こちら先頭ですよー！」

「えー。」

正宗が不満そうに村を見る。周りの兵士も先頭もしていないのに、食事しているその様子は全力を使い果たした後にも見える。

「ま、寝るぜ。俺は。」

そう言うのと近くの木によりかかり、周りを見渡す。渡ってきたところが湿地帯であつた為、片倉は周囲を警戒していたが、正宗はそう感じていなかった。湿地帯で奇襲すれば帰れない。当然のことだ。帰る前に銃で蜂の巣にされる。銃がこうして多数ある今、この湿地での奇襲は成り立たない。なら・・・早く行けば相手が奇襲する前に奇襲が出来る。そう直感的に感じていた。半蔵が言うには今日あたりには戦線を張ってくるとか言っていたが・・・買いかぶりすぎだつたか？

「は。」

そう言うのと片倉は周囲に斥候部隊を派遣させる。当然伊達家にも忍者を雇ってはいる。だがそれでも直感が上回る時がある。

「報告！」

先に行った先遣部隊が帰ってくる。どうも急ぎ足のようだ。

「敵の部隊が川を渡った模様。」

「見たのか？」

伊達の目がぱちりと見開く。

「は。確認したところ、かなりの人数が渡って・・・。」

「何人かわかるか？」

「いえ・・・。」

「そっかあ。」

そう言うて正宗はまた目をつぶる。数が分からないと・・・この先は谷沿いに行けば少し曲がってそして川にでる川の前。狙撃はされないとはいえ・・・。相手があの川を渡る利点はない。それにそこまで斥候などが、機能していないとは考えにくい・・・と言うことは・・・背後狙いか？なら先端を潰せば作戦は崩壊か・・・。ここまで浅はかなのか、あの真田とか言う男は・・・。

「お前ら！少し休憩してから、前に出るぞ！道をふさげ！片倉！」
「は！」

この時ばかりはいつもふざけているように見える正宗もまた本気である。

「相手がどうであるか分からん。また、夜に他の部隊が渡るかもしれない。」

「は。」

「だから、設営位置を変更する。川が見えるところで待機だ！」

そう言つと周囲の人間もざわつき始める。どうであるか分からないがこれで半分以上の手は防げるはず。派手な方がいいが・・・相手の出方次第ではどうにもならない・・・。渋い顔で山を見つめている。

「川を全員渡りましたが・・・信繁殿の作戦違反では？」

「時間を稼ぐ。」

その後藤の言葉に全員が息を飲む。

「到着しても銃とかの準備に時間がかかる。だからせめて時間だけでも稼ぐ。お前ら！俺に力だけでも貸せ！」

「おお！」

そう言つと後藤は近くの山を指さす。

「この中に潜むぞ。」

そう言つと全員が山の中に進軍を始める。その時、先に行つていた部隊が走ってくる。

「敵兵に動きあり！進軍を開始しました。」

走ってくる部隊は慌てている。後藤はそれでも落ち着いていた。

「せめて、朝になれば援軍が来るやもしれん！時間を稼ぐぞ！走って入れ！」

「応！」

そう言つと全員が駆け足で山に走っていく。

「どうも・・・何も動きがねえなあ。」

川を見える位置に陣を取った伊達は、舶来品の遠見筒を片手にじつと川向こうを見る・・・。とりあえず、向こうの様子は分からないう・・・と言つより暗くて見えない。

「そう言えば、上がってきた部隊というのもここまで見ませんでしたな。」

そう言つて周囲を見渡す片倉ではあるが、その敵部隊の様子は見えない。一万を超える部隊ならまだ川を渡っているはずだ。

「ちいつと様子がおかしいな。」

正宗も前を見つめるがその様子はない。一番前の部隊には鉄盾を構えさせてはいるが銃も飛んでこない。まあ・・・周囲は霧だから早々飛んでは来ないだろうが・・・。ここまで来ると遠見筒もまた役には立たない。

「と・・・いいますと・・・。」

「まずは部隊とか言っていたやつはいねえ・・・いるとすれば・・・。」

そう言つて横の山を見つめる。ちょうど鷹外で、周囲を見つめることも出来る。

「その山だ。」

その言葉に片倉はじつと山を見つめるが敵がいるようにはみえない。

「でも・・・。」

「だが・・・ここから離れば敵の部隊が横を突いてくるんじゃないか？」

そう言つて川向こうをじつと正宗は見つめる。川はあまり深くない為か、突撃すれば壊滅しかねない。だとすると・・・。

「敵に動きはあつか？」

周囲に伊達は聞いてくるが返事はない。無いと見る方が正しい。

「なら・・・先に先行部隊を潰すぞ！気張れや！」

「おお！」

「大砲はどうします？」

片倉は退かせてきた大砲の数々を指さす。

「いらね。むしろ音と小さくしてあいてを引き寄せる方が楽っしょ。」

「

は。」

「片倉。後ろの部隊に使い出して、その山囲むっていつとけや。」

俺たちは山狩りすっぞ！」

「は。」

その言葉に頷き、手で合図を送る。それに伴い馬が走って後ろの部隊に向かっていた。この行動の早さが伊達の売りでもある。

「部隊……。動き始めたようだな。」

じつと山頂から下に向かい後藤は望遠鏡を除いていた。斥候用にと城の中から大名用の者をつぱらつておいたのがここで役に立つ。それに伴い全員が銃を構えじつと部隊を狙っていた。信繁から聞いたあの話を基にじつと銃を構える。

「えつと……。銃って……。ここにぼつち……。ある。」

美井は銃の一部を指さすと根元の凹がある板の部分を刺す。全員が食い入るように見つめる。信繁が言うには西洋人には西洋人の銃の扱いがあるらしい。それを知れば少しは命中があがるとのこと。「ここを覗くと……。前に……。凸がある……。でしょ。」

そう言つて銃の先端にある出っ張りを指さす。まさかこの年になつてこんな小さな娘に者を教わるとは……。やはり周りもその考えは一緒らしいが、実際そのことを知らないのだから仕方がない。

「へこんだところ……。ここ……。覗く……。金属の先……。敵……。撃つ……。当たる。」

そう言つと信繁が、言った通りに構えると的と思われる木の板を撃つ。すると素直に前に向かって放たれ、そして命中する。その命中に全員が声を上げる、自分もまた口が開きっぱなしだ。

「狙う・・・まっすぐ飛ぶ。」

「これには射程があつて大体・・・一町か二町（約110mから200m）前後は届く。そこまではまっすぐ飛ぶ。」

信繁は撃つた銃の底を叩くと火薬の粉がばらばらと落ちてくる。

「今回の作戦はこの銃の扱いが基本だと言つても過言ではない。後もう一つ。覚えていて欲しいことがある。」

そう言つと信繁は根津からもう一丁銃を受け取る。そして、近く
の程々に太い木に狙いを定める。

「むろん相手も銃を持つてくるでしょう。だから覚えておいて欲しいのです。」

その言葉に信繁が狙う木のほうを侍大将達が全員が見つめる。そして・・・そのまましばらくの静寂の後、銃は撃たれ・・・弾は木に当たる。

「このようにある程度太い木とか・・・柱とかなら銃は貫通しません。もし戦う時にはこういう場所を選んでください。」

そういつて信繁は木を指さす。木に傷は付くものの平然と立っていた。

「また、木とかに登つたりすれば、頭上からは警戒されにくいですが、かわしにくいので、出来れば各自配置にはきをつけてください。」

言つたとおり、後藤は木の裏に各兵を構えさせている。だが、火の明かり通りなら、横からも銃が飛んでくる。これは・・・きつい・・・。ザッ。だが・・・これ以上の進軍をさせる・・・。ザッ。音に反応して周囲を見渡すとどうも先行部隊がこちらの山狩りを始めたみたいだ。上がってくる敵の部隊が確認出来る。

「お前ら！分かつてるな！敵は赤くないぞ！撃て！」

後藤は掛け声をあげると銃がうなりを上げ大音量が山に響き、銃は敵陣に放たれた。この時五月六日の午前0時。これが大阪夏の陣の始まりでもあった。

「なんだあ！」

伊達の怒号が広い川原いつぱいになりを上げる。その音ともに山狩りの第二陣の為に立っていた兵士達に弾がぶち当たる。

「は！山中に敵発見。どうもこちらの動きを察知している模様。」

「んなのわかってんだよ！とつと行つてこいや！」

報告に怒鳴り声を上げる。向こうの部隊も同じらしく泡を食っているみたいだ。正宗の怒号が響くと部隊が山中を指して突撃を開始する。

「お前ら、盾構えるの忘れんな！」

徳川から各部隊に渋滞策として幾つかの鉄立てが配布されていた。先人用である。気休めかもしれないが、銃の弾は貫通しないので被害は少ない。無論銃対策として、機能している。伊達政宗はそう声を上げてはいるが、兵士達はとまどっている・・・そう見える。次の瞬間また銃声が響き、山から人が転げてくる。坂は急でここからだ、両手を使わないと上れない。そこを狙われると盾を構えるわけにはいかない。しかも霧で遠くを見渡せない。なら！

「お前らあ！」

伊達の怒号がさらに響く。

「山狩りはやめだ！先に山に銃撃てや！あぶるぞ！」

そう言う手短な銃を構え狙いをつける。だが、夜と霧が重なり、視界はとても悪い。向こうも悪いが・・・向こうは適当に撃つてもどこかに当たる。これに対しこっちは狙わないと当たらない。だが行けるか・・・。

「撃て！」

それとともに、構えた銃の部隊が山の中に撃つが、声一つさえしない。当たった様子はない。

「あああ！ふざけんな！マジぶち殺すぞ！」

「落ちて着いてください！殿！殿！」

怒りに震える声が聞こえるがそれでも全員がこの時悪い予感がし

ていた。長期戦の予感である。

「報告！」

信繁は戦闘地域の周辺の村人達を堺に誘導する手はずの最中に急ぎで斥候が帰ってくる。

「何だ！」

「戦闘が発生している模様。どうも先に陣を構えた後藤殿との戦闘かと。」

その声に周囲の部隊の人間全体が凍り付く。

「だあ！どうなってるんだよ！戦闘はこっちの合図だって言ってるだけだろっが！」

青海が斥候に当たり散らす信繁は馬にくくりつけてあった地図を地面に押し広げると川の周辺を指さす。

「どこだ！」

「ここ・・・だと思われませぬ。まだ敵部隊は川を渡っていません。」「そう言っただけさしたの敵が川を渡る前の場所である。」

「後藤殿からの連絡は？」

「ありません！」

緊急の為か、全員に緊張が走る。周囲の足軽大将達が慌て始めるがそれでもじつと地図を信繁は見つめる。

「どうするんだよ。」

じつと信繁は地図を見つめる・・・このままだと作戦は台無しだが・・・このまま撤退命令を出すとしま達は死んでしまう。それにここで防げねばもう・・・こちらは背水の陣と言っことになる。大方後藤殿は考えがあつて・・・。

「ここは作戦が失敗だと言うことで、引き返し！態勢を・・・。」

「ふざけんな！助けに行くぞ！後藤の旦那を見捨てるのかよ！」

青海と根津がにらみ合う。

「・・・各部隊に通達を出せ、決戦は今朝！川に銃を向け、戦闘準備だ！」

信繁は近くの男に指示を出す。それに合わせて各部隊の兵士達は伝令に向かつていった。

「助けに行かないのかよ！」

青海はじつと川向こうを見る。きつとそこでは凄惨な戦いが行われているのだろう。

「助けに行けば、消耗戦となり、助けに行くどころかこちらが全滅する。だから手はず通りに行うだけだ！」

「信繁！」

青海は信繁に怒鳴り、信繁を睨む。その時その目は固い意志がある・・・一瞬青海は信繁の手元が見えてしまう。信繁の手は震え手の平からは血がにじんでいた。その時全てを察する。相手の位置や数を考えればどちらが大切か・・・冷徹な判断がなければ部隊を預かる男ではない。だからこの男は仲間を守る道を選んだ。友を見捨てても・・・だがそれは頭で分かっている、心で納得出来るはずはない。それを理解し・・・青海は押し黙ってしまう。

「すまん・・・青海。ここは勝つ為だ。」

「すまん。」

そう言つと青海は陣から出る。しばらく歩くと、青海は物陰からそつと信繁を見つめる。その姿は全身がまだ小刻みに震えている。・・・あの絞り出すような細かい声はまだ頭の中に残っている。

「そろそろ朝か・・・」

後藤はそつと空を見上げる。戦闘は北、東から部隊が侵攻するものの、山の上を陣取る後藤が、一進一退のようだった。この時初めて信繁のあの緊張した顔の意味が分かった気がした。あの作戦から今までずつとふさぎ込んだ顔・・・今なら分かる。数の暴力がこの少し冷たい霧の中映る人影で分かる。ここまでぎりぎり堪え忍んできた部隊の皆の体力や気力は限界である。それは一番自分がよく分かる。

「大将！」

「どうした！」

その声に隣のぼろぼろとなった木の向こうの兵士から声が聞こえる。魔が散発的に銃声が響く為、声も大きめだ。

「弾が・・・もうこっちの弾はありません！」

その掛け声で、後藤は自分の手元を見つめる。こちらの銃も弾は最早無い。担いできた火薬もつきている。もう周囲もそうなのだろう・・・。白んできた空をじっと見つめる。もう・・・時間は稼げたかな・・・。

「お前ら！撤退すつぞ！傷ついた奴は近くの奴に武器渡して山降りる！」

周囲に聞こえるように後藤は大声をだす。下を見るとまだ上ってくる部隊がいる。後藤は刀を抜くと立ち上がる。

「他の奴らは近くに來た奴らを叩き斬るだけにしろ！」

そう言つと隊列の後ろにいた負傷兵達が引き上げ始める。

「まだ立ち上がれるものは時間稼ぐぞ。そして順次・・・引き上げる！」

その言葉に全員が頷くと後の者は立ち上がる。まだ周囲は霧でまだ晴れる様子はない。奇襲で稼げる時間はあるはずだ。

「まだ霧・・・晴れねえな。」

苦い顔で正宗は山を見つめる。

「しかも・・・来るかと思つた敵もこねえな・・・。」

正宗の嫌そうな声を背景に片倉も不安そうに見つめる。もう4刻（8時間）くらい経っている気がするが、時々銃声が響く。

「敵ですか？」

片倉が素直に聞き返す。確かに幾つかの部隊に川を見張らせていた。

「まあな。川の横から撃ちらの横っ腹ぶん殴る気だつて思つてただけだよ。どうも・・・こねえ。」

正宗はじつと川向こうを見るが襲撃の気配は感じない。

えるまもなく飛び込み踏みつけるとそのまま山の中を駆け下りる。

「後藤基次！参る！」

掛け声の中、山を駆け下りる。その速さに驚いて一気に駆け下りていく。数分もしないうちに麓まで駆け下りる。むろんそれまでに切り結べる相手には斬りつけていったが、もう数回振り抜く力も後藤には残されていない。

「やるじゃ？お前！」

そう言っただけで構えている三日月の兜をつけた男がいた。その周りには多くの兵士達が従っていた。

「行け！お前ら！」

片倉が兵士達に発破を掛ける。その声に触発されるように近くの兵士達が槍を構えて突っ込んでくる。それを後藤が紙一重に避ける。と刀を鎧の隙間にえぐり込む。そしてそのまま近くの兵士の方に無理矢理向けると槍を無理矢理差し込ませる。そして刺さったのを確認すると、刀を引き抜き横に蹴り飛ばす。それに合わせて兵士たちがばたばたと倒れていく。

「おめえら！俺に出番ぐらいくれよ！」

そう言っただけでそれを見ていた三日月の兜の男が一步前に出てくる。

「お主・・・名前は？」

「俺か？聞くと凄すぎて・・・ちびんぞ？」

そう言っただけで刀を構えながら少しずつ三日月の兜の男が間合いを詰める。

「折角・・・首を切られるのに土左衛門でもいいのかな？」

少し口元をゆがませて後藤は目の前の男を睨む。今までの兵士とは違う圧迫感がそこにはあった。

「そこまで言うなら・・・覚悟はあるようだな。冥土のみやげに覚えてとけ！俺の名はなあ！」

そう言っただけで三日月の兜の男はしばらく構えたまま黙っていた。しばらくすると、ちらちらと後ろを見つめ始める。

「俺の名はなあ！」

ちら・・・。

「俺の名はなあ！」

ちらちら・・・。

「俺の！名はなあ！」

ぎよる。三日月兜の男は素直に後ろを向くと片倉を殴りつける。

「あれだよ！あれ！」

そう言つて三日月兜はもう一度後藤の方を振り向く。その頃には後藤の息も大分整えられてきた。

”やるんですか”

”この時位しか・・・やる時ねえだろおがぁ！”

”分かりましたよ”

そして伊達政宗はもう一度後藤の方を振り向くと、片倉は数人を手招きし、何か準備させている。

「俺の名はなあ！奥州組頭にして奥州最強の伊達男！奥州にその名をア知られた最強の組頭！その名を聞けば幾人が振り返り！数万の男がひざまずく！そんな俺の名はあ！」

そう言つと片倉達は昔作つた人よりも大きい金の十字架を立ち上げる。そして空砲だろうか数人が鉄砲も打ち鳴らす。

「奥州筆頭組頭！伊達政宗とは俺の事だ！」

その言葉にも後藤はじつと刀を構えるだけだった。

「・・・やるじゃねえか。何にも反応しねえとはな。」

少し驚いたように後藤を見つめる。だが構えを解くことはなかった。その間にも後ろの人たちが片づけに追われていた。

「ふ・・・。関係ないわ。」

低く構えた刀を少しあげると後藤はじつと見つめる。

「あまりに凄くて言葉もないんじゃないね。」

「行くぞ！」

そう言つと身体を倒れ込むように傾けると後藤はそのまま身体をひねり切り上げようとする。それを伊達政宗は刀を狙い打ち込む。それに弾かれ後藤は元の構えに戻る。だがそれでも狙うように今度

はしたからすくい上げるように突きを打ち込む。それを狙って、正宗は水平に斬ってくる。それを頭を低くつつ、突き上げるが伊達も身体をひねり突きをかわす。その瞬間更にもう一ひねりを加え更に一回転すると、ちょうど確認の為に顔を上げた後藤の首を捕らえる！次の瞬間、後藤の首に正宗の刀が突き刺さる。

「む……やる……な……おれ……」

そしてそのまま後藤は崩れ落ちていった。

「お疲れ様です。」

そう言い片倉は手を叩くが、正宗の顔は晴れなかった。

「こいつ……何だぁ……。覚悟がちげえ。」

「それは……分かりませぬ。」

そう言う正宗は後藤の顔を見た。それは必死の形相であった。

「信繁様。配置。終わりました。」

各部隊の兵士達の様子をじっと信繁は見る。もう紐上がってきて暖かくなってはいるが、未だ霧は晴れない。大方……そう言えば、展開殿は半蔵のこと……霧隠とか……まさかな……。

「信繁様。後藤殿の部隊の使者が……」

根津が報告すると信繁は立ち上がり周囲を見渡す。設営場所の村の入り口方面の小屋で、傷だらけの男達が収容されている。その男達に走って駆け寄っていく。

「信繁様……後藤様からの最後の言葉を……」

「何だ！」

「後は……頼んだと……」

言葉を聞いたその直後、信繁の涙腺はゆるんでどっと涙がこぼれ落ちる。

「傷ついた部隊を後方に回せ。彼らが着くまでは決して下がらぬぞ！」

そのまま全員に号令をとばす。戦闘準備は完了しており、後は合図を待っただけだ。じっと南の方を見つめる。

「徳川の使者の方が！」

伊達正宗はにぎりめしをかぶりつき、じつと川を見つめていると徳川の旗を背にした男が入ってくる。

「伊達殿。家康殿が”後ろがつかえておるのだからせめて川を渡った向こうで陣を張れ”とのことですよ。」

「ああ！お前らさっきまで戦ってたんだぞ。」

「承知の上ですよ。」

「状況伝えるや。そしたら行ってやる。」

「は！」

そう言つて使者は顔を上げる。

「現在東の部隊は順調に進軍中。ここだけが戦闘の為、各所で進軍が滞っております。」

「あ・・・そ。」

じつと伊達政宗は川向こうを見つめている。敵がもし遅れてくるなら今頃向こうで陣を這っている公算は高い。だが催促されては奥の8万前後の部隊は向こうで展開出来ない。そう考えるものの、向こう側は分かつてはいないだろうな。だとするとここで進軍させるしかないか。一刻の猶予さえ俺たちにはないのか・・・。

「仕方ねえべ。片倉。お前が先に部隊を揚げておいてくれ。飯食つた後に俺も行くからさあ。」

「は！」

そういうと立ち上がり霧で見えない対岸を見つめる。どうやらまだ戦は終わってはいないようだ。そうこう言っているうちに隊から選抜された部隊が鉄盾を持ち、警戒に当たる予定だ。じつと見え詰めると手に持った握り飯を飲み込むと近くの水筒の水を腹に流し込む。部隊の半数は準備が出来たらしい。先ほどの戦闘の負傷兵達は後方の陣に運ぶ算段に一刻はかかり、その間に準備をすませたものまだ戦闘の興奮は冷めやらない。しかも陣を引き締めた為、戦闘の緊張は続いている。そのためか、兵士達の顔は暗い。

「これは・・・明日はもう出れないかもしれないかもしれねえが・・・霧にも限界がある。それまでに決着させたいが・・・無茶かもな・・・」
何となく感じるものの、自分たちが前に出ねば・・・更に行軍が遅れる。しばらく双眼鏡を見つめると、片倉が渡航に成功したみたいだ。川向こうに伊達家の旗が立つ。それに合わせ、正宗が手を挙げると、各部隊も前進を始める。

「お前ら、とつと渡って、向こうの村で休むぞ！」
「おお！」

発破を掛けると兵士達とともに川中まで歩く。甲冑の重さが重しとなり、歩いて渡れるが、体力だけは奪われる。

「お前ら、鉄砲だけは濡らすなよ！」

相違井川を歩く次の瞬間川の上流、南側から轟音が響く

「片倉！」

「は！」

対岸から大声が聞こえる。片倉の声だ。

「今のは!？」

「分かりません。こっちを狙う鉄砲だと思えますが。」

「当たった奴は！」

「いません！」

戦闘の緊張が川を渡っている部隊達に走る。それを感じて正宗は早歩きで川を渡る。川も霧に包まれ、この霧がいかに濃いかよく分かる。片倉も警戒して周囲に盾の向きを指示し始める。・・・何か悪い予感が・・・。

「マジ！待てやあ！」

”撃てー！”

どこかから響く轟音はちょうど陣の対岸から一直線に陣をなぎ払う。それに伴い上陸部隊の半数が銃弾に倒れてしまう。特に盾を構えていた部隊の大部分が鉄砲にやられてしまう。

「片倉！」

「殿！大丈夫！」

正宗が大声を出すと・・・生きてはいるようだ。最初は右つつら・・・次は正面・・・。

「盾を前方にかまえ・・・。」

「左に構える！」

正宗の声に反応した手を左側に構える。

「殿！」

「盾を読まれてんじゃねえのかよ！だとすれば、今度は構えたところから別に飛ぶ！」

正宗は川から上がると手短の盾の所に隠れる。

「来るんでしょうか？」

「お前ら、盾で囲いを作れ。後続をその中につっこめ！頭低くするのを忘れるなよ！」

「了解！」

その掛け声で、後続の足軽大将たち後続部隊に指示を出す。

「片倉、地図！」

「は！」

そう言つて懐から地図をだすと、伏せながら正宗に近づく。その時轟音が響き渡ると左側の縦に鉄砲が当たる音が聞こえるが、上陸部隊にも一部当たつてしまい、川に沈んでしまう。

「あの野郎う！」

正宗のうなり声が周囲に響くが、それも轟音にかき消えてしまう。

「第一射成功！」

根津はじつと霧の向こうにいると思われる標的を見つめる。

「よし！」

信繁は自らも火薬を詰め、物陰に隠れる。

「音から十を数える作戦。成功ですな。」

根津は頷く。もう昼も近く、霧はまだある者の、視界は徐々に晴れてきている。信繁は双眼鏡で敵の状況を見つめる。屋根裏から双眼鏡だけをつきだしている。下では兵士達が隙間から銃を構えている。

普通の人間は状況判断を行うのに少し時間がかかる。むろん川を渡った直後なら川中にいる時の襲撃を警戒するあまり油断する。その油断を最初の一撃で警戒に変えさせる。最初に奇襲する手も考えたが、そこは流石に徳川家康。もう一重ね策を巡らせることにした。それがこの銃を数えての銃撃である。かめた方向と違う方向から弾が飛ばば、勘違いしても早々構えることが出来ず混乱させることが出来る。隊列が整えば、こちらがわざと差し込み、構えさせず、行軍させ無ければ、この銃の前に兵を失わず、こちらが一方的に退却させる事ができる。

「相手もさる者だな・・・あれは・・・伊達政宗か・・・東北の男がこんな所まで・・・ご苦労なことだ。」

いつもの物静かで穏和な感じから一転冷たささえ感じさせる声で観察を続ける。後は銃を撃ち、しま達が帰ってくるまで待つだけだ。相手は川に上がると盾をこちらに向ける・・・いや一部はやはり次の部隊の方へ縦を向ける。そしてその縦に弾が当たると川向こうに散っていった玉が川を渡っている最中の人間達に当たる。

「流石に・・・やるな。だが少数しかまだ揚がってはいないが・・・だが・・・まだ手がある・・・だが・・・この相手ならばれる。しばらくは泳がせるか。撃て！」

その掛け声とともにした下の銃撃隊が銃を放つ。それとともに慌てた相手の部隊がばたばたと倒れる様子を未設中、信繁は望遠鏡から目を離すと手に持った弾を込めた銃を青海に手渡す。そして近くの弾切れの銃を掴むとまた銃に弾を込め始める。部屋の後ろの方では弾込め専用の男達がせつせと弾を込めている。まだ、第2手には早い。そういうしている間に向こうの部隊からも銃声が響いてくる。むろん計画通りである。

「どうなつてんだよ！敵！」

銃弾が飛び交う中、正宗は地図を見つめていた。この状況、もう少しすれば部隊が全滅しかねない。鉄盾を構えていても時々弾が貫

通し、ばたばたと倒れていくそれを走って後ろの兵士が起こして、庇ってはいるがこの環境であることが盲点だった。それは川を渡った際に銃に火を入れる為の火打ち石が濡れてしまい、銃を撃とうにも火がつかない。しかも霧もあるが、どこから弾が飛んでくるか見当も付かない。地図を睨みつけるが包囲されているとしか・・・考えられない。

「分かりませんが、反撃しなければ全滅しますぞ！」

「お前ら、火打ち石とかそこに揚げて、川の中に身体つつこめ！全員だ！後・・・旗！おろせ！」

「は！」

そう言つと片倉と近くの部隊はじりじりと川際まで交代させる。

その間も絶え間なく銃は飛び交っている。また川を渡ろうとしている部隊は弾の轟音に渡ってくる様子はなくなってしまう。

「片倉！お前の部隊は、川に一度入って、川から下流に回り込め！そこから一部隊ずつ片づける・・・後お前は後続の部隊を川向こうに並ばせる！そこからここ！」

そう言つて指さすのは古墳のある北側である。むろん扇状に陣を這った安全地帯である古墳地帯にも信繁は兵士を配置している。

「ここ！ここ！、このあたりに必ず兵隊がいる。川向こうから撃たせる！」

その言葉を聞き、片倉は地図を丸め、地図を持った腕を川に着けぬように飛び込む。

「了解！」

そう言つと片倉は周囲に指示を出すと川を泳いで向こうに行ってしまった。

「俺たちは囷だ！旗を立てろ！俺たちの意地をあいっつらに見せつけてやれ！」

「おお！」

その声に兵士達全員の怒号が響く。この魅力こそが伊達政宗の武器でもある。

その動きをむろん信繁も双眼鏡から見つめる。

「周囲に伝達だ！上から打ち下ろせ！」

その掛け声にサムライ隊長達が隣の小屋へ大声を上げる。それとともに下にいた銃撃隊がはしごを掛け、屋根に上り始める。盾を持ち込むぐらいは当然予想していた・・・だがあれには非常に重い欠点がある。それは上からの攻撃に弱いことだ。むろん兜がある為、矢を打ち上げたときでは早々人を殺すまでは至らない。なら銃を打ち下ろせばいい。

屋根の中から望遠鏡で覗くがまだあの上陸部隊に・・・いや・・・旗を掲げ始めた。何かの合図か・・・？

「信繁！」

「帰りましたぞ！」

声に下を覗くとしまと算が小屋の中に入ってくる。

「良くやった！」

そう言って駆け下りるとしまと、算は所々傷を負っていた。

「途中さ、相手の斥候部隊に襲撃されちゃって。」

「大丈夫か？」

そう言って算を見るが、それらしい傷はない。

「まあ、全員片付けました為・・・大丈夫ですが・・・。相手は連戦ですからほぼ・・・疲労の限界ではないかと。」

算は土間に腰を下ろすと、敵のいる方から身を隠すように座っていた。

「だとしても相手にはまだ後続部隊がいる。」

「でもさ。あれってどんな意味があったんだ？あの筒？」

「あれか・・・凄い音がしただろ。」

そう言って信繁はしまの顔を見つめる。しまの無邪気な顔を見るところが戦場じゃあない気がしてしまう。

「あれ・・・すごい音がするんで驚いちゃったぞ。」

そう言い大きく手を広げて腕をばたばたさせていた。

「あれで敵を驚かせるのが目的だ。ありがとな。」

そう言つと信繁はしまの頭をくしゃくしゃとなでる。今はこれぐらいしかできない。

「でもまあ・・・見事に成功したようすな。」

算もじつと外を覗く。致命傷ではないものの、ほぼ相手の部隊は壊滅状態だろう。

「だとして相手はあの伊達政宗。一筋縄ではいかない。」

「あの・・・伊達政宗ですか・・・。」

「でもさ。どうするの？」

「しばらくはここで銃を撃つて敵の数を減らす。そして・・・負傷兵が陣の後方にたどり着くまでの時間稼ぎをする。だが・・・。」

「だが・・・。」

「相手のことだ。何か仕掛けてくる。それ次第では撤退する。お前らはその準備だ。先に・・・。」

そう言つて近くに置いてある握り飯をしま達に渡す。

「飯・・・食べとけ。長丁場になるぞ。」

そう言つと厳しい顔をして家の中にあるはしごを登り、屋根に据え付けた隠し双眼鏡を覗みつける。

「何か・・・怖いな。」

「覚えとけ。これが戦だ。」

算は厳しい顔をして、家の小窓から外を見つめる。血の香りはこの場所まで鼻につくほどに敵側の死傷者は増えていった。その時々小さく始める音がどこかから響き始める。

川に半分身体を押し沈め、自分自身も盾を持つことで、弾をかわし、じつと・・・じつと伊達政宗は待っていた。その音が響くまで轟音が後ろから響き、後続部隊が川を渡り始めたのだ。無論これが反撃の合図だと・・・信じていた。

「叫び声が聞こえねえ。」

普通、初段の縦断には負傷者がつきもので、当然相手に銃撃を行

えばそれなりの打撃を与えることが出来る・・・はずだ。その時・・・こちら側に銃弾が更に飛び交う。まだ相手がこちらを狙っている様子だ。

「お前ら！まだ行くなよ！」

その掛け声に立ち上がるうとした兵士達が更に身を潜める。川側の土の詰めただが鎧を通してからだに伝わる。もう下手したら身体が動かないかもしれぬ・・・。そして、手にもっと遠見筒を先ほどの音の方を見ると徳川の本隊が川を渡り、北側から進行を始めた。だがこちら側はまだ包囲されている・・・まだ・・・待つしかないのか。

「御注進！御注進！」

「なんだあ！」

そう言い青海が頭をぼりぼりかきながら入り口まで行くと思慣れぬ部隊の旗をつけた使者が家の中に飛び込んでくる。この家紋は・・・長宗我部の者だ。

「信繁様！長宗我部様が見事お役目をお果たしになりました！それに伴い！兵を退きました。」

「損害は！」

「木村様の部隊が壊滅したものの、長宗我部様が回収。退却出来ました！」

そう言う信繁の耳に事が聞こえるもじつと望遠鏡を見つめた。川向この遠くのほうに土埃が見える。上陸したのだろう。味方を見ると、傷ついた兵士達の姿が見える。もう限界だろう。念のために守りやすい東側に少数兵を配置させ、奇襲することで、敵の部隊を足止めし、敵部隊を壊滅させ、敵を固めさせる。そのために他の部隊に後藤殿と同じ事を伝え、兵を配置させておいたのだ。無論。無視されるようなら背後を突かせる為でもあつたが流石に徳川。東からもやはり攻めてきたか・・・。

「分かった！お主！暇か？」

そう言つと信繁は望遠鏡を手に下に降りてくる。

「は？」

「他の部隊に・・・引き時と伝える。俺たちもそつちの退き具合を確認した後に引き上げる。」

「了解しました。」

この時には最早2時半、日は傾き始め、野戦となれば霧もあり戦鬪すれば混乱必至である。その前に引き返せば疲労も押さえられ、今後につなげられる。じつと見つめると、使者が走り、古墳周辺に隠れる味方達に向かって走っていく。

「お前ら！後一踏ん張りだ！ここをしのげば帰れるぞ！」

「応！」

その掛け声にしまでも震える思いがした。・・・これが侍・・・。幼い彼女の頭に残るこれが真の侍を見た瞬間である。

「片倉・・・久しぶりい。」

正宗の疲れた声が聞こえる。夕暮れをバツクに来る片倉は弱っているようにも見える。

「殿・・・大丈夫でしたか。」

「だめだ。」

そう言い、ついに来れた敵達の拠点だと思われる一カ所を見つめる。そこに力なく地面に座る。

「おめえは？」

「敵はこつちが部隊を整えて、進行を始めた時にはもう引き上げていて、残存兵を討ち取ることには成功しましたが・・・。それでも・・・大部分には逃げられました。」

「結局は俺たちの負けか・・・よ・・・。」

じつと夕日を見つめる。部隊の疲労感も合わせてもう伊達の部隊を動かすことなぞ出来ようはずもなかった。

「徳川の旦那に伝えてくれ。俺たちの兵は疲れすぎてもう戦うことが出来ない。後方警戒にさせてもらつとな。」

「それは……。」

「この状態で戦場に行けるかよ。」

そう言つて周りの兵士達の状態を見つめる。川に半日以上浸かっていた事による体調不良や負傷兵ばかりでもう戦闘出来る状況ではない。それは徳川の部隊も一緒らしく、進軍する気がないようだ。

「ですな。」

片倉も途方に暮れたようにその場に座る。

「ここに陣を張り、明日にはでるぞ。ま……後方警戒でも部隊は動かせるように再編は頼むな。」

「使者を向かわせておきます。」

「なあ……。」

「はい？」

伊達はその場に倒れ込むと空を見つめる。カラスが鳴き、空の彼方へ飛んでいく。

「俺たち、真田相手に……手も足も出なかったな。」

「ですな。」

「完敗……だな……。」

「はい。」

そう言い空を見つめる……こうして本当に長い伊達の一日は終わろうとしていた。頬に伝う涙は兜に隠れ、片倉以外には誰にも見えなかったのだった。

第十二節 最後まで人らしく（前書き）

徳川との最終決戦に向け着々と準備を整えてきた真田信繁・・・。
戦国最後の決戦でもある戦国最後の決戦”天王寺の戦い”が今始ま
ろうとしていた・・・。

第十二節 最後まで人らしく

第十二節 最後まで人らしく

急ぎ撤退した信繁達は茶臼山に陣を隠れて張ることにした。予定通りではあるが・・・その代償は大きい。だが・・・これに甲うのは勝利の二文字しか・・・なのだろうと自身も知ってはいた。それにしてもあまりにいたい損害である・・・損害で友の死を語るのさえ・・・つらい。

「お前ら！準備は出来たか！」

「は！」

信繁は掛け声とともに気にくくりつけた赤い鎧達を満足そうに見つめてた。

「こんなのに役に立つんだよ。」

しまは変な顔をしてに鎧をつつく。

「さあな。」

「奇襲を掛ける。」

信繁は鎧の具合を確かめるとにやりとした顔で、今川の入り口あたりで陣の設営を始める徳川方を見つめる。

「は？」

「夜襲ですか？」

「今夜襲すればきつと返り討ちに遭う。」

そう言っに入ってきたのは今回の出陣組の頭でもある。毛利勝永公である。後藤達を信任し、じつと後ろで構える大将である為、淀君の陰に隠れてはいるが気骨だけは一流でもある。

「確かに。」

「でもさ？こんな鎧くくりつけても兵士なんか増えないじゃん。」

そう言っしてしまは不満そうに見つめる。それを勝永がギロリと睨む。その様子にしまは肩を無意識にすくめてしまう。

「こいつは？」

「忍びでして……。」

そう言っすつとしまを庇うように信繁は立ちふさがる。

「猿飛佐助と申す。此度の戦。こいつがいなければあそこまで押さえられる自身は拙者にもなかった。だから拙者の顔を立てて。」

「それは分かった。だが小僧。」

その言葉にじろつとしまを見つめる。

「控えるところで控えねば、戦では死ぬぞ。特に今回はそうなりがちだ。分かったな。」

「……分かったよ。」

しばらく勝永を見つめると、しまは頭をぺこりと下げる。

「信繁……このような小僧まで狩り出さねばならないとは……寂しいものだな。」

「……ですな。」

「俺たちはこれからどうすればいい。軍師殿。」

そう言っすつて近く木陰に隠れるように座り込むと明かりを取り出し、地図に当てる。それに合わせ、周囲の男達もあぐらをかく。

「先ほどわざと……拙者達の鎧を着せた根津達の部隊を大阪城に帰してございます。その男達は普通通りに出陣し、ここに戻ってきます。」

「それは？」

「忍び達を騙させる為です。こうしておけば夜の時間は稼げるでしょう。その間にそちらの部隊に川の側に木船を幾つか隠して置いていただけぬかと。」

「分かった。明日はどうするんだ？」

「町並みを利用し待ちかまえれば、攻めてきてもしばらくは耐えられましょう。只……相手の数は数なので、こちらから攻めれば全滅必死でござる。」

そう言っすつて信繁は地図上に駒を並べる。

「ならどうするよ。」

「こちらの部隊には偽兵をいいます。この山には5千ほどいれば、向こうが5万でも一日は耐えられますよ。」

「それでこれか。」

そう言つて近くに飾つてある鎧を見つめる。

「これで敵の数は3倍ほどに見えるでしょうから、後は相手はのかかし相手に無駄撃ちしていただければいいかと。」

「それで・・・勝つ算段は？」

「拙者達が後は奇襲すれば彼らは寄せ集めの兵ですから、混乱し撤退するでしょう。」

「そうか・・・。」

そう言つて地図を見つめる。敵の先方は前田利家、老いたるとはいえ織田家最強の5家老の一角。今でもその手腕は戦闘に関してはぬきんでている。

「俺たちは時間を稼げばいいんだな。でも・・・。」

「どうなされました。」

不思議そうに信繁は毛利を見つめる。その顔は不安で曇っているように薄暗闇から感じた。

「いつまで耐えればいい？」

「八つ時（午後三時）までに何も起きなければ・・・城に使者を送り・・・引き上げてくだされ。流石に旗を掲げた使者まで大砲では撃たぬでしょうから、使者を送れば引き上げることは可能ですよ。これ以上は兵士達の緊張も持たず、いたずらに体力の消耗につながりましょう。」

「お主は？」

「帰つて来ねばそのまま籠城していただいて結構。討ち死にしたと思つてくだされ。」

「・・・。帰る気さえないと・・・。」

毛利の顔が青ざめる。火の影に移る信繁の顔は死に臨む覚悟を決めた強者の顔に見えたからだ。

「そうとは申さぬ。只、相手はあの徳川。成功しても帰れる保証は

「ごさいませぬ。」

「俺たちが絶対退路だけは作ってやる。だから安心して行ってこい！」

「分かり申した。」

そう言つと勝永は立ち上がり陣を去つていった。

”確かに計略はこれで完成する……だが……だが……”

信繁は毛利が去つた後も地図を見つめ続ける。今回信繁が採つた最終作戦とは”啄木鳥戦法”であった。これは武田家の主力戦法であり得意な手であった。まずは一度普通に戦闘を行うことで相手に先入観を与え、対策を逆手に取ることで、相手を完膚無きまで撃滅する必勝戦法である。最初に真つ向勝負をすると考えれば当然次の戦は前に構えるところを突くのが基本であるが、今回は兵力の消失はそのまま、敗北に至る為、銃を用いる作戦を採っていた……だが……確かに頭では考えていたのと被害は違い、引き立ててくれた恩師を先の戦で失う……頭では分かっているても悔しくてたまらない。信繁は地図をじつと見つめていた。

「信繁。」

青海は視界を遮るように自分の使っているひょうたんを突き出す。

「飲め。」

「青海……。」

「何考えているか知らねえが、迷いは戦場では死ぬ。」

「ですが……。」

「……後藤殿はお主の作戦を信じておつた。そのお主が迷っている……作戦が成功して、徳川に勝てなけりゃ……あいつは無駄死になる。」

青海はじつと信繁を見つめる。だが暗闇で良く目の前は見えない。明かりは先ほど毛利殿が持つて行った……。だがその向こうから嗚咽が聞こえる。

「あの人の為だ。せめて、無駄死にするな……。」

「わかつた……。すまない……。」

そう言う信繁は地図をたたみ、足早に去っていった。あれでもあいつは大将なのだ・・・泣くのは後でいつでも出来る・・・じつと青海は信繁の後ろ姿を見つめているしかなかった。

「準備完了しました。」

半蔵は家康の陣にやってくる頃には会議は終わっており、各自出撃準備を行う為に陣に帰って行った。この場には家康と半蔵しかいなかった。

「そうか。」

「どうでしたか、今日の様子は。」

「伊達と藤堂、上杉が全く動けなくなった。あそこまでやるとは思わなんだ。」

優しい声で半蔵に言うと、家康は地図の駒の配置を直していく。

次の戦はほとんど徳川の部隊が前に出ることになる。

「予想通りで？」

「いや、予想より手強い。流石・・・真田よ。」

その声は優しく・・・寂しそうに声が響く。

「死人は・・・食い止めましたが・・・。」

「戦い方を聞いた限りでは向こうは死人を使ってはおらん。」

「あの人らしいですな。」

半蔵は頷くと地図を見つめる。大方次はあの山で立てこもることだろう。

「だろつな。そう言う男だ。義と礼を欠くことはあいつはあり得ないが・・・だからといって手を抜ける相手ではない。」

「ということは・・・。」

そう言うて陣の駒の一部を後ろに動かす。

「来るとしたらここしかない。ここを直屬部隊で守らせる。」

「そう来ますか？」

「わしが同じ立場ならこの手を打つ。まあ・・・そこまで分かるからこそあいつに惚れているのだが。」

そう言つて陣の側面を叩く。そこは川ばかりである。また、本陣の位置はどう来ても大丈夫なように川の中腹に陣を立ててある。だが後陣には息子達の部隊を配置してある。

「これを抜くには数がいるが・・・戦は分からぬかもしれぬ。覚悟はしてあるよ。念のために真田が来たら生け捕りにせよと説明してある。」

そう言つて半蔵は陣を改めて見つめる。正面は前田利家、後方は徳川秀忠どちらも猛者である。だが・・・生け捕りというと数は五倍いると言われており、被害のほどはしれない。

「生け捕り・・・ですか？」

「ああ。あいつはきつとこの日の本をしょつて立つ男だ。ワシなどではない。それをこんな所で散らせたくはない。」

「自惚れれば死にますぞ。」

厳しい顔で家康を半蔵は見つめる。

「分かつている。・・・いやこの老い先短い命であれば安いものかもしれない。だが・・・それでも惚れたのだから仕方がない。」

そう言う家康の顔は少し明るかった。

「今なら分かる。あの・・・手紙の意味を・・・ワシは従うわけにはいかなかったが・・・あの信長公の顔の意味も・・・そこまでして一緒にいたかったのだ。」

そう言うと同じと地図を・・・いや信繁を捕らえた時のこととか妄想に浸っていた。

「拙者達も捕縛には参加いたしません。普通のものならばきつと手には負えなさそうですので。」

「分かった・・・。頼んだぞ。」

そう言う半蔵はその場から姿を消した。半蔵は待機位置に戻りながら・・・どこか悔しい感情を・・・押し殺しきれないでいた。

「戦はこちら側の圧勝ですかねえ。」

城から見る布陣は明らかに・・・作戦違反である。だが、ここで

うかつに止めるのはまずい。じつとキース・フロレンスは見つめていた。天守閣から見える兵士達の顔は希望に満ちあふれていた。

「それはそれでいいではないか。」

淀君の声が響く。声はいささか震えているが、意識だけはまだはつきりしているようだ。

「そうすると奴らに大量の戦勝金を払わねばなりませんぞ。あの者どもに。」

「それは・・・いや。あの金は私らの物じゃ。」

「だとすれば、快勝されるのはちと困りますのお。」

じつと見つめる。城に帰ってきた部隊は幾つかの武器を持ち、戦の準備をしている。

「どうするかのお。隊長。」

淀君がじつと空を見つめる。

「こちらが弾を撃たなくてもよいのは嬉しいが・・・これでは計算が狂う。なら・・・こちらから打って出ればよい。お前ら。」

そう言うつと側に控えた6人の宣教師達が膝を突く。

「作戦を変更する。」

「は。いかように。」

「お前達2人は外回りで戦場に入り、死人封じをしている箇所を見つめ、そこを潰せ。」

「は！」

そう言うつと四人の宣教師達が頷く。

「あと・・・お前らは味方陣地から入り、引つかき回せ。」

「了解・・・です。」

そう言うつと大男達が頷く。

「後は・・・。」

「裏から周り、敵本陣に行き、茶番を終わらせてこい！」

「はあ・・・いいんですか？」

「これで終わらせるつもりはない。もう少しな。」

その言葉に全員が頷く。

「後の者は仕上げの準備に入れ。艦隊には明日、明後日だと伝えておけ。」

「はい。」

そう言うと、宣教師たちは天守閣から降りていく。

「私はどうすればいいのかえ。」

淀君はそつと窓から月を見つめる。月は煌々と輝き、大阪城を美しく照らしている。

「大将はそこにいればいい。」

「そうか。大将か。大将らしくせねばのう。」

じつとキースは淀君を見つめる。

”人形は人形らしく、人形であればいいのだよ”

そのまま振り返ると天守閣の階段を下りていく。さて、報告書にはどうやって書くべきか……。

朝も明け切らぬ夜にこつそりと信繁達の部隊は移動を開始していた。根津をその場に残し、部隊の陣頭指揮を執らせ、後の部隊を岡山（茶臼山東側の小さな山）の裏手を通り、こつそりと川までやって来て毛利達に用意させた船に乗り込む。船の数は偽装出来るほどと少ないが、船を使うことで、音を立てずに最初の川を渡ることに成功していた。そして近くの山頂にとどまり、斥候の帰りを待つことにしていた。この時、この決死行に付いてきた猛者は1万2千。

配置された軍の4分の1相当にも及んでいた。無論この数で奇襲を行うにはこの数は多すぎた。だからこそ……東の沼地域に警備隊を置いていた。すなわち、奇襲を警戒させた部隊による忍者等の偵察をさせない為だけに前日に部隊を配置したのだ。警備隊と思えば戦闘後、そこをもう一度越えるとは考えがたい……。心理的な裏を狙うつもりで来たのだが……。

「ま、あんたのの予想通りだったよ。」

帰ってきたしまと算は落胆した顔で陣に戻ってくる。その顔を見て近くの石の所に明かりとともに、地図を広げる。

「こことここに、旗本部隊がいる。敵陣は区別が付かないが……大方こちらの布陣をある程度見切っているようだった。流石に本陣の位置までは……分らん。」

そう言うと言は指で丸を書いて陣を示す。

「明かりだけで区別は付かないが、前陣に前田家。後陣に旗本……更に前ではあぶれたように他家のものがいた。だが遠すぎて……」

「でもさ。どうよ。これ。」

しま達が地図で丸を付けた位置を頭に思い描いて信繁は考える。

これは……偶然か……いや……考えがたい。なら……こちらの作戦は読まれていたと言うことだ。だがもう……この部隊を引き替えさせるわけにはいかない。引き返せば敗北確定である。ならどうする……信繁にとってつらい決断がそこに待っていた。

だが、この配置ちよつと……待て……

「陣はどこまで奥にあった？」

「かなり奥までだったな。」

「ああ。川の真ん中まであぶれていたぞ。」

「さて……」

ちよつと待て……信繁の頭にあるひらめきが頭をよぎる。川の真ん中まで陣があぶれる？そう考えるのはいくら急ぎ足の行軍でも考えがたい。当然川上は押さえてあつても、当然川原から……予想は付いてきた。大方本陣の位置は……川の真ん中だ。なら……どうする……信繁はじつと地図を見つめる。普通に行軍してはあの辺一帯の川はそれなりに深く、銃の餌食となるう……いや……

「進行手順は固まった。後は……俺たちが行くだけだ。」

そう言つて後ろを振り向く、山の裾野に一万四千の各部隊の精鋭部隊が並ぶ。

「お前ら！良く聞け！」

その言葉に全員がこちらを向く……気がする。各部隊に発覚を

恐れ明かりはつけさせてはいない。

「俺たちはこれから修羅となり、敵陣を突き抜ける。今までみたいな楽な戦じゃない！俺たちは援護も支援もなく只ひたすらに前を掛ける狼となる！」

そう言いはためく旗を信繁は見つめる。そこには真田家の象徴 6 問千の赤い旗が夜風にはためく。

「今後赤い鎧ではなき者・・・自らの前に立ちはだかる者全てを斬れ。先陣は旗を立て続けよ。他の者はその旗を目指し走り続けよ。そうすればそこに味方がいる。そして俺が・・・先陣を切る。だから・・・だから・・・。」

じつと家臣達が真田の顔を見つめる。その顔は・・・覚悟に満ちていた。その時日が昇り始める。ちょうど日の加減もあり、後ろから後光のように朝日が兵士達を包んでいく。

「お前達は存分に戦働きをせよ！家康を討ち！今度こそ戦争なぞ起きはしない豊臣の世を！」

そう言っ腕を突き上げる。

「俺たちの手でつかみ取る！！平和な世を！そしてオラが家族を・・・俺たちの手で平和へと導け！」

その声に言われるわけでもなく、全員がときの声を上げる。

「ここから休む時はないと思え！突撃！」

その言葉に信繁達は馬を掛け、全速力で走り始める。それに合わせ騎馬部隊、槍兵が走り始める。朝になり、無論徳川軍が進軍を始めることだろう。これが戦国最大の激戦”天王寺の戦い”の始まりである。

五月七日早朝。徳川軍もまた軍の侵攻を始めていた。無論、戦を終わらせる為である。

「俺たちや無理だと言ったのにさ。」

そう言っ進む兵隊達を背に伊達政宗は遠見筒を見つめる。茶臼山には真田軍と思われる兵士達が陣取っていた。先日の山岳立てこ

もりもあり、伊達郡の士気はガタ下がりでもある。だからこそ後ろの堺からの増援に警戒する、奇襲警護を買って出たのだが・・・ダ
ルい。

「あいつら・・・張り切つてやがる。」

徳川四天王軍と前田軍が歩を進める。

「でも・・・いいではないですか。こうしておけば同盟関係が結べ、しかも兵士達に実践を積ませられます。しかも激戦では働かない旗本扱い。」

片倉は茶器を持ち出すと、そつと正宗にだしてみせる。

「でも・・・なーんかおかしいんだよなあ。徳川の旦那も・・・真田もさ。」

そつと茶器を受け取ると中の抹茶をぐいっと一呑みに飲み干す。「確かに・・・そう言えば家康どの・・・真田信繁の捕縛命令を出しておりましたな。」

「そつちじゃなくてさ。」

「この配置だよ。」

そつと自陣を見つめる。露骨に陣を只異名達に任せているように見えるが・・・しきりに家康は何かを気にしている・・・気が伊達政宗にはしていた。無論ある程度あつた中で家康の性格は知っている。むしろ自分から先陣を切り、自分で片付ける性格の男がどうしてこの配陣・・・。今も四天王軍が二つの山の脇にある町に進軍を開始している。隣の山を攻略するべく、猪突猛進な前田利常が軍を岡山に向ける。

「それは・・・分かりかねます。さすがは内府殿と言ったところでしょうか・・・。」

片倉はじつと四天王軍を見つめる。伊達軍は動ける者だけで、構成されてはいるが・・・その勢力は弱く、後方支援の形を取っている。無論東側から奇襲を狙った上杉軍、藤堂軍もまた、奇襲にあつたらしく後陣詰め・・・待て・・・何で中程が後陣・・・。しかも、何故か利常のとなりだが・・・。むしろ大阪城から見ればあの位置・

・先陣ではないか・・・。

伊達政宗は遠見筒で、敵陣の様子を見つめる。ここからは遠いが真田軍は兵士達が立派に鎧を着て・・・ちよつと待て・・・。あれ・・・動いてねえ。

「俺たちはここで待機だ。だがとりあえず、軍はどこにでも動かせるように構えておけ。」

「はい？」

「俺の予想が正しきや・・・あいつ・・・やらかすぞ！」

「よく分かりませんが真田がやらかせば・・・わたしたちが不利ですが？」

伊達政宗は何かに気が付いたように遠見筒をにやにやと見つめていた。考えが正しければあいつも旦那も考えることは一緒だったらしい。なら・・・後はどうするかだ。どっちの力と才が上なのか・・・。俺はここから見物させてもらおうか！

「戦闘始まりましてございます。」

「わかっている。」

「霧の具合が遅いぞ！」

半蔵は後方の山から霧隠れを使い陣全体に被い水をまいてはいる。もし相手が死んでから死人を生成されてはこちらが圧倒的に不利となる。特に各大名の部隊なら、真つ先に逃げ出しかねない。

「戦場が広すぎます。それに水の量が圧倒的に不足しています。」

周囲の部下達や妖怪達も連日の霧隠れで疲労の極致のあり、もう霧を張るのも限界に近づいてきた。

「各部隊報告！」

半蔵は後方の山から戦場を見つめる。遠くの山では今頃戦闘が始まっていることだろう。

「は。」

そう言うと各部隊とかに向けて走らせた忍部隊達が集結する。

「現在の状況！」

「は！」

「南、伊達側は静観の模様！前田殿は市街戦に突入！またそれに伴い後陣の旗本部隊が進行中。真田軍と交戦中です。」

「そうか……。」

机の上に置かれた地図の駒を報告に合わせて動かす。これを伝えるのが忍びの役目でもあるが。半蔵達はその上に予測を交えた妨害を行う。だが……。

「真田軍の動きはあるか？」

「いえ。」

それは……この時真田と交戦又は親交のある人々は何となく理解し始めていた。真田軍の様子がおかしいと。先の戦いといい、その圧倒的な作戦で徳川軍を苦しめてきた真田軍がこの程度なのか……。

「そう言えば……お吉の方は？」

「さあ。出番は夜になるとか言っつて本陣近くのほうへ行きました。」

「半蔵様！」

「なんだ！」

怒鳴り声を上げると後陣にいたはずの連絡役が血相変えてやってきた。

「後方で火の手が上がりました。どうも……真田軍です！」

「なに！」

半蔵は驚いて、手に持った遠見筒を持ってその方向を見ると後方の陣が二つに割れていくのが見える。この時午前十時である。

「お前ら！初っぱな一撃を加え！……撃て！」

その叫び声とともに迫り来る徳川の大军に向け第一者が発射された。

「毛利様！」

「あいつが討ち取るまではこちらに兵を引きつける！引き寄せて、横を付く！」

その掛け声に屋敷に隠れた部隊から大声が揚がる。建物に多くの兵士を隠し、じっと待機していた。ある意味大都市を使った初めての最初で最後の戦国市街戦である。

「これでこっちに来る。門を閉める！」

その言葉で、数人係で門を閉じる。勝手口には見張りを立たせている。無論武家屋敷というのは襲撃前提にくまれてはいるが、実際に使用されることは少ない。門を閉めると同時に栓抜きを押し込み、門を閉じる。このように狭い路地裏では傷値とかを持ち出すのは難しい。しかも。

「来ました！」

「よし！構えろ！」

そう掛け声をあげると屋根の上に構えた部隊が銃を構える。

「敵が見えたらぶちかませ！」

「おお！」

その声とともに銃声が響く。その瞬間向こうから叫び声が響き渡る！

「あいつら・・・頼むぜ・・・。」

じつと徳川本陣の方を見つめた。まだこの時はまだ変化らしい変化は感じられなかった。

「おおおおおおおお！！！！」

騎馬部隊は川の浅い所を狙い信繁達騎兵隊は一気に後陣に殺到していった。流石に後陣にいただけあって兵士達は浮き足立ち、赤備えの男達が太刀を構え駆け抜ける様は正に恐怖その物であった。

「貴様ら！あいつを捕らえよ！褒美は！褒美は！」

叫ぶ人間を馬ではじき飛ばすと信繁達は一気に駆け抜けていく。後続部隊が、横を押さえるように切り結んでいく。ここでも大方・・・陣の大きさから二万から三万はあるが・・・そんなのはもう・・・彼らに関係はなかった。もうそこにいるのは赤鬼ともいえるほどに血に染まった男達だからだ。赤備えの部隊は陣を横切ると同じく、

その部隊を壊滅させていた。ここに徳川軍”第一の失敗”がある。この陣に配置されていたのは経験を積ませる為に配置した若年兵達ばかりであった。と言う主熟練者達の多くは先の戦いで死んでしまい、代わりの兵士がいなかった。だが変に時間を与えれば徳川軍はすぐにも海外から増援を集め、また国力を回復させると予測出来たからだ。ならどうするのか……。単純である。回復する前に叩けばいい。だが徳川軍にも悩みはあった、前の戦いでほぼ半数以上の兵士を失った彼らにとってすぐに徴兵出来たのは、彼ら戦闘経験のない部隊ばかりであった。訓練は行う物の、訓練不足の感は否めなかった。だから他の大名の力を借りるしかなかったのである。そこまでして……。相手の死人を封じ、潰さねば行けない理由がある城にはあるのだ。だからこそ後陣詰めしかこの部隊にさせるわけにはいかなかったのだ。いたずらに死者を増やせば、死人にされる恐怖に……。この部隊は打ち勝てる……。百歩譲っても見るわけにはいかなかったのだ。それにもう一つの計算もある。奇襲人数である。どう見ても奇襲の相場は3千前後であった。それ以上は統率出来ないは今まで戦で分かってはいた。それ以上なら忍者達の報告があると家康も高をくくっていたのだ。そこにミスがあった。この戦いでは最低人数以上の忍者は霧隠れに配置され、ほぼ全ての忍者は偵察もろくに出来なくなっていた。そのためか、報告や偵察が通常に比べおろそかになっていた。唯一偵察が出来る忍軍を持つ、伊達軍が先日の戦いでほぼ半壊したのも痛手だともいえる。そのため奇襲は防げなかったのだ。それがこうして勢いが付いて止まらない真田軍となって現れていた。最早、その勢いを三万前後の部隊で止めるは叶わず、そのまま雑兵となってしまった徳川軍は後ろに後退を始めてしまう。

「おおおお！！！！！」

青海達騎兵達はそのまま指示された方向に進んでいた。目的地は橋だった。

「ここで抜けられては徳川の名折れ！」

徳川秀忠の声が響く。その声は歴戦の武将のようでもあるが、自身も前に立つことは出来ず、腰が退けている。

「ですけど！敵はすぐそこに！」

叫ぶ声が聞こえる。だが震えた秀忠の身体が動くことはなかった。それはあの恐怖が思い出されるからだ。あの赤い鎧・・・そしてあの掛け声・・・真田！

「お下がりにくいだされ！」

後ろの陣から黒い牛を思わせる兜の男がやってくる。黒田長政。橋を守備している徳川家康最後の切り札ともいえる男である。

「爺！」

秀忠はその声に目が覚めたように逃げ始める。

「ここは我らに任せ、お引きくだされ！私らが絶対通しませぬ。」

「分かった！頼んだぞ！」

そう言うつと秀忠達各部隊は引き上げ始めた。それは真田達も分かっていた為、退く部隊に目もくれはせず、正面の橋を守る部隊を睨みつける。

「行くぞ！」

信繁はそのまま馬を駆けさせ一気に突っ込んでいこうとする。その時！

”ぬおおおおおおおおおおおおおお！”

気合いにあふれる声が聞こえた次の瞬間、信繁の乗っていた馬に太い槍がぶち刺さり、馬はバランスを崩しその場に倒れてしまう。

「この黒田長政！お前らを決して通すか！」

仁王立ちした黒田の声に黒い鎧の部隊が真田達に立ちはだかるように構える。

「撃て！」

長政の号令に脇に構えた銃や弓が飛び、騎馬達は足止めされてしまう。一部の兵は落馬してしまう。だが、その瞳はまだ闘志に満ちてはいるが・・・。騎馬止めの棘が付いた鉄盾を構え、こちらに向けてにじり寄ってくる。

「お前ら！行け！」

その声とともに川向こうから銃弾が黒田達に放たれる。声の方を信繁が見ると算が一部の銃撃隊に指示をして撃たせていた・・・だがそこは川原・・・隠れるところなぞ無い！だが考えることはなく信繁は一瞬の間を見逃さず立ち上がると、一気に走っていく。

「させるか！」

黒田は近くの槍を握ると槍を投げる構えにはいる。次の瞬間その兜に銃弾がかかる。それに気を取られた好きに懐に飛び込む、近くの銃撃隊を切り伏せる。それについて騎馬隊が突撃を開始する。黒田は少し考えた後騎馬隊に向け、槍を放つ。それは馬ごと馬体の男に当たり、一撃であいてを吹き飛ばす。そして腰に差した刀を抜くと信繁に向かって走っていく。

「者ども、奴を止める！殺しても構わん！」

「しかし！奴には！」

周囲の兵士達には動揺が広がる。

「私が責を負う！奴に本陣まで行かせるな！」

「は！」

そう言うつと信繁に今度は足軽達が突進を始める。その穂先を交わし一気に間合いを詰めると近づき、柄を叩きおる。だがその後ろに追従するように黒田が間合いを詰めていく。信繁

はさらに奥まで進むが、そこで足を止めてしまう。そこには黒田家の精鋭5千が控えていた。今までの新米とは違いここは熟練兵ばかりで固めた、親衛部隊ともいえる部隊だ。だが・・・止まればそこで道はとぎれてしまう。しかも・・・ここは橋の上。数体を切り結び、越えようとするが人垣と槍で止められ、強行突破することは・・・出来ない。後ろからは黒田長政が雄叫びを上げ、猛進してくる。

後ろの部隊はまだ、前の弓と鉄砲部隊に阻まれて、突破は出来そうにない。

「なら！」

信繁は振り向くと刀を構え、黒田に向かって走っていく！

「来るか！」

雄叫びとともに長政は上段に構える。だが今朝が前をして突つ込む信繁に只力任せに振り下ろすのを、刀を滑らせ、回避するとそのまま胴を抜こうとするのする。柄を強引に信繁にぶち当てるとそのまま無理矢理引きずりおろす。信繁はそれをわざと引き抜くと一回転してもう一度斬ろうと構えるが、その時にはもう長政は元の構えに戻っていた。

「お主……やるな。名は。」

「……真田……信繁だ。」

一瞬、色々考えるが、この鎧や兜を見ればこれが大将であることは分かる。黒田長政……後藤基次のライバルでもある猛将である。聞いたことはある名前だ……。

「私は、黒田長政だ。」

そう言うつと刀を構えたまま少しづつ距離を縮めて来る。無論後ろは槍を構えた兵士達である。この男を前にして……今後ろを見せればすぐさま切られてしまうだろう。だが、このままでは……この時真田信繁、一瞬死を覚悟してしまう。

「本当に……ここにいるとはな……。のう……。」

一瞬女性の声が聞こえたと思う次の瞬間、一陣の風が吹く。次の瞬間着物を着た女性が横に立っていた。脇には大柄な羽根だらけの人も立っていた。

「久しいな……信繁。元気だったか？」

「お吉の方様……。」

「よ。」

驚いて信繁は横を見ると、そこにはお吉の方とトリさんがいた。「どうしてここに。」

「ん。仕事のついででな。折角だから顔だけでも見に来ようとな。」
お吉の方は余裕そうに扇子を開き、ぱたぱたと顔を仰いでいる。
「んだ。ひさしいよのお。」

にこにこ笑い、お吉の方の真似をしていたのは昔山中で助けた妖

怪”トリさん”だった。

「お前もだ。」

「おらか。オラな。おめえに言われた上田が気になって村から自分で出てきて、上田に来ただ。そしたらこの人がいて、おめえの所に連れて行ってくれるって言われて嬉しくてな。」 その様子に黒田は啞然としてしまう。ここは橋の上であり、後ろでは兵士達と青海が戦闘を行っている。むしろ苦戦している。

「本当に苦勞しているのだのお。本当に・・・真田はおもしろい。」
優雅に語ってはいるが、信繁は焦ってしまう。ここは敵陣中央であり敵に囲まれている最前線だったのだ。

「お吉の方様。お下がりください。今は世間話している暇はなさそうですので。」

信繁はお吉の方を庇うように長政の前に構える。

「暇がなければ！作れば良い！」

その掛け声とともに後ろを向くと扇子を大きく振りかざすと突風が起こり、後ろを固めていた兵士達が吹き飛ばされていく。そして一直線の道が突風で、出来ている。

「今は用事があるのだろう。行ってこい。後で世間話でもしてやる。」

そう言ってお吉の方は黒田長政の方を向き返る。

「オラ・・・恩返しに来ただ。行ってける。ここはオラ達で押さえる。」

そう言つとトリさんは後ろの兵士達に構えてみせる。

「すまない。」

そう言つと信繁は背中に刺していた刀を一本お吉の方に投げる。

「これは。」

「ここはお任せいたす。では。」

そう言つと信繁は陣の奥へ走っていった。

「ほんと、このために来るなら言えばいいんだに。」

「素直にいえれば苦勞はせん。」

トリさんは苦笑いをしてお吉の方に話す。お吉の方は少し頬を赤くしていた。

「お主ら・・・邪魔だてすれば・・・容赦はせぬぞ。」

長政は刀を下段に構え、様子を見ている。

「お主・・・私にその物言い。」

そう言ってお吉の方は信繁から受け取った刀を抜く。それは大太刀であり、その身の丈と合いそうではないが・・・軽々と抜いて見せた。

「私を何者だと思っておるか。」

その声に徐々に殺気が籠もっていく。それとともにお吉の方の背中から尻尾らしいふさふさした物が飛び出してくる。徐々に気配は大きく感じられるようになっていく。

「知らぬ。只・・・徳川の敵であろう!」

「ふざけるな!」

その声とともに周囲の人間達はその気だけで数人が吹き飛ばされる。

「この天狐、自ら相手になろう。来るが良い!この世の地獄!味あわせてやる!」

そう構えた瞬間その恐怖は最高潮に達している。だが長政も意地の人、刀を構えて空きを窺う。他の物と違い、退くことだけはなかった。その頃にはお吉の方の尻尾の数は9本を超えていた。

「黒田長政!参る!」

「毛利様!」

異変に最初に気が付いたのは鉄砲隊達である。

「どうした!」

「敵陣の様子がおかしいです。」

そう言つと毛利は屋根に上がり、望遠鏡を覗く。そこには敵の後方で煙が上がり、人?等が空を舞うところである。無論後方で戦闘が開始されたと言つことは・・・。

「奇襲は行われているようだな。」

そう言つと屋根から掛け降りると、周囲を見る。周りの顔は晴れたように明るい。これは

・・・

「勝機！お前ら！攻めの合図を揚げろ！一気にあいつらの血路を開くぞ！」

「了解！」

近くの兵士は手に持った筒に火を入れる。そして空に赤い信号の煙が空にて舞っていた。

信号筒は豊臣軍各部隊にその戦況の変化は伝えられていた。

「根津様！」

赤い鎧を着て、信繁の代わりをしている根津にもその信号は見え
ていた。

「分かっている！お前ら！もう少しの辛抱だ！部隊を入れ替える！
その掛け声とともに、攻めの隙間を縫い、戦闘に参加する兵士達を
後退させる。彼にはまだ・・・全面に広がる部隊を見つめる。向こ
うにはまだ多くの兵士達が構え、親交を行っている。まだ気が抜け
る環境ではない。この時、日はまだ頂点に至っていない。信繁
が奇襲に成功してなおまだ、戦況は互角なのだ。その事は毛利もま
た分かっているが。それでもこれは数少ない勝機だ。そう皆は感
じていた。

「先陣に異常あり！」

徳川の本陣では急遽防衛の準備がされ、忍者隊の呼び戻しなどが
行われていた。

「分かっている！」

家康は本陣の脇からその様子を見つめていた。大方相手の数は5
千を超えている。そう家康には感じられていた。無論秀忠達の崩れ
っぷりも見えていた。自分の息子ながら・・・情けないが、前田の
後陣・・・本隊部隊がこちらに戻り、黒田の部隊がぎりぎり粘っ

ているのだろう。まだ向こうの部隊は来ないだろうが……。予想していたとはいえ……。いや違うあいつは予想を超えた数を持ってきた。なら……。届くかもな……。ここまで。

「お前達、固めろ！本陣であいつを捕らえる！」
危機は好機でもある。あいつの性格からするとここに来るのは本人だろう……。

「半蔵を呼び戻せ！ここで……。最後の決着をつける！」
兵士達に号令を掛ける家康はじつと向こうの戦況を見つめる。あの赤い鎧……。まるで武田軍その物ではないか……。まだ……。私の元に武田軍の亡霊は来るのか……。私はまだ……。やることがあるのだ！邪魔はさせない。今度こそ！逃げない！

「おお！すげー。」

伊達政宗は遠見筒で少し高い所から後陣の様子を見つめる。そこには人が空を舞い、鉄砲の煙舞う戦場の様子でもあった。

「どうなさいました？」

片倉は不思議そうに聞き返す。

「いやあな。今……。マジに、本陣が襲われてやんの。」
「へ？」

片倉は啞然としてしまう。確かにここまでこれば向こうの様子は分かるわけでもないが……。だからといって本陣が襲われるのは只ならないことだ。

「それは……。助けに行った方が……。」

「今動けば、敵さんの本陣と挟み撃ちだぜ。そこまで義理は俺たちにねえ。」

そう言っているものの、頭の中ではいろんな事が……。

「ならどうするんです？」

「俺たちは後方詰め。来ないなら行かない。」

気が抜けたように正宗は答える。それには片倉には言えないが二つの不安がこの軍あるからだ。ちょうどここは戦場と堺を結ぶ直線

上にあり、今、伊達軍が動けば堺にいる豊臣軍が動き出し、三方挟み撃ちになる公算が高い。また、大阪から浜を通り奇襲する部隊が来る公算が高い。ここを動けば、その部隊の侵攻を許す公算が高い。だからここを動くことは出来ないのだ。

「ですが・・・」

正宗は遠見筒から目を離れた瞬間。ただならぬ殺気を感じ、刀を抜く。その瞬間化に鉄砲の弾がぶち当たる。

「な！」

片倉は慌てて周囲を見るが周囲に人の気配はない。

「おめえら！警戒しろ！」

その声に周囲の兵士達が立ち上がる。

「なんですか・・・。」

「殺しだ・・・。」

そう言い正宗は立ち上がると、刀を構える。この”殺し”というのは片倉が昔から仕えている時に使われる隠語で、暗殺者が来たことを示す物だ。無論東北では多くの襲撃にあってはいるが、本陣と真ん中で来るとは考えて・・・。

「気いつける。さつき感じた殺気以外はどうにも気配を感じねえ。」

正宗の獣に近いと言われている野性的な勘ですらも捕らえられない敵・・・片倉は背後を守るように背中側に回る。

「まだ来ますかねえ。」

周囲の兵士達も慌てて構えるが・・・。

「来ると思っぜ。」

漂う・・・何かを感じてか、伊達政宗は構えを解かなかった。そのとき、銃声が聞こえる！その報を向くと、伊達軍の旗の上に一人の・・・黒い何かが立っている！それは銃を持っているが・・・肉眼では捕らえにくいほどの遠くであり、黒づくめ以外の特徴を正宗達は知ることが出来なかった。

「あれか！」

片倉が叫んだ瞬間伊達政宗は構えて正面を見る。陣の正面、陣幕

の入り口を開け、黒づくめの男が一人、走ってくる。そのまま伊達政宗を捕らえるとナイフを構え、身を低くしてくる。

「ふざけるな！」

上段に構え、正宗は振り下ろすがナイフの曲線で一気にいなされ、反対側の手を暗殺者と正宗に向ける。それに何故か恐怖を感じて身をよじった先に轟音が響く。どうも、手の先から何か飛び出したように見える。正宗の胸に当たるが、殺傷力はそれほどもない為貫通はしていない。次の瞬間遠くから更に銃声が聞こえる。それを片倉は走って庇う。その瞬間片倉の方をかすり弾はそれる。その間に二、三撃ナイフで突きを狙うが、それは正宗に弾かれてしまう。正宗が斬りかかろうとする次の瞬間、一気に飛び退く。

「さすがだな・・・おめ。」

暗殺者らしき、黒の謎の着物で全身が覆われた男は少し距離を取り、まだ構えを解いてはいない。周囲の兵士達は慌ててそちらを向くが、反応し切れてはいない。

「おめは。大将？」

「知るかよ。」

そう言っただけで構えてはいるが、その目の前の男の異様は言い表せない物がある。その男は小さくはあるが・・・背筋が曲がり、ノミのようにも見える。それ以上に胸に下げた十字だけが白いのも気になる。あれは基督教とか言う・・・。

「おめえ、宣教師か？」

「さあな・・・。」

そう言っただけで、少しずつ正宗は距離を詰める。次の瞬間、ノミみたいな男は一気に間合いを詰めてくる。それに片倉達は反応出来なかつたが、正宗は刀を水平になぎ払う。その早さにナイフを構えた暗殺者の刃は届くことなく、暗殺者は横にすっ飛ばされる。

「大丈夫ですか！」

片倉は駆け寄るが、胴にはめり込んだ弾丸の跡が残る。正宗はこくりと頷くと暗殺者の側に寄る。

「こいつ……。」

正宗は当たった手応えに切った感覚がないと思って、近寄ってみるが、もう暗殺者は動くことはない。

「こいつ。毒を飲んでやがった。」

暗殺者の口元から血が流れ出すがその色は通常の血の色よりも相当にどす黒い。

「ですな。」

着物の裏を見ると、鎖帷子くさりかたびらを着込んでおり、刃物は貫通していないのがよく分かる。

「状況が不利と悟ると、毒まで……。おめえら！警戒しろや。第二波……来んぞ！」

正宗は何か……こう不吉な物を感じていた。今までの戦とは違う何かを……。

「徳川の旦那……。」

兵士達に警備の指示をする片倉をよそに、先ほどの黒の固まりのあつた旗を見る。そこにはもう……黒い固まりの姿はなかった。

「ぬおおおお！」

青海が錫杖で敵兵を殴りつける。ちょうど目の前では旗を掲げた信繁が立ちふさがる旗本達を切り伏せていた。

「大丈夫か。おめえ。」

「青海……。」

信繁は肩で行きをしながら先を見つめる。敵陣中央まではまだ半里（一キロ弱）ほどある。その先には徳川の本陣がある。

「少し息整えろや。後続部隊がくるまで待つぞ。」

「そうさせてもらおう。」

そう言つと立つて様子を見つめる。向こうではお吉の方と黒田長政軍と前田利常軍が戦闘しており、その様子は……こちらで見ると限り互角にも見える。今、信繁の周りにいるのは
信繁と青海……そして。

「やっと付いたぜ。」

しまが来ただけであつた。しまの身体には返り血や生傷が所々に付いており、戦鬪の激しさが伺える。

「後続は？」

「わかんねえ。だけどあれだと、あのお吉の方だっけ。あの人の影響でお互い足止めだ。あそこで。」

そう言つて後陣を見つめるが確かに、赤い鎧の一団もお吉の方の攻撃を受けている。あれでは敵も味方もありはしない。この三人であの敵陣を・・・だが、兵士がこう立っていたとしても来ないあたり、援軍に向かつた兵士達はもう壊滅しているとも言える。

「算は？」

「あいつは、後方の銃撃隊を指揮していたからさ。向こうをまとめてるさ。」

「わかつた。」

じつと先陣の方を見つめる。まだ戦鬪中である。もうさすがに昼あたりは過ぎただろうか。日が西側に少し傾いている。

「行くしかないようだな。」

信繁は息を整えると、旗を地面に突き立てる。

「ここから味方はいらないと思え！行くぞ」

そう言い気合いを入れ直す。もう思い残すことはない。信繁は一直線に走つていった。

「利常殿！」

「おおよ。」

横にいた前田利常に黒田長政が走り込んでくる。お吉の方とか言つた女・・・いや妖のお陰で陣は混乱の極致である。鉄砲などの武器は効かず、兵士達はことごとく吹き飛ばされている。最早触れることさえ叶わない。そう言つ黒田自身もこれまでに十回ははじき飛ばされ最早軍の統率はとりにくい。それは前軍の前田軍も一緒に挟まれた形ではあるが、後軍の部隊がぎりぎり、前軍への影響を防

いでいる。

「ここは！はさみ撃つ！」

「了解！それまでは稼ぐ！行け！」

利常は軍配をお吉の方に向ける。

「撃てー！」

その掛け声に鉄砲隊が一斉に射撃する。それはお吉の方の一步の
一振りの前に弾は弾かれ、その場に落ちる。

「このような物なぞ！」

お吉の方の掛け声に鉄砲隊の一部が弾き飛ぶ。その間に利常自身
は近くの茂みに隠れ、刀を抜き放つ。

「そこ！」

お吉の方は殺気を感じて手をかざし、衝撃波を放つが、それを利
常は刀でかるうじていなすと、ぎりぎり踏みとどまる。

「やりおるのお。」

その間もお吉の方は尻尾で他の兵士達を薙とばしていた。

「お主から死ぬか・・・のう。お主・・・。」

声はゆっくりとしていたが、その威圧感は巨大な獣に睨まれたネ
ズミその物に見える。その隙を窺い、黒田は全力で後ろから槍を投
げつけるが、それも尻尾で弾かれる。その様子に利常は死さえも覚
悟した。そこまでの覚悟が彼女からは感じられたのだ。

「お吉の方！」

殺気を感じ振り返ると尻尾と腕に鎖分銅がからみつく。

「半蔵殿！」

利常が声を上げる。お吉の方の周囲には忍者隊が構えていた。

「何故この様なことを！」

「ん？お前か。」

軽い声ではあるがその声には殺気があからさまに含まれている。

だが半蔵は更に厳しい顔で睨んでいる

「あの者達が先に手を出してきおったのだ。私のせいではない。」

そう言い周りをも渡すが、陣は半壊で敵味方・・・いや一部の敵

兵は歩きながらも中央突破を計っている。あそこはもう兵士達に任せるしかない。

「協約違反ですぞ！第一どうしてここに！」

「私は遊びに來ただけじゃ。それに先に手を出されて私は・・・私は反撃するなど。」

そうはいっているが、この陣の乱れ方は最早黒田軍とて立て直すまでは難しい。前田軍も相当な被害だ。だが。真田軍もまた・・・一部は逃げ始めている。だが強行突破しようとした部隊は疲労困憊で動けない物が多数だ。

「それは・・・」

忍者部隊を全て傾けてもこのお吉の方一人を押さえるのさえ難しい・・・そこまでの差ではあるが・・・。

「分かった分かった。ここはお主の顔に掛けて退くでしょう。」

そう言うつと後ろを振り向く。そこではまだ格闘して、兵士達を押さえるトリさんの姿があった。流石に筋力と体格の差の為十対一でも引けをとることはなかった。そう言っている間のも兵士を胴ごと蹴り飛ばし、気絶させていた。

「おーい。終いじゃ。帰るぞ。」

「んだ？いいだか？もう。」

「そうだ。つまらんことになったからの。他の者に悪い。帰るぞ。」
そう言うとお吉の方は軽く鎖分銅に触れるとまるで、軽い埃でも取るように引きちぎる。

そしてゆっくりと黒田長政の所まで歩いていった。その頃にはお吉の方からは尻尾なぞ見あたらなくなり、着物の陰に隠れていた。

「んだな。」

トリさんはぱつと兵士達から手を離すとお吉の方に歩いていった。

「そこのお主。」

そう言うとお吉の方は黒田長政の側にしゃがみ込む。長政自身、精も根も尽きかけ、膝を突いていた為、ちょうど顔をつきあわせる形となる。

「中々やるのお。ここ1000年ではなかなかよ。楽しかったぞ。」
そう言うと立ち上がりトリさんを従え、山に向かって歩いていった。その様子に全員は啞然とするしかなかった。

「あの方は……。」

前田利常はその後ろ姿を見つめ、ぼそつとつぶやいた。周りに立っていられるだけの兵士はいなく、半蔵だけが立って呆然としていた。

「ああ言うお方だ。」

「だな。」

そう相づちをうつと黒田長政はぱったりと倒れ、この日に目を覚ますことはなかった。

ちょうど撤退を視野に入れると明言していた八つ時の頃、戦場は混沌としていた。お吉の方が暴れたお陰で、後陣が消えた前田軍は市街戦を仕掛ける毛利勝永の軍に苦戦を強いられ、四天王軍だけで戦線を支えていた。また根津率いる偽真田軍も奮戦し、ぎりぎりの所で戦線を維持していた。だが、そこまでして兵を払った奇襲部隊も壊滅状態にあり、本陣に付くまでに少し待っていても35人を残し、ほぼ壊滅してしまう。(捕縛での戦闘不能含む)この状況に置いて徳川軍の忍者部隊は本陣防衛および、お吉の方の押さえの為に全てを割かれ、各部隊に状況を知らせる斥候部隊さえ回せなくなっていた。無論、妖部隊はこの戦闘で使えるわけではないので、最早徳川軍に打つ手はないように見える。ここで硬直を破る展開が現れ始める。その展開は毛利隊に発生する。

「おまえら!!」

毛利勝永は前陣の後退につけ込むと一気に戦線を前に押し上げていた。その時だった。

「紀州が裏切ったぞ!!」

誰かの声が響く。

「何か様子がおかしいですね。」

「いや・・・様がおかしい。待てよ・・・。」
じつと敵の本陣を見つめる。そこはもう・・・戦の火は見えない。
この頃にはお吉の方は戦闘を終え、帰還を始めていた。だからか・
・もう戦闘は発生していなかった。これは・・・失敗したかもしれ
ねえな・・・。

「引き上げの為にぎりぎりまで、粘るぞ。他の部隊を固めて引き上
げの準備だ。大野に撤退の使者を出しておけ。」

そう言うのと近くの男は走って後ろに下がる。

「生きてくれよ・・・真田。」

こうして、言われたとおり、毛利は陣を下げ始めた。確かに信繁
が言ったとおり、日って上気ではあるものの、兵士達の疲労は極致
に近づいていた。

「それは本当か？」

根津は見張りの言葉に真剣に考え始める。先ほど兵士達はどうも
後陣で裏切りが発生したとの報告を聞く。これが本当なら情勢の悪
化について徳川を見限る者が現れたのか・・・なら。

「お前ら！」

「は。」

周囲に声をかける、もう戦闘時間が長く、兵士達の疲労は限界で
もあった・・・だが、まだ信繁様は帰らない。この好機逃すわけに
はいかない。

「我々は今から、陣を崩し、信繁様を救出に向かう！付いてこれる
ものだけ来て！後は、毛利殿へ合流せよ。ここを破棄する！」

そう掛け声を発すると幾つかの兵士達は立ち上がるが、多くは座
ったままだった。その数3600。最後の突撃には十分であったが、
もう余力なぞ残っていない。下を見れば未だ敵兵で埋まった山の下。
だが、向こうの本陣は空いている。それに裏切りで混乱していれば、
敵陣までの突破は可能だ。

「お前ら！今こそ勝利の時！突撃！」

そう言つて根津達、最後の部隊は一気に山を駆け下り、山中に駆け下りたもうその頃には兵達の多くは疲労でいっぱいであった。また戦線の拡大は戦場にいる各旗本達に伝わり、士気は低下していた。結果突撃は成功し、兵はかなり失うものの更に混乱させる事に成功させる。

「俺でも・・・やれば出来る・・・。」

根津はよろよろになった馬を叩き歩かせていた。敵陣を突破する事には成功している。だが、帰らなくてはいけない。帰らなくてはならないし、まだ信繁様を見つけてはいない。

「本当に疲れましたなあ・・・。」

「そうだな。」

頷いて根津は声の下方を向く。そこには黒い甲冑を着た兵士が・・・。

「お前・・・それは・・・。」

次の瞬間兵士は投げナイフを投げつける。それを直感で無理矢理避ける。

「やりますな、信繁殿。」

そういつとさつと身をかがめ、馬の前まで走ると兵士は投げナイフを投げる。更に身をよじりかわそうとするが、かわすまでも当たらない。馬に当たったのだ。馬の目に当たったナイフに馬は暴れ、根津は落馬してしまふ。

「そのお首・・・頂きますぞ。」

暗殺者は身構えると異様な形のナイフを取り出す。倒れた相手ですら警戒を解かず少しずつ間合いを詰める。根津は身体を起こし刀を構える。相手の構えは・・・彼自身見たことがない構えだった。袖口から見えるナイフのような大きな刃物は・・・刀ではないようにも見える。

”勘違いしているようだ・・・徳川の忍びか？だが・・・これは？”

根津は窺うが向こうからの動きが・・・次の瞬間数歩ずらす。その耳元に風を切る音が聞こえる・・・二人か・・・。目の前の暗殺

者は一気に走り、間合いを詰める。刀を青眼に構え、無理矢理穂先を相手の刀に当てずらそうとするが、その刃物がかち合った瞬間、するりと抜け、自分の喉元へ！

「させるか！」

その刀を平にしたまま波を外へ強引に払う。だがそれを見越したようにもう一つの腕を突きガス。袖に隠れていたのもう一本の異様なナイフであった。それを回避しようにも市毛決めで両手を使った彼に回避するすべはなかった。そのまま鎧の隙間を抜け、肩にぶち刺さる。

「よし！」

だが根津も一角の武将。そこで意識を失うような男ではなかった。そのまま払って力が抜けた側を無視して柄で心臓付近を殴りつける。どうも・・・この男・・・胸に防具をつけているように見えない・・・。だが、そこで彼に激痛が走る。その攻撃に暗殺者は慌てるが、もうそのときは遅かった。引き抜こうと力一杯ナイフを抜こうとするのが力を込めた根津の前では刃物が抜けることはなかった。根津は刀を捨てると、腰の小柄を抜いて・・・相手の腹に全力でブツ刺す。その勢いで吹き飛ばされそうになるのを今度は暗殺者が踏みとどまる。そして抱きつくように倒れ掛かる。

「GO！」

その掛け声が聞こえるといきなり後ろから投げ込まれる・・・これは・・・。

「YOU, KILL。」

その掛け声とともに、暗殺者と根津の周りが火に包まれる。根津は蹴り飛ばし離れようとするが、肩からの出血が激しく・・・相手の必死のしがみつきをはがすことは出来なかった。

”神よ・・・御許に参ります・・・”

そう暗殺者は母国語で言つと・・・そのまま意識を失ってしまつ・・・いや、絶命した。

「これで・・・あのお方を・・・いやあのお方みたく成れただろう

か。」

根津は死ぬ寸前、信繁の顔が思い浮かぶ。初めて見たあの時から憧れ・・・そして必死についてきた。似ているとかいわれたときはどういう意味でもとても嬉しかった。今こうしてあのお方の代わりにこうして・・・一人の敵を食い止めたが・・・こうしてあのお方みたいになれたのだろうか・・・。思い浮かべ崩れ去る根津の顔は火に焼けただれながらも・・・。安らぎに満ちていた・・・。

”これでかき乱す事には成功したようだな”

建物の影から吹き矢を持った暗殺者がじつと焼け死んで行く二人を見つめる。しばらく見つめると死体の前で十字を切る。通路の奥、大阪城のほうから銃を担いだ黒ずくめの男がやってくる。

”そっちはどうだ。魔弾。”

やってきた男のほうをみるが、その顔はさえていなかった。

”こっちは失敗だ。ネテロの奴・・・しくじったおかげでこっちまでやばかった。”

”こっちはまあ・・・セルゲイの奴が粘ってくれたおかげでどうにかなったが・・・引き上げるぞ。俺達ではこれ以上は限界だ・・・。

”

吹き矢の男は奥のほうを見つめる。奥ではまだ戦闘が行われているようだ。

”後は、アンサレムがやってくれるだけか・・・。”

”撤収するぞ。こんな所で死ぬのはあの馬鹿どもだけでいい。”

そう言い、根津の死体を放置して彼らは去っていった。それから遺体が発見されたのすぐの事だった。

「おお！うおおおおおおお！」

徳川本陣に突入した信繁たちは一気に突入すると、信繁たちは一気に陣幕に向かってひた走る。

「おめえ！邪魔すんな！」

そう言うとしまは一気に走る速度を上げるとの武士達の横を押さえるように来た男のすねを思いつき蹴る。それに崩れ、鎧を着た男が倒れる。そのまま横をすり抜けると一気に先のほうへ走っていく。各人、相手を蹴散らし陣内を走りぬける！

「信繁！」

青海もまた、側面を押さえるべく、横に広がり、来る敵を殴り飛ばす。

「あの天幕だ！」

そう言うって信繁が走り掛け声を上げた先には一つの大きな徳川の紋がかかれた陣幕がある。一気に駆け込むと他の者たちもその後が続いて入り込む。だがそこに誰の姿もなかった。

「ここじゃないか！逃げたか！」

「いや、わしはここにおるぞ。」

その声の振り向くと、陣幕の陰から男が一人出て来る。それは……

「お前！あの時の！」

「家康！」

青海と信繁は同時に声を上げる。

「今度こそ……問おう。今までの事は水に流そう。わが陣門に下れ。この極みにいたってまだ主君なぞ……何の意味もないからのお。」

「そう言い家康は手を上げると幕の裏からぞろぞろと鎧武者達が出て来る。この状況……後ろをちらりと見れば、後続部隊も囲まれているらしい。」

「投降せえよ。この状況が分からぬほど……愚かではあるまい。」
「そう言い厳しい目で家康が信繁たちを見つめる。」

「それは……主君を違えろと……。」

「命は惜しくないのか？」

「そう言いつつも家康は半ばこの言葉を聴いた段階で諦めていた。この男がここで突進してきたのを食い止めることはぎりぎり出来る

かもしれないが……。だつたとしても捕らえるのは難しい。

「命を惜しんでここまで来る事はないが……。」

そう言いつつ信繁は周囲の状況を窺っていた。たとえ、切りかかるのに成功したとしても、手傷だけを負わせ、自身が倒れては何にもならない。だがその時だつたどこからとも無く聞きなれない音が聞こえて来る。その次の瞬間だつた。

「おい……。」

その不思議な減少に気が付いたのは取り囲んでいた兵士だつた。そのうちの一人がふらふらと目をうつろにして家康の元に歩いていった。

「お前！」

声を上げるものの、聞こえたふうも無く家康に向かって歩いていった。そいつが信繁たちの目の前を横切る頃、取り囲まれた後ろのほうでも異変が発生した。何の合図も無く、兵士達が襲撃を始めたのだ。

「お前ら！止める！」

家康は異変に気が付き声をかけるが兵士達は聞く耳を持たない。家康の目の前に来た兵士は刀を突然振り上げる。それをみて、とつさに信繁は踏み込み、その兵士を横から蹴りつけ、吹き飛ばす。

「お主……。」

次の瞬間、風を切る音が聞こえる。

「信繁！」

その声とともに青海は腕を広げ立ちふさがると、腕にナイフが5本ぐらい刺さる。

「青海！」

「おめえ！」

そう言つてしまは短刀を構えたまま信繁の後ろを固める。そのほうにはナイフを両手に持った男が近くの昨日江からこちらの様子を窺い、……何故か本を持った宣教師の姿が兵士達の後ろにいた。

「君達……豊臣軍でしょ。そんなの庇っちゃダメでしょ。」

不思議に気の抜けそうな声で話す男は、その異様さもあって周囲を威圧していた。

「ですな。せつかく神の為に働く機会があるのですから、そこで全滅しないと。」

宣教師は近くの男に呟くとその兵士の目から精気が抜けていく。周囲の兵士達はもう目に生氣は無くふらふらしている。

「お前ら！」

信繁は睨みつけるがそれに一切動じることなく、少しずつ距離を詰める。

「お前ら！馬鹿にするな！」

青海は怒号を上げると腕に刺さったナイフを引っこ抜き投げつける。

「こいつら・・・嫌いだ！」

しまも宣教師たちに刀を構える。それに反応して宣教師達も構える。

「お前ら・・・俺達がこいつらを食い止める。そいつを連れて逃げる。」

「青海！」

信繁は驚いて腰を抜かしている家康を掴み、引きずり上げる。

「家康殿！逃げるぞ！」

「う・・・うう・・・ああ・・・。」

そううめき声を上げると家康はある場所を指差す。そこには馬が一頭あった。信繁は無理やり家康を馬に乗せると信繁は馬を出して全速力で走らせる。

「なんで・・・こう・・・ねえ。」

そう言うとな이프の男は気から飛びあり、ある低来る。まるで周囲の兵士なぞ気にならないように歩いて・・・その自然な動きの中で、襲い掛かる兵士達の急所を切り裂いていく。

「ダメよ。異教徒だからって邪魔しちゃあ。」

「お前達！異教徒に神の裁きを！」

そう言つと宣教師が掛け声を上げると兵士達が青海に向かつて走ってくる。それを片手で錫杖を握り、弾き飛ばす。

「喝！」

その声に兵士達の一部は目を覚ますが、その瞬間後ろから切りかかられていく。

「異教徒つてツさ・・・お前らの教えだと殺しはアリかよ。」

青海は少しずつ間合いをばなしていく。先ほど庇つた怪我で、片腕が動かない。声だけならどうにかなるが・・・。

「神に逆らうものは全て死すべし。他の神信じるもの全て・・・敵なり。」

宣教師は微笑みながらこちらを見つめる。見つめる青海たちと宣教師達の間では正気に戻つた兵士達と増援と、正気を失つた兵士達が戦闘を行っていた。

「改宗なんて無いのかよ。なんとというか・・・さすがだな。」

「さて・・・早速・・・神の御許に召されなさい！」

ナイフ男がナイフを投げつける。だが今度はそれはしまが全て刀で弾く。

「おめえ・・・しのびか？」

「忍び？知りませんね。そういうえば使者を弔う事を偲ぶとか・・・。確かに偲ぶ意味ではね・・・。」

そう言つて今度はしまに投げつけるが、またも刀に弾かれる。だが、距離は遠く・・・反撃できるほどの距離ではない。

「アルサレム・・・引き上げようよ。めんどくさいし、標的じゃないし。」

「確かに。私が時間を稼ぐ。行け！エミリオ。」

”りよう・・・かい。”

不思議な言語で少し話すぞ、また宣教師達がこつちを睨みつける。それに構えるしか・・・二人には残されていなかった。ナイフ男が腰からナイフを抜き・・・抜き打ちでしまを狙う。だがそれもしまに弾かれるが・・・。

「な！」

「じゃあね。」

そう言うと宣教師の二人は二手に分かれ走る。ナイフ男はそのまままぎれるように走り去る。

「貴様！」

青海はナイフ男を追うために振り向くが、そこに人垣が邪魔をする。宣教師の男は大声で何かを喋っている。それに合わせ周りの人間の生気が抜けていく。

「しま！」

「おうよ！」

その声にナイフ男に向かって走ろうとすると青海が足を引っ掛ける。

「俺達も引くぞ。」

「は？」

しまは立ち上がると周囲を見渡す。人垣のせいでわからないが・
・もう二人の姿はなかった。

「ここは敵陣の奥だ。ただでさえ生きて帰る保証は無い。あっちの山に逃げるぞ。ついてこい。」

そう言うと近くの山を指差す。そこまでは一里はありそうだ。

「どうしてさ。あいつのところに行こうぜ。」

「馬に乗って逃げたなら、追いつけないし、あいつらはどうも引きに転じたみたいだ。なら俺達もここなら逃げるぞ。」

騒言つと、陣幕の奥に向かって走り始めた。各自、戦況は分からないが旗本のこの陣は宣教師のおかげで大荒れであり、脱出するにはこの時を置いて他にはなかったのだ。悔しそうにしまは周囲を見渡す。信繁・・・生きててくれよ。

「大丈夫かよ。」

馬に乗せて走り川原を抜け、信繁は一路、堺に向かった。あそこならどちら向きでもどうにかなる。それに警備部隊もいる。背中で

しがみつくと家康は震えていた。

「やはり・・・切腹するしか・・・。」

蚊の泣くような家康の声が信繁の耳元に入る。

「あんた・・・怖いのか？」

「そう・・・だな。今でも・・・ずっと・・・戦は怖い。だがな。

戦が怖くなければ策略も立たない。平和を望む事も無い。怖いから無くなればいい。だからここまで来れた。」

「だな。俺もだ。」

信繁は頷くと、更に馬を走らせる。だがもう馬は限界らしい。徐々に歩みは遅くなっていた。近くに打ち捨てられた寺を発見するとそこに入る。寺の看板にはかすれた文字で”南宗寺”と書かれていた。

「ここならばらくは持つぞ。」

そう言つて近くに腰を下ろさせる。家康の顔は青く息も絶え絶えだった。この時家康74歳。普通なら歩く事さえ叶わぬ老体である。「どうして助けた？」

「わかんねえ。」

平然と言つと懐から出陣の際に持ち込んだ握り飯を取り出した。小さくはあるが、小分けにされており、戦のたしなみでもあった。そののうち一つを手にとると後を家康に渡す。

「食つときな。まだ先は長い。」

「これからどうする気だ。」

家康は刀に手を掛け信繁を見つめる。

「あいつらはあんたごと俺も殺そうとした。だから一緒に逃げた。後のことは考えてない。」

「そうか・・・。」

鞘にかけた手を離すと、握り飯の封を開け一つを口に含む。

「夢中でき。」

そついうと信繁は軽く微笑えんだ。

「そうか・・・。お前のような奴が息子なら・・・この歳まで何の

苦勞もしないのにな。」

「……。」

寂しそうな顔をして下をうつむき少ない米を噛み締めていた。

「でも……ありがとうな。助けてくれて。」

素直に、ポツリと呟くように家康は呟いた。その顔をちらりと信繁は見ると、それはまるで仏のようにも見えた。その時、どこかで聞いた音が……。家康は急に立ち上がると信繁に抱きつく。

ズドドドドド!

鈍い音が連続でがして、家康の背中に大き目のナイフが数本刺さる。

「家康殿!」

「わしの古い先短い命……古い先短い命!無駄に使うか!」

そう言って向きかえると、寺の入り口にあのナイフ男が立ちふさがる。

「探したわよ。本当に。」

「貴様!」

信繁も刀を抜くがそれを家康が手で制し、刀を構える。

「お主は生きる!」

「あんたが言うんじゃない!」

そう言って構えているが、ナイフの男もお互いの間合いが分かるのか、うかつに近づいてこない。しばらく見つめるが、腰から抜いたナイフを更に投げつけようと構えた。

シュ……ルルル!

次の瞬間更に風を切る音が聞こえ、エミリオはナイフを急に持ち替えて飛びのく。その足元には手裏剣が転がっていた。その瞬間、周囲を顔を布で覆った黒ずくめたちが取り囲む。

「殿!」

半蔵の声が聞こえると、半蔵は家康の傍に駆け寄る。その顔は……いつもの飄々とした顔ではなく、なきそうな……少女の様でもあった。

「半蔵か……。」

「との！」

家康は寺の柱に寄りかかり、腰をすたとんと落とし、地面に腰を落とす。

「これは……状況が悪いようね。じゃあね。」

そう言つとエミリオは腰に持った煙玉を投げつけ、一目散に逃げつて行つた。

「追え！追え！」

半蔵の号令とともに、忍者達はナイフ男を追いかけていった。敵意が去るのをみると半蔵は家康の脇に寄り添う。信繁もまた寄り添う。

「助かつたな。」

「あんた……。」

家康はほつとした顔で信繁を見つめる。その顔はまるで息子を見ているように……信繁には思えた。

「半蔵。」

「は。」

「遺言は……ここに記してある。あれを実行するように。」

「は。」

半蔵は深く頷き背中を見る。背中のナイフは深く刺さっており、明らかに致命傷である。それはお互い分かっていた。

「後……今まで世話をかけたな。」

「は……い……。」

半蔵の頬から涙が落ちる。

「信繁殿……。」

「ああ。」

そう言つて信繁を家康は見つめる。

「日ノ本を頼む。おぬしなら……きつと……。」

「ああ。」

「これでいい……。心残りはあるが……最後まで人らし……。」

く・・・満足な・・・人生だった・・・。辞世の句を読む体力は・・・無い・・・。みんなに・・・よろしく・・・な・・・。」「
その言葉とともに、力を失いがたと家康は崩れ落ちていった。
これが徳川家康享年74歳の最後の言葉であった。

「殿おおおおおおおおお！！！！！」

その様子を前に半蔵は絶叫した！信繁の頬をツウツと涙が落ちていった。しばらく、半蔵は泣き崩れていた。これを目の前にして信繁は呆然とするしかなかった。だが、しばらくすると半蔵は立ち上がり、背中の忍者刀を抜き、信繁の眼前に突きつける。

「今度こそ・・・今度こそ・・・われらの仲間となれ・・・。」

その顔は涙のあとがくつきりと付き、その顔はぐしゃぐしゃにゆがんでいた。その悲壮な顔を前に信繁は言葉を失っていた。

「もう・・・何も考えられぬ。これ以上は考えられぬ。だから・・・

だから・・・こうしか出来ぬ。おぬしを仲間になせば・・・殿は・・・

殿は・・・。殿はあああああ！！！」

「分かっている。」

「何がだ！」

「俺は軍門に下る・・・。」

信繁はボソツと呟くように行った。

「・・・。」

半蔵はそれに何を言う事もできなかつた。頭が付いてきていない。

「俺は身勝手にもここまで来れた。この人を倒して戦が終わる・・・

そう思っていた。だが、違う・・・なら・・・俺は俺の力で戦を終

わらせる。だが・・・。」

そう言うとき家康のまぶたをそつと触ると、瞳を閉じさせた。

「秀頼殿だけは・・・秀頼殿の命だけは助けてもらう。それだけは

俺が叔父に対する恩義返しだ。後は城とかは関係ない。頼む。」

その信繁の声の最後のほうは消え入るように・・・細く・・・半

蔵の耳にかすかに残る、後に聞こえる嗚咽にまぎれた・・・呟きであつた。

第十二節 最後まで人らしく（後書き）

この文を以って大阪夏の陣および、冬の陣での戦没者の皆様の冥福を祈り、ここにこの文を捧げます。

第十三節 夜は深く……人の業も深く……（前書き）

あまりの展開に呆然とする信繁はそのなかで唯一の仁義でもある秀頼救出の為、大阪城に乗り込む。そこで待っていたのは南蛮衆であった。

第十三節 夜は深く……人の業も深く……

第十三節 夜は深く……人の業も深く……

「敵は……もう……こねえようだ。」

遠見筒でじつと正宗は敵陣を見ていた。この時5月7日夕暮れのことであった。

「ですな……敵があれから来なくて……助かりました。」

「いや……そうでも……ねえみたいだぜ。」

そういつて正宗はぐるつと向き返り本陣の方を見つめる。一応は山向こうではあるが、周囲の軍の様子から、内容は伺える。もしかや……本陣まで大崩したか……。

「今なら……もしかしたら天下が取れるかもしれねえぜ……俺たちのさ。」

そういつてにたりと笑うが……正宗から見ると本陣はもう……体をなしてはいなかった。

「それは……。」

片倉はつい俯いてしまう。

「出陣の準備をしる。戦況次第では……本陣を討ち取るぞ。」

馬を用意させるべく後ろを向いたその瞬間正宗は固まってしまう。

「正宗どの……。」

それは黒い布で口を覆ってはいるが……服部半蔵その人である。その姿に正宗は背筋が走る。

「どう……した？」

つい、その気迫に……つい刀に手をかけようとする。

「今夜、本陣にお一人で……おいでください。会議を開きもつす。」

そついうとくるりと背を向け、半蔵はとぼとぼと歩いていった。

「殿……。」

「どうも・・・無理とまではいかなえが、向こうもまだ力が残っている・・・だな。」

そういい半蔵のいた所を見るが、もう姿はなかった。だが・・・あの悲壮な目を・・・あの鬼気迫る目。もし変に動けば自分が先に殺される・・・そう感じられた。

「ですな。今夜・・・会議とか・・・何があつたんですかねえ・・・」

片倉もとまどいながら、正宗の側に駆け寄る。

「ま、わかんねえが、凄いことになりそうだ。」

そういつて、元に位置に戻ると遠見筒でまた戦況を見つめる。善戦は勝利したらしく、市街地の奥へ兵が進んでいく。だがその一方、旗本達は黒田家の位置に結集を行っていた。今、天下が大きく動いている。正宗の直感は訴えていたのだった。

「では・・・死人を止めていた部隊の位置は分からなかった・・・のですね。」

城に戻ったキース・フロレンスはぶ隊を見渡していた。その数は3名ほど減っていた。

「ん・・・ネテロ、エミリオ、セルゲイはどうした？」

「二人は見事役目を果たしましたが、ネテロは・・・」
聖書を持った男アルサレムは膝を突き、頭を下げる。

「彼らの為に祈りましょう・・・」

そういつと、キースは手で十字を切り、祈る。

「それで具合は。」

「は、ネテロは死人封じの部隊がいるであろう軍まで行き交戦しましたが、届かず。セルゲイは、目の上のたんこぶを排除しようとして勤めを果たし、エミリオは・・・途中でで見失いましたが・・・いまだ生きていますかと思いますが・・・」

キースはじつと望遠鏡を片手に、外を見つめる。茶臼山周辺では

敵兵達が攻撃の準備を行う。明日・・・この城にも攻めて来るだろう。いや、もつと前かもしれない。

「警備だけはしっかりしろ。そして、お前達には明日も働いてもらう。全員を城で待機させる。」

「それはもう。ペドロ、オミルケアは準備完了だと。」

「分かった。なら警備に当たれ。」

「了解しました。」

そういうとアルサレムは落ち着いて天守閣を降りていった。

” 猊下に預かりし精鋭を三名も失ってしまうとは・・・やはり・・・一筋縄ではいかない。だが・・・それもこれで終わり。これが終われば・・・。”

考えながら望遠鏡をはずし下を見ると、オートマタの最終調整が行われていた。それは最後の灯火やもしれなかった。

「俺たちを集めたのは・・・何のよう・・・だ。」

新しく前線に移設された本陣の天幕を開けた正宗の第一声であった。それは中にいる布陣を見てのことである。中には上杉景勝、前田利常と黒田長政。後は徳川四天王達控えていた。

只・・・何故か・・・この場に徳川家親族および・・・直系の姿はない。

「今後の方針についてでござる。」

大将の位置にある腰掛けに座り、半蔵は周囲を見渡す。端の椅子を見つげ座る正宗はそれだけでも驚いてしまう。半蔵は懐から書面を取り出すと、皆に見える位置に広げる。そこには長く書かれた文章があり、所々に傷あがった。

「先日の戦で・・・内府殿は戦死致した。」

その言葉に全員が息をのむ。

「それに伴い皆様には遺言をお伝えいたす。」

その言葉に全員が衝撃を受け、お互いに顔を見渡す。衝撃が全員に走る。

「お……おつ。」

「今……死ねば……死を伝えれば豊臣方はきつと勢いづき、平和はなくなるであろう。そこで3年は死を伏せ、影武者を立てること。また、皆々には各領地にて外から来る外敵を守り、人々に平和をもたらして欲しい。そして、今ある幕府を守って欲しい。」

その言葉にじつと全員が押し黙る。一部の者は涙し、顔を伏せる。「これが要約した遺言でござる。細かい内容については今後伝えていきもうす……」

「で、影武者は？」

正宗はあまり思い入れがない為か、涙までは流さなかった。直感には当たっていたというわけだ。

「今は用意出来もうさぬが、幾つか用意してござる。今は偽装させていきますが……。いずれ影武者は建てます。」

「そうか……で……我らはどうすれば……。」

景勝は涙を拭いつつ半蔵に向く。

「無論。この事を口外してはなりません。」

「そつちではない。明日だよ明日。千姫がいるんだろ。どうするんだよ。」

利常は呆れて聞き返す。

「明日は皆様それぞれ、城攻めをしていただきたい。あの秀忠公では……作戦指揮は無理でござろう。ですから皆様方、各自の方法でお願いいたします。相手の戦力はこちらの分析では、もう2万もありません。ならこちらの方が数は有利。力押しでも攻めましょう。」

「分かったが……。」
「今退けば、この事が公になる可能性は高い……。だからいいんじゃないか。」

正宗は開き直ったように言ってみせる。

「分かった。此度の戦はあの城を落とし、甲いとしよう。」

上杉景勝は立ち上がると、一礼をして去っていった。それに合わせ、黒田長政、前田利常が陣を去っていった。

「でもさ・・・遺体は回収したのかよ。」

「それはもう。」

半蔵は即答した。だが正宗はその回答の中で一瞬身体が震えたのを見逃さなかった。

「そうか・・・あんたもつらいんだな・・・でも明日の城攻め、被害は尋常じゃねえぜ。」

「分かっておりますが・・・今攻めねばそれこそ、無駄死。せめて太平な世こそが彼らへの弔いでしょう。」

「分かった。俺も攻めてやるよ。只・・・思いこみが強すぎるは危険な事があるぜ。」

「肝に銘じておきます。」

正宗は立ち上がると半蔵を見つめる。その顔はまだ何か隠し球があるように見える。だが、それは今・・・分かるものではなかった。

「終わったようだな・・・。」

「そうだな。」

半蔵は裏手に回り、陣のはずれまで歩く。そこには信繁が木により掛かり、陣を見下ろしていた。

「でこれから俺をどうするつもりだ。」

陣を去っていく重臣達を見つめている。

「これから・・・お主ならどうする？」

そう言つて半蔵は大阪城を見つめる。

「俺なら・・・指揮官がいない今、撤退するが・・・あんたらは焦っていた。」

「まあな・・・。」

大阪城は煌々と明かりがとまり、大方今頃、籠城決戦の準備をしている所だろう。夕方の明かりに沈みつつある大阪城を今見ると・・・落日が似合う・・・ように見える。

「決着時期は・・・。」

「今夜ぐらいには決着をつける。」

「そうか……。」

確かに徳川軍の兵力ならごり押しすれば勝てるが……被害は甚大だ。

「だが……まだ連中の手が分からぬ以上、うかつに攻めれば死傷者がでかねない。」

半蔵は大阪城を見つめる……信繁側から顔を見る事は出来なかった。

「お前……冷静だな……。」

「いや……親方様はいつも出陣時に皆に内緒で遺書をしたためなされる。ただそれを履行しているだけだ。未だに拙者も死の余韻は抜けきつてはおらん。」

更にじつと半蔵を見つめる。旅においても少し気が抜けた顔をしていたが……それとは違う……悲壮さがやはり見え隠れしていた。

「今。連中が事をなす前に殺す……。あんたらにとってもっとも得意な手だ。敵討ちに俺たちだけで行くぞ。」

信繁はせかしてみせる。大方連中が事を起こせば今の状況では死傷者が大量に発生し、また、それで死人が増えかねない。

「行くなら少し待て。準備を整え、夜……。夜に行くぞ。」

何か思いついたような半蔵の顔はいつにもまして、真剣そのものだった。

「半蔵様。」

「なんだ！」

幕僚達にこれからの作戦を説明し、陣に戻った直後のことであった。忍びの一人が駆け寄ってくる。

「敵兵を捕らえました。尋問は？」

「連れてこい。」

「お前な、やつぱりダメじゃねーか。」

「仕方ねーだろ。あんな所に敵が陣張ってるとはおもわねえって。」

忍者達は、一人の少年と一人の坊主を紐で縛り、連れてくる。

「これは……。」

半蔵はすこし口元をゆるませる。あの戦場の後だ。死んでいても不思議ではない。

「お前！」

それは青海としまであつた。青海に傷らしい傷はないが、しまはその軽装もあつて所々に生傷が付いている。

「ひさしいな。どこで捕らえた。」

「は、ちようど陣を移動させようとした所、山中に来たので、捕らえました。」

「お前らも運がないな。」

半蔵は少しほつとしたように顔をほころばせると、その顔をじつと見つめる。しまはじつと下に俯き、青海はかみつきそつなぐらい身体をがたがたとさせている。

「俺たちを放せ！」

「……お主ら……拙者に仕えぬか。そうすれば……放してやる。」

半蔵は顔近づけ、ささやくように言った。

「俺は嫌だ。」

しまは顔を上げて反論する。その顔は……涙でいっぱいだった。

「二君に仕えるなぞ！」

”お前ら……そのまま少し視線を上げる……。”

半蔵のささやくように小さい声に青海はふと顔を上げると、そこには下を向き、俯く信繁の姿が遠目に見えた。

”もう……これ以上旧知の仲を斬りたくはない。解れ。”

「もう一度言う。軍門に下れ。さすれば命は助けてやる。」

半蔵は顔を話すと皆に聞こえるように大きくしゃべる。

「わ……わかった……。」

「青海！てめえ！」

青海は仕方ないように頷く。しまはそれを見て噛みつきそつな顔

で青海を見つめる。

「今は・・・生きるぞ。」

その言葉にしまはうなだれた。そしてそのしまの目にあの刀が目にとまった。”死に名月”・・・。

”負けてもいい。生きてくれ。”

あの時の言葉が頭をよぎる。

「分かったよ・・・。青海・・・。」

しまは頷いたのだった。

「しばらくはあそこにいる捕虜どもと一緒にいてくれ。今夜の作戦でお主達は役に立つてもらおう。連れて行け。」

そういつて忍者達に指示を与えると奥にある捕虜達・・・いやそこには一人の男だけが木に寄りかかりうなだれていた。そこで紐を解かれると、忍者は去っていった。

「・・・。」

捕虜の男はゆっくりと顔を上げる。その顔からは生気がなくなっ
てはいるものの、それは真田信繁その人だった。それをみた瞬間、
しまは思いつきり抱きつく。

「信繁！」

だが、信繁に反応はなかった。その顔は喜んでいいのかショック
のようだった。

「どうした・・・お前。」

青海はその様子の異常さに気が付いて顔を見つめる。

「何があった。」

「結局・・・何も守れなかった。」

「じゃあ・・・。」

青海はその答えに何が起きたのか理解出来た。そして・・・その
心情を理解した。

「でもさ。こうして生きて俺たちは会えた。」

青海は信繁の前で腰を据えると真正面から見つめた。

「んだよ。」

しまは嬉しそうに見るが、まだ少し生気を回復・・・したように見える。

「さすがは坊様・・・いいことを言うのぉ。」

その声に後ろを向くと、お吉の方とトリさんが立っていた。

「信繁、会いに来たぞ。」

青海は後ろを向くとゆっくりと歩いて来た。

「お吉の方様・・・。」

まだ生気が抜けた目で信繁は見つめる。

「その坊様の言うとおりだぞ。信繁。生きている。なら・・・まだやれる事がある。やる事がある。お主はまだそのことが頭に残っておるはずだ。」

「・・・。」

少ししか回らぬ頭で、信繁は考える。浮かんだのは豊臣秀吉の顔と、息子の顔だ。

「まだ・・・やれる・・・。」

「そうなんだ・・・。やる・・・んだ。」

トリさんも心配そうに見つめる。その顔は徐々に生気が戻っているように見える。

「負けてもいいから生きるんだ。言ったのはお前だぜ。」

しまは嬉しそうに信繁を見つめる。

「確かにな・・・俺にはまだ・・・やる事がある。」

そういうと信繁は立ち上がる。

「そう・・・世間話をするのじゃ。ワシとな。」

「なんでやねん！」

青海がついお吉の方に突っ込みを入れてしまう。そしてお吉の方はちらりと信繁の顔を見た。もうその顔はいつもの信繁の顔に戻っていた。

「すまない・・・みんな。」

「いいんだよ。」

青海はにやりとほほえむ。

「それで・・・どうしました？」

信繁はお吉の方を見つめる。

「そうじゃのお。酒・・・いるか？」

そういつてお吉の方は着物の裾から酒瓶を取り出す。

「いえ・・・これからまだ行く所があるので、一通り終わってから。」

「そうじゃのお。」

そういつて惜しそうに酒をしまうのを青海は目を離す事が出来なかつた。

「今回は大手をふるって参加出来るからと言うよりは・・・。」

「ですな。しっかりと働いていただかないと。」

お吉の方が後ろを見つめるとそこには仁王立ちしている半蔵の姿があつた。

「あなた様があの時暴れたせいで、後で説得してまわるのが・・・それはもう大変でした。」

「それはじゃ・・・あの時は信繁と会えた喜びで・・・後・・・胸が弾んでな。」

お吉の方が、少し汗を垂らして半蔵を見る。

「胸が弾んで味方を全壊させるんですか!？」

半蔵は睨みつける。その顔にトリさんは苦々しい顔でみつめる。

「いいではないか。」

「良くありません!」

半蔵は怒っているが・・・それはすぐに終わり、向き返る。

「お主達にはやって欲しい事がある。そしてそれは・・・。」

「わかっている。」

その言葉に青海はじつと信繁は見つめる。その目は悲壮にも近い瞳で見つめていた。

「今夜、大阪城に乗り込むぞ。」

「「は?」」

しまと青海は驚いたように信繁を見つめる。

「頼んだぞ。拙者は部隊の選抜がある。3刻後には出発いたす。各自準備して欲しい。」

そう言つと半蔵はきびすを返し、その場を立ち去つてしまう。

「私も・・・あんなに怒られては世知辛い・・・トリどの・・・行くぞ。後でゆつくり酒宴でも開こうぞ。」

「ア・・・んだ・・・。おめ・・・後で・・・オラの村に来てけるおとつさ達きつと喜ぶだ。んじゃ。」

そう言い、慌ててお吉の方と、トリさんは去つていった。お吉の方の手にはあの時渡した刀をまだ・・・持っていた。

「で、俺たちはどうするんだ。」

青海はじつと信繁を見つめる。

「俺は・・・最後・・・半蔵に包囲され捕まった・・・。だが・・・まだ・・・最後の希望をあきらめたわけではないが・・・俺は命を救われた。」

じつと二人を見る。あの戦闘の後だ・・・生きていただけで、少し嬉しかった。これ以上何かを失うのは・・・耐えられそうになかった。

「だからといって叔父貴への恩返しは終わっちゃあいない。」

「へ？」

青海はその言葉に驚いた。流石にこの場に置いてさえ豊臣の事を考えるのか？

「正確に言えば、俺は捕まってから少し考えた。この状態で出来る手は何か・・・それは・・・秀頼様を連れ出す。」

「大丈夫なのかよ。」

「馬鹿殿・・・そう言えばあいつか。」

しまはふとあの時の若い侍を思い出す。確かにあの容姿ならどこに行つても生きて行けそうだ。

「それは・・・細かい事は言えないが向こうも承知済みだ。」

「それならいいが。」

「向こうは一応そのために尽力するとは言った。」

「信用していいのかよ。」

青海は心配そうに陣の向こうで忙しそうに部下達に指示を与えている半蔵の姿を見る。

「ここまで来たら・・・もう誰かを信用する以外無いぞ。」

「それはわかった。」

そう言っつて青海は周りを見渡す。まさかこうなるとは青海自身思っつても見なかった。だからこそこの信繁の態度に少し違和感を持ったのは否めなかった。

5月7日深夜、信繁の周りには回収された鎧を着た・・・忍者と妖怪達の姿があった。その先陣には半蔵の姿があった。

「此度の目的は・・・千姫および秀頼の脱出・・・そして、城内にいる南蛮勢を討ち滅ぼし、明日の攻城の被害を押さえる事である。」

半蔵は各人を見渡す。忍者部隊が300、今は豊臣軍の甲冑を着ている。また横には妖怪衆が構えている。

「死人による部隊が来た時は妖怪衆に任せ、我々は奥にいる南蛮を潰す。そうすれば今まで続いた戦乱は終わる。」

その言葉に少し部隊がざわつく。

「私たちの生活はこれで落ち着く。皆の者最後の一踏ん張りじゃ。」

壇上上がった普通の老人に見える男が声を上げると、その声に妖怪達がときの声を上げる。聞いた所に寄るとどこかの妖怪達の総大将で、それは凄いと半蔵は言っていたが・・・あいにく妖怪とは面識はない・・・お吉の方様は別か。

「何か・・・すげえな。」

しまは啞然として横の部隊を見つめる。そこには異形の者達が並んでいた。

「まあな。俺にはその向こうの方が信じられないぞ。」

そう言っつて青海が見つめた先には戦装束に身を包んだ僧侶の姿があった。

「あいつら、今まで仇同士だったんだぞ。」

「そうなのか。」

「それまでした・・・南蛮とは・・・。」

青海は考えさせられていた。そこまで集結しなくてはならない・・・敵とは・・・。南蛮衆とは・・・分らない事だらけだった。

「今まで聞いた事が正しければ・・・戦乱の全てが・・・あいつらの企み・・・そして・・・今夜それを終わらせる。」

決意の目で信繁は大坂城を見つめる。

「今回の作戦は、お前達は敗残兵となり！豊臣軍に紛れ込み内部にはいる事で南蛮衆の居場所を突き止め、そしてかたずける。それだけだ！」

シンプルではあるが、敵方がぼろぼろである今、一番効果的な方法である。しかもこれは今夜しか成功しない。明日以降は警戒され失敗する公算が高い。と言うのも、戦の直後に帰還兵を断れば、内部兵士の士気が下がり、裏切りさえ起きかねなくなる。だからこそ、このタイミングでしか成功しないのだ。

「出発。」

数多くの籠城戦を超え、徳川軍の出した籠城対策とはこれだったのだ。各部隊は出発を始めた。

「兵士達の死傷者・・・。」

キースは高台から見つめていた。

「各人にあれは配りましたか？」

そう言っつてぼろぼろの鎧をまとった武将を見つめる。

「確かにな。あれは薬とか言っつておいたが・・・あれは何だよ。」

ぼろぼろの鎧を着た毛利勝永は不安そうに粉を見つめる。

「あれは・・・。」

「あれは・・・。」

「元気になる薬です。」

キースは平然と答えた。彼にとって間違えた事は言っていない。

「元気・・・か？」

「ハイ。ただ劇薬ではあるので、その使用にはご注意を。」

「と言う訳じゃ。各自・・・城を守れよ。」

帳の向こうから淀君の声が聞こえる。姿を見る事は出来ないが・・・。

「分かりました。」

もう・・・豊臣には戦略を見る事は出来ない。この時、毛利勝永は悟らざる終えなかった。

”どうしろというのだ。こんな薬一つで敵軍を押し返せるのなら、我らは苦勞しない。この時敗北は確信してしまった毛利は天守閣からおり、兵士達を見つめる。もうぼろぼろの鎧でいる者や疲勞困憊で城に帰ってからは動けなくなる者など、その姿は悲惨その物である。敗残者達の帰還は城で受け付けているが・・・本当に・・・真田が言ったとおりだった。”城に帰るより、逃げて返った方がいい。”

”持ちこたえられて二日。””上は切り捨てるつもりだ”・・・
・枚挙にいとまがない。下に降りながら思考をまとめるが、勝ち筋はもうほぼ無かった。明日になれば本格的に攻めてくるのに状況では無理だろう。通路には最早・・・どこを見渡しても警備兵達はいない。血なまぐさいのを嫌った淀君達が、兵士達を天守閣から追い払い兵士達は仕方なく、隅の方で治療を行っているが・・・もう敗戦は濃厚である。だが、その上から貰ったのは粉だけ・・・何をしろというのか・・・確かに自分たちの部隊はまだ少しの傷で帰れたが、真田隊は奇襲部隊、残存ともに全滅と報告があった。ならもう・・・。

「勝永様！」

「どうした！」

呼ばれて振り返ると、兵士の顔が明るい。

「信繁様が。」

「そうか！」

その言葉に急いで階段を駆け下り、入り口まで行くと鎧はぼろぼろではあるが五体満足な信繁の姿があった。

「どうした？返らぬと思ったぞ。」

「それが・・・まあな・・・。」

信繁はぼつの悪そうな顔をしている。

「中に入れ。お前らも入れ。」

そう言い後ろにいるぼろぼろの兵士達を中に入れる。数は少ないが、これだけ残れば上等だ。

「どうした。信繁、早速色々聞かせてもらっぞ。」

そう言うと言繁の手を引き勝永は奥の小さな見張り小屋に連れ込む。非常用ではあるが一応ここで作戦を立てる事が出来る。

「どうだった？生きて帰ってきた所を見ると・・・それなりの事情があるみたいだが・・・。」

「まあな・・・。」

信繁は、すまなさそうにこちらを見つめる。

「どうした？」

「・・・。」

信繁はしばらく迷っているようだった。だがそれが普通だ。生き恥をさらすとはそう言う事なのだ。

「どんな事でもいい。俺に言え。俺は受け止める。」

勝つ永は意を決していった。その言葉に信繁はきりりと前にむいた。

「此度の戦・・・敗北は必死でござる。拙者の考えは甘くございまして。」

頬から涙を流して信繁は見つめる。

「それは・・・。」

「拙者は陣奥深くに入り・・・徳川殿は無き者になり申した。ですが・・・。」

「それなら勝ちじゃあ・・・。」

「ですが拙者は捕まり・・・戦は未だ続く見込み・・・。」

毛利勝永はその言葉に息をのんだ。そしてしばらく信繁を見つめる。そう言えばこいつにも家族があったんだっけ。そうだよな。勝

永は家族を思い浮かべる。家族に最後にあつたのは……一年前だつたな……。

「わかった。」

「へ？」

その勝永の言葉に信繁が啞然としてしまつ。

「お前はもう行ってこい。出来れば、生きて……そしてこの戦の俺たちの事を後世まで伝えてくれ。」

「毛利殿。」

「この状況まで来れば拙者は責任者として残らなくてはならないだろう。同郷の者もここには多い。見捨てては行けない。だが……お前は生きる。」

そう言い毛利は信繁の肩をがっしりと握つた。その手は震えていた。その想いはわかる……。だが……。

「すいません。ただ、戦はもうこれで終いにしたい。」

そう頭を下げる信繁の顔はどことなく情けない若造に見える。きつと俺でもこんな顔になる……勝永はそう思った。

「だから、兵士達をまとめ、このあたりにいて欲しい。今から……戦の元凶だけでも……討ちに……行きます。そして希望だけでも……。」

「……そうか……。」

そう言つて手に持った粉を見つめる。上はこんな物だけで俺たちに恩義を売った気であるが、どうして……。こいつの方がずっと大将に見える。

「行ってこい。俺たちは戦に備えてここで門を守っている。ただ、返りにここを通つた際には見逃せないからな。」

「分かり申した。」

そう言つと信繁は戸を開け外に走つていった。その姿は……泣いている少年のように勝永には写つた。

「やはり……こう来ましたか……。」

キースは望遠鏡で下を見つめる。そこにはよりは来ているもの、見慣れない早い兵士達が走って天守閣を目指す。その中には見慣れない異形の者達も混ざっている。

「お前たち！」

「おう。」

そう言うつと部下の部隊の一部が答える。

「今日と明日で、作戦は終わりです。特に今迫っている部隊は敵の主要部隊です。これがおわれれば勝利は確定です。」

「おう。」

「行きなさい。」

そう言うつと男達は介したに向かっていった。この天守閣を破れる者は世界を見渡してもありはしない……。キースは自信を持ってみていた。そのとき、銃声が響く。戦闘は開始されたみたいだ。

「どうした！」

道案内しながら走る青海達は足を止める。数人の男達が銃に打ち抜かれ倒れ込む。

「分かりません。」

「俺が行く。」

そう言うつとしまは壁を蹴り、屋根の上に駆け上がる。そこには一人の黒ずくめの男がいた。ちょうど対角線上に位置し、青海達を狙撃出来る位置だ。

「おめえ……。」

”ほう……この様な所にまで人が来るとは……。”

そう言うつと数人の忍者達も壁を蹴り上がり、上に上がってくる。

「俺達でどうにかする。おめえら、いつてくれ。」

「分かった。信繁が来るまでは耐える。」

「了解。」

そう言うつと青海達は壁を盾にしつつ前に走る。

”あなた方は幸運だ。私のような慈悲深い使徒が相手なのだから……”

”
「おめえ、何言ってるんだよ。訳わかんねえよ。」
不思議な言葉を放つ男をじっとしまは見つめる。

「そうでした。言語はこれではなくては……。」
いきなり日本語をしゃべるのを驚いて見つめる。ちょうど彼が立っているのは屋根の先端であり、かなり高い位置にある。男は帽子をかぶり、カソックを着てはいるが、そのマントは重そうに垂れ下がっている。

「皆様……。私……」魔弾の死神”と申します。初めまして。
そう言つと立ち上がり、帽子を取り、一礼する。帽子の中から押し込められていた金髪がばさつと肩までたれる。

「そして……さようなら。」
次の瞬間視界から彼の姿はなかった。

「な！」
忍者が驚いて……周りを見渡すが姿はな……
タン！

軽い音が響くと一人の忍者がそのまま倒れて屋根から落ちていく。
「おめえら！きいつける！」

しまは神経をとがらせ……。そうだ……。信繁が……。
”まず分からない事があれば現場に行つて調べろ。情報があるほうが常に勝つ。”

しまは言われた言葉を思い出す。そのまま走つて彼がいた所まで行く。その間にも銃声が二発響いた。倒れてはいない者、手傷は負っている。

「やっぱり……。」
ちょうど彼がいた所は先っぽになっており、下には通路があった。なら……。ここを通る。だがこの先は……。通路を見るが斜線が通っている様子はない。あれ？あの跡は……。
しまが見た先には壁に空いたいくつもの銃痕がある。

「なら！」

通路に駆け下り、一気に通路を走っていくと銃声が・・・かすかに聞こえる。その瞬間、弾が跳ね返り、屋根上に走っていく。あそこにいる・・・。

” 忍びたる者・・・気配を殺し、一撃で決める。出なければ自分が死ぬと思え”

信繁の言葉を思い出す。そして刀を抜くとそつと近づく。そこにはマントに隠した銃を取り出している。今だ！しまは一気に走り、間合いを詰める。銃相手なら間合いを詰めれば！

魔弾は襲撃にいち早く気が付くと、銃の柄を握ると持ち手側で刀を受けて止め、腰に手をやる。そこには最新型の銃。片拳銃の姿が・・・。

「んなる！」

そう言うつと刀を滑らせ、銃を弾くと真横になぎ払う。胴体に当たる感触はあるが・・・斬れてはいない。次の瞬間構えた銃が火を噴く。だがそれは胴体を切られた衝撃でしまの脇をすり抜け飛んでいってしまう。だが魔弾はそこを踏みとどまり銃の柄でしまをぶん殴る。

それで横にすつ飛ばされ壁に激突する。

「やりますね。」

「おめえ・・・固え。」

そう言うつて刀を構え直す。

「あなた・・・ここまで近づけた人間は初めてですよ。ですが・・・神は我々にきつとほほえみますよ。」

「しらねえ。」

そう言うつと腰の小道具入れに手を当て、様子を窺う。腰の小道具入れは戦闘前、半蔵が支給した物で、幾つかの飛び道具が入っているが・・・

「飛び道具・・・当たるかな？」

しま自身、弓以外の飛び道具の経験は薄い。相手はあの銃とかはととても上手い。だが・・・。じりじりと少しずつ、距離を詰める

が、それは向こうも分かっているらしく距離を取る。殺気の拳銃は使えないらしく、今は銃を構えている。向こうは1回撃てば終わり。ただし、こっちも当たれば終わり。

” 神のご加護を……。”

そうつぶやくと銃を狙撃の態勢に構える。その瞬間からだが勝手に握れるだけ小道具入れの道具を持って投げつける。それはバラバラのほうに飛んでいった。一瞬視界を遮られるがそこは、さすがはベテラン。隙間から狙う……が……。

” な！”

その瞬間にはしまの姿を見失って……次の瞬間には足に激痛が走る。足元を見と足を刀でブツ刺した、しまがいた。そのまま刀を引っかくとそのまま裏に回り……壁を蹴り、跳躍すると、頭に刀を打ち付ける。この時魔弾はもう意識はなかった。そのときれゆく意識の中、腰から何か袋を取り出していた。

「危ねえ。」

落ち着いてしまは立ち上がるとじっと魔弾を見つめる。一瞬の機転でどうにかなったが、覚えていない。だが勝っている。生きている。じつと刀を見つめた。名刀らしく刀に傷は一切無い。

「帰るか……。」

そう言っしてしまは背を向ける。頭を切りつけた以上……あれで死亡だろう。次の瞬間銃の轟音が響き渡る。振り返ってみると頭から血を出しながら、フラフラと立ち上がる魔弾の姿があった。目は白目をむき、口からは大量のよだれを垂らしていた。倒れていた側には勝永達ももらった粉と同じ物が転がっていた。しまは焼けるような痛みとともに太ももを見ると足を打たれていた。

「おめえ！」

しまはそのまま倒れそうな所を身体をひねり、仰向けになる。だがそこにはよだれをだらだらと垂らした男の姿が……。その姿にしまは一瞬恐怖が走る。

「痛えぞ！」

そう言いまだ動く足で股間を蹴り上げるが、男は微動だにしない。そのまま手に持った銃を振り上げる。

「ちよー！」

そして、そのまま銃を全力で振り下ろすのを、刀で受け止める。だがそれであきらめた様子もなくまた振り上げる。このまま行けば、体力負けする！

「ぬおおおおおー！」

しまは掛け声をあげると、刀を構える。その瞬間……刀が光を発する。気が付くまもなく倒れたまま全力で胴をもう一度なぎ払う。その瞬間、この世の物とも言えない叫び声を上げ、魔弾は吹き飛ぶ。その隙にしまは壁伝いに立ち上がり、立ち上がる魔弾を見つめる。よろよろと立ち上がるその姿は……まるで死人そのものであった。

「まさか……うそだろ……。」

最早今までの知性も感じられぬようによろよると……最早……本能だけなのだろう。その姿を見ると……何かこう……切なさを覚える。そう思い刀を見つめると、刀が輝き始めていた。

「そうか……お前もか……。」

そう言い、一気に間合いを詰める。死人となった魔弾は銃を振り上げるその瞬間を狙い、一気に裏に回り込むと、首に横から刀を突き刺す。その瞬間えもいわれぬ雄叫びをまき散らす。その叫びはしばらく続いた……。それがとぎれる頃にやっとしまは刀を抜いた。もう……この死体が動き出す事はない……。その瞬間疲れと痛みがどつと押し寄せる。

その痛みの中、やってくる忍び達を見て何故かほつとしてしまった。

「こつちだー！」

そう言っつて青海達は走って天守閣を目指す。この天守閣までは敵兵を追い払う為に迷宮みたくなっているが、解き方を知っていればどうにかなる。だが……さっきの叫び声とはなんだったのか……。

「待て！」

その叫び声に青海は足を止める。後方から半蔵がやってくる。

「どうした。」

そう言うつと青海を無視して半蔵はその場にしゃがみ込む。

「やはりな。」

そう言うつと手で後ろに下がる指示を出す。全員が下がるのを見届けると、半蔵は足下にクナイを投げつける。その瞬間近くの大地が盛り上がり、棘が付いた木の板がせり上がってくる。

「これは……。」

「この先罨が仕掛けられている模様。気を付けなされよ。」

そう言い半蔵は周囲を見渡す。この類の罨は放置される事はないはずだが……。

「ならもつここは安全だよな。」

青海はある個とするのを半蔵は手で制する。

「このほかの道はあるか？」

「遠回りになるがある。」

「そっちに行つてくれ。後続部隊の為にここは拙者がかたずける。」

「分かった。行くぞ！お前ら！」

そう言い、青海は後ろに走っていった。半蔵は一人、近くの石を持ち上げると、板の向こうに投げつける。石の重さで落とし穴の天幕が落ちていく。

「やはりな。」

「これは……一人残つて残業かね。」

上の方を見ると背を丸めた一人の男が屋根の上に立っていた。その男はポルトガル語でつぶやいた。

” 仕事と言うより……お前を待っていた。 ”

半蔵は言葉を返した。彼自身ポルトガル語を聞く事は出来たが、しゃべる事は出来なかった。それはしゃべる機会がほとんど無い為だが、海外の書籍とかを調べる必要性があった為、発音などの言語だけは覚える事が出来た。

”わかるか・・・？いや偶然か・・・。”

だが半蔵自身そう詳しくは分からない。大体の内容までしか把握していないかった。

”だが、覚悟してもらおう。このペド口。こんな所では死なぬ！”

そう言うのと不意にペド口は腕を突き出す。その瞬間半蔵は刀を抜き、後ろに飛び退く。

それを見て一瞬ペド口は腕に付いたアームボウを撃つのを躊躇う。だが奥の手は撃たねばそれはそれだ。ペド口はそのまま屋根伝いに去っていった。このあたりの塀は高く、しま達がいた所よりも高い為、ここは上る事は出来ない。曲がり角から先はあの男の罠がたくさん仕掛けられているのだろう・・・。ならあいつのいた通路・・・。屋根が安全地帯か。壁の高さは・・・5間（9m程度）ほどか・・・。壁を見つめるとつかかりも無く、上れそうにはない。だが・・・ちよつと曲がり角の奥には門がある。手持ちを確認する。伊賀でよく使う穴つきクナイが6、信号火薬が4、刀が1、身体に巻いた縄が5尺・・・。後は火打ち石とかか・・・。基本的な物しか持つてこなかったのが悔やまれる。無論信号火薬を使えば、合図と勘違いして味方が撤退しかねない。使用は出来ない。相手は大方・・・。曲がり角にも罠を設置している。半蔵は上着を脱ぐとトラップの木を引っこ抜く。ある程度軽さがあるが、これでいい。服で橋を結ぶと簡易的な分銅ができあがる。それを持って曲がり角の向こうに板を投げつける・・・。何も反応はない。曲がり角からそつとの覗くが・・・。反応はない。夜目がある程度効くのはこういう時に有利だが・・・。そのまま板を構えそつと近づく。ここでないなら門の前・・・。屋根を見る・・・。何かを設置されている・・・。木がする。無論門は閉じている。だが直線も少しある・・・。なら・・・ここに。半蔵は先ほどの板を盾に構え思いつきり地面に打ち付ける。次の瞬間地面に穴が空き、弓が飛んでくる。それを勢いそのままに地面に伏せ、倒れる事で回避する。だが、木の板は下に落下していく。穴は深く、2町（3・6m）以上はあるよう見える。長期戦を覚悟しているよ

うだった。

「流石に巧者か。だがこれで終わりだな。」

そう言う門に近づくと木に触る。固い木が遣われてはいるが、これでもどうにかなる。

次の罾は門を破った後だ。ならここが最適だ。半蔵はクナイを力一杯木に叩きつけるすると少し刺さる。それを蹴飛ばし深く食い込ませた後、上下に振り確認する。よし、揺るがない。

そう言う刀の鞘をかけ、足場にして、クナイの上に乗る。そしてその鞘をクナイの穴に引っかけると壁とクナイの間に橋を造る。そしてそれを足場に一気に駆け上がる。そして屋根に付くと帯で鞘を回収した。下には刺さったクナイがあるのみだ。上を見ると・・・隠れる所はあるみたいだ。天守閣を見るとそこには大きな人形の何かが鎮座しているが・・・今はあの罾師をかたづけねば進行できない。屋根を伝って半蔵は走っていく。しばらく進むと何か瓶らしき物が飛んでくる。無理矢理足を止める。ちょうど間に挟むように液体がばらまかれる。目の前を見るとそこにはペドロが立っていた。ここまで来るとは・・・クソ！化け物か！”

「よくわからぬが・・・驚いてはいるようだな。」

半蔵は冷静に構える。無論。罾師の事だ。一筋縄ではいかない。だがこれは・・・足をすりつつ、その液体を旅の先端でこする。やはりぬるぬるする。足止めか、滑る物か・・・当然、飛び越したい所だが、今までと様子は違って・・・目の前にはペドロがいる。無論先ほどと同じく腕を突き出し構えている。今・・・手に持っているのは鞘と刀。飛び道具はないが、先ほどの液体の正体がわからぬ以上は・・・どうしようもないか・・・大方あの手は飛び道具・・・なら。

”死ね！”

その掛け声とともに腕から何かが発射される。そこまでは分かっていた刀の鞘を大きく横に振り、一射目を鞘で弾く。だが二射目、三射目は連続で発射された為、二射目は胸に刺さり、三射目は肩に

当たる。

”よし！”

只、少しくらついただけで、半蔵に変化はなかった。そのまま大きく跳ね、液体を飛び越え、勢いを殺さぬように飛び込む。そのまま懐まで飛び込むと手に持った鞘で、胴を横凧にすると、そのまま勢いを殺さず太ももに刀をブツ差す。ちょうど帷子も下半身まではなかったようだ。自身の鎖帷子は少し、細かく目を切ってあったので、ぎりぎり貫通はしないが、肩に刺さった矢を引き抜く。傷の具合は軽傷だが。

「ただでは殺さぬ。」

厳しい目で目の前の男を見つめる。

「ただで死なぬ。」

そう耳元に声が聞こえる。顔を上げるとペドロが痛みをこらえながら懐から瓶を取り出すと足下に落とす。

「地獄へ道連れだ・・・いや・・・俺だけは天に召され・・・。」

そう言うのと腰のポシエットから袋を取り出す。半蔵も流石に匂いで何をするのか理解する。これは油か！奴はこのまま焼身自殺する気だ。俺を巻き込んで！だが・・・

「そうはさせるか！」

離れようと踏み込もうとするが、足下の液体がぬるぬるする！これは・・・。周りを見ると、屋根伝いという事もあり、周囲は高さはかなりだが・・・それ以上に緩衝材さえない。このまま落ちれば死ぬ。そのまま顔面に肘をぶち当てるが・・・まだ強くしがみついている。

「貴様！」

「我らは神敵を倒す為なら命も惜しまぬ！お前が死ね！」

半蔵は無理矢理身体を引きはがすと足をねじ込み蹴り出す。そしてバランスを崩したペドロはそのまま、屋根から転げ落ちて・・・落ちた。そして、点火剤に火がつき・・・そのまま遺体は燃えてしまった。

「……あの者は……もう……。」
いくら武士でも命は惜しむ。なら、彼らは南蛮の為か？それとも
淀君の為か？その燃えさかる遺体を見て半蔵は考えるしかなかった
のだ。

「こつちだ！お前ら！」

青海は走って大回りをしてきていた。無論こちらのほうが遠いが、
畏だらけよりはいいが……裏門まで走るのはかなり体力を使う。
それは皆そうみたいではあるが……前を見ると兵士達が集団で立
っている。だが……青海は微妙な感じがしていた。今までの通路
で兵士を……一切見かけなかったからだ。

「お前ら……どうしたんだこんな所で……。」
「うー。」

そのうめき声を聞いた瞬間 青海はある事を思い出し、武器をか
める、その青海の構えに後ろの部隊も構える。

「皆さん。ダメですよ。こんな夜中に徘徊しては。夜は危険ですか
ら。」

声のした方を見ると裏門の見張り台の屋根の上に一人の黒ずくめ
の男が立っている。あの男は覚えている。

「宣教師のカスヤロー！」

青海が怒鳴りつける。だがそれに意を介さぬように本を持った男・
・アルサレムはじつとした青海を見つめる。

「カスヤロー。何という汚い言葉を。聖職者ならば……。もつと
きれいな……。いや……。あなた方にそれを要求するのは無理でし
たな。」

そう話している間に後ろのほうから叫び声が聞こえる。青海が
後ろを見ると、後ろの部隊の人たちが、兵士らしい物に襲われてい
る。

「野郎ー！！！」

青海は何か投げようと周りを見るが……。何も持っていない。

「名前！名乗れ！」

「名ですか・・・折角ですから・・・私は・・・。」

そう言っている間にも兵士らしい物が忍者達を襲うが、後続部隊である妖部隊が引きはがしにかかっていた。

「私は！トヨトーミ・ヒデオーリ！」

その声に前のほうにいた忍者達が驚愕する・・・。

「です！」

「んあわけないだろ。あんな金髪のどこが日本人だよ。」

アルサレムの髪は金髪で、確かに日本人に見えない。青海は突っ込みを入れるが、前の門は閉じている。ここは後続部隊が槌を持ってくるかしないと・・・。

「ですが・・・私は戦闘は苦手です。だから・・・。」

そう言くと、城の奥から何かが空を切り・・・。

ズドオオオオオオオオオン！

激しい音を立て、門があつた所に門の代わりに大きな人形・・・門よりも大きい西洋の鎧を着たようなからくり人形が立っていた。

「彼に代わりに戦って貰います。では。」

そう言つとアルサレムはきびすを返し、走つて去つていつてしまった。

「てめえ、待て！」

そう言つて追いかけようとするが、人形が不自然に動き出し、こちらを見つめる。明かりをつけてはいないが、動くかとは思つたがこれは！その無機質の顔につい恐怖を覚える。後続の部隊は死人に囲まれている。だが、実際青海の片腕は先日庇つた傷が治されてはいる物の、今はマヒで動かない。この状況はつらい。人形は動き出すとこちらにも目をくれず立ち上がると敵と味方が交戦しているあたりに腕を突き出す。次の瞬間青海の耳に轟音が響く。振り返ると前衛部隊が倒れている・・・奴は腕から銃を撃つのかよ。

「これはこれは大きな人形ですなあ。」

そういう声にとなりを無垢と、戦闘前に妖怪立ちに説明を行つて

いた”お頭”と、お吉の方がいた。

「ですがこれ……。」

青海は見つめる。予想が正しければ……。まだ先にも死人がいっぱいいる。

「こいつをブツ倒せば……いんだな。」

トリさんが闘争心にあふれた目で、じっとあの大きな人形を見つめる。

「最低でも被害はない。」

青海はじつと歩き始める、その巨体を見つめる。妖怪を見た後だからあまり驚かないが、これはこれで大概だと思った。

「行つてくで。オラがあいつを止めるだ。」

「すまん。頼んだ。」

そう言つと、見てないのを確認すると青海は一人、奥へ走つていく。

「ほんとに……頼むぞな。私は……あの宣教師とやらを追つてな。」

そう言つとお吉の方は姿を消した。人形は歩き始め、更に奥に向かう。奥には後続部隊が戦闘中だ。トリさんは走ると手短に近くにある足をぶん殴る。……揺らぎはするが……効いている節はない。だが注意を引きつけるには十分だった。

「がんばれー。」

奥から老人の声が聞こえる。陰に隠れているらしく、あの”お頭”には助けて貰えそうにない。身体は今まで見たどの妖怪にも……そう言えばいたかもしれないが、ここには入れなかった。だからオラしかない。

「事のついででけんど。おめえはひつたおす。」

そう言つとこつちに来て軽く教わつた格闘の構えをする。そして身体を弓のようにしならせると、力一杯同じ所を蹴る……。また効果がないようだ。蹴つた足が痛い……。まだ……。と思つている討ちに人形の腕が大きく振られ、しまにぶち当たる。体いっぱいを

横幅だけで覆うような腕はそのまま壁まで行き、壁にトリさんを叩きつける。そのまま腕を引っこ抜くと、壁いっぱいにはビビが入っている。だが、それでもトリさんにはあまり貴意邸はいないようだが……。そう言えば除霊の水とか言ったのが連中に聞くなって言っただけ……。でも……。オラの体にはそう言う物を入れる所がない。「おめえ！水！あるだけか？」

後ろにいる”お頭”に大声で聞く。

「あれか……。あるぞ！」

そう言い、”お頭”は懐から水筒を持ちだした。そしてトリさんに投げつけようとする。

だがそれを人形は見ると、腕に付いた銃ではじき飛ばす。水筒はかろうじて中身がはじけ飛ばないものの、遠くまではじき飛ばされる。他は……。なさそうだ。

「これだと、このクソ固いんの、殴んなきゃなんないだな。」

元々こういうのは苦手なんだけどな。最後の言葉を飲み込みみじつと見つめる。敵は大きく、そして固い。どうすればいいんだろうか……。

”ここまでこれば……”

天井伝いに走り、アルサレムは天守閣側を見つめる。天守閣は最上階以外は狭く、戦闘には向かない。だからここが事実上の最終決戦だ……。あいつがいる事を除いて……。

「ふうむ……。やはりかのお。」

その声に振り向くと一人の女性が通路上に立ちはだかる。そのはだけたような着物を着た女性はいかにも不潔で、彼が嫌いなものだ。「お主よのう。あの人形とかを操っているのは……。」

「そう思うのかね。」

そう言いアルサレムは書を取り出し、距離を取る。彼自身、戦闘は経験しているが……。格闘は苦手だ。

「まずはお主……。じゃのう。」

そう言う時もの裾から扇子を取り出し広げる。

「なら、先に行かせて貰おう。」

アルサレムはそのまま、不思議な言葉を紡ぐ。それと同時に、何かお吉の方の頭が痛くなる。お吉の方は頭の痛さに耐えられず、片膝を付く。

”やはり・・・悪霊か！”

アルサレムは代々伝わる、聖書の退魔頂を詠唱する行為に専念する。そしてそのまま少しずつ距離を詰める。

「貴様・・・何を！」

お吉の方は憎々しげにアルサレムを睨むが、それに動揺する要素はない。

”さてこのまま一気にトドメを”

そう思いアルサレムは服の内側に忍ばせた、聖別された短剣を取り出す。

”かあああああつ！”

その大声にびくりと体を震わせる。アルサレムが声のしたを見つめると、通路にいた青海の声だった。

「貴様！またか！」

「やつと一対一だな。この腕の借り、帰させて貰うぞ！」

「一対一ではないが・・・これは・・・効くのお。」

頭を抱えながらお吉の方が立ち上がる。

「あの男！クソ野郎が！」

アルサレムが咆え猛る。

「汚ねえな！お互い！」

そう言い通路の奥に青海は消えていった。追うには下に降りなくてはならない。そう思った次の瞬間アルサレムは体を反らす、その元あった所を大きな何かが通り過ぎる。

「奴には助けられたわ。」

攻撃の根元を見ると、お吉の方が真剣な顔でこちらを睨む・・・。これ・・・尻尾か。

「お主は不思議な術を使うようだのう。」

その言葉に先ほどまでの余裕はない……がこちらも！

「ここで……終わってもらおう。」

そう言うつと尻尾の数を増やし、まるで槍のようにアルサレムに向ける。だがアルサレムに動じた様子はないが……いや……小声で何かを言っているように見える。

「ここまで来て何も無しか……つまらぬのう。」

お吉の方は尻尾を振り回し、アルサレムを薙ぐ！……ように見えだが……尻尾はそのまま見えない壁に弾かれ……またもお吉の方に激痛が走る！

「早々容易く私ができるか！」

アルサレムはじつと向こうを見つめる。流石に聖別結界は効果があつたようにも思える。

「お主！退魔師かあ！」

「我らに敗北は無い！特に悪魔ども相手でも相手に負ける事なぞ！決して！けっくつして！許されるものではない！」

アルサレムは叫ぶと次の儀式の準備を始める。向こうは結構知能がある……なら対策は結構早いはず。次は……。

「ならこれ！」

お吉の方は声を荒げると尻尾を回転させ始める。だがそれも、結界で弾かれていく。

”どうする！あれを突破できるのは……！ん！”

お吉の方は思いついたように服の間から刀を取り出す。大太刀。信繁から預かったものだ。そう言えばこれ、真田家伝来ならあれも貫通できる！だが……。ふつうでは……。

「貴様！落ちろ！」

そう言うつとお吉の方はわざと尻尾を回転させたまま、結界に何回も叩きつける。そのたびにお吉の方には衝撃が走る。だが……衝撃は蓄積し、徐々に反動は小さくなっていった。

割れたと思い、貫通した次の瞬間、その尻尾を片手で受け止める。

「なっ！」

「神のご加護を！」

アルサレムは受け止めた尻尾を掴むと無理矢理引きずり寄せる！
「だがなあ！」

お吉の方が叫ぶと余った尻尾をからませ、壁に無理矢理しがみつ
く。それを見たアルサレムは尻尾を手放し、聖書を開く。だが、次
の瞬間捕まれていた尻尾で横道を打ち据える。

その衝撃で、屋根からはじき飛ばされそうになるが、それを無理矢
理踏みとどまる。もう少しで崖みたいに高い・・・この城壁から落
ちる所だった。

「この程度では沈まぬ！」

「お主・・・。」

お吉の方はじつと構えるしかない。尻尾に痛みが蓄積し、そんな
に攻撃を放つまでには行かない。突風も・・・もう種は少ない。
この致命傷をあいつにぶつけないと・・・。

「んとに・・・固いだ。」

トリさんは息を荒くしてじつと人形を見つめる。時々手から何か
を出して攻撃するが、それはどうにか回避してきた。だが・・・ど
うにか人形の意識はこっちは向いているが、これのお陰で進軍も
出来ない。もう、あの鋼鉄を叩きすぎて、手も足も痛い。だが、向
こうはまだピンピンだ。

「ぬおおおお！」

奥から叫び声が響く、この声は・・・。

「お前ら！ここを始末したら、妖怪達は退却しろ！後の部隊は！俺
と上に行くぞ。」

掛け声の先には信繁の姿があった。だが、まだあの人形が立ちふ
さがる。信繁は構えるが気にはしていない。今まで攻撃を続けた
トリさんの方を向く。

「おめえ！こんな所で何しってた！」

トリさんは叫ぶと信繁が振り向く。

「あんだこそどうして！」

「んだ。こいつ。すっげえ固ってえだ！」

「だろうな。」

手に持った明かりから照らし出されるあの巨体は大きく、西洋の鎧人形を模した形は・・・いかにも固い。だが・・・！

「いけるか？」

「んだ！」

体を無理矢理引きずり起こし、人形を見つめる。

「俺が攻撃を誘う！その隙にあいつの体をつたえ！頭を狙う！」

「んだ。」

トリさんは二つ返事で頷くと、機会を狙う為に後ろに下がる。それに合わせ、手に持っていた明かりを地面に起き、この時の為に用意した背中に背負った武器、村雨作大業物 大太刀”霧風”を抜く。そして構えると明かりを蹴って人形にぶつけるが、効いた様子は無い。だが気をひくには十分で、こちらの方を向く。そして人形は大きく腕を振りかぶる。

「よし！」

そう言つと刀を上段に構えたまま、一気に掛け出す。それに対して振りかぶりながら腕を振り下ろすが、予定外の動きという事もあり、少しバランスを崩しつつも、腕のお陰でぎりぎり立っている。

「今だ！」

信繁の掛け声に反応しトリさんは一気に腕に飛びつき、一気に肩口まで駆け上がると全力で、少し小さめな人形の頭を勢いをつけて蹴り飛ばす……。だが・・・頭も固く、揺るぐ事はなかった。

「んだあ！？」

トリさんは驚いてみるが、一切揺るぎもしない。

「ならば！」

信繁は背後に回り込むと、全力で、脛の関節を狙う。だが……。衝撃はあり、ダメージを与えたとは思いが……。それでも……

倒れるまでには行かない……。人形は後ろに回った敵を倒そうと腕を振り上げようと……。人形が力を込めて振り上げようとするが、腕が上がらない。

「やっとな、準備が出来ましてな。」

ちやうど人形から見て正面から、老人が一人出てくる。その老人は”お頭”だ。

「おめえ？」

「やっとなの準備が出来ましたのでな。ここまでの時間稼ぎ……。感謝いたす。」

「お……。お頭。」

”お頭”が二人に一礼する。信繁も急いできて、”お頭”の気配を感じる事は出来なかった……。そこまでに息を潜め、じつと準備していたのだ。人形は餓死を振り上げ、蹴ろうとしても、足に根が絡みつき、動かす事が出来ない。

「後一本！壁でいいので押さえてくだされ！」

「了解！」

そう答えると信繁は振りかぶり、わざと背中を刀でブツ叩く。それに飯能市振り返る間にトリさんが、人形の肩から飛び降り、勢いをつける。

「これでえ！終わりだあ！」

跳び蹴りで反対側の腕が壁にぶち当たる。そしてそのまま、いつの間にか、壁に這わせた根っこがそのまま絡みつき……。人形の腕を縛り付ける。人形は動こうとするが……。もう……。動けなくなつた。

「すまない。ご老人。」

信繁は一礼する。大方このまま行けば、持久戦で負けていただろう。

「私らはいい。お主らは上に行くのじゃろう。わしらはここで後続を断つからの。行きなされ。」

そう言うと、その頃には死人達から逃げおおせた忍者部隊が何人

が集まる。

「分かり申した。行くぞ！お前ら。」

そう言い信繁は奥に走っていった。トリさんはじっと人形を見つめる。

「おめ……すげえな。」

「ふん……これは足止めしかできんわ。どこかでこいつに術を掛けた馬鹿がある。ワシもここで足止めだから。だからお主。」

「おらか？」

「トリさんは意外そうに”お頭”の側に寄った。」

「朝まで足止めすればいいのだから……朝まで護衛……頼むぞ。」

「んん。わかっただ。おめえの側にいれればいいんだけろ。」

「そう言い、トリさんは老人の真横に座る。」

「そうだな……それでいいな。おもしろいのお。お主は。」

「んだか？」

トリさんは不思議そうに、老人の顔を見つめるのだった。

「さて、お互い……息が整ってきたようすな。」

アルサレムじつとお吉の方を見つめる。

「だの。だが……お互い早々こんな所で油を売っているわけにも行かぬのでのオ。」

お吉の方は、尻尾をわざと回転させ、視界を遮りつつも、相手の出方を見計らう。最後の言っただけは見破られるわけにはいかないしびれもそろそろとれてきてはいるが、向こうもつかつには仕掛けてこない。

「でも、お主のほうに時間があるまい？」

「そうでもない……。」

アルサレムはじつとあいてを見据える。一人では手に負えないのは分かっているが、お互い、トドメの一手は握っているように思える……だが、それにはちと手は足りぬ。なら……あいつが来な

ければいいが……。アルサレムは聖書を開くと詠唱を始める。今度はお互いに聞こえる大きさだ。

「させるか！」

お吉の方が尻尾を一本。大きくなぎ払う。だが、それを寸前でかわして、詠唱を続ける。先ほどの詠唱で身体感覚を強化した私に、あれをかわすのは造作もない。アルサレムはそのまま距離を詰めると、お吉の方の頭に激痛が走る。これは……。苦手だ！ またもお吉の方が頭を抱える。しばらく詠唱を続け、すぐ側まで近寄ると、詠唱を続けながら懐から聖別された短刀を持ち出す。

「これで！ 終わりです！」

「喝！」

声に振り返ると……。またもあの男の声だ！……。だが今度はあいつが屋根に上がっている。

「ふん。同じ手を食うほど愚かではないわ。」

お吉の方は苦しそうに見つめる。よく見ると尻尾が一本だけだらりと、下に向かっていている……。これか！ 下に垂らした尻尾で青海を誘導し、上に上らせたのだ。

「今度こそ。おめえのような奴に天誅が下せるつてもんよ。」

青海は残った片手で、杖を構える。

「この異教徒が！ その程度で勝ったと思うな！」

今度こそ構えた短剣を振りかぶる瞬間！ 何かが来る殺気を感じ、首を少し横にずらす。そこには刀が、頬をかすめ……。腕に浅い傷を付ける。

「ちい！ 使い慣れぬ物なぞ！ 使うものではない！」

お吉の方がうめく。手に持った刀を頭めがけ突き出しては見るが、先ほどの頭の痛みもあり穂先がずれるが……。それでも傷は与えたようだ。そのまま、一度刀を引き抜くとお吉の方は大きく刀を振りかぶる。

「これで！ 終わりだ。」

体を傾けるように切り裂こうとする瞬間！ 腕に激痛が走る。その

痛みで刀を手放してしまふ。

” 局長！”

その声に方向を見ると、屋根伝いに瓶を持った黒ずくめが走ってくる。

「何奴！」

お吉の方は尻尾をとがらせ、瓶を持った男に刺そうと向けるが、それをサーベルを抜刀し、切り払う。斬れるほどではないが、その傷みに顔をしかめる。その隙をつき、アルサレムが距離を離し、局長はアルサレムのすぐ側に来る。

「局長！」

アルサレムは慌てた声を上げるが、気にしないように、庇うように身構える。

” 撤収する。必要なものは全て運んだ。オミルケアの仕掛けも終わった。後は……”

” ……了解しました。キース。”

そう言うアルサレムは、じっと青海達を睨む。

「お主も……退魔師か？」

お吉の方が、警戒した顔で二人を見る。あの痛み……あの男達独特のものだろうが……。

「それは……関係ないな。今は……。お互い……。」

そついい、瓶を片手に、片手にサーベルを持ち、構える局長。

” いけ！”

その掛け声とともに、アルサレムは全力で逃げていく。

「逃がすか。」

手に持った刀をほおり投げると尻尾に掴ませ、アルサレムを狙う。だが、それはキース局長のサーベルに弾かれる。その距離を詰め、青海が杖でぶん殴ろうとするのを、キースは返す刀ではじき飛ばす。

「さて……。お前らの相手は出来ないようだが……。」

そつ言いキースは下を見る。下には幾つかの忍者達と信繁、半蔵の姿も見える。彼らは走って、天守閣に向かう。

「ここでお主達を足止めする．．．いや．．．される側か．．．されるわけにはいかないのではな。」

その頃にはアルサレムの姿はない。キースは少しずつ距離を取ってはいるが、お互い攻めきれぬ環境にはなかった。

「ちと．．．不利じゃのお．．．。」

お吉の方はじつと尻尾で牽制しようとするが．．．相手の腕は高く、うかつに踏み込めば、逆に喉元が突かれかねない。さっきの痛み．．．あれは退魔用の刀だろう．．．。

「だな。」

青海もじつと様子を見るしかない。両腕が動けば行けるが、今は手負いだ。

” やつと．．．つきましたよ．．．局長！”

その声にキースは、青海達の後ろを見る。その視線と声にお吉の方が振り返るとそこには満身創痍のエミリオの姿があった。エミリオはここまで、忍者の追っ手を振り切り、必死の思いで大阪城まで帰ってきたのだったが．．．。

” 突破するの．．．疲れちゃった。”

その姿にお吉の方達が驚いていると、その隙をつき、キースが目散に逃げる。

” え？”

” 命令だ！食い止める！では。”

” ちよ！”

そう言いキースは姿を消した．．．。後に残ったのは満身創痍のエミリオと敵が二人である。

「あはははは．．．。」

「とりあえず．．．おめえ．．．。運がなかったな。」

「ワシは後を追うから．．．任せた。」

そう言つとお吉の方は尻尾に持たせた刀を手に持ち替え、走っていった。後に残ったのは青海と．．．エミリオだけだ。

「あんた．．．あの時のおっさんか．．．。」

エミリオは腰の短刀を抜く。彼に残された武器はもう……この一本しかない。

「最後には丁度いいかもね。」

「お主……。」

青海も構えるが……片腕が使えないのが痛い。この男は強い。だが相手の傷は多く、時々小刻みに震える分、傷は深そうだが……。あの時は庇う相手がいたが。今度はどうにか出来る……。気がする。エミリオは構えているが……。動く気配がない。

「もうやめだ。ワシは行く。」

青海は構えるのをやめ、背中を向ける。

「どうして……?」

エミリオは構えを解かず、呆然と見つめる。

「ワシは……お前のような奴は討てん。」

その言葉に触発されたようにエミリオは全力を振り絞り、距離を詰めて切りかかる。それを振り返りざまに杖でなぎ払い、吹き飛ばす……。一瞬の反応だった。するつもりはなかった。そのままはじき飛ばされたエミリオは屋根から落ち、通路に直撃する。

”そんなお情け……。いらないわよ。私はあの人達に生かされ……。殺された。だけよ。”

エミリオは手をかざし、空を仰ぐ、夜は暗く深い闇だった。

”神様……。今度は……。いい人生だと……。いいな……。こんな私でも生きられる……。”

エミリオの手がぱたりと下りる寸前……。手を合わせ合掌する青海の姿が……。見えた気がした……。それがエミリオが最後に見えた視界であった。

「半蔵！」

半蔵は走って信繁達を見る。そこには少数ながら忍者部隊を率いる姿があった。

「お主！大丈夫か？」

半蔵は走るペースを速めると、信繁に追いつく。もうすぐそこは天守閣だ。大阪城の城内は少し狭く、刀とかを振り回す事は出来ない。

「まあな。作業に入ってくれ。俺は迎えに行ってくる。」

「了解！」

そう言つと城の扉に手を掛けると一気に蹴り破ろうとするが……すんなりと空いてしまう。

「行くぞ。」

半蔵は合図をすると、忍者部隊は、地理じりとなる。この中にある貴重品や資料を持ち出す為だ。半蔵がその作業をしている間に信繁は一人階段を掛け上がり、秀頼の部屋を目指す。

「秀頼様！」

しばらく駆け上がると、秀頼の部屋を見つけ、豪華なふすまを開けると、そこには眠そうな目をこする秀頼と……隣には千姫の姿があつた。

「信繁……。」

秀頼はじつと信繁を見つめる。

「無理を承知でお願いに参りました。」

「脱出……なの？」

秀頼の答えに千姫がびくっとする。覚悟はしていたがと言つ顔だ。

「はい。」

信繁は即座に頷く。

「どうして？」

「……明日にも総攻撃が始まり、この城は落ちましょう。城が落ちれば、あなた方は総大将とその一族という事で……処刑されましょう。ただ……内府殿は内心それを嫌つておいでです。それなら、ここで脱出すれば血族を絶やさぬ為にも……脱出すべきでは……。」

信繁は頭を伏して願つてはいるが、一刻を争うものだった。

「……でも。」

そう言つて秀頼は上を見つめる。祈願をする為に天守閣の戸を閉ざし、籠もつていた母親がいた。しばらく考え、秀頼は信繁の方を向く。その顔は・・・今なら男の顔・・・に信繁は感じられた

「分かった。だが、脱出なら・・・。母も一緒じゃ。今から仕度をする。母の所に行つてくれ。」

「・・・了解しました。」

信繁はそう言つと立ち上がり、足早に部屋をさる。ここから正念場だ。あの淀君の事だ・・・。そう思いながら、すぐ上の階段を上る。この大きな入り口の向こうが・・・。

信繁は開けようと戸に手を掛けるが、開きそうにない。無理矢理蹴破るとそこには帳と蝋燭の明かりがあつた。すぐに膝を突き頭を下げる。

「どうした？」

「は。淀君様・・・。」

信繁はかすかに頭を上げる、視線の先に影となる人物がいる、無論声はのど気味ではあるが・・・少し声が野太い。頭を下げながらも片膝をつき、いつでも動けるようにしていた。

「最早、明日には総攻撃が始まり、敵も押し寄せましょう。だから・・・。せめて・・・脱出を！」

「何を言うか！」

淀君の怒声が響く。

「武士たるもの！最後の一匹に至るまで！わらわを守るのが仕事だろつが！踏みとどまれ！戦え！」

「それは・・・。」

信繁は怒りに震え、切り裂こうとさえ思った。だがここで逆らえば、秀頼様の悲しむ顔が・・・。

「わらわが良いと言つまで退却は許さぬ！勝つてこい！」

「だとしても・・・。」

「そのような・・・そのような事を言っているから！侍はふ抜けるのだ！あのお方の言つた事なぞ・・・！もう我慢がならん！このわ

らわが出て！全てを倒す！」

そう言つと向こうで立ち上がった音が聞こえるが……。妙に音が大きい。少し信繁は刀を持ち、身構える。さつきを向こうから殺気をひしひしと感じているからだ。

「まずは！その軟弱者！貴様だ！」

次の瞬間刃風が、帳の向こうから飛んでくる。それを持つていた刀の鞘で受け止めるとはじき飛ばす。蠟燭の明かりで照らされた帳の向こうの腕は太く……。まるで丸太を見るようだった。その手に握られた薙刀は少し小さめに……。見えるだけだ。その手の大きさを分らなかったが、通常の薙刀の物だった。

「これは……。おもしろい。キース局長も粋な事をしてくれる。

あの薬……。こんな効果か……。これなら……。誰でも勝てるぞ！これなら……。徳川を屠り、全てを滅ぼせよう！」

そう言つて帳を退いた姿は……。元より高い身長であつたの淀君の身長を更にかなり高くし……。七尺（196cm前後）を軽く超しているように見える。その大きな体いっばいの肩幅と筋骨隆々な有様はまるで異形そのものであつた。いままで確かに味方に妖怪を見ていたが、それとは違い……。威圧感さえ感じる。その体に丈が短いながらも十二単をまとう姿はまるで、悪鬼羅刹を思わせた。

「これは……。お主……。本当に淀君か？」

唾をのみ、じつと様子を見るが、その身の丈と同じ大きさの薙刀はいかにも軽そうで、木の葉を散らすようでもある。

「このワシが……。太閤が妻、淀君なるぞ。無礼な……。やはり……。その無礼者はたたつ斬るべきだな。」

そういうと、軽く……。淀君にとっては軽く、薙刀を横に払うその瞬間、信繁は刀を縦に構えると、そのまま入口を超し、窓を突き破り、外まで突き飛ばされてしまう。外まで出た所で、屋根の瓦の隙間に刀を差し、ぎりぎりの所で落ちるのを踏みとどまる。

「これなら、この力なら！これなら！」

そう言い、淀君はゆっくりと破れた窓から外に出る。月が煌々と

輝き、大阪城を見下ろす。

「お前のような・・・お前のような奴がいるから！戦は終わらない！」

信繁は刀を構え、淀君を睨みつける。月明かりに照らされるその姿は最早、元は女だと誰も・・・分かりそうになかった。だが、この状態・・・下の増援が来るかすれば・・・どうにかなるが・・・。天守閣の屋根は道伝いの屋根とは違い、傾斜が急で戦闘には向かないがどうかしないと・・・。

「戦・・・そんな事なぞ関係ない。勝てばよいのだ。」

その月明かりの中、上からじつと淀君が下にいる信繁を睨みつける。

「拙者もせつかく拾った命。捨てるわけには行かぬ。」

そう言い信繁は構えるが・・・正直自信がない。

「ふん・・・。貴様のような男が何を言うか！」

その掛け声にまた淀君は雑刀を振るおうとするが絹の足袋をはいっていた為、バランスを崩し、そのまま落下してしまった・・・。信繁は啞然となり下を見つめると、一番下まで落ちた淀君は、さも何もなさそうに立ち上がる。・・・ここは天守閣で、向こうは城の入り口だぞ・・・。信繁もあまりの事に啞然としてしまう。だが向こうに怪我らしい怪我はない。

「貴様！」

周囲全体に響き渡る大声で、屋上に声を掛けると、そのまま飛び上がり・・・、近くの屋根の上に飛び乗る・・・。何という人外・・・。信繁は立ちくらみをしてしまいそうになる。こんな事が出来るなら・・・本当にとつとつと、戦場でも行けば活躍できたもの・・・。淀君は次の屋根の上ろうとするが、体の重さが災いして上れそうにない。あきらめると、下におり、一気に階段を駆け上がる。その間に体制を整えるべく、信繁は天守閣に入り込む。

もう・・・普通の戦術で太刀打ちできる人間ではない・・・。なまじつか妖怪ですらないのが更に問題だ。しかも天守閣はそれほど大

きくない為、太刀を振り回す事は出来ない。太刀をしまつと脇差しを構える。だが・・・。横に振る程度ならどうにかなるが上段に構えられないここもまた・・・不利だ。なら・・・獣狩りか・・・。じつと脇差しを逆手に持つと体のバネを生かす構えをし、階段を睨みつける。その間も轟音を立て、階段を駆け上がる音が天守閣のここまでも聞こえる。

「軟弱者！」

その声が出たから響く中、じつと中央で信繁は待ちかまえる。そして、淀君の頭が見えた次の瞬間、一気にかけ出し階段に飛び込む。無論淀君がいるのは分かっていた。だが、その顔面に飛び込むと無理矢理飛び上がり、肩を蹴りつけ、全体重を押し込む。突然の事で淀君の体がぐらつと来て階段から転げ落ちる。信繁は手を広げて橋に引っかけて根性で落ちるのを踏みとどまると、そのまま下を見つめる。まともに戦えば駄目でも、不意を突くならいくらでも出来る。下を見つめると少し頭を打ったらしく呆然とする淀君の姿があるが・・・。

「ア・・・化け物・・・！」

横を見ると秀頼の姿があった。秀頼は驚いて千姫を背中に隠すと刀を抜いて構える・・・。構える刀は・・・震えていた。

「あの軟弱者が・・・。」

淀君が起きあがると、ふと気になり、横で聞こえる刃がかたかた鳴る音の方を向く。そこには・・・刀を構えた秀頼の姿があった。

「お前！母様をどこにやった！」

秀頼は体いっばいに大声を出す。その姿に淀君は呆然としてしまふ。

「秀頼・・・ワラ・・・。」

「この化け物！母様は・・・どこだ！」

一瞬空気が凍り付くの信繁には分かる。確かに通路は夜の為薄暗いが・・・月のお陰で、姿が見えぬほどではない。だがそれでも勘違いさせるほど・・・姿が変わっていたのだ・・・。淀君の顔から

頬いっぱい涙がこぼれ落ちる。

「鏡……鏡はどこじゃ。」

その声に背中に隠れていた千姫は後ろを指さす。淀君は秀頼達を無視して、奥に行つてしまふ。その隙をつき、信繁が階段を下り、秀頼達の元へ走る。

「信繁。大丈夫か？」

「いや……まあ……。」

軽く二、三回頷くと、奥の様子を見つめる。奥では、姿見鏡をじつと、淀君は見つめていた。当時姿見鏡は貴重で、奥女中や、城の奥方に人気の為、城に設置されている事が多い。

蠟燭の明かりや、月明かりに照らし出される自分の姿を見た淀君は絶望していた。これでは……化け物ではないか……。こんなのでは……美貌を語る事なんて……出来なかつた。今までの苦勞とは何だつたのか……。

”うおおおおお……おおおおお……おおおおお……おおおおお……！！！！！”

淀君の絞り出すような絶叫が城内に響く。

「あれは……。」

千姫は驚いて見つめるが……。信繁は腕で合図し、奥に潜むようにさせる。あの状態になると……もう手に負えなくなる。完全な……錯乱状態だ。

「……おおお……。おおおおお……おおおおお……おおおおお……！！！」

叫び声が奥から響く。そして……畳を打ち鳴らす激しい足音が聞こえる。その音に信繁は太刀を抜き、構える。いくら振れなくとも……受け止めるぐらいは使える。次の瞬間、淀君の薙刀の柄のいちばん遠く持つ遠心力の籠もつた振りが……。柱をへし折りながら信繁を狙うが……。それを体いっぱい受け止めるが、すつ飛ばされ、壁に叩きつけられる。家鳴り……。力が凄い。その一振りが終わると……。そのまま膝を突く……。やはり何かあつたのか……。

・だが……こっちは体がきしむ。ぎりぎりを受けきったがその一撃は重く……。信繁自身もまた膝を突く。頭さえフラフラ来る。

「貴様達がふがないせい……秀頼は苦しみ……。私は……。こんなに……。お前が……。」

つぶやきが淀君から漏れる……。だがそんな余裕さえない……。この状態……。連れ出す前に死ぬ！信繁はこの時……。死を覚悟した。そこまであれば無慈悲で……。しかも理不尽だ。回避する手段が思いつかない。あの攻撃、あの重そうな薙刀がまるで小枝に見える……。だがこちらは振り回せるわけではない。太刀を持っている手の反対に持っている短刀を見る。

「お前らが憎い！お前らが！」

また淀君が立ち上がる。天井に着きそうにも見えるが、この天井は少し高く、7尺ぐらいだが……。それでもこの高さ程度では柱に当たり、刀は勢い負けして折れてしまう。そう言う設計なのだ。

太刀をその場に刺すと、短刀を構える。これでも業物……。目の前でゆらりとこちらを見る淀君の顔は、凶器に満ちていた。後ろで波線姫があまりの恐怖に泣きじゃくり、その顔を秀頼が覆っていた。

「まずは貴様だ！」

そう言うと、またも大きく構え、なぎ払う構えを取るが今度は信繁は一気に走り込み、一気に間合いを詰める。先ほどと同じ斬撃なら、受け止めなくとも斬れはしない真ん中で食らう方が生存確率が上がる！淀君はこちらの動きを見て、大きく横になぎ払うが、元の背の高さが災いして、少しかがむだけで、頭上をかすめ、勢いを失った薙刀は柱に刺さる。その隙間を狙い、肩を狙い、短刀を突き刺す……。刺さったよな……。少し刺さった所で、刃は止まり……。更に深く刺そうとする信繁だったが……。まるで木に刺して更に見えるろうとした時みたく……。全然前に行かない。淀君はその刺している腕を信繁ごと持ち上げると、まるでゴミでもほおり投げるように、軽く……。弾き飛ばした。弾き飛ばされた信繁はそのまましたに下りる階段側まで弾き飛ばされる。淀君は、じっと肩をみるが、

浅い傷で、皮膚が切れた程度にしか……信繁の目には見えなかった。甲冑を着て中敷きを仕込んでいなければ……死んでいた所だ。「これは……意外な……意外に痛く無いのオ。」

淀君はじつと信繁を見つめる。

「軟弱者だから……ふん……。」

深く刺さったなぎなたを軽く抜き、淀君はじつと見つめる。もう今までの酷使で刃はぼろぼろで……柄にも亀裂が入っていた。元は非力な女性でも使える刃物である薙刀は、それほど丈夫ではないし、ましては強力で振るう為のものではない。だが……それでも……その力はすさまじい。そのぼろぼろの薙刀を信繁の鼻先に突きつける。

「声も出ぬか……だが……。」

信繁はかろうじて体制を立て直して……じつと見つめる。窓や……上の階の空いた隙間の明かりから見える淀君の目は狂気で爛々と輝き……もう説得なぞ出来そうにない。

「最後に辞世の句……なぞいらんか……。」

淀君は薙刀を振り上げる。そこ何故か……鞘が薙刀にぶち当たる。それで揺らぐ事はなかったが……そちらの方を見ると、毛利勝永の姿があった。

「おめえ……何もんだ。」

「貴様！」

淀君はおもいつきり振り返るが、そこには脇差しを構える……

「勝永殿！逃げてくだされ！」

「ふざけるな！」

そう言うと一緒に階段を駆け上がり、持っていた脇差しを思いっきり振りかぶり、斬りかかるが、それを短く構え直した薙刀で受け止めると、そのまま強引に弾き飛ばす。その怪力に叶うわけではなく……勝永もまた、部屋の端まで弾き飛ばされる。

「何だ！この！化け物！」

「化け物！じゃとおおおお！」

勝永の負け惜しみに完全に理性を失い、勝永を睨みつける。

「てめえ・・・何者か白根柄が、侵入者は俺がゆるさねえ！」

確かに声は発狂寸前の淀君の声・・・気が付かないと言つても不思議ではないし・・・あの外見・・・化け物と・・・誰もが思うが・・・だが、油断は出来ない。

「信繁！すまんが、手伝え！二人で行く！」

「合い、分かった！」

そう言うと言信繁は無理矢理、体を持ち上げる。体中に激痛が走るが・・・この程度で・・・この程度で今まで死んでいった奴らに！顔向けできるか！信繁は立ち上がると、腰の脇差しを抜く。勝永もかろうじて握つたままの、脇差しを構える。

「貴様ら・・・わらわに逆らうか・・・。貴様らも！逆らうのか！」
「怖いよ。」

「大丈夫だよ。きつと、きつと信繁が・・・。大丈夫だから・・・大丈夫だから・・・。」

後ろで、声が聞こえる。きつと・・・怖いのだろう。俺も怖い。だが・・・。

「こいや。わらわが・・・貴様らの性根を入れ替えてやろうぞ。」
「知るかよ！」

勝永は咆えるとそのまま一気に間合いを詰め、全力で脇差しでたたつ斬ろうとするがそれを・・・腕で受け止めた・・・。だが、信繁は周りを見渡す。先ほど防御用で使った太刀がある・・・この幅！太刀まで走り寄つて勢いをつけて引っこ抜くと、重さを利用して・・・太刀を逆刃にしてそのまま太刀の重さと、勢いを乗せ、後ろを向いた淀君の胴体にぶち当てる。固い！だが！流石の淀君も、その衝撃に顔を歪めるが、それほどでもない・・・その痛みに顔をゆがませ、片膝を突く。やはり・・・。戦闘経験や訓練が少なければ・・・痛みへの態勢は薄い。特に淀君は戦いが嫌いな為、その場面にさえ顔を出さなかった。ならこういう事はある。斬撃よりも打撃のほうが効果が高い。その隙を逃さまいと、勝永は脇差しを構え一

気に斬りかかるがそれはまた・・・皮膚に遮られ・・・淀君に両腕を片手で握られ・・・弾き飛ばされる。流石に同じ所を二度投げられた為、壁に穴が開き・・・。月明かりが城内に差し込む。そして片膝を突いた淀君の顔を照らす。今まで背が高すぎて、また暗い為見えなかった顔が・・・今なら見える・・・その顔は確かに淀君ではあるが・・・その頬には涙の跡がびつしりと付いていた。だがその顔に衝撃を受けたのは信繁以外の全員だった。

「よど・・・ぎみ？」

「おかあさま？」

その声に淀君は振り返り、奥の鏡を見つめる。その姿・・・体は変わり果ててはいても、その顔まではそう変わらなかった・・・。その顔が今・・・月光にさらされ・・・鏡に美しく映されていた。

「え・・・あ・・・。」

更に衝撃的なその姿に・・・じつと淀君は鏡を見つめた。

「どうして・・・そんな・・・。」

秀頼の啞然とした声が聞こえる。千姫も除くが、その姿に驚きが隠せない。もう月は西に傾き、ちょうど城に差し込む角度だ。

「わらわが・・・こんな・・・悪鬼になったかとおもえばこれは・・・あああああ！」

突然淀君が叫び、うずくまる。その様子に全員が近づくが・・・その顔は蒼白で・・・体の震えがまた恐怖を悟った。

「どうした!？」

「・・・フフ・・・わらわが・・・これを呪ったせいなの・・・体が・・・言う事聞かなんだ。もう・・・。」

そう言って淀君はばたりと仰向けになる。その顔はどことなく諦め・・・そして、どことなく悟っていた。

「あの薬・・・きつとこうなる事を分かってあいつはわらわに・・・くれたのか・・・。」

全員が淀君の側に寄る。特に秀頼は・・・泣きそうな顔をしていった。

「それは……。」

信繁はじつと見つめる。

「あのひとは……私らを見捨てる気だった……のじゃ。まだ……すこし……あり……そう……。」

「どうしたんだよ！あんだ。」

這って柱まで行き、寄りかかる淀君に、慌てて勝永が詰める寄る。

「見てみい……これ。」

そういつて淀君が腕を見せると、もうそれまでの筋骨隆々な姿とは違い普通の女性の……いやそれよりも不自然に細い腕になっていた。

「ワシの体はもう……ほとんど言う事を聞かん……。」

「……そうか。」

あの南蛮衆はきつとこの状態の淀君を置く事で時間を稼ぎ、自分たちは逃げる気なのだろう。どこまでも卑劣な。

「秀頼……少し離れておれ。」

「はい。」

そう言うつと、心配そうになりながらも階段まで距離を置く。

「お主らなら……ワシは……茶々ではない……。」

「それはもう……淀君だからな！」

勝永は当たり前のように答えるが……信繁にはその重みが分かる。

「ワシは……昔……奴隷だった。それが突然……着物を着せられ……そしてここにいた。」

その言葉二人はじつと聞いていた。いや……勝永は幾つかの言葉の意味を分かっているように見えた。確かに信繁も分からなかった。

「そして……ワシは……茶々になった。最初はとまどった……だが……。」

その言葉にさっと信繁は後ろを振り返り……秀頼も耳を澄ませているようだ……。

「あの人は優しかった。私は関係なかった。最初はあいつらの言う事を聞いていたが……。ワシは隙を見たある日、あの人に打ち明けた……。知っておったよ。優しくほほえんでくれた。それ以来……。本当に愛していた。」

「……。もしや……。」

信繁は息をのんだ。確かに説得の為と思っていた淀君の話が本当なら……。

「あの子はワシが連中に慰み者にされた時の子じゃ。太閤の子じゃない……。だが……。あの人は……。それでも、我が子と可愛がってくれた……。」

「あんたもしかして……。」

勝永はじつと見つめる。流石に気が付いてきたのだろう……。何を言っているのか……。

「それで……。」

「ワシは……。あいつらの力を使って……。この戦に勝つつもりだった……。だが……。結局は利用されただけだった。キース局長……。結局はあの人の手に平だった。お主らに頼みたい。もうわらわはもう駄目じゃ。だから……。あの子だけは……。あの子だけは……。安全な所に。」

「わかった。」

信繁は頷いた。

「そして……。この事をあの子に……。頃合いを見計らって……。伝えてくれまいか……。わらわはもう……。駄目じゃ。」

淀君のその顔は……。どこことなく儂くとも……。憂う母親の顔だった。

「わかった。」

「感謝……。」

信繁が後ろを向いて手招きをする。それに吸い寄せられるように……。淀君の側による。その顔を見て、秀頼は……。何かを悟ったようにじつと顔を見る。

「お前……。きつと……。きつと……。きつと……。だから……。いいこに……。そだって……。ね……。」

そう言って淀君は、秀頼の顔を見て、何を思ったのか腕を上げるが……。その腕はそのまましばらく立ちっぱなしで……。そのまま落ちた時には……。目を開けたまま……。絶命していた。外は白みがり、もう……。脱出しなくてはならない。このままいけば、待つてもらった総攻撃が始まってしまふ。信繁は近くに転がっている自分の刀を拾うと秀頼と千姫を抱え、そのまま階段を駆け下りる。その後を何故か勝永が追走する。

「信繁！」

秀頼が叫ぶが……。それを無視して駆け下りる。このままいれば死ぬ。それに……。側にいれば……。悲しみが広がるだけだ。つらいだけだ。

「行きますぞ！！」

叫びながら入り口まで駆け下りるとそこには半蔵が待っていた。

「行くぞ……。そろそろ時間だ。」

「分かった。」

そう言つと千姫を下ろし、半蔵に渡す。千姫はこの時12歳。人が抱えられる大きさでもある。その様子をじつと……。勝永は見ていた。

「行くのか……。」

「まあな。秀頼様は回収した。」

「そつか……。明日……。いや今日か……。俺はここで最後の責任を取る。」

「わかった。」

「……。お主も来るか。徳川は……。優秀な人間を求めているぞ。」
半蔵が、気を掛けるように勝永に言うがそれを……。勝永が首を横に振った。

「いや……。情けはいらない。誰かが……。ここで責任を取らなくちゃならない。」

「わかった。」

「そういえば……。」

そう言つて勝永は改めて、秀頼を見つめる。その幼い瞳はじつと勝永を見つめる。

「俺は……初めて……秀頼様をみるな……おめえ……かーちゃんと一緒に……きれいだぞ……。大野の野郎が熱を上げているのも分かる。」

しばらくみると、信繁の肩を押す。

「後は頼んだぞ。」

「……わかった。さらば。」

そう言つと信繁は秀頼を肩車で背負つと、急斜面を駆け下りていった。勝永はじつとその様子を見つめる……。

「そうだな。最後に誰かが……この始末をしなくちゃならない。特に上のな……。」

勝永はゆつくりと周りを見渡しながら……城の階段を上がる。城の中を見ると、見事に書物だけが持つて行かれていた。軍備や武器は残されている。生きて帰ろうと思えば帰れたが……。俺もあいつや淀君とかと一緒に……命……恩義があるんだよな……。最上階、天守閣の下まで来ると、淀君の体を抱えて下りる。ふと見渡すと倉庫を見つめる。そこに淀君の遺体をおいた。ちょうど、下にお付きとかいたつけ。扉に鍵を掛けると、天守閣に揚がった。そこは戦闘の跡が残るが……かろうじて……帳をおろすと、戦闘で大きく開いた窓の隙間から……外が見える。もう戦闘が終わり……朝になれば……徳川軍が来る。死ぬと分かっているも……いや。降伏したい奴がいればするようには伝えた……。俺はしないが……。下からちょうど兵士宿舎が見える。朝起きて逃げ出した連中は……逃げればいい。そう言えば……南蛮衆がいない……。あいつら……あいつらだけは残したかったが……。

「やっぱ……切腹だけは出来ねえな……俺は……だが……」

俺は最後まで……ここを守る。」

毛利勝永……この後この城で迫り来る徳川軍相手に大立ち回りを
を行い……その最後は想像を絶するほどに……漢だった。

第十四節 五月八日 堺攻防戦（前書き）

大阪城から脱出した信繁一行に大阪方最後の計が発動する。無事！
信繁は生きて帰れるのか！そして、行く先で何が待っているのか！

第十四節 五月八日 堺攻防戦

第十四節 五月八日 堺攻防戦

「半蔵……もういいぞ。」

千姫は照れながら合図を送ると……手で追い払い仕草をした。その仕草を見て少し離れる。ここは徳川秀忠……父親の陣中だ。もうここまで来れば大丈夫だろう。千姫は、何か決意した顔で陣幕を開ける。そこには泣きそうな顔で立っている父親の顔があった。

「千！」

「お父様！」

秀忠が抱きつくとき千姫も泣きながら抱きつく。しばらく……抱きしめると、お互い……感じたように距離を取る。

「お父様……帰りました。」

千姫は礼儀正しく一礼をする。それに合わせ、鷹揚に頷く秀忠……ではあるが……その顔のデレた様子に威厳はなかったが……家臣達が居合わせていた為、仕方なかった。半蔵も、その幕臣に混ざりその様子を見つめていた。

「おう。良く帰った。大儀であった。」

そのこと場とともに腰掛けに秀忠は座る。

「帰って休むといい。大変だっただろうからな。」

そのまま少しの間静寂が訪れる……。誰も動かなかったからだ。

「お父様……お願いします。」

千はあえて、頭を下げ伏した。その異様な様に最初は驚いた秀忠も……流石に何を言うのか理解できた。

「もうこれ以上の攻めは大儀を失います。ですから……もう……おやめください。」

徐々に涙が声がかすれながら……また十二歳の少女のみでありながら……実の父にここまでして……幕臣は息をのんだ……。

「もう・・・部隊は動き出しておる。もう止められぬ・・・察せよ。これ以上言えば・・・。」

秀忠はちらりと半蔵を見つめる。秀忠自身は知らされていたが、秀忠の幕臣は家康の死を知らされていない為、ここで名言は出来なかつた。そして、事実上の指揮権が半蔵にあるとも・・・言えなかつた。

「ですが!ですが!」

秀忠は困った顔で半蔵を見る。半蔵はあごで外を指す。

「疲れて錯乱しておるのだらう。連れて行け。」

その言葉に陣の端で警備していた侍は千姫を抱え、外に連れて行った。

「お父様!お父様!」

その陣の向こうまでも彼女の声が聞こえていたが・・・苦しい顔で無視していた。

「皆のもの。今朝こそ!あの城を陥落指せよ!」

秀忠の掛け声に、幕臣達が答える。その行為に・・・秀忠の決意を感じたのだった。

半蔵達と一時的に分かれた信繁は馬を走らせ、海岸沿いに南に向かつていた。確かに忍者には攻撃されなくとも、正規軍には攻撃される。この状態を避ける為、半蔵が出した指示とは・・・堺にて待機する事だった。堺は人が多い上に市民も多いので、どうか・・・見逃す事が出来る。そこで今後の指針を決定するらしい。

「で・・・。どうするの?」

馬の背に乗った秀忠は心配そうに信繁を見つめる。信繁は全力で馬を疾走させていた。今は朝日も昇り掛け、行進の音が聞こえる。今から・・・大阪城を陥落させるのだらう。

ふと、海を見つめる。やはり・・・黒い大きな影を・・・三つ確認が出来る。やはり作戦は決行されるのだらう・・・。だが今の俺はそれを耐える事は出来ない。今は・・・秀頼様が優先だ。前に向

くと、全速力で馬を走らせる。ちょうど、視界の端に町が見える。しばらく走らせると警備隊がいる中を突っ切るうとするが・・・流石に止められた。

「おい！貴様！」

兵士が馬の前に立ちふさがり、止める。無論・・・彼らに旗はなかつた。

「何のようだ。」

流石に兵士達も殺気立っているのが分かる。まだ・・・火は揚がってはいない者の、この戦況を知らないと・・・。彼らの鎧がぼろぼろだ・・・もしかして・・・。

「馬上にて失礼いたす。諸侯らの所属は・・・名を名乗っていただきたい。」

そう信繁は言う。どちら向きでも言い訳は立つが、使いどころだけは間違えられない。

「拙者達は・・・元は・・・真田軍であるが・・・。今は・・・分からね。」

しめたと信繁は思ったが・・・だがまだ終わらぬ。彼らはこちらの顔を知らぬようだ。

「そうか・・・つらかったのだな。大阪城からの使いだ。ここの大將は？」

少し同乗するが・・・そうも言っではいられない。

「今は・・・真田軍の侍頭であった、算殿である。」

「それはいい。そこへ案内されたし。」

「お主は？」

兵士達は疑い深く・・・じっと見つめる。周囲には一団が囲んでおり・・・状況は悪い。

「拙者は・・・拙者は・・・。」

信繁は考える・・・ここで本名を言えばきつと疑われる。それに・・・幾つか不利な事がある。

「真田幸村でございます。」

「さなだあ？」

兵士がいぶかしげに見つめる。流石に偽名は・・・通用しそうにない・・・。

「あの・・・。」

その声に兵士達が後ろを見ると、秀頼が馬を下りる。

「すみません！急ぎの用なんです。通してください！」

秀頼は大きく一礼すると・・・うるんだ瞳でじっと兵士を見る・・・。その顔は女性のようでもあり・・・そして・・・その母性と被虐心を煽るその顔は兵士達の胸をときめかせるのは十分でもあった。「でないと・・・でないと・・・。」

そう秀頼が言いながら俯く。その様子に兵士達が慌てる。

「わ、分かったよ。通っていいぜ。算殿は・・・。今は確か町はずれの商人の屋敷を間借りしているとか。そこに行ってくれ。」

「はい。行きますぞ。」

そう信繁は、ほっと胸をなで下ろすと、秀頼を乗せようと見るが・・・。秀頼は嬉しそうに兵士の手を取って感謝していた。その様子に何故か、手を握られた兵士は顔を赤くしていた・・・。あれは男だぞ。信繁は呆れて見つめるが、しばらくすると馬の背に秀頼が戻ってくる。

「行きましょう。」

「あ・・・はい。」

そう言うと、信繁は馬を叩き、先に進める。・・・この時戦略や腕力とは違う何かがそこなるのを・・・信繁は初めて知った瞬間でもある。

「局長！」

船のはしごを上がりながらキースとアンサレムは大阪城を見つめるが・・・まだ何も起きてはいないが・・・日は昇り始めていた。登り終わると・・・船の船員が全員敬礼を行う。キースはそれを確認した後、合図を送る。そして、船員達は手を下ろした。

「状況説明！」

「は！」

一歩前に優男が現れる。

「言われた通りに、旧外堀に・・・粉、設置したよ。後は砲撃すれば舞い上がるから。それでいいはずだよ。」

「そう言い、船から元外堀を指さす。」

「で・・・向こうはどうなりました？」

「ああ。あれは破棄だ。最後の切り札も設置してきた・・・まあ・・・確認したかったんだが・・・仕方がない。外見データだけで十分だ。」

キースは苦々しく、大阪城を見つめる。

「後はどうします？」

優男が不思議そうに大阪城を見つめる。

「データの回収は？」

「終わりました。」

「なら・・・塵に帰せ！」

「了解！じゃ、引きつけて打ち込んでおくね。」

「そう言つと優男は、奥に向かっていった。船員頭達に指示を出している。キースは懐から双眼鏡を取り出し、外堀を見る。ちょうどそこには兵士達が進行を始めた所だ。」

「彼らが後は・・・。砲撃準備開始！完了次第・・・撃て！」

キースが叫び声を上げる。それは合わせ各所に指示が行き渡る。

「本当の作戦は・・・ここから始まるのだ。」

「船長！」

「なーに？」

優男がやんわりと声を上げる。

「船団が迫ってきます。大方・・・日本の船かと・・・。」

「じゃあ、ロンブルムは、船団の迎撃。後は陸への砲撃ね。後・・・トルネードの布陣。連絡お願い。」

「は！」

船員はその指示を聞いて優男から去っていく。

「キース局長。」

「分かっている。連中も無能ではない。・・・私は行く必要があるかね。」

キースとアンサレムは疲れた顔で優男を見つめる。

「このぐらいなら必要ありませんよ。お疲れですから・・・お休みください。後・・・各宣教師達のレポート、部屋に置いてありますので・・・見ておいてくださいね。」

「了解したよ。同士。」

そう言うと、キースは船の中に戻っていた。その後についていくようアンサレムも戻っていく。

「行けますかね?」

不安そうに顔をしかめる。その間にも、船室の通路を忙しそうに船員が往復する。

「あの異形がきても・・・数で押し切れよう。だが・・・。」

キースは頭で色々考える。あの女の形をした異形・・・何回か襲撃されたのでまた来るかと思っただら。船までは来なかったな。

「後はこの船の砲撃で、すりつぶすだけだ。でなければ・・・一度退く。」

「分かりました。成功するといいですね。」

「だな。」

そう言い、キース達は自信の船室に帰っていった。

「どうしてここまで時間がかかり申した!」

その部屋の主は怒ったようにその向こうにいる主を見つめる。ここは下八達の商人がいた屋敷。今、彼らは奥に避難してもらっている。無論、真田の奥が戸と息子も一緒だ。

「いや・・・そっちから説明して欲しい。算。」

信繁は優しい声で語る内容は不思議である。確かに隣の若君は秀頼様でも・・・この意見は聞きがたい。

「分かり申した。こちらから説明いたす。こちらは、あの戦闘の後、本陣の荒れ様を見て、成功したと思い、撤退命令をいたしました。・ ・ ・ここは敵陣深く・ ・ ・敗残兵を連れ、敵兵を横断し、少数になりながらも命からがらこちらの警備隊と合流する形で堺に陣を張りましたが・ ・ ・でも・ ・ ・何がやらさっぱりです。徳川軍に動きはないし・ ・ ・かといって攻めれば負ける戦は行きたくないし・ ・ ・。」

算は最初、勢いでしゃべっていたが、徐々にその勢いは衰えていった。

「つらかったな。」

「は。」

「根津は？」

信繁は不安そうに周りも見渡す。後・ ・ ・来ていないのは根津だけだ。

「根津は・ ・ ・聞いた所に寄りますと・ ・ ・山の真田軍は全滅・ ・ ・ですから・ ・ ・きっと・ ・ ・。」

「そうか・ ・ ・。」

その言葉に思わず算は顔を伏せる。その様子を秀頼もじつと聞いていた。

「で、そちらの首尾は・ ・ ・。」

「ま・ ・ ・こうしてきているのだが・ ・ ・色々あってな・ ・ ・ありすぎて答えられんが・ ・ ・。」

頭で色々考える。半蔵と別れる前に言われた、しまが負傷し、徳川軍の忍者部隊に保護されている事。青海、妖怪達は契約に従い朝には撤退完了している事を考えると、こちらも正規軍はやってくるだが、自分もここにいれば捕まる公算は高い。いや、処刑されかねない。半蔵が取り持っても算やこの兵士達は無理だ。だから・ ・ ・うかつに投降を薦めるわけにも行かない。

「分かっているのは・ ・ ・ここも今日にも徳川軍が来るという事だ。」

「

「それは・・・重々承知してお下ります。そこは流石に抵抗させています。住民達もそれに賛同しているようですが・・・まだ来ない所を見ると本腰ではないのでは・・・。」

確かに、自分が来た時も敵兵の姿はないし・・・それに・・・半蔵が待機場所に堺を指定するのに戦場だったなぞ・・・普通はあり得ない。だが、こういう所は警戒してしかるべきである。何が起るか分からないのが・・・戦である。そのとき轟音が堺からも響き渡る。その音に慌てて外に皆が出ると、海上の船からついに砲撃が始まっていた・・・そう言えば・・・敵の作戦についての説明・・・していなかった。それに・・・今は家康がいない。なら・・・戦略などあるとは思わない方がいい。今回は特に他所の大名の寄せ集め、この局面で一大名が戦略を組めるとは考えがたい。ならどうするか・・・愚直に攻めるしかない。ならあの作戦には・・・どんな簡単で、ばからしい作戦でも豪快に引つかかると考えた方が良かった。良くも悪くも・・・彼らの思惑通りだ・・・。

「あれは・・・？」

「あれは・・・美井が言っていた・・・。」 世界最強艦隊”

「世界最強艦隊ですか。」

隣の秀頼も何か・・・怖い眼で船を見つめる。

「ああ。今までいくつもの海賊や、敵艦隊を滅ぼしてきた”最強艦隊”だそうだ。あの大砲は山一つは超し、あの船一つで大砲を城一つ分は抱えている。だから・・・淀君の作戦は成り立っていた。それがあそこに3隻はいる。」

「そうなんですか・・・。だから淀君はあんなに自信たっぷりに。只あれどう見ても・・・。」

算はじつとその撃ち方を見ていた。絶え間ない大砲の砲撃、飛距離もすさまじく、堺から着弾点は見えない。だが、その現場の激しさはよく分かる。あれを食らって生きているものは・・・敵味方問わずいないだろう。

「そして・・・俺の予想が正しければ・・・作戦には二段目がある。」

「はい？」

「算は意外だったらしく。信繁の焦る顔を見つめていた。それは秀頼も一緒だった。」

「それは何なんですか？」

「おそろおそろ秀頼も聞いてくる。」

「あの時言えなかった。あまりに酷かったから……。淀君の作戦は二段目がある。それは……。」

その言葉に周囲にいた人間は唾を飲んだ。

「大砲で死んだ人間を死人として復活させ、徳川軍に襲わせる。」

その言葉に算は唾然としてしまう。

「死人……ですか？」

算も青海と一緒にだった経験上名前を聞いた事はあったが、それが現実のものだと信じられなかった。秀頼にしては初めて聞く名だ。

「俺が調べた所、生者、死者問わず死人にする粉というものを南蛮衆は持っていた。そして、死人を操る術も持っていた。俺が怖かったのは大砲じゃあない。大砲から逃げて、敵味方関係なく死人に襲われて味方が全滅しかねないと言う事だ。そして何より……。」

算の顔は蒼白となっていた。もし、城で守るとか言っていたり……。城に逃げ帰っていれば……。

「死人を使った戦争。そんなものがまともな戦争のはずがない。そして俺たちは死んでも死人として、兵士としてずっと使われる……。」

信繁は毛利勝つ永を思いつつ大阪城を見るが遠く……。状況をうかがい知る事は出来ない。その場にいた人間全員が凍り付いていた。「だから俺は……。あの作戦に賛同できなかった。」

「じゃあ……。淀君は俺たちを使い捨てるつもりで……。」
算は怒りに震える眼で、南蛮船を見つめる。秀頼は力の抜けた顔でじっと信繁を見ていた。

「だろうな。そんなのは作戦でも何でもない。だから……この作

戦にした。特に、あの山を越えて布陣するなど言ったのは……」
そう言つて、信繁ははまだ砲撃を続ける船を見つめた。遠いが黒
いあの船は……。悪夢の産物に見える。

「あいつのせいだ。誤射とか言つて俺たちを撃ちそうな気配がした
からだ。」

「なんか……もう……。」

算がうなだれる中、信繁は大阪城の事を思い浮かべる。今はもう
大阪城側に南蛮衆はいないはずだ。だが……。あの船にはまだい
る。実際信繁はこの時、直に撤退したのを見ているわけではない。
だから半信半疑であつたのだ。だがこの様子では……。

「でもあれ……あれはどうして？」

秀頼はある船を指さしていた。それは……船が旋回を始めてい
た。これは……信繁は望遠鏡を取り出すと、屋敷を飛び出して近
くの高台に上がり、海の向こうを見ると幾つかの船団が見える……
。あれは……。

「どうしました。信繁どの？」

「ん？あれ……。」

信繁が指さすと……まだ黒い固まりにしか見えないが何かが会
場に出て他のが分かる。あれは……鉄甲船……まだあつたの
か……。織田信長時代に作らせた至上に名だたる鉄甲船……。
だがその船団はあの船に比べれば小さく……。半蔵殿は流石に対
策は立ててあつたか。

「何が見えますか？」

「鉄甲船がああ船に突っ込んでいる。」

「拙者はどちらを応援したらいいのやら……。」

算が複雑そうに信繁のしている方を見つめる。信繁はまた、南蛮
船に望遠鏡を向ける。そこには……一隻が対処にむか……。では
ないあれは……。船が三隻回転を始めている……。あれに何の意味
が……。秀頼を始め、外に出た全員が船を見つめる。そして、地
上に砲撃している船も含め、三隻が、何故かその場を回り始めた。

の弾を込め、仕込みの準備をする。向こうの船を見ると、その攻撃ペースの早さに驚いているようだ。よし！

さっきの船の砲撃が終わる頃には弾込めの準備が可能だ。今度は地上に撃つか……。向こうの敵船は動揺しているらしく、動きが見えない。向こうの援護を書かせば、それだけで作戦失敗してしまう。「次は！地上！」

優男が大声を上げると伝令が下に走っていく。この勝利もまた彼からすれば……。いつもの事だ。終わったら……。あのお方に何と勝利を報告しようか……。

「何か……。車懸かりだ……。あれ。」

信繁は船を見つめ、つぶやいた。川中島で語られた、上杉謙信の必勝の陣……。 ”車懸かりの陣” を見ているようだった。それを南蛮が使うか。驚いて望遠鏡で見つめる。その頃には秀頼、算も高台に上っていた。秀頼は何かおもしろいものを見るように、その様子を見ていた。算は何か……。驚いていた。

「車懸かりですか……。」

算は啞然として見つめていた。あまりにも戦闘に差がありすぎた。射程の長い大砲で、三隻による連続射撃を加え、相手がどんなに固くとも、ぼろぼろになるまで蹂躪する。正に悪夢みたいな戦術である。

「ああ。何か、大砲であんなもの見られるものではない……。凄い……。」

信繁は望遠鏡でその様子を見つめていた。

「信繁！。見せて！」

秀頼が信繁の裾を引っ張る。それに気が付くと信繁は望遠鏡を渡すと、楽しそうに望遠鏡で、海を見始めた。

「おおー。凄いねー。あれ。」

信繁はしつとと考えていた。あれでは……。あの船団は退却を始め、幾つかは寄港する……。これからどうするか……。それ以

上にあれ・・・勝てるのか？だが今の俺は・・・徳川でもあり・・・豊臣でもある・・・下手には動けない・・・だが待て・・・あの砲撃・・・じっと思考を整える信繁の横では手を叩いてはしゃぐ秀頼がいた。

「おおーあれ。何か、同じ所しか撃たないけど？」

「ああ。」

算も船を見つめていた為、その様子を見つめていた。

「あれですか。それはそうですね。伝令することは船同士難しいですから”どこかの真似をしる”までしか言えません。昔、傭兵していた時に、船乗りに聞きました。」

「そうなんだ。だから同じ所を・・・ありがとー。」

「どうも致しまして。」

秀頼達ものんきなものだ。信繁は対岸を見ると遠すぎてこちらからは、黒い固まりにしか見えないものが徐々に小さくなっていく。やはり幾つかの船がこちらを目指す。

「でも、どうしますかな？あれは。」

「敗残兵はこちらも一緒だ。受け入れてやれ。」

「ハイ。ではそう伝えてきます。」

そう言つと、算は立ち上がり、下に歩いていった。その間も信繁は考え続ける・・・何か・・・掛け違えた何か・・・もやもやする。例えば・・・南蛮衆が城にいるなら・・・組織だつて反撃する。だが、城中を見てもそれを見かける事は出来なかった。だとしたら、味方がいるのにあのような砲撃は・・・と言う事は・・・南蛮衆は城にはいない。

だとすると・・・今度は・・・さっき自分で言っていたよな。南蛮衆は死体を操るが・・・あの時あつた本を持った奴だろうな・・・あの様子からすると、本人が声を掛けねば、操る事は出来ない・・・あれ・・・もう南蛮衆がいないなら、あいつはいない公算が高い。なら、ちょっと待て・・・半蔵達は死人対策をしていたと言うが・・・大阪城攻めのせいで・・・対策は今夜に限りはしていない

い！ちょっと待てと言う事はほぼ完璧に……ではないか……作戦は成功する。そして操られる事のない死人が……って……待て！信繁は何か思いついたように膝を叩く。

「算！」

「何ですか？」

信繁は急いで高台から駆け下りる。

「急いで！兵士達を門とか前線に待機させる！」

信繁は周囲を見渡すがもう周囲には伝令にでた為、人がいない。

「どうしたんです？」

「死人だ！死人！死人は……こつちに来るかもしれん！」

「は？大体……操られているんでしょ。それがこつちに来るなんて。」

「……いまは……。操っている奴は死んでいるか……。あの船の中だと思う。」

そう言い、信繁ははまだ回転を続ける船を見つめる。

「へ？」

「だから……だとすると……暴走した死人は……徳川軍を伝い……こつちに来る可能性がある。」

「じゃあ……。」

算の顔が青ざめる。

「せめて、柵を突破されないように。徳川、豊臣どちらからも攻められる可能性がある！」

「大丈夫ですか？死人は青海が言う限り、斬っても死なぬのですぞ。」

「分かっている。」

この状態に半蔵が気が付けば……こちらにも増援は来るやもしれん……。だが……それまで堪え忍ばねばならない。背中に太刀が一本、刀が三本。脇差し一本。これが手持ちの業物の数だ。だがこれで、今度はほぼ数万か、数千の死人を相手するのか。

「だからといってモアレでももとは人。人を越えた動きは出来まい。」

なら、策や落とし穴で防ぐ。」

「了解。」

算は急いで走り出した。

「これはどういう事何だあよ！」

伊達政宗は馬上で敵を見つめる。確かに早朝の合図を元に、軍隊はすすみ、戦闘を開始した所で、どこから戸もなく大砲が降り注ぎ、陣は混乱していた。だが、進軍して早く決着させるべく更に徳川軍の後続部隊が今度は先陣を切ってはいるが……。今、伊達政宗軍を襲っているのはその……。先陣を切った徳川軍である。しかも、相手は斬っても吹き飛ばしても起きあがってくる。

「あれが……。死人……。でしょうな。」

片倉は近くにある槍を拾い上げると、全力で死人に投げつける。流石に吹き飛ばされるが、それでも立ち上がるが……。槍が貫通している上に、地面深くに刺さっている為に動けない……。この状態はどこも一緒らしく前線部隊は苦戦している。

「対策の霧はどうした！」

伊達政宗が咆える！

「分かりません……。」

片倉の弱気な声が聞こえる。そう言えば昨日からあれでどたばたしていたから……。ここまで気がまわらなか……。こんな所まで影響するのかよ！大将の死は！

「あれ……。水に弱えよな……。」

「確か……。聞いた所に寄りますと……。お祈りした水でないのだめだと……。」

「んだあ！どうすんだよこれ！」

そう言いながら踏み込んで死人に一撃を加える。その勢いに死人はその場で倒れる。だが、向こうからはいくつもの兵士達が迫る。

「なら！半蔵殿の所に行つて！取ってくればいいじゃないですか！」
片倉の泣きそうな絶叫が聞こえる。

「それだ！でかした！」

伊達政宗の目が輝く。

「はい？」

「おめえ、確か・・・後ろの山で構えている半蔵の所に行って水取ってこい。俺たちは・・・退きながら戦ってるから。」

「分かりました。」

片倉は近くにあった馬に乗ると、急いで陣の後ろに引き上げていった。

「おめえら！こいつらはきついから、少しずつ退くぞ！特に！噛まれたら放置しろ！ここが踏ん張りどころだ！かぶくぞ！」

「おお！」

伊達政宗の号令に全員が声を上げる。だが・・・先は厳しいものだった。特にこいつらを後ろに逃がす事は・・・難しかった。

無論死人の間は、半蔵に耳にも入っていた。

「何故！何故！」

半蔵は地図を片手に考えていた・・・そう言えば・・・信繁なら何か・・・知っていたはずだが・・・あの様子で聞けなかった。敵の作戦・・・無理でも・・・聞き出せば良かった。各所から報告が揚がる。海上の船から大砲が撃たれ、陣が半壊状態な事。そして、対策で向かわせた九鬼の船団が半壊状態な事。そして、味方の一部が暴徒状態となり、何故か味方に襲撃されている事。その報告の整理だけで、襲撃班が帰ってきてても、半蔵は指揮を検討していたが・・・この時・・・頭が混乱し、どうしていいか分からない。今更・・・今更ながら、家康のすごさを・・・痛感せざる終えなかった。だが！

「報告急げ！」

「は！」

忍者部隊の彼らもまた、ある意味限界が近かった。昼夜を問わず、戦闘や情報戦を行いました、妖怪部隊の対応もあり、もう限界が近かったのだ。

” どうすればいいのですか……。内府様……。”

「半蔵殿ー！」

遠くの声に声の下砲を振り返ると一人男が陣中に馬で乗り込んでくる。家紋は……。伊達家のものだ。

「どうしました？」

半蔵は馬の元に走って行く。

「現在こちらの軍は死人と戦闘中。」

「何！」

半蔵は頭を抱えそうになる。更に死人の追い打ち！だが今でも・本隊は攻めを続けているはず。ならどうする……。敵の作戦さえ分かれば……。待て！

「そのの！」

半蔵は近くの男を呼び止める。

「何でしょうか？」

「すまない、その水を一樽を運んでくれ。」

半蔵は指示を出しながら考える……。もはや……。死人か……

暴徒は！抜かった！

「指示を変える。ここにある払い水の樽を各部隊へ配布！また、僧侶衆は？」

「はい、陣で一部が待機しています。」

「その者達に、死人が出た事を連絡せよ。大方前線に広く当たっているだろうからな。」

「了解！」

そう言つとその男は走つて陣の奥に向かう。

「片倉殿！水は陣中に運ばせるので、一緒に付いてきてください。」

「分かった。」

そう言つと半蔵は近くにある馬の飛び乗る。もし分からぬなら今からでも遅くない。聞きに行く必要がある。半蔵は堺を見つめる先に……。堺の町があった。

5月8日正午頃、堺の町にも、死人の群れは到達していた。無論これは入り口を守る警備隊達と戦闘が始まった……だが……。「逃げるな！逃げれば！後ろにいるものも死ぬぞ！」

算の叫び声が響く。だが……どう考えても斬っても撃つても立ち上がる相手の大軍なぞ……。出来るはずはない。最初は奮戦していても、柵に到達された幾つかの場所で破綻し、兵士達が逃げ始めていた。算も叫んではいるが……その実……自分も逃げたかった。実際初めて戦ってみて……。どうしようもなかった。

「おい！」

算は後ろを振り返ると……信繁の姿がある。

「どうしました？」

「撤退だ！」

信繁は周りを見渡す。戦線は内部に入られた死人を注進に崩され始めていた。

「でもどこに逃げるんです？」

そう叫ぶ前に算のいる……見通しの聞く櫓に信繁が上り叫び始める。

「逃げる！、逃げるんだ！海に向かえ！港に向かえ！逃げる兵士は海にと叫んで逃げろ！」

信繁の声に算は櫓を下り始める。それを見た信繁ははしごを下りる。

「海ですか。」

「そうだ。あそこにはさつき寄港した鉄甲船がある。あれに人を乗せる。」

「え……？」

算はまだ高い台から下りるハシゴの上で海の方を見ると、何隻かの鉄甲船が停泊していた。只その船を……南蛮船は撃つてこようとはしなかった。

「分かりました。」

そう言うと一緒に下り、港に向かって走り始める。

「どうして逃げるんです？」

算ははしごを下りるとじつと敵兵がいそうな所を見つめる。

「一カ所が破られれば・・・後は彼らにえさを与えるだけだ。更に混乱する前に通路を絞り、防衛する。とともに・・・。」

「？」

算は焦りながら、港に走る信繁についていく。

「ここにいずれ攻めてくる徳川軍とぶつける。彼らはある程度は死人対策をしているみたいだから・・・それに期待する。」

自分の立場を忘れ・・・向こうを見つめる。

「徳川軍に期待ですか・・・。」

算は複雑そうな顔をする。その間も見かけた者全てに港に行くように掛け声をあげる。

「半蔵は前に死人にあった時、水を・・・払いの水だよな・・・。」

そう言い神社を探すがここは、堺の町。そう大きい神社を見かけなかった。

「連中の武装に期待するしか・・・今のところ方法はない。」

そう言い信繁が走っていた。この時正午頃、戦況は様々な変化が起きていた。まず、大砲と死人の群れを越えた兵士達による大阪城攻めが徳川慶直（後の水戸黄門）により開始されていた。また各所に配置された僧侶達による結界により、徳川軍に大阪城へ攻める道が完成されつつあった。無論海側に寄らねば、大砲の影響は受けにくい為、川側中心である。そして大砲と粉で閉せされた無秩序な群れは進行をやめ始まり始めるが、直ちに排除は出来なかった。水で一部は退治できているが、絶対量が少なく、軍が侵攻するまでに至っていないかったか日だ。こうなると、お互いに千日手の状況でもあるが・・・無論・・・僧侶にも限界がある。死人は待っているだけだから・・・限界は来そうになかった。ちょうど半蔵と片倉が堺の町の中に入った頃には死人達であふれ、人々は食いつかれていた。幾つかの勘のいい人間は港へ逃げていたが・・・逃げ遅れた子供とかは死人に食いつかれていた。この死人の編成の多くは・・・徳川

軍であつた。

「何ですか！これ！」

片倉はもうしゃがれてしまった声で、馬を走らせ周りを見渡す。そこかしこから人々の悲鳴が響く。

「黙つて来てください。」

半蔵もまた、もう半分頭を抱えながら馬を走らせていた。人の流れを読み中心へ向かう。この動き……。しばらく走ると向こうに鎧を着た人々の群れがあるこれは……。豊臣軍の部隊だ。強行突破しようとする……。それを赤い鎧を着た男達に止められる。

「やつと会えたな。」

「半蔵……。どの？」

乾いた声が聞こえる。算だろう。半蔵は馬を下りる。片倉は事態がつかめず、只見ているしかなかった。

「そこに、信繁殿がいるか？」

「お主！徳川だろうが！」

算は兵士の手前そう言わざる終えなかった。走りながら言っていた……。徳川軍の力を使わねば……。死人に勝てないのは分かっていたが……。だが……。ここで素直に頷くわけにはいかなかった。

「算どの。」

半蔵は周囲を見渡す。確かに逃げ延びた難民もいるが……。兵士の数も多い。この事態……。何かを察すると半蔵は片膝を付く。

「算殿。今は火急の時。このまま人々が襲われるのを黙ってみていと。我々も救援の用意がある。」

「では……。分かり申したお通りください。今……。信繁殿は奥に止まったお主達の軍の船と交渉中である。」

「了解。」

そう言つと、半蔵は立ち上がり、奥に走っていく。その様子に只一人……。片倉は取り残される。

「お主は？」

算も不思議そうに見つめる。無論その家紋に見覚えがある。伊達

家のものだ。

「まあ……。半蔵殿に來いって言われてな……。」

「そうか……。お互い主に振り回されて……。つらいな。」

片倉はじつと筧を見つめる。確かに親近感がわく……。疲れた顔だ。

「そうさな……。だがそれが心地良いからこそ……。人は付いて行くんじゃないのか？」

「お主……。もし敵でなく、この場でなければ酒なぞのみたいお人ですな。」

筧は顔をゆるませる。この言う時のにこつとした顔は疲れを一瞬忘れさせてくれる。

「だが……。どうなる事やら……。」

「ですな……。」

「負傷者は搬送しろ！船は港の奥に入れろ！」

「信繁殿！」

半蔵が走ってくる頃には、信繁は港で指示を行っていた。

「半蔵殿。」

半蔵は信繁のすぐ側まで近づくと……。平手で一発頬を叩いた。

「……。すまない……。何となく腹が立ちもつした。」

信繁はじつと半蔵の顔を見る、複雑な顔をしていた。

「……。いいさ。分かる。」

「でだ、敵の作戦について、お主が知っている事を聞きたい。でなければお互い……。全滅するぞ。」

「分かった。あそこで。」

そう言うのと近くの倉庫を指さす。そこに二人が入ると信繁は隅に入って床に座り、地図を広げる。

「敵は……。大砲や城での戦闘をした兵士達で死人を作り……。徳川に共倒れさせる気だろう。」

そう言い、信繁は海と城を指さす。

「第一、どうやって死人は出来ている？南蛮衆がいなければ出来な
いはずだ。」

半蔵は不満そうに聞いてくる。だがこの時、掛け違いが分かった
気がした。

「敵は・・・粉を使い・・・人を死人にする。」

「へ？薬？」

半蔵は目を丸くする。最早、それだと作戦の前提が違う。南蛮衆
を倒しても・・・死人は必ず発生する。

「こつからはおれの予想だが・・・大阪城から南蛮衆を追い払った
事によつて・・・死人を操る奴がいなくなり・・・暴走状態にあ
ると見ている。無論あの時あつた死人の事だ・・・。」

死人は大抵人がいる方に向かい、人をかみ殺そうとする。嗅覚が
発達している為、目が見えなくとも、匂いだけでいる所をかぎ分け
る。集団の動きにも慣れている為、近くの死人の匂いがなければ、
ある方に向かう。それが、半蔵が知っていた死人の習性である。

「と言う事は・・・今は南蛮衆がいないと・・・。」

「そうではない。南蛮衆はまだここにいないのではないかと・・・。」
そう言い信繁は海を指す。

「さて？船は・・・そうか！貿易船！あれに逃げ込んだか！」

そう言う戸半蔵はつい地図を拳で殴りつける。

「あれは拙者が見た限り・・・軍艦・・・そして大量の大砲を積ん
だな。」

「大砲？ではさつき海を指したのは？」

「海に三隻の軍艦が地上に砲撃を行っている。それにお主達が送っ
た鉄甲船の船団もやられおつた。」

「少しお待ちください！ここは敵陣ですぞ！」

「でもここ居るだろうが！半蔵が！」

「え・・・海上封鎖に向かわせていた部隊は全滅か・・・なら逃
げた南蛮衆はそこにいると。」

半蔵は啞然としていた。作戦は完全に読み違っていた。これなら

再度作戦の立て直しを必要とするほどのずれだ。だがどうする・・・
もう攻城は始まり・・・。

「どうする・・・。」

半蔵は地図を見てじつと考える。死人だけでもどうにか出来ないか。信繁もじつと地図を見つめる

”それはお待ちください！”

外が騒然としているが・・・信繁達には関係なかった。

「・・・作戦はある。乗るか？」

”だあー！おめええら！俺ん邪魔すんじやねえ！”

”分かりますが、ここはお待ちくだされ！”

「ああ。もうお主ぐらいしか作戦は立てられん。」

「わかった。」

そついい顔を上げ、信繁は・・・後ろに見える鬼気迫る顔の伊達政宗を見つめた・・・。

「やあ・・・。」

半蔵は顔を上げると意外そつな顔をしていた。

「おめえ！どうしてこんな所に居るんだよ！」

伊達政宗は怒鳴りつける。後ろには片倉と笥の姿もある。

「敵の作戦について聞きに来た。」

「はあ?!」

あつさりと答える半蔵とは対照的に睨みつける形相で伊達政宗は見つめる。

「そちらこそどうしてここへ？」

「おれたちアさあ・・・片倉の背中が見えたもんで何かあるなと思つて部隊ごとこつちに来たんだよ！そしたらこの様！何なんだよ！それにてめえは何者だ！」

「これは好都合。伊達殿もそこに座つてくだされ・・・。」

「は？ふざけるなあ！」

伊達政宗は刀を信繁に突きつけるが・・・信繁は動揺した様子はない。

「ふざけているなぞ！拙者には毛頭無い！今は一刻を争う！だから早く！」

信繁の声にたじろぎながら、じっとその顔を見つめる。しばらく見つめた後、刀を納めると地図を囲むように伊達政宗は座る。それに合わせ、片倉と算も座る。

「今現在……。」

信繁は改めて地図を見ている全員を見渡す。

「堺の町は死人に襲われて……大方、城攻めに参加した兵士達も襲われている。」

「だあなあ。」

「半蔵殿……死人対策は何をもっていました？」

「僧侶部隊は今、各部隊に配分し、守ってもらっている。今は結界のみであるう。後は払い水を各部隊に配っているが……昨日から精製していない為、残数は少ない。」

「それじゃどうするんだよお！」

「なら、やはりこれか……。」

「と言い、堺郊外の町の入り口を刺す。」

「まず、伊達軍に配属される僧侶隊と、妖怪部隊を用いて、堺の町中の死人を倒します。」

「はあ。」

片倉は生返事をするが、その妖怪部隊については誰も……分かっただけはなかった。

「で、拙者達警備隊と伊達軍で、水を投入し、ここを守りもつす。」

水をつけた武器なら、死人は倒れるので、ここは水を撒いた部隊を固めるべきかと。半蔵殿？今回投入された兵士達の総数は？」

「4万7千。」

「伊達殿？ここに来た部隊の総数は？」

「2万2千。負傷者含むぞ。」

「十分。」

地図をにらみ信繁は余裕のある声を上げる。その様子に伊達と片

倉の二人は圧倒されていた。

「で、大方城から来る死人部隊は、ここを通るか。」

と言つて堺の町の北側を指さす。浜があり、防衛戦が出来ない所だ。

「だからここで流入を防ぎもつす。」

そう言い、信繁は浜と町の境目を指さす。確かに建物があつ

て戦いやすいが……。

「でさ、俺たちの軍は全滅か？」

正宗は不満そうに言う。

「いや……各部隊に僧侶がいるならその方々に結界を張つてもらえば、その結界の幅を徐々に狭める事で、死人を海岸沿いに固める事が出来もつす。そうすれば死人の群れの向きをいじる事が可能でござる。」

その言葉に全員が息をのむ。

「最終的にはここに死人を固め、水を使って耐えきれれば結界と念仏が効く彼らは……ここで退治できもつす。」

「でもそれまでは……。」

「豊臣、徳川の大砲での死亡推定人数……大方……3万7千の死人がここに集結しもつす。」

その言葉にじつと地図を見つめる。そして、信繁は伊達に頭を下げる。

「ここは……お願い致します。時間さえ稼げれば！きつと死人を滅せましょう。」

「でもさ……俺たち……。」

「弱き人々を守るが侍の本分でしょうが！ここに至つて家なぞ！何がありますように！」

信繁の声に口ごもつた正宗は……じつと見るしかなかった。

「分かつた。片倉。指示通りには位置指定やれ。細かい事はおめえに任せる。俺は……前が出る。」

「了解しました。」

片倉は二つ返事をし、立ち上がると信繁に一礼し、正宗と倉庫を後にした。

「あれ・・・すげえな。」

馬に戻る正宗は感心したように・・・いや半分放心した顔で片倉を見つめる。

「ですな。あれこそ正に君主の鏡。仁徳のなせる技でしょうな。」

「ほんと・・・俺もああ・・・なれるか？君主の鏡に・・・。」

「なれますぞ。あなた様は伊達家当主ですぞ。」

その言葉の変化に片倉は・・・言いしれぬ自信を感じるのだった。

「ではこれで作戦は終了か？」

半蔵は地図を見つめ、言った。算も信繁の先ほどの言葉に感動している所だった。

「いや。まだ・・・これが片づかねば、上陸されるか固まった所を大砲で終わりだろう。」

そう言い港から外を見つめると、大阪城近くの海に、大きな船が三隻、もう回転もやめたようにめった打ちに、地上を砲撃していた、
「ではどうする。」

「とりあえず、港を撃つ気はないが、こちらに気が付けば別だろう。」

信繁は近くの止まった船を見つめる。鉄甲船が三隻がこちらの最終戦力でもあるが・・・。装甲は大砲ではがされ、その偉容はいずれの船もなかった。船員も海に振り落とされたものも多く、戦死者の数にいとまがない。

「どうする・・・。」

半蔵はじつと見ているしかなかった。

「お主・・・船の指揮は出来るか？」

「いや・・・拙者は山の育ちなので・・・。」

半蔵はため息をついた。

「だとすると・・・半蔵殿。お主に頼みたい事がある。それが終わ

り次第、各所への連絡を頼む。」

「分かった・・・頼みとは・・・。」

「その鉄甲船の船長達を説得して欲しい。」

「戦ってもらうとか？」

「いや、幾つかでいいから俺たち警備兵を乗せ、指揮をさせて欲しいと。」

「・・・。」

信繁の顔を半蔵を見つめる。算も驚いたように見つめる。

「分かった・・・。これが終わったら各所に手配いたす。では・・・健闘を祈る・・・。」

そう言つと半蔵は港の奥に歩いていった。算は立ち上がると地図をまとめ始める。

「でも・・・どうして・・・。」

「あの船には・・・散々苦しめられた。豊臣の勝利とはならないが・・・あいつらのやっている事が許せない・・・すまない算。色々説明するにはいい間はまだ・・・時間がかかる。もう少し・・・つきあってくれ。」

そう言つと、信繁は算に大きく一礼した。

「拙者にそう言つてくだされば・・・拙者はどこにでも付いて行きますぞ。だから・・・」

顔を上げて。後拙者に様出来る物があれば・・・。」

「そうだな。油と火種、壺が出来るだけ欲しい。炮烙玉を作る。それで、連中は潰せる。」

「では・・・。」

「そうだ。大砲戦は使えないから・・・近接でしとめる。」

そう言つて見つめる先には黒い三隻の船が・・・しばらく様子を見ていた。

それからしばらくたった頃、半蔵は自陣に戻っていた。確かに信繁の作戦は的をえているが・・・だからと言って。伝令を伝え、伊

達軍に水を固める算段をつけ・・・作戦を伝えたが・・・一つ難題がある。それは契約だった。妖怪達と行った契約は”朝まで手伝って貰えれば・・・その身分を保障する”という物だった。だが、もう朝は過ぎ、しかも妖怪達の多くはその姿を人見られるのを嫌う。驚かれるのが好きではないそうだ。

「半蔵殿・・・」

「お吉の方。」

「あいつらに逃げられてしもうた。」

突然の声に後ろを向くと、お吉の方の姿があった。

「どこに・・・」

「すまんな。ワシに勇気がないばかりに・・・連中は海におる。海に小舟で逃げおった。」

「そうですか。」

信繁の見立て通りだ。なら・・・成功する可能性は高い。

「一緒に来て下されぬか。」

「わかった。」

その言葉の中に秘める意志の強さに、そっとお吉の方は後に付いてくる。妖怪達の長達がいる陣幕だ。昼は動きたくないらしく、ここで日差しと戦っている。

「オラ達の番は終わっただ。」

中に入ったその場でいきなり妖怪の一人が声を上げる。分かっていた。

「すまないが・・・戦闘は忙しそうだが・・・私らには関係ない。

帰して貰えぬか。本来なら、断り無く姿を消す所だが・・・それは流石に約束の確約がとれんので居て貰っている。」

妖怪の長が声を上げる。その言葉に全員が頷く。

「私らには安住の地が欲しい。誰にも襲われぬ・・・確約がな。」

彼ら妖怪もまた・・・戦国やその前に置いて差別された・・・民である。確かに悪い事をした者も多いが、一方で武功の為に、何もしていない妖怪が狩られてきた歴史も存在する。だからこそ、自分

たちの味方となる山の民を信じ、そして彼らと山の民が力を合わせ、山間部の大名を支えてきた。そして今・・・それが徳川の忍者部隊の統一に伴い、こうして連合軍となっていた。だがその一方で平和になった時は武功を消失させ、その武功の為に、妖怪狩りや偽罪人狩りが多発したのだ。彼らにとってこの戦とは・・・”保身”の為にしかなく・・・”義”を説くのは難しいように思えた。半蔵はいきなり頭を地面にこすりつける。

「すまない・・・。この中で・・・有志で構わない・・・。拙者達を・・・手伝って貰えないか。」

「なにがあつた？」

後ろで効いていたお吉の方が不思議そうに半蔵の後頭部を見つめる。

「今・・・堺の町は死人に襲われ・・・全滅しかかっている。」

”え・・・。”

妖怪達のざわめきが聞こえる。確かに彼らは大阪城で死人と戦い、そのほとんどを倒して帰ってきた。

「どういう事じゃ。」

長が聞いてくる。自分たちに何か不備があつたのかと心配そうな顔をする。

「・・・拙者の計算違いだ・・・。死人は・・・今・・・戦闘で増えている。」

”そんな事・・・オラ達はなんだつたんだ？”

ざわつきが一層大きくなる。

「だとしても、契約は契約、もう・・・関係ないはずだ。それに今出て行けば・・・また・・・。」

長の声が小さくなる。優しい人間なら大丈夫かもしれないがここは都会の堺。人々に討伐されかねない。

「だからこそ・・・有志で構わない。来たくなければ結構。それでも約束は守る。」

半蔵は頭を地面にこすりつけたまま話を続ける。

「なら・・・帰る。それが約束だ。」

長はそう言う戸半蔵に背中を向ける。

「それが・・・いいかもねえ。みんな・・・人間じゃないからね。」
お吉の方はやんわりと言葉を続ける。

「でも・・・。今のあんたら・・・迫害してきた人間と・・・何にも代わりやしないよ。」

お吉の方は半蔵の前に立ち、妖怪達を見つめる。体は強そうでも・・・瞳は怯えていた。

「今までだって・・・ここにいるのだって・・・みんな・・・人間が怖くても・・・無理矢理・・・我慢してきたんだ！これ以上は無理だ！」

「でもんだ。おめえら・・・優しくしてくった父ちゃや、母ちゃはいないべか？オラン居るぞ。最初は・・・みんな・・・人間も・・・こつちを怖がっただ。それは向こうも一緒だ。だってん。慣れれば、優しくしてくれんだと・・・オラは思うだ。」

トリさんは立ち上がり、周りをも見渡す。その言葉に更にうなだれる。

「半蔵も有志でいいと言ったからな。わしは・・・行くぞ、お主、くるか。報酬はないぞきつと。」

「だとしても、オラは・・・追われた事もあるんだ・・・助けられた事もあるんだ・・・それにみんなも・・・この人に助けられるんだって思ったら・・・助けてもバチ・・・あたんねえだ。」

「そうか・・・坊主どもは？」

「もう出発し申した。彼らは二つ返事で・・・了解した・・・。」

半蔵は顔を上げ、お吉の方を見つめる。

「わしらが後れを取れば・・・メンツは立たん。付いてこい。二人でもいれば、盾の一つにはなるう。」

「んだ。」

トリさんは妖怪達から抜け、お吉の方は陣容から抜けて歩いていった。しばらく半蔵は待ってみたが、それ以降妖怪達が動く気配は

なかった。

「もう・・・確かに・・・拙者もまた・・・時間がない・・・すまなかつた。この戦が終わりに次第、お主達の願い通りの手配を行う。感謝いたす。」

そう言うのと、半蔵は一礼すると、走って馬の元に戻り、馬を走らせて立つていった。半蔵にとって彼らの思いは分からないわけではなかった。怖い物は怖い。だから・・・だが・・・半蔵は走りながら堺を目指す。水の手配を確認し、前に立つ為だ。拙者に一人でも・・・居ないよりはいい！

「どうする・・・。」

残された陣にいる妖怪達は不安そうに、お互いを見る。その中で長はたたずんでいた。

「でも・・・あれ・・・どうするんですか・・・。」

「ああ・・・。」

あれから信繁はじつと、敵船を見つめる。何回か散発的に九鬼船団が鉄甲船で攻めるものの、いつも回転戦法で退かざる終えない所まで行かされる。あの回転大砲に大砲で挑めば・・・負ける。それは分かっていた。

” おおーあれ。何か、同じ所しか撃たないけど？ ”

” あれですか。それはそうですね。伝令することは船同士難しいですから”どこかの真似をしる”までしか言えません。昔、傭兵していた時に、船乗りに聞きました。”

じつと船を見つめると・・・船は大きいが・・・あれだと大方・・・大砲主眼の戦闘か・・・大砲の窓の照準・・・撃ち漏らしが多い・・・それを次の船が狙う。ある意味欠点を克服した編成だ。待て・・・大砲の窓・・・あそこには人がいる。

「炮烙玉準備できました！」

「分かった。」

狙い所はつかめたが・・・一対一で勝てる大きさと大砲じゃない

なら……。一気に……。

「信繁。」

振り向くとそこには刀を持った袴姿の秀頼の姿があった。

「どうしました？」

「あれと戦うのか？」

「はい。」

信繁は頷く。

「あんな大きいのにかなうわけないよ。」

秀頼は寂しそうに信繁を見つめる。

「大きくても……。勝てます。昔、童話で一寸法師というものがあ
りましてな。よく拙者も読まれたものです。秀頼様は？」

「ううん。お母様や乳母達はそう言う話とか嫌いだったから……。

」

「それは惜しいですな……。小さな体で、大きな鬼と戦い、勝つ
様は拙者も相当感銘を受けたものです。」

「でも……。どうしても行くなら……。僕も……。連れて行って

」

「……。戦闘経験は？」

信繁はあの時の姿から大体予想は付いていた。だがあえて聴いて
みた。当然諦めさせる為だ。

「僕もいつかは……。前線に立たなくちゃって思っていた。せめて
今だけはこれで……。」

「この戦は……。船の落ちれば死ぬ危険なもの……。それでもよ
ろしいですか？」

「……。大丈夫。信繁が居るもん。」

その言葉について、信繁はキュンとする。だがあえて声には出さな
かった。彼は男だ。

「それにこの着物があるから……。きつとお母様が……。守ってく
れるよ。」

「その着物は？」

秀頼は裏地を見える。そこには金色の刺繍がしてあり・・・不器用ながらもトリの上げ勝てるように見える。

「お母様が蝶を縫ってくれたんだ。ここ。だからきつと。」
その顔は泣きそうでも・・・今はなくほどの暇はない。縫うって・・・流石に不器用だったらしいな。あの人は。ぬう・・・。ぬ・・・う・・・。ちよつ！ちよつと待て！縫う！縫うんだ！それだ！確かに三隻で、大砲の弾を詰めるまでの間隔。無理矢理ねじ込めば、攪乱か、怯えさせて舵を狂わせれば・・・。行ける。後は・・・攻撃した後だ・・・。

「分かりました。若の初陣。拙者が先陣を切りましょう。只・・・。戦場はあの時より、きつと恐ろしくございます。」

そう言って信繁は淀君の事を思い出す。城の天守閣から落ちて無傷な奴が迫ってくるより怖くない事・・・。早々無いな。

「分かった・・・。出来るだけ・・・。がんばる！」

やる気満々の秀頼の顔について信繁の笑みがほころぶ。こうして生きていく若い命・・・。父の気持ちか・・・。少し分かった気がする。

そう思い、じつとあの戦艦を見る。あの船を止めねば・・・。きつと未来は・・・。明るい未来はない。決意を固め、ただじつと見つめる信繁であった。

「で・・・。これかぁ・・・。俺たちは・・・。」

家の屋根の上に乗っかり遠見筒で、先を伊達政宗は見つめていた。水は届いたので、どうにか通路上の死人はどうかには出来たが・・・。遠見筒の見える先には・・・。死体の群れがまるでこちらに吸い寄せられるように歩いている。

「今は、刃物が効くとはいえ・・・。水が乾けば効かなくなります。」
片倉は後ろに座り、鮮烈を見つめる。警備部隊の作った柵を鉄立てで補強し、水をつけた矢で、相手を追い払うべく構えさせている。その行進はまるで・・・。片倉から見える範囲だけでも・・・。黒い壁だった。

「でも今は・・・連中は普通に倒れる。しかも殿だ。」

正宗は何故か胸のわくわくが止まらない感じだった。だが、片倉にはまだ不安があった。届いた水が少ないのと、補給線がない位置なので、水が尽きればどうしたらいいのか分からなかった。そして・・・後方を見つめる。まだ堺の町は阿鼻叫喚と言った所だった。その敵がいつ後方から襲ってくるのか・・・計りかねるのが・・・一番の難敵だった。

「第一射・・・引きつける！」

正宗の声に合わせて兵士達が柵の合間から弓を構える。その間にも、水の樽を鉄立ての間に隠し、じつと構える。その陣の中には一部の豊臣兵士達も混ざっていた。だが、それは正宗にとっては関係なかった。今は全力で生きる事しか考えなかった。そうこう言っている内に、敵の顔がかすかに確認できる位置まで接近してきている。

「第二射！準備しろお！第一者！撃てえ！」

その掛け声とともに矢はまるで雨のように放たれていく。矢を食らった死人達はばたばたとその場に倒れていく。矢を撃ち終わった兵士達は後ろに下がり、近くの家に刺してある矢を受け取る。替わり様に張ってきた弓を持った入ってきて構える。

「撃て！」

その号令とともに、第二者の矢が、死人部隊の後続部隊に当たり、後続の群れは倒れた・・・だが・・・その屍を越えて死人はまだ行進を続ける。正宗が遠見筒を除くと、その視界の果てまで死人の群れで埋まっていた！

「おめえら！もう少し早く撃つぞ！準備だ！」

「応！」

その声に兵士達が準備を始める・・・今俺が弱音を言ったら・・・きつと逃げる！いや俺も逃げたいが・・・

”弱き人々を守るが侍の本分でしょうが！”

あの言葉が頭をよぎる。後ろを見れば・・・まだ火の手の上がない地域があるなら！

俺は怖くても・・・踏みとどまる！

「近づいた奴らは・・・たたつ斬れ！」

伊達政宗の掛け声が響く。この後ろは大都市・・・まだ生きている人がいる限り・・・。

「信繁！」

半蔵は港に舞い戻ると出航準備を始める信繁の元にやってきた。

「どうだった？」

「僧侶部隊は動いたが・・・妖怪は・・・。」

「それでもいい。誰も動かぬよりはいい。後はこれで。」

「やはりな。」

「や。」

その声に横を居るといつの間にか、お吉の方と、トリさんが居た。

「やはりお主の作戦か・・・。だろうと思った。かなり無茶だったからな。」

「んだけんど・・・おら・・・これ・・・これが海だか？」

トリさんは珍しそうに海を見つめる。遠くを見れば秀頼もまた何か色々準備をしている。

「お主は町中に戻り、死人から人々を守って参れ。そのために来たのであるう。」

「んだけんどこれ・・・。」

「いいから行ってこい。後でゆつくり遊ばせてやるから。」

「ほんじゃ・・・。信繁・・・後でゆつくしな。」

「分かった。後で・・・あのおじさん達へのお土産買ってやるから。」

「んじゃ。」

そう言つと、トリさんは走って町中に向かっていった。道路上なら、大軍には会わない為、大丈夫だと思うが・・・。

「お吉の方様・・・。」

「船に乗ってどこに行く気だ？」

お吉の方は不思議そうに見つめる。その頃には炮烙玉の載せ替えの準備も出来ていた。

「あれです。あれを倒しに。」

信繁が指さすのはもちろん……。海上の三つの黒い船だ。

「あれか……。あいつら……。行けるのか？」

「勝算は他の者に比べ少ないですが……。でもあれを止めねば……。死人倒しに来た者達がやられてしまいます。」

「本当に……。お主は損な役回りだのう。約束なぞしなければよかった。」

「ん？」

「お主には関係ない。風がこれでは……。まずかろう。ワシも行くぞ。」

「分かりました。こちらへ。」

そう言い信繁はお吉の方を船内に案内しようとする。棧橋に乗る直前、お吉の方は

「そうじゃ、この船に小舟はあるか？」

「いえ。」

「そうか……。」

そう言つとお吉の方は近くの小舟を見つけると、尻尾で釣り上げる。

「行くぞ。これで本当に終わらせて……。後は帰るだけじゃ。」

「はあ。」

そう言い意気揚々と乗り込むお吉の方を見て、信繁は何となく不安を覚えてしまった。

「かなり……。戦績がいいようすな。」

優男は甲板に出て、双眼鏡を眺める。向こうには穴だらけとなった、大阪城前の様子を見ていた。そこにはうるつく死人達がいた。それは生存者を求め、歩いていった。

「ですな。」

キースもまた外に出て、同じように双眼鏡を見つめた。

「後はどうしますか？」

「敵兵が見えたら打ち続ければよい。落ち着いたようならこちらが下りていけば・・・それでよい。」

落ち着いたように空を見る。もう昼過ぎらしく・・・日が西に見える。

「上陸はいつ頃に？」

「死人に船員が襲われては叶わぬ・・・向こうが引き上げる夜までまとう。」

「分かりました。」

そう言いじつと大阪城を見ていると・・・頬を風がよそぐ・・・あれ？この風向き！

優男は立ち上がる。風向きが急に変わり始め、北向きになっている。

「船長！南側から突進してくる船2隻！」

優男が走って後方に行くのと確かにぼろぼろの・・・鉄甲船が二隻こちらに突進している。

「トルネード！」

「イエツサー！」

優男の掛け声とともに、操舵士達が舵を切り、帆の向きを変える。それと共に船は動き始めた。またくるとは愚かな・・・。だがその速さは風に乗った船と動き始めた船。差はあった。

「戦闘だ！今動き始めた船をねらえ！」

鉄甲船を走らせる信繁は掛け声をあげる。作戦を考えている間じつと船を見ていると、後続に二つの船はずっと同じ行動をしていたと言う事は根元はどこか。それは必ず最初に動き出す船でなくてはならない。その船を止めれば混乱する。それが今回の最大の作戦にして・・・唯一の作戦である。運良くお吉の方様が来てくれたが・・・。そうでなければ艦をこいででも、寄せるつもりだった。それとも、しばらく手に赤い旗を持ち、様子を見る。やはり、横にある大砲をこちらに向ける気だ！赤い旗を頭上に掲げる。それとともに

乗組員達が帆の向きを調整する。こちらは・・・後方に周り・・・後続の船は前に回り込んで船を止める！速度を更に上げ、勢いよく突っ込む。大砲は重く、照準を上下に合わせづらい所を狙う！後ろの船と、分かれ、追い風もあって素早く回り込むが・・・この船は大きい。鉄甲船船の上に二階建ての建物だが・・・これは・・・それよりも甲板が高い。だから、ここで斬り合いは出来ない。だが、それも予想済み。

「大砲を撃つに近すぎねえか！」

船員の恐怖にも近い声が聞こえる。だが向こうはここまで計算済みのはず。だがここからだ！秀頼はもう縁を掴むだけで精一杯であった。

「お前ら！大砲の穴に炮烙玉投げつける！中にある火薬を全て焼き払え！」

「おお！」

信繁の合図とともに炮烙玉に火をつけ、紐を廻して炮烙玉を大砲の穴めがけて投げつける。元々この戦法は海賊戦法ではあるが、その製法自身は大砲の研究課程で多くの武家によって研究されていた。無論奇襲を得意とする信繁は九度山で、その書を読み、自信自らでいくつもの方法を考えられていた。この作戦は表から食い止める連中にもあたえてある。だが、数には限界がある。大砲の中から叫び声が聞ける。無論この船は鉄ではなく、外洋渡航用の・・・木の船だ。水に強くとも、火には弱い。大砲の中から叫び声が聞こえる。

「何だ！何が起きた！」

優男の声が聞こえる。船内は蜂の巣を突いたような大騒ぎになっていた。

「大砲室から火が！」

「何！」

優男が甲板に乗り出すと、大砲の死角から何か物を投げている・・・。

「水で消せ！甲板員！奴らを銃で蹴散らせ！」

その掛け声とともに船員達が船室から銃を取り出す。だがいざ船員隊が下を向いた頃にはもう船は後方から抜けていた。そのまま鉄甲船は少し傾きながらも、後ろの船の側面内側に回り込む。確かにここまで大きい船なら船の内側から来る大砲の数は遠くより少ない。衝突するリスクを考えてもこの作戦は無茶だった。

「前！突っ込め！重さで振り切る！」

優男は指示を出す。これではこの船の大砲は離さなければ使えない。なら突っ切る！

「何い！」

信繁は叫び声を上げる。思った以上に船が速く、戦闘の船がだしゅつ使用とする。これを真似されたら・・・距離を取られる。

「やっとワシの出番だのう。少し時間を稼ぐ。その間に・・・。」
「分かった。」

その声を聴くか聴かぬ内にお吉の方は尻尾で小舟を戻る位置に投げつける。着水すると同時に、その船に一跳躍で飛びの乗る。

「さて・・・神風の実演と行きましようか！」

そう言い、着物の隙間方扇子を取り出すと、突風を先頭の船の横っ面に当て、船を揺らす・・・。流石に船が重く。揺らすまでが限界だった。だが、その隙をつき、信繁達は反対側に回り込む。真ん中の船は先頭の船の様子に慌て・・・先頭との船の間が離れ始め、最後の船は二番目の船を追い越しかかっていた。完全に隊列が崩壊した瞬間であった。この頃の大砲は弾を込め、撃つまでに少しの間がかかる為、方向の構想くで入れ替えると、大砲を撃つまでに時間がかかる。その間に側によると、ありったけの炮烙玉を打ち込む。完全に真ん中の船は混乱していたが、前を塞いだ鉄甲船は最初の船の突破のあおりで遠く離れてしまい、距離を戻すのに手間取っていた。只ぼつんとお吉の方は小舟の上で浮かんでいた。

「・・・そう言えば・・・船のこぎ方とか知らなかったの・・・ワシ。さて・・・まあ・・・水に触れるのもいやだしのお。だが！」

向こうを見ると幾つかの・・・崩落玉が届かない、撃てば鉄甲船

の上を通過しそうな最上階の大砲が……こちらを狙う。お吉の方はまずは突風でたい方の訪問を狙うが……弾は減速しても……まだ殺傷力はあるようだ。なら！お吉の方は尻尾を広げる。尻尾を三本まとめ、尻尾で弾き飛ばす。他の弾は脇にそれ、船を大きく揺らす。

「流石に大砲の弾は無茶であつたか……。」

お吉の方は顔をしかめる。流石に勢いのある重い弾を弾くには尻尾の強度が足りない。

「ちい！」

甲板に出たアンサレムとキースは舌打ちをする。あの悪魔……まだ追いかけてくるか！大砲さえ弾くとは……何という悪魔！

「まだやれる。側面にい！」

層支持しようとした瞬間、ざわつく声が聞こえる。そちらのほうを優男が、双眼鏡で見ると、3隻目の船が突進してくるのが分かる。

あのコースは！

「全船！全速前進！」

「は！」

その声に副長が走る。もう伝令とかもこの状況で戻ってくる様子はない……。その間にも全速力で走る船は……出過ぎた三号艦、ロンドンブルムの側面に激突する！その衝撃で船が大きく揺れ……。優男の双眼鏡には船に乗る鎧武者達が船に乗り込む様子が映し出されていった！

「どうする！あのままだと三番艦が！」

優男が聞いてくる。下の大砲室は火薬や船内が火事で、火を納めるのに手一杯だ。だからといって向こうが切り込みを掛けてくるわけではないこの状況……。手を出すわけにはいかなかった。ここに踏みとどまるのは危険！だからといって助けに行かなければ……。船乗りの多くはこの当時軽装を好む為、度無手も鎧を着た人間との先頭では防御力の差で圧倒的不利となる。と言う事は、あの船はもう……。どうしてこうなった！特にあの小舟の上の黄色いもじゃもじ

やの何か！

「我々は猊下の元に報告書を持ち帰る任務がある。後は分かるな！」
キースは厳しい目で、反対側に回り込んだ船を見つめる。あのままだと！

「後ろに信号を送れ！このまま内海を一気に抜け！退却する！」
その声に副長が手旗を持って後方に向かう。

「全員、全速で内海を突っ切る！消化要員以外を甲板に逃がせ！後、大砲板を閉める！付いて来れない船は！おいていけ！」
「了解！」

掛け声で走っていくを見送ると、手すりを力一杯強打する。これが彼ら、イスパニア第3艦隊初の敗北でもある。

「これで・・・最後か・・・。」
「もう・・・。」

所々に散乱した水樽は最早すべて空。敵はいまだ果てが見えず・・・伊達政宗はじつと向こうを見るが、その先を居る事は出来ない。ここまでの物量の差・・・。確かに作戦通りなら・・・もうそろそろ・・・。髭に死に方向き、もうそろそろ夕方にもなる時・・・。そろそろ増援が来ないとこっちが落ちるぞ。そう言えば向こうの砲撃がやんできたな・・・。そろそろ・・・行けるか？もう・・・。

「正宗様！しっかりとってください！」

正宗が頭を起こすと、そこには柵が突破され、つばぜり合いする兵士達！伊達政宗は立ち上がり、やねから下りようとするがここは民家の屋根上、はしごで下りるしかない！飛び降りた場合は甲冑の重みで骨折する。はしごを探し、見渡した瞬間、何か・・・異形な・・・いや・・・何でこんな所に火の玉が？兵士を見ると、笠が、兵士に組み付いた死人を弾き飛ばす。

「ここで・・・合っていたようだな。」

その声に振り向くと、数多くの妖怪達と一緒に坊さんが居る。

「俺が増援だ。前は頂く。おめえらは後ろはから援護頼む。」

「勝手な事言いやがる。おめえら！・・・水・・・持ってきたか？」
正宗ははしごを下りながら、片腕に包帯を巻いた坊さんを見つめる。

「ふん。みんなを助けるのにつかかつちまったよ。」

「おめえ。何か水みたいの、ごくごく飲んでたくせに！」

小さな妖怪が叫ぶ。この状況に流石に伊達政宗も啞然とする。

「あれは酒だ。」

包帯のお坊さんは言うつと腰のひょうたんの中身を口に注ぐ。そして、伊達政宗に渡す。確かに酒の強い匂いがする。

「おめえ、こんな時に酒かよ。」

「この状況に勝機なんざ保っていられるかよ！あと！邪魔・・・するなよ！おめえら！」

「町中でお前を助けてやったのは俺たちなのに！」

「知るか！行くぞ！」

そう言うつと、坊さんは念仏を唱え始める。それを聞いた死人達が動かなくなっていく。

「これは！」

「いけそうすな。」

片倉もほつと肩をおろす。あまりの出来事に、正宗はじつと全線を光恵m流。坊さんが念仏を唱え、妖怪が死人を押さえる。何とも言えないこの風景に・・・自分の中の何かが壊れていく気がした。

そして、その向こうに見える大阪城から火の手が上がり始めたのがちょうど夕暮れ時のこの時であった。その狼煙にも近い大阪城の炎上は何か時代が終わっていく感覚が・・・戦場の誰しもが感じた事であった。

「やっと終わった。」

すべての後処理が終わって軍を各地に退かせるまでに5月八日から更に一週間を要していた。戦闘終了後、お互い一緒に戦った守備

隊と伊達政宗軍は一緒に勝利を喜び、形上は防衛隊が降伏し、無罪放免にする事で事なきを得た。それから、残存の死人狩り、褒賞の選定、死人の首（生きていると勘違いした兵士達の寄る首かり）の除去。そして・・・戦犯の処理である。あれから早馬で到着させた影武者に衣装を着せたりするなど死がしく、裏まで半蔵は手を回せなかった。その間にも彼ら忍軍と妖怪部隊に來客があつた。

「よー！」

「兄貴か・・・。」

信繁は嫌そうな顔で信之を見つめる。お吉の方もその感じだつた。「生きててよかつたな。お前。で。皆のもの！これだ！」

そう言つて指さした先には、食料と酒がある荷車と。もう一つの荷車がある。

「これは？」

もう一つの荷車には、白いふさふさが付いた装束がある。

「これが・・・一応な。俺。妖怪との交渉役つて言う事だな。しばらく妖怪の窓口つとめる異なつたんでな。それ出来たわけだ。これでも急いで来たんだぞ。」

「・・・それはどうも。」

妖怪達を盛ると、食べ物にむしゃぶりつくもの、酒に飛びつく青海とそれを止める筈。服を勝手に着始めるものなど多数だ。その中でゆっくりと長が歩いてくる。

「安住の件は・・・。」

「分かつている。一つは、その服を着ている奴は修行僧だと言う事で、山間部だけなら自由に通行できる。後は、武士からは妖怪狩りは行わない。今後、妖怪からの相談専用の自社を設置するからそこで、今後細かい所を詰めていく。出来る限りの支援を俺は約束する。一応かねとかが欲しい時はまあ忍びの仕事ならこつちで調達できるから、気軽に来てくれ。あの服はお前らにやるから。後は好きにしてくれ。」

「そこまでしなくてもよいのに・・・。」

長は呆れたように見つめる。

「半蔵に頼まれていたんだ。このぐらいいはしてやってくれってな。ま、持ってけ。」

そう言うと長は一礼すると、食事をむさぼる妖怪達の所に歩いていった。

「ま、兄貴もいい所あるな。そうだ。兄貴ありがとな。赤い染料。」

「ふん。真田が黒い鎧を着ているなぞ恥だ！」

そう言うと説明の時に持っていた白い僧侶服を差し出す。

「これは？」

「秀頼殿の事は聞いている。そいつを持って薩摩に行け。薩摩の島津殿には話をつけてある。船もでる予定があるし、家族の分とかとお主の分もある。まずは、そこに行つてこい。それが終わつたら・・・江戸に向かつてくれ。そこで半蔵は待っているそうだ。」

「わかった。さっそくむかう。では。」

そう言い信繁は意匠を持って青海達の肩を叩き、衣装を指さす。

「やっぱりあいつは忙しそうだな。」

「ふん。お主も意地が悪い。無事を確認する為に乗り込んだくせに。」

その様子をお吉の方が見つめる。

「そうですか？お師匠様。」

「そうじゃろが。わしに”信繁を影から守つてくだされ”とか言つたくせに。」

「それは感謝します。」

信之はお吉の方に一礼する。

「まあよい。分かつておるじゃろつな。」

「はい。酒宴は用意してあります。只、この処理が終わらなければならぬので。」

「分かつておるよ。さて、一応忍軍の連中に挨拶したら、ワシは帰るぞ。じゃあな。」

その言葉とともに強い一陣の風に目を伏せると・・・お吉の方の

姿はなかった。

「感謝しますよ。本当に。」

信之は手を叩くと、妖怪達を集め始めた。これからの事について説明する必要がある。無論ここからが根気のいる作業。時間がかかるからな。

「ここが……。」

信繁の家族と、秀頼は山奥に島津家の侍とともに、来ていた。そこには小さいながらも屋敷が構えられており、中には幾つかの家財がある。

「はい。半蔵殿から頼まれたとおり、江戸から寄せたある程度の書籍を入れてあります。また島津にこれば、仕官なら受け付けると、殿から……。では。」

そう言うで一礼し、侍は、麓の村長の内へ向かっていった。信繁が中を覗くと、そこは振るいながらもしっぴかりした作りで、ある程度の貴人なら、気兼ねなく暮らせそうだ。

「信繁。ここがそう？」

「はい。」

もう大阪かから船を乗り、山奥まで歩いて、十日余りの山中にある屋敷。半蔵は亡き家康との遺言である”秀頼の命は守って欲しい”の命を果たす為、この地をあてがってくれていた。もし捕らえるが出来ても、元からここに住まわせるつもりだったらしい。秀頼ははしやいで中を散策している。

「私たちはこれからどうなるのでしょうか……。」

信繁は船旅の中、じっと考えていた。どうすればいいのか……。大方天海殿と同じく……。別名という事になるだろうが……。今までの印象を考えれば荒事になる可能性は高い。また妻に迷惑を返る事になりそうだ。実際、堺の港には妻が居て……。その命を守るだけでも手一杯だったともとれる。

「すまない。おまえに頼みがある。」

「何でしょうか。」

妻はじつと、信繁の顔を見つめる。彼女も彼女なりに覚悟があったようだ。

「俺にもし・・・何かあったときのため。お前と太郎にはここで秀頼様を守って欲しい。ここなら生きていくのに苦労はないから・・・」

その言葉を妻は身を震わせ、じつと聞いていた。彼の性格とかが分かっているだけ会って予想できていたのだろう。太郎も、その身を震わせる母親をじつと見ていた。

「太郎。」

「はい。」

急に呼ばれて背筋を伸ばす太郎。

「俺は、行かなきゃならない所がある。そこに行けば今度はもう帰ってこられないだろう。だから・・・。」

信繁の言葉に・・・太郎は鼻をすすり、貯めていた涙は勝手に頬を落ちていった。

「お前に・・・漢としての頼みがある。」

「お父様！」

「初めてで・・・最後かもしれない、重要な任務だ！」

「はい！」

顔を上げ、きりつと父親の顔を見据える。涙が信繁の頬にも当たるが、それは信繁自身の涙で流されていった。

「お前達、秀頼達を頼む。」

「わかりました。」

妻がそう答える。太郎は答えようとするが・・・涙で、答えが出来ないようだ。嗚咽が響く。

「秀頼様に伝えてくる。頼んだ。」

「わかりました。」

そう言つと屋敷の縁側で座っている秀頼の横にすんと座った。

「信繁・・・。行くの？」

「はい。身の回りの世話は、彼女たちに託しました。」

「どこに行くの？」

「とりあえずは江戸に……。それから……。わかりませぬ。」

「そうか……。」

「帰ってくる？」

「わかりませぬ。」

「もう……お別れなの？」

「わかりませぬ。」

「どうしていくの……。」

「わかり……。ませぬ……。只……。もし従わねばここは徳川の手の中。保護するものが居なければ……。」

「何で……。そこまで……。何の血も持たないぼくをたすけるの？」

「わかりませぬ……。ただ……。ただ……。叔父貴の息子同士だからかもしれませぬ。」

「おじき……。とうさんのこと？ どうしてお前も息子なの？」

「昔……。あなたが生まれる前まで、叔父貴には子供が居ませんでした。それで各地の優秀な子を容姿として取ったのです。俺もそう言う一人でした。ですが、徐々に身の危険を感じたおじきはその子供達を一時的に帰す事にしました。そして俺は……。帰されました。だが、俺も、後藤も、毛利も……。みんなあの人の優しさに助けられました。その恩をあの人が大切にしていたあなたに返しに来たのですよ。」

「でも僕じゃないなら……。ぼくは……。どうしたらいいの？」

「わかりませぬ……。わかりませぬ。それは自分で答えをえなくてはならない。人には聞けないものです。私もまた、その答えを探しているのですから。」

「僕……。わかった……。ありがとう……。信繁・お別れですね。」

「はい。」

その瞬間ぎゅうつと秀頼を強く抱きしめると、すぐに離し、立ち上がると信繁は一礼した。

「また会おうよ。いつか。」

「はい。」

その言葉に弾けるように背を向けると、信繁は妻達の下に戻る。

「行ってくる。」

「はい。」

信繁は秀頼にしたように、想いを込めてぎゅっと抱きしめる。

「太郎・・・頼んだぞ。」

「はい！」

涙ながらの太郎の顔を見ながら優しくぎゅっと信繁は太郎を抱きしめた。そして離すと手を振り上げるとそのまま後ろを振り向かず・・・別れががつかなくて、別れががつかなくてすぎて・・・最後まで振り向く事は出来なかった。

第十四節 五月八日 堺攻防戦（後書き）

これで、”大阪夏の陣”の章は終わりです。これを以ってすべての戦死者と死人となった魂のご冥福をこの場を借りて祈ります。次回は外伝”服部半蔵”の予定です。楽しみにお待ちください。

外伝 ” 服部半蔵 ” の報告書 (前書き)

外伝はこの先展開にかかわりないものの、気になるキャラクターのその後などを書くものです。ただ、ページは少なめの予定です。

外伝 ”服部半蔵” の報告書

外伝 ”服部半蔵” の報告書

「これが・・・報告書か・・・。」

目の前でかしく・・・僧侶のような目立たない服装をした男を見つめる。少し地味目にも見える着物の侍は、その本を見つめる。表紙には”松尾芭蕉の書”と書かれている。

「はい。」

外を見れば、この小さな炭焼き小屋の外は、うっすらと雪に包まれ、外は寒い。

「これは本当に・・・本当なのか？」

侍は本をまじまじと見つめる。そこには達筆ながらも様々な事が書かれていた。

「はい。」

侍はふと顔を上げ、顔を伏せた僧侶のような男の顔をあえて下からのぞき込む。

「おめえ・・・会わない間に老けたな。」

「はい。」

僧侶の男は即答する。

「そんなお前は見たくはない・・・。」

「そうですね。私も、そのような落ち着かれた伊達殿は余り・・・。」

「ふん。やっと言うようになったな。」

じつと顔を見つめた正宗は顔を上げ、腰を据えて書類を読み始める。

「これが、今までの顛末に関する書でございます。」

半蔵は片膝を尽き、敬意を示しつつ、じつと顔を伏せていた。

「わかっている。だけどこれ・・・本当なのか？」

「・・・最初の半分は拙者が地位につく前、それから調査した所
本当にございます。」

正宗は上げた顔をまた、下に向ける。

「でもまあ・・・これ・・・。本当の本当に真実なら・・・俺・・・
あの基督教とやらがほんとうに嫌になつたな。」

呆れて書面を見つめているが、正宗の声は軽い。情報を鵜呑みに
するほど単純な男ではなかった。

その報告書とはそれまでいくつもの毒殺、一揆などに関する戦国
初期からの不審な潜入者に関する調査だった。

織田信長に接近した宣教師達。

彼らの目的とは、友好的な大名を増やし、自分たちの僕となる国
を探していた為だった。彼らの概念によると、キリスト教を認めた
と言う事は、自分たちの手下になった事を意味する考えを持ってい
た事が確認された。

三河一向宗の一揆の扇動者。

当初は一向一揆衆のみの反乱だと思われていたが、黒衣者の姿を
確認する。それが武器を取り放棄する事を語り、それにのせられて
いたらしいと言う事。

三方原の戦い後の武田信玄の暗殺。

当時、宣教師達の教会がある所への被害をおそれた彼らは織田信
長に取り入る為、暗殺を行った事。これにより織田信長は、表では
信頼を装いながらも、裏では対抗策を練り始めていた。

そしてその後の甲斐への攪乱工作。上杉謙信の暗殺。

北の国の者の多くは信心深く、仏教国であった為、その攪乱を狙
い内部工作を行っていた書類を発見した。それにより、各地で武将

をたぶらかし、内乱を各地で起こさせていた。これにより、上杉謙信や武田信玄の上洛を防いでいた。

その全てに西洋の一部でしか使われない薬が使われていた事。戦場での死人発生の裏に、宣教師達が戦場に紛れ、薬の実験台に兵士達を使った事。

中部の戦場に置いて戦場跡から死人が発生し、人々を襲う事件が多発していた。当初、弔わない事だと考えられていたが、それらは各地で発生し、その対処におわれていた。しかし、大阪城の兵士達から不思議な粉を発見しこれで反魂の術を行っていた事が発覚。その粉をご禁制にした事。

信長の暗殺。と浅井三姉妹とキリシタン信者による豊臣の実行支配。大阪城の記述だと彼らの犯行だと思われる。またその後、豊臣秀吉を攪乱させ、明智光秀を撃つ事にも成功したと書かれていた。後に、家臣達にキリシタンや、自分たちの行きをかけた者を配置。傀儡政権を作成する事に成功したと書かれていた。

これらの理由などについて書かれた報告書は、当初徳川家康が、諸大名に配る予定の報告書でもある。だがこれはその内容の苛烈さ故に実際に配布された数は少なく、ごく少数の関係者にしか配られていない。

「でしような。」

内容をまとめた本人は涼しい声で答える。

「拙者もこの事を知るに連れ、連中が嫌いになり申した。」

そう言つとやつと、半蔵は顔を上げる。

「でもまあ。確かに約束通り、こいつは貰っておく。・・・でもさ。」

「はい？」

「お前ほどの男がどうしてここにいます。これは使いの者でもいいんじゃないのか？」

正宗は外を見つめる。この炭焼き小屋のある山の側、鷹狩り道具を持たせ、片倉には近くをまわらせている。鷹狩りの多くは、実際に行つ狩りよりも、山に向かう振りをして、忍者、妖怪などに接触する事や、町中お忍びで遊びに行く事が多く、実質諜報活動を示す暗語でもあった。特にこういう炭焼き小屋の側に人がいても怪しむものは少ない。実査誰が怪しむのかも、もうわからないほどの太平の世でもあるが……。

「いやあ。もう拙者は……人を使う立場にござらん。」

「ん？……ま……座れや。」

正宗は自分の隣を叩く。そこは腰掛けがあり、隣に座る事が出来る。無論、勝手知つたる忍びの半蔵。軽く頷くとその席に座つた。

「はい。」

「で、お前どうかしたのか？」

「そう……それは江戸を立つ時でござる。」

「お前ほどの男……どうしてここを去る？」

徳川の重臣達が居並ぶ中、袴を着た半蔵はきつい顔で重臣達を見つめる。

「拙者はもう……疲れ申した。」

乾いた笑みを浮かべ、半蔵はじつと前を見つめた。

「お主がいなければ、大阪での勝利も、事後処理も出来ぬ。」

「それも終わり申した。」

「でも……。でもこれから親方様の片腕でもあるお主がいなければ幕府は……。」

「わかつてはいるが……もうこれからは皆で決めればよい。それは殿の遺言でも書かれておつた。いつまでも殿に頼つておつてはいつか……頼りに出来ぬようになりますぞ。」

「しかし……しかし……お主がいなければ伊賀はどうなる。あ

いつらは……。」

「ここで言うあいつらとはお庭番であるが、この時はまだ、城中であつても公言はばかられた。」

「それは……後任は決めてありもつすし、その事は向こうも承知している。もう拙者の出番ではござらん。」

そのまなざしをじつと重臣達は見つめるが、半蔵の意志は硬かつた。半蔵は立ち上がると一礼して、そのまま、無言で部屋を後にした。

「半蔵殿……。」

しわがれた声に廊下の向こうを半蔵が見つめると、そこには天海僧正の姿があつた。

「天海殿……。」

天海は手招きをすると、半蔵はすつと天海の近くに寄つた。

「半蔵殿……やはり……行きなさるか。」

「はい。拙者が城内に止まるのはもう……出来もつさぬ。」

半蔵達があるていくと、適当な部屋に入りそこで天海と半蔵は向かい合つて腰を掛ける。

「まあ……ワシは止めはせんよ。」

「かたじけない。」

「ただ……これからどうするのだ？」

「これからは……殿がそうしたように……拙者も平和になつた各地を周り……そして世を見て……そして……いきたいと思ひます。」

半蔵は少し開いたふすまの隙間から見える空を見つめる。

「殿か……。考え直す事は出来ぬか？お主の知恵が欲しい時もあるつに。」

「ここだから言えますが……実際。あの時痛感しました。」

「先の戦いか……。」

天海は思い浮かべる。大阪夏の陣。その激戦は想像を絶し、失つたものは大きい。

「拙者が実際に指揮を執ろうとしても……。何も出来もつさぬ。何も……。浮かばぬ自分の絶望いたした。だから……。だから……。」

「だとしても、殿の意志を継ぐべきではないか？」

「……。それはもう……。でももう……。殿が言っていた事をなした終えた拙者はもう、ここに居場所はござらん。」

「そうか……。。」

「それに、忍び達を使い、しばらくは裏からここを見張りもつす。」

「そうか。」

少しすつきりした顔で、天海は見つめる。半蔵の意志は固いようだ。

「実際拙者はもう……。殿のいないこの世なぞ……。とも思いましたか……。まだとのの意志は完成してはいないと思います故……。」

「わかつている。最後は儂に任せろ。」

天海は自身の胸を叩く。

「いえ、そうではありませぬ。後強いて言えば、城の堅苦しいのはやはり苦手で。拙者自身、各地の酒や上手いものを食べてみたいのです。」

「そうか……。流石……。お主らしいな。」

「天海殿はどうするつもりで。」

「儂はここに骨を埋めるよ。最後の生き残りは最後らしく最後まで見届けるさ。」

天海はじつと隙間から見る空を見る。空は晴れ渡り……。少し暑い。

「そうですか……。。」

「それにこの年だ。もう……。早々登城ですらきついのに……。旅なぞできぬよ。」

「確かに……。。」

そう言うひとしきり笑った戸半蔵は立ち上がる。

「そつだ。」

立ち上がった半蔵は天海を見つめる。

「どうなされた？」

「結局、信繁殿はどうなされた？お主のお気に入りでもあるう？」

「それは……。」

「わかつたよ。ま……そつ言つ事だ。」

そつ言つと天海は立ち上がり、すたすたと奥には行つてしまった。

「退任したのか。」

「はい。拙者はやはり……内府様がいなければ……この世に

さえ……未練はござらん。」

「でも死んではないだ？」

わざとらしく正宗は聞いてみる。

「ですな。今更自害など……拙者は……怖くてできもつさぬ。」

半蔵も分かつてるように答える。

「でも……どうするよ。これから。」

「殿が平和にした世を周り……殿が今までしたように、拙者も世

を周り、悪しきをくじき良きを助ける事に致します。」

「と言つ事はここはついで？」

そつ言いながら、正宗は腰の水筒の水をぐつと煽る。

「ま……そうとも言いますかな……。」

「言つてくれるな。そこはお世辞でも違つて言つた方が……？」

「いえ、これから時間を掛け、諸国を巡り、諸大名や、各地を周り

もつす。」

「そつか……。と言つ事は江戸からここまで？」

「歩いてきました。」

「そつか。」

頷くと納得し立ち上がる。まだ旅の途中ならあの時の会議の参加者……次は上杉殿のはずだ。

「そつだ。あの時会つた若武者……あいつ誰だ？」

正宗は不思議そうに半蔵を見つめる。二人の間には笹の葉に包まれた小豆の餡団子が置かれている。いくつか食した後があり、脇に水筒も置かれている。

「あの方と言いますと?」

不思議そうに半蔵は見つめる。

「ほら、あの……。大阪の港で作戦とか言っていたあの侍。」

「ああ……。あの侍。」

半蔵は頭で思い浮かべていた。あの時か……。

「あの侍はちょうどそこいらにいた兵士でござる。」

「……。」

半眼で正宗は半蔵を見つめる。

「それはないぜ。」

「いや……。これ以上は……。」

「……。あいつ……。誰だよ……。」

その声は少し切なく、何かまるで愛しているものを探す声のようでもあった。その声に半蔵は気が付くも……。じっと押し黙った。

「これから先はご内密に……。」

「わかつている。」

「あの人は真田……。真田……。信繁でござる。」

「やはりな。」

納得したように頷く。

「で……。あいつはどうした? 死んだわけではあるまい? あの場所にいたなら。」

「……。」

半蔵は押し黙ってしまう。この時、信繁は大阪の港を出航して半年は経っていた。

「知らないのか?」

半蔵はそれまで幾つかの報告を受けており、生きている事は確認できていたが……。それ以上の詳しい位置は……。分かっていなかった。

「拙者の口からは・・・何とも・・・。」

「そうか・・・お主ほどの男を巻くとはあの男は流石だな」

感心したように正宗は頷く。半蔵は半眼であいてを見つめながらも・・・何も言い返せないでいた。まさかあんな所にいるとは誰も思わないだろう。

「では拙者は行きもつす。」

そう言い立ち上がると一礼し、半蔵は立ち上がる。

「そうだ。おめえ。中尊寺に寄ってけや。」

「はい？」

「もうお前は普通の人間なんだろ。」

「はい。」

「あそこの仏像・・・痺れるからさ。」

「痺れるですか？」

不思議そうな顔で半蔵は振り返る。

「ああ。あそこまでの物はそうそう無い。つい痺れてしまつはずだ。行ってみる。」

「分かり申した。」

そう言つと半蔵は一礼し、小屋を去っていく。まだ、半蔵の旅・・・いや休日は終わる事はなかった。

外伝 ”服部半蔵” の報告書（後書き）

書いて欲しいキャラクターとかがあればおかきします。ぜひ御一報を。

第十五節 六月上旬 海への援軍（前書き）

大阪夏の陣が終わって一ヶ月、江戸に言った信繁は半蔵から指令を受け取る。その指令とは……。

第十五節 六月上旬 海への援軍

第十五節 六月上旬 海への援軍

結局・・・信繁は誰に言われるわけでもなく、鹿児島を去り、この地にいた。目の前には小さな・・・それでいて石の棒が一つ刺さっただけの・・・墓の前にいた。

「おっさん・・・。俺は・・・どうしたらいい・・・。」

目の前の墓に手を合わせると石が刺さっている場所、寺の住職が来る。側に来るまでの間、信繁はじつとその墓の前に手を合わせていた。もうあの戦いから半月は経ち、その激戦の跡は人々の活気で満ちあふれていった。ここははそう言う町の少しはずれにあった。

” あんたから貰った命・・・俺はどうすれば・・・。”

「どうしたんだ？」

「いやあ。」

そう言つと信繁は立ち上がると、振り返ることなく、去っていった。その寺の看板には南宋寺と書かれていた。

「やはり・・・戻ってきたようだな。」

半蔵は江戸城の衛兵詰め所の一カ所で・・・前に来た事がある・・・昔・・・説得された所だ・・・。狭い室内で二人は向かい合っていた。

「ふん。」

半蔵はにやりとする。家族がいる場所が半蔵が用意した隠れ家という時点でもう・・・信繁はやる事は決まっていた。もう戻ってくるしかなかったのだ。

「だとして・・・俺を・・・どうする気だ？」

「・・・わからぬ。」

「は？」

呆れた声で信繁は半蔵をみつめる。

「と言うのもな……。今までも数人そういう風に地位につけてきたもの……。」

半蔵は考えているようだが結論は出ないようだ。

「もう……。そう言う場所はない。」

「……。働く所はないというのか？」

信繁はじつと半蔵を見つめる。と言うよりも、呆れていた。

「と言うより、お主の顔を知る重臣のいない所を探すのがな……。」

「

苦そうに窓から見える江戸城を見つめる。

「そう言えば、青海達はどうした？」

「ある武家屋敷に身を潜めて貰っている。処分保留の兵士達と一緒にな。」

「そうか……。」

落ち着いて江戸城を見つめる。その姿は白く大きい、その広さ故に多くは庭園でもある。

「じゃあ、暇でも出すか？」

「そうはいかんが……。そうだな……。」

半蔵は立ち上がると扉を開ける。この詰め所……。先ほどから兵士らしき者は一人も来ていない。

「幾つか懸案があるが……。お主に託したい物がある。くるか？」

「行くしかなかるう。」

「そう言って立ち上がる。」

「……。どこに行く気だ？」

「……。お主……。船は好きか？」

「は？」

その疑問に信繁はしばらく固まる事になる。

「で……。船に揺られ……。俺はどこまで行くんだ？」

信繁は呆れて、船室の壁により掛かり先を見る。城から連れ出されて三日ほど海を舟がさまよう。

「日本と言えるかどうかからんが……拙者もよくわからん。」
半蔵は呆れたように海を見る。

「……よくわからん所によく誘導する気になつたな。」

船の揺れに耐えながら、信繁は見つめる。初島と大島は越えたのを知ってはいるがそれから先はよくわからない。

「だがそろそろだ。」

そう言い、半蔵は懐の望遠鏡である海の彼方を覗く。それを見て信繁は手を差し出すと、半蔵は手に持った望遠鏡を手渡す。信繁が覗くその先には被一つの島と……大きな船がある。あの船……
「あれは？」

「そうあれが目的地だ。」

それから数時間が経ち、近くに接岸すると、そこには大きな船がある……。そう……これは……。

「按針の船……。」

「そう。完成したものの、大阪の戦があつて人手が回せなくてな。」

そう言い、つり下げられた縄梯子を登って半蔵は上に向かう。信繁もそれに付き添って上がっていく。

「で、これがどうしたんだ？」

今見ても立派な船で、先の戦いで見た南蛮衆の船よりも少し大きい……気がするが……。だが大砲の列は一人で、火力自身は下回る。だが……信繁は上を見上げる。帆は大きく、正に外洋専用の船だ。

「今のところ……こいつを扱えそうな男がいなくてな。それをお主に任せたい。」

「これをか？一人で動かすとか言っても無理だぞ。」

「それには、戦で給金にあぶれたりした者達や元真田の部隊の者を回す。あとは船乗りを数名おく。」

半蔵も見て回ると、それに伴い数名の人たちが外に出てくる。

「この者達は？」

「ああ。この船の者だ。しばらくはお主の下として働く。」

「半蔵様……。」

一人の女性が、船乗りから飛び出てくる。その姿は確かに短めの着物を着た姿ではあるが、体の形がでるびつちりとした着物がその女性の艶めかしい姿をあらわにしていた。

「みきが幹花……。」

「この者は？」

女性は元々きつい瞳を更に鋭く、信繁を見つめる。

「こいつは、真田信繁。この船の船長だ。」

そう言い半蔵はこちらを紹介する。だが、その女性の値踏みする瞳はじつと信繁に向けられたままだ。

「よろしく。」

信繁は半笑いながらも、手を差し出すが、女性は無視して半蔵を見つめていた。

「信繁殿。この者は幹花。この船の物資などを担当していた者で、忍びの訓練は受けさせてある。中々に有能だ。」

そう言つと幹花は深く信繁に一礼をする。それに合わせ信繁も一礼する。

「帆船と言つ事もある。この人数なら船は動く。」

そう言つて半蔵が見渡すと、二十人前後に人間がそこかしこから現れる。

「それはそうだが……。」

各人を見渡すと……それぞれにアクの強い顔をしている。

「お主にやって欲しい事……それは……。」

その言葉に自然と周囲の人間が集まる。

「この南の国、シャム王国という所がある。そこに日本人の町がある。」

当時日本の水軍の多くは海外とつきあいがあり、その一部は倭寇と呼ばれ、海賊とかしていたが、実際は海上利権の争いを行っている

た。その中で、東南アジアに進出を行っていた、それは豊臣秀吉時代からある事であり、それが行われた当時、”ルソンの壺”などの舶来品が日本でかなりの高値で売れた事もあり、立派な利権でもある。そのため、各地の日本人街を当時かなり重視していた。特に発展していたのがシャム王国（現在のタイ）である。

「ほう？」

一部で聞いた事もあるが、九度山に籠もっていた信繁には聞き慣れぬ名でもある。当然清国の名は聞いた事もあるが……。

「で、その日本人街に行つて欲しい。」

「行つてどうする気だ？」

「そこにいる同胞を助けて欲しい。その間に事後処理をすませ、仕事を作ろう……。」

「俺でいいのか？」

信繁は微妙な目で半蔵を見つめる。

「あの時、あの船に真つ向勝負を挑んで勝てたのはお主の知恵があったからだ。その腕を認めてだ。」

「わかった。」

「お前達も頼んだぞ！」

「おう！」

半蔵の言葉に周囲の人間が頷く。

「で、残りの部隊はどこで積むんだ？」

呆れて見渡す。船員が二十名では援軍にも何もならない。

「とりあえずは、大阪に寄つて欲しい。そこに兵達を集めるように指示はしてある。欲しい物資があれば、そこで発注しろ。」

「わかった。とりあえずは……。」

「お主にはすまないかもしれないが……もう少し……戦につきあつて欲しい。」

半蔵は頭を下げる。何となく……運命みたいなものを感じる。

「いいさ。行つてくる。ただ……。」

「ただ？」

「兵がそろつたら一週間でいい。船での訓練はさせてくれ。」
「わかった。」

そう頷くと、半蔵は手を挙げる。先ほど乗ってきた船は騎士を離れ、この船の碇が上げられていく。半蔵は立ち上がり、各所に指示を与えていく。それを見つめながらふらつとあの時、飲み会をした船長室に入った。その部屋には大きく、世界地図が貼られていた。
「世界……。」

ふとこれからの展望に頭が痛くなる……信繁であった。

それから一週間を掛け、按針達と日本の技術の総結集でもあるこの船はかなり速く大阪の港に着いていた。まだこの頃には大阪に海が言う要の港があるが、その船の数は大阪夏の陣以降激減していた。港に着いた船は、早くも物資を積み込み、各部屋の具合を確かめていた。

「そつちの物は、こつちの所に住みに出来るだけ詰めて。」

幹花の声が聞こえる。その間を抜けるように信繁は船の外に出る。
「どこに行かれるのですか？」

間を抜けようとしたところに幹花の冷たい声がつんと聞こえる。

「まあな……。会いたい奴がいてな。」

「……早くお戻りください。訓練までに間に合わなければ、私がこの船を乗っ取らせていただきます。」

「……わかったよ。」

そう言うつと冷や汗をかきながら、信繁は急いで町中を走っていく。そう……。ただ一つ心残りの事がある。今、青海、箕、しま達は今……。待機場所から大阪に向かっていく。だが……。美井はあの時からずっと下八の所に預けてある。確かに半蔵殿に按針殿への伝言は頼んだが……。しばらく走ると最近は見慣れた着物屋。下八の親戚の店だ。

「よお。」

そつ手を挙げると、店内で忙しそうにしていた下八は急いで信繁

の元に駆け寄る。

「お久しゅうございます。」

「久しいな。どうだ。調子は？」

「それは・・・まあ・・・。」

「美井はいるか？」

「あ・・・はい。」

その言葉を聞き、奥に上がると遊んでいる美井の姿があった。

「久し・・・。」

「よう。」

信繁はその冷めたような・・・いや・・・感情を押し殺しているような顔をした美井を見つめた。

「帰ってきたぞ。」

「・・・はい。」

「ヒサしぶり・・・ですね。」

遊んでいた男は振り返るとその見覚えのある顔を見せる。

「按針殿。」

「このこは・・・おやくにたてたでしょうか。」

「はい。」

信繁は二人に向き合うように座ると、美井も慌てて正座する。

「それはよかった。てきがカトリックときいて。このこがいればナニかになるかとオモッていました。」

「カトリック？」

「はい。カトリック・・・です。カトリックというのは、キリスト教のシュウハのひとつです。」

そう言って不安そうに按針は美井を側に寄せる。

「モトをただせば・・・あいつらです。」

「どついう事だ？」

信繁は不思議そうに按針を見つめる。按針も周囲を軽く見渡した後、じつと信繁を見つめる。

「このこからききました。あのくろい船のこと。ワタシはクワしく

はミていませんが、このへんにいるヨーロッパの船はイスパニアとオランダだけです。力があるのは・・・イスパニアです。」

「よくわからないが・・・。」

「それは、ハンゾウ殿にシヨルイを上げてあります。必要なら・・・。」

「いや・・・いい・・・ただ分かったのは、お主達ヨーロッパの者には周知の相手だと言う事だ。」

信繁は頭を抱える。よく訳の分からない単語の多さに頭を抱えてしまう。

「わたしがクニを出る・・・このこがおわれるも・・・その・・・カトリックとプロテストアントがオモです。」

「まあ・・・そう言う・・・争いか・・・。」

じつと信繁は美井を見つめる。この子は幼いがそれなりの修羅場をくぐつてはいるようだ。

「そうだ・・・あなたにはタノミがあります。」

そう言うつと按針は大きく信繁に頭を下げる。その様子に信繁はじつと按針を見つめる。

「なんででしょうか。」

「このこを・・・船にのせてもらえないでしょうか。」

「・・・どうしてだ?」

信繁はきつい顔で按針を見つめる。今までの陸路とは違い、戦場へ赴く船だ。それに・・・船は遭難するかもしれない恐怖を抱える。今までとは勝手が違うのだ。

「この子にさまざまなタイケンをさせておきたいのです。」

「それが親の言う事か?」

冷たく聞く信繁に按針は更に食い下がる。

「このこはしっておりますが・・・この子はわたしの実のムスメではいけません。」

「・・・。」

「このこはいつか・・・生まれた地へかえらなければ、いけないで

しょう。ですが、このこがツヨくならねば・・・わたしがいなくなつてミをマモるコトができなければ、かえる事さえままならぬでしょう。」

「・・・・。」
「そのためにできる事は全てしたいのです。あなたほどの・・・わたしのあの船をタクすミとして・・・お願いいたす。」

按針は頼み込む間、ずっと頭を畳にこすりつけていた。その姿に美井も不安そうに見つめる。

「・・・すまないが・・・一つ聞きたい。それを・・・美井殿は承知しておるのか？」

「はい。」

美井のりんとした声が聞こえる。

「はい。ミリア・・・には確認を取っております。」

「ミリア・・・それで・・・美井。」

感心したように名前をつぶやく信繁はじつと美井を見つめると、覚悟を決めたように。信繁に頭を下げる。

「おねがい・・・・。わたし・・・パーパを助けられるほどに・・・・つよくなりたい・・・・。」

「・・・分かったよ。一緒に来い。ただ、死ぬやもしれん。いいのか。」

信繁はつよく二人を見つめるがそれに動じる様子は二人にない。

「分かった。だが按針殿はどうする？」

「わたしは・・・ここで船をつくります。それがわたしのシゴトだから。」

「分かった。では仕度してください。後で使者を送るので、それまでには仕度してください。」

「了解。サー。」

・・・・。

「その”サー”とは？」

信繁はふすまを開けようとした手を止め、按針の方を向きかえる。

「これですか？これはわたしの国のコトバで、”尊敬する人”とい
います。サー、サナダ。」

「・・・感謝する。」

そう言うのと信繁は外に出て、下八の所に向かう。今までの謝礼と
かをしなくてはならないからだ。

それから一週間ほどの間、少しずつ船員となる人は集められ、
徐々に人は船に乗せられていく。集まる度に忙しさは増す中、武器、
矢、大砲の弾、特産品や各船室の調度品などが積まれていく。信繁
は樽の上に座り、じっと船を見つめる。

「暇だ・・・。」

戦場では幹花が中心となり、船員達の訓練が行われる。自分も何
かしたいって言ったら・・・この本を渡される。信繁は懐から本を
取り出す。彼女いわく、按針達から聴取してつくった”辞書”だそ
うだ。辞書という言葉さえ初めて知った。だが、どことなく疎外さ
れたこの感覚は少し・・・苦手だが・・・ある意味”楽”だ。

「ほんとまあ・・・でっけえなあ。」

「お前、船を見るのは・・・初めてか。」

その声に信繁は振り返らず声を掛ける。

「青海。」

「ひさしいな。」

今の信繁の格好は今までの格好とは違い軽い着物だけの姿で、そ
れほど重装備ではない。だが、お互い、その内容をしっていた。

「そうだな・・・。」

「お久しゅうございます。」

筧が重々しく一礼をする。その言葉に信繁は樽から下りると、見
渡す。筧、青海、しまの三人だ。もう身内と言えるのは・・・彼ら
しか・・・美井がいるか。

「いいよ。俺はもう・・・死んだ事になっている。」

「そうは言っても今、おめえいるだろ。」

しまがすこし不満そうに信繁を見つめる。

「で俺たちはこれからどうするんだ？」

青海は船を見つめていた。船は大きい匂運び出す荷物も多い。食糧は念のための話をして、一月は持つ量を積んでもらうように頼み込んである。

「これから・・・この船はシャム王国へ向かう。」

「社務？」

算は眉をひそめる。

「そこで日本人街に向かう。単純に言えばこれから俺は海の外に行く。」

「・・・。」

その言葉に三人とも驚きを隠せない。

「船の準備は？」

「今、そこで徳川の者が整えている。彼らの中には渡航経験者もいるので・・・まあ大丈夫だろう。」

だが、その信繁の少しの言いよどみを見破れるのほど、彼ら三人は勘の悪い存在でもなかった。当然、海に渡って来れた者もいるが当時の日本人にとって海とは世界の外だと感じられる事が多かった。

「拙者は今回ばかり・・・。」

算がしゃべっている途中のその口を青海は突然塞ぐ。

「すまねえ。すこし・・・。」

青海が言いつくろうとした時、無理矢理算が引きはがす。

「お主は怖くないのか？」

焦る顔で算は見つめる。

「俺も怖い・・・。だが・・・。」

信繁は不意に三人の側による。

「もう俺の側に入れる身内はお前達しかいない。すまない。一緒に・・・頼む。」

側により、小さい声で頼む信繁の顔は苦渋に満ちていた。

「何がありましたか？」

算は不思議そうに見つめるが、それ以上の返答はない。

「俺は、どっちにしろ、一緒に行くぜ。先に中に行ってる。」

しまは明るく答えると、輪をはずれ、船内に走っていく。

「奥方様か？」

算達その言葉に信繁はあえて沈黙を保った。それが答えに……
お互いは思った。

「分かった。俺は一緒に行つてやる。だが……。」

青海は何か言おうと思つたが……しばらく空を見つめる。空は
きれいではあるが、雲は少なく。青も少し白みがかつていた。

「まあいい。俺は高いぜ。」

青海は錫杖を持ち、ゆつくりと船に歩いていく。

「拙者は……。」

算は言いよどむが、それを信繁は止める様子はない。

「行くぞ！算！お主は独り身であるう！」

青海の大声が響く。

「……信繁様。」

「何だ。」

「出航はいつで。」

「できるだけ早くだが……少しは待てる。覚悟があるなら……
少しは待つぞ。」

「いや、どこにも行く気はござらんが……せめておつかあに手紙
を書くだけは……。」

「行つてこい。そのぐらいは待つ。」

その言葉に算は荷物をその場に置くと、すぐさま走つて大阪の町中
に消えていった。自分もそうしたかつたが……信繁はじつと耐え
て、樽の上に座り、懐の辞書を取り出す。そうしなければ、心がお
れて、家族の元に帰りそうになる。じつと船を見つめ……耐える
だけだった。

結局青海達が合流して三日ほど、さまざまな調度品や信繁達の注

文通りの物。そして書籍などを積むのに手間取り、船の正式完成は遅れてしまう。だが・・・その分悔いのない作りとなっている。長期航海にさえ耐える使用となっている。

「やっと来られたな。」

半蔵はじつと船を見つめる。

「半蔵殿。」

信繁はじつと見つめるが動じた様子もない。出航準備ができた今、今日にも出発の予定である。

「この船出で、お主に・・・この希望を託す事になるうとはな・・・」

「希望？」

「ああ。希望だ。内府様はこの船の建設時、この船の事を”日本の希望”と呼んでおった。」

半蔵の感慨深い眼差しをじつと信繁は見つめる。そう言えばこの船の完成を半蔵は凄く喜んでた。

「この立派な船はきつと、この先、日本の未来を支える根幹となる。交易船でもあり・・・探検船でもある。そう言い船の完成を見つめる内府様の目はじつと輝いていた。」

信繁はじつと船を見つめる。確かに先日船室を確かめた時、半分以上は船室と貨物室で占められていた。

「・・・ならお主や、重臣が乗ればよい。」

信繁は落ち着いた声で答える。

「それはできない。」

半蔵の即答は・・・どことなく寂しげな響きを感じさせた。

「今日の日は・・・夏の陣の後しばらくは・・・重臣達や有力大名がならみをきかせねば・・・。また戦になるう。今打って出られるお人はいない。」

「それでもこれだけの船だ。それだけでも名誉であるう。」

「この船は元々・・・秘密裏に作成されておる。各大名はこの船の存在をしらん。」

その言葉に幾つかの結論が結びつく。だからわざわざ一度孤島に行つて船を取りに行ったのか……。人に見られない為だ。

「この船は諸外国に対抗する為の一号でもある。もし外洋を渡るのに成功すれば、職人を配置し、船は量産予定だ。だから……お主の力が欲しかった。」

確かにこの船は、按針殿と日本の職人でつくられた合作の船であるが……。確かに大砲だけで武装されたあの船に対して太刀打ちさせるのは難しい。これ一隻だけでは向こうの大軍は防げまい。またあの船が複数来ない保証は今のところ……。どこにもない。

「わかつた。」

半蔵からすれば……。これを託すとは……。家康や日本の未来を託す事そのものなのだ。

「今のお主にしか頼めない仕事なのだ。頼む。」

「そつだ……。兄貴は？」

「ああ。信之殿は……。そこにおるぞ。」

そつ言い指さした先には信之はいた……。周囲の人間と話し、色々お辞儀してまわっている。

「兄貴！」

「よー！」

その言葉に信之は駆け寄ってくる。その姿に信繁は呆れてしまう。

「あにき。」

「海に行くんだつてな。」

「ああ。」

その会話を見て、自然と半蔵は船の中に歩いていった。

「気を付ける……。」

「分かっているさ……。」

お互い会話が無くとも長い時を過ごしてきた二人である。そのまじつと二人は何をしゃべるわけでもなく……。しばらくじつと船を見つめていた。

「いつ帰つてくれる？」

「分からない。向こうで骨を埋めるやもしれないし、帰ってこれるかもしれない。」

「そうか……でも……。」

「どうした？」

「立派な船だな。おつきい。」

「だよな。」

「帰ってこられるなら、真っ先に来いよ。土産はいいから。」

「分かっているそれは楽しみにしている。だが……。」

そう言つと信之は懐から本を一冊取りだし、信繁に渡す。

「持つて行け。役に立つ。上手くはいえないが。それが今の手一杯だ。」

「感謝する。」

そう言い、さつと本を懐にしまった。

「お吉の方は元気ですか。」

「ああ。あの方は酒を飲んだくれてから高野豆腐の油揚げが気に入つてな。今はあれにご執心だ。」

「そうか。」

信之は周囲を見渡す。船員達が忙しそうにしている。

「俺は行く。じゃ。」

「じゃ。」

そう言つと、さつときびすを返し、信之は港から歩いて去っていく。お互い会えて深い挨拶はしなかった。また会えると……いつか会えると……信じていたからだ。

「皆の者。俺が！船長の真田信繁だ！」

その言葉に全員が整列して聞いている。船長室の眼下船員達が甲板に並ぶ。出発の準備を終え、棧橋をおろして全員を信繁は見渡す。「俺たちはこれから……シャム王国に向かい！日本人街に物資を届け、援軍として参る。」

その列の前方には算達、隊長の姿が見える。元からいる船員達と

笈達重臣達で部隊を編成し、効率的に……と言つより交代で船の作業を行うようにしてある。

「皆は勇気ある強兵であり……家族である。」

信繁は大きく周りを見渡す。訓練に参加した兵達の多くは……これでもかなり少ないが……最後の真田の突撃に参加した者の中の生存者の有志や現地での募集人員で構成されている。

「どうなるか分からない。聞いた所に寄れば……嵐で亡くなる者……など予想できない事態に陥り、死に至る厳しい旅となるう。だが付いてくるか……報酬は約束しているが……実際ツライだろう。」

その言葉に少しざわつくが、それでもすぐに落ち着きを取り戻す。「異邦の地での死をも厭わぬ皆よ……。付いてきてくれる者に感謝する。」

そう言い、大きく一礼する。それに合わせ一部からは拍手が聞こえる。

「小難しい事を言つてすまないが……とりあえず！行くぞ！付いてこい！」

「おう！」

信繁の掛け声に全員が掛け声をあげると、その声とともに全員が立ち上がり、持ち場に戻っていく。

「すばらしいとは……思いませんが良い声です。」

相変わらず冷たい声が幹花からかかる。それに伴い、笈や青海達も集まる。後ろの部屋には一応……美井の子守を頼んだしまが美井と船長室で遊んでいる。やはりこの世代の子は遊んでいる姿が一番可愛い。

「中々手厳しいな。」

「俺は気に入つたけどな。」

青海は寄りかかるとひょうたんの酒を煽る。

「そつえば……。」

幹花が不思議そうな顔で船の先端を見つめる。そこでは船員達が

大きな帆を広げ始める。

「按針様にはお会いしたのですよね。」

「ああ。」

信繁も船尾の高所に立ち、船員達の様子を見つめる。一週間も練習した成果・・・流石にこなれた様子で碇を上げ始める。

「船の名前とかお聞きしました？」

「・・・。」

そう言えば今まで二度按針殿と会っているが・・・船の名前を聞いてはいない。

「聞いてはいないが・・・そうだな。」

「そう言い船を見渡す。」

「日本一の強者が乗る・・・。臨海丸だ。」

「臨海ですか？」

「算が不思議そうに聞き返す。」

「まあな。海に臨むから、臨海・・・。」

「安直・・・ですね。」

「幹花は冷ややかに答える。」

「でもさ。それぐらいの方が良い。わかりやすい方が良い。」

「青海は二度頷く。」

「まあいいさ。」

「こつち来てみるよ。もう船、出っぞ！」

「いく・・・いく・・・。」

その声に振り向くと、しまと美井の二人が、甲板の手すりに掴まり、船から下を見つめている。船は風に煽られ徐々に陸地から離れていく。

「でもまあ・・・この世はどうしてかわかりませんが・・・こうなりましたな。」

しみじみと離れる陸地を名残惜しそうに見つめている算だった。

「駄菓子方がなかったんだ。だがこの船は今俺たちを含め希望をのせている。何が起こるか分からぬが、せめて潔い死に方をしようぞ。」

「こんな船出に死ぬ話なんかするなよ。」

遠くから振り向くと青海が呆れたように・・・ただ三人は同じ離れゆく陸地を見つめていた。それはあまりにも切ない・・・旅立ちでもあった。

第十五節 六月上旬 海への援軍（後書き）

しばらくの間、いままでのページ数よりも少ない枚数で投稿したい
と思います。しばらく続予定ですので、これからもよろしくお願
いいたします。

第十六節 シヤム王国と山田長政（前書き）

出航した信繁一行の最初の寄港地はシヤム王国。そこには日本人街があり、そこへの物資や兵士の運送が最初の任務である。ここでの初めての海外で・・・。

第十六節 シヤム王国と山田長政

第十六節 シヤム王国と山田長政

海は広く・・・航路は、船員の一部にとっては手慣れているとはいえ、新造艦の船員の多くは船にさえ手慣れていない者達である。だが、その航海の多くは船員達を交代させる事で、負担を軽減させていた。

「でもまあ・・・勢いできてみたもの・・・。」
寛は空を見つめる。

「だな。」

青海は手に持ったたひょうたんの酒を一煽りさせる。周囲では船員達の一部が周囲の警戒を行っている。

「嵐は来たものの・・・。」

「少しの損害でか？」

青海は帆の一部を見る。船に取り付けられた三本の帆の内二つは・・・先端が折られ、帆を全開できる状態ではないが・・・今はその状況を確認している。船員の多くは壊れた部品を近くから探そうとしていた。

「初めてですな。」

「ああな・・・確かに台風はあったが・・・これはきつかったな。」

「お前ら！さぼるなよ。」

しまが、青海たちの元を訪れても・・・周囲の人間達の焦りで右往左往する様をゆっくりと見つめていたが・・・被害は・・・それなりだろう。

「でもな・・・俺が何ができる？」

青海は言いながら酒をクイと煽る。

「片付けとか・・・片付けとか・・・かたづけとか・・・。」

「見て見なされ。」

寛が言うと、しまは振り向く。確かに船内に散らかったものかたずけはもう・・・半数が終わっているようだった。

「・・・でも・・・。」

「拙者が役に立つなら・・・勇んで前に出よう。だが・・・時として・・・押さえる事も必要ですぞ。」

寛の声にしまは寂しそうに後ろを振り返る。見つめる先には信繁が陣頭指揮を執っている様子が見える。

「でもさ・・・。」

「分かつてはいるさ。」

そう言い、青海は海を見つめる。海は青く、台風一過の空はすっきりと晴れていた。

「出てる人数を数えてみる。」

「ひい・・・ふ・・・15人はいるな。」

しまが指を折って数える。

「寺でもそうなんだが・・・。人数が多いと、作業を帰って妨害する。あいつもそれは分かっているから、それなりの指示をしている。」

「

青海は海を見つめながら答える。

「俺たちの出番はここじゃないよ。」

「いや、そうともいえませんな。」

寛はじつと青海とは違う方向の海緒を見つめていた。

「見張りなど必要かと。」

寛は冷静につぶやく。

「じゃ、じゃあ・・・俺・・・行ってくる!!」

そう言うとしまは見張り台に走っていった。

「元気ですな。」

「だな。昔の俺とかもあんな感じだぜ。」

青海はつぶやいた。

「そうですね。拙者はもう少し落ち着いていたから・・・分かり申

さぬ。」

「そうか……。」

「ただ……。あれは……。いいですな。」

「そうだな。」

青海の少しほつとした声が二人の間にしばらく漂っていた。

「これが……。」

どうにか着港できた一行は嵐を越え、ついにシャム王国に降り立った。当時のシャム王国はヨーロッパのインドネシアの香辛料貿易、中国陶器貿易など様々な交易品の中継点として発展していた港町を持つ国である。日本人街もこの港沿いに設けられており、徳川など数人の戦国大名もまた、この地に着目していた。だからこそ、戦国当初から、人を送り、地盤の確保に着手していた。特に、日本では戦国後期からの戦を求める人々の為に傭兵団を結成し、この地での軍事作戦に従事していた。この活動が実った事により、手柄を求め、戦を求める者達を沈める為の朝鮮出兵はなくなり、この地が最後に残った最前線となった。

そのため、この地を訪れる戦国の没落武士は多く、隣国との境界線を沈めたり、内戦にかり出されていた。またこの先においてすら、植民地にされなかった

「ここがとりあえずの目的地です。帰るのに……。しばらく……かかりますから。」

幹花は落ち着いて答えるが、船は少しぼろぼろで、治すのに時間がかかりそうだった。

「それで、こいつらはどうすれば？」

そう言い、船から出て行く兵士達を見つめていた。

「ここからは自由で良いと思います。とりあえず、ここまでが我々の目的ですし。」

幹花は信繁に背を向けて、足りない備品の数を数えていた。

「そうなのか？」

「やはり・・・修理は時間がかかりそうですね。」

幹花の冷静な声が更にこの現状を引き立たせる。

「そうか。じゃあ俺はその辺にいるから・・・。」

信繁は・・・幹花に何か気圧されたように後ろに振り向く。

「お待ちください。」

幹花は、手に持った勧進帳を閉じると、信繁に近寄ってくる。

「とりあえず、日本人街の長に挨拶をしていただけですか？後、彼らの引き渡しがあります。」

そう言い、指さした先には整列した兵士達の姿があった。

「わかった。」

信繁はそくささと・・・呆れながら歩き始める。

ドン！

少年が、信繁に不注意に当たり、はじき返され、倒れ込む。

「大丈夫か？」

「・・・A U .」

・・・信繁はふと違和感を覚える。確かにここは港町であり、各国の船が止まっている自由港である。他の地域は植民地化が終わった直後で、今、この周囲の港は、イギリスとオランダが争っている時である。だから・・・金髪の間人がいても不思議はないが・・・でも船乗りしかいないはずのこの港町での少年は珍しい。

「だいじょうぶ？」

幹花が聞き慣れない言葉で話しかける。

” うん ”

信繁はその表情だけで答えは理解できるが・・・。信繁はしゃがみ込んでその子供を見つめる。彼自身、金髪の子供を見るのは初めてだった。

「髪の毛がきらきらしているな、お前。」

” なに？ ”

” きれいなって言ったのよ。 ”

幹花が少年に何かをしゃべっている。

「信繁様。行きましょう。この子のどこかの船員でしょう。」

そう言葉が終わるか終わらないかの内に数人の男が信繁と少年を取り囲む。それをおそれて少年がさっと信繁の後ろに隠れる。

”おい！お前！そいつを渡せ！”

毛むくじやらの・・・金髪の体臭がきつそうな男が信繁に咆えている・・・様に信繁には見えた。

「何て言っている？」

“お前らみたいな三下は何を渡せって言ってるんだよ”

「ええ、何か・・・私にも少し・・・獣の吠え声までは・・・理解できません。」

幹花は冷静・・・と言うよりも冷たく彼らを見つめる。彼らは幹花が言った何かに反応して激昂しているようだ。

「そうだな・・・こいつらの言葉は分かるのか？」

「はあ・ある程度は。」

「じゃあ・・・後ろを見てから喧嘩を売って言ってくれないか？俺は喧嘩は好きじゃない。」

「はい。」

“おめえら、後ろの連中見てから喧嘩うるんだな。”

幹花の言葉に男達は剣を抜きながら後ろを見つめる。後ろには無数の兵士達の姿がある。前にいる数人かは剣呑さをかぎつけ、武器に手をつけている。

“お前ら卑怯だぞ！”

男達は口々に捨てぜりふを吐くと男達は去っていった。

”坊や。もう良いわよ”

ここまでの騒動の間、がたがたと震えていた子供はそっと男達が去っていった向こうを見つめる。

”う、うん。”

信繁はその間、じっと幹花の様子を見つめていた。この間、何を言っているか分からなかったが、顔色一つ変える事はなかった。今まで見た女性達にはないタイプだった。

「伝えてくれ。良ければ後で話を聞かせてもらえないかと。」

「了解しました。」

“坊や。暇？”

”う、うん。”

”ついてくる？”

”………うん。”

そう言うと子供は幹花の後ろについて服の裾をつまんだ。信繁は立ち上がると、周囲を見渡す。

「日本人街までどのくらいだ？」

「すぐです。」

「そこに行くぞ。」

「は。」

そう言うと幹花が手を当てると全員が歩き始める。信繁は歩きながら考えていた。また何かきな臭い事が起こるかもしれない……。

「とりあえずこの俺たちはいて……。」

信繁は全員を見渡し、演説を始める。日本人街入り口であり、隣には町を仕切っている傭兵部隊の新谷洋二郎が胸を張って立っているが……信繁に比べるとどこことなく情けない。

「皆の者はこの先ここで手柄を立てれば、この王様は取り立ててもらえるぞ。日本では手柄を立てられないものも……。」

新谷の声が信繁の声を遮り響き渡る。こういう事になれているらしく、さっさと切り出してくる。信繁は少し無然となりながらも、じっと見つめる。

「ここでは左うちわも可能だ！」

台は下にありながらもその声は大きく、ここ日本人街の入り口でもかなり響いていた。だが周りの人間はいつもの事だとばかりに無視をしていた。

「お前ら！来い！俺が夢を見させてやる！」

じつとその語りを聞いていた信繁はふと、鉾山町の人買いの事を思い出す。ちようどこんな感じて人を募集して、人をかき集めて鉾山で働かせていた。どこに行こうともこんな光景とは離れられないものか……。新谷の掛け声に合わせ、連れてきた兵士達の多くは町の奥へと消えていった。

「さて……。これで俺はどうすればいい？」

信繁は誰もいなく……。いや数人が残っただけの広場でつい……。たたずんでしまう。

「修理はしばらくかかりますので、お好きになさいませ。」

「好きにしろつて……。こんな所でどうするんだよ。」

青海は呆れて周囲を見渡す。小屋は日本と同じ感じだが、どこもなく寂れている気がする。

「それは……。あなた方がお決めください。」

幹花が冷たくあしらう。

「一つ聞きたいが良いかな？」

「はい。」

信繁は周囲を見渡す。

「あんた……。さっきの異国の子供としゃべっていたよな。」

「はい。」

「でだ。この人間ともしゃべれるのか？」

「シヤム人ですよね……。確かにそれは……。盲点でした。」

そう言つと幹花はくるつと後ろを向くとすたすたと町の奥へ歩いて行ってしまった。先ほど助けた子供は当然……。幹花について行つてしまう。

「どうするんだよ。」

しまは呆れて周囲を見渡す。周囲は確かに日本人……。だと思つが幾つかの人間の肌が濃い。しまは珍しさよりも……。独特の雰囲気にも感じているようにも感じる。

「確かに……。私も異国の言葉は知り申さぬ故……。」

「……。おめえ！何するんだよ！待て！待て！

ズルズル。

・・・人の言う事聞け！本当に痛い！歩く！歩くから放せ！ズルズル。

算は呆れていると・・・。幹花が誰かの首根っこを掴み引きずってきた。流石にその様子に全員が啞然としてしまふ。幹花が全員の前で止まると、片手で引きずってきた男を一人、ぽとっと手を離す。「連れてきました。」

「はい？」

「おめえら・・・この姉えちゃん・・・なんだよ！」

引きずられてきた男が慌てていた。いや・・・当然だろう。

「この人・・・名前は？」

幹花は男を見下ろすと、冷たい瞳でじっと見つめる。その様子はしばらく・・・全員が気を呑む中・・・。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「この山田さんがシャム語を翻訳して皆さんの旅の助けをしてくれるそうです。よかったですね。信繁さま。」

幹花の何ともいえない傍若無人ぶりに呆れながらも、抑揚のない声の少し寒気を感じてしまふ。

「あ・・・ああ・・・。」

信繁も軽くその様子に引きながら・・・可愛いそうな被害者を見つめていた。

「山田・・・長政さん？」

「あ・・・はい・・・。」

信繁はしゃがみ込むとじっと長政の顔を見つめる。

「お願いします。」

「あ……はい……。」

「俺たちここに付いたばかりだな。」

「早々。で現地に詳しい方を探していました。」

青海と寛が手をさしのべると山田は手を取り立ち上がる。

「報酬は……あるよな。」

「ああ。」

信繁の声に長政は袴を払う。

「了解。で……このねーちゃんの主？」

「そう言い、親指で幹花を指す。」

「まあ……な……。」

「ま……いいや。お偉いさんでもここに来れば皆平等ってのがこの信条だ。」

長政は手招きすると信繁一行はついて行く。

「ここはさ。どちらかと言うと実力がものを言う所でさ。ここに来る奴の多くは食いつぱくれた三男坊。だからここで一旗揚げたい奴が来るのさ。」

「そう言い信繁は歩きながら町を見渡す。」

「だから、最初はお供を連れた奴もいつかはこの町で別れて一人になっちまう。」

「そう言っって長政はぐるっと振り返ると、青海達が付いて歩いていく。」

「だから俺とか傭兵長はここを”一つの町”って呼んでいる。」

「そう言っって近くの建物に入っていくと信繁達は後に付いていく。」

腰掛けが多く並び、奥に一人の男がいた……どうもこの様子からすると酒場に見える。」

「で……報酬くれよ。」

山田は手を差し出す。

「ここではとりっぱぐれる事が多い。だから先に貰う事にしている。お互い、信用第一でいこうや。」

幹花が無言で、山田と信繁の間に立ちふさがる。

「報酬は後でようございますね。」

幹花のまじめな顔に気圧され、長政は一步後ずさる。

「いや・・・今でもいいんじゃないのか？」

信繁はななだめようとすると急に信繁の方に向く。

「いえ、船の中の一部を荷下ろしする代金を受け取っていないので、それほど大きなお金はございません。」

「へえ・・・。あんたら船の船員なんだ。」

「だから！」

山田が軽口を叩くと幹花はまたも急に反転すると、顔を間近にして睨みつける。

「報酬は後にしてください。正確には報酬がもらえるまでは付いてきてください。」

「ア・・・ああ・・・分かったよ。」

「少しはあるんだな。」

「はい。」

信繁の声に幹花は答える。

「じゃあ、ここで一杯奢るくらいはあるのなら、一杯ぐらいは奢ってやれ、現地の食事も食べてみたい。」

「・・・分かりました。」

そう言うと幹花は腰の小銭を数えると、奥に歩いていった。

「助かったぜ。」

そう言うと近くのテーブルに着くと、それに合わせ全員が卓を囲んだ。

「オヤジ！」

「あいよ。」

「酒と飯持ってきてくれ。人数分な！」

「・・・お代は？」

「そのねーちゃんが持つてくれるからよ。」

「また、ただ呑みじゃねえだろうな。」

「いや大丈夫だ」

”待つてな。旨いもん食わせてやるよ。”

山田の声に奥のオヤジが反応して、何かを焼いている音が聞こえてくる。

「ここは飯が辛い、クセになるぜ。」

「ほづ？」

少しすると木のジョッキを持ったオヤジが目の前にジョッキを置いていく。

「こここの地酒、椰子酒だ。」

「椰子？」

しまが不思議そうに見つめるが、しま、美井、少年の三人の前にはジョッキはなかった。

”ガキがいるからガキの数だけ椰子を頼んだ。”

”言われんでも”

そう声が聞こえると、大きな木の実と鉦をオヤジはテーブルの上の奥と、また奥に引っ込んでしまった。

「これは？」

「ああ。こいつが椰子の実だ。」

「こんな実があるのか・・・。」

山田は椅子から立ち上がると鉦を持って木の実と強く叩く。すると二つに割れる。

「飲めよ、坊主達。」

「あ・・・はい。」

美井は軽く頭を下がると椰子の杯を受け取る。しまも一緒に受け取る。

「ん！んん？」

その様子を見ていた信繁は鉦を打ち込もうとするが、鉦の方が弾かれる。

「ちよつと待つてくれよ。」

そう言つと長政は手を差し出すと素直に信繁は渡す。

「ここにさ、出っ張りがあるだろ、この付近以外は固くてな刃が中

々通らんのよ。」

そう言つとごりごりと刃を当て割ると、それを少年に手渡す。ちようど一つだけ椰子の杯が余る。それを幹花はひったくるように受け取る。

「私はこれを頂きます。」

「これ・・・妙に甘いというか・・・すつきりするな。」

しまが妙なものを見る顔で椰子を見つめる。

「こいつを発酵させたのがこの椰子酒だ。これはこれでうめえんだ！」

そう言い飲んでいる山田を見つつ、信繁はぐいつと椰子酒をあおる、みょうな甘さが口いっぱいに広がる。

「これは・・・。」

「これが・・・。」

筧の顔も、青海の顔も嫌そうなものを見る目に変わる。分からないわけではないが・・・。どうも酒は辛口な印象が・・・三人の中にあつた。

「慣れれば旨いぞ。」

山田は上機嫌のようでもあつた。

「今日はお前らのおごりだろ！せつかくだ！腹一杯食つぜ！」

そうはしゃぐ山田を・・・信繁は止める気がしなかつた。

「本当に・・・辛いものしかないな。」

「この甘さ・・・この為か！」

散々食事をした夕暮れ。じつと汁物や鍋を見つめる。確かに辛いが、旨みもまた広がる。

だが・・・酒に慣れる事は最後まで無かつた。

「でもまあ・・・腹は一杯になつた。」

信繁はじつと食事を見つめる。子供達の前にある食事もほとんど残してあり、椰子の実の炒め物以外は食されていない。

「まあ・・・慣れればだから、最初は俺もこんなものだった。」

山田は偉そうに胸を張るが・・・少し残してあった。

「まあ・・・私は数度食べた事がありますが・・・これはこれです。」
冷静に語る幹花の前の食べ物ほぼ全滅していた。

「でもまあ・・・酒って奴はほんとに、地域によって違うんだな。この年になって分かる事があるうとは・・・。」
感心して青海は見つめる。

「で、あんたら・・・どれぐらいいるんだよここに。報酬はそれ次第だぜ。」

長政は周りを見渡す。

「それは・・・。」

「大体一ヶ月くらいでしょうか。場合によってはもう少しかかります。」

幹花が腰に付けた勸進帳を開き、答える。

「だそうだ。」

子供達はじつとそのやりとりを効きながら二つめの椰子の実ジュースを飲んでいた。

「分かった。あんたら聞けば日本との連絡船の船長だろ。だったら一緒にいるぜ。」

「だな。・・・そう言えば・・・あの子の話が聞きたい。」

「あ・・・はい。」

幹花がハツとした顔で少年を見つめる。

「君・・・そう言えばどうして逃げてきたの？」

「ん・・・ぼく・・・。急いで走っていたらぶつかっちゃったから、あのおじさん達に追い回されて。」

「君・・・名前は？」

「ぼく・・・ソラ。」

「どこ生まれ？」

「・・・ボクはポルトガル人だよ。」

「やっぱり。」

幹花はじつと子供を見つめる。当時ポルトガルをふくめ植民地戦争はこの先までも激化する。その中に置いて、シヤム以外のほとんどの国は植民地化されている。この国と明がアジアで唯一独立している国家でもある。そのため、この辺り一帯の港町にいる人はヨーロッパ系か、中国と日本のどれかしかない。

「どうも、小競り合いの模様です。」

「なら、これで帰す方が……。いや少し話が聞けるか交渉してくれぬか。」

寛はじつと子供を見つめる。そろそろ夕方ではあるが。子供の髪の毛はその夕日に当たってきらきらしている。

「分かりました。……で何をお聞きしますか？」

「そうだな……。。」

寛はじつと考える。

「とりあえず、どこに住んでいたか、今はどこの所属が聞いてくれ。」

信繁はじつとその子供をも見つめる。

「分かりました。」

「君、どうしてここにいるの？」

「ああ。お父さんが船乗りで付いてきた。」

「なら……。お父さんは探しているんじゃないの？」

「ううん。僕たちの船は交易船だから、荷の準備が終わるまで自由時間なんだ。お父さん良く酒場で飲んでるから暇で……。」

美井もその様子をじつと見つめていた。

「なら……。私と遊ばない？ ソラ。」

美井は少年を正面から見据えてしゃべっていた。

「あなた……。しゃべれるの？ ラテン語。」

「うん……。パーパに習って……。色々教わった。」

「あなたが少年と話せば良かったんじゃないの？」

「あなたの……。仕事を……。奪いたくない。」

「そっか。」

美井が途中で会話に加わっているのをしまは驚いた顔で見つめていた。そう言えばこの子・・・外国の子供だった・・・。

「何か・・・話が盛り上がっている」

青海も何か置いて毛針を食らった漢がある天海に・・・少し啞然としていた。

「で・・・なんだって？」

「うん・・・交易船の船員だから・・・しばらく暇。」

「そっか。」

美井が、幹花の替わりに答える。

「そこでとりあえず、幹花、山田、少年に聞きたい。」

「おう。」

山田は椰子酒を呷ると信繁を見るそれは全員も一緒だ。

「今この国と、この海域はどうなっている。説明して欲しい。」

「了解した。その分は弾んでもらえるよな。」

「それは、情報次第だな。」

「ま、説明してやるよ。」

今この国というのは王国ではあるが隣国との戦争や、植民地として名乗り出ている列強どもを前にしていくらでも戦争が起こっている地域でもある。特に川の河口側ではインドのムガル朝、河口の川賊討伐・・・。

「それは水軍みたいなものか？」

日本の水軍も元をたどれば海賊みたいなものだが・・・あれよりはもう少し原始的だ。矢と剣でくるだけだからな。ま・・・だから俺たちの出番なんだが・・・。後はこの河口のこの町一帯はこのあたり一の大都市でなども交通の要所らしい。だから各国の利権争いが活発で、ここには各国の船が行き来する。だから争いが絶えねえ。そこで俺たち傭兵団が、連中の手助けをするわけだ。特に日本艦は連中にはめっばう珍しいらしく、俺たちの人気も上々だ。

「でもまあ・・・あこぎな商売だな。」

でなけりや、俺たちなんて連中が軍隊を差し向ければすぐにでも追われちまう。で、その各国でも特に激しいのが・・・イギリス、ポルトガル、オランダの三国だ。

「イギリス・・・。」

この三国の中でもポルトガルはその戦闘力に置いて最高と言われ、世界最強と言われている。

「世界最強・・・。」

信繁は苦い顔で、山田長政を見つめる。大阪夏の陣を思い出す。確かあの時にいた船は世界最強の艦隊とか何とか言っていた。とするとあれはポルトガルとか言う国の船だったと言う事だ。

「で・・・イギリスはどうもそのポルトガルの連中と仲が悪いらしく、いざこざが絶えない。だから良く喧嘩する。ま・・・本国はものすごく遠いらしく、お互いが本気ではないから、それほどでもないが・・・。だから本気のオランダが一步領地の意味ではリードしている。」

「ほう?。」

その言葉に全員の眉が動く。

「でもまあ・・・オランダとか言う国は最近できた新参者なんで、王様の受けも悪くて、早々大きな受注はない。」

「でもまあ・・・そんなに遠いなら・・・なんでこんな所にまでくる。魚ですら近くでもとれよう。」

算は呆れて言う。確かにそうだ。本国が凄く遠いなら、近くとの公益で十分だ。

「良く俺は知らんが・・・昔働きに行った所だとこんな事言ってたぜ。」

と言って少し料理が残っている皿を山田は持ち上げる。

「こいつが欲しいんだと。」

「は?。」

信繁達二人としまの顔が不思議そうに料理の皿を見つめる。

「向こうだと・・・どうも・・・この辛い物や、醤油やナムルみたいな調味料がほとんど無いんだそうだ。んで・・・特に輸送ができる粉物や何かが人気があるんだそうだ。それでこの辺一体の食べ物を持って行くんだと。」

呆れて山田は答える。

「でも・・・塩があればそれなりだろうに。」

「笑ってしまう話だが・・・これぐらいで・・・向こうでどれだけでうれると思う？」

そう言っただけで近くに小さな取り皿を持ち上げる。

「さあ？」

算は不思議そうな顔をして皿を見つめる。

「向こうだと、これと同じだけの金と交換できるんだそうだ。」

「はあ!？」

その言葉に全員・・・少年を覗いた全員の口が開いたままになる。

「そりゃ、戦争にもなるわな。」

青海は首をひねり料理を見つめる。無論この料理にも香辛料は大量に使われている。祖そして口に入れるがすぐに辛さで舌を痛そうにしている。

「これがそんな高級品ですか・・・。私は初めてですぞ・・・黄金と同じ価値の食事なぞ・・・。」

算も呆れて料理を見つめている。

「ルソンの壺みたいな物だ。ただ遠いだけで誰かが良いと言っしまえばそれだけで価値ができるものだ。」

信繁は料理をまじまじと見つめていた。ルソンの壺とは、当時フイリピンのルソン島で焼かれた素焼きの壺の事で、日本では豊臣秀吉がその色合いを気に入り高評価を与えた事で、人気急騰した壺の事である。当然日本には多くの焼き物窯があるがその色合いを出すのは困難とされていた。

「では・・・この料理もお高いのですか？」

幹花が少し、声を高くして長政に聞いてくる。

「いや、ここではその辺の草とまでは言わないがすぐに手にはいるから・・・それほど高くない。むしろ醤油や砂糖の方が高いぐらいだ。」

当時生産が開始された醤油、琉球でしかとれないサトウキビを用いた砂糖は高級品で甘味の多くは貴重品として扱われていた。

「それは・・・脅してもらっては困ります。」

幹花が少し口調を戻しつつ、山田を睨む。

「だから・・・このあたりの植民地化で狙うのは・・・。」

「そう言う事か・・・。」

信繁はじつと料理を見つめる。単純に言えば、利権争いなのだ。

いや・・・盗賊の考え方に近い。だが連中もそうだったのか・・・。にしては事が大げさすぎる。そこまで荒波を立てずとも、物の売買は可能だ。

「でもこれは・・・。」

そう言い算は子供達が飲み終わった椰子の実を指す。

「これの方がおいしかろう。どうしてこれは入っておらぬ？」

「ああ。これか。これは中身の液体は日持ちしないんでな。外側しか使えない。当然、身も余り長持ちはしない。」

「そうか・・・。」

惜しそうに椰子の実をじっと見つめる・・・算であった。

次の日の事、少年と美井、しまの三人はしまに護衛をさせつつ、外で遊んでいてもらう事にして、信繁自身は船に帰ってきてきた一人は責任者が不縁にいないと船を乗っ取られる危険性があると言われたからだ。算は幹花について行き、商売の様子を見せてもらおう。うだ。青海は船にいるのが嫌だとか言って、算について行った。ただ一人暇そうに信繁は船の船長室で腐っていた。と言うより・・・。

「すげえ・・・。」

山田がどうしても船を見たいと言って聞かず、しょうがなく船まで連れてきてしまった。中に調度品はないが、畳が敷いてある。船

は揺れるが……やはり畳敷きが一番落ち着く。掛け軸とかを飾ろうと思つたが……。飾りたい言葉もなく……。部屋は質素だつた。

「お前……ここに来てどれぐらいになる？」

信繁は山田を見据えて言つた。山田は幹花に引きずられて来てはいたものの、その様子は歴戦の傭兵そのものである。

「俺か……そうだな……もう十は経つか。あんまり覚えていねえ。」

「長いな。」

山田は鼻をくんくんとさせ、い草の香りをかいでいた。ある意味懐かしい故郷の香りでもある。

「そうだな。本当にここは……すさんだ町だ。」

「嫌か？」

「そうじゃねえ。どうしようもない事さ。この町に来た時から俺たちは捨てられたような物だ。」

「やっぱりそう思うか……。」

「まあな。あんたはどう思うか分からないが……。俺はここにいて強く感じる。」

山田は畳の上にあぐらをかき、信繁を正面に見据える。信繁もまた畳の上であぐらをかいている。

「あんた……やっぱり……侍だろ。」

「それがどうした？」

当然の東風に信繁は不思議そうにみつめる。

「いままでさ。船の船長という商人のおっさんどもが多いからあんたみたいな男は始めてだ。」

確かに袴を着てはいたものの、実理的な格好に終始していた。これは習慣に近い。周りからうっている事もあり、寛達には現地の服装を頼んである。

「そうか？」

「だとしたら何かあつたのか？」

「そうだな……。日本で……。戦が終わった。」

「戦が終わったか……。いつかは終わると思ったが……。ついにか……。」

「嬉しくないのか？」

少し沈んだ顔の山田を不思議そうに見つめる。

「まあな……。しばらくすれば……。分かるかもしれんが……。ここが切り捨てられる時も遅くはないな。」

「切り捨てられる……。か。」

山田の悲観とは逆の事を信繁は考えていた。日本には多くの兵士達がいるがその多くは食えるほどの稼ぎはない。それは大阪の戦でも証明していた事であった。だとすれば増える……。いや、必要量渡ったら……。その通りになるかもしれんが……。

ドンドン

「どつした？」

船員のノックが聞こえる。戸を開けると船員が慌てた顔でやってくる。

「はい……。金髪の男が来て、何か騒いでいるようですけど。」

……。そう言えば少年の親が来たのやもしれんな。

「ここまで……。いや甲板に通せ。」

ふと、大阪城での船員の態度を見た事を思い出す。そう言えば、彼らは靴を脱ぐ習慣がほとんど無い。

「山田殿。」

「ん？」

「お主……。金髪の言葉は分かるか？」

「ああ。少しならな。ま……。あの姉ちゃんほどの流暢さはないが。」

「

「なら来てくれ。」

「分かったよ。」

そう言い、外に出るともう、金髪の男が立っていた。

”ここにソラという少年が来たはずだ。渡してもらおう。”

”少年・・・確かに来た。”

隠し立てする必要はないと見て、山田は即答した。その様子を信繁はじつと見ていた。

”でも渡すとは・・・お前・・・どのものだ？”

”俺は・・・。交易船「ネーデュルフィート」の主計長。アルフレッド・イングサーデルだ。”

”何か・・・交易船の主計長らしいですが。子供を帰せと。”

山田は小さな声で、信繁に伝える。ソラの出航はたしか・・・魔だ日があるはずだ。

”今は子供同士で遊びに行っているから・・・夕方までは待てと伝えておいてくれ。”

”了解。”

”その少年は家で預かっているが・・・。子供同士で遊ばせている。夕方になれば帰ってくる。それまでは待ってもらおう”

”分かった感謝する。だが、それまではここで待たせてもらおう。”

”それまではここにいます。”

”分かった。”

そう言つと信繁は座る。その様子に金髪の男も長政もびっくりした。

”え？”

”奴に伝えておいてくれ。それまでは俺も一緒に待とう。水を奴にやってくれ。今まで探すに疲れているだろうからな。”

その言葉に船員が下に走っていった。

”船長はお前が待つのなら・・・俺も一緒に待つと言っておいでだ。感謝しろ。”

”この人・・・船長なのか？”

”そうだ。”

”そうか”

金髪の男は変わったものを見る顔で、信繁を見つめるが、信繁も

じつと座っていた。

そのまま数刻の時間が流れ・・・た様に感じた。その間もまばらに信繁は山田の身の上を聞いていた。幾つか感じる所があるようだ。

”おい・・・。”

”ん？”

”俺を怪しまないのか？”

「・・・船長。あいつ・・・。怪しくないっすか？」

「いや、大丈夫だろ。万が一何かをするようなら、俺が切るさ。」

”・・・いや・・・まあ・・・気にするなよ。”

”そうか・・・変わってるな。”

じつと金髪の男は信繁を見つめていた。

「おい。信繁ー。その辺に毬とか無かった？」

声のした所を見ると、棧橋を渡ってきたしま達の姿があった。金

髪の男が立ち上がるとそこには少年もあった。

”ソラ。”

”父さん。”

二人は呼び合うと抱きつき、抱擁する。

「あれが・・・父さんなんだ・・・。」

美井はつぶやいた。

「だな。良かったな。」

しまも笑って見つめているが、美井はそう言う顔ではなかった。

”どこに行っていた？”

”ここのおじさんに助けられたんだ。それで出航まで時間があるし、

だからこの子達と遊んでいたんだ。”

ソラの言葉に金髪の男は子供の行っていた先を見つめる。確かにそこにはソラと同年代に見える子供達の姿があった。ソラは渡ってしま達を指さしていた。

”その船長に言ってくれ。感謝する。この事遊んでくれて。”

「感謝するっつてさ。」

「ああ。」

立ち上がる事もなく信繁は頷いた。

”で少し、頼みがある。”

”この子には今まで同年代の友達というものがほとんどいない。出航まで少し時間があるから、一緒にいさせてもらえないか。”

「で、もう少し遊ばせてやってはくれないかってさ。」

山田が呆れながらも金髪の男が頭を下げる。

「しま！」

「おうよ。」

「もう少し、その子の面倒はみられるか？」

「いいよ。どうせマリで蹴って遊ぶとかだからさ。」

”ソラ。一緒にあそぼ？”

美井の呼びかけに一瞬頷こうとするが……。一瞬悲しい顔をして父親を見ると父親は静かに頷いた。その様子に弾けるように走って美井の所に行った。

”あの子のあんな顔……。久しぶりに見ました。”

”だよな。やつぱ……。ガキは元気な方が良い。”

山田はつたないながらもそう答えた。子供達はしまの持ってきた少し高級な模様の蹴鞠に美井も驚きながらも下に下りていった。だが驚いたのは……。子供達だけではなかった。

”あれは？”

”あれか？”

山田は大体予想が付きながらも、信繁の方を見る。信繁も当然のように見ていた。

「あれはなんだってさ。大方……。あのガキの持っていたものだろうよ。」

「ああ。あれか……。京の町で買ったとか言ってた奴だ。確か……。蹴鞠とかいつてたかな。」

”ボールだよ。”

”ボール？あんな派手できれいな物が子供のオモチャか？”

何か貴族を見るような目で信繁を見つめていた。当時の海外にお

いて鮮やかな色を放つ物は全て高級品だと思われていた。特に蹴鞠等に用いられる模様が付いていて、糸が着付けられている物などは日本では少しは高くても、一般の子供のご褒美程度には買われていたマリも西洋の人間にとつてはとてつもない高級品であった。

”まあ・・・な・・・。”

今更ながらに山田も昔マリを見た事はあつたが、これほどまでに驚くとは長政自身考えていなかった。

「おーい！」

棧橋から大声が聞こえる。あの声は・・・。

「傭兵長！」

「おお！山田か！」

上がつてきたのは新谷だった。

「信繁殿。」

「なんですか？」

「先ほど仕事が出来ました。それであんたら船団の連中にも手伝つてもらいたい。」

新谷の脂ぎつた顔が更に脂ぎっていた。確かに船員もいるが傭兵団として多くの兵士達はもう新谷の元にいるはずだった。

「なんででしょうか？」

「ついに大好機だ！ついに王国から、河賊討伐の命令が来たんだ。それで俺たちが行くことになった。今までみたいな小さな仕事じゃねえ。」

「そうか。了解した。」

「何かあるんだ？」

”ん？ああ・・・ほら河があるだろ。あそこの盗賊どもの討伐だと。”

”と言うことはこの船・・・軍艦か？”

”いや、一応・・・輸送船だぜ。”

”なら何の役にも立たないな。”

「何しゃべっている？」

新谷が不思議そうに金髪の男を睨む。

「いやあね。ちょうど同席してるから何言ってるのか分からないんですって。」

「そんならいいんだが。」

「そういやあ、隊長。今回も相乗りっすか？」

「いや、今回は単体だ。だからお前も気張って来いよ！」

信繁は一応頷いたものの、じっと考えていた。これはもしかして……。

「ただこの船を動かす人員もある。それに、今すぐは行けないぞ。」

「ああ。それはそれでかまわねえ。頼んだぜ！」

そう言つと新谷は興奮した顔で船を下りていった。これから各所をまわるのだろう。あの興奮ぶりが少し気にかかつてはいた。

「どうして。あんなにはしゃいでいるんだ？」

「ああ。今までは親衛隊だの、他の国の連中だの必ず、相乗りがいたんだよ。」

相乗りというのとはなりに軍隊がいてその先兵をやるという隠語みたいなものである。大抵傭兵団というのはこういう時は先兵だけやらされて、手柄だけは向こうと言つことも多かった。良くて向こうと手柄だけ折半である。だからこの単独出兵というのは成功すれば、手柄を独り占めでき、出世さえあり得る絶好の機会でもある。でもこの時の信繁には元々大阪に来るまで傭兵の存在を知らず、また傭兵生活のほぼ無い信繁にはそのすごさを認識することはできなかった。

「そうだな……掛け合つてみるが……ソラの面倒を見てくれるお礼だ。協力できることはあるか？」

「協力とは？」

「できる範囲でだ。俺たちもあの河側を避けて進むことを考えればリスクの排除はこちらにとつてもありがたい。」

「あのおっさんが何か手助けすることはないかってさ。」

「そうだな。小規模戦闘ではあるが……頼んでおくか……」

「それは……。」

信繁の言葉にはどことなく、悪い予感を覚は覚えた。しばらくすると行軍は終わり、伏せる合図がなされる。前は開けており、海の上には小屋が一つ……。いや砦とも言って言い大きさを誇る高足の砦が構えている。足下には船が数隻あり、あれで襲撃するのだろう。砦の周辺には見張りが数名立っており、砦の堅牢さが伺える。

「おめえら！突撃！」

新谷の号令がかかると兵士達が立ち上がりいっせいに突撃をかいしする。

「これは……まずい！算、しま！」

信繁は手を川上に向ける。その合図を見た二人は部隊から離れていく。幹花もまた……。その後をいつて行った。信繁は急いで援護しようと立ち上がると……。

「あんたは？」

新谷がただ立っているのを信繁は見つめる。

「俺は隊長だ。指示するのが仕事だ。」

前の方を見ると山田長政を先頭に部隊は走っていつている。この男の声が届く範囲をすでに超していた。この段階で、何故増援が大量に欲しいのか……。分かった気がした。そして……。山田が言っていた意味も理解できた。上を見つめるとやはり、襲撃に気が付いた賊達が矢を構える。その時だった。川下から大きな轟音が響くと川面が大きく揺れた。

「本当にこれだけで良いのか？」

アルフレッドがいぶかしげに河を見つめる。

「いいの……。十分……。です。」

美井が答える。アルフレッドの船に搭載された自営用の安物の大砲を数発、手前に打ち込むだけだった。山田とかと、この女の子の指示ではその位置で良いのだという。船長以下全員も不思議そうな顔をしていた。

”だって……。捕らえるはずの人を……。殺しちゃ……。いけない

でしょ。”

”もう良いのか・・・もう少し撃とうか？”

船長も何か不安そうに見えるが、その先には確かに戦闘中の人間達
がいた。

”良いよ・・・これ以上は・・・いらない・・・。ありがとう。”

美井の言葉を聞きながら、船長はじつと双眼鏡で皆を見つめる。

確かに向こうでは戦闘が始まっているようだ・・・。新谷と、信繁
が見つめる先には貿易船の甲板から大砲が数発撃ち込まれた。その
衝撃で兵士達の顔に動揺が走るが・・・。

「てめえ！あれは何だよ！」

新谷が怒り心頭で信繁に食ってかかる。

「あれか・・・あの時・・・金髪の男がいただろ。あいつに頼んで、
軽く砲撃してもらった。数発程度なら手前に落とせば戦況に影響は
ない。」

「はあ！報酬減るじゃねえか！」

「報酬の方が大事か？人の命より。」

「当然だろうが！」

新谷の言葉を聞いた瞬間、信繁は刀を抜き首元へうちこ・・・。

「ひい！」

驚いて硬直する新谷の首寸前の所で刃を止め、信繁は睨みつける。
普段温厚で静かな男ではあるが、この時の顔は怒りで顔をゆがませ
ていた。

「この世に・・・命より重い報酬なぞ！無い！！！」

その形相と、その眼光を前にして新谷はへなへなと腰を下ろし・・・

・腰が抜けてしまう。

その様子を見た信繁は刀を抜きながら兵士達を見つめる。河の浅い
所があり、そこから渡るようだ、それでも腰あたりまで浸かつて
しまう。まだ向こうの賊達の泡手振りがあつて矢は放たれていない
が、時間の問題だろう。走って川を渡る前後続部隊まで走ってい
く。

「お前ら！お前らには別の仕事をやる！」

「なんだ！」

「お前らは近くの林の中から投げられる物を持って河の中腹から大声を上げながらものを投げろ！」

「え？」

「あいつらが生きる為だ！早く！」

「了解。」

そう言い、後続部隊は離れていく。その間に川に入った部隊に声を掛ける。

「お前ら！身を伏せて泳げ！顔を上げれば撃たれる！」

「分かった！」

前の方で山田の声が聞こえる。それに合わせ全員が身を伏せながら近づく。その時、向こうから大声が聞こえてくる。物はやはり届かない物の、大声を上げることにより攪乱はしているようだ。矢を構える男達が、声を上げている方を狙い始める。だが、警備部隊の刃物を持った男達が砦の入り口に走ってくる。数は少ないが・・・状況が悪い。だがその時、後方の男が倒れる。その事に驚き後ろを振り向く瞬間、信繁は腰の小刀を抜き、全力で投げつける。それに合わせ、先頭の一人の肩に刺さり、そのまま、河に転落する。

「お前ら！降参しろ！」

算の声が向こうから聞こえる。

「お前らあ！こうさんだあ！」

しまの声も聞こえるが・・・幼くて・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

幹花の声は小さくて聞き取れない。だからか、数が少ない方に襲いかかっていた。当然これは信繁にとって計算通りである。

「ん！うん！はあー！」

算が槍で武器をなぎ払い一人を川に突き落とす。

「これで・・・二人か・・・」

同じぐらいの頃、しまは信繁にもらった脇差で二人の太ももを

切りつけ、行動不能にしていたが……。

「やはり……皆様、少しだらしないですよ。私なんか。」

そう言う幹花の足下には無数の男達が倒れていた。腕とかを痛そうに抱えている為か……どこを怪我したのか言い表せない……。

「すげえ……。」

しまが驚いたように幹花の周りの男達を呆然と見つめていた。一気に山田が河からはい上がると一気に突撃するが……その頃には入り口に集まったほとんどの敵が倒されていた。

「野郎ども！突撃だ！」

「おおー！」

河から上がった男達は一気に建物の中になだれ込んでいった。

「終わりましたね。」

幹花がじつと中の様子を見つめる。船も何かを確認すると引き上げ始めていた。

「まあな。」

倒れ込んだ男を捜し、小刀を抜いていた信繁は幹花を振り返る。

「でもおめえ……ただのうるさいおばさんだと思ってたぞ。」

しまは感心した様に幹花を見つめる。

「……一応嗜みとして半蔵様とかから、武術は習ってあります。」

「あれが嗜み？」

筧が呆れた目で幹花を見つめる。戦いの様子を見れた数少ない人物でもある。

「それなら……後は連中に任せるか……。」

そう言い信繁は近くに腰を下ろした。中では切った八田であるが、彼らの手柄を奪うのも忍びない。ふと川面を信繁は見つめる……どんなに場所が変わろうとも……大河の流れはゆったりとしていて、こんな時でも落ち着いていた。

「後……おばさんは……この年の人に言うのは……死にますよ。」

「あ……はい……。」

「すまねえな。船長さん。」

山田が船に戻ってきたのは戦が終わりに、信繁達が船に引き上げ、一日経った後だった。その間に彼らは、砦の中の兵士達を王宮に連れて行き、王宮での報償は・・・相手も意外だったらしく・・・未だに決定していない。まあ・・・お互いの考えることは分かるだけに信繁も苦笑いする。

「いや・・・いいよ。」

「あれから俺たちは話し合ってたさ。」

「ん？」

「あんたにこの町を引き継いでもらいたい。」

「・・・それは断る。」

「へ？」

山田はその即答に意外そうな顔をする。

「俺では勤まらないだろうし、それにもっと適材がいる。」

「へ？」

「あの新谷はどうした？」

信繁は聞いてみる。あの様子では予想は付くが。

「ああ。あいつは追放した。あいつ・・・どうも相当ピンハネしていたらしく、向こうで聞いた額に全員が驚いた驚いた。それで、自動的にあいつを追放するってなっちまったわけだ。」

「そうか。」

「で・・・あんたが。」

「断る。」

「だよな・・・。」

二度目の返事を前に長政は落胆する。だが、信繁の顔は明るかった。

「ただ・・・この船が出航できるまでの間。お前らを鍛えてやる。」

「へ・・・。え・・・？」

「あの様子だとそう戦になれていない人間ばかりのようだったから

な。それが報酬で良いかな。通訳殿。」

「……よろしくお願いします。」

その言葉に山田は初めて大きく礼をするのであった。

「青海……。」

ちよつと船長室を山田が訪れていた頃。寛と青海は青海の部屋でじつと青海の様子を見ていた。

「おまえ……。」

「まだ黙ってくれねえか。あいつにはな。」

青海が包帯を取り除くと腕から血がだらだらと垂れてくる。ちよつど利き手側である為、重傷だと思われる。

「それであの時来なかったのか。」

「まあな。」

「動くのか？」

「大阪の時から治療しているが、これと傷口からの毒で直るのにもう少しかかる。」

腕からはまだ血が噴き出している。

「だが、あまり握力はない。だが、生活はできる。」

「そうか……。なら医者を探せば。」

「まあな。医者は行ってきたが、後は傷薬を塗って、気力勝負だと。」

「そうか……。」

寛はその様子に落胆する。だが気にすることなく包帯を反対の手で取り出すと、口に酒を煽り、傷口に吹きかける。

「もう少して直る……と思う。でさ、俺じゃわかんねえからさ。」

「ん？」

「傷薬、頼む。」

「……しょうがないな。待っているよ。」

寛は力なく微笑むと、立ち上がる。何か……悲しさがこみ上がる。この事態が何か開き影響が起きなければいいが。

第十七節 半蔵の真意とオランダ商船団（前書き）

あれから一ヶ月 信繁たちは山田たちに学問や武術などを押江禎太。そのなか、修理が終わり執行の準備が可能となる。その時・・・。

第十七節 半蔵の真意とオランダ商船団

第十七節 半蔵の真意とオランダ商船団

「大体こんな・・・こんなかんじだ。」

地面に絵を描き説明する信繁の周りに群がっていた男達が離れていった。そこには戦術に関する連携の図が書かれていた。それを貴重な紙に写している物もいた。

「ありがとうございます！」

立ち上がると全員が一礼をする。この現地に住む日本人街の傭兵達の顔は輝いて・・・あこがれの教官でも見ているような・・・きららした瞳で信繁を見つめる。滞在が必要な一ヶ月の間、青海、算、幹花達と信繁は、教えられる限りの技術を教えることにした。・・・暇だからと言えば暇だからだが、あの新谷傭兵団のままではないから兵士を送つても、死傷者ばかりが増える一方で、どうしようもないと分かっていたからだ。だから、幹花はこの辺一体に使われる言語と体術、青海は傭兵稼業の鉄則と仏教、算は計算と棒などの武器。信繁は戦略と思想と礼儀についてを教えていた。最初のうちは教えられることに反感を抱いていた彼らも、彼らの強さなどを目の当たりにして、(しぶしぶ)従つていった。

「船の修理を終わるし、これで俺からの講義は終わりだ。」

「寂しくなるな。」

去つていく他の者や子供達を残して、長政は寂しそくに信繁を見つめる。確かに最近船は修理されていたが・・・。

「いいさ。俺もすぐに出航できるなら、こういう事はしなかった。」

「本当に助かる。」

”親方！。こつちくてくださいよ。飯！飯！”

向こうから男達の声が聞こえる。この日本人街の長として、傭兵団を率いていた長政はこの頃にはすっかり呼ばれ慣れるまでになっ

ていた。新谷元備兵長は……今はどこにいるのか誰も声を掛ける者はいなかった。

「応！行く！」

言葉に応えると、山田は一礼して、信繁の元を去っていった。もう夕方ではあるが……。

「本当に……短い……。」

信繁は感傷に浸りつつ、夕日が下りようとする空を見つめる。異郷でも鳥は鳴き、夕暮れは来る物だと感心している……。そう言えば、今はオランダ商船に乗っていったソラ達は元気だろうか。何も言う前に慌ただしいままで照ってしまったが、しま達にも良い経験になったようだ。

「……何がですか？」

その声に振り向くと幹花がすぐ側にいた。

「いや……ほら……一ヶ月って何か……こうね……。」

「それは良かったですね……。」
冷たく……いや一ヶ月の間、何の態度の変化もないまま冷たい瞳で幹花は見つめる。

「で……。船長来てください。」

「はい？」

そう言つと、幹花は腕を握るとそのまま、ズリズリと引きずっていった。

「着きましたよ。」

信繁は連れて行かれた先、そこは港であり、もう修理を追えた船……のとなりに似たような船がある。そこから人々が下りてくる。

「これは……。」

「はい。日本の本で製作していた二番艦です。」

「これは……。」

どう見ても似たような船ではあるが……。大きさは少し大きく、立派であった。

「これを待っていたのか？」

「それは・・・そうですね。」

信繁はその船から下りてくる船長を待とうと思ったが・・・。

「で、やっと届いたのがこれです。」

そう言つて手紙を信繁に手渡す。

「これは・・・。」

日本風の手紙に書かれた自分の名前につい違和感を覚えてしまう。中を開くと丁寧な文字が書かれているが・・・字に見覚えがあつた。

「半蔵か。」

「ハイ。半蔵様の手紙です。」

幹花の声のうわづり方を尻目に、信繁は手紙を開く。

”ご機嫌いかがだろうか。こちらの方は大分安定的ではいるが・・・まだまだ予断を許さないといった所だ。で・・・ここからが本題になる。君に頼みたいことがある。これはここ数年の議題でもあつた話だ・・・。多くの大名は知らないが、豊臣家には海外からの通商契約があり、各国と結んでいた。どうもこの通商契約と言う奴がくせ者で、商売特権を定める物だが、どうもこれが国を支配したと勘違いする国もあるみたいだ。そして何より我々には分からないものがある。其れは・・・大阪城であつた黒ずくめ。按針の話ではあれはカトリックと呼ばれる輩で、そのほかにプロテスタントとか言う輩がいるそうだが・・・。実のところどちらを信用して良いのか分からない。それに按針の話が本当なのか今ひとつ要領を得ない。そこで信繁には頼みたいことがある。其れは今回通商条約を絞る相手であるイギリス、オランダ、イスパニアの三国を調べてきて欲しい。諸大名に寄れば、このどれか一国に絞ることで、この動乱を未然に防ぎたいという意志もあるようだ。

おまがいるその地点が我々の知る最前線である。そこから行き方を探り、イギリス、オランダ、イスパニアの三国の位置を探り、その現状を報告して欲しい。そのうち一国条約を結ぶことで、安定を図りたい。よろしく頼んだ。”

「・・・これが目的か・・・。」

確かに国内ではいえないはずだ。それにこんな立派な船を用意したはずだ。あの時行っていた希望とは、諸外国に行くことができる船の完成で、他の国に張り合うつもりだったのだ。

「はい。」

「一ヶ月の修復は嘘か？」

「正確に言えば、この船の到着まで、何を言っても待つてもらったつもりでした。」

「そうか……。」

今着いた船を見つめる。そこにも多くの浪人達が乗っていた。夢と希望に輝いた瞳でこの地を踏みしめている。

「それなら……待たずに船の中でも伝えればいいのではないか？」

「いえ。実はこの話は家康様が平和にするまでは後回しにしていた問題で、やっとできるようになった問題なので、実はかなり前からあったのですが……。」

そう言つて幹花は乗ってきた船の中に入っていつてしまった。それを見て信繁は慌ててついて行った。

「ただ……我々はこの輸出、輸入には我々は理解できない問題があります。」

歩きながらしゃべってはいるが、今は船員も少ないながらも、入り口だけは封鎖させている。

「と言うのも、向こうの物価、特産品が分からぬ以上、向こうでの価値は分からない為、このままでは言い値で相手の商品を買取らなくてはならないのです。」

「それは……。」

幹花は話ながら、船長室へ歩いていった。

「確かにそれはまずいが、こうして交易しているじゃないか。」

「それはこうしてある程度船の行き来が楽な地域では、相場の聞き取りも容易い物でしょう。ですが、どこにあるか分からぬ地域ではそれもできません。」

幹花が船長室にはいるとその後を追いかけて信繁も入った。

「ここで一方的な損をすれば、他国に攻め入らせる隙を与えます。それに……。」

「それに？」

「変に迎合すれば大阪みたいな事が起きるやもしれません。」

「それは……。」

「だからといって遅ければ、周辺諸島みたいな事になります。」

信繁が具足を脱ぎ畳に座ると、幹花も腰を下ろした。

「と言うと？」

「ハイ、大体予想が付いているかもしれませんが、この辺り一帯は今、半々で、ある国に支配されています。うち一国はオランダ。新興国ですが、その勢いは強いです。もう一国は……。」

信繁は棚においてあった地図を幹花の前に広げる。

「イスパニア。帝国らしいのですがその実情は分かりませんが、宣教師の多くはこの国の出身な様です。ですが、オランダも同様かもしれません。そこがはっきりしないのが今回の決断を難しくしています。」

そう言うって地図を指さす。

「このアユタヤモオランダ商船が仕切ってはいますが、ポルトガル、イスパニア船に取り替えられるか分からない。そう言う実情があります。」

この1600年代の東南アジアはオランダのオランダ東インド会社とイスパニアの勢力争いの中にあった。その為か賄賂や小競り合いが多く、予断の許さない状況でもあった。またその中でも突出した戦闘力を持つ日本はどう出るのか各国が見守っていた。状況次第ではどちらも勝者になりうる状態であった。だからこそか、当時の日本の商船は実害がないのも含め、どちらの勢力も、無条件で通していた。

「そんな状況なのか……。」

あの時の新谷の喜びようはこういう事か……。信繁は感心してしまつ。

「ですから、身の振り方一つでは幕府は滅びてしまいうやもしれません。」

「でもまあ・・・船員は？」

「ハイ。それは明日、選抜を掛け、のせていきたいと思えます。後、職人、船大工等の足りない人員を取り寄せておいたので、彼らも乗船いたします。」

「これでやっと本当の人員分をそろえたわけだ。」

「はい。どこにあるのか分からない国に行くのです。せめて万全の備えをしたいものです。ですから半蔵様は万全の準備をなさいました。」

信繁は地図を見て考える。確かに東南アジアの位置を示すこの地図のどこにも、オランダの文字はなかった。

「それでか・・・。」

あの時の家康の日の本への愛情。そしてこの船に託した未来。意味が理解できた気がしたが・・・手がかりさえない国へ行こうとは・・・半蔵も大胆なことを考える。

「ただ・・・。」

「ん？」

「大まかな地図はあるので、それを頼りに・・・。」

「それはまずい。」

幹花が地図を取り出そうとするのを押さえる。

「どうしました？」

「その地図だけでは到底たどり着けまい。」

信繁はじつと考えていた。確かにこの現状はまずいが、たどり着けねばもつとまずい。確かに半蔵の考えていることも分かるが、このまま行っても戦闘して終わりやもしれん。だとすると聞き込みをするしかあるまい。ちょうどここはアユタヤ。オランダ区域内だ。聞き込み・・・今はオランダ商船はいない・・・。一ヶ月前に出航したばかりだ。

「では・・・。」

「幾つか聞いてまわる。後青海達を集めてくれ。」
「は。」

夜の船長室に青海、寛、しま、美井、と幹花が集められる。

「なんだ？」

「次の目的地が決まった。」

「ん？もう大阪に帰るのではないのか？」

青海は意外そうな顔をしていた。確かに今までこの船は人員運搬船としか聞かされていなかった。

「いや、元々半蔵は別の目的があったようだ。」

「と・・・言いますと？」

寛は不思議そうな顔で船を見つめる。

「半蔵は・・・この船を使って・・・。」

「パーパの国に・・・行くの？」

美井の声に全員が振り向いた。

「うん・・・まあな。」

「そう・・・なんだ・・・。美井の言っていたとおり、エゲレス、オランダ、イスパニアの三国へ向かう。」

その言葉に全員に衝撃が走る。特に青海と寛は世界地図で昔、エゲレスの位置は確認していたからだ。

「確か・・・。」

しまはちょうど信繁の目の前に広げられた世界地図を見る。

「ここから。」

しまは日本を指さす。

「ここまでだよな。」

そう言い地図の反対側を指さす。ちょうど世界の果てから、世界の果てに向かう。そんな旅である。ここまで来るのにすら半月以上はかかっている。それは全員が分かっていた。

「その現状を探るのが俺たちの役目だ。」

「行くしかないのか？」

青海は不安そうな声を上げる。

「ここまで来てしまった以上は・・・行かざる終えないだろう。だが・・・。」

「だが？」

算の不思議そうな声が響く。

「運良くか悪くか・・・。大阪に戻る予定の船も・・・。」
「 Bannon! 」

青海おもいつきり畳を叩く。

「ふざけるんじゃないやねえ。そこまで俺は大阪に愛着があるわけじゃねえ。おれは・・・。」

「拙者について行き申す。」

青海の声に合わせ、算が大きく一礼をする。

「ここにいる奴らでもう・・・。引き返す奴はいねえって。」

「しまはしんみりと答える。」

「すまない・・・。」

信繁は大きく、深々と頭を下げる。

「でも・・・。」

美井はじつと地図を見つめる。

「どうやっていくの?・・・ここからここまでで半月・・・。」

美井は地図の日本と、アユタヤを指さす。確かに単純に指で指して数えただけでも三月はありそうだ。そこまでの食糧はこの船に乗りそうにない。

「それでな・・・俺は幾つか考えた。」

「ん?」

「この地にはオランダ商館があるんだよな。」

「はい。」

「前に会った・・・ほら・・・。」

「アルフレッド様・・・でしたっけ。」

「そう。そう。」

信繁はにやにやと頷く。

「目的が分かれば、人脈は良い”つて”となろう。それを優先させる。できれば・・・オランダの船は本国にどうやってか知らんが行つてはいるのだろう。その港で補給させてもらえば、簡単にいけるというわけだ。」

「・・・確かに・・・。」

幹花は啞然とした顔で信繁を見る。

「それでも長い航海となろう、各自、準備はしてきてくれ。で、各自の役回りを伝える。」

「了解！」

「算、幹花！」

「は！」

算と幹花はじつと信繁を見つめる。

「算は物資の計算をしてくれ、できれば、香辛料は多く積んでくれ。どっち向きでも遠くに行けば金の替わりになる。」

「は！」

「幹花はオランダ商館に向かい、アルフレッド殿の帰港予定を探ってくれ。」

「は！」

「しま！青海！」

「は！」

「お前達は明日、日本人街に向かい、来たい人間を聞いてきてくれ。そいつらをできるだけ連れて行く。」

「わ、分かった。」

青海は頷いた。

「わたしは・・・。」

「しばらく俺と一緒にいてくれ。と言っても・・・。」

「船で待機するだけだな。」

「？」

美井は不思議そうに首をかしげるのだった。

「こつという事・・・なの？」

美井は次の日の昼頃、じっと船からオランダの船が止まっている向こうの棧橋を見つめる。

「まあな。貿易船とくれば、一定周期で帰ってくる。なら何時があるのか。半月ぐらいが限界だと思っていた。だとすれば、帰ってくるのは一ヶ月後だ。」

そう言い、散歩みたいに歩きながらゆっくりとオランダの船に向かっていった。

「それで・・・通訳の人は？」

美井が聞いてくるが、お構いなしに信繁は歩いていった。無論先日の事もある、幹花はオランダ商館へ使いに行っている。

「お前もある程度は・・・。」

「できるよ。」

「頼んだ。」

流石にこつと満身の笑みをしてくる信繁に・・・美井は断るところができなかった。

「でも・・・分からないのがあったら・・・。」

「そこは・・・もう一度つて言えばいいよ。それほど怖い所に行く訳じゃないし。」

「・・・そうだね。」

信繁の気楽な声とは裏腹に、美井は見える船に敵愾心を持っていた。彼女自身いくらでも人の裏切りという物を味わってきた。いや、冷たく手の平を返されたことも幾度もある。

でも・・・この人は違う。

「さ・・・行こうか。」

そう言う信繁は刀の具合を確認して、オランダ商船に歩いていった。しばらく歩くと荷下ろしをしている最中であり、その陣頭指揮に、オランダ人が働いていた。

「あの・・・主計の・・・アルフレッド・・・さんはいますか？」

”ん？”

船員の一人が振り向くと、じつと二人を見つめる。しばらく見つめるとある男の側に走っていく。その男はじつとこちらを見ると走ってきた。

” ようこそ！船長！”

アルフレッドは手をさしのべてくる。

「握手。」

「あ……ああ。」

三井の声とともに信繁は差し出された手をぎゅっと両手で握る。

” で……何のようかな。”

アルフレッドは気さくそうに微笑んでいる。

” あるお願いがあつてきたの。”

” なに？”

” あの……できればあなたがたと……取引がしたい。”

” 何の？”

” 私たち……あなた達の……オランダに行つてみたい。ソラに聞かされて……すてきな所……と聞いたから。”

その言葉にじつとアルフレッドは美井と船長を見つめる。

” 船はどうする？”

” 一緒に……船で行きたいな。”

” 少し待ってな。”

そう言うとアルフレッドは船に戻っていく。

” 船長！後の積み荷は？”

” それは出しておけ、売れなければ向こうへ持つて行く！”

アルフレッド達は男に囲まれて奥に消えていった。

” どうだった。”

「ん……。少し待ってと……言っていた。」

「そうか。」

立ってじつと向こうを見つめると、騒がしくなってくる。

” おめえ……何者だ？”

髭無垢じやらの男が側に寄ってくる。荷下ろしが終わったのだろ

う。近くには荷物が多く置かれている。

”私たち・・・”

”おめえ見たいなガキじゃねえ!”

”あっちの船の・・・船長。”

そう言つて、美井は向ここの船を指さす。

”じゃあ・・・”

髭無垢じやらの男は信繁を睨む。

”こいつに勝ちや!こんな奴にかちゃア俺が船長だなあ!”

そう言つと髭むくじやらが殴りかかる。

「信繁!」

美井の叫び声が聞こえるが・・・。拳が当たる前に男の腕が捕まれ、捻られている。もう少し角度を変えれば腕が折れかねない角度だ。そのまま信繁は反対の腕を首に押しつけ、勢いを殺す。そうしなければ彼の腕の骨を彼の拳の勢いだけで折れかねないからだ。

「何て言つていたんだ?」

「・・・よく分からないけど・・・相手が・・・私たちを弱い・・・だつて。」

美井は確かに昔剣とかを振っている所を見たことがあるが・・・ここまで強いとは・・・一度も思ったこともなかった。

「そうか・・・伝えてくれ。期待に添えなくて残念だったと。」

”あなた・・・。”

腕を極められた男は脂汗を垂らしながら眼前に寄ってくる少女を睨む。

”彼から・・・伝言よ。あなたの期待に・・・添えなくて・・・残念だったつて。”

その言葉に周囲が大笑いしていた。ちょうど作業が終わっていたのだらう、周囲の船員達が信繁を見つめていた。

”お前ら!何している!”

声の方を見つめるとアルフレッドとソラの二人がやってきていた。 ”親方!こいつら・・・俺に手え出して・・・。”

” すまない・・・お嬢さん。船長に離すように伝えてくれないか。美井は目配せをすると、感じ取ったように信繁は手を離す。

” ありがとう。お前ら！ここは海の上じゃないんだ！勝手に人を襲うな！”

”・・・すいあせん。”

一言二言うつと、船員達は船に引き上げていった。

” すまない・・・乱暴者で。だが・・・船長殿・・・しゃべれぬのか？”

” いえ。この言語に慣れていないだけ。”

” そうか・・・ではお嬢さんが通訳か。”

” はい。”

美井は恭しく一礼をする。それを見て信繁も一礼をする。

” ここまでで来た子は初めてだ。ソラにも見習わせなくてはな。”

” いえ・・・彼も・・・良い子ですわ。”

その様子をじっとソラは・・・ただ呆然として見つめていた。変わり身も早い、大人と対等な女の子は・・・格好良かった。

” 船長というか・・・船団長と話してきた。”

” はい。”

” 船団長が来る。”

その声とともに一人の細い男が現れる。

” 先ほどの話・・・聞きかじらせてもらった。通訳さん。初めまして。この船団の船団長ゴールドエイ・フォン・アルハイムと申す。”

細い男が一礼をすると、それに合わせて信繁は挨拶を交わす。

” 恐れ入ります・・・で・・・。”

” ああ・・・。アルフレッドから話は聞きました。あの船ならばらしい航海ができそうだ。我々の行く範囲までなら同行いたそう。”

「信繁・・・。いいって。」

「感謝する。」

信繁は大きく一礼をする。それを見てゴールドエイは微笑むだけだった。

”道案内代わりに……一人、使いを寄こします。その方の道案内で、向かってください。出航は何時ですか？”

「出航は何時？……だって。人を寄こす……。」
美井の言葉に信繁は少しばかり考える。

「そちらに合わせるよ。」

”そちらの都合通りに……。”

その言葉にゴールディは少し考え始める。予想外の答えだったからだ。彼らに……駆け引きという物はないのか？

”なら、早い方が良いでしょうから、明日で。”

「明日だって。」

「了解した。感謝いたす。」

”ありがとうございます……。船団長閣下。”

”閣下はいらんよ。よろしく。”

そう言うつと、ゴールディは背を向け歩いて去っていった。

”ではお嬢さん。明日。”

”はい。”

そう言うつと美井は信繁の裾を引っ張る。それに信繁は頷くと一礼をし、彼らに背を向けていった。しばらくアルフレッドも彼らを見送っていたが奥から雄叫びが聞こえると、オランダ船の奥から、一人の男が突進していった。先ほどの船員だ。

”恥いがかせやがって！許せねえ！ぶっ殺してやる！”

”待て！船長が止めただろうが！”

船員達の声が響く中、男が突進していった。どうも船員達に馬鹿にされたらしく、手には大きめのシャムシール（湾曲刀。海賊の間で流行していた武器）が握られている。信繁はその方をちらっと見る。もう……避けさせようにも時間がない。信繁は美井を抱きかえると半身をずらす。その隙間にシャムシールが通過し……棧橋に刺さる。信繁は刺さったシャムシールを思いつき踏みつける。と、更に深く棧橋に食い込ませる。そのまま、信繁は相手の軸足の太ももを狙い、力一杯上から踏みしめ……その勢いで体を反らせ

てがつくりとのけぞらせた顔面に膝蹴りを打ち込む。そのまま、脳震とうを起こし崩れるように棧橋から海に落ちていった。その音に船員達が駆けつける頃には男は海に沈んでいった。

「大丈夫か？」

抱えられた美井を見ると・・・顔が青ざめていた。

「う・・・うん・・・。」

あまりのことに全員が啞然としていた。

「何か声を掛けようと思ったが・・・。」

信繁は男が落ちた海の方を見るがハッと気が付くと船員達が慌てて回収に向かっている。

「さ・・・行こうか。」

「あ・・・うん・・・。」

信繁はそのまま、美井を抱きかかえたまま、自分の船に帰って行くのであった。

” 船団長。”

アルフレッドは去っていく信繁を見つめていた。ソラも、あまりのことに啞然としていた。ポールはこの船一の腕自慢だった。だがその腕自慢をあもあつさりと倒すとは・・・。

” 良い腕だ。もしかしたらやっこの荷物を本国まで送れるかもな。”

” と言うことは・・・。”

” ゴールディの提案にアルフレッドはハッと気が付いた。

” 我らだけではあの海域を突破するのは難しいが、あの船を盾にすれば逃げられはしよう・・・。”

信繁達の乗ってきた船を見つめる。新造艦である為か、その容姿は立派である。本国の主力艦隊と見まごうほどの立派な船である。

この当時オランダの船は東南アジアで勢力を伸ばしてはいるが、インド海域はイギリス海軍の海域であり、私掠艦隊（国家公認の海賊部隊）や海賊などがひしめく危険海域である。そのため、重要品目

である香辛料を安く買い付けても奪われかねなかった。だからこそ
の船団運送であるが、護衛艦隊はあつて損な事はない。特に軍艦が
いればその海域は安定する。またポルトガルの動きもまた怪しい。
なら……。

”でもせつかく……この子の恩人を……。”
アルフレッドはソラを見つめる。

”何もなければセイロンまではすんなりで行けよう。そこまで着け
ばあっちの連中に荷物を渡せる。帰りは大回りでも良い。”

”確かに。”

そう言つて不安そうに信繁を見るしか……アルフレッドにはで
きなかつた。

「何……をやつてらっしゃるんですか。」

幹花と寛の冷たい目が信繁に向けられていた。当然である。誰に
言つわけでも無く、唐突に出航日が決定していたのだ。これに泡を
食わぬ者はいない。

「ま……良いじゃねえか。俺たちらしい。」

青海がにやりとする。

「あ、腕つきき60人ぐらいは集めてきたぜ。」

この船は最大150人ぐらいは載れるが、食糧と、職人や船大工
達をのせることを考えると60人は限界と言える人数である。

「分かつた。早速のせてくれ。報酬は到着時に荷物の金で払う。」

「私は無駄でした……ね。」

幹花の冷たい目線が刺さるように

「たまたまだつて。ちょうど来たから行つただけだつて。」

信繁は苦笑いするが、幹花は睨むのをやめなかつた。

「とりあえず、今日中に詰める荷物は詰めておきました。これでい
つでも出航は可能です。」

寛の言葉に信繁は大きく頷く。

「ありがと。後は向こうから来るお目付役を待つて行くとするか。」

「でもいいのかよ。お目付役なんて……。」

青海は怪しそうに甲板から向こうのオランダ船を見つめる。

「どうせ、接触して高官に探りを入れる必要がある。なら、商人の方が都合が良い。連中は金になればめざといからな。信用を勝ち取るにはこつちが従う態度を見せる必要がある。」

「確かに。」

信繁の言葉に寛が頷く。

「それに向こうも抜け目ない。」

「そうなのか？」

青海は見つめているが、動きらしい動きもない。

「そう……船団長は……何か……冷たい。」

美井がつぶやく。

「明日離れば、しばらく陸ともお別れだ。ゆっくり休んで……元氣に行くぞ！」

「了解！」

その言葉に全員が頷く。

「……と言っても……まさか……こんな事になるうとはな……」

青海は船室で一人つぶやき、腕の包帯を取る。まだ少し……膿んでいた。

「これからは……どこが陸地か分からないとわねえ……。」

コンコン

「入るぞ。」

入り口を掛けて、寛が入ってくる。手には薬が握られていた。

「お前。」

「よ。青海のおっさん。」

寛と一緒にしまもやってくる。

「薬を取りに行く時にな……見つかってしもうてな。」

「……本当に。寛さんももう少し、隠密を習った方が良いのでは

ないでしょうか。」

その言葉に全員が後ろを振り向くと幹花が冷たい瞳で……全員を見つめていた。

「俺たちは忍者じゃねえよ。」

その言葉が無視するように幹花は青海の腕をまくる。

「これは……傷がまだ……。」

青海が腕を隠そうとするがそれを無理矢理幹花が引き戻す。

「傷を見せてください。」

……。幹花はじつと傷口を注視している。

「これは治るはずがありません。」

「え……。」

「薬の無駄です。」

幹花の暴言に青海が激昂する前にしまが服の襟をつかみ、つるし上げようとする。

「てめえ！」

「……だから……私も……お離してください。」

捕まれて苦しそうな顔をする幹花にハツとなり、しまは手を離す。

「……直んねえのか？」

「……痛いのは我慢できますか？」

「へ？……まあな。」

幹花の突然の言葉に強がるが……その顔をじつと幹花は見つめる。

「……しません。寛さん。少しお願いできますか？」

「何をだ。」

「青海さんの腕を押さえてください。」

「……ああ。」

そう言うと二人は青海の腕を固定する。幹花はまず、青海の部屋を見渡すと、青海の部屋にある酒を持ち出すと急に煽る。

「おめえ！」

青海は怒鳴ろうとするが……。幹花の目は真剣そのものであつ

「青海は……。」

「後はどのぐらい腕力が下がるか分かりませんが、これ以上悪くなることはありません。感謝するなら……ここまで検診指摘にしてくれた皆さんにしてください。」

そう言うつと、幹花はさつと立ち上がるとさつさと歩いて部屋を出て行った。流石の態度にしま達はただ、見送るしかなかった。

「青海……。」

「だいじょうぶかよ……。」

しま達の心配する声が聞こえる中、階段を下りてくる音が聞こえてくる。その音にさつと根性で青海が傷口を隠す。

「何か……凄い音が聞こえたが……。」

信繁が顔を出すと脂汗を垂らしながら、青海が無理矢理微笑んでみせる。

「こいつらな……俺の酒であそびやがって……。」

青海の言葉に慌ててしまと算は首を横に振る。

「いや……。」

「あ……。」

「明日は何時出発か分からないから……。早く寝ろよ。」

その言葉に信繁はくるつと振り返ると階段を上がり、甲板に上がる。船長室は甲板からでしか行けないが……甲板に信繁が上がるつと、何故か苦無を握り嬉しそうにじつとそれを見つめる不思議な幹花の姿があった。

次の日の朝、船員達には事情を告げると船員達はうなずき、仕度を始めていた。その最中のことだった。青と基調とした服で着飾った男が一人、船内に上がってくる。

「俺は！オランダ海軍中将ゴノヴァン・オーレッド・フル・フォイレール・ゴノ・ドノヴァンである。どなたか、船長をここへ。」

大声でがなり立てる軍服の男、船員達が顔を出す中、船長室から信繁が顔を出す。

” 船長はこのお方です。 ”

” そう言つと幹花が一步でて、信繁を指さす。

” ではお前！挨拶ぐらいはしろ！”

その言葉にかちんと来ていながらも、幹花は……こめかみを押しさえ、信繁を見つめる。

「信繁様。どうもあの方は正式に挨拶して欲しい……とのことです。」

信繁はじつとその軍人を見つめる。信繁は少し考えると……軍人の前まで歩くと……信繁はさつと手を出す。先日見た握手と言ふ奴だ。

” 貴様！”

” 我々はまだ言語は分かれど異邦の者。礼儀作法には疎いです。”

その言葉にじつと軍人は怒りに震えながらも手を握り返す。当時に日本人とは他の中国人やシャム人と一緒の二等市民というイメージがあつた。オランダ人の下という意味である。それがこの軍人と握手という対等の立場を主張されたことに怒りを覚えたが……彼女の一言で踏みとどまつた。ここで機嫌を損なえば、せつかくの戦力を失いかけない。すぐに離すと幹花を睨む。

” その女！今度からこの船長に礼儀を教えておけ！”

「何を言っている？」

「いえ……。船室に案内しろと。」

「そうか。頼んだ。」

” そう言つと一礼し、信繁は船長室に戻っていく。

” ではこちらにご案内します。中将様。”

” う……うむ。”

” 船長室ではないのか？”

” この船の船長室は椅子一つありません。”

” そうなのか？”

” ですからあなた様には特別な部屋をご用意いたしました。”

” そうか……そこへ連れて行くように。”

そう言い、幹花は奥の船室へ連れて行った。

「あれは・・・怒っていたな。」

「ああいう男は気位だけが高いという者よ。」

青海達のみつ詰める中、信繁だけは 不思議そうに自分の手を見つめていた。まだこの頃の信繁はその意味を理解していなかったのだ。

「信繁！向こうの船が出航を始めるぞ。」

しまは上の見張り台から声を上げる、

「出航だお前ら！」

信繁の声に全員が声を上げる。それに答え全員で帆を上げる。彼らにとって未知の地への旅は今ここに始まったのである。

第十七節 半蔵の真意とオランダ商船団（後書き）

ちよつと内容が薄い回になってしまいました。次回からはもう少し濃くなる予定なのでお楽しみに。

第十八節 ムガールと呼ばれた王朝（前書き）

出航した信繁たち一行に立ちふさがるなぞの一隻のガレー船。それはなんと……。

第十八節 ムガールと呼ばれた王朝

第十八節 ムガールと呼ばれた王朝

「みんな・・・これ・・・書いて。」

美井が手に持った木の板の一部を指さす。

「おう！」

船員達の掛け声が聞こえる。それになぞり、地面に乾いた筆で、字をなぞり、声を上げている。

”あれは何をしている？”

気になったのか、ゴノヴァンは不思議そうな顔で船員達を見つめる。その中に筧や信繁達が含まれていた。

「アー。」

「あー。」

”あれはみんな・・・イギリス語か、フランス語か、習っているんだと思いますよ。”

幹花が答える。甲板から外を見つめるが、先導する船を追いかけ見える船の景色はあまり変わらない。後方にも船は見えており、この船も、オランダの船団の一員でもある。

”どうしてだ？”

”・・・多くの者は地元の国の言葉で手一杯でして、ああして教育することで、少しでも理解できればと・・・。”

”そなた・・・お前・・・あの者達と同じ国の者ではないのか？”

「ゼヴェリカーン。」

「ゼ・・・ゼ・・・。」

「ゼ・・・ヴェ・・・リカー・・・ン。」

ゴノヴァンは通訳としてずっと着いてくるこの美女を見つめた。東洋的な臭さもあるが・・・それを超して美しい・・・。

”私は昔・・・習ったことがあります。”

” 誰に？ ”

” 平戸の商館長ですわ。 ”

” ああ。 あいつか。 ”

” 大体。 。 。 分かった？ ”

美井が不安そうな顔をして見つめている。 船長が先頭に立ち頷く。 それに合わせて頷く。 現在船は出航して三日目。 船は半分ずつの交代で船を動かしてはいるが、暇な人間もいる。 そこで、仕事がある者以外は言語などの好きなことを聞いて学ぶことにしたのだ。 特に号令をかけ重要視したのは言語であった。 言葉が通じねば向こうで好きなことはできないと聞かされた船員達は、熱心に学んでいる。 美井は幼いながらも言語をある程度（向こうで言えば子供程度の言語であるが）知っている為、せめてそれだけでも学ぼうと必死に勉強していた。 それ以外にも信繁達の武術や計算。 船員達の風の読み方、船大工達による応急手当の仕方や木の扱い方など、多岐にわたっていた。 だがその多くはゴノヴァンは聞いてはいなかった。 言語が違うのだから当然である。

” あれはいつまでやっているのだね。 船長まで混ざるとは。 。 。 ここでは恥も外聞もないのか？ ”

ゴノヴァンが呆れた目で、信繁達を見つめる。 信繁達は木の板を食い入るように見つめていた。 そして言葉を復唱するたびに大声を出していた。 ゴノヴァンは向こうを見るとその様子を向こうの船の船員達の一部が見つめている。 何か声が聞こえてくるので興味があるのだろう。

” 言葉のいくつかが分かりませんが。 。 。 食事が出るまでですよ。 ”

「 やつと終わった。 」

信繁はのびをして甲板に出る。 船は順調に追いかけており、夜も高速で進んでいた。 船長室でも良いが、狭い部屋はやはり気が落ち着かない。

「 船長。 」

「すっかりその名前だな。」

信繁が見た先では幹花が甲板で空を見つめていた。

「はい。」

「あいつは？」

信繁はあまり目を合わさないように空を見つめていた。

「あの方は……もう船室でお休みです。」

「そうか……少し聞いて良いか？」

「はい？」

「出航のあの時……本当は何を待っていた？」

信繁は幹花の顔を見てはいないがその声は真剣だった。

「……何をと言いますと？」

「何か物資だけではなかった気がしてな。」

「……船を待っていました。」

少し貯めて言うが、幹花の声もまた……真剣そのものだった。

「船を？」

「正確には江戸行きの船を探していました。」

「……半蔵に何か言われていたのか？」

「いえ。」

風がすつと吹いてくる。潮風ではあるが、夜風は少し肌に涼しい。

「じゃあ、あの時……お前はお目付役か？」

「はい。」

その言葉に少し啞然とした。こうもあっさり認めてくるとは。

「正確に言うなら……あなたと国の内情等を調査する者です。」

「……内情？」

「はい。確かにあなた様は立派です。ですが船長としての才覚や、

海への耐性の有無。そしてどのような人物なのか……お伝えしな

くてはなりません。」

「それで……どうだった？」

「十分合格点ですよ。」

「それは良かった。」

信繁は胸をなで下ろす。

「後あはあのシャム王国の内情を送りました。あれを元に向こうで判断されます。」

「そうか……。」

長政の言っていた香料貿易等やオランダなどの状況を伝え……向こうで判断する。確かに向こうに伝えるに必要な内容だ。

「でも良いのか、俺にしゃべって。」

「それは……あなたなら感ずいている頃かと思いました。」

「そうか。」

幹花もまた信繁の顔を見ず空を見つめる。空は星が輝き、少し明るいのが、船の明かりも一部は照らされている。ふと横を見た幹花の顔は少しゆるんでいるようにも思えた。

「お前は どうしてこの船に？」

ある意味ずつと気になつてのことだった。女性の船乗りは今まで見たことはないし、ましてやこの危険な旅について行くとは思えなかった。

「私、あなたが決定するまで。この船の艦長になる予定でした。」

驚いて幹花の顔を見つめる。

「私は……半蔵様に拾われて以来……学問一筋でした。平戸に行き、向こうの言葉を習い、半蔵様について忍びの技を習い。それ以外にも様々な修練を重ねていきました。」

「拾われたのか？」

「はい。」

戦争孤児は当時多く、一部の子供等はひお割れて育てられることも多かった。それは武家、忍者ともに多く、時として由来の分からぬ拾い子を連れてくることなど、日常茶飯事であった。

「だから、一生懸命ついでに行きました。」

幹花の声が少し透き通っていく。半蔵という時の声に近い。

「半蔵様は……私にこうおっしゃいました。」

「ほう？」

『お前のような才能のある者を埋もれさせるのはつらいが・・・今の日の本にそれを行かせるだけの場所はない。だから、外に活路を。』

その言葉を語る幹花の声は恋する乙女そのものであった。

「とおっしゃったので。私は船の航海を学び・・・こうして船を統括することになりました。それがあなたが来る直前に変更になったことを聞き・・・」

幹花の声が少し曇るのも分かるが・・・あえて無視した。

「最初はあなたを恨みました。」

「だろうな。」

信繁は頷く。突然役目に変更されれば・・・しかもその準備に時を掛ければ掛けるほどその衝撃は大きい。しかも突然出てきたぼつと出の男だ。恨まないわけはないが・・・。

「ですが、半蔵様のご指名のお方です。早々粗相はできませんが。流石にそこまでは分かつてはいるようだ。」

「そこで嫉妬に駆られるほど私は愚かではありません。」

その声は少し怒りながらも凜としたものであった。

「そつだ。あのおっさんが下りた後で良いから頼みたいことがあるんだが良いかな？」

「はい？」

「しま。」

「はい。」

「あいつに半蔵仕込みの技の一部でも良いから教えてやってくれないか？」

「どうしてでしょうか？」

その言葉にじつと信繁を見つめるが、信繁は空をずっと見つめていた。

「あいつ差・・・。半蔵から技を教わってはいただけど途中みたくてな、練習しているみたいだから、できれば・・・な。」

信繁の声に揺らぎがあった。幹花が振り向くと、信繁が幹花に手

を合わせていた。

「……。」

じっと見つめるが……信繁も微動だにしない。この気さくさが彼の魅力なのだろう。幹花は大きく息を吐く。

「分かりましたよ。ただ、暇にあつたらです。」

そう答えると、幹花は何かを思い出したように船室への扉に手を掛ける。

「ありがとな。」

その言葉に何も応えるわけでもなく、幹花は船室へ向かっていった。

「おっ早う。」

信繁の声が響く。船員の大半は暇時間にはこうして集められ、宿題等を見せ合っていた。

「おは……よう……ございます。船長。」

船員達が寝ぼけた声で答えるが……暇と言うより……日が昇り始めた頃である。

「朝早いと……楽しいぞ！」

「いや……俺とかはもう少し寝かして欲しいが。」

青海の声が聞こえる、眠い目をこすっている。当然ながら夜番が終わって寝始めた所を信繁に起こされている。

「今日ぐらい良いじゃないか。さみしいぞ。」

「信繁……今日も……あれやるの……？」

美井の呆れた声が信繁の側で聞こえる。流石に連日会話教室で疲れたのだろう、声に出しただけでげんなりしている。

「今日は……良いよ。遊んでつて言ってもな……。」

周囲を見渡すが、子供が遊ぶだけのスペースはない。

「船長！」

上から大声が聞こえる。

「なんだ！」

「向こうの船の様子がおかしいです！」

「何だと？」

「しかも、向こう側に船が見えます。」

その言葉に全員に衝撃が走る。信繁は走って船首に向かう。向こうの船で何かどよめきが起こっており、船員達がどたばたしている。

「お前ら、幹花と算を起こしてこい！」

「了解！」

その言葉に船員の一人が全力で船室に走っていく。信繁が望遠鏡で向こうを覗くと向こうの船が向かい側に立っている。だが・・・帆の形や横からはみ出た棒・・・オランダ船ともイギリス船、安宅船とも違う形だ。その時、幹花、算、どのヴァンの三人が船首にやってくる。

「どうしました？」

「前の船の様子がおかしい。」

信繁の声に全員が船を見つめると、船尾に誰かが来て旗を振り始める。

”・・・ここに来て見つかるか！”

”何があつたんです？”

幹花が不安そうにどのヴァンに聞いてみる。彼は焦った顔で旗を見つめている。

”お前ら手旗・・・あ・・・そうだな。お前らはあれを知らなかったな。あれは手旗信号。通信手段だ。・・・あれによると、敵船遭遇。戦闘態勢をとれ・・・だそうだ。”

「船長。あれは敵船の模様です。戦闘態勢を取れとの事です。」

前の船は方向を変え、広がろうとしており、前の船は敵船から逃げはじめ、後続の船は停止して、様子を見ていた。・・・前の船は・・・旋回しつつ砲撃を加えるようだが・・・敵の船は突撃する模様だ。なら！

「鐘鳴らせ！前の船の反対側から挟むぞ！」

「応！」

迫ってはいるものの肉眼では中々確認できない。

「船を体当たりさせる！」

信繁の掛け声に合わせ、敵船めがけ船を直進させる。向こう側では気が付いた複数の船員達が慌ててこちらを指させいているが、それはもう速度が乗り、勢いが付いた後であった。

「ときの声を上げるー！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

信繁の声が上がる。それに合わせ全員が雄叫びを上げる。ドノヴァンはその異様さと声の大きさに耳を塞ぐ。その直後体当たりするがお互いの船が揺れるが、信繁達の船の乗員達は足だけで踏みとどまり、もう一つの船の船員達の一部は船から揺り落とされる。衝撃から耐えた後すぐに船首から相手の船に飛び乗ると、手短にいる人間を太刀で切り裂く。

「人命優先だ！捕らえる！」

そう言い放つと船員達は信繁について船を飛び降り、次々に敵船に入っていく。

”・・・あれは・・・海賊かね・・・君たちは？”

船上から呆れて信繁達を・・・ドノヴァンは見つめていた。

”いえ・・・私たちは・・・輸送船ですよ。一応ね。”

冷たく幹花があしらうが、戦闘している信繁達の姿をただじっと見ているだけであった。相手の機先を突くことができたらしく、戦闘具合は上々である、乗り込まれた船の船員達も勢いずいて攻勢を掛ける。その様子をじっと青海も船の上からじっと見つめる。

「あなた・・・。」

幹花は呆然と見つめるドノヴァンを放置して、青海の側による。隊長である以上は敵船に乗り込む必要もあるが、彼はただじっと見下ろすばかりであった。

「まあな。あんたに治してもらったのは良いが、どうも腕力がまだもどらねえ。」

腕を見つめると傷跡は完治しているようだが……。血が出てないだけかもしれない。

「そう。だったらせめて……。あれぐらいはどうかしてもらえませんかしら。」

「わ……。わかった。」

そう言っ指さした先には根性でこちらの船の乗り込むべく、縄を引っかけ上ろうとしている兵士達が見える。急いで青海は走ると手に持った錫杖で兵士の横っ面をぶん殴る。流石に腕力が衰えたとはいえ、これぐらいはできるようだ。

” お前達は生きて返すわけにはいかない。罪人を裁く権利は我々にある。”

敵の船上で縄で捕らえた船長以下数名がオランダ人船長の目の前にいた。ゴールデイの船はもう少して合流するそうだ。ドノヴァンが偉そうに彼らの顔を見定める。船員達が直立していることから、ドノヴァンが船員達よりも偉いことが分かる。

「あいつら何で船を襲ったんだ？」

不思議そうに信繁は彼らの服装を見る。頭に布を巻き付けてはいるが鎧も立派で到底海賊するようには見えない。

「さあ……。私には。」

となりで整列している筧達に聞いてみるが、分かるものはいなかった。

” お前達はオランダの法律にもとずき……。処刑する。”

船員達はさも当然のように彼らを見つめる。その異様さに全員が飲まれる中、ゴールデイの小舟が到着する。

” ドノヴァン中将。遅れました。”

ゴールデイが船上上がるとドノヴァンに一礼する。

” 遅かったな。彼らの処分だが。”

” はい、処刑が良いかと。”

ドノヴァンも即座に頷く。

”ただ、斬首は船が汚れるので、追放がよろしいかと。”

ゴールドデイの言葉に少なからず、幹花は驚いていた。

”どうした?”

幹花の顔色を見ていた信繁は不安そうにのぞき込む。

”彼らは処刑されるようです。”

”だろうな。でも・・・お前も戦を知るなら・・・死傷者ぐらいは・・・”

”私は・・・戦い中に人が死ぬのは構いませんが・・・こういうのは嫌いです。”

この時しま達は戦闘には参加させたものの、念のため、船内に戻してある。この場にいるのは青海、寛、幹花と信繁の四人だけだ。しばらくじっと見ると、海へ一本の木を突きだし、その側へ歩かせ

る。

「連中は捕虜を取らないんだな。」

青海が目を伏せていた。

「だな。」

寛が答えるがオランダ人の様子だけをみいていた。信繁も目を伏せる中、母ちゃ、母ちゃと水の音だけが定期的に聞こえ、音が無くなる頃にはもう人々はいなかった。

”感謝する”

ゴールドデイが歩いてくると信繁にまたも手を突き出す。何を言われるまでもなく信繁は手を握った。

”君たちがいなければこの船は襲われて、略奪されていた。”

信繁もこれが感謝であることだけは、最近の学習の結果分かってきた。

”当然のことでした。”

幹花が答えた。

”あなたは?”

”私・・・も・・・通訳の一人です。”

何かを思い出して幹花が答える。そう言えば先日行った時には別

の人が通訳だと聞いていたが……。

”そうか……可愛いお嬢さんですね。”

”いえいえ。”

軽く幹花は微笑んでみせる。

”戦利品は……無いからこの船は船員を乗せ、曳航する。”

”あれ……あれが船員の全てではないのですか？”

”ガレー船だから……こぎ手達をセイロンで解放する。”

そう言うと、ゴールデイが手を挙げると船員達は船室に入っていく。しばらくすると、不思議な模様の旗を下ろしていく。

”すまないが。コーデイ。”

”なんででしょう。”

ゴールデイとの会話にドノヴァンが来る。その間も船員達は忙しく作業を始める。

”私はいささか船長室に椅子のない生活に飽きた。そっちに行つて構わないかね。”

”……分かりました。すまないが君。”

ゴールデイは幹花の方を向く

”すまないが港はすぐそこなので、そこまでついてきてくれないか？ドノヴァン殿はこちらの船に行きたいとのことだから、すまないがよろしく頼む。”

”わ、分かりました”

「信繁様。どうもこのドノヴァン殿は、向こうの船にお帰りになり、近くの港に行くようです。後は付いてきてくれと。」

「分かった。よろしく頼む。では我々は船に戻る。」

”では我々は船に戻ります。”

そう一礼すると、信繁達は船をさっていった。

”どうでした？社長。”

ゴールデイは去っていく信繁の姿をじっと見つめていた。ドノヴァンは苦い目で信繁達を見つめる。

”まあな……。流石に船長室に椅子がないのは斬新だったが……

” え・・・あれは冗談では？”

” 一度こつそり覗いてみたが本当に椅子がないので・・・居座るのを諦めたよ。”

” 変わってますな。”

” でも・・・連中は海賊みたいな連中だ。腕っ節が強い。あれならと言いたいが・・・野蛮な者は嫌いだ。”

” でもあれがあれば本国まで物を持って帰れます。”

” 確かに。本国に行きたいとか言っていたな連中は・・・。護衛にはあのような連中でも・・・後で、旗を渡しておけ。付いてこないならそのままだ。私はこつちで戦利品のチェックを行っておく。お前らは先行しろ。後でついて行く。”

” は。”

ゴールディはお辞儀をすると小舟に戻っていった。

船は追走を始め、夜になるまで、今日の勝利を祝して酒宴をしていた。今度は先行する二隻に着いていくことになっていた。ずいぶん楽になった気がした。

「今日は勝ち酒だ。しっかり飲んでくれ！」

寛がそう言うまもなく皆は椰子酒に舌鼓を打っていた。今日ばかりは美井もしまも酒を無理矢理飲まされていた。(当時は大丈夫ですが、今は法律で子供に酒を飲ませるのは禁止です。)

「お前。」

酒宴の席からはずれ青海は椰子酒を飲みながら空を見つめていた。この頃の空は美しく、星を見ているだけでも酒が飲めるほどに・・・輝いていた。

「どうした。信繁。」

「おめえ。」

青海の腕を握ろうとするが、それを青海が突っぱねる。

「お前・・・あの時の怪我・・・。」

「気が付いたか。」

青海はじつと見つめる。夜も深いが、見張り台の明かりで少しは顔が見える。何ともいえない顔で青海を見つめる。

「お前……いつから……。」

「まあな。船に乗る前に医者に行ったんだけどよ。」

じつと信繁は青海を何ともいえない顔のまま見つめる。

「どうも治りが遅いらしい。」

青海が傷を見つめる。実際ナイフの一撃を食らった時、あいてを死に至らしめる毒を含んだナイフの一撃を食らい、更に傷口に破片が入りつばなしたことを考えると、相当運が良かった部類でもある。

「何で……。」

青海は椰子酒を煽ると海を見つめる。前の船でも宴会らしく、騒がしい声がちちらにも聞こえる。

「ん……。俺だつて足で……。」

その瞬間青海の体が吹っ飛ぶ。

「て！てめえ！」

青海が立ち上がると殴りつけた格好のまま……信繁が立ち止まっていた。

「何で……。」

つぶやくような信繁の声……酒宴の声に混ざって聞こえてきた。青海はじつと見つめる。しばらくすると鼻をすする音も聞こえてきた。

「おめえさ。」

……。

「何もしていない怪我人の俺が普通は泣きたいぐらいだが……。
聞いて……。」

青海は立ち上がり信繁に近づく。ポチャ。水滴がしたたり落ちる音が聞こえる。

「おめえの様な泣き虫の……。」

ポチャ。

「そう言つのを……。」

ポチャ。ポチャ。

「見た……。」

そう言う瞬間青海は信繁を抱きしめる。信繁の体が小刻みに震えているのが分かる。

「くないからだ。な。」

「でも……。」

信繁は青海の顔をじっと見つめる。あの時の怪我は自分を庇ってできたものだ。

「本ならこれが見つかったら……船を下りるつもりだったが……。」

「……。」

じつと青海を信繁は見つめる。青海の頬にも涙の跡がくつきり見える。

「一緒にいてや……。」

その言葉の最後も言いきらぬうちに信繁にぎゅっと抱きしめられる。最初はとまどったが、しばらくして青海は信繁を突き放す。

「青海……。」

青海は片膝を付くと頭を下げた。

「俺は、あんたについて行く。」

「青海……。」

「いいな。」

青海の震えながらもしっかりとした声が聞こえる。

「分かったよ。頭を上げる。」

信繁の声に青海が立ち上がるとまた、ぎゅっと信繁を抱きしめる。

「飲もう……今日は……飲もう。」

そう言つと信繁は、青海の手を引いていた。お互いの何ともいえない顔がその全てを物語っていた。

戦鬪が起きた四日後には一部小競り合いが起きたものの、無事にセイロンの町に到着する。当時この辺一体の一部はオランダによって港が築かれ、食料などの輸出を行っていたが、当時の役割は東南貿易での中継点である。当時のムガル朝は北部などの利権あさりだからかインドの防衛をイギリスの東インド会社などに委託していた。インドの南岸を越したこの町にしか止まることはできなかった。

”君たちには感謝する。”

全ての船が寄港した後に信繁の船をゴールドエイとアルフレッドが訪れていた。

”それは・・・。”

ゴールドエイは手に持った旗を信繁に差し出す。

”これか。まあ・・・。オランダの縁者であるという印の旗だ。これがあれば、オランダの力が及ぶ港で、補給ができる。感謝の印だ。受け取ってくれ。”

”ありがとうございます。”

幹花が代表で受け取る。

”我らはしばらくここで数年ぶりの再会を祝っているつもりだ。君たちも良ければせっかくのインドだ。滞在していつてくれ。”

そう言つとゴールドエイは去つていった。

”あなたは？”

”せっかくだから、一緒にいようと思つてね。この子のこともあるし。”

そう言つと甲板に走つて子供がやつてくる。ソラだ。

”あそぼ。”

”うん。”

「俺・・・行つてくる。」

しまも嬉しそくにソラ達と遊びに行った。

”良いですな。子供は。”

”ですね。”

信繁が答える。

” あんた・・・しゃべれるのか？ ”

驚いた顔でアルフレッドは信繁の顔をみつめる。

” ええ・・・まあ・・・少しは学んでいる所です。 ”

少し・・・幹花はにやけてみせる。

” そうか、通訳もいるもんな。 ”

” はい。 ”

「何て言ってるんだ？」

「なんか・・・その旗があれば、オランダの港で補給が受けられるようになるそうです。後・・・数年ぶりにこの港に寄ったとか・・・」

幹花に言われて旗を見つめる。みつつの文字が組み合わされた旗で、オランダ東インド会社の旗印である。

「少し聞きたいことがある。」

その言葉に信繁は真剣にアルフレッドを見つめる。

「数年ぶりとは・・・。どうしてこの港に来れなかった？」

幹花は不思議に思いながらもそのまま約して伝える。

” 勘の良い。話が長くなるので、夜の食事をしながらでもお伝えしましょう。 ”

「夜に食事をしながら、どうでしょうかとのことですが。」

「了解したと伝えてくれ。」

” 分かりました。夜にでも。 ”

” そうですね。 ”

「何か・・・立ち入った理由がありそうだな。」

「はい。」

頷く二人であったが初めての地に驚きを隠せなかった。

「でもまあ・・・建物が白いな。」

珍しそくに青海や、算達を連れて散歩をしている。インド特有の建物で白壁が用いられている。しばらくして移植者達が茶を広め、

そしてここは紅茶の産地となるのだが・・・それはまだ先の話でもある。この頃はただ人々が住んでいるだけで、産地としては機能していないが・・・港町と言うこともあり、町の外に外出しなければオランダ語での会話は可能である。

「ですな。こつも異国というのは建物が変わりますかな。」

「酒はあるのかよ。」

青海も見渡すが、それらしい物はない。しまと、美井は船でソラと遊んでいる。船員達に見張らせているし・・・早々危険はない・・・と思う。

「そう言えばこれ。」

幹花は手に持った銀貨を見せる。

「それは？」

「どうもオランダのお金のようです。」

そう言つて手を広げた先に人の顔が描かれた銀貨がある。

「それは？」

「アルフレッド殿が、これで遊んでこればと、別れ際に頂きました。」

「それがこのあたりの貨幣のようだな。」

「変わっていますな。」

信繁は不思議そうに貨幣を見ると、口で嚙んでみる。

「これは・・・銀だ。」

「それは・・・でもまあ・・・ほんと屋根に烏帽子がついたり・・・」

「。本当に変わっていますな。」

算は見渡すとイスラム建築が幾つか見える。

「飯はどうする？」

「はいません。食事できる場所はありませんか？」

幹花が聞くと、通りすがりの人に指を指される。その先にはいくつものテーブルが並んでいる。その場所に行くと発破に何かをのせて食事をしている人々がいた。

「これが・・・食事か？」

「これが・・・食事か？」

「これが・・・食事か？」

「これが・・・食事か？」

青海が露骨に嫌そうな顔をする。米を手で掴み香辛料と混ぜて口に入れる姿は・・・いくら戦国時代の男子たれど・・・少し気味悪がってしまった。

「まあ・・・なあ・・・。」

「たべましよう。」

そう言い幹花は席に着くとそれに合わせて男達も席に着く。それを見て店の男が席に着く。

”これで食べれるだけ頂戴”

そう言って一枚の銀貨を除いてテーブルの上に置く。それを店の男が持ち去るとしばらくして、米といろいろな粉がおかれた葉っぱが各自の前に置かれた。

「これがこの食事か。」

「・・・ですな。」

青海達が呆れる中、信繁も不思議そうにさわってみると・・・。

「炊いてはあるが・・・乾いているな。乾し飯だ（当時の戦国での保存食で、水につければある程度米に戻る。よく兵士達はこれで食事をしていた）。これ。で・・・これを混ぜるのか。」

そう言って手で粉を混ぜて口にする。

「何かこれ・・・。」

信繁か食べたのを見て各自口にする。

「これは・・・。苦い。酒もないし。」

「何か・・・薬飲まされているような。」

「これは・・・。漢方・・・ですよね。」

最後の幹花の声に全員が注目する。

「よく・・・兵糧丸（忍者が用いる簡易栄養剤。漢方などが配合された様々な効果の物が製作されている。日本の医薬品の原点の一つでもある。）とか作らされていた時に・・・良く似たものをなめたことがあります。」

「そうなのか・・・。」

じつと信繁は粉状の物を見つめる。もし漢方なら何の効果の薬か

よく分からないが……。

「でも大丈夫でしょう。」

そう言つと幹花は更に一口食事を口にする。

「そうか。」

そう言つと各自黙つて食事を始める。これを食べながら……何か話をする気は起きなかつた。肉や魚を食べていたあのころが懐かしい。それが全員の考えたことでもあつた。

「でもまあ……こんな国とかにいくつも行けると思えば旅も冥利に尽きるな。」

青海は周囲を見渡し口にする。量は少ない物の、それなりに満足はしたようだ。

「でもさ……あれ……なんか旗……多いよな。」

「出し物の旗とかではないのか？」

「あんな小さな旗……出し物ではあるまい？」

指を指した先には少し大きな奇妙なくつもの四足歩行の何かが書かれた文様が見える。確かに旗は小柄であるが、入り口に衛兵がいる為、それなりの場所なのだろう。頭に巻かれた布が変わつてはいるがそれがこの土地の物なのだろう。でもあの旗……。

「ま、食べたら行くか。めばしい所もないしな。」

「はい。」

粗相信繁にせかされると、急いで残りをかき込み、足早に船に戻つてくのだった。

”よくおいでくださいました。”

信繁は教わつた言葉をただとしく言つと、手を差し出す。ソラは暗く全員が帰ってきていたが、ソラも久しぶりに一緒と言つ事でソラとアルフレッドはこちらに泊まることになっている。

”お迎え感謝するよ。”

そう言つてアルフレッドは握手を返す。

”でもまあ……船を助けていただいたのは感謝するが……食事

をするのかい？”

不思議そうに見渡すと幹花が手招きをする。しばらくすると船長室にアルフレッドは呼ばれた。

”茶にご招待いたします。まあ・・・儀式みたいな物だと思って。”

そう船長室に三人が入る頃には月が空に上る中・・・船長室は照らされていた。先にワラジを脱いで、信繁は脇にあつた座布団をそつと前に出す。

”くつは・・・。”

”ここでは脱いでください。”

滅多に靴を脱がない彼も紐をほどき、無理矢理脱いだ。

”この上に。”

”はい。”

アルフレッドは座布団を指さす。気に入つた来客をもてなす為に幾つか持ち込ませた物の一つで絹と木綿で作られており、高級品である。半蔵はいやがっては痛し、信繁自身も木の皮を編んだ物の方が好みではあるが、偉い人はこういう柔らかい物が好みと聞き、あえて用意してみた。ちようど船室に月明かりが差し、窓から見える月は鮮やかだった。

”少しお待ちを。”

そう言うつと不作法ながらも固定台座から安物茶器を取り出し、抹茶の粉を入れ始めた。幾つか半蔵に頼んで高級品を持ち出そうとしたが・・・流石に予算が足りなかったのだ。

”なにをするんだね。私は食事を・・・。”

”歓迎の証です。”

幹花はじつと正座して見つめていた。作法には慣れていないが、とりあえず目の前に茶を出して見せた。

”これは。”

”お飲みください。”

そう言われて慌てて抹茶を一口飲んでみる。

”これは・・・。”

”この地の食事はあまり・・・口に合わないかもしれないので、それでこれを。”

”そう言えば日本ではこういうのが流行りだと、聞いたことがある。”

”そう言い、月明かりに照らされた茶を一口すすってみる。意外とこくがあり・・・苦い中にも旨みがある。

”おいしいですか？”

信繁はじつとアルフレッドを見つめる。

”まあね。感謝するが・・・もう少し腹の満たせる物を。”

フランクながらも笑ってアルフレッドは茶器を側に置いた。

”分かっていますよ。”

そう言うのと幹花は船室のそばに頼んでおいて犯せた食事を三人分用意する。地元の魚を用いた香辛料を使った焼き魚と日本風の米の飯。そして地元香草を軽く醤油で浸した物だ。信繁はあえて先に箸を付けてみせる。アルフレッドは清にも行ったことがある為か、箸の使い方は知っていた為、即座に箸で魚をほくし始める。軽い味付けの為か、あっさりとした味だ。

”これは・・・。”

驚いた顔で魚をアルフレッドは見つめる。今まで食べた食事の中でも珍しく・・・。質素ではあるが、臭みはなく、おいしい。

”どうですか？”

信繁は驚いた顔に、内心にやけながらもアルフレッドの顔を見つめる。下の船室でも焼き魚とかを使った食事が振る舞われている。

”これは・・・うまいな。”

そう言いながらも、不慣れな箸でちよこちよこ食べていた。

”さて、本題にしようか。”

食事も一段落した後、じつと信繁を見つめる。

”はい。”

幹花が頷く。

”確か、何で数年ここに到着するのにかかったのかだったよね。”

”はい。”

じつと窓を見つめる。

”君は先日戦っていた相手・・・なんだと思う？”

「船長。先日の敵はなんだと思うだそうです。」

小さな声で幹花が耳打ちする。確かに幹花もまた相手が何なのかあの様子は理解できなかった。

「こここの地元の部隊であろう。」

”地元の者でしょうか？”

”・・・凄いな。半分あっている。”

”え？”

”このムガール朝は今、数多くの国の利権が乱立している。その中でも一歩上手なのが、イギリスだ。”

”イギリス・・・。”

流石に信繁もこの言葉には聞き覚えがあった。

”イギリスは近年この辺一体に通るイギリス以外の船へ拿捕の命令を出している。そのため、他国籍の船がインド洋を通ることはできなかった。しかもムガール朝の船が私掠船を出す為、海賊が横行するよりもたちの悪いことになっている。”

”しりやく・・・せん？”

聞き慣れない言葉に幹花もまた怪しそうな顔をしている。

”単純に言えば、国公認の海賊だ。”

”国が認めた海賊・・・ですか。”

「戦闘。あれは国が認めた海賊だと・・・。おっしゃってます。」

その言葉に信繁の顔もゆがむ。

「国自身が海賊するのか、この国は！」

”だから、ある程度の武力のある部隊が強行突破しないと航行さえままならない。”

この時、イスパニア艦隊がイギリス海軍に敗れた後（30年ほど前）である為、イギリス海軍をおそれオランダ船の船員達がセイロンに向かおうとしなかったのが現実であっても、それを伝える義

理はアルフレッドにはない。

「じゃあ・・・俺たちの船が必要なのは・・・そう言うことが・・・」

最初は強く言おうと思ったが、考えがまとまるに連れ声が小さくなる。確かに国が認めている海賊なぞが海にいる限り、安全とはいえない。あの時兵士達を殺していたのは・・・そう言うことか。

でもこれで、帰りまではどうにかなる。難所は多いが、とりあえず一つは超えた。”

「難所を越えたとか言っています。」

「難所か・・・確かに。」

信繁はじつと考えていた。確かに難所ではあるが、この先の国もこうである可能性は高い。それにこの話なら報復さえあり得る。

「よければ良いが、君たちは本国に向かうのだろうか。」

「オランダへ向かうのかと聞いています。」

”ああ。”

”なら、一隻だけでよいから一緒に同行させてもらえないか。”

「一隻だけ、追走するそうです。」

「どうしてだ？他の船団もいよう。」

不思議そうにアルフレッドを見つめる。

”どうして・・・一隻しか付いてこないの？”

”これは出発まで明かして欲しくないが・・・。他の船はすぐにアユタヤに引き返す。”

”え・・・。”

”このセイロン・・・アユタヤ間以外は航路がつかっている為、荷物は運べる。だ多、このセイロン・アユタヤは間にイギリスがいる為、その前が数年ぶりというように恥ずかしい話だが、航路が成り立ってはいなかった。だから、本国に送る荷物を一気に今回はこびきったのだ。だから、後は必要のない船は引き帰らせる。”

「どうも、このことアユタヤ間はほとんど通行がないらしく、今回の出航は我々がいたから強行突破したとのことです。ですから、この

先は安全なので、他の船は向こうの作業に戻すそうです。」

信繁はじつと考えている。それはそうだが・・・そこまで危険なら何で講和などを結ばないのか・・・。ただこの先・・・この海域が安全なら・・・。オランダまではすんなり行きそうだ。

”後は先行して帰国が必要な人員以外はアユタヤに返し、本国へ帰る必要がある人間は一隻に乗り・・・荷物はここにおいておいて、後続部隊に任せる。”

アルフレッドの言葉に顔を険しくしながらかみ砕いて幹花は伝える。

「後から付いてくる予定の船は人員のみが乗り・・・荷物はほとんどここにおいておくそうです。」

「圏か？」

”餌・・・ですか？”

”餌・・・。かもしれないが、ここにある荷物だけでさえ、我々が一生遊ぶだけの金額がある。慎重にもなるう。”

「だそうです。」

「なら・・・この周辺一帯の海域の地図をこちらにいただけぬか？」

その言葉に幹花は内心驚く。

”行くなら・・・この辺一体の海域の地図をいただけないかとのことです。”

”・・・。”

じつとアルフレッドは信繁の顔を見つめる。月明かりから伺える顔は・・・じつとこちらを見ていた。こちらの考えは見抜かれているようだ。しかもどちらを向こうが狙うのか・・・考え抜いてのことだろう。ドノヴァンの考えなら、商用船三隻を圏にして、こちらを通すとのことだが・・・向こうに戻るゴールデイは別のことを考えていた。それは向こうは数が少ない方を狙うかもしれないことだった。それを読むとのことだろう・・・。

”すまないが個人的な事になるが・・・頼まれてくれないか？”

”なんででしょうか？”

” ソラを日本に連れて行ってくれないか？ ”

” え・・・息子さんですよね。 ”

幹花は驚いてアルフレッドの顔を見る。

” 確かに息子ではあるが・・・今のオランダの状況を考えれば・・・危険な橋を渡らせたくない。それに・・・ ”

” それに？ ”

” 平戸の商館長のヤックスから良い所と聞かされてな。 ”

” ああ。あのお方ですか。 ”

幹花が頷く。 通訳などの言語の勉強の為、ヤックスと謁見し、彼の部下と付きつきりで言語を教わっていた。 ある意味恩人でもある。 ” 知っているのか？ ”

アルフレッドは意外な顔をしていた。 主計長の彼は仕事だけの関係に止まらず数多くの便宜を図ってきた仲である。 親友と言うほどではないがかなり親しい。

” はい。日本ではお世話になりました。 ”

” そうか。 ”

アルフレッドの気が軽くなる。

” なら、私の独断で紹介状を書いておきましょう。 手紙を書くのに少し時間をいただけますか。 ”

” 了解した。 ”

” なら先程の件は・・・ ”

” 分かった。私がついてこれる範囲で持つてこよう。 ”

” ありがとうございます。 ”

幹花は微笑んでアルフレッドを見つめる。 つい微笑んでアルフレッドも見ってしまう。 この月明かりの中・・・端麗な顔つきは更一層美しく見える。

「さて・・・話がまとまったなら・・・もう少し行きましようか。」

” もう少し飲みませんか・・・ ”

” いや・・・明日には第一弾が発つ。 誠に惜しいがこれで失礼させてもらおう。 ”

そう言つとあぐらをかいていたアルフレッドは立ち上がり、一礼をし、その場を去つていった。

「でもどうして・・・海図なんかを要求したんです。」

幹花は不思議そうに聞いていた。アルフレッドを入り口まで送つていった後、青海達が船長室に、酒を飲みにかけていた。

「海図？」

部屋に押しかけて落ち着いた時の第一声がこれの為、流石の筧も不思議そうに信繁を見つめる。

「ま・・・それは後で説明する。とりあえず・・・皆・・・この先も本国まではオランダの船に先導してもらえることになった。」

「おおー。」

全員の感嘆の声が響く。

「だが・・・問題もある。先日戦闘した船。」

「ああ。」

青海は大きく頷く。

「あれ・・・どうもこの国の船らしい。」

「へ？」

筧が驚いた顔でじつと信繁を見つめる。

「そりゃあ・・・海賊といえど・・・。国ぐらいは・・・。」

「いや・・・どうもあれ・・・この国の海軍の者らしい。ま。俺たちと立場は似てるがな。」

「と言つことは・・・警備隊ですか？」

筧の顔が青ざめるのが暗い中でもよく分かる。

「いや、国自身が認めた・・・海賊らしい。」

「何か・・・たちの悪い話だな。」

青海が嫌そうな顔をして、椰子酒を煽る。青海自身、清酒は向こうにない諦め、日本酒はしばらく保存しておくそつだ。

「だが・・・大方向こうではあの装備だ。それなりの地位があるつ。だと知ればメンツを傷つけられた連中は・・・。」

信繁はぐるりと周囲を見渡す。緊張した顔になっていた。

「仕返しに来る。」

幹花が答える。そこから先は予想が付く。

「しかも、この先先導する船は一隻で後は帰還する。」

「へ？」

今までは5隻以上の大軍だが、これからは二隻で進むことになる。

「でも向こうの方が弱ければ……。」

「漏れ伝うなら、戦闘で海に落ちた者か、処刑で海に落ちたか……船員以外の生存者かだ。だとすると船の数は戦闘した数を伝える。強さなど気にはしないだろう。」

よく考えれば最初の船とこちらの船以外は遠巻きに待機していただけだった。遠くにいれば視界に写らない可能性が高い。

「と言うことは……。」

「次の港にはたどり着く前にいずれかで戦闘があると判断して良い。」

「ですな……。」

オランダ方の事情も分かるが、こちらとしては……巻き込まれた形だ。

「で……海図ですか。」

「少しでも有利にしないでなるまい。」
「じつと海を見つめる。」

「でもまあ……大砲戦には俺らは慣れてはおらんぞ。」

青海は船を見つめる。月光に照らされ淡い輝きが船を照らす。

「だとしても……向こうはこの船を戦力としてみている。大方この船の装備からして目的の中に強行突破は含まれているのだろう。」

「だとすれば……こちらを盾にするつもりか……今度こそ。」

「だろうな。」

青海のつぶやきに信繁は頷いた。

「あんにやるー!」

青海が怒りで畳を叩く。

「それぐらいせねば、相手方は信頼しないだろうよ。」
信繁はくいつと椰子酒をお猪口で飲み込む。

「だとすればどんな戦闘に。」
「数によるが・・・大抵は数で押し込むだろうよ。」

その言葉に全員が押し黙る。

「国の規模は分からないが、俺が海軍なら二倍は用意する。でなければ取り逃がす公算が高い。」

「だが・・・。」

「だとすれば数を消す動きで行けばいいのだろうが・・・この船の力がどれぐらいか・・・。試す時が来たようだな。」

じつと床を見つめる信繁の真意は誰も・・・分からなかった。

「うみーはひろいなー。」

「何。」

青海が海を見つめ、歌っている。

「お主もこの年になってこんなに海を見つめるとは思わなかっただろうが。」

じつと筧もまた海を見つめている。本当ならしまがこの見張り台にいるはずなのだが。先日のソラとの別れにしまが泣いていた為、青海と筧が見張りを変わっている。出発して二日が経過し、海を南下していた。今度はアルフレッドがこの船にいて、下でオランダ語講座を幹花と二人で行っている。流石にオランダ語の詳しい所はオランダ人に聞いた報が早いので、今度は美井も習う立場だ。この方が美井にとっても気が楽らしく明るく返事をしている。

「まあな。海を見て最初は感動していたが・・・こうも同じ色合いだと・・・飽きる。」

そう言いながら、見張り台に備え付けの望遠鏡で前の船の角度と周囲の警戒を行っている。

「酒・・・あるか？」

青海がつぶやく。半眼で筧が青海を見つめる。

「昼から飲むな。こんな高い所で酔えば死ぬぞ。」

「そっか……。」

青海のつぶやきが寂しく響く。

「又ヴェヨルト！」

「おおっ！」

算の突然の声に青海がびっくりする。

「なんだそれ？」

「いやあ、下からの声があるだろ、どこで使うか分からないが、一応、しゃべれば紛れるのではないかと……。」

「どこで使うか分からねば、使いようもあるまい。」

「だな。でも覚えておけばほら……どうにかなるだろうに……。」

おい……どうした……。」

あまりに無反応な青海算がいらだって青海の所をむくと、青海が望遠鏡を見たまま、硬直していた。

「なんだ？」

「あれ……味方じゃねえだろうな……。」

「いや……味方は後で出発だが……敵……だろうな。」

二人で船を双眼鏡で見つめる。

「ならずぞ。」

「おおっ。」

カーンカーンカーン。……カーンカーンカーン。

この合図は敵船……又は危険を知らせる合図である。その音に全員が立ち上がり周囲を見渡す。

「後方から舟影！」

青海の声が船内に響き渡る。前の船も鐘の音に騒然となっているようだ。

「何隻だ！」

「4です！」

算の声に全員が騒然とする。前回みたいに数で上回る戦闘ではない。アルフレッドも覚悟していたらしく、船首に走っていく。大方

前回と一緒の手旗信号で連絡を取るのだろう。腰に差していた旗を取り出し、前を見つめる……。その間に信繁は船長室に入り、海図を広げる。現在はセイロン・モザンブイク間の為……。障害物らしい障害物はない……。その間にアルフレッドは必死に旗を振っている。予想は付く。信繁は指をなめ、天に突き出す。

「風は南南西……。」

アルフレッドの旗振りの真剣さが増していく。その間に船員達が戦闘態勢を取り、青海は縄ばしごを伝い……。見張り台を下りてくる。船尾に周り信繁は望遠鏡を見つめる。やはり、包囲してくるつもりだ。敵の隊列が戦闘のそれになっている。

” すまない！”

” どうした？”

アルフレッドの力なく……。絶望に満ちたそれでいて大きな声が響く。

” ここでモザンブイクまで分かれる……。だと……。”

” だろうな。”

信繁が思ったとおりに頷く。流石にそのつもりだったのだろうか。

……。我々も死ぬわけにはいかない。

” 知っていたのか！！”

アルフレッドの怒号が響く。

” 思ったただけだ。落ち着け。”

” ああ。”

この頃には簡単な言語による疎通ができる所まで来ているが……。それでもまだ足りない所もある。だがそれと経験は関係ない……。前の船はモザンブイクに一直線に向かうらしいが……。元から風通りに行ったとしても……。じっと考えている間にもこちらの船は全速力で……。いや……。相手の船に合わせ……。少し遅らせていた。それは最初のあたりから分かっていたことだ。一隻は先頭の船に泡さえ、最初はやはりこちらに来るみたいだ。3隻は南側と正面の二手で追うらしい。後詰め付きでいやらしいが……。まず

は追いにくい……下から行くか。

「南だ！」

「おう！」

向こうの船は……方角を変えた為に徐々に接近してくる。……これは……艦付きが南……そしてもう一つの艦付きが西。帆船は、中央か。かなり慎重……だな。

「砲撃準備！」

「おおー！」

その間に青海が船室まで走っていく。

「狙いは！」

信繁の声を全員が斉唱する。訓練のたまものではあるが、こうすることによって砲撃隊への伝達を聞き逃さなくする役割もある。

「外側！前方側面！！」

その掛け声にアルフレッドはは驚いていた。当然である。今まで乗ったり戦ってきた船でこんな事は行われてはいない。その間に砲撃用の扉が開き、砲撃準備は行われる。

「おおおおおおおおおおお！」

下の方から青海の叫び声が聞こえる。

「弾込め！完了！方角修正完了！」

青海の声が響く。だが次の瞬間……少しの間の静寂が船内を包む。信繁は船尾でじつと望遠鏡をのぞき込む。

「撃てえ！」

その声とともに船内一杯に轟音が響く。アルフレッドは縁にしがみつぎ、じつと敵船を見つめる。大砲にやられ、船がぐらついている。舵をやられたわけではないが、浸水はしているみたいだ。初撃の一撃だけで……敵船を行動不能にした。相手の砲撃が来ていないことから……。この大砲……相当射程が長い！

「舵！東北東！船を少しずつ寄せろ！」

「了解！」

それとともに行動不能になった船を盾にするように船は動き始め

る。これに慌てたのが・・・敵帆船である。確かに帆船は向かい風でも少し横風があれば走れるようにはなっているが、向かい風が天敵である。それを行うとは・・・自身も持っている望遠鏡でアルフレッドは敵船を覗く。あれは・・・イギリス・・・東インド貿易社だ。しかもあれは・・・旗艦！本気できやがった！アルフレッドの汗は止まらなかつた・・・日本の連中は何を考えている。

「甲板狙いだ！準備しろ！」

・・・

「砲撃準備完了！」

「撃て！」

信繁の大声が響き渡る。流石にアルフレッドも、日本語を教えている時に簡単な言葉が分かる為か、大体の意味は分かるが・・・次の瞬間、近寄ったガレー船の甲板に少し勢いが落ちた大砲の弾が降り注ぐ。

「鉄砲隊！構えろ！」

信繁の掛け声で徐々に戦術が理解できる。敵船を盾にすることで後の敵船からの砲撃をかわし、こちら側が隙間から砲撃するのだから。確かにガレー船の方が足が遅い為、帆船しか敵はいない状況だが・・・その間にも船員達が鉄砲を持って環境から敵千二十を一列に構える。後ろには数人の兵士が・・・あれ？鉄砲を抱えて持っている。舵を切っている人間は少しずつ船を甲板に近づける。その頃にはガレー船はすぐ側に来ていた。

「撃て！」

その言葉に鉄砲隊が船の上からガレー船を撃ち下ろした！そのため、海戦準備で構えていた部隊を直撃した。あまりのことに・・・アルフレッドは・・・ただただ見ているしかなかった。その間にも撃った鉄砲を後ろの人間が交換していく。

「撃ちまくれ！」

向こうもとうとうと考えているが・・・まさか鉄砲を使った近接戦闘なぞ考えもしなかつただろう・・・ここまで一隻でも戦闘力が

違うのか。その間にも、無慈悲にも鉄砲で蹂躪されていった。その頃にも西に行ったガレー船が慌てて南側から、こちら側に攻撃を試みるが、逆風の為早々早くは来れない。しばらくすると船がそのまま通り過ぎようとしている……。

「抜けるぞ！ 舵を西へ！」

その掛け声で帆の向きを切り替える。何を！

”何を考えている！”

アルフレッドはどなりつける。その間にも船は敵船後方から船体を横に傾ける。

”逃げる。”

信繁のシンプルな答えにアルフレッドは啞然としてしまう。

「お前ら。行くぞ！」

「応！」

その言葉とともに、船が加速を始める。今度は向こうの帆船が……、……戦闘意欲をなくしたようだ。何をするわけでもなく……。相手は見送っていった。そのまま船は加速を付け、この海域を離脱していった……。

”凄いな……。”

あれから半日……。もう追走してくる船はいない……。アルフレッドは早くも普通通りの船員達を横目で見ながら船長室の扉を叩く。扉を開けてみると、筧と幹花、信繁の三人が海図をにらみ考えていた。

”船長……良いかな？”

アルフレッドは改めて言葉を口にする。

”まずは靴を脱いでいただけませんか？”

幹花の言葉に慌ててアルフレッドは靴を脱ぐ。

”なんででしょうか。”

信繁が優しく聞いてくる。

”聞きたいことがある。どうして……勝ち寸前の船から逃げた？”

「なんて……。」

流石に聞き取れない言葉があり、信繁は幹花を見つめる。

「はい。どうも……どうして逃げたんだと。」

「……あれか……。長くなるが訳せるか。」

信繁が聞いてくる。

「はい。」

その言葉に二人とも耳を傾ける。

「理由は三つある。一つは、物取りが仕事ではないこと。」

「理由は三つあります。一つは盗賊でないこと。」

「二つめは、あのまま乱戦に入れば帆船が砲撃可能範囲に入り、砲撃を敵船を巻き込むながら打ち込む可能性があったこと。」

「二つめはこの船を……敵船ごと打ち抜く可能性があったこと。」

”

”まあ……。”

「三つ目は、大砲を撃たないにしても、後数負けするのと、相手をあれだけ痛めつけておけば、修理に手間取り、追ってこられないことだ。それ以上は必要ではない。」

「三つ目は数の上では不利なことで、あれだけ敵船を痛めつけておけば修理に手間取り、時間が稼げます。」

「でも惜しくないのか？戦利品があるのやもしれんのだぞ？」

アルフレッドはじつと信繁を見つめる。幹花が訳そうと口を開くのを信繁は手で制する。

「目的は……進むこと。」

信繁は落ち着いてじつとアルフレッドを見据えて言った。

”わかった。すまない。”

そうお辞儀するとアルフレッドはお辞儀をして、立ち去っていった。

「大丈夫でしょうか……。」

算はアルフレッドを見ていた。

「大丈夫だろう。あそこで欲をかけば死んでいたのはこっちだろう。」

この船に傷が付く方が今後の目的に支障が出る。」

「ですね。我々は賊ではありません。でも……納得しますかね。」
幹花はじつと地図を見つめる。

「命があつてめっけものさ。」

信繁のつぶやきに算達は納得してしまっていた。

” お前ら……よく生きていたな。”

ドノヴァンが驚いた顔でこちらの船に乗り込んだ第一声がこれであつた。戦闘が行われてから、十二日目の夕方のことであつた。

” よくもまあ……見捨ててくれましたよね。社長。”

” まあ……我々の威光に平伏して逃亡しただろうから、感謝するがよい!”

流石に戯れ言だとわかつていても、見捨てられた傷は中々癒えないのが当然である。許せる気がしない。

” でも……。”

そう言つて先行した船を見つめると、ぼろぼろで、各所に砲撃の後があるが……ここまで保つたのが不思議なぐらいである。

” これで……次……行けますかね?”

隣に停泊する自分たちが乗ってきた船を見つめる。こちらには傷一つ無い。差が……ありありと出ている。

” 修理にあと二週間はかかる。”

” でもまあ……。”

” でもお前ら……どうやって逃げれたんだ?”

珍しそつにドノヴァンが無傷の船を見つめる。その間に信繁達は船員達を酒場に連れて行くべく、港の男に交渉をしていた。

” それは……。”

じつとアルフレッドは考える……。

” 欲張らないことですね。”

” は?”

よくわからない顔をするドノヴァン社長を尻目にアルフレッドは

一人、前の船に戻っていく。何となく、先日と言い……彼らとはとてもない何かを秘めている。アルフレッドにはそう感じずにいられた。なかった。

第十八節 ムガールと呼ばれた王朝（後書き）

これ以降、オランダ語等の日本語以外の言葉も普通のカッコになります。よろしくお願いします。

又、一分都市名を勘違いしていたため、違っていた事をここに謝罪し、ここに修正いたします。

第十九節 幽霊船と絶望峰（前書き）

ついにアフリカ南部に到着した信繁たちはついに難関、喜望峰へあゆみを進める。そこで聞いた人魚伝説……。彼らを待つものとは・

第十九節 幽霊船と絶望峰

第十九節 幽霊船と絶望峰

「長い休日だった。」

呆れた顔で艦隊長は船を見つめる。日本では大風や、特効戦術の前になすすべがないイスパニア第三艦隊ではあるが、中立港である清の香港での船団の修復がやっと一段落した。材料の取り寄せなど・・・意外と手間がかかっている。

「本当にな。久々に・・・中華も悪くないが・・・土臭さはどうにかならんものか？」

アルサレムが、ワインをグラスに注いでいた。本当ならシャンパンなどが良いのだが・・・この清では本国の味わいに勝つことはない。

「良いではないか・・・久々の休日だ。向こうのウォッカもどきよりはずつとましだ。」

キースは久々のワインを口に転がしていた。

「で、猥下からの連絡はきたんでしょね。」

船長はじつとグラスを見つめる。彼にとってこの一ヶ月半は長かった。失態をなじられ、降格させられるのではないかと生きた心地はしなかった。

「ああ。やつとだな。」

そう言っってワインが入った箱の下から手紙を取り出す。

「で・・・何と？」

「とりあえず作戦の立て直しをかねて・・・帰還命令が出ている。」

羊皮紙を広げ、じつと指令書を見つめている。

「降格とかは・・・。」

「ない。流石にそこはないみたいだが・・・帰還命令か・・・。」

アルサレムは書類を覗いているが・・・暗号で書かれている為、局長しかわからないようにできている。

「まあな。立て直さねばならないし、作戦を立てる必要がある。」
キースは頭の中で日本で失った数多くの部下達を思い浮かべる。

損失は大きく取り戻すのは不可能に近いだろうが・・・。
「了解だ。早速、帰還するぞ。」

アルサレムは久々の本国の味に感動しつつも立ち上がる。
「だが・・・。」

船長の声は鈍い。当然である。このイスパニア第三艦隊は通称隠密機動艦隊。邀撃や奇襲を得意とするが、この地域にイスパニア利権は影ながらこの艦隊の無事だった館長率いる一隻が支えているとも言えた。だからこそこの帰還命令は事実上同胞を見捨てるともとれるものだった。しかも彼らとキース局長は同席しているもの・・・。国が違う為、それほどの大儀はないが・・・。この命令書は事実上国王命令にも匹敵する。だからこそ・・・少し惜しかった。

「日本がどう動くかわからぬが、この事態は我々にとっては国に帰る良い機会だ。復讐にしろ、監禁にしろ・・・お主も家族のいないこの地で死にたくはないだろう。」

キースが、瓶に残ったワインの最後の一滴を自分のグラスに注ぐ。彼の言いたいことはわかる・・・つらいがこれは現実だ。

「わかった。引き上げよう。」
そう言うのと立ち上がり、近くにいた副長を呼び寄せる。キースにとつてもうこの地にいる予定もない。あの日本が真に彼らの必要とする物があるのか・・・。只それだけが彼にとつて必要な物である。こんな地の覇権争いなぞ・・・彼の眼中には存在していない・・・様に船長は見ていたのだった。

無傷でゴールドコーストに入った信繁一行は結局の所、ドノヴァンの船が直る二週間を待つのが惜しいと言うことで、ドノヴァンの乗ってきた船をそのまま置き、このあたりの回路を運行していた才

ランダの東インド会社の交易船の護衛をかねて、信繁達の船は出航することとなった。だがこの調達に一週間近くかかり、結局の所ゴールドコーストで待機せざる終えない所まで来ていた。

「すまない。ドノヴァン殿がどうしてもお主達と一緒に船が嫌だと
言つてな。」

アルフレッドが頭を下げる。

「だとしても……。ドノヴァン殿をおいて行くとは言えない物か
？」

信繁の呆れた声がアルフレッドを目の前にして告げられる。この頃には簡単な会話ができるようになっており、通訳は一応幹花が行うことになってはいるものの、無くても意思の疎通程度はできるまでに至っていた。そのため、こうして会話が可能になった。

「あれでも当社の社長でな。置いていけばそれなりに悪いことがある。」

「例えば？」

「後で拗ねて、話がこじれる。」

簡単にアルフレッドは答えている者の、

「……。」

意味はわかるが……。こういふのが上なので……。良いのだろうか……。

「どうも……。お主の言う”会社”という奴がよくわからない。」

信繁はアルフレッドのいる客室に備え付けられた腰掛けにすわる。客室の椅子は……。壁に板をくつつけたタイプで、荒波でも揺るがないようになってはいる。ついでに同型で机も設置されている。

「どうしてそんなに主がこころ変わるのだ？」

信繁にはそこが理解できなかった。

「ああ。まあ元はこのオランダ東インド会社は、イギリスに対抗する為に商人達が固まってできた国営組織だ。」

「ん？」

信繁が更に難しそうな顔をする。理解できていないようだ。会話

ができるとはいえ、難しい単語が並べば当然聞き取れない。

「単純に言えば、商人が固まって、国が作った物だ。」

「そうか。」

まだ少しは混乱しているものの、信繁は頷いた。

「寄り合い所帯みたいな物か・・・。」

「すると・・・商人達が4年度に社長を交換することになっていた。」

アルフレッドが苦い顔をする。決算に少し違和感があるからだけで、東南アジアから書類一個で戻されて、ついであの堅物軍人のおまけが付くなぞ・・・。それがこうなっているだけにつらい。

「それであんたらは、国に帰ることになっていた。」

「まあな。」

イギリスの妨害もあつて帰還できないまま数年が過ぎたが、向こう側もこちらとイスパニアの間で動くことができず、その間に東南アジアを固めてきたが・・・でもこうして戻ると惜しいものを感じる。イギリスも何かを感じて旗艦まで出してきたのだ。本腰を入れていたのだろうが・・・。振り切ってしまうばこちらの物だ。だがこの先は・・・。

「まあ・・・俺たちは渡りに船か・・・。」

信繁はつぶやきが重く伝わる。この歴戦の勇者は何を考えているのか、数週間も一緒にいても・・・掴みかねていた。

「でも何で二隻も必要なのだ？」

「だとしても、我慢していれば一隻で船に乗ることはできるはず・・・。」

・・・信繁は考えていた。

「船団で通らねばあの難所を越えることは難しい。」

「難所？」

「ああ。」

アルフレッドは通行して二度目だが恐怖が頭をよぎる。

「この先は数多くの船が難破した・・・絶望峰。」

当時看板には喜望峰として刻まれていたが・・・実際にはこう言

う者も少なくないアフリカ交易の難所である。実際南半球を通るルート最大の難所であり、よく言われる香辛料の値段が当時高かったのもこの難所の突破率だと言われている。香辛料が金と同等と言われたりするもの全てがこの通行が関わるからだ。スエズ運河ができるまでは実際このルートしか海路がなかったのだから凄い。

「絶望峰……。」

「そこを通って海賊地帯を越えれば……。麗しのヨーロッパだ。」
夢見心地で話してはいるが……。信繁にとっては未知の大陸である。実際、簡単な海図はあるが、実際、かなりおおざっぱではある。

「と言うことはまだ難所が……。」

「二つある。」

さも当然のような顔をしてアルフレッドは頷く。

「特に絶望……。いや、喜望峰は一隻で渡ると必ず人魚に囚われるという伝説があり、そのため……。多くの船乗りは救助してもらえるとされる二隻以上でしか船乗りが船に乗ろうとしねえ。」

「そこまで怖いのか……。」

信繁はアルフレッドの部屋に飾られた地図に一番南の縁を見つめる。今まで地図通りに進んできたとすればもう世界の半分は渡ってきたことになっている。この地図には適当ながらも、アメリカ大陸も書かれている。だがその形はまだニューヨーク側のみで、カルフォルニア等の西海岸は書かれていない。だが、その地図の中で恨みがかつたようにデスペアードに線は引かれ、ホープに直されている。

「だとしても……。2隻いるのだろう。」

「用意できるはずだ。今こちらに向かっているとのことだが……。」

「アルフレッドの顔色は重い。」

「喜望峰を越えたばかりの船員にまた引き返せと言うのは……。」「アルフレッドの顔は曇る。」

「そうだな。我らはその辺を知らない。もしよかったら……。」

「ん？」

「我々だけで行かないか？」

「は？」

信繁の提案にアルフレッドの顔が驚く。

「我が船はそう言う話を知らないから渡ることはできよう。迷信なら打破できるし、もし突破すればお主やドノヴァン殿の鼻も高くなるろう。」

「しかし……。」

信繁の提案にアルフレッドは考える。確かにこれは急ぎの仕事ではある。ではあるが、アルフレッド自身も怖いが……。もしかしたら、行けるかもしれない……。あ……。一瞬……。アルフレッドは自分の考えに恥ずかしさを覚える。もしかしたら……。行けるかもしれない。いつもは慎重な彼も……。希望を彼に感じてしまつ。

「説得はしてみる。まあ……。お主達がそう言っていたと伝えては置こう。それでも後三日は停泊するぞきつと。」

アルフレッドは立ち上がり、意志を固める。まあ、アフリカの人足達の働きは遅く。しかも色々せこい。だから……。準備にはそれぐらいかかる。そうアルフレッドは考えていたのだ。

「結局……。この手しかないのか？」

ドノヴァンの嫌そうな声が響く。彼から言わせれば、あの狭さの部屋が嫌だから信繁の船に行きたくないとこねる彼を、本国命令で脅して連れ込むのにやはり……。三日がかかった。荷物と食糧は積んでいるが、彼専属のコックなどの人員をのせるのにも相当時間がかかった。無論信繁の船にもコックは乗っている。だが、それではオランダの味は中々出せない。その為に保存してあった、オランダ食材（ジャガイモや小麦粉）を積み、無理矢理乗船させた。でもこの船……。相変わらず広い。それが、アルフレッドとオランダ船の船員達32名の感想でもあった。日本に単独運行できる大きさの船

を参考にしつづられた船である為、帆船軍艦並の大きさと日本技巧の粋を用いられた木材句により、各部品がコンパクトにされた作りは、特殊船とも言えるだろう。その分ギミックも多いが、この信繁の乗る一号艦は初期というだけあってシンプルな作りになっていた。

「仕方ないですよ。」

疲れた声でアルフレッドが答える。言うまでもないが……。聞いた話では相手方の船はまだ到着しておらず、来たとしてもそこから出航準備で予算がかさむのだ。それに比べれば、一隻で喜望峰に行くことこそが必要だとも言える。だが……。

「でも……。私は待つていても良いのだぞ。でもお前が言うから来てやったのだ。感謝するがいい。」

胸を張り乗船するドノヴァンの姿にお互いの船員の失笑が止まることはない。その様子にアルフレッド自身、情けなくてたまらなかった。これがトップなのだ。

「ようこそ。我が船に。ドノヴァン殿。」

信繁が船員達が見つめる中、また手をさしのべるが……。しばらく躊躇った後ドノヴァンは握手をする。今度はもう……。やはり複雑な顔をしていた。侮蔑なのか……。いや……。恥ずかしさなのか……。外側から伺い知ることはできない。

オランダの船の船員が乗り込んだことで、各所でオランダの風習や料理を使った者が増えてはいるが、日本から持ち出した保存食（醤油、味噌など）を使った料理などを食べ、出航していた。今度の航海は長いのだ。と言ってもまだ出航して二日目。

「は！、はあ！」

しまが短剣で斬りかかる。信繁からもらった短刀であるが、甲冑砕きができる重さの刀の為か……。大の大人でも驚くほどの重量ではあるが……。それでも普通の短刀と変わらぬ早さが出ている。

「まだ！踏み込みが足らん！」

信繁は手に持った脇差しで軽くないです。この船には練習用の竹刀と防具などがあるが、それを信繁自身は好まなかった。軽い数打ちの刀（量産品の安いものを指す）なら、軽い為に使えるかもしれないが、あの短刀はそうはいかない。そう思いながら、信繁の顔は明るく、微笑んでいた。

「これが限界だった。」

しまの弱った声が船上に響く。見張りの仕事が無くて暇な時はこうして剣技の練習に時間を割いていた。信繁の顔に疲れはないが、しまは疲労がたまっているような、汗だくだった。朝も早い為、オランダ船員達は起きてはいないが……。幹花と美井がじつと練習を見つめている。

「珍しいわね。」

「ん？」

美井が幹花を見上げる。

「普通女の子はこういうのは好きじゃないのよ。」
呆れた顔で美井を見つめるが、その熱い視線が止むことはなかった。

「あなたも……普通？」

「言うわね。」

美井の顔を見つめると、恋する乙女の顔ではある……。小さいが。

「私……昔……剣を習っていた。パーパも自衛だった……。」

「そうなの？」

「でも……剣……持ったこと……無い。」

寂しそうにつぶやく美井の前に、幹花の持っている短刀を抜いてみせる。

「そう言えば……半蔵様以外のお方は私にあまり武術って教えてくれなかったのよね。」

その言葉には刃物越しにしゃがんでいた美井が上を見上げる。

「持ってみる。これ……軽いから。」

そう言うと幹花は鞘に刃物を収め、幹花と同じ視線に立ち、短刀を鞘ごと美井の前に差し出す。それをしばらく見つめると、両手でぎゅっと握るように美井は短刀を受け取る。

「重い。」

「そう。その重さになれないと、あの人達の使っている武器はもつと重いわよ。」

そう言つて、訓練している二人の持つている武器を美井は見つめる。確かに信繁はあれ以外に歩き旅にも持つて行った太刀、あの脇差し……更に大太刀も使つていた頃もある。

いつも一緒に遊んでくれていたお兄ちゃんのおしあさんの持つている短刀もかなり太く、鋭い短刀であるが、あれをあそこまで振り回すのは……私にはできないかもしれない。

「ああとまでは行かなくても……。少しは学んでおいて不利はないかもしれない。」

幹花はじつと美井を見つめる。確かに今までは安全かもしれないが……あのオランダの船員が何かの間違いで喧嘩とかをするかもしれない。自衛の為に教えておいても損はない。

「船長！」

「ん？」

しまの全力の一太刀を受け止めて、信繁が声を上げる。涼しそうに見えるが……。実際はかなり神経を使っている……。ように幹花は見えた。

「この子の剣……見てもらつて良いですか？」

幹花の声にしまも気になったのか、力を緩める。その隙についてわざと刀を払う。

「いつてえ。」

「どんなときでも油断するな。相手が目の前にいる時は、神経を張り巡らせる。不意打ちを食らうぞ。」

いつになく真剣な顔の信繁に……。しまは大きく頷いた。

「よし。美井！やってみろ。」

その言葉に美井は軽く素振りをしてみる。実は、江戸にいる時に美井は信繁から軽く剣は教わっていた。あの時は・・・いじめられていた時にいじめっ子に仕返しがしたい為だったが・・・結局は仕返りする前にパーパに言われて、天海僧正と旅だったものだ。

「それなりではあるが・・・。」

しまが声を上げるのは無理もない。忍びとして幼い頃から訓練を受けたしまからすれば、お遊びに見えるくらいの腕前だったからだ。その感想は・・・幹花の顔からもわかる。

「でも、お主も最初はああだったかもしれないのだぞ。」

床に座り、信繁は見つめる。

「でも・・・。」

しまが見つめる。

「それでも・・・おなごにしては・・・やる方だ。もういいぞ。」

「うん。」

その言葉に美井は動きを止める。それからしばらく頭で信繁は考えていた。それから手に持っていた脇差しを座ったまま振ってみせる。少し振りかぶると途中で止めてみせる。

「まずはこれをいってみるか。同じように振ってみる。」

そう言つと美井は少し周囲を見渡した後、振り下ろして途中で止めようとするが・・・。重さに引きずられ少し揺らいでしまう。

「まずは、重さになれる為に、その短刀・・・。」

「私のですが・・・。彼女のはないので、お貸しします。」

幹花の声に頷くと、信繁は美井の側に寄る。

「まずは・・・慣れる。そして、基本的な振り方ができた時・・・。次の奴を教えてやる。」

「うん。」

そう頷くと、美井は短刀を持ったまま、船室に走って行ってしまふ。

「いいんですか？」

「向こうで何が起るのかわからない。それなら練習の一つもさせ

るのが良いって事だ。」

「ですね。」

そう言いじつと二人は美井を見つめていた。只その中、しまだけが何故かわからな言いようのない焦燥感を感じていた。

「でも・・・寒いな。」

「はい。オランダの船員達は昨日あたりから厚着を始めていました。大方そろそろ冬が近いのでしょうか・・・。」

この頃季節は9月。今まで赤道近くを通ってきた為か、長い夏だと思われていたのが、南半球にいたりして、南極が近いため、本当はこのあたりがから肌寒くなっていくのである。だがこの事を知らない信繁達であった。無論、よく航行しているオランダ船員達はこの事を知っており、厚着をしていた。

「冬着。」

「ああ。用意しておいてくれ。」

そう言うと幹花が船倉に向かつて歩いていく。無論どこでどんなことが怒るかわからないと思っていたのもあるが、ある程度海路の詳しい按針が念のためにと持たせていてくれたのだが・・・。肌が切れそうなくらい寒い。しかも・・・。出航してしばらくの事だから急に寒くなつたように感じている。

「だが・・・これは・・・。」

じつと上を見つめると空が白く・・・見える。

「とりあえず厚布団と厚めの木綿生地は配布できますが・・・あそこまで厚いのは・・・。」

上にながってきた幹花の声は少し消え入りそうだった。

「確かに・・・寒いとう。」

毛皮の防寒具をまとい、算が上がってくる。

「それは？」

信繁が不思議そうに見つめる。

「ああ。これですか。日本を出る前に実家にいきましてな。冬の鷹狩りとかで使う羽織を後で自慢する為に持ってきたのですが・・・。」

「 算は寒そうな格好をしている信繁を見ながら答える。信濃の山岳部の武士達の間では意外と鷹狩りなどの狩りを行い食事の足しにすることは認められていた。これは戦国時代以降江戸時代でも武芸推奨の考えの元、実行されている。冬山も鷹狩りでいくことが多かったり、山の天候が変わりやすい為、防寒着用の毛皮の羽織は必須品とも言えた。冬での戦闘も多い山岳地帯の武士の間ではこの毛皮の羽織などは必須品とも言えた。」

「 向こうで鷹狩りなどができるかと思ひまして……。」
無言でじつと見つめる信繁の顔に慌てて言葉を足すが……。しばらくして双眼鏡を取り出し、海岸線を見つめる。……そこには獣の姿一つ見あたらなかった。

「 どうかしましたかな。」
「 毛皮とかが保温に良いなら、ここで確保する手もあるかと思つたのだが……。」

信繁のつぶやきに算が急いで見張り台に上がっている。無論今でも見張り台には見張りの男が一人はいるが……。やろうと思えば二人までは載れるようになってる。

「 でも皮をはがして加工する時間はありません。」
幹花は冷静に答える。

「 でもさ。肉で鍋作れば暖まる。」

「 ……でも見あたりました? 」

「 いや。」

確かに食糧はあるが、保存食とかしか積んでいないこの船はそう言う鮮度のある者は少なかった。確かに網は積んでいる為、魚は捕れるが……。小振りな物が多く……。それでもかなり食糧事情は他の船よりはかなりよいのだが……。

「 では諦めてください。念のためです。」

その声に渋い顔をして……。信繁は幹花を見つめる。しかもまた裸眼で周囲を見渡すが……。何も見あたらぬ。

「わかったよ。」

「だが・・・この寒さ・・・かなり寒い。」

「はい。船長は船長室に行っていてください。後で・・・固定したで七輪でも用意しますから。」

当時の武士の大名家などでも、七輪は暖房のメインであり、無論冬に備えて畳敷きの船長室である信繁の部屋の中央にも、揺れても大丈夫のように固定できるように細工された七輪置きが畳の下に隠されていた。また、そこで湯を沸かし茶を点てることも可能である。「・・・そう言えば炭は？」

「幾つか日本から少量ですが積んであります。後はどこかで上陸すれば炭を作れると思います。」

この船には日本と同じ戦力を維持する為にいくつもの特別室が存在する。その一つが石釜を備えた鍛冶室である。鉄は向こうにもあるとの情報を得ていたので、向こうの鉄を使った刀の製作を試験する為に職人が施設共々追従している。これはこの当時他の船にない高性能の機能であり、やろうと思えば、金属を原石から精製し、鉄矢や鉄砲玉などを精製できることを意味していた。こういう鍛冶職人にとって燃費の良い石炭の発見と、木炭などの燃料作りは必須技能とも言える為、木炭を含む製法をほとんどの物が精通していた。

この船にはそう言う技術などの部屋が完備され、工房船とも言える施設が船室には含まれていた。そのため軍艦の大きさの船であっても、戦闘に使える部分は少なめになっており、研究を行うのが主目的となっていた。また大規模書記室もあり、そこでは幹花が部屋を使っていた。只、二番艦以降は機能の一部は削除されており、より運搬や戦闘ができる多目的型に改装されている。

「そうか・・・。場所を見つけて補給するように・・・と言っても次の上陸は・・・。」

信繁はふと先日言っていたオランダ人の話を思い出す。ここを越えてしばらくは船を泳がせなくてはならず、次はゴールドコーストの為、難所を越えて更に風向きを計算に入れて二週間ほどはかかる

見込みである。船の人数は多いが……。食糧等をかなり積んであるこの船は食糧は我慢すれば軽く耐えられるだけの積載量があるが、
・・それでも不安はつきない。特にこの寒さは……。・

「かなり後ですし。」

幹花は船に立て掛けてあつた網を見つめる。そこに先日釣つておいた魚の干物が……。置かれていた。オランダの船員も同じ事をやるらしく、違和感なく見られていた。

「七輪で焼いた魚で一杯はいかがですか？」

「そうだな……。と言ってもまだ朝だぞ。」

「干物を焼いた物に合う飲み物は……。・」

「……。そうだな。」

じつと考えるが……。この船には飲み物が水と椰子酒、日本酒と様々積まれているが、日本酒は貴重であるものがわかつていたので、今まで椰子酒で代表していたが……。日本酒にあるような……。暖かさはない。だが……。酒がなければ米ぐらいしか、魚に合う物は見あたらなかった。確かにアユタヤでは小麦粉のパンと呼ばれるものを食べていたが……。あまり相性が良いとは呼べず、今でもアユタヤ製の乾いた米が食料として使われている。

「おはよう。」

網の前でしばらく考えているとアルフレッド達船員達が船に上がってきた。

「おはよう。」

「それをどうするんだ？」

アルフレッドは内臓が抜かれ天日干しされた魚と一緒に見つめる。

「七輪で炙つて食べようかと……。そうだ。一緒に食べますか？」

「しちりん？」

「ま、来てみればわかります……。算は？」

「あ……。さっきのあれで上に上がりつぱなしですよね。」

「そうか。なら七輪出してきてくれ。算は来た時に出せばいい。」

「あ……。あれ……。は……。炭は堅いので良いですね。」

「ああ、頼んだ。」

そう言つて適当な干し魚を手に取り、船長室に向かう。アルフレッドは不思議そうな顔をして船長室に入る。いつものことなので、手間を掛けながらも靴を入り口で脱いでいた。

「そうだ……。」

「なんですか？」

信繁は近くの木の板に魚をのせると、アルフレッド向けの座布団の準備を始めていた。

「とりあえず話すべきかと思つてね。」

船長室に入つても寒さはあまり変わらず、肌寒いのは続いていた。畳が敷いてある為、幾分か和らぐが……。それでも寒い。

「何の話です？」

「喜望峰についてだ。」

「なんででしょうか？」

「あそこには不思議な伝説があつてな。」

「はあ。」

アルフレッドは脱いだ靴を器用に並べ、いつものように座布団の上に座る。意外とこれが肌触りがよく、気持ちいい。

「あそこには人魚がいるという噂があつてね。」

「人魚ですか？」

「ほら、船首部分に飾つてあつただろ？」

「はい……。」

そう言えば、モザンピックに置いていった船の船首には鷹の船首増が飾つてあつたように思えるが……。1回も言っていないので思い出せない。

「で……にんぎよとはどういう……？」

「よくは覚えていないが船乗りでは有名な伝説だな。上半身が女、下半身が魚という生き物がいるんだそうだ。」

「はあ。」

急に怪しくなってきたなと信繁は考えているが……。遮る気にも

ならなかった。

「信繁様。持つてきました。」

そう言うのと七輪を持って幹花が現れるとアルフレッドと信繁の間に割って入り中央の小さな畳を開ける。そこには床の間があり、更にその床を開けると少し大きなくぼみがあり、少しへこんでいた。七輪には少しくぼみがあり、そのくぼみに棒を使って固定していく。

「これが七輪……。」

感心したようにアルフレッドは陶器製の大きな壺みたいな物がある。当時の感覚としては今でいう石油ストーブと同じくらいの感覚である。幹花はその中にくるい棒みたいな物を入れる……。

「炭……ですか……！」

当時の日本人にとって炭とは日常商品ではあるが、16世紀から17世紀のヨーロッパでの炭は貴重品であり、軍事目的以外では余り使用されていなかった。特に堅い炭は貴重品であり、向こうでは貴族に至るまで、暖で炭を使うという概念は無く、小枝などの木で代用されていた。アルフレッドは様座な物資の貿易をする上で知識はあったがこういう使い方は初めてであった。幹花は近くの小さな小枝に火打ち石で火を入れると炭に火を近づける。徐々に炭が赤くなっていく。

「これは……。」

アルフレッドは軽い感動を感じる。確かに、ヤン・スペックが言っていた”この国で珍重されている。だから……やめられないんだ”という手紙の意味がわかった気がする。これはどんな貴族でも味わったことのない贅沢だ。信繁も真剣に七輪を見つめる中……アルフレッドは考えていた。あのドノヴァンの奴……これを見ても嫌いだっただのか？

その中で火を入れ終わったらしく、床下に置かれていた金網を七輪に掛ける。じつと待っていた信繁は手に持った魚を七輪の上に置く。「しばらくお待ちください。」

そう言うのと幹花も七輪を囲むように座った。信繁も七輪に座った

まま近づけたので、アルフレッドも習って近づける。・・・暖かい。暖を取るにはこれでよからう。」

「ですか。」

今まで話していた内容を忘れ、アルフレッドは七輪からの熱にじつと手をかざしてしまふ。暖かく外の寒ささえ忘れてしまふ。あまりの贅沢にじつと七輪を見つめる。手から伝わる暖かさが心地よい。

「で・・・先程の話は・・・。」

「あ・・・あ・・・ああ。人魚の話でしたな。」

「人魚？」

幹花もまた不思議そうな顔でアルフレッドの顔を見つめる。

「はい。それがこの先の喜望峰でであるという話がありまして。」

「何か幽霊みたいですね。」

幹花は外を見つめる。まだひるで、幽霊が出るような夜ではない。「そうですね。百年ほど前で・・・このあたりはあまりの風に難破船が多くて・・・。」

七輪の関係もありお互いに顔をつきあわせる。

「それが・・・人魚が遭難させると言う話がありましてな。それが・・・二隻以上だとせず、一隻だと出るとい話がありましてな。それで・・・。」

「それもあつたんですか。で、その話をも少し詳しくしていただけますか？」

「ああ。」

伝説によるとここには数多くの船が挑戦し、今では通れるようになってはいるがその当時は誰もこの岬を突破することはできなかった。その怨念がこの喜望峰には集まるという話がある。ある船乗りは船に乗っている時に霧で急に船が包まれてしばらくすると歌声が聞こえるのだそうだ。その声につられ舵を切るとそのまま行方がしれなくなってしまう。

そうして多くの船が釣れさせられてしまった・・・と言つ話だ。で・・・二隻以上で来ると急に出なくなるが、今でも単独で渡ろうとする船は・・・。いなくなると信じられているのだよ。

「それで・・・。だから単独では船を出したがらなかったんだ。」
「ぱちぱちぱち。魚の焼ける匂いが周囲に漂う。」

「それは怖いですね。」
「それで・・・。そうだ・・・これ、どうぞ。」

そう言つと信繁は菜箸で焼けた魚を掴むと、気の皿のまま、アルフレッドに渡す。

「骨・・・付いてますよ。」

オランダとかでこういう干し魚を作る時に、骨もできるだけ取り除く。だがこの魚・・・開いたまま乾されていたよな。

「骨の間にある身が旨い。」

そう言つと七輪にまた魚をのせる。この七輪は小さく、一匹乗せると一杯になってしまうが・・・。

「そう・・・ですか。」

そう言つとアルフレッドは食事を使うナイフを取り出し、手とナイフで器用に骨を取り外していく。中々に暖まり、汁が出ている。これは・・・旨く焼けた証拠だ。ナイフにのせて口にほおり込む。

「こ・・・これは・・・!」

アルフレッドは更に驚く。魚のみが口の中で自然とほぐれていき、魚の旨みが一緒に花が咲くように広がる。ほのかな塩分が更に旨みを加速する。

「軽く塩をмонでおきました。お口に合いますかな。」

実際信繁はあまり干し魚の手法を知らなかったが、青海や幹花が工夫してたのをおもいだす。

「あ・・・はい!」

アルフレッドは緊張して答える。あまりの旨さに自分を見失ってしまいそうだ。これだけの物・・・アルフレッドは実際主計として

幾つかのパーティーに同席したこともあり国王主催の晩餐会も料理だけは頂いたこともあったが・・・これほどの物に巡り会うことはなかった。だがこの味は何というか・・・ヨーロッパの主流料理を全て全否定してしまうような・・・そんな感じするほどの衝撃であった。

「それはよかった。」

信繁は微笑んでいた。実際聞いたことがある西洋料理とは違い、粗末な物であった為、少し心配でもあった。

「少し焼けるのに時間がかかり申すが・・・。」

「い・・・いえ・・・先に頂いてしまつて申し訳ない。」

慌ててアルフレッドがぺこぺこ頭を下げる。

「いえいえ。」

そう言つと信繁は七輪のさかなを見る。焼けるのにもう少しかかりそうだ。

「おーい。」

声が聞こえる所を見ると、しまが立っている。

「なんだ？」

「筧のおっさん知らない？青海が探してるつて・・・つて火・・・焚いてあるの？」

「いや、炭だ。ほら。」

そう言つて七輪を指さす。しまとかがいる田舎ではまだ七輪は珍しく、薪の方が多い。

「すげーじゃん。」

そう言つとずかずか入つてくるが、それを信繁が手で制する。ちようどアルフレッドの背中を見てぴたつと動きを止める。それを見ると足袋を脱いで、縁の所に座る。そろそろなかなかの時間が経つており、部屋全体が暖かい。

「そうだな。幹花。」

「はい。もし寒くて動けない奴がいたら、この部屋で暖めてやってくれ。」

「はい。」

「俺が青海の所に行ってくるよ。あ……アルフレッド殿？」

「あ……はい？」

あまりの旨さに骨にこびりついた身さえも取るうと苦戦している。

「どうします？」

「……もう少しさせてください。」

「わかりました。……しま。」

「はい？」

「この魚……やる。」

「え……あ……いいの？」

そう言つと立ち上がったしまはほどよく焼けた魚を菜箸で取り上げる。幹花がその後魚を置いた。自分の分を焼く為だ。

「ああ。俺の分は後で炙りたてを頂く。」

「じゃ、いったただつきまーす。」

信繁は立ち上がると船室を出て行った。一瞬開けた扉から出来る寒さについ外の寒さを思い出してしまった。

「そろそろだな。」

青海の厳しい声が船首で響く。人魚の話聞き、一応溶解の可能性も考えて、青海が警戒態勢を取っている。喜望峰に向かい西への海路の途中である彼らにとつて……ここは難所であった。聞いた半紙に寄れば、大陸棚で海岸側は浅瀬が多い為、こうして陸地とある程度距離を離して航行しているが……。

「だな。」

信繁も一応船首側にいる。一応船長室にすることもできたが……。今船長室は暖を取る部屋として、幹花とかの監視付きながら暖を取る部屋として解放してあった。まあ、船室の下の方では幾つか暖を取る部屋が設置されていたが、船の丈夫での設置は難しかった。そのため……信繁のいる場所がなかった。船首で青海と二人……見張りも含めた最少人数で船を切り盛りしていた。流石に今まで味

わったことのない寒さであった為、船室からでるのをオランダ船員含め・・・嫌がったからである。そこで命令して押し込んでよいが・・・それがそうそうできないのが・・・彼の弱みでもある。それを見かねた青海がつきあつて船首にいた。

「何事もなければ・・・」

「そうならんな・・・」

青海の嫌そうな顔で前方を見る。何も無いように見える。

「どうした？」

「匂いは違うが・・・。人とは違う何かだ・・・」

大抵こう言う事があると青海は頼りがいがある。そのままじっと待つてみると・・・やはりと言つていいほど・・・霧に周囲が包まれる。見張り台の男の声に、船長室から船員が飛び出してくる。

「きりが・・・」

船員の驚いた声とともに・・・。周囲の温度が下がる。霧が寒い地域で発生するのだ。当然ながら・・・。周囲の温度は今までの寒さよりもひときわ寒いが・・・それ以上の緊張感がオランダ船員やそのほかの船員の間には伝わる。うかつに動くこともなくじっと様子を見る。ドノヴァンは船室から出てくるが、その様子にすぐに船室に引き返し、アルフレッドはじつと空を見つめるが・・・霧の為、前方さえ確認できない。確かに怖いが・・・これ・・・。

「帆をたため！」

その言葉に船員が帆をたたみ始める。

「どうして・・・」

アルフレッド達オランダ船員が信繁に詰め寄る。

「少しあんたの話を聞いて考えてみた。」

「それは。」

「大方今までの船は霧になつても動いて、方向感覚がなくなつて浅瀬にぶつかった可能性が高い。」

その言葉にオランダ船員達の動きが止まった。

「なら、あえて霧が晴れるまで待つてみる。霧が晴れたら突破する。」

「わかった。船長。」

信繁の意志の固い言葉に一応オランダ船員達は納得して・・・中央で待機する。何が起きるのか・・・わからなかったからだ。それでも潮の流れである程度は船が動く。

「どういつつもりだ。」

青海はじつと前方を睨む。

「まあな。どういう物かわからないが、こういう所で妖怪とかがいるのなら、会ってみたいじゃないか。」

「好奇心に部下をつきあわせるのか？」

「いや。ここでどうにかできれば・・・安全に航行できる。」

・・・キュイー。・・・キュキュキュウイー。

「何か聞こえるか？」

・・・アアア・・・アアア・・・アアアア。

「何かな。」

聞こえてきた声に船員達の顔が青ざめる。

「落ち着け！」

信繁の一喝が船内に響く。・・・クアクアクキュイーキュウイーキュウイー。

「で・・・でも・・・。」

船員達の怯えた声が響く。この状態は・・・確かに怖いが・・・。

「お前ら！」

「おう！」

「休める人間は休んでおけ。体力勝負になるやもしれん。体が冷たい方が怖い。」

・・・アア、アアアア、アアアアアアアア。

「・・・は！」

その声に幾つかの集団が船室に戻るが、アルフレッドと二人のオランダ船員は甲板に残っていた。ドノヴァンはあれから船室から出てすらいない。

「でもこれ……。」

帰って行く船員達や船長室で待機しようとする船員達を見送りながら、青海がつぶやく。

「どうした？」

「これ……敵意がない。」

「じゃあ……。」

「ああ・いるにしているが襲う気はない……。」

その言葉に少し……信繁は焦りを覚える。

「だとすれば……。」

「もしかしたら……長丁場かもしれない。」

襲う気がなければ……。これは霧の結界の可能性がある。霧の結界とはよく秘境に掛けられる結界の一種で周囲を霧で囲み、行動を制限した上で、あいてを元の場所に戻すという結界であるが……。山岳地帯でよく見かけるが……。海で見るのは信繁含め……。初めてである。

「かもな……。」

青海も意味に気が付き焦る。単純に言えば……。止まれば霧の結界の水分の冷たさが体力を奪い、動けば浅瀬にぶつかって船が沈む。どっちに向いてもたちが悪い。

「どうする。」

「とりあえずは待つこっちには暖を取る物がある。」

実際このまま待てばいいのだが……。もう一方で焦りもある。向こうも待ち始めた時だ。その時はどうにもならない。

「あー。」

人魚達の朝は早い。朝は四つ半の合唱練習に始まり、できれば掛け合いの練習をペンギンと行い大会の優勝の為に練習する。そんな彼女たちの勤勉さは彼女たちの誇りでもある。

キュ、キュキュキュウイー。

ペンギンたちの掛け声に合わせて、人魚達は合いの手を入れる。

最近人間が歌っていたゴスペルとか言う曲風にアレンジしてみたけど、この掛け合いは意外と難しい。よく人間はあんな風に歌える。

「ほらそこ。声が乱れている。」

セーラムのおばさまの声が響く。それに合わせ声を少しずらす。

「ああーああーああーあーあーあー。」

発生する物の、声が少し震える。そろそろ冬で寒さが身にしみて……。手で胸を押さえ体温を上げようとするが……。中々音量が上がらない。

「おばさま。」

「何。エルムさん。」

セーラムおばさまの厳しい声が私に叩きつけられる。合唱は一時的にストップする。

「もう少し……。休憩していいですか？のどが疲れて。」

本当は海の中で合唱大会が行われるが……。地上の方が練習になると地上で練習する。

だけど、地上での発声は流石に慣れていない為か……。かなりつらい。セーラムおばさまはじつとこちらを睨む。

「いいですよ。少し泳いで気晴らししてきなさい。」

「は……。はい！」

水の中にはいるとそれまで大気で冷たかったのが水の温かさに解放された気分になる。

しばらく海の中を疾走する。のどを通る海水がえらを抜けて気持ちいい。

「でも……。どうしてあんなに”特訓”するんだろう。」

ふと、ひれを止め、じつと考える。確かに歌うのは気持ちいいんだけど、大会して、競うほどじゃない。歌っているのが気持ちいいだけで、ああガリガリする必要はない。泳いで周囲を回ってはいるが、実際は南大西洋の人魚達にスパイされないように張った霧の中を出ることはない。出れば了解違反だの人間よりも口うるさいあの連中が来る。狭いながらもこの合宿は変わったバカンスともいえる。

ちよつと肌が締まる思いがするのが難点だが……。

「あ……。あれ？」

水の中から船底が見える。船底から見えるのはかなり大きめだが、
……一隻か。

”また船がはぐれたのかな？遭難船なら誘導しなくちゃ。”

この当時人魚の役割に海で漂流した無人船を陸に送り返す役割もあつた。主に人魚やイルカなどの海洋ほ乳類が船があることで困るという為もあるが、漁場が荒らされて、生態系が変化することもあつたり、難破船搜索で人間の船がうろろするのを嫌い人魚間で決められた取り決めであるが……。他の人魚に聞くと、人間が中にまだいて、囚われたとか……。人がいる船に手を出しちやつて搜索隊が周囲を搜索するとか。人間は人魚をどこかにすれ去つてしまう悪い奴。だけど、いい人間も昔はいたのにな……。ふと思ひながらも意外に大きい船の側に寄る。船底はしつかりしている。軽くノックしてみるが……。反応はない。覗くか……。エルムはひれを上手く動かし水上に上がる。今まで見た船の中でもかなり立派だけど……。人とかもういないのかな？かなり大きい。

「あれは……。」

見張り台に初めて上つた信繁は青海と一緒にある方向を見つめる。そこには人らしい何かが浮いている。こんな所に……。裸の女性……。ではないな……。胸あたりに何かをつけた女性がいる。

「あれだろうな。」

望遠鏡から見つめる女性はじつところこちらの船を見つめている。大きいのが幸いして、人の姿が見えていないようだ。

「どうするよ。」

「行つてくる。」

信繁は人魚の視界から隠れるように見張り台から下りる。

「どう……。でした？」

算が不安そうに聞いてくる。

「ああ・・・何かいた。少し・・・行つて様子を見てくる。」

信繁は手に持った刀や鉄の物をはずして筧に手渡す。船長室ではしまや幹花が船長室で火の管理をしている。

「どうやって?」

「小舟で行つてくる。」

この頃の船は外壁修理用や緊急脱出用に小舟が用意されている。食糧等は積まない物の、上陸にも使える立派に船だ。

「武器はいいのですか?」

「こつという時に鉄の物を持って行くと・・・お師匠様に嫌われてな。」

「ああ。」

筧はお吉の方のことをふと思い出す。確かにあつ言つ人とよくつきあつていればこそだな。

「じゃ行つてくる。頼んだ。」

「は。」

そう言つて信繁は小舟をゆっくりおろすと音を立てぬように艀を動かし、すつと回り込む。

でもなんか木が立派だから・・・昔・・・外壁寄つていつたら人間の死骸があつたりしたんだよね。あれは気持ち悪いし、又タ又タするし・・・。じつと物思いにふけると、向こうから小舟が流れてくる。匂いは・・・何もしない。普通・・・鉄の匂いがぶんぶんなのに・・・。一度潜ると小舟の側に顔を出す。

「どなたかいらつしゃいますか・・・。」

そう言つて顔を覗かせるとそこには男が一人、寝そべつて・・・目を開けていた。

「よー!」

寝ころんだまま男は手を挙げた。騙された!危険を感じ水の中に潜り、全速力で船から離れ・・・。あれ・・・何も音がしない。普通通量をしているおじさんとかだと・・・。ここで騒ぐはずなのに・・・。

・。気になつて水面から顔を覗かせると今度は真ん中で座つて男がこつちをじつと見つめる。

「あんた・・・なにもんや。」

訛りの強い英語が聞こえてくる。聞き取り辛いのが、表情などを加味してやつと言語がたわる。

「俺か・・・俺は真田信繁。」

すぐに逃げられる遠目から声を返すと向こうも名乗ってきた。

「な・・・何の用や！」

気を強く構える。仲間から聞くとこれが一番効果があるんだそうだ。

「この霧・・・。お前達が張っているのか？」

「・・・ああ。」

頷く。本当はしたにいたる大伯母様が張っているのだが・・・。お前達だから・・・。おおむね合っている。

「出口わかる？」

「ああ。」

「案内してもらえるかな？流石にこのままじつとしているのもきつくてな。」

「何で私が。」

「方向だけでもわかればそっちに行くよ。」

「あんたら。」

「道に迷つてな。あんたらも無駄な殺傷は好まぬだろ。」

さも平然と話を進めるこの男に怪しさを覚える。だけど・・・。相談には行きにくい。人間としゃべってしまったらこの場面だけでもかなり・・・緊張する。

「でも・・・。」

確かに殺傷は好まぬが・・・だからといって船の先導は初めてだ。その時突然ひれを強烈に引っ張られる。潜っているとセーラムおばさまが・・・かなり怒ってる。

「あなた・・・何してるんです!？」

「漂流船だと思って……。そしたら人が……。」

「……確かに……。で……。相手は何を？」

「この霧から出たいつて……。案内しろって……。」

「不用意ですよ。でも……。そうですね。エルム。あなたは大叔母様の所に行つてきて。」

「あ……。はい。」

そう言うつとエルムは深海にいる大伯母様の所まで全速力で向かった。セーラムはそつと顔を出す。確かに今まで見た人間とは違う。匂いさえも違う。

「あんた……。さつきの子は？」

「あの子は……。使いに出しました。」

「そうか。」

信繁は微動だにする気配さえもない。

「であなたは何が目的で？」

「まあ……。船でここを通っている。あんたら自体に用はない。どうこうするつもりもない。」

セーラムはじつと信繁を遠目から見つめる。肝が据わっている。

確かに教えてもいいが……。こういう機会は滅多に訪れない。それは彼女が一番理解していた。船の上を見ると、人だかりができてい。だが動く様子もない。

「だからといって大事は嫌いだよ。」

あつさりというが大事の意味はよくわかる。変に騒ぎが嫌いなのもわかつている。なかなか……。しばらく見ているとエルムが顔を出す。

「セーラムおばさま。大伯母様がすぐに来るそうです。」

「はい。あなた。」

そう言つてセーラムは信繁を指さす。

「なんだ？」

「もう少して大伯母様が来ます。何があつても驚かないように。」
信繁は水面を見る。周囲の波が大きく乱れる。しばらくすると水

面一杯に・・・これ・・・人の顔だ！しばらくすると、信繁の小舟くらいなら一呑みしそうな・・・。大きさの顔が・・・水面から顔を出す。その顔の登場に船がどたばたするが・・・それを算と青海で食い止める。その顔はじつと信繁を見つめていた。

「ふむ・・・お前・・・何か人間にしては匂いがおかしい。昔どこかで・・・我らみたいな奴と会っているのか？」

「・・・妖怪か？ そうだな。出会ってはいるさ。」

「やはりな。だから驚かぬか。」

静かに口を開く大伯母様の顔を見るべく船員達は手すり一杯まで寄っている。当然驚く物など反応は様々だ。

「その大きさだ、俺なんか一呑みにできよう。驚いているぞ。」

「ふむ。その割に顔は変わらぬな。」

「大伯母様。どうしましょう。」

セーラム伯母様が困った顔をしている。しかも大叔母様のこの様な顔もエルムにとっては初めてである。

「確かにこの霧は人を払う。だが・・・。」

「できれば出るまでの道案内を頼む。」

「早々せかすな。」

「といたしますと?」

信繁の言葉が丁寧になる。

「お主のような肝の据わった男は初めてだ。」

そう言う大伯母様は信繁に顔を近づける。大きさはともかく、伯母様とか言われている割に三人とも年が若くえる・・・。そう言えば師匠も・・・。

「そうだな。せっかくだ。幾つか願いをかなえれば・・・。通そうじゃないか。」

「・・・何を求める。」

その言葉に信繁はじつと大叔母様の顔を見つめる。

「この子らは歌が好きだ。ゴスペルは知っておるか？ できれば参考に一曲歌ってもらえぬか？」

信繁はじつと考えるが・・・ゴスペルという歌は知らない。歌は・・・それほど信繁自身楽器は扱うこともあるが・・・遊び程度しか知らない。だが・・・もしかしたらアルフレッドは知っているかもしれない。

「一度船に帰ってもいいか。あの連中に聞いてみる。」

「わかった。只下手に動けば・・・。」

「わかっている。」

そう言うとき信繁は小舟をこぎ、旗艦に戻る。

「何でしたか。」

船に戻った信繁を全員が取り囲む。その中にアルフレッドもいた。

「アルフレッドどの?」

「はい?」

「ゴスペルという物を知らぬか?」

「ゴスペル・・・か?なんでまた?」

「人魚達が聞いてみたい・・・だそうだ。」

その言葉にオランダ船員達に衝撃が走る・・・。後で意味がわかるのだが。この時はまだその事を知らない。

「ゴスペルというのは・・・教会で神を讃える歌で、合唱だ。」

「合唱。」

聞き慣れない言葉にアルフレッドはオランダ船員達を集めた。

「歌えば等してもらえるのか?」

「今のところ・・・歌えば殺されない程度だが・・・せつかくだ。頼む。」

「了解した。お前が合図を送れば・・・知っている限りは歌う。只・・・少し時間をくれよ。後・・・俺たちは神父や聖歌隊ではない。だから下手でも・・・文句言うなよ。」

「わかった。」

そう言うとき縄ばしごを伝い、船を下りて小舟で似たような一に向かう。先程の人魚達二人の姿が無く・・・大伯母様の姿しかない。

「ほかのかたは?」

「せつかくだ・・・観客があつた方がよからう。」

真剣な顔で信繁を見つめる。信繁が船の方を見ると甲板の上からオランダ船員達が整列している。じつとこちらの様子を見ている。

「少し待ちますか。」

「でもお主・・・本当に・・・また来るとは思わなかつたぞ。」

「まあ・・・来ねば誠実ではないのでしようう。」

「たしかに・・・。」

大伯母様からすれば子供ほどもない小さな人間を見つめる。

「ほんとうに・・・。」

感心して見つめていると、船の周りに無数の人魚達が浮かび上がってくる。

「こちらの準備ができたようだな。」

「ただ・・・ゴスペルにはどうも専門の人がいるらしい。だから専門ではないが・・・。」

「そこは気にしてはあらん。」

大伯母様の少しにやけた顔が印象に残る。だが・・・信繁は扇子を広げ、腕を付き上がる。それとともに船からゴスペルが歌われる。

”おお！在す神よ！父の子よ！人の望みを叶える御身の栄光を！人の全ては敬愛し！ハレルヤ！人を見し者よ！その身の我らは捧げましょう！ハレルヤ！ハレルヤ！！”

オランダ人達在必死になつて声を合わせている。それをじつと真剣に見るように人魚達が耳を澄ます。男達の必死さもあり、ある意味壮観な歌に歌詞は理解できないが聞こえる。しばらくして・・・歌は終わり、オランダ人達はその場に座り込む。歌が終わって緊張が解けたのだろう。

「どうしてこれを・・・。」

歌い終わりを待つて信繁は聞いてみた。それまでの大伯母様もじつと聞き入る顔をしていたからだ。

「昔な、人間達がある町で歌っているのを聞いて・・・がんばつてみたのだが。そう言う物が理解できない。又聞きでしかないし、本

物を見ていないのだからな。ほら・・・周りの物も・・・。」

じつと人魚達も船の上の男達の様子を・・・聞き惚れているように見える。

「ですな。」

「お主も何か歌は歌えるのか？」

その言葉にじつと考えるが、合唱はあまり知らないが・・・昔歌舞伎は見せられたことがある。それから太閤の叔父貴の所で歌と舞を少しかじってはいたが・・・。

「舞は少々。」

それを聴いた大伯母様が水面から手を出し、手招きをする。それに合わせ、信繁の周りを人魚が取り囲む。

「では頼む。」

船員達は心配して船からじつと見つめる。

”人の世も”。暗ぶ月に舞い散れば”。

扇子を広げ、大きく声を上げ船上で舞を始めていた。普通船の上で踊れば船は傾き、すぐに船の上から落ちてしまうが、すり足と重心の使い方次第では落ちなくてすむ。だからと言って普通の人間のできる芸当ではない。その動きは静かでありながら・・・動きに満ち、風に揺らめく柳を彷彿とさせる柔らかさと力強さを持っていた。しかもこの時すんだ大声で歌っている。日本舞踊でありゆつくりとした歌ではあるが、その声もまた人魚達はじつと聞いていた。しばらくすると舞は終わり、静寂が周囲を包む。船上からは拍手もちらほら聞こえるがそれ以上に、大伯母様の目が少女のそれを見るような目になっているのは・・・信繁しかわからなかった。

「ほんとにお前・・・いや・・・お主もなかなかの物よ。」

人魚達も感心して見つめている。と言うよりかは啞然としていた。いや、感動していた。声も動きも、その先端に走る気は舞にメリハリをつけ、優雅な流れは声に不思議な旋律を与えた。その音色に・・・一挙一動に感動していた。

「恐れ入ります。」

恭しく信繁がお辞儀をする。

「もう一つ何かを頼もうと思ったが……。それさえも忘れてしま
うほど……。お主……。上手だぞ。」

「ありがとうございます。」

「約束通りと言いたいがもう一つ。」

「何でしょうか？」

「合いの手……。入れられるか？」

「はい。只……。楽器は持ち合わせておらぬので。」

「よいよい……。頼むぞ。」

そう言つと合図のように人魚達が歌い始めた。それを只じつと船
上の人間達が聞いている。美しい音色の歌だが……。合いの手を挟
めるほどの合間はない。しばらく聞いていると、信繁はあえて後に
追っかけて歌つてみる。

”ああーああああああー”

「ああーああー……。ああー」

”あっあっああーああーああああー”

「ああああー」

五分も経つ頃にやっと歌は終わり、何となく尊敬した瞳で人魚達
は信繁を見つめる。

「終わったようですな。」

五分間連続で歌つた信繁は疲れ、その場にしゃがみ込む。

「だな。でもまあ……。予定通り……。返してやるよ。」

名残惜しそうな……。子供のような顔を元に戻すと大伯母様は厳
しい目で人間達を見つめる。

「感謝する。」

「今度会えたら……。今度は……。別のもお願い。」

「分かりました。」

最後に見せた大伯母様の様子に微笑んで信繁は帰す。

「霧の位置をずらすから。すぐに帰るんだよ。」

「はい……。そういえば？」

「なんだ？」

信繁は艦に手を掛けた所でふと思い出す。

「どうしてこんな・・・航路の真ん中で霧を張るんです？」

「ん？」

その疑問に遺戒そうな顔を大伯母様はした。その間に人魚達は潜っていつてしまった。

「航路って？」

「人が多く通る道の真ん中になればいらぬ騒ぎも起きましよう。」

「そうか・・・。ここは・・・やはり人通りが多いのだな。」

「はい。」

「わかった考慮には入れよう。では。」

そう言う大伯母様は潜って去っていつてしまった。信繁は全てが終わったのに安堵すると・・・。艦を持ち、自分の船にこぎ始める。その時、ある人魚が顔を出す。最初に出会った人魚に・・・信繁は見えた。

「大伯母様のおんな顔・・・初めて見た。」

「そうか？」

艦を止め、じつとその人魚を見つめる。

「一緒に行つていい？あなたといると楽しそう。」

「・・・地上で暮らせるか？」

「いや・・・水から出たことがないの。」

ある意味当然の答えに納得する。

「人の側にいれば、嫌な物も見よう。そう言う奴をいっぱい見えてきた。やめた方がいい。」

その言葉に嫌そうな顔をするが・・・どうしようもない。

「わかった。じゃあね。」

そう言う大伯母様は水の中に戻っていつてしまった。その頬には涙が・・・海の潮に紛れ・・・わからなかった。

船に戻ってきた信繁に船員は驚いた顔で見ている。生きて帰って

きたことがまず信じられない。そう言う顔だった。

「お前！」

ドノヴァンの怒鳴り声が聞こえる。その方を見ると怒りで震えていた。

「どうなさいました。」

「どうして！一匹でもいいから捕まえてこなかった！」

人魚を連れて行けば彼にとってこれ以上ない名譽にもなる。そう考えるとこのチャンスは千載一遇ともいえた。だが、信繁は冷たい目でドノヴァンを見つめた。

「・・・彼らは彼らでしょう。それに今更ですよ。」

船員達は冷たい何かを見るような目でドノヴァンを見つめた。あの大きな人魚を見れば命があるだけでも運がいいと思う。

「命令だ！人魚を一匹捕まえてこい！」

「・・・お断りします。」

信繁は一通り考えた後首を横に振った。

「何だと！」

「今から潜って捕まえますか？海に何時までもいられる彼らと私は雲泥の差ですぞ。」

ドノヴァンの歯ぎしりが周囲に聞こえるほどに大きい。

「後で軍法会議ものだぞ！」

そう捨てぜりふを吐くとドノヴァンは船室に大きな足音を立て、去っていった。その様子をじっと見つめた後船員達が信繁を見つめる。

「おまえら！もう少しで霧が晴れる。そしたらとつとと出るぞ！」

「応！」

その掛け声に船員達が各自、配置に着く。

「でもまあ・・・あんな事させるとはな・・・。」

青海が寄ってきて・・・苦い声を上げる。しまや算も一緒である。

「あれがあいつらの楽しみだろ。気に入ってくれればいいさ。」

「でも・・・おめえ・・・本当に大丈夫か？」

しまは信繁の体をなめ回すように見つめる。

「大丈夫だ。」

「でもまあ・・・よく舞いなぞ踊れましたな。」

筧が驚いた顔で見つめる。かくいふ船員達に紛れ、筧もじつと見つめていた。

「まあな。叔父貴の所で色々見ていて、足裁きを習うついでに習っておいたのさ。」

「それでは今度の飲み会あたりで・・・。」

「だな。」

そう言うつとにやけた顔で船長室の近くに戻る。その頃には霧が、ある程度見える所まで薄まってきた。出航できそうだ。

「行くぞ！お前ら！」

その声に帆を広げ始めた。夕日が差し込み、道が照らされていくように全員の目には見えた。

「何か凄かったね。」

人魚の一人が船の後ろを見送るようにじつと見つめる。

「だってあの大伯母様よ。」

「ほんと・・・あれは凄いわ。」

エルム達三人はじつとあの船を見つめる。初めて人間を見た人魚達も多いがあれは斬新で・・・まるで嵐のようだった。

「こら。みなさん。」

その声に後ろを向くと、セーラム伯母様が呆れた顔で三人を見つめる。

「大伯母様から・・・このあたりは人間がよく通るので、あまり霧の外に行かないように・・・です。後・・・明日はまた早いですよ。」

「わかりました。」

そう言うつと人魚達は海に潜っていった。

「あなたも・・・。」

「セーラムはまだ名残惜しそうに見つめるエルムの前に回り込む。

「何か凄い・・・ですね。」

「あなたも早く行きなさい。明日からは猛特訓ですよ。」

「あれ聞いて何も感じないんですか？歌って・・・もっと自由でいいんです！」

「・・・。」

つい思ったことをエルムは口走ってしまつが・・・セーラムの目は朝のガリガリした目ではなく・・・きらきらと輝いて・・・何かあの子と達と一緒にのような。

「だって・・・人間だってあんな凄い歌うんの・・・あなただってあんな風に歌ってみたいと思わない？」

「え・・・。」

「大会とかもあるけど・・・私はあんな風に歌ってみたい。だからやるのよ。かつこいいじゃない。」

その言葉に、セーラムの顔をじっと見つめる。何か・・・こんな時が気持ちよかつた。

「あんな歌・・・歌ったら気持ちよさそうでしょ。だから・・・猛特訓ですよ。わかりました？」

その時・・・何か・・・初めて伯母様の心がわかつた気がした。

「はい！」

答える伯母様の目を初めて真剣に見つめる・・・エルムだった。

第二十節 嵐のロンドンへ（前書き）

ついにゴールドコーストまで着いた真田信繁一行は最終目的のオランダ、アムステルダムまでの航路を目指すが・・・その眼前にはダカール海粟地たい、そして怒りに燃えるイギリス艦隊が待ち構える。その窮地の前に信繁はどう作戦を立てるのか・・・。

第二十節 嵐のロンドンへ

第二十節 嵐のロンドンへ

「結局、あそこを越えたら終わりなのか？」

青海が愚痴る中、信繁と青海は見張り台で隣り合わせに望遠鏡を見つめる。海賊船等の船が来ないか二人で見張る為だ。あの難所”喜望峰”を越えて黄金海岸までは安定的に風を受け、順調に歩を進めている。

「まあな。難所はあそこだけみたいだからな・・・それに最近暑い。」

北上し、北へ向かう彼らは赤道近くの灼熱の黄金海岸へ向かってきた。そのためか、温度の上昇は早く、速くも七輪は・・・また使うかもしれないので船長室にとって置いてある。聞けばオランダはやはり寒いのだそうだ。幹花はその話を考え再設計を依頼するとか何とか・・・。見張り自体は信繁自身、やれる事は自分からやる主義で見張り、帆の配置換え、食事の仕度なども自身も当番に入っている。只、流石に船員達も遠慮してその回数は少ないが、疲労がたまってこれば、変わってやる事がままある。だからと言うわけではないが日本船員達にとって信繁はあこがれという感覚に近くなってきたている。

「でもまあ・・・ここまで温度差が激しいと・・・。そう言えば・・・。」

青海が望遠鏡で左右を見るが何も写らない。下では算が計算方法について教えている。またアルフレッド達によるオランダ語講座も開かれていて、人々は向こうに到着後に備えて着々と準備をしている。

「あの人魚の歌には・・・何も感じなかった。でも遭難者があった。何でだ？」

先日合った人魚達は確かに歌は上手かったがあの時は何も感じなかった。

「俺の予想が正しければ・・・偶然かな？」

「ん？」

「あれから考えてみたんだ。連中は人間を怖がっているか・・・嫌っている節があった。」

「ほう？」

青海は望遠鏡を葉梨信繁を見る。背中合わせで大人の男が二人いるのだ。とても狭い。

「だから連中は人間と接触しようとしていないが・・・。」

「いないが？」

信繁も望遠鏡で後方を見張るが・・・イギリス船の追跡部隊は来る気配はない。

「歌はあの感じだ。ほつとするか、オランダのゴスペルがどうのとか言えば、あの声は歌だ。」

「ほう・・・。」

「大方多くの船は突っ切ることせず、俺たちと一緒に立ち止まる。」
「だろうな。」

「そこであの曲を聴いて気持ちよくなる。水温に近い霧の寒さで体力と気力をも蝕まれた連中の思考力はなくなり・・・。」

「事故を起こす・・・か。」

「だと思っただけだ。連中も人に見られたくないだけだし、お互いの位置を知らなければさわる事も、今後何が起ることもないだろう。」

「だといいがな。」

青海は望遠鏡で再度前方と見る。右側には相変わらずアフリカ大陸を望んでいる。大きな・・・島だ。

「でも・・・何であのおっさん・・・あんなにキレイなんだ？」

青海は不思議そうに下を望遠鏡で見つめる。ドノヴァンはあれから船室にほぼ籠もりつきりだ。

「アルフレッド曰く……。向こうではそう言う見せ物小屋だと思
うが……。そう言うのがはやりなんだと……。で、金がもらえる
からとか言うが……。」

実際日本でも見せ物小屋はあったが、その中でも妖怪はほぼ無い
か……。忍者達の手によって助けられている事例が多く、残存した
物の多くは偽物である。だが実際珍しい物はどんな物でも見せ物小
屋で見せびらかしていたが……。この大航海時代終焉時のこの時代
において、見せ物の話が多かった……。がそれ以上の意味が人魚に
はある。当時中国経由で人魚の肝は不老不死とか……。血は万能薬
であるとか……。様々な噂が多く（多くは否定されてきている）当
時として破格の取引額や懸賞金であると言われている。そのため、
人魚一体で億万長者もまたあり得るのだが……。

「でも俺にはそう言う趣味はない。」

信繁にとつてはそう言う妖怪達の悲惨さも……。いくつも味わっ
てきているし、実際退魔などをやっている青海もそれは承知してい
る。

「俺も……。襲う悪い奴には躊躇が無くとも……。あれはちょっと
……。」

青海でさえ見せ物小屋を見ると避けた事が……。傭兵時代では多
くあった。いつ見ても趣味の悪い物……。に青海は感じられた。

「だから……。」

「確かに……。」

”おい！交代だ！”

下から船員達の声が聞こえる。見張りの船員の交代は、一貫性を
取り入れる為、食事ごとに設定されている。ついでに言うと船での
食事は戦時と一緒に一日三食（昼食は軽めの保存食）で構成されて
いる。

「飯みただいな。行くか？」

「先行つてくれ。」

「了解。」

そう言うと、器用に体を動かし、下への縄ばしごを下りていく。
「そろそろ……」

信繁が前方を見ると大陸の曲がり角が望遠鏡で見た遠目に見える。まだ先だろうが……。下で、先程見えたゴールドコーストの話も青海はしている。

「ゴールドコースト……」

次の補給地、ゴールドコーストはすぐそこだった。

ゴールドコースト……黄金海岸と呼ばれるそこは、象牙、奴隷、黄金を主とした産地で、その出航場所に合わせ、奴隷海岸、象牙海岸、黄金海岸の名が刻まれているが……。当時の感覚としては勘違いされる事も多いが、奴隷海岸と言っても当時のヨーロッパの感覚としては人足であり、あらゆる報酬を提示した中で、ガラス玉みたいな珍しいに反応しただけで、初期において（1450年から1500年代）には普通の金貨も置いていこうとしたが、彼らに価値がないと断られた為に、ガラス玉という方法でしか人足を雇えなかったのだ。それも多くは現在においてもその跡は存在していたが……。そのために大航海時代終了後の植民地統治下では二等市民扱いに不満を抱いていたが……。この頃は普通の市民の数多くも二等市民での扱いの為に差はなく、貴族階級以外では一部では人扱いされない現実がある。だが奴隷船の多くは中世ヨーロッパに比べ、まだ改善されており……。と言いたい……。実際かなりの重労働であったため、コスト軽減で非人道的な事がどこでも成り立っていた現実がある。だがこの時代ではまだ……。希望にあふれた……。ゴールドコーストだった。

「やっと着いたな。」

「本当に暑いすな。」

筧の呆れる声が聞こえる。薄着にしてあっても乾いた熱さで汗がじっとり服に付く。

「でもすぐにでるんだろ。」

青海はいつも・・・いや、いつもより内着が一枚少ない。

「いや、幾つか製作する必要があってな・・・そのために一週間ほどはここでいる羽目に・・・。」

「・・・寒いよりいいじゃん・・・でも・・・ほんと・・・町・・・狭いな。」

しまはいつもの薄着ではあるが、今までが寒かった為、暖かいところが好きだったようだ。

「ここ・・・ほら・・・他の所と一緒に・・・ヨーロッパの人が・・・作ったの・・・だから・・・狭い。」

確かに町の設営はヨーロッパの人間が作っており、地元の間人は凌駕できるもつと内陸部を好んでいる。

「って事は建物またいっしょ？」

しまが不満そうに周囲を見渡す。また白い漆喰の淡泊な建物があるだけだ。当時の港は中立地帯に置いて、国ごとに止める位置が割り振られており、それ以外の港湾管理は意外とずさんではあった。

「でも・・・飯が食べぬよりはいいだろ。」

「でもさ・・・もうさすがに・・・。」

しまは言葉を渋った。美井が言うにはヨーロッパの主食はパンや小麦粉であり、芋や小麦しか基本的に食す事はないという・・・。だからこそ・・・米がない事を言っているのだろう。

「とりあえず、現地の物を食う。それが旅の鉄則だ。」

近くの酒のマークが書かれた所を美井が指さす。

「あれ・・・でもあの書き方だと・・・。」

見るとワインのマークの看板がある。海外渡航者向けなのだろう、アルファベットが並んでいる。

「行くぞ。」

「ああ。」

中にはいると、屈強そうな男達が酒を飲んでいた。ちらっと食卓を見ると野菜らしき葉っぱと白い何かが盛られたものを食べている。べったりしているようだ・・・。後ろでそつとついて回った幹花

が前に出て幾つか銀貨を取り出す。

「これで足りると思うけど・・・人数分頼むわ。」

「・・・わかった。」

そう言うのと店の男は奥には行っていた。只店の人間はじつと信繁達を見つめていたが・・・近くの大きなテーブルに信繁が座ると、それに合わせ、周りの人間も座り出す。今回はアルフレッドもついてきているが・・・。

「あれでよかったの？」

流石の幹花も不安そうにカウンターの向こうで食事を作っている男の様子を見ている。

「ああ。とりあえずはね。」

アルフレッドの声は緊張しているようにも見える。

「どうした？」

信繁は周囲を見渡すが・・・少し剣呑さが伺える。

「いやあ・・・そう言えば言っただけだったっけ？」

アルフレッドはその視線の正体を感じ取っていた。

「なにを？」

美井もまたその視線の意味に築き、椅子を青海に寄せていた。

「俺は信じてはいないんだが・・・船乗りには・・・ある伝説というか・・・言い伝えがあつてな。」

「ん？」

「船に女を連れ込むと沈むとか乱れるとか言う話でな。」

中世ヨーロッパでの船乗りの間に伝わる伝説で、船に女を連れ込むと嵐で沈むという伝説がある・・・。これには諸説あり、一説には船に乗り込む女性自身が少ない上に長時間（最大一ヶ月）の間監視される為に女性を巡って喧嘩する為とか・・・女性にかまけている間に何かを見落とし・・・船が座礁するなどあるが・・・。実際の所、規律さえとれていてもそれほど影響はないが・・・。戦国時代の日本でもそうだがこういう縁起関係は進行する人が多い為、重要視される。

「そんなのがあるのか？」

青海は不思議そうに周囲を見渡す。確かに視線がおかしい……一人に集まっている気が……する。

「するとだな……女に餓えちまってな……。」

その言葉に流石に信繁も理解した。視線は熱さで薄着している幹花の肌に集中していた。信繁が見てもしまが見ても美人に見える幹花の事である。実際船に乗っている間もオランダ船員が手込めにしようとたくらんだようだが……あの鋭い視線と殺気である。手を出すのをやめたらしい。実際あの實力を見せられた日本の船員は手を出す事はしなかった。だがそれを知らないこの周辺の男達はひそひそと何かをしゃべっている。

「大体わかりましたが……せつかくですからお食事ぐらいは……。」

「ようよう……姉ちゃんよ。」

声の方を振り向くと数人の男がにやにやしている。

「何でしょうか……。」

冷静にじつと見つめる。人垣ができているのが確認できる。アルフレッドは気の毒にと言う顔をしている。実際アルフレッドは幹花が戦闘している所を見てはいない。

「俺たちと一緒にいい事しねえか？」

じつと船員の姿を見つめる。せつかくの金髪が熱でいたんで白髪に近くなっているむさ苦しいおっさんの固まり……だった。少し考える仕草をして幹花は周囲を見つめる。

「そうですね……。後でよろしければ……お相手いたしますよ。」

「今がいいんだけどな……。」

そう言うと店のオヤジがちょうど、信繁達の目の前に酒を……美井としまの前にはミルクを置いていった。

「せつかくですから……一杯飲むまではお待ちいただけませんか？」

「まあ・・・それぐらいならいいよ。」

そう言っただけで男達は幹花を見つめる。

「船長。」

「なんだ？」

「少しして大きな音がしたら・・・駆けつけてもらえますか？」

日本語でしゃべったその言葉に何か納得したのか・・・信繁は軽く頷く。それを見て幹花は周囲が見ても啞然とするほどの勢いでジョッキを煽る。そして、幹花が立ち上がる。

「外でしません？ここだと恥ずかしくて・・・。」

そう言っど・・・幹花は外に一人歩いていった。その後をまるで吸い寄せられるように数人の男がついて行く。周りの人間は一人として・・・アルフレッドを覗いて心配する様子はなかった。

「彼女は大丈夫なのか？」

アルフレッドは慌てていた。

「あれは大丈夫だ。早々やられる奴じゃあねえよ。」

青海は落ち着いてワインを口に入れる。

「何かこれ・・・甘い。」

「ですな。」

「おつちやーん！めしまだ!？」

各自リラックスした様子に流石に・・・アルフレッドも驚いていた。

「いいのか？本当に？」

「ずっと強いぜ・・・あの姉ちゃん。」

「へ？」

アルフレッドの驚いた声に紛れ、酒場の外から大声が聞こえる。その声を聞いて信繁が立ち上がると、青海と篁も立ち上がり、外に向かった。その後をついてアルフレッド達が行くと、泡を吹いて倒れる数人の男達をじっと見下ろす幹花の姿があった。

「まだまだ・・・淑女をたぶらかすには修行が足りません。」

「これは・・・。」

アルフレッド達が啞然とすると騒ぎを聞きつけた酒場の連中もやってきていた。流石の船乗り連中もこれには驚いていた。しばらくすると外野から声が漏れる。

「やっちまえ！やっちまえ！」

その言葉に少しづつ船乗り達が包囲を始める。それに恐れたのか信繁達の後ろに隠れる。

「すまないが……。」

信繁はそう言うのと腰の太刀を抜いて構える。

「これ以上家の者に出すと……。」

「だな。」

青海と笥も構えるそれに合わせ、しかも、腰の短刀に手を掛ける。それに気圧されて全員が一步下がる。

「死んでも責任は取れんぞ。」

「わ……わかったよ。」

そういうとすぐごと引いて……全員……どこかに行ってしまった。中に戻ると人一人……店員を除いた全員がいなくなっていた。テーブルの上を見ると幾つかの食事が並んでいた。

「あんた……単なる通訳とばかり……。」

不思議そうな目でアルフレッドは幹花を見つめる。

「いえまあ……船長補佐ですから。」

「でもまあ……な。」

「ですな。」

「お前ら……。」

声にふと振り向くと、手にいっぱいの料理を持ったおっさんの姿があった。どう見てもラテン系ではあるが……。

「お客……どうした？」

料理を器用にテーブルに並べている。

「こいつに手を出そうとしたのでな。すまん。」

「いや。店の外の事には関わらないのが流儀だ。気にはしないさ。

ここは基本先払いだしな。」

この頃の酒場などの飲食店の多くは先払いで、金が足りないと後で請求する事が多かった。そのため、早く帰れば損にはならないが、長く居座られると損な事が多い。だが、足りない時の請求でのトラブルでの死傷事件も多く、この頃の酒場経営は難しい者があつたが、
・ おおむね儲かっているのが普通だつた。

「でもまあ・・・少し気になつてな。」

そう言つとおっさんは手を挙げると、カウンターの中の人間も手を挙げる。何かの合図なのだろう。しばらくしてカウンターの中から人が出てくる。手には何か看板を持っている。

「あんたらほどの腕つきならしらねえか？もう少しでこのあたりに着くそうなんだがイギリス船に勝つたオランダ船って奴？」

おっさんは料理を並べ終わると、手短にある椅子に腰掛けると手短にある肉料理に手をつける。

「オランダ船？」

不思議そうな顔をして信繁は見つめる。

「ああ。何か最近イギリス海軍がこのあたりをうるついでに・・・で、店に来たら情報だけでも金貨出すとか言い出したもんでよ。

それでこのあたりの海賊どもも、血眼で探しているのさ。でさ、あんな・・・どつちから来た？」

ぺらぺらしゃべるのもうなずける。懸賞金・・・。確かにそれがあれば近海周辺あたりを搜索する事も可能だろう・・・だが・・・。

「一応・・・モザンブークからさ。」

「そうか。」

みんなが固まる中、信繁が答える。

「交易船か・・・。どうも相手・・・軍艦だつて言う話だ。」

幾つか腑に落ちない部分を考えながらも少し考えてみる。

「みかけなかつたな・・・でも・・・そいつどんな事やらかしたんだ？」

「いやあな。どうも一隻で、四隻の軍艦沈めたとか？そんな奴いれば凄いとおもうがな。」

そう言いながら値踏みする目でおっさんは周囲を見渡す。並べられている料理はそれなりに豪華な物だが・・・このあたりの主食タロイモをメインとした物と、牛の肉を焼いた物だ。後は葉っぱが生で乗せられている。少し信繁は手を上がるとみんなは会えて夢中になって食べ物を食べ始める。特にアルフレッドは顔を伏せて食べていた。

「そんな奴がいるのか・・・信じられん。」

その言葉にじっとおっさんは信繁の顔を見つめる。

「あんた・・・まさか・・・。」

疑うような目でおっさんは見つめる・・・。

「そう見えるかい？」

「だったとしても何もしねえよ。」

おっさんは近くにあるジョッキに手をつけると、それを一気に煽る。

「あんたら・・・相当な修羅場、くぐってんな。」

「ん？」

「あんたら、さっきの話の時、食べてる途中でも一瞬動きを止めやがった。」

じつとおっさんは周囲を見渡すが、人が来る気配さえない。

「いやまあ・・・いいさ、食べよ。あんたも腹・・・減ってんだろ？」

その言葉を聞くと・・・信繁は軽く頷き、近くのタロイモをふかしたべつとりした物体を信繁は指さした。

「そう言えばこれは何だ？」

「ふ・・・それか？それはこのあたりの奴がよく食う、”タロイモ”とか言う芋だ。食ってみる・・・味がねえぞ。腹はいっぱいになるがな。」

そう言われて信繁は口に芋を入れる。淡泊でねつとりしているが・・・ぱさぱさする感覚しか・・・無かった。

「本当だな。」

「で、これが地元の牛だ。まあ・・・あまりいい環境ではないが・・・。」

よく見ると青海は芋を少しくって酒を飲んでいるだけで、肉には手を出してはいない。

しまは牛肉をかじった節はあるが・・・臭みが嫌いらしく、一口で終わっている。それを美井が少しずつ口で含んでナイフで器用に食べている。幹花も食べてはいないが、筧は嚙んでいる物の、苦戦している。固いらしい。

「でもまあ・・・食べるだけでした。香辛料とかがあればいいが・・・最近高くてな。」

「高い？」

「昔はもつと安いからよかつたんだが・・・今じゃ高くてうちらみたくない所だと手がでねえ。」

香辛料の値段の歴史は結構奥が深い、1495年代頃から陸路の少量輸送された黒胡椒の時代から、海路を用いた大量運送での安値とアラビア商人が持つて行ったマージン分の確保を実現したが・・・航海時代後期になると、儲かると言われた香辛料の争奪戦が起き、交易船が来るたびに根こそぎ買われていき、現地での分が不足するほどになっていた。そのため数十倍に高騰し、それに合わせ値段も上がっていった。そのため、後期になると、意外と香辛料を使った旨い料理が衰退していった。そのため、香辛料は各地の酒場や料理店、田舎に至るまで、ほしがっていた。特に唐辛子、胡椒の辛さは珍重されていたが、それらを使った料理が普遍的になったのもこの頃で、小悪魔風料理はこの頃からが多い。特に海岸沿いの酒場ではこの香辛料を使った料理しか受け付けないと言われ、この有無の差が売り上げに確実に影響していた。

「それは大変だな。」

「できりゃあさ・・・胡椒とかあれば・・・安く譲ってもらえんか？」

「それは・・・本国に持つて行く分があるので。」

アルフレッドもわかっていたらしく申し訳なさそうに答える。

「ある程度、分けてやってくれないか？」

信繁から一言が来る。性格からして予想はしていたアルフレッドはしぶしぶ頷く。

「・・・一樽程度ならいいが・・・少し多めだから安値でも値が張るぞ。」

「構わん。」

「じゃあ、明日持ってこさせよう。」

「恩に着る。」

そう言つとおっさんは大きく礼をした。

「ま・・・食べてくれや。今日は香辛料を使った料理はないが、今度来る時はサービスしてやるよ。」

そう言つと上機嫌に席を離れ歩いていった。その間にも・・・食事の苦戦していた。手で食うにしては熱々の肉、美井を見れば三つ又の槍みたいな物を器用に使い食べているのを、しまはまねてはいるが・・・結構不器用だった。幹花を含む皆もそうみたいで、苦戦していた。フォークを無理矢理肉に刺すと、口にほおり込む。肉の味が濃く・・・あまり好きではない以上に・・・。

「これ・・・痩せている奴使つてる。」

「俺はこういうのが苦手だな。」

嫌そうな顔をして肉を青海は見つめる。

「だろうな・・・。」

「でも・・・噛み切れねえぞ。こいつ。」

しまも不満そうに肉を見つめ、芋を口にする。

「しかもこれ・・・乳とか・・・だよな。」

そう言つてしまは嫌そうな顔をして、信繁にカップの中身を差し出す。中には信繁が見た事のない白い液体が入っている。当時の日本の飲み物は水、酒、茶以外はなく、ここに出された牛乳やワインなじみはない。だが、牛乳は意外にも船乗りにも好評で水の替わりに運んでいたワインの次くらいには人気であった。当時の日本

人にとって、ほぼこの食材はなじみはなかった。

「飲んだのか？」

「ああ。」

少し信繁は口に含んでみると・・・当時の牛乳は今見たく薄めておらず、甘ったるい。

「これはちよつと・・・。」

その言葉にアルフレッドがのぞき込む。

「ああ。これが牛乳だよ。」

「牛の乳。」

珍しそうに青海がのぞき込むと、カップを奪いぐいっと飲み干す。

「おめえ！」

「ぶはー。うめえ。」

しまが今にも斬りかかりそうな表情で睨む。

「いやあ、始めてだぞ、牛乳。よく、酸を作るのに使ってはいたが・・・。」

饅頭というのは京都周辺で昔作られていた遺失料理で、牛乳からチーズを作る研究の家庭で作られた乾物であり、平安京あたりから寺など出だされていた。

「以外と高級品だな。こいつをに固めると甘い奴ができるんだ。」

当時の貴族以外ではほぼ食べられていない上に、江戸以降は砂糖菓子に押され、絶滅してしまった。

「それは・・・。」

惜しい物を見つめで、青海が飲んだ牛乳のカップをしまは見つめる。

「いいの・・・。それ・・・北に行けば・・・いっぱいあるから。」

「え・・・そうなのか？」

「うん。」

美井の言葉にしまは嬉しそうににやにやしてみせる。日本では貴重品でもヨーロッパでは量産されていて、一般品目である。

「チーズとかも・・・オランダは多い・・・。」

「チーズのお。」

そう言いつつ美井のカップを筧が覗く。結構大きいカップではあるが、半分ぐらいいは飲んである。

「チーズが何かわからぬが・・・相当食べ物には苦勞しそうですね。」

筧の言葉が彼らが抱くもう一つの不安を象徴していたのだった。

船に帰った信繁と、船で高級ワインを飲んでいたドノヴァンと、アルフレッド、筧と幹花の5人はドノヴァンの部屋で地図を取り出しにらめっこする事になった。外は暗く、部屋で蝋燭が照らされていた。浮かべられた顔はそれぞれ重い。

「お主らにまず聞いておきたい事がある。」

信繁の焦った声が状況を物語っていた。

「何故、アフリカで撃った船の話がここまで響く？」

信繁が一番の疑問であった。

「何かあったのか？」

ドノヴァンは意外そうな顔で周囲を見渡す。

「現地の物に聞くと、イギリス海軍が我らを搜索しているらしく・・・」

「。。。」

「何だと？」

ドノヴァンはひどく驚いた顔で・・・酔いが一気に覚めたように見える。

「だとすると・・・本国に着く前に・・・どうにかできないか？」

「話が見えない。私たちにわかるように説明してもらえないか？まずどうしてこんなに速く手配がまわる？」

そう言うとアルフレッドはテーブルの上に大きめの世界地図を広げ、アラビアを刺す。

「まずここだ。」

そう言うと紅海を指さす。

「ここを通過して、イギリス領地であるエジプト、地中海を抜けて、

本国に着いたのだらう。結構ゆっくりしていたから……と思ったが……意外と神経質だな……連中は。」

そう言って地図の真ん中を抜くようなルートをアルフレッドは指さした。

「で……目的地はどこだ？」

面食らいながらも信繁が聞いてみる。この意見は算、幹花ともに一緒だ。

「ここだ。」

そう言ってオランダの地、イギリスの島を越えた先を指さす。

「ここが母国、オランダだ。」

「え……。」

幹花の驚きの声とともに、アルフレッドは対岸の大きめの島を指さす。

「ここがイギリスだ。」

その言葉に信繁、算の息が止まりそうなほど……絶句してしまふ。ちょうどイギリスはオランダに行く為には通過しなくてはならない……。海域をほぼ全て掌握していた。

「それでは……この敵の本拠地を突破しなくてはお主らの地には着かないのか？」

算の間の抜けた質問は……この場に似る日本人達全ての声を代弁していた。

「と言う事だ。だが……変に待機すれば搜索はこの地にも及ぶ。」

「しかもここ。」

そう言ってアフリカ大陸の最西端、ダカールを指さす。

「ここでも網は張るだらう。」

アルフレッドは答える。ちょうどこのあたりはゴールドコーストから運ばれた近海を狙って海賊が横行する中立地帯で、各国がこのあたりに港を持っていた。そのため、激戦区とも呼ばれる地域で18世紀ぐらいまでは決して安定しない暗黒地域でもある。先程の話が本当なら、この地域の海賊もオランダ船を狙ってくる事になる。

無論その中にイギリス私掠艇やイギリス海軍が混ざる話さえもあり得る。正に危険地帯である。

「どうするんだ？」

ドノヴァンが聞いてくるが・・・聞きたいのは信繁たちである。変に搜索されていなければ・・・そのまま突っ切っても大丈夫だが、この調子だと、ダカールでの補給（当時このあたりにマルタ島というダカール湾の島にオランダ補給基地がある）も難しい。変に見つかれば港ごと砲撃もあり得る。しばらく地図を見て信繁は考えていた。

「そういえば・・・。」

「ん？」

「オランダとかイギリスとかと言っても船の形はまちまちだよな。」

「まあな。」

アルフレッドは答える。主計な事もあり、船の種類には精通している。

「どうやって見分けるんだ？船を。」

「旗だよ。旗。」

と言ってアルフレッドは上を指す。今のこの船はオランダ東インド会社の旗印がついている。

「ついでに言うつと旗がなければ、無国籍船という事で、どう扱ってもよいという規定もある。」

その言葉に算は唾を飲む。日本から出た時には旗はなく、強行突破すればイギリス船に撃沈させられていたとも考えられる。

「じゃあ・・・海賊とかはどうやって区別するんだ？」

算の疑問はもっともである。自分たちも下手すれば海賊と間違われていたかもしれないのだ。

「海賊は海賊専用の旗がある。旗を掲げる海賊の多くは私掠艇（国が認めた海賊）で、そうでなければどこかに味とを持っている船ぐらいしか付いていない。小さい海賊団だと旗印もない。だから、旗印のない船は海賊団だと思われてドボン。」

「第一旗がないのは国の誇りという物がないと言つ事だ！」

ドノヴァンは胸を張るが信繁はじつと考える。

「だとすれば、商人の交易船……。」

一応この船はオランダの交易船であるが……。それを差し引いても通れるとは思えない。

「じゃあ……見た事無い旗印だと？」

「ああ……。それは害がなければ無視するか、国なら一度臨検（乗り込んで実害を検査する）する。」

「だとすると……それが一番だな。」

「はたじるしを……。」

アルフレッドも流石に気が付く。

「旗印を作成する。それで後はごまかす。」

「……そんなので成功するのか？」

ドノヴァンは嫌そうな顔でじつとと航路を指さす。オランダの首都アムステルダムまでは後三週間はかかりそうな航路である。オランダまでの突破は難しい。

「いや、目的地は……あえてここにする。」

そう言つて指さした所はロンドン……イギリスの首都である。

その指先に全員が驚愕した。

「え……。」

「何だと！殺す気か!？」

ドノヴァンも流石に絶叫するが、それをアルフレッドは押さえ込む気がしなかった。

「旗印がないなら……持ってこればいい。」

「第一どうやって港にはいるつもりだ！」

アルフレッドは台を強く叩く。流石にこれは正気の沙汰だとは思えなかった。

「臨検されるが……敵と思わぬなら……そこから先はどうとでもなるう。そこで、イギリスの旗を手に入れ、それでオランダまでの海路を確保する。」

「流石に・・・できるでしょうか？」

「変に突破を狙うよりも・・・あえて偵察ををして、敵陣を見るのが、戦場の定跡よ。」

確かに・・・今まで数多くの困難を越えてきた信繁ではあるが・・・今回ばかりは無茶にもほどがある・・・ように見えた。ドノヴァンやアルフレッドは頭を抱える。今まで怖くて、ロンドンなんて上陸さえした事がない。

「本当に・・・できるのか？」

ドノヴァンはうめくように信繁を睨む。

「出来る出来ないではありません。やるか・・・やらないかです。」

ドノヴァンが頭を捻っても何の対策もないが・・・。

「それでロンドンを突破できるとして・・・ここはどうするつもりだ？」

そう言っただカールを指さす。

「ここは・・・ロンドンでごまかす以上・・・ここはあえて強行突破する。」

「追跡部隊は？」

「海上の奥まで引きつけて、撃沈する。それに旗印を変えれば海賊以外は襲って来まい。」

勝算は少ないものの、無いよりはましという意見でもある。まあさっきまでの絶望的な手法よりはましだが・・・。

「俺は認めん。船室にいるからな！」

そう言っつと、ドノヴァンは部屋をでてしまう。

「じゃあ・・・。」

信繁が更に考えようとするが、アルフレッドも立ち上がる。

「あの人なりに、しぶしぶ了解したと言う事だ。自分が責任取りたくないからな。」

「わかった。幹花・・・仕度を頼む。」

「了解しました。」

そう言っつと各自立ち上がり・・・ドノヴァンの部屋から出て行っ

た。

「でも……皆が納得する旗でない……。」

幹花、寛、信繁は歩きながら考えていた。

「ですな。」

「しかも……塗料はほとんどこの船には……。」

幹花が申し訳なさそうに信繁に告げる。塗料自身はなくても旗は作れる……だが……変にしみと思われればそれだけでも……。「わかった……俺が作っておくが……旗の布地はあるか？」

信繁はある決意を……固める。

「それは明日、白い布ぐらいは買いに行かせます。黒胡椒の件もありますし、でも塗料は……。」

寛は何となく……予想が付いた。

「筆は……まあいいか……手で。」

幹花はじつと信繁の手を見るが何をしたいのか見当が付かなかった。

「後食糧を積んで……4日後にでる。後……金目の物を少し用意しておいてくれ。諸侯子に必要なになる。」

「了解しました。」

そう言つと……幹花は船倉に歩いていった。寛と二人、船長室へ向かう。

「あれ……ですか？」

寛は少し早足になった信繁に追いつくように歩いていく。

「まあな……確かに持ってきた物資の中に塗料はない。」

船長室に足早にはいると寛の見ている前で上半身をはだける。

「でもどうやって……今度は塗料もないので、足りませんぞ。」

「布一枚ぐらいなら出せる。それに……。」

そう言つて、隠しだなを一つ開く。そこには小瓶一つ程度の赤い液体があった。

「鎧を染めるように自分専用につもってきておいたのだ。これを使う。」

大阪夏の陣で行った血の塗料……。それをここでも再現するというのだ。

「そうだ……。算……。頼んでいいか？」

「何でしょうか？」

「アルフレッドの所に行つて……。旗の法則について聞いてきてくれ。変な物を掲げれば勘違いされるからと言え、ある程度の資料を出すはずだ。」

「了解しました……。無理だけはなさらぬように。」
「そう言つと心配そうに船長室から……。算は去つていった。」

出航前の会議から四日目の日にはマストのてっぺんに赤い日の丸が掲げられていた。それを各船員達がじつと見つめる。

「これは？」

しまが不思議そうに旗を見つめる。赤い丸と白い布……。シミにも見えるが……。シンプルである。

「俺たちの旗！日の本である！」

信繁のその言葉に船員達がじつと旗を見つめる。

「昔……。家康公は！我がいたあの国の事を……。"日本の"の国と言つた！」

その言葉に船員達が……。オランダ人達を覗いて……。唾を飲んだ。

「そう言われてみれば我らの旗がないので……。これにしてみた。

この旗は我らにとつて……。大日如来の来光を……。天皇陛下の威光を……。東の果てである我が国を……。示す物だ！」

オランダ人は日本語で語られている内容をよく理解できぬまま、じつと旗を見つめる。

よく見ればこの旗……。1（連絡用の信号旗で用いられる数字を示す旗で1）に似てる。だが、その旗を見ると細かい部分が違つ。

「この旗は！今後の我らをお守りくださるだろう。」

「おおー！」

日本人の船員達が掛け声をあげる。後を追うように空気に合わせ、オランダ船員達も声を上げる。

「そんなもんか？」

しまが小声で旗を見つめる。

「元々・・・験担ぎなぞこんな物だ。それにあれは・・・。」
「ん？」

じつとマストの上に掲げられた旗をしまは見つめる。

「あいつの血だ。」

「え・・・。」

青海の言葉に隣の二人が固まる。

「お主・・・知っておったのか？」

算が驚いたように青海の顔を見つめる。

「旗を掲げる時に・・・血のにおいがしてな。それにしてもお主も・・・知っていたのか？」

「まあな。」

青海達がひそひそ話す中・・・何かもの悲しい顔で、しまは旗を見つめる。

「そんなにしても旗がなきゃいけないのか？」

「そうじゃない。通る為に必要な物だ。これがなければ・・・イギリス船をごまかせない。」

「イギリスせん？」

しまは不思議そうに頭を捻る。

「ほら・・・もう一ヶ月ほど前になるか・・・。戦った船。」

「ああ。あの船の国だよ。」

ひそひそ話していると・・・もう他の船員は出航準備を始めていた。

「お前達・・・。少し頼みたい事がある。」

「ん？なんだ？」

青海達が信繁の方を振り向く。

「お前達だけでも、一応戦闘準備をしておいてくれ？」

「はい？」

信繁が、船尾の船長室に向かいの、それについて三人は歩いていった。

「一応な。海賊地帯を抜けるまでは何時襲われるかわからない。しかも前聞いた話だと。」

「海賊が襲ってくる公算は高い。」

算の言葉に青海としまは緊張する。

「幹花殿は？」

「あれはあれで備えてあるそうだが。」

「じゃあ、俺は大砲室近くで出番を待とうとしよう。しま。」

「おう。」

「お前がしばらく見張り・・・頼んだ。」

そう言うと青海は離れて船室へ向かっていった。大砲室では一応砲撃の準備だけは・・・火薬が湿気ないように管理はされている。

「わかった。俺はまあ・・・いつでも出来るようにしてあるしな。」
そう言うと少し緊張した面持ちで、マストの方に走っていった。

一応一人、見張りはいるが・・・警戒を高める意味で、身軽な者は欲しい。

「私も久々に槍の出番ですな。」

「頼んだ。」

そう言うと算は船首に歩いていった。こうして、ロンドンに向けた出航は始まったのである。

「あれ・・・何ですかねえ。」

「ん？」

見張り台からヒゲモジヤの男が見つめる。

「何かある！」

「船には船・・・何ですがね。あの旗・・・なんかシミっばいんですよ。」

「見せてもらん！」

そう言うと双眼鏡をくろいコートを着た……船長が覗く。そこには少し大きめの船だが……確かに旗は白地に赤丸……。何の旗か……。よくわからない。

「あれは……。」

最近では護衛船が付く事も多く、海賊もそれほどではないが少なくなってきた。当然、海賊討伐も、イスパニアとイギリス双方が行ってはいるが……。お互い私掠船をつぶし合うだけで、こうした一般の海賊まで手が回っていないのが現状だ。だが……。海賊にしては旗が白い……。商業にはあつさりすぎている。何かの信号でもないよ……。でもまあ……。あの船自身が大きいから……。狙う価値はある……。どうも一隻で航行する船は最近少ないから逆に珍しい。ここを子供の遊び場か何かだと勘違いしているボンボンなら……。

「船長！」

その声の後ろを見ると、船員達が武器を構え、にやにやした顔をしている。最近獲物が少ないだけに……。これ以上の待ちは危険だ。「行くぞお！お前ら！あの船！頂くぞ！！」

それにあわせ、船員達の雄叫びが聞こえる。この海域に知られた海賊団”アスバルガー海賊団”の出陣である。

「信繁！左！後方に黒い帆の船が接近！」

後方から迫る船を見つけ、しまが叫び、見張り台に設置した警報用の銅鑼を鳴らす。

「旗は？」

信繁の声が響く。

「分かんない。黒に……。どくろの帆！」

その言葉に甲板でバツクギゃもんに興じていた船員達が立ち上がる。この反応……。海賊船か！

「かなり速え！」

その言葉に各員が武器を構える中、船室へつながる会談前に信繁

は走っていった。

「青海！左後方！水平発射！」

「了解！」

青海の言葉が聞こえると自身も着込んでいた陣羽織を脱ぎ、鎧装束のまま構える。

”うおおおおおおおおおおお！”

青海の怒号が響き、大砲の向きが変わる。この船の大砲は少しでも大砲の向きによる船の角度を押さえる為に、スライド可動式大砲棚を採用している。大砲の設置代のおしりの方に滑りやすくした可動台を設置して、ある程度の角度までなら曲げられるようになった。いる先日の戦いでも使われていた機能であるが、撃つ前に砲撃手全員で、角度の調整が必要な為、砲撃に時間がかかるのが欠点でもある。だが・・・青海と数人だけで乗っている人ごと、砲台の向きを変える。最初の一撃用に火薬をあらかじめ仕込んであり、湿気ないように管理はしてあった。

”撃てええええええ！”

その掛け声とともに大砲は即時に発射された。大砲は船の斜め後ろに向かって撃たれ、船は大きく傾くが、ここにも更に工夫がされている。衝撃を逃がすように柔らかい棟木を用いた台座で衝撃を軽減してある。これにより、振幅を抑え、可動台座の寿命のを伸ばす工夫がなされている。その買いもあってか初撃で・・・相手の甲板に数発がぶち当たる。

その衝撃で、船の足が止まって・・・船側自身は少し古いが、まだ直進をやめる気配はない。

「次弾！真横！水平近接準備！」

双眼鏡を構えた信繁の音が響く。それに合わせ、青海達の台座を動かす声が聞こえる。下の階の者達は特に力持ちを配置してあるのもこの為だ。

「てめえら！カルバリン砲だ！」

そう言つて甲板の大砲を構えようとするが……船員の動きが鈍い。まさか、あんな所から、大砲が飛ぶとは……！並の船ではない！ならなおさら！

「おめえら！しつかりしろ！」

声を船長が掛けるが……。各自、陰に隠れている！これでは砲撃できない。なら！

「帆を回せ！体当たりでそぎ落とすぞ！海戦の準備だ！接近戦なら大砲は使えねえ！」

その掛け声で船員達が側面に集結する。少し高い物の……。あれなら縄一本でいける！

「激突するぞ！」

その声にアスバルガー船長は近くの手すりに掴まる。いつもよりかなり大きな獲物。これに……。勝てるのか……。一抹の不安がよぎる。

「構えろ！」

その声とともに、船同士が激突し、船が大きく揺れる！

「後続部隊は！」

「無い！」

しまが縄を下りて、下に下りながら答える。その間に、信繁は船室への入り口に回り込む。

「戦闘準備！しめるぞ！」

「了解！任せた！」

青海の言葉を聞くと即座に入り口を封鎖する。また船室では各自武器を構え、下を見つめる。鉤縄が投げ込まれる。これで上がってくるつもりだ。信繁は手を挙げ、待機させる。今下手に手を出せば敵はしたから何かを持ち込む……。引きつける！

「おめえら！乗り込め！」

下にある敵の甲板から聞こえる声とともに、マストに上った海賊達の発砲が始まる……。だが……。水を入れる用の樽を構えた

男達の前に弾は弾かれる。当時の鉄砲では、水を入れる用の樽は早々貫通しなかった。算は手短に合ったモップを手荷物と、思いつきり相手に向けて投げつける。それはマストに上った男の頭に当たり、真つ逆さまに落ちていく。そして下の方ではかぎ爪の横にてがちらほら見えてくる。

「行くぞ！」

「おおー！」

その言葉とともに信繁は駆け出すと乗り出した海賊の頭を勢いつけてぶん殴る。各自、先陣を切った者は同じように、顔をぶん殴った。それとともに最初の船員達が、自身の船に落下し、背中を打ち付ける。その様子に、アルフレッドは驚いていた。あまりにも訓練された・・・軍隊でさえも見た事がない・・・規律のようなものを感じていた。そして下を見ると、落ちた兵士に驚いている者の、船長らしき、黒くなつて着古した軍服みたいなコートのパイレーツコートを着た・・・船長を思われる人物の掛け声が響く。

”あれ・・・女性か？どちらにしる、船員は彼女に従っているようだ。なら！”

信繁の考えが固まると、勢いをつけ甲板を走り・・・敵の鉤縄をたどり、一気に駆け下りる。それに合わせ、船員の一部は一揆にて機先に駆け下りる。只ひたすらに戦闘員ではない者の、オランダ船員達は呆然と見ているしかなかったのだ。

「あの・・・アスバルガー相手に！」

アスバルガー海賊団。ダカール周辺を根城にする海賊団の中でも1、2を争う巨大海賊団で、“雌豹”アスバルガー率いる艦船である。その戦闘力で、各国の制圧艦隊を返り討ちにした名称でもある。その異名は船乗りの間で広がっており、特に近接海戦などを得意とする海賊団である。また、船を集めている事も有名で、数多くの艦隊が船ごと奪われていった。特に“雌豹”アスバルガーはその武勇でも一目置かれているが・・・。

「おまえ！」

下りた信繁は手に持った太刀で、船長に向ける。

「なんだ！」

「一騎打ちを申し込む！」

そう言う間に後ろから襲ってきた船員の太刀をかわすとその流れで後ろの人間を一太刀に切り付ける。だが、船内は混乱状態であるが……！

「ふざけるな！やっちまえ！」

その掛け声に海賊達が信繁を取り囲む。各所で戦闘が行われている物の、信繁の周りでは……。

「どきなあ！」

その声とともに頭上をしまが通り過ぎていく。ロープにまたがり、すぎていったようだが。その後を船員達が追いかける。そのためか……少し人数が減っている。

「待てえ！」

「遅れ……おや……。」

幹花が信繁の側に人混みに紛れてくると……じっとアスバルガの姿を見つめる。

「こんな所でかわいらしい……。」

「な！て！てめえ！」

アスバルガーはその言葉に刀を振り上げるが、それをすんでかわし、少し距離を取る。

「てめえ！」

アスバルガーは声を上げる者の、今度は少し落ち着いていた。早々この初撃をかわせただけの人間……いや女性には出会った事が無かった。

「信繁様は……。」

「わかった。」

そう言うつと後ろを信繁は振り向く。そして幹花はじつと間合いを取って構える。刺さすがの幹花でもかわすが手元に入る前に入る一撃で十分致命傷になる。

「お前・・・来ないのか？」

アスバルガーの落ち着いた声が聞こえる。先程とは違い冷静だ。もし下手にこちらから斬りかければ、一気に懐に入れるだけの早さを・・・相手は持っている。

「それは・・・どうでしょうか・・・。」

お互い牽制し合うがここは戦場。後ろでは信繁が数人の船員達と斬り合っている。時間稼ぎも程々にしないと・・・。少しの居合いだ。。。お互いは動けな・・・。

「どおおっおおおおおお！」

遠くからの声にアスバルガーはすつと後ろに下がる。そこにちよつどしまが落ちてくる。

”どお・・・。”

板と体顔もいきりぶつかる鈍い音が二人の間に響く。その間に割ってはいるように幹花が一気に間を詰めるがそれを切つ先で県政・・・幹花の動きは止まった。

「流石に・・・！」

次の瞬間、持っていたサーベルを下に打ち下ろす。

「中々やるね。」

落ち着いた声で、しまがしゃべる。幹花が下を見ると、這いながらもしまが、足下を狙い一撃を加える所を無理矢理サーベルで押さえ込んでいる。だが、その力は凄く・・・。アスバルガーは少しづつ下に下げ、刃の中心に合わせる。

「ほんとに・・・腹が立つねえ。」

じつと下の子供を見つめる。その刃は太く・・・どう見ても力の加減一つ間違えば、このサーベルぐらいならへし折りそうな・・・。刃物である。どう見ても子供が持つ物ではないし、見た事もない。こんな所で身軽に飛び回る斧というのも聞かないが・・・。そう考えが頭によぎる一瞬に、幹花は胴体を預けるようにダイビングして肩を押さえ込む。肩から二の腕を押さえ、サーベルを触れないようにして体を封じる事で、刃物を封じる狙いだ、その勢いそのまま後

るを取る。アスバルガーも機転を利かせ、一瞬でサーベルを床に刺すと、後ろを取った幹花の襟首を掴み、前に投げつけようとするが、
・・そこを足を絡ませて抵抗する。

「本当に！」

「さすが！・・・ですね！」

幹花の声が漏れる、あまりの力に引つ張られるのを押さえるだけが手一杯である。

「お前！」

あまりの状況にしまは・・・呆然としてしまった。

「そこまでだ。」

信繁の声に全員の声が振り向く頃には、信繁達の船員達が、半数以上の海賊達を押さええている姿だった。声に合わせて、しまと幹花はさつとアスバルガーから離れる。その様子をじつとアスバルガーは見つめた。

「剣を取れ。」

「何をするつもりだ？」

「一騎打ちだ・・・船員達も納得しまい。」

アスバルガーはあえてサーベルを持って周囲を見渡す。自慢の海賊隊の一部は見合っている物の、押されており・・・相手が悪かったと言う事だ・・・。逃げるにも接近しすぎている。ここが潮時だ・・・。

「お前・・・女だからとか・・・馬鹿にしないのか？」

「ん？」

信繁は刀を構え、じつと船長を見つめる。取り押さえられた海賊達はじつと船長を見つめる。その喧嘩で一度も負けた事がない船長の姿を・・・。だが彼女自身半分諦めていた。先程の戦いで体力を奪われている上に、相手の構えに好きらしい隙はない。例えしばらく構えていれば負けるのはこちらだろう。そう・・・勘が告げる。

「馬鹿にするもクソも・・・お前。船長だろ。最後までけじめをつける・・・だろう。」

最後は相手の表情を見て、語彙が弱くはなるものの、じっと信繁は相手を見据えていた。

しばらく見つめた後・・・アスベルガーはサーベルを甲板に突き刺した。

「わかった。投降しよう・・・。」

今までつきあつた船員達には申し訳ないが・・・。

「だから・・・彼らだけでも・・・。」

しばらくじつと・・・軽く周囲を信繁は周囲を見渡す。

「お前・・・。」

「・・・。」

「一緒に来い。」

「・・・。」

簡単に言つと生け捕りで、どっかに連れて行く気だろうが・・・。

「付いてくるか？」

「船員達の無事さえ確認できれば。」

「・・・まあいい。わかった。行くぞ。」

「は・・・はい。」

そう言つと手を挙げ・・・近くにあつた鉤縄を伝い、信繁達は帰つて行く。その様子に唾然として・・・。船員達はお互いを見渡している。負傷者はあるが・・・死傷者らしい死傷者さえいない。

「お前ら・・・大丈夫か？」

「あ・・・はい・・・。何人かは海に落ちましたが・・・。」

落ち着いて見渡す。確か・・・あいつらを襲つたの俺たちだよな・・・。

「どうします？」

副船長が聞いてくる。こちらが聞きたいぐらいだ。上の方で少し話し声が聞こえる。

「とりあえず・・・船を少し離して待機。私が一人で行つてくる。」

「船長。」

副船長の慌てた声が聞こえるが・・・。こちらでも訳がわからない。

只……もう一度……決着はつける。

「どうなりました？」

アルフレッドは少し下を覗く、向こうの海賊達は何かつきものとれたように出航の準備を始める。

「とりあえずは付いてくる……と言っていた。」

「へ？」

「海賊気は目立つのでおろさせるが……。二隻あれば、少しは突破も楽になるだろ？」

信繁の平然と言い放つ事に驚いていた。相手はあのアスベルガー。いるだけでも異名で普通の海賊は素足で逃げ出す、あのアスベルガーである。ドノヴァンもじつとその船を見つめるしかなかった。あまりもあっさりした……。戦闘だったが……。

「何か……凄いな……お前……。」

流石のドノヴァンも腰を抜かしそうな顔で、信繁を見るめる。

「怪我はないか！」

「まあ……。少しは……。」

見渡すと少しは怪我人はいるが……船自身は体当たり一度のみと軽傷で済んでいる。

「おい……。」

青海が開けてもらった船室からはい出るように出てくる。

「どうなった？よく分かんなくてさ。」

「ああ。勝ったよ。まあ……賊相手に追いはぎはすまい。」

「確かに……でも……哀れだな。」

そう言っって青海は下を見つめる。少し船を話、停船している。

「おい。」

「ん？」

「誰か上がってくるぜ。」

そう言っってる位置に一人のコートを羽織った……アスベルガーが船に上がってくる。

「お前……。」

アスベルガーが周りを見渡す。さっきの少年と……幹花の他に
数人の幹部と、複数の男達がいる。

「一緒に来るとはどういう事だ？」

アスベルガーの雰囲気を押されて、アルフレッドが身構えるが・
・信繁は自然体のように刃物も抜かず・・じっと見つめる。

「一緒に来る。それだけだ。」

「準備がある。一度・・付いてきてくれ。」

「わかった。アルフレッド。それでいいな。」

「りよ……了解した。」

慌ててアルフレッドが頷く。念のために一週間ほど余分に食糧は
あるが……。

「お前……疑わないのか？」

不思議そうに信繁を見つめる。何時逃げられてもおかしくない。
アジトに行けばまだ味方がわんさかいる可能性だつてある。

「疑うばかりじゃ疲れちまう。だからといって、飲む条件で信じる
訳じゃあねえが……。あの時のあなたの目が出来る奴なら信用し
てもいい。」

信繁の言葉にアスベルガーはじっと見つめる。

「あなた……何者？」

「さあな。」

「……あたしの名は……フォン・ミレイユ・アスベルガー。ミ
レイユでいい。」

「じゃあ……ミレイユさん。よろしく。」

そう言つて信繁は手を出した。……。しばらく見つめた後、手
を強く握り返すが……答えた様子はない。

「じゃあ……頼んだ。」

「誰か乗せておいた方がいいんじゃないかねえのか？」

青海が一言加える。

「確かに。すまないな。」

「構わん。」

ミレイユは依然と答えるが実際はどきどきしていた。

「私が……。」

幹花が答えると、信繁は頷く。

「じゃあ、こいつが行くから後はよろしくな。」

「あ……あ……は……はい。」

あまりの急展開にミレイユ自身も呆然としてしまう。

「よろしくお願いします。」

そう言っただけで軽く礼をする……この女……。少し……違和感を覚える。さつきまで戦っていた相手だぞわたしは。

「よろしく……。」

軽く礼をすると、何もなかったようにロープを伝い、船に下りていく。何か高次元というか……世界の違う何かを見た気が……。私にはした。

「みんなには……ここで……。言いたい事がある。」

ミレイユは周囲を見渡していた。ここはアスベルガー海賊団のアジトである”十字船の島”奥にある、船の格納庫である。大きめの天然洞窟で、かなり大きい洞窟である。そこには手入れはされていない物の、5隻の戦艦がそこにはあった。

「私はある者に敗北した。」

彼女の前には百名を超える男達が整列し石の上に座っていた……。幾つかには女性が混ざってはいるが……。その全てがじつとつらそうに声を紡ぐ彼女の声をじつと聞いていた。

「そしてその男はどこともしれぬ……。海に……。付いてこいと言った。私は部下達の放免を願い……。受け入れられた。」

その言葉に全員が……。啞然とした。彼女の腕前に惚れ……。つきてきたような海賊団である。それが叶わぬなら……。どういう人間が……。

「私は……。ついて行くことと思うが……。お前達に聞こう。」

その言葉に意味がわかった数人が周囲を見渡す。

「付いてくる者があれば……。私と一緒に付いてこないか……。もう報酬をそんなに渡す事も出来ない。もしかしたら、陸地に下りたら最後……。捕まる、最後かもしれない。」

その言葉にじつとアスベルガーを皆が見つめる。

「もしかしたら、ついに行つた先で海軍に撃たれ……。落とされるやもしれない。それでもいいのなら……。私に付いてきてくれ。私は……。お前達を守る。」

その言葉が終わつた後にじつと周囲を見渡す。

「私は……。フラウジーナスで待つ。」

そう言つと、彼女は彼らに背を向けると、ボートに一人……。いや二人乗り込む。

「フラウジーナスって何？」

幹花が不思議そうに聞くなか、ミレイユは一人、船をこいでいく。五席並べられた船の中……。一隻だけあるひとときわ白い船にたどり着く。この船だけが幾つかある船の中でこの船だけが接岸されておらず、帆も白く美しい。

「この船さ。この船には手をつける事はないと思つたんだがねえ。」

「と言つと？」

「こいつはある船乗りから譲つてもらつた思い出の一隻さ。」

「へえ。」

後ろが騒がしくなつたので後ろを見るとかなりの数の移動ボートがあとを着いてくる。

「お前ら……。」

「親方！どうせ洗うなら！俺たちもついて行きやす。死んでも……。一緒です！」

「お前ら……！！！」

ミレイユはその時、部下の前で初めて泣いた。

「親方……。」

「お前ら！出航準備だ！外に船を待たせてある！後の船は……。」

「ここに置いておいてください。」

幹花の声に部下達が振り向く。

「どうせ・・・もう一度ここに立ち寄る事になりますから。」

「どういう事だい？」

流石のミレイユも少し怒りながら・・・。幹花を見つめる。

「これだけの物・・・捨てるには惜しゅうございます。」

「あなた・・・。」

その言葉に幹花を見つめる。その瞳はあくまで冷静だった。

「只・・・戻るには数ヶ月はかかるでしょう。ですから・・・各々・

・準備なさいませ。私は待ちますから。」

「わ・・・わかった。」

そう言つと幾つかの船は引き上げ・・・荷物を取りに戻つていった。

「あんたら・・・何者だい？本当に。」

「私ですか？こう見えても忍者ですから。ある程度は嗜ませてもらつています。」

「忍び？忍者？ひそむ？」

不思議そうな顔をしてミレイユは幹花を見つめる。その間にも部下達は船に上つていく。

「分かんないけど・・・そう言う物だと・・・思つておくよ。」

「それでお願ひします。」

「でもあんたら・・・これからどこに行くんだよ。」

「ん・・・ああ・・・言つてませんでしたね。ロンドンですよ。」

「え・・・ア・・・ロンドン！？」

その驚きに、上っている最中の船員が思わずミレイユの方を振り向く。

「ロンドンつてあなた・・・何しに行くんだい？」

「旗取り・・・ですかね？」

「旗取り？国でも潰しに行くのかい？ふふふ。」

ミレイユは思わず笑つてしまう。

「まあ……そうではないんですけど……。そう言えば……。海賊でしたよね。倒した相手の旗とか……。集めてます?」

それに真剣に聞き返す幹花に思わず……。じつと幹花を見つめ返す。

「いや……。国家とかそう言う事が嫌いだね。すぐに捨てたよ。あんなのあつても嬉しくない。」

「ですか……。」

「じゃあ……。あんたら本当に旗だけを求めて……。」

「ま……。色々兼用していますから……。結局は行きますけどね。」

「そう……。なのか?……。もしかしてあんたら?」

「はい?」

「イギリスの船倒してここまで来たオランダ船?にしちゃあ……

あの旗は……。」

「正確に言えば……。色々違いますけど……。でも……。おおむ

ねは合っていますね……。」

「あんたら……。何者?」

「そこまで気になるなら付いてきてください。そうすればきっと……

・わかりますよ。」

……。

「ほんと……。何かおもしろいのにあたっちゃったな。でも……。そんな奴らがいるだけでもって……。」

周囲を見渡すともう全員が盛り込んだ新しく、ほほえましい顔で、幹花が……。微笑んで見つめている。

「皆さんお待ちですよ。」

「わ……。わかったよ。」

それが……。ミレイユ最愛……。最強の船”死神の夢”フラウ・ジーナス号の初出航であった。

第二十節 嵐のロンドンへ（後書き）

これで、航海編は終了します。次回からはイギリスオランダ編になります。又遅れた事をここにお詫び致します。

外伝2・1 ソラ（前書き）

平戸の商館に呼び出された半蔵の目の前には・・・幹花よって逃がされた少年”ソラ”の姿があった・・・。

外伝2 - 1 ソラ

外伝2 - 1 ソラ

「この子です。」

半分休暇をむさぼる・・・いや、報告書を届けつつ観光と俳句と
うまい物巡りと、地酒探訪を楽しむ・・・いや、任務を忠実にこな
す半蔵の元にある密使が舞い込んできた。急ぎの用と来てみれば・
・そこにはインドから来たという少年がじつと部屋の隅に縮こまっ
ていた。半蔵は・・・じつと部下を見つめる。どうなっているのか
知らないが・・・。
少年の目は怯えきっていた。

” お前・・・半蔵か？ ”

” そうだ。 ”

半蔵は片言ながら答えてみせる。少年は半蔵の足下にじつとしが
みつく。

” 幹花が言っていた・・・。あんたなら信頼できる。 ”

” 幹花・・・か・・・。 ”

半蔵が、幼い頃から手を掛けてきたほぼ唯一の弟子であり、その
全てを吸収してきた才女でもある。今は信頼できる信繁の元に送り
込み、これからの未来を・・・託していた。

だが・・・このこは？

” 幹花は言っていた。お前なら信頼できる。・・・これ。 ”

そう言っただけで大事そうに抱えていた二つの本と、一つの書状を半蔵
に手渡す。

「・・・流石にこれは・・・。」

「今まで何回か手放すように命じてみたのですが。誰が言おうとも
聞こうともしない上に、ヤン殿が止めるので・・・。」

ヤンとは現在位置である平戸のオランダ商館主であるヤンである。

どうも彼の親友にして日本との交渉を取り持つてくれた男の息子らしく……どうも、ヤン自身にもなつかない為……幹花の持つてきた書類が手に入らないでいた。そのため、呼ばれていた本人である半蔵がここに呼ばれたわけだ。

”少年、どこで幹花と会った？”

”アユタヤ。”

「書類を解析に回せ。鳥居殿とかの対外組が指針を決めよう。」

そう言うつと、書類を手に取り軽く見る。そこにはアユタヤに関して一ヶ月掛けて調べられた様々な情報が書かれた書面と、セイロン島に関する簡単な記述、国家間関係相関図などが載っている。これらは今後の日本の海洋戦術に置いてかなり有益な情報である。これらを元に江戸城の重心一同が会議を行うのである。

「は。」

そう言うつと、部下が二つの書類を持つては知つて外に出て行つた。これから陸路で、江戸に運ぶ……長い旅になりそうだが……。そう思いつつ、近くに置かれた椅子に座り、書面を見つめる。少し眺めの挨拶が書かれ、気候に触れながらも純粹に風流な手紙であるが……全文を載せるのは話が長いのでかいつまんで記載する。

「半蔵様。この少年は、我らの船を救つてくれた恩人でもあるが……この先危険地帯を乗り越えていく為……この子の安全の為にこの子の事をお願いします。」

と書かれていた。そのほかは彼女が聞き出したというソラの生い立ちについて書かれていた。

「……おぬし……ソラか。」

”うん。”

「そうだな。幹花からよろしくとか言われると……。」

”日本語はしゃべれるか？”

”少し……教わつた。ヤンからも少し……。”

そろそろと、半蔵と向かい合う少し大きめの椅子によじ登ると半蔵と向かい合うように座る。

「半蔵・・・俺・・・。」

ソラの言葉を聞き流して半蔵はじつと考えていた。今の状況はそれほど外国人に対して芳しい状況ではないからだ。大阪の役が終わってその内情が・・・半蔵が書いた報告書で明らかになるにつれ、外国人と言っただけで差別する者が多くなってきた。無論、内情は大阪の役に参加した兵士達から・・・事実だと伝わり、それが拍車を掛け、昔はキリシタン大名でも、今では弾圧側という大名さえ出てきたという微妙な情勢でもあった。江戸としては、貿易の利益は幕府の資金を支える重要な・・・いや、多くの日本の利益を支える重要な科目である。だが・・・先日の大阪の役以来、貿易・・・いや、外国船に対する危険が散々訴えられてきた。だからこそ、排斥しようとする、東北勢やそれを無視して自国だけの利益の為に貿易に走ろうとする西国など、緊張には事欠かなかった。そのため、大名の一部は江戸城に登城し、現在でも口論が行われている最中である。特に現在無害だと思われる国の商館は、襲撃されたら戦争に発展しかねない為、こっそりと配置した忍者達で周りを囲んで警護している。只、この状況は一時的な物で、いつかはちゃんとした配慮をしなくてはならない。この状況があったこそ真田信繁には、速く探索の旅に出したのである。報告結果次第では態度が変わるからである。だが、この報告書の中に、イギリス、オランダ、イスパニアに関する話・・・いや本国の位置や情勢に関する情報はない。それが・・・半蔵に焦りを浮かべさせる。いくら、忍者で囲んで暴徒を防ぐとはいえ、軍隊までは防げない。

「安心しろ。見捨てはしない。」

「見・・・捨て・・・？」

「助けてやると言う事だ。」

「わかった。」

ソラは明るく頷いた。少年はにこにこ見つめる・・・何か息子の事が思い浮かんでしまう。今、息子は江戸城で拙者の替わりに半蔵役をこなしている。いや、二代目当主の座だろう。私には少し

つらいからな……。そんな息子の幼い頃を思い出す。

「……そうだな……。」

ふと幹花の書面を見つめる。

「もしかしたら日本とオランダとの架け橋になるかもしれないから……日本の事をおしえてはいかがでしょうか。」

とも書かれていた。さすがはおなごだ……。あそこまで厳しくしても……。いや冷徹になつてすらも……。優しさがある。書面を見ると……。最後には姉と妹への手紙がある。幹花は三人姉妹の次女である。三人の由来を聞くと涙が出そうだが……。彼はそれを全て知っている為に……。少し不憫を感じる。その書面を懐に入れると、少し考えてみる。ちょうど現在報告書届けの旅は部下に任せられた物のちよつと越後で地酒巡りをしていた最中で引き戻されたが……。

「そうだな。お前。」

「ソラだ。」

「……わかった。ソラ。」

「なに？」

「せつかくだ。一緒に旅でもするか？」

「どこへ？」

「いろんな所へだ。」

「え？」

「お前以外にもこの手紙……。」

そう言つて先程しまった手紙を半蔵は取り出した。そこには三通の手紙がある。

「こいつは幹花の姉や妹への手紙だ。一緒に届けに行くか？」

「お……え……おう。」

よくわからないままにソラは頷いた。それを見た半蔵は手を叩く。その音を聞いた近くの者が走ってくる。

「すまないが、この子の旅支度も頼む。服だけはここでないとな。」

「”も”ですか？」

「・・・”も”だ。」

「半蔵様・・・。奥様や、息子ど・・・いや頭領殿がずっと帰りを待ちわびていますぞ。せつかくですから、速くお帰りになれば。」

流石の部下でも口答えはする。当時の忍者は上司の命令に対して何も反論しないイメージがあるが実際は鉄の掟はあってもある程度の軽口は、どの部下でも許された。只、殿の眼前などの公式の場では許されない・・・だけである。

「と言つてもな・・・。まあ・・・最後には寄るさ。」

「ですが・・・頭領殿は日々、半蔵様がいればとばかり・・・。」

半蔵はじつと考えるが、どうも旅をしたりして動いているのが性に合うのか・・・。城の中で書面と向かい合うのは・・・どうも好きではない。官位を断つたのも、こうして手紙で指示するだけで、細かいのを部下達に任せるのも・・・こうしてフラフラするのが好きだからと言つ事もある。これは・・・徳川家康も一緒に、また影の見回り番などの民を傷つける者や盗賊の情報などを集めたりする”見廻り衆”制度の実施案をまとめる為の大綱を築いたのが半蔵でもある。よく家康様と一緒に視察の振りして京都に行って天ぷらとか、酒や菓子などを食べたりのものだ。だからと言つわけでもないが・・・。そう言う生活の方が性に合っていた。だからかもしれないが・・・色々思い入れは深い。

「それは修行が足りないだけよ。それに・・・そうだな・・・あいつには後で夜とだけ伝えてくれ。」

「・・・は。わかりました。」

そう頷くと、元の部屋に戻っていった。

「おじさん・・・。」

「おじさんという言葉は知っているのか。」

軽く半蔵は笑う。

「ぼくは・・・どう?」

「そうだな。大丈夫だ。」

そう言つと半蔵は立ち上がり、頭をくしゃくしゃする。

「大丈夫？」

そう聞くソラの不安な顔を見せて・・・幹花が言っていた”日本でもっとも偉い人”の顔を見つめていた。これが、半蔵とソラの出会いでもあった。

「でだ。」

「は。」

半蔵は旅支度を確認する。昔みたいに重装備はしていなく、軽装にしていた。と言うのも人里を巡る旅であり、信繁達との旅みtainな山野を巡る旅ではない。美井には悪い事をしたが・・・本来、子供と二人なら、人里とか移動を巡る旅で行くのが筋でもある。

「君も大丈夫かい？」

そう言つて日本人の通訳の男はソラの頭をなでる。当時、言語が出来る人間を急務で欲していた幕府は、武士にオランダ言を習わせる為、数多くの江戸でオランダ語を学ばせた人間を平戸に送り込んでいた。今後の展開次第では必要とされる人間だからだ。

「うん。」

流石に”ハイ”と”いいえ”ぐらいは幹花もソラにおしえてくれた。これは普通に助かる。

「拙者達はとりあえず、陸路から京を目指す。」

先日早馬で、幹花の書類を持った人間は行かせてある。だが、その馬の背に子供を乗せれば事故が怖い。そのため、徒歩で行く事になっている。そのついでに様々な視察も兼ねる予定であるが・・・本音を言えば、西日本の食の堪能をしたいというのが本音である。でもまあ・・・最初は太宰府天満宮か・・・？

「おじさん。」

ソラが握った手をそのままに半蔵を見上げる。

「なんだ。」

「どこ行く？」

「そつだな・・・。」

そう言つと半蔵はしゃがみ込む。あんまり周りに悟られたくはないが・・・だからといって嘘をつくのも嫌いだ。

「最初は福岡に行くぞ。近いからな。そこに行つてから、街道に乗つて遊びに行こう。」

その言葉にソラは明るく頷くが・・・周囲の人間は気が気ではない。当然である。確かに頭領が半蔵様の仕事をかたずけているとは言え・・・。その才覚は半蔵に及ぶ事はないと・・・皆は思っている。ある意味実力社会であるこの忍びの世界での実力者はそれだけで抑止力になる存在である。その代表格がこの”服部半蔵”である。その異名、実力ともに現在知られる伝説の中でも特別の者であるが・・・それをまだこのこは知らないだろう。見送る全ての人間は見ていた。

”せつかくだから、各地を見て回りなさい。”

”はい。”

”父さんからの連絡があればすぐにでも伝える。だから安心して行つてきなさい。”

”わかった。ヤンおじさん。”

商館のオランダ人(25、6名)達とソラが楽しそうに離している。オランダ人の間でも、この半蔵と言う男の名前は流石に知られているだけに、不安はしていない。

「後・・・何かあつたら頼む。」

「は。」

その言葉に、後の配下達が一礼する。こうして半蔵とソラの西日本旅が始まったのであった。

外伝2・1 ソラ（後書き）

少しリハビリもかねてこちらを書き進めて行く予定です。よろしく
お願いします。

外伝 2 - 2 ソラと半蔵と（前書き）

ソラと旅に出た半蔵は最所大宰府天満宮に向かう。そこでふとした話で・・・

外伝2-2 ソラと半蔵と

外伝2-2 ソラと半蔵と

「でもまあ・・・町本当に広いね。」

感心したように、境内を歩くソラは団子を頬張りながら歩いていた。

「ここはな・・・神様がいる・・・と言うよりも、謂われは古い。」
半蔵も、一緒に団子を頬張っていた。団子と言っても当時の団子は、くず米や乾いた飯米を砕いて作る粗めの米粉から作る・・・粘りけが多めのみたらし団子や味噌団子が多い。当時は竹の皮に包むスタイルや木の串に刺した場合が多いが、木工細工が上手い地域では木の串が多かった。

「でもほんと・・・これ・・・美味しいね。」

ソラは感心したように何回も噛んでいた。この境内では木の串に刺すタイプであり、半蔵も木の枝を大事そうに舐めていた。

「このタレは味噌ダレか・・・中々にコクがある。」

感心したように串を美味そうに舐めている半蔵ではある。

「でもここ・・・手を合わせたけど何の建物なの？」

ソラは不思議そうに漢字の固まりを見つめる。そこには「太宰府天満宮」と書かれているがその言葉の意味さえわからなかった。ここ太宰府があるこの地域までは近く、歩いて5時間ほどの道の為、比較的近い。

「この建物か・・・ある神様・・・と言うかある神様になった人間を祀っているんだ。」

「神様？ここはキリスト教・・・。」

「この国はな・・・。」

そう言って半蔵は後ろを振り返り、ソラを見つめる。ソラはじつと・・・半蔵を見つめている。

「八百万の神の国という記述がある。」

「やおろず?」

「8000000さ。」

「は・・・ぴやくまん!」

驚いた顔でソラは大声を上げる。それに驚いて半蔵は口を塞ぐと、抱きかかえ、境内を走って下りていった。

「お前!驚きすぎだ!」

「んが・・・んん・・・んはぁ・・・だってそんなにいるの?」

無理矢理駆け下りている半蔵の手をほどくと、無理矢理上を向く。ソラの頬に風が当たる。太めの前を見ると・・・馬より速い速度・・・に感じられるほどの早さで、一気に坂を駆け下りている。

「え・・・あ・・・。」

「せつかくだ・・・もう少し黙ってる。一気に駆け下りる。」

「うん。」

そう言う口を閉じ、じっと前を見る。今まで味わった事もない早さで、半蔵からしたら、駆け下りる早さに更に駆け足を加えた早さで走っていった。その速さだけでもソラにとって初めてでもあった。しばらく駆けていくと周囲から建物が少なくなり、郊外まで走ってこられた。そのあたりで斜面も終わった為、その歩みを止め、少年を地面におろした。

「ほんと・・・凄いね。」

「坂道で走っただけだ。それほどの早さはない。」

半蔵は落ち着いて周りを見渡すと、周囲は人影が・・・いないわけではないが・・・少ない。

「そうなの?」

「まあ・・・続きでも行くか。そうだな・・・。」

半蔵は少し呼吸を整えると、ゆっくりと街道まで歩き始める。

「でもさ・・・八百万か・・・いっぱいいるなら戦争もそんなにあるの?」

ソラが不思議そうに半蔵の顔を見つめる。

「どうして・・・神様がいるなら戦争が起こるんだい？」

「だってさ。神様って居るかいないかだけでも戦争が起こるんですよ。そんなのが八百万もいたら・・・。」

「そうだな・・・。」

半蔵は考えながら歩いていく。それを見たソラが少し駆け足で真横に着く。

「そこに建物あるだろ？」

「うん。」

そう言っ指さしたのはちょうどあった一件の家だった。

「あそこの竈にも神様は祀られている。」

「え・・・。」

「それとは違う神様が・・・その森にもいる。」

「へ・・・。」

「戦争しているように見えるか？」

実際はいくつもの事実は知っているものの半蔵は隠しながら指さしてみる。

「いや・・・。」

驚いてソラが周囲を見つめるが・・・そこに変わった気配はなかった。

「と言うように、本当はどれくらい居るのかわかっては居ない。」

「そうなの？」

「大体それぐらいいっぱい居るんじゃないのかという・・・あやだ。」

「

「そうなんだ。」

ソラは少しほっとしたような残念そうな顔をして半蔵について・・・少し早足で、側を維持する。

「でもどうして・・・戦争なんて起こるとおもったんだ？」

「ボクの父さんと母さんは、戦争で・・・しんだ。」

「え・・・。」

半蔵が見たあの手紙では父親は生きていたはずだ。

「お前の父さんは生きている……。」

「うん。パパはあの人だよ。でも……あの方はボクを育ててくれた人だ。あの人はいい人だ。」

その時、その言葉だけでも何となく中身を悟ってしまう。あのアルフレッドという男の養子か……。

「少し話してくれないか？おじさんにもわかるように。」

「うん。」

そう言うとソラは近くの木により掛かって座った。それに合わせ、半蔵も木の袂に寄りかかった。

「ボクは……ポルトガルという国で生まれた……。」

ポルトガル。半蔵が知る限り、イスパニアと同じ所に属した国で、暖かいと聞いた事があるが。ある時を境にぱたつと来る者がいなくなってしまうた。

「父さんと母さんはユダヤ人で、いい人だった。自分が働いた金を貧しい人に貸して……いた。」

「ああ。」

「でもある日……。村が飢饉になると、帰せないと言ってきた。

しばらくすると、村人達が父さんを襲うようになった。だから……リスボンまで逃げた。」

「ああ。」

「いや……。逃げようとした……。だけどその夜。飢饉に耐えられなくなったカトリックの連中が村を焼きはらった。」

「かとりつく？」

半蔵は聞き慣れない言葉に首をかしげる。キリスト教は聞いても……そう言えば按針殿も似たような言葉を……。

「うん。神様はいて……。絶対で……。神様の為に全てを捧げると言ってきている連中。」

その言葉に半蔵は絶句してしまう。そんな神様なんているのか？

「プロテスタントだったから村は襲撃されて……。」

「プロテスタント？」

「うん。基本的に神様は誰でも愛しているとか言っている連中。」

「・・・半蔵はふと幹花の報告書を思い出す。キリスト教には二通りの解釈があり、その解釈でももめているとか・・・。」

「僕たちは・・・プロテスタントで・・・カトリックからすれば・・・邪悪で・・・人間じゃないとか言ってる村は・・・村は・・・。」

当時のカトリックとプロテスタントは新教徒、教徒と呼ばれた者でルターの唱えた宗教改革で考え方が変わり、神に忠実であれば、教会に従う必要がないというのがプロテスタントの考え方で、一部の国や商人の間に広がった考え方で、カトリックは神に全てを任せれば、死後幸せになるという考え方である。だが、プロテスタントの多くは寄進を嫌う為に、カトリックからすれば、収益弱体・・・又は教会寄進主義の崩壊を招く為、プロテスタントの考え方自身を邪教として扱っていた。無論・・・信じる神は一緒であっても・・・。そのため、この頃の国家はプロテスタントを信じる国家と、カトリックを信じる国家ごとに戦争が行われ、公式非公式様々な闘争が繰り広げられていた。

「差別・・・。」

半蔵がつい口から漏らしてしまう。

「父さんは・・・金貸しと言う事で・・・真っ先に刺され・・・殺された。母さんも・・・連れてかれて後で殺された。」

当時のユダヤ人というのは各地に散らばる商人の一族で、数多くの詳細があり、生まれすぎてすぐに数字を教えるなどのアラブ的な考えも一部で持っていた。またユダヤ数学という考え方もあり、その数学能力は伝来のみであったものの、現代数学もかくやと言うほどの数学能力を持っていた。そのため、当時の計算のほとんどが井勘定だった頃に、正確な計算を元に商業をしようというだけで、商業的なセンスが無くとも、商売で食っていけるだけの学があった。その才能の差を嫉妬する者が多いのも事実である。また盗賊とかの襲撃に置いて、金貸しである確率や金銭の蓄えが多いであろうと思われるユダヤ一族は真っ先に狙われる対象であった。

「最後に父さんは・・・リスボンにいる兄に託して・・・それからあの人は父さんになった。」

半蔵は何となくソラが日本に連れてこられた本当の理由がわかった気がした。アルフレッドにとって大切な子をもう・・・カトリックとか、プロテスタントがと言う戦争から失いたくなかったのだ。幹花から、国の事情は聞いていたのだろう。だからか・・・。

「それから・・・しばらくして僕たちはオランダに渡って・・・船に乗って・・・アユタヤ周辺で貿易で、ずっと船に乗っていた。」

当時のオランダは新興国家で、フランスやイスパニアとの領土戦争を行っている中で、安定した新規国家で、そこに逃げるユダヤ人や犯罪者も多く、荒っぽい気質ではあるものの、大航海時代での貿易で安定した収入を上げている。

「僕たちがリスボンから逃げた数時間後、リスボンは火に包まれた。」

「・・・。」

あまりに重たい話に口が開けない半蔵だった。

「そして僕たちはアムステルダムに着き、そこで仕事をえた父さんと逃げ出した。」

「そうか・・・すまなかつたな。」

半蔵はすまなそうに謝った。

「この国にはそんな神様は・・・いないと思う。」

「それならいいんだけど。」

ソラは不安そうに半蔵を見つめる。頬にはいつの間にか涙が流れていた。

「大丈夫だ。この国にはいない。」

半蔵は自分に言い聞かせるように言っただけで聞かせた。

「そう・・・。」

そう言つと、ソラはがくりと肩を落としてしまった。

「そうだな・・・。」

あれからソラが意識を失ってしまい、背負ったままか移動を歩くが……結局夜に間に合わず、野営する羽目になった。

「ごめん。」

ソラは軽く頭を下げる。あれからしばらくして目が覚めたが……背負われたままここまで来てしまった。現在半蔵曰く山の中程らしい。

「いや……いい。拙者が悪い。お主に悪い事をした。」

「でも……。」

「そうだな。」

もう今は降ろして、近くの森の中で火を焚いて……向かい合っていた。

「拙者の話もしょうか。」

「うん。」

ちょうど夜も深くなってきたおり、誰の気配も感じない……。

「拙者はな……。」

「お主と一緒にのように戦乱の中で生きておった。」

「せんらん？」

「俺の住んでいた所は……それはもう……よく山賊に襲われた。」

「

「……。」

暗闇の中、小さなたき火に映し出される半蔵は少し寂しい顔をしていた。

「あまりによく蹂躪されるから……これが運命だと思っていた。」

「お前の所みたく……神様もこの世界にいないと思っていた。」

「……。」

「でもな……誰かがきつと……いや……自分がきつと救ってやる。」

「……！」

その顔は一瞬父親が重なったように……ソラには見えた。

「だから……俺は……拙者は……強くなろうと決心した。確

かに俺は・・・家康様に拾われた。」

「・・・。」

「だが・・・だからこそ・・・。おれは・・・強くなろうとした。」

「・・・。」

「だから。お前も・・・つらい記憶があるなら・・・。強くなれ。」

落ち着いた、この闇と同じような清見るとした口調ながらもしつかりした声に・・・この人の強さをソラは感じた。幾つかの言語が聞き取れないのは・・・あつたかもしれないが・・・。

「うん。」

ソラは頷いた。雰囲気だけでも重要な・・・自分に対する話だとわかったから。

「そうだな・・・明日からはどこに・・・そうだな・・・。お主、ポルトガルの首都リスボンに行った事があるのであろう。」

「うん。」

ソラは頷いた。

「そうだな・・・この国の都に行ってみようか。」

「みやこ？」

「都だ。きれいで華やかで・・・美しい。」

「へえ。そう言えば・・・。」

「なんだ？」

「・・・昔ミリアと日本の玉で遊んだんだ。」

「それで？」

半蔵は近くの枝を火にくべて、じつと空を見つめる。夜も深く木々の奥に這うように火の光が木を伝い、木々の色をはつきりさせている。そこから見上げる先に星空が見える。人の気配も・・・獣の気配も夜のとばりに隠されたような・・・静かさの中、ソラの声は響いていた。

「その玉、しまが京で買ったとか言っていたけど・・・そこが京？」

「まあな。しまか・・・。」

「しってるの？」

ソラはじつと半蔵を見つめる。その瞳はたき火越しに見てもきらきらしているように見えた。

「まあな。あいつとは半年ぐらい一緒にいたんだ。」

「そうなの？」

「美井とも一緒にな。」

「そうなんだ。」

「しまはやんちゃだったが・・・筋はよかった。」

「え？」

「しまはあれで落ち着いて行動できれば拙者を抜けるやも・・・しれんな。」

「どういう関係だったの？」

「そうだな・・・。しまの武術や忍術の師というか・・・。基本的な所で足りない所は教えたな。」

「って事はダー？」

「当時に先生という表現は一部の仏教だけであり、師という言い方しか存在していなかった。」

「師かどうかはわからないが・・・教えはしたな。まあ・・・幹花にとつてはもしかもしれんがな。」

「・・・！」

ソラは幹花の事は知っていた。あの人の師匠・・・。きっと凄い人に違いない。

「でもまあ・・・そうこう言わずともどうしたいのかは・・・。」

「だー！」

「？」

「ダー、半蔵。」

ソラのと突然の言葉に半蔵はとまどう中、たき火を回り込み、ソラは腕を握ってくる。

「ダーは・・・ってそういえば・・・。」

「日本語でダーって？」

ソラの不思議そうな顔を半蔵は見下ろすが思い当たる言葉は中々

無い。

「拙者もよくわからないが……。」

「教える……人……。だよ。」

「なら……。日本では師……。か、師匠だ。」

「じゃ、じゃあ……。師匠、半蔵。」

「……。何だ、急に。」

「僕に技を教えてください。」

「……。」

確かに一緒にいるだけにこれはあり得ると思ったが……。でも。

……安直だ。

「僕は……。強くなりたい。」

「どうしてだ？」

「僕は……。今まで……。守られてきた。」

「そうか？」

半蔵は軽く頷くがその気持ちはわかるつもりだ。追われ続けた人生……。あまりにも切ないが……。

「だからこれはいい時だと……。思う。」

「……。」

半蔵にとつて力もタイミングも知ってはいるが……。こういう人間に技を教えるのは……。確かに強くなるが……。危うさも秘めている。半蔵はじつとソラの瞳を見つめた。

「まあ……。それはもう少し考えさせてもらおう。」

「どうして？」

驚いたように半蔵を見つめる。

「拙者はこう見えても、数多くの力を持ったものの末路を見ている。お前がそれらに耐えられるとは思えない。だから教えられない。」

「そんなの！」

「お主が……。力を持てば村を襲ったカトリックとか言う連中と同じになるやもしれん。」

「そんなの成る筈が……。」

「無いとは言い切れん。何時の世も……。力とはそう言う物だ。武器も。」

そう言つて半蔵は腰に下げた刀をわざと抜いて、ソラに見せる。「幹花が武器を使っている所を見たか？」

「……いや。」

ソラは首を横に振る。

「あいつは……人を傷つけるのが嫌いだった。だから……あいつは武器を滅多に抜かない。」

「え……。」

そう言えば幹花の腰に短刀は付いていたが抜いた所を……短いかからかもしれないが見た事がなかった。その間に荒事は幾つかあったが……一度もなかった。

「それがあいつなりの覚悟だと俺は思っている。」

「……。」

その言葉にじつとソラは半蔵を見上げる。少し赤く見えるのは火の光で照らされているからだろうか。それでもその瞳は暗く……じつと先を見据えている。

「お前にそんな……覚悟はあるか？」

そう言つと半蔵は刀に指を当てる。少しすると血がたらつと垂れてくる。

「お主に血を……相手を傷つける覚悟はあるか？」

その指をじつとソラに見せつける。その様子にソラは頭を……首を背ける。

「なら……今しばらくは待った方がいい。本当に覚悟が出来たら、もう一度言つとよい。覚悟が確認できたなら……その時は教えてやる。」

「う……あ……はい。」

そう頷く頃には火が弱く、闇が周囲を取り囲んでいた。

「ま……寝るか。」

半蔵は棒で灰をかぶせると……火が消え、周囲を一気に闇が取

り囲んだ。

「おやすみ。」

「おやすみ。」

半蔵の声に合わせ、ソラのつぶやきが聞こえる。それとともにお互い目を閉じたのだった。

次の日の中頃・・・半蔵達は漁村が見える海岸近くまで来ていた。「そう言えばどうしてここに?」「ん?」

半蔵は不思議そうに聞いてくるソラ顔を見つめようとする。だが、流石に漁村とかで金髪ではあまりにも目立つ為、笠をかぶせてある。太宰府天満宮でもかぶせてあったが、駆け下りているの気がない所でははずしていた。そのため今のところ顔を伺い知る事はできなかった。

「海を渡るのさ。」

「船で?」

「船で。」

半蔵はすたすたと坂を下りていくのに合わせて、ソラも下りていく。

「そうだな・・・。お主・・・元は商家だろう。」

「あ・・・まあ・・・。」

「金の渡し方とかは・・・聞いた事は?」

「いや。」

「ならそのぐらいは覚えておいて損はない。まずはだ。」

そう言う間に半蔵達は漁村の入り口にさしかかっていた。ごく普通の小さい漁村で、船も小さい。このあたりは瀬戸内あたりを根城にする村上水軍などが有名だが、それ以外にも数多くの水軍がいたが、それらは一度幕府軍の間で統一されて以来、幕府によって管理されていた。現在ではその多くは対海外戦力として各地に配属されていた。弱体化されていたという記述も多いが、実際の所この頃は

重宝されていた。実際舵取り次第では彼らは重要な戦力たり得たからだ。そのため拠点地であるこのあたりで、漁民を襲撃する事はなかった。

「まずは覚えておいておかなくてはならないのは……。」

「うん。」

「上げるのは少し多めの金額と言う事だ。まずはこのあたりの建物とかから規模を探る。」

「うん。」

周囲を見渡すが……それほど立派な木を使った建物は見あたらない。規模としては小程度か……。

「それから予想できる一食の値段に色を少し付けたくらいが適度だとされている。」

「いろ？」

「色というのは少しばかり足しておく事だ。」

そう言うど持っていた金を取り出す。確かに団子やで出す量の1・5倍くらいに見える。

「それが？」

「大体このあたりである程度の融通が利く金額だ。これ以下だと、断られるか……例え額いても足りないかと襲われてしまい、これ以上だともっと持っていると思つて襲われたり要らぬ物まで買わされる。そういう境目だ。」

「要求されたら？」

「ま……それは見ていればわかる。」

そういうと、半蔵はすたすたと村の真ん中を歩き、浜の真ん中になにやら齎（サイコロの事）を回している三人組にすたすたと歩いていく。

「少し……頼みたい事があるが？」

「ん？なんだ？」

三人のうち一番体格のいい男が半蔵の方を向く。

「向こう岸まで頼めないか？」

「ん？」

その顔はうるんな目つきではあるが、このあたりの漁師としてはよく頼まれる事である。というのはこのあたりで海軍の目の届かない地域から、渡るには九州の漁師に頼んで渡してもらう必要があるからだ。そのため、よくこういう頼み事をされる。漁師らしき三人のうちの一人が向こう側にある棧橋を指さす。

「渡し守が・・・あっちにいるかもしらんな。いないならもう一度こっちにこいや。」

「わかった。」

渡し守というのは今で言う所の海上タクシーみたいな物で、橋がない江戸時代に置いて、橋の替わりとなった重要な仕事である。そういつて歩いて、棧橋に向かう。そこには船はなかった。ちょうど舟守は出掛けているようだ。その場に座るとそれに合わせてソラも座る。

「待つのか？」

「急ぐ旅でもあるまい？」

「確かに。」

そういうと棧橋に腰掛ける。対岸が見える。日はさんと輝き・・・少し暑くもあるが・・・悪い天候ではない。カモメが舞っているのがわかる。

「どうしてあのおじさん達に頼まないの？」

「急ぎなら少し多めに払ってでも渡つただろうが、急ぐ旅ではない。それに・・・こういう日差しも好きだ。」

「そうなんだ。」

「ひなたぼっこは最近忙しくて・・・していなかったんだ。」

「どれぐらい前なの？その・・・ひなたぼっこか言う奴。」

「一週間ほど前。」

「・・・。」

ついソラは押し黙ってしまった。どういったらいいのか・・・ツッコミと言う文化はこの頃のオランダにはなかった。

「でもさ・・・船っていつ頃来るの？」

「まともな船頭なら・・・夕方までには来よう。」

「そうなの？」

「まあ・・・二刻もあれば着く所に雑談まで計算に入れれば・・・それぐらいだろう。」

棧橋に座ったまま背を預け、半蔵は空を見つめる。

「おめえ・・・。」

声のした方を見ると、先程の三人が半蔵達を取り囲んでいた。

「どうなされた？」

「俺のそこれば速く渡してやるというのに・・・。」

「早々急ぐあれもないのでな。待つ事にした。誰か来よう。」

その言葉を言うと半蔵は反動をつけて上半身を起こすと周囲を見渡す。

「金・・・出せや。」

体格のいい男が腰の短剣を抜いてくる。それを見たソラは半蔵にしがみつくの軽く半蔵が手で制す。

「・・・だから・・・。」

「出せば・・・向こうまで渡してやるよ。」

「お主ら・・・。人の言葉は聞こえるか？」

「なんだ？」

半蔵は立ち上がるとくるりと向きを変える。様子を見ると三人とも短刀を抜いている。このあたりのちんぴらと言った所か。

「もう一度だけ言おう。渡し守を待つから、お主達はいい。向こうで賽でも振っているといい。迷惑を掛けたな。」

「なんだと！」

そういうと脇の男が短刀で半蔵の胴体狙うのを手首を掴んで捻り上げる。

「いてえ！」

ソラはその間に半蔵の後ろに隠れる。後ろは海でも、一番安全そうに見えた。

「ソラ・・・離れて・・・いるのもできんな。そこにいる。」
「はい。」

そういうと半蔵は半歩踏みだし、腕を掴んだ男を後の二人の前にあえて引きずり出し、その勢いのまま海にたたき込んだ。

「貴様あ！」

その言葉を聞き流しつつ、右側の男が振りかぶる腕の肘に掌底で衝撃を与え、短刀をたたき落とす。真ん中の男が短刀で突こうとするのを掌底を打った手と反対の手で持つと無理矢理引き戻し、重心を狂わせ、海に飛び込ませた。

「え・・・あ・・・。」

短刀を振り落とされた一人は只啞然として・・・半蔵を見つめ・・・
る事しかできなかつた。

「お主・・・それにその連中。」

「あ・・・あ・・・。」

起きあがった後の二人も啞然として見つめる。

「こいつらを持ってその浜で乾かしてこい。拙者は船頭と待つ故な。まあ・・・これ以上なら。」

そういうと、半蔵は腰の刀を抜いてみせる。忍者らしい直刀ではあるが威圧には十分だ。

「わ・・・わかつたよ・・・じゃ・・・じゃ！」

そういうと三人はそれぞれバラバラに走って逃げ出していった。

「師匠。凄い！」

ソラは感心したように見つめる。

「何も・・・これくらいならお主でも出来る。だが・・・。」
「だが・・・。」

「これぐらいにしておく方が後腐れもない。これ以上やれば・・・。」

「う・・・うん。」

そのうなずきを見ると半蔵はまたも棧橋に腰掛ける。

「連中・・・数でこないかな？」

ソラは半蔵の隣に座るが、周囲を心配そうに見渡している。

「だったとしても……。すぐには来まい？ 人手を集めればこのあたりの武士も黙ってはおるまい？」

「確かに。」

そういつと半蔵は先程と一緒にのようには棧橋に倒れると海を見つめる。

「それに。」

「それに？」

「船が来た。」

「え？」

向こうを見ると、小さな小舟が一艘手こぎでやってくる。もっと大きな船を予想したソラにとってそれはあまりにも小さい。脱出ボートと同じ……。いやもっと小さい船である。

「あれが？」

「ここを渡るにはあれぐらいでいい。多くの人がいなければあれでいいのだ。まずは……。」

「はい。」

「物事程々がいいと覚えておくといい。どこかで行き過ぎれば……。」

そういつと体を起こし、棧橋にあぐらで、海の方を向く。海の上の船頭もこちらの影に気が付いたらしく、少し漕ぐ速さが上がっているように見える。

「行き過ぎれば？」

「どこかで不都合がでる。それは足りない、多すぎどちらでも出る物だよ。」

「わかった。」

頷いたソラは向こうの海を見つめる。行き過ぎればか……。その考えを父さんからいつか聞いた……。そんな気がした

外伝2・2 ソラと半蔵と（後書き）

いつもに比べてもだらだらしていますが……。もう少しこのペー
スで行きたいと思います。よろしくお願いいたします。

外伝 2 - 3 空は明るく、海は荒れて（前書き）

半蔵はチンピラを蹴散らし、じっと船を待つ……。。

外伝2 - 3 空は明るく、海は荒れて

外伝2 - 3 空は明るく、海は荒れて

「おや・・・半蔵様・・・お久しゅうございます。」

船頭は軽く挨拶してくる。半蔵はそれに合わせ軽く手を挙げる。

「・・・久しいな。」

「知っているのこのおじさん？」

ソラは不思議そうに聞いてくる。

「まあ・・・な・・・。」

「まあ・・・時々乗るお方というだけですけど・・・。」

船頭もあまり詳しくなさそうな顔をしているが・・・。

「だったら素直にこの船を待てば・・・。」

「前にな・・・。船頭のじいさんが代を譲るとか言っていたのでな。」

「

「それは・・・前に言いましたかな。まあ・・・深い話は船に乗りながらお聞きしましょう。」

そういつと船頭は手招きをするのに合わせ、二人は船に乗り込む。船は小さく、手漕ぎ船で、三人・・・ちょうどここにいる人数が乗るだけで手一杯の船である。近くに止めてある漁船の方が少し大きく感じられてしまう大きさである。二人が乗り込むと、艀を棧橋に当てる反動で離岸を行う。

「でもまあ・・・少し気恥ずかしい。」

「といたしますと？」

そうこう話している間に、船はドンドン岸から離れ、スイスイと進んでいく。只その音は小さく、いつの間にか離れている印象を受ける。

「三人の男を・・・。」

勢い良く話そうとした所を半蔵は口を塞ぎ、静かに止める。

「すまないな。村の者だと思うが三人ほど突っかかってきたのでつい・・・冷や水を浴びせてみた。」

半蔵が申し訳なさそうに話すのをソラは不思議そうに・・・そういえばあの場所でたむろっていたという事は・・・。ソラはその事に気が付く。

「いや・・・村の若い者が失礼した。おかげはありませんかな？」

「いや・・・無いが。」

「それはよかった。」

そういうとゆっくりと荒波の中に向かって船はそろりそろりと動き出す。

「うは・・・何か凄い所を・・・。」

ソラが波を見ながらつい声を上げる。波は時折高く、船を越しそうになる中を匠に船の向きを変え、艀一本で漕ぎ渡っていく。

「この辺一体の海は波が荒い。普通の船乗りではまず根を上げてしまふ。」

半蔵はじつと前を見ながら、波を見つめる。

「でも、このあたりの漁師はこの波を相手にせねば生きていけません。よく乗られる方も感心する者が多いです。」

「でしような。」

二人がしみじみと語る中・・・船はさも何も無いように荒波の中を渡っていく。ソラは今まで何人もの船乗りを父親と一緒に見てきたがそれとは全く異なる形での船乗りに・・・ただただ驚くばかりであった。

「でもまあ・・・代継ぎなんておるんですかねえ。」

半蔵が続ける。

「わかりません。只言えるのは・・・息子がいれば・・・すぐにも継がせていませうが・・・今は・・・。」

「息子さんは？」

「戦でと言いたい所ですが・・・帰っては来ているんですが舟守はまだ速いです。もう少し・・・腕前がなければ・・・いけません。」

「そうか……。お主も厳しいな。」
「ですな。」

二人が笑い合うのをソラは不思議そうに見るしかなかった。

「これを……。」

対岸の陸地に着いた早々に勘定を受け取ると、舟守のじいさんは腰の魚籠から魚をいくつか取り出し、半蔵に手渡した。

「これは？」

「村の者が迷惑を掛けた。お詫びじゃ。そいつは今朝採れたもんだ。」

「……。ありがたく受け取っておく。では。」

そう言うと半蔵はソラの手を引き、その場を離れる。

「ねえ……。それ……。どうするの？」

ソラはわくわくした顔で魚を見つめる。

「まあ……。こんなつもりはなかったが……。早々に食べるか。」

半蔵はソラを見上げるとちょうど太陽は頂点らしく、真上にあつて丁度いい頃合いである。しばらく歩くと、人通りのない浜が見えたので、半蔵は近くの松林から小枝を数本持つてくると、浜の真ん中にどかっと座る。それに合わせてソラも対面した向こうに座る。

「でもさ……。どうしてあんな事しゃべったの。舟守がいるならその人に払えばいいじゃない。」

「拙者の仕事はあまり人に目立つてはいけない。だから人に覚えられない様な事はしないのが常だ。だから出来るだけ使いたくはなかったが……。」

「なかつたが？」

創始ぶりがならも懐から火打ち石を取り出し、火口箱から藁を取り出し、打ち始める。昔はこの方法で火をつける事が一般的であった。

「あの船乗りの態度に腹が立ってな……。つい……。だから少し恥ずかしい。」

半蔵は下を向いたまま、火をつけるのに専念している。

「でも・・・格好良かったよ。」

「・・・それは違う。」

小さく火がついたらしく、火種を浜に置くと、乾いた小さな枝から順々にくべていった。

「何が？」

「戦いは本来する者ではないし・・・力はひけらかすものではない。」

「どうして？」

ソラには不思議でならなかった。オランダやその他のヨーロッパの多くの人間は武はひけらかすものだ・・・当然だと思っていた。あまりに当然すぎて・・・そう考えた事もなかった。

「まあ・・・大体そうかもしれないが・・・武をひけらかす・・・人前に見せるという事は・・・いい事ではない。」

「どうして？」

「まあいくつも理由があるが・・・一つはひけらかせば強い事がばれるという事だ。」

「だから何で・・・それが悪いの？」

そういう間に、半蔵は小刀で魚の鱗をはぎ取っていく。

「強いと言う事は相手に警戒をさせ・・・いたずらに警戒を強めさせる。弱いと思えば通す関所も普通の対応をしなくなる。そして、強いと思えば排除しようとする者も増える。無駄な殺生はする者ではない。」

ソラは押し黙ってしまう。その間にも火は大きくなり、たき火程度の大きさになる。半蔵は少し集中して、長い棒に魚を刺して、火の側に炙るように置いていった。

「でもそれは強い事に対する当たり前の事だろ？」

ソラは言い返す。

「じゃあ、関係ない人間を殺したいか？」

「・・・いや・・・そうじゃない。」

ソラは半蔵の反論に暗い顔をする。

「まあ、そうれが普通だ。そしてもう一つある。お主も覚えておくといひ。」

そういうと半蔵の近くの棒にある魚をくるりと半回転させ、反対の面の焼き始める。

「もう一つは強い事をいい事に自身が油断すると言つ事だ。」

「油断？」

「まあ、正確に言えば、あり得ない失敗をする確率が上がるという事だ。」

不思議そうに見つめる中・・・魚はまだ焼けていないらしく、じつと二人は見つめる。

「自分が強いと思えば修練はしない。物覚えも悪くなる。そして相手を侮り、本気を出す前に死ぬ事もある。」

「そうなの？」

「よく戦場ではそうやって死んでいった奴が多い。教訓みたいなものだ。」

「戦場？」

「まあな。」

ソラは驚いたように周辺を見渡すが・・・戦場らしい・・・荒廃した土地は見あたらない。

「昔、この国・・・この島では昔戦乱があつた。」

そう感慨深そうに海を見つめる。ちょうどこの浜は瀬戸内海を望み、周囲には島々が見える。

「でも・・・焼け野原はないよ。」

「ここではない。もっと他の場所で戦争は行つていた。5、60年はなるだろうか・・・。拙者が生まれる前から戦争は続いていた。」

「そうなんだ。」

「それもつい先頃終わったばかりだ。それまでの戦争の間・・・みんな苦しかったからな」

「戦争が終わるってどんな感じ？」

ソラが魚を見つめながらつぶやいた。

「どうって？こんなかんじだ。ほら・・・焼けたぞ。」

そういつて汁がしたたる魚を一尾ソラに渡す。

「どうやって食べるの？」

「ん？知らんか？こうだ。」

そういつと半蔵は手元の魚を捕ると背びれを取り、そのままかぶりついた。

「腹は食うなよ。あそこは苦い。」

「わかった。」

ソラは半蔵の真似をして背びれを取ると背にかぶりつく。汁が口いっぱいになり、旨さが伝わる。

「おいしい。」

「そうか・・・。」

半蔵はしみじみしながら・・・魚を食べていた。

「でも・・・戦争・・・僕たちも・・・いつぱいしているけど・・・そういう話は聞いた事無いよ。とおさんもそんな事は言っていないなかつたし。」

「そういえばお主の国は戦乱とかあったのか？」

「僕が聞いている限り・・・とうさんはずっと昔から・・・戦争があつたとか言っていた。もう数え切れないほど昔から・・・。」

ソラの声が急に寂しくなっていくのを半蔵は不安そうに見つめるしかなかった。実際ヨーロッパ大陸が戦渦に包まれてから千年以上が達ち、その間にいくつもの小国が建つては滅ぼされていき、その間にも民は戦乱に巻き込まれる。実際の所山賊とかがいなければ、ほ、国境沿いの町以外の被害は小さいが国境だけでも無数に存在し、それでも蹂躪された数は多い。そのため、戦争はいつまで経っても終わらなかつた。

「そうなのか？」

「だから・・・あのカトリックも・・・プロテスタントも・・・嫌いだ。神様ななんて・・・。」

何となく断片的ながら按針から聞いていた内容と同じ事が・・・この少年の口からも漏れ出ていた。それだけ今でも根が深いのだろう。じつと少年の姿を見つめる。

「でも・・・何で戦争はこの国に終わって・・・僕たちの所は終わらなかつたの？」

ソラの疑問は納得がいった。半蔵は考えた。答えはわかつていたがどう伝えた方がいいかだけは・・・考えなくてはならなかつた。

「国を治める者が・・・国にいる者全てが本気で・・・本当に・・・戦争を終わらせようとがんばった結果だ。誰しもに成し得る事ではない。だから・・・だろうな。」

半蔵がじつとソラを見つめる。意外とつらい過去を持っているんだろう・・・な。

「だとすると・・・きつと何時までも僕は村に・・・帰れそうにも・・・ないや。」

ソラは、頬からぼろぼろと涙を流していた。

「ソラ・・・。」

「何？」

「男子たる者、涙を早々人に見せる物ではない。いくら何でも弱く見えるぞ。」

「でも・・・強く見せては・・・。」

「そこが勘違いし易い所だ。よく覚えておけ。強い所を見せないのと、弱い所を見せるのは根本的に違う。」

半蔵は一本食べ終えたのを火の中にくべる。周りには魚が焼けた匂いがぷーんとするようになった。

「と言うと？」

「強さをひけらかすのは真の強さではない。武は必要な所でのみ使えばよい。だが・・・弱さを見せれば・・・弱く思われ人に信用されなかつたり、女にもモテない。」

半蔵は、半笑いでしゃべってはいるが実際・・・かなりの本気の話をしているようにソラには見えた。

「強さは見せないが、弱い所を見せたら餌にされるのは自分だ。」
「・・・わかった。」

ソラは、数力所を食べ終わると半蔵に習って火の中に魚をくべた。また匂いが一層濃くなつていく。

「自分から強く見せる必要はないが、弱く見せる必要は・・・別段必要ではない。必要がある時はそうすればいいがな。それが芯の強さだ。」

「はい。」

ソラは大きく頷いた。

「そうだな。そう言うなら・・・。観光でも楽しみながら参ろうか。」

「観光？」

「少し行き先を変更するぞ。」

「へ？」

「せつかくの世だ。楽しく生きる事も覚えねば何時までも辛気くさくなるぞ。」

「せつかくって？」

「・・・そうだ・・・お主・・・平和を味わった事はないのだろう？」

半蔵は何かを思いついたようににやにやしてソラを見つめる。その様子は自分よりも子供に見える。

「平和？」

「こんな・・・戦のない時代じゃ。」

そう言われて、ソラは考える。父さんと暮らしたあのころは平和かもしれない・・・だけど最近は何・・・無かったな。

「無いかもしれない。」

「なら、色々見て回ろう・・・な。」

半蔵はつきつきした顔で立ち上がる。

「いいけど・・・こんな山奥のどこにあるの？」

周囲を見渡せば、浜のすぐ裏は山で、人里すらも見あたらない。

「ここだとほら・・・まあ・・・人里に行つてからだか・・・いい見物がある。行こうか。」
そう言つと手を引いてソラを立ち上がらせると、薪の後を置いて、手を引いていつてしまふ。

「で・・・また船にのせるんだ。」

それから二日、早足で伊予と讃岐（愛媛県と香川県の間）の国境近くの港町に着くと、食事を少し仕入れ、そして船にまた乗る。

「まあな。船頭。頼むぞ。」

「あいよ！」

そう言つと半蔵は船を出させる。船に乗り込む時、船頭に金を握らせ、ある事を話していた。半蔵は何をするつもりなのやら
「何をするつもりなの？」

「まあ、物見遊山だ。怖い者見たさもあるしな。」

「でもあんた。あれがそんなに見たいのか？」

「あれは早々他の所では見ないぞ。」

そう言つと船はちょうど瀬戸内海の真ん中あたりに来る。このあたりの治安は水軍の力があつても早々船頭は襲わない為、安全ではあつた。

「ほらあれだ。」

そう言つと半蔵が立ち上がるので、それに合わせてソラも立ち上がる。

「あれ・・・なに・・・。」

あまりの現象にソラは凍り付いてしまふ。海に大穴がぼっかりと空いている。またそれに渦巻くように近くの海流も変に流れている。

「あれか・・・このあたりで有名な・・・。」

「鳴門の大渦でい！」

半蔵の声を遮つて船頭が大声を上げる。

「大・・・渦？」

ソラは驚いて水面を見つめる。

「あれに飲み込まれるとどんな船でも砕け散るといふ大渦。この辺り一帯ではちよこちよこ見かけるけどよ。これ・・・ほんとのこの辺りだけなのか？」

自慢してみたものの、不安そうに半蔵を見つめる。

「この子の驚き様を見てもわかるだろう。」

半蔵は嬉しそうにソラを見つめる。ソラはあまりの光景に驚いている。海に穴が開くなぞ始めてみるからだ。この世の終わりにも見えた。

「だな・・・で・・・言われた位置でいんだな。」

「ああ。頼んだ。」

半蔵に言われた方向に、渦を悠々と眺めながらゆつくりと船を泳がせていった。

「あれ・・・見てみる。」

半蔵が指さした先には赤い日本家屋が・・・遠目から見える。港に来る直前の海だった。

ソラは黙って今まで渦を初めて見た興奮も冷めやらぬままに首を上げる。確かに遠目に赤い日本家屋・・・何か赤い門みたいな物が三つある。

「あれは？」

「あれか・・・巖島神社だ。」

「神社？」

「そう言えばお主は神社も知らなかったな。あそこは海の神様を祀った所だな。」

「んだな。このあたりでは一番の神社じゃ。」

船頭が大きく頷く。

「へえ。」

「あの建物な・・・海の中に立っておってな。」

「海の中？だって見える・・・。」

「ほら・・・これ。」

そう言つと半蔵は懐から筒を渡す。半蔵も一応偵察様に遠見筒を持っているのです、それをソラに手渡しする。

「そいつは？」

船頭は不思議そうにソラは当たり前前に覗いている筒を見つめる。

「ああ、これは、舶来物だな。遠見筒という物だ。遠くの物も見える。」

「へえ。」

「え……。」

半蔵達が雑談をする中、何かに気が付いたのかソラが啞然としてしまう。

「海から……立ってる。どうなってるのこれ？」

ソラの啞然とした声が聞こえる。巖島神社は海の中に柱を立てた作りで、海に浮くように建物が出来ている。

「海の中に立っていると言ったと思うが。確かにこれであれが……。」

「確かに……巖島は……俺が生まれる前から建っているんだよな。」

「拙者が聞いた所だと……。確か……もう500年ほど前からあるな。」

「500年……！」

「おっと、ソラ。」

「はい？」

「驚いてもそれ……落とすなよ。高いからな。」

「あ……ああ。」

慌ててソラは目から筒を話すと手早く半蔵につきだした。それを半蔵は受け取ると懐にしまう。

「出来れば……俺にも……。」

「流石に陸に着いてからな。」

「あ……ああ……。」

残念そうに船頭が諦める中……あまりの驚きにソラは……呆

然としてしまっている。

「すまないが船頭。」

「はい。」

「速く対岸について欲しい。この子には色々ありすぎたみたいだ。」

「旦那。本当に・・・おもしろいですな。」

「こういう物見遊山の手伝いも良い商売になる。みんなが喜び、金も多く落してもらえる。」

「へえ・・・。まあ・・・対岸に向かいます。」

船頭は艀を傾けると、対岸の町に向かって船を動かしていった。

陸地に着いた一行は、しばらくソラが呆然としているので、その間、船頭が遠見筒を堪能していた。

「本当にいいのか？」

「いや・・・まあ・・・本当に・・・いいんだって。良い思いさせてもらったしな。」

「では・・・。」

そう言うとき軽く頭を下げて船頭を別れ、町を歩いていく。町はそれなりに大きく、結構栄えている町だった。半蔵はソラの手を引き、ソラはそれに合わせゆっくりと歩いている。

「本当に・・・凄い。」

「お主の地元にもこういう物はあるのか？」

「ううん。あの穴も、建物の凄い・・・。」

ソラは嬉しそうに半蔵を見つめた。

「そうか。平和だところという旅も増えてくる。」

「そうなの？」

不思議そうにソラは半蔵を見つめる。

「盗賊などがいなく、安全に乗り物に乗れて、身を守る為の武を鍛える必要が無くとも生きていけ、安心してやりたい事がやれる。これが平和だ。」

「・・・夢みたいな世界だね。」

ソラは冷たく言うが、歩いている人々は確かに警戒している節さえない。

「そうだな・・・夢みたいの世界だな。でも・・・。」

半蔵は感慨深く周囲を見渡す。路地には参拝客が結構いるようである。通りに計って欲しいと露店で泣いている子供をたしなめる親とかがいる。

「誰かがやろうとしないと夢は何時までも、夢のままだ。現実になろうともしない。」

そう言うと半蔵はわざと歩くのを止める。それに合わせソラも足を止める。

「歩こうとしなければ誰も歩かない。それと一緒にだ。」

「でも厳しいかもしれないよ。」

そう聞くとまた半蔵は歩き始める。それに慌ててソラは追いつくと一緒に歩いていった。

「でも歩くのをやめたらそれは・・・人間は誰しも歩いていく所がある。」

「・・・。」

「だから歩く。歩いて目的の地を目指す。だけど・・・。」

半蔵の話在必死に歩いてついて行きながらソラは聞いていた。少し早足の半蔵の歩みでは、もう市街地を抜け郊外まで行ってしまっているが、家はぼちぼち存在している。

「只幾つかの注意点がある。まあそれは・・・。」

「せっかくだからさ・・・言つてよ。」

ソラはせかしてみるのが、半蔵は恥ずかしそうに下を向く。それをソラは少し駆け足で覗いてみる。

「こういうのは不慣れだな・・・やはり・・・。」

「ごめん。ぼく・・・つかれた・・・。」

小走りでソラはついて行くが、その息は上がっているように見える。慌てて半蔵は歩みを遅くする。日頃速歩を行う忍者の歩みは速く、普通に歩いててもかなりの差が出る。

「す……すまない。」

そう言つと半蔵は立ち止まり、ソラを見つめると、疲れた顔をしていた。周囲を見つめるとちょうど茶屋が店を開けていた。

「すこし休もう……な。」

「う……うん。」

そう言つと半蔵は茶屋を指さす。それを見てソラはゆっくりと歩いていった。

「すまないな……。」

「はい。」

「何がある？」

「はい。……そうですね。団子と……茶がありますよ。」

奥から出てきたのは妙齢の女性であった。門前町などでは寄り合いなどの組織があつたりしたがそれは中心部だけで、意外と茶屋などとは見逃されており、初期では働き口のない女性などが働いている事が多かった。また、茶はこの当時各地で生産地と生産方法が確立された頃で、各地で『山間部で植えられる金になる植物』として各地方に広まる異なる。飲まれ方は様々だが、それは寺などで指導を行つていたりした。そのため茶屋は山間部の農村での収益源として、江戸後期以降までも活躍する事になる。

「それを頼む。」

「はい。」

そう言つと女性は奥に消えていった。と言つても作り置きのお団子を……ぱちぱちと火を焚く音が聞こえる。これは……。

「半蔵さん。歩くの……はよい！」

「本当にすまない。」

半蔵は謝るがソラは……怒っている様子はなかった。

「でも……結構半蔵さんって……がんばると速くなるね。」

「がんばると？」

「うん。がんばると。」

「お待ちしましたー。」

半蔵が更に聞こうとすると、奥から女性が団子を皿につけ、茶と一緒に持ってくる。

「六文です。」

「これ。」

半蔵はお盆にあつた皿と茶を受け取ると、ソラとの間に置き、懐の巾着袋から小銭を女性に手渡す。

「はい。」

女性は受け取るとさつと奥に行こうとする。

「焼いてあるのか？」

「ハイ。暖かい方が美味しいですから。」

そう言つとさつと女性は奥に引つ込んでいった。

「これは・・・団子？」

「ああ。これも団子だ。」

単純に味付けなしで、米湖を丸めた団子だが・・・少し焼いてあり、焦げ目が付いている。

「まあ・・・丸めてあるが・・・これでも一応団子だ。」

そう言つと茶が入った湯飲みを見つめる。やはり抹茶ではないが・・・これの方が薄くて好きだ。抹茶は加工が難しく当時では京などの大都市以外では入手が難しい。そのためか茶を煎じて湯で淹れる現在でのお茶の形式が戦国初期では一般化していた。今後は抹茶も多くなるが・・・簡単な方法として、良く好まれていた。

「お食べ。」

「うん。」

ソラが口に入れると良くかみしめてみる。米がほんのり甘く、米粉の甘みが口に・・・噛むたびに広がる。

「これは・・・これで美味しいね。」

先日醬油で味付けされた甘辛い団子を食べている為、それとは違う素朴な味が気に入っているようだ。良く噛んでいる。

「こつこつのは良く噛んで茶で押し込むのがまた美味しい。」

「茶？」

「これだ。これ。」

半蔵は手に持った茶の容器を振ってみせる。ソラは不思議そうに見つめるが・・・よくわかってい兄用だ。半蔵は湯飲みを側に置くと、ソラの側に置かれた湯飲みをソラに差し出す。

「これ？」

「そうだ。」

そう言っソラがのぞき込んだ先には薄く緑色した液体が広がる。「これ？」

今までソラはこういう緑色の液体・・・薄いようだが・・・を飲んだ事がない。ヨーロッパでの飲み物と言えば保存用に水の替わりに船に入れられた葡萄酒、水、地域によって牛乳などである。当時ジュースは無いか貴重品又は錬金術様に少数生産までが常で、流通していない。その為色の付いた飲み物は白以外はこの当時見かけた事がないと言っ正しい。日本人にしても水以外の飲み物は實際この戦国初期以前では薬以外あり得なかった。

「飲めるの？」

「少し苦いが・・・甘い物と一緒に飲むと美味しい。」

「一緒に？」

半蔵の言葉に更にソラは混乱する。当時の料理の知識としての食べ合わせはまだ少数しかなく、そう言う知識がない方が普通だった。ソラは不思議そうに渡された湯飲みの中の緑色の液体を見つめる。

「そうだな。まずは試してみるか。そのまま一口行っしてみる。」

「うん。」

半蔵は言っ茶を一口ぐっ口に入れる。それを見てソラは茶を少し舐めてみる。

「え・・・いやー！」

つい、ソラが声を上げる。その声に奥から女性が来るのを半蔵は手で制した。

「苦いだろ。」

「うん。」

「そしたらな、その団子……。良く噛んでくれないか？」

「うん。」

そう言うとソラは団子を口に入れ、わざと大きく噛んで見せる。噛むたびに甘みが徐々に広がる。

「そろそろかな。」

「ん？」

「そろそろ茶を飲んでみる。」

そう言うとソラは口に団子を含んだまま、茶を流し込む。

「え……。」

確かに茶は苦いが、それを米の甘みや雑味が中和し、茶の香り高さや旨みが米粉と混ざり、得も言われぬ味わいになる。鼻に抜けるすつきり感はソラにとって初めて味わう……。『すつきり』と言う感覚だった。しばらくその余韻をソラは感じると、じっと茶の入った湯飲みを見つめる。

「美味いだろ。」

その半蔵の言葉にソラは首をコクコクと縦に振る。

「俺はやっぱりそういうのが好きだ。」

良く抹茶に茶菓子が出されるが、それはこの手法を取り入れた物だとも言える。最初に茶の味を確かめた後で、甘い物で茶の苦みを消して清涼感を楽しむのは、茶道に置いて重要な楽しみ方である。その後景色を見るとこの頃に少ない『清涼感』でそれがきれいに見える為に、景色の美しさを感じられるという相乗効果もある。その為、茶道では周囲の景色や場所にさえこだわりを持つ事が多い。

「うん……。」

初めての感覚にソラはとまどいすらも感じていた。こんな感じ……。何だろう……。初めて。

「昔な。千利休という男がいてな。そいつがやってくれたのが……。それなんだ。」

「へえ。」

ソラは感心して半蔵を見つめる。半蔵は懐かしそうに湯飲みを見

つめていた。

「昔な。俺はそう言う茶道とか言うのが嫌いだった。でも主と一緒に行ったときにいつも側でさぼって、酒とかを飲みに行っていたんだ。それを見かねた利休がな・・・俺を連れて山奥に行ったんだ。」

「ふんふん。」

ソラは大きく頷いて聞いていた。ちょうど女性も聞き入っているようだった。

「そこでな。途中の河原で降ろされて、そこで包みにちょうどこんな感じの団子を出してな。食えって言うから食ったんだ。そしたらまあ・・・普通の団子だ。それを食った後に水で溶いた抹茶を飲まされたんだ。」

当時に保温出来る容器はなく、水を溶いたのが外出時の飲み物の限界だった。だから水で溶いた抹茶しか当時外出時でお茶を飲む事は出来なかった。鉄の保温容器が開発され、一般化するのは江戸初期より遅い家光の時代以降になってからだ。

「それを飲んだら美味いんだ。ちょうどお前みたいな顔をしていた。」

「そうなんだ。」

優しく語る半蔵の顔は・・・あの頃への郷愁の思い出いっばいだった。

「で言ったんだ。本来茶道とか言っても美味しい物。高い物を食うのに只食べてはもったない。それで・・・見てみる川を・・・。って言うから見たんだ。川を。」

そう言っつて半蔵は周囲を見渡す。普通に農地と建物がまばらに見える平原だ。

「ソラ・・・さっきと比べでどう見える？」

ソラは急に言われてとまどいながら周囲を見渡すが・・・それほど異変はない。

「わからない。」

「ま・・・いいや。妙にその川がきれいに見えたんだ。」

半蔵はしみじみと話を続けた。

「でな。言ったんだ。確かに綺麗に見える。はっきり見えるってな。そしたら利休はそれでにやつと笑ったんだ。それがあから．．．俺はそれを利用して何かが出来ないかって考えたんだ。」

そう言い、半蔵は口に団子を頬張る。ソラはその様子をじつと見つめる。

「それで俺は初めて自然が綺麗って思えたんだ。そう言ってわくわくしていた。」

「半蔵が？」

「いいや、利休さ。」

そう言っつて半蔵は茶を口に流し、じつと周囲を見つめる。

「だから、あいつは茶の飲んだときに一番何が美しいのか．．．美しく見えるのか．．．研究を始めた。それが茶道とか言った物だ。」

「へえ。」

興味なさそうに半蔵をソラは見つめる。じつと見つめながら．．．ソラは団子を頬張る。

「おもしろいですねえ。」

その言葉に半蔵が後ろを振り向くと、女性が微笑みながら、もう一つの腰掛けに座り、こちらをじつと見つめていた。

「まあな。お主もやってみるか？」

「はい。」

そう言っつと、女性も自分の為に入れた茶と団子を用意し、団子を入れて、しばらくして茶を流し込む。

「ほんとに．．．全然違いますねえ。」

口が自然とほころび、女性は感動したように周囲を見渡す。

「だろ。」

「でも．．．何かすつとするよ。」

ソラも改めて茶を飲んでみて．．．周囲を見渡すが．．．なんか綺麗に見える．．．気がするだけに思える。だけど．．．このすつ

とした感じは好きだった。

「さて、そろそろ行くぞ。次の宿場で休むから」

そう言うと半蔵は手に幾つかの団子を持ち立ち上がる。茶は飲みきってしまったようだ。

「は……はい。」

そう言うと慌ててソラは立ち上がる。

「すまないが、次の宿場まではどれくらいあります？」

「後……三里（1里約4キロ、3里12キロ前後）ほどですかね。」

「わかった。それなら夕刻には着くだろう。ソラ。そこまで行けば休めるから。」

「う……うん。」

ソラは慌てて食べていない団子を手の中に入れて、立ち上がる。半蔵が後を確認すると女性に一礼する。

「では。」

「ありがとうございます。」

その声を背に半蔵は歩いてソラは急いで付いていくのだった。やっぱり早足で……駆け足が必要ではあるが……。

外伝 2 - 3 空は明るく、海は荒れて（後書き）

又かなり・・・だらだらしていますが・・・もうしばらく花氏迫野
ぐらいのだらだらで行きます。もうしばらくお付き合ってください。

外伝 2・4 初めてののお泊まり(前書き)

今回はただ宿に一泊する・・・ただそれだけの話です。

外伝 2 - 4 初めてののお泊まり

外伝 2 - 4 初めてののお泊まり

その日の夕方には確かに次の宿場に着いていた。当時の宿場というのは3里から5里（12キロから20キロ）に一つ置かれていた。これには諸説あるが、早馬用の休息所、人間の歩くペースを考えての事などあるが・・・実際は人間のペース上の問題が一番関係していると思われる。意外と日本の街道は起伏が激しく、いくら歩きやすい所を行くとはいえ、山道を越える街道も多い。そこで、不測の事態に備え設置されたのが街道だとも言える。只、全宿場町に止まっては宿泊費は膨大になる為に、江戸中期以降の旅行では無理して先に行く早足旅行が流行つたとも言える。また宿場町によっては良い悪いの噂があるので、それによる差もあると思われる。だがこの江戸初期に置いては泊まれるだけでも良いと思われるので、宿の善し悪しはあまり加味されなかった。

「やっと着いたよ。」

ソラはまたも肩で行きをしなからもう朝から半分ほどの歩みになった早さを

「疲れたか？」

「うん。」

「だらしないな。これで根を上げると、今後がきついで。」

半蔵は何事もないようにソラを見つめる。実際半蔵は馬には及ばぬ物の、数倍を歩く事が多い。それに対し、ソラは今まで船旅が多くてあまり歩く事はなかった。その為この差が出た物だと思われる。

「でも・・・。」

「そうだな・・・。」

夕時の宿場町を見渡す。この当時は戦争が終わってすぐの為、客引きも少なく、落ち着いた環境である。この頃は宿場でも宿は少な

い事が多い。半蔵は周囲を見渡すと近くに宿屋を見つける。

「そこで良いか？」

「よくわからないよ。」

そう言うまもなく半蔵は近くの宿屋にはいる。それについてソラも宿屋に入る。

「誰かいないか？」

「あ……はい。」

奥から商人風の男がやってくる。それなりに大きい宿のようだ。奥が見えない。

「こんな日にいかがしましたか？」

主任の男は寒そうな格好をしている。ちょうどこの頃、大阪夏の陣から半年、冬の季節でもある。

「宿を取りたい。空いてるか？」

「はいはい。今日はほぼ空室ですから。」

確かに周りを見ても人気は少ない。夕暮れだと旅を終える……そう言えばまだ戦争から半年、いくら平和でもまだ旅する者は少ない。

「だとすると商いも薄かろう？」

「いやあ……今年はもう少しすると初詣があるので、この辺は山の者でいっぱいになります。」

この頃の初詣はまだ旅してでも遠くと言うことなく、一念を祝う為に、近くの地域の者がともある事が多かった。中期以降は旅行が多くなるなど減少するがこの頃は衙担ぎの意味も込めて、近くの大社に向かうのが通例でもあった。また武家の宿泊も多いので、この頃の宿場は大抵儲かる仕事であった。だが人が少ない……。

「ですから今はみんなで稼ぎを貯めておる頃でしょう。今日は人が少ないので、逆に年末は凄い事になるとわくわくしていますよ。早々……あれ……用意しますね。」

「そう言えば風呂は？」

「はい。ここは元々武家様も泊まる宿ですから、備えさせてありますよ。」

す。沸かしますか？」

「いままで野宿が多かったからな。」

「はい。少しお待ちを。」

そう言うと、宿主は席を離れる。ソラは不思議そうに宿主が行った先を見つめる。

「何があるの？」

「今日はここに泊まるぞ。お主、今日までは野宿が多かったから宿は初めてだろ。」

「うん。」

「今日ぐらいは少し贅沢するか。」

そう言うと半蔵はワラジを脱ぎ始める。その様子をソラはきょとんと見つめる。

「何するの？」

「靴を脱げ。建物に入るに土足は厳禁だ。」

「う・・・うん」

そう言われ・・・ソラは近くの腰掛けに座るとブーツの紐を解き始める。

「でもお主・・・その・・・ブーツとか言う奴か・・・なんか立派だな。」

少し大きめのヨーロッパでは普通の革靴である。ソラからするとリスボンに着いたときにアルフレッド父さんからもらった・・・大事な靴だ。

「うん。初めて父さんからもらった・・・大切な物。」

半蔵はじつとブーツを見入っている。

「そうか・・・脱いだら少し・・・見せてもらえるか？」

「う・・・うん・・・。」

少し意外そうに靴の紐を解いていると、奥から宿主が桶を持ってやってきた。

「足湯・・・出来ましたよ。」

宿で出す足湯、足水の期限は諸説ある。飛脚（飛脚が足が疲れる

為に、飛脚達の間で足水が広餓死、冬向けに足湯になった）が最初だった。東北（かじかむ足を温める為に足湯が出来、それが広まった）が最初だった。宿が自発的に始めてた（旅人が自発的に注文したのを常設した）、病気の感染を防ぐなどである。だけでも個人的には『豊臣秀吉説』があると思われる。姫路城を建設していた当時の秀吉は、情報の機動力を尊ぶ為に、早馬などの通信情報伝達の整備を行っていた。その中で命令が行き来する秀吉軍は常に行軍を行う疲労のたまりやすい軍隊だった。特に足に疲労が来る為、足がすぐにはばんぱんになる伝令も多かった。中国地帯一帯は結構夏は暑く、当時の整備された道では足袋などを用いても、草履を用いては逆効果に熱した地面に触れる。その為、足が火傷する兵士や伝令が多かった。当時の火傷の治療法は患部を冷やすの一点のみであった。薬草治療もあったが、とりあえず冷やすのが通例だった。そこで足を冷やす足水を常備するようになり、冬では足湯という形になった。と考えられる。これが旅の広まりで各地に伝わり、広まっていった。「感謝する。」

そう言うつと半蔵は宿主が置いた足湯の桶に足を突っ込む、ほどよい冷たさが足を包む。

「坊ちゃんもこれ。」

そう言うつと宿主がソラの所にも足湯の桶を持ってくる。

「何か・・・妙に臭くない・・・ですか？」

宿主が不思議そうに子供を見つめる。今までの旅人の臭さとは違う・・・現代人ならわかるブーツの蒸れた匂いだ。

「かなり汗をかいたからな。」

そう言いつつも半蔵もソラの近くで鼻をひくひくさせる。確かに、夏の偵察で感じるあの蒸し臭さだ。でも匂いはきつい。

「そうですね。それならきつと風呂は・・・お気に召すでしょう。」

「いくらになる？」

「・・・いや今日は暇ですから、七分八銭でいいです。」

「そうか・・・これ。」

そう言つて二人分一分銀を十数枚渡す。この頃の宿の値段で七分はそれなりに安い金額で、大宿だと大体九分以上（当時の一両は十万円前後の価値。一分で1500円から2000円）するのが普通である。それから数十年して出来る木賃宿（当時のビジネスホテル。食事は別一部屋でみんな共同宿泊である。）ですら、一分から八銭が必要である事からすると風呂付き個室七分は相当安い。

「これは……。」

「二人分だ。それに少しお主も大変だろう。受け取つておけ。」

「ありがとうございます。」

そう言つと店主は腰から手ぬぐいを取り出す。その頃ソラはそろそろと少し湯気がでている桶にそろそろと足を入れようとしている。実際ソラはリスボンからアムステルダムに行くまでにアルフレッドと宿に泊まった事があるが、この様な事は1回もなく。寝るとき以外靴を脱がない文化の中に置いて、こういう足湯体験は初めてだった。

「何か……くすぐつたいよ。」

「そうか？」

半蔵は足湯から足を引き抜き、足を拭いている。草履はそのままに、足袋を置いていた。

半蔵は興味深そうにブーツを見つめる。確かに按針殿も持つてはいたが……ここまでは裾が長くない。

「でも……気持ちいい。」

「そうか。」

そう言つと凄いやるんだ顔で、ソラは半蔵を見つめる。初めて見る顔だ。

「でもそろそろ上がるぞ。」

「うん。」

そう言つとソラは足湯から足を引き抜き、渡された手ぬぐいで、足をこしこし拭いていた。気になった半蔵は足湯を見ると幾つか垢が浮いていた。

「そうだ。オヤジ。」

「はい。」

「さつき渡した分で良いから……。端布か雑巾どちらか一つ頂けぬか？」

「はい……。ああ。良いですが……。どちらを先になさいますか？」

「料理はお主か？」

「はい。忙しくなれば流れの板前（当時の臨時雇いの料理人。腕はまちまち）もありですが……。料理は拙者が。」

「そうか。なら少し落ち着いてから入るとしよう。先に頼む。」

「はい。」

そう言つと宿主は店の奥に引き上げてしまふ。

「ソラ。」

「はい。」

ソラは足を拭き終わつて裸足でばたばたさせていた。そつと半蔵はソラの手ぬぐいを見ると……。結構黒い。これは洗つに時間がかかりそうだ。

「ブーツを……。」

ブーツは舶来物の為、盗まれる事も考えられた。ふと半蔵は中に入れる事も考えたが、土足を……。

「これで外に吊……。」

そう言つて縄を差し出そうとすると……。ふと、考える。さっきの匂い……。このブーツからも臭わないか？

「少し貸してもらえぬか？」

「うん。」

そう言つとブーツを借りると、近くで匂いをかぐ……。耐え難いほどの……。匂いだ。

「オヤジ！」

「何でしょうか！」

「水場はあるか!？」

「はい。中庭に!」

「洗い物がある。使ってていいか？」

「はい！」

「後……端布……少し頼む。」

「は……はい！」

そう言うと半蔵はブーツを持ったまま板張りの床をブーツを持っただまま歩いていく。その顔は何か……大仕事の予感さえした。

それから夕暮れから夜まで……お客は来なかった物の、半蔵と二人でブーツを水で付け、しごくように洗っていた。当時にタワシはなく、ヘチマ（タワシの代用品で良く生産されていた）も普及していない時代。端布だけが頼りであった。ついでに言うと石鹸は存在はあったが、持っている人は少なく、また生産も少数であった。「本当に……疲れた。」

半蔵は水場で桶を数回井戸から汲んで……靴を洗うべくばしゃばしゃ水につけた。中を洗った。今は匂いをしないが……。「初めてだよ。ブーツ洗う人。」

ソラは何か根負けしたように建物の土壁に寄りかかる。手には片方のブーツがある。

「そうなのか？」

「そうだよ。」

当時のヨーロッパでは確かに革靴などのブーツは耐久財ではあるが、匂いは当然で、洗う事など、貴族で靴墨をつける以外では考えられた事はない。それほど匂いを気にしない風習があったのだ。「今後いくつも脱ぐ所があるう。そこであの匂いではきつと嫌われるぞ。」

「そうなの？」

「部屋に入ってみればわかる。」

半蔵はあまりに賢明に擦った為、滅多にない疲れで気力をほぼ根こそぎやられていた。

「……どういう事？」

「そういえば……」

「そういえば？」

「幹花と会った事があるのだから？」

「うん。」

ソラは大きく頷く。

「船長室には入ったのか？」

「あの緑色の絨毯？」

半蔵はふと考えてしまった。畳はソラも……そう言えば海が近いから感じないかもしれない。信繁達が乗る船の船長室は信繁たちの願いと言う事もあって畳を張ってある。畳に座る方が心地よいらしく、椅子よりも良いらしい。張り替えたばかりだから匂いもきつかったはずなのに……。

「緑色の絨毯か……あれ……どうだった？」

「うん。あれ……何かつるつるしているけど、何か船長……凄い大切にしていた。」

「そうか……」

半蔵は反動をつけて立ち上がると、やっと側にあつた荷物を手に持って建物の中にはいる。

「お……お侍さん。」

宿主が心配そうにのぞき込む。

「どうした？」

「食事……出来ましたけど……これ……」

呆れたように水浸しの水場を見つめる。

「流石にきつい。少し休んでからもうつから……上か？」

「はい。」

そう言うと半蔵がとに手を掛ける。

「ソラ。」

「これどうする？」

「そこにその紐で吊しておけ。」

「はい。」

そう言うとソラは近くに紐でくくって吊しておく。何となく苦労の後が幾つか見え隠れする。

「坊ちゃん・・・それ・・・。」

子供を見た宿主が驚いてしまう。流石に靴を洗うときまで笠をかぶるわけにいかず・・・鮮やかなブロードの金髪がしっかりと見えていた。

「外国の者でな・・・口外すると・・・。」

「わかりま・・・した。食事は・・・少し後でお持ちします。」

当時の外交人は少数ながら各地位にいた為、珍しい物の、鎖国以前の江戸時代ではそれほどの差別はない。だが珍しいのも事実だ。宿主は少し震えながら奥に下がっていった。

「じゃ・・・いくぞ。」

「は・・・はい。」

ソラは半蔵の後を付いていく。木の廊下を渡り、階段を上がると・・・そこにはふすまがあった。

「ここだろうな。」

半蔵が冊子を開けると、少し小振りながらそこには和室が広がっていた。畳敷きの部屋である。只二階と言う事もあり、針と骨組みが露骨に見えていた。当時、天井をつける風習は少なく、また普通の武士なら1回を好む為、二階は普通のお客さん用の安い部屋としてあてがわれていた。だが実際忍びとかは二階とかの見渡しが良い部屋を好む。

「凄い！ここも緑の絨毯だ！」

ソラは気に入ったように裸足でばたばたしてみせる。

「あまり動くな。下に響いて宿主に迷惑かけるぞ。」

半蔵は落ち着いて窓際によるとふすまを開ける。そこには眼下に街道を、上には夜空がはつきり見える。

「あ・・・うん！」

そう言うと嬉しそうに畳に寝そべてみた。実際この頃の畳は貴族用だったりしているが、平和になっていこう、都市部から徐々に

需要が高まり、広まっていた。特にこの武士とかが使う宿には畳がないと宿を変えられる為に多かった。節は江戸暑気あたりでも上客としても見られていた為に、貴重な収入源だ。

「でも・・・畳は畳の良さがある。」

そう言つて畳を見つめる。いつもは殿と一緒に少し柔らかめの畳をも散る為、歩くだけでも足裏の感触がよいがこれは少し安いようだ。少し固い。実際柔ら目の上質の畳と足湯の相性はかなり良く、かなり気持ちいい。

「何か・・・初めてだよ。」

ソラは感心している。

「お食事・・・お持ちいたしました。」

そう言つと宿主がふすまを開け、お膳を運んでくる。お膳には焼き魚（鯛のお頭付き）と香の物、日本酒と米が付いている。流石に子供にはご飯らしい。後は吸い物が付いていた。

「これは・・・。」

「今朝採れた物です。お召し上がりください。」

そう言つと宿主はさつと引き下がっていく。何か瞳の奥が怯えているようにも見える。

「早々怯えなくとも良い。」

その言葉に宿主の顔は暗い。半蔵は側に近づき、懐から何かを取り出し・・・握らせた。

「拙者達もこの宿の良さを堪能したいだけだ。口外せねばむしろ・・・。」

「わ・・・わかりました。浴場に湯を張っておきますので、一度入り口までおいください。」

そう言つとさつと宿主はふすまを閉め、去っていった。

「でもまあ・・・食べるか。」

「うん。」

ソラは頷くものの、何もしようとしなない。

「お主・・・。」

「なに？」

「食べないのか？」

「手とか？」

「いや。」

初めてのお膳料理にソラはじつとお膳を見つめていた。実際か味方の宿屋ではこの頃ぐらいからお膳料理は出されていた。だがこういう自室に料理を運ぶような事は、病気で特別に頼まない限り海外の宿屋などで行う事はない。しかも彩り豊かな器にのせられた料理は・・・ソラにとっても初めてだ。じつとソラはその高級そうな器を見つめていた。

「お主・・・こういうのは初めてか？」

「うん。」

実際信繁達も船で食事はしたが・・・木の器を使っており、早々豪華ではなかった。実際半蔵でもこういう器の食事離れていない。だが、江戸初期以降陶器の技術が広まり、器が貴重ながらも、窯が広がっていき、炭窯などに派生していった。只、その中で鮮やかな色彩は再現にかなりの歳月を要している。

「どうやって食べるの？」

ソラが不思議そうに器の周囲を見渡すが、フォークやナイフ、スプーンの姿はない。

「これだ。」

そう言つと半蔵は器の下に埋もれていた箸を取り出し、びくびくさせる。

「え？」

「お主・・・清には行った事が・・・。」

「あるけど・・・使わなかった。」

実際清にはこの当時から各国に開かれた港があつたが、その地に置いて港の人々の多くは、自前の食材しか食べなかつた。それ以外を嫌っていた風潮が大きい。その為、数回しか寄港しないときは、箸を使わない船員も多い。ソラもその例にならつていた。

「そうかこれ……。」

そう言つと半蔵はソラの裏に回るとソラの手を掴んで箸を持たせる。

「こつ持って……。」

そう言つとソラの手を取って箸で者を掴ませる。

「こつやる。やってみる。」

そう言つと半蔵は手を離す。ソラは自分の手の指の間に挟まれた箸を見つめる。

「スプーンじゃダメなの？」

「スプーン……さじか……。日本ではそれが普通だから食べるときに覚えておきなさい。意外と便利だぞ。」

半蔵は席に戻り、箸でご飯をすくい口に運ぶ。それなりの味だ。

きつと少し上宿だったな。少し予算が足りるか……。いや……

もう少しで京だからな……。

「でも……これ……。」

ソラの手つきを見ると指を単品で動かすのになれていないようだ。

「箸をまたがせてつまむ……。わからんか……。」

ソラの手つきを見ると流石に……。魚を食べるわけにはいかないか……。半蔵はそう考えるとソラの前に来ると箸で魚をほぐし始めた。

「箸で挟んで食べる……。」

半蔵は魚をほぐすと、自分の目の前の鯛を食べる。このあたりは鯛は良く捕れる魚で、しかも侍にはウケの良い魚である。半蔵は自分の魚に口を付ける。少ししよっぱいが……。味は良い方だ。この頃の魚は保存法が確立されていない為、腐りやすい為、沿岸部を旅しないと手に入らない。なお……。山奥などでは祝いの席でしか出されないが、重宝されていた為、高値で売れる事が多い。

「うん。」

そう言いソラは箸で強引に掴むと、口の中に入れる……。焼き魚ほどではないが……。旨みを感じる。

「ねえ・・・ダー？」

「半蔵で良い。」

「半蔵。日本人って魚か団子しか食べないの？」

ソラは不思議そうに魚を見つめる。

「島国だから魚が多いが・・・山に行けば色々食つぞ。」

「そうなんだ。」

半蔵は、蜂の子や、実験で食べた蚕などを思い出す。確かに色々食べた。魚を一通り食べると、じっとスープを見つめる。

「このスープは？」

「ああ・・・こうだ。」

半蔵は器を持つと箸を添えてぐっと碗の中身を飲み干す。中橋地味か・・・回の味が口いっぱい広がる。

「中に貝があるけど？」

「から付きだから食べなくて良いぞ。」

そう言うとソラは箸を添えずにくっと口の中に入れる。貝の味がいっぱいするが少ししょっぱく、それでいてコクが・・・。

「これ？貝？」

「吸い物だが・・・。これは醤油とダシか・・・これは。」

この頃の上方は薄い味付けを好み、薄目のダシと、醤油をベースとしていた。それに醤油のコクがない為に、初期以降で、薄口醤油が開発されるのだが、その前は単純に薄い味付けが多かった。

「醤油？ダシ？」

「まあ・・・食べ。食える物だ。」

「う・・・うん。」

しばらく、箸に苦戦しながらも、ソラはやっと夕食を食べ終わる。

「でも・・・これ・・・綺麗だね。」

と言っても簡単に黒の顔料で色づけされた簡素な陶器であるが・・・それでも陶器自身が高級品のイメージがあるソラには紹介の船長室で見た小さい物しか覚えがない。

「そうだな。」

半蔵は自分の所にある器を見つめる。椀はともかく鯛には柄がは行つた器が用いられている。

「僕こつうなので食べたの初めて……。」

実際領主次第では陶器は王宮で見るとも、木の器が一般的で多い西洋では陶器は珍しかった。しばらくソラは固い容器をじつと見ていた。

「失礼します。」

そついうと一礼をして、宿主が現れる。

「風呂の準備が……食べ終わったようですね。下げさせてもらいます。」

そついうとソラの目の前にある器を膳ごと持ち上げ、持ち去ってしまった。ソラは名残惜しそつにじつと……お膳を見つめていた。

「……ありがとう。」

ソラがぼそつと宿主に声を掛ける。つい口から漏れたのだらう。

その言葉にぴくりと動作を止めると、宿主は振り返つた。

「ありがとう。」

そう、ソラの顔を見て返答すると、すぐに後ろを向いてしまった。只その時、宿主の口元がゆるんでいるのは……半蔵しかわからなかつた。

「では……浴室においでください。」

そついうと宿主は下りていつてしまった。

「美味しかった。」

半蔵を見ながら、ソラは言った。もうお膳もないが満足そつな顔をしていた。

「だな。」

半蔵はその顔を見て、払つた金額分の甲斐はあつたようにも思えた。

「で次はどうするの?」

食事を終えてしばらくすると半蔵はソラを引き連れて階段を下り

る。

「風呂だ。・・・そう言えば・・・。」

半蔵はじっとソラを見つめる。

「お主水浴びとかはするほうか？」

当時、石鹸もないが、体を綺麗にする習慣として水浴びは良く行われた。

「うん。父さんと一緒にいたときは、船を下りるたびにしてたよ。ソラは洗ってくれたときの事を思い出す。」

「そうか。それが少し変わった物だ。」

そう言つと下を見ると、宿主が幾つかの端布を持っていた。

「準備はもう・・・。」

半蔵が周囲を見渡すと、幾つかの奥の部屋に明かりがともっている。客がもっているようだ。

「大丈夫なのか？」

気を使うように半蔵は見つめるが、宿主は至って平気そうな顔だ。「これぐらいまでならどうにかかります。まあ・・・もうこれ以上は客は来れそうにないですがな。」

そう言いながら端布を優しく半蔵に手渡す。

「そうか。では頼む。」

「この風呂最近言われて作ったんですけど・・・上々ですて。」

「この宿は、本陣なのか？」

半蔵は不思議そうに聞いてみる。宿場町にある最大の宿の事で、良く大名が泊まる為にその大名が泊まる場所・・・すなわち本陣という言い方が一般的であった。

「ここはお大名様ではなく、商人の方々が泊まったり、家老殿がお泊まりになります。」

「それか。」

「はい。良く聞かれたので、京から職人を呼んで作らせました。気をよくして、うきうきした顔で店主が歩いていく。」

「下には部屋側なんですけどね。」

「まあいいではないか。」

半蔵は半笑いのまま・・・主人の後を付いていく。庭園をしばらく歩き行つた先に小屋が見える。

「京の人いわく、千利休様がやつたとかで、風流だと聞きまして、野外に。」

当時の『格好良い』風流』と言う流れがあり、その為風流である物は積極的に取り入れられていた。小屋は竹で編まれており・・・只当時に、男湯や女湯の概念はなく（元々湯船自身が貴重の為、多数の設置は出来ない）一個だけが普通であつた。

「そうか・・・ありがたい。」

「では・・・ごゆっくり。」

そう言つと宿主はそのまま去つていつてしまった。

「で・・・ここ・・・何？」

ソラが不思議そうに建物を見る。

「まあ・・・屋外の風呂はある意味楽しみだ・・・初めてでな。」

半蔵は少し慎重そうな面持ちで、建物の中に入る。

「・・・そう。」

そう言いながら小屋にはいると、藤で編まれたかごが床に置かれただけで、湯と部屋に仕切りさえなかつた。これが普通であつた。刀が錆びぬように仕切りがあつたりするのは多数の人間が同時に入るようになる銭湯ができあがつてからである。

「あれは？」

ソラは視界の先にある湯気がでる地面を指さす。

「湯だ。」

「ゆ？」

「熱い・・・と言つても相当ぬるいが。」

そう言つて半蔵は上半身の服を脱ぎ始める。

「え・・・え？」

ソラは驚いて半蔵を見る。

「水浴びと一緒にだ。脱げ。」

そう言つと半蔵は下までを一気に脱ぐ、流石にふんどしはつけているらしく、白い布がさらっとはだける。

「え・・・え・・・ちよっと。」

ヨーロッパでもそうだが人前で脱ぐというのは、本能的にいやがる傾向にある。

「では着たままはいるか？ ずぶ濡れたままだぞ。」

半蔵はそう言つとふんどしをほどき始める。

「自分で脱ぐよ。」

そう言つとソラは厚着のチョッキを脱ぎ、シャツに手を掛ける。

「でもまあ・・・こうしてみると差がある物だな、服にも。」

「そう？」

そう言つてチョッキをかごに入れ、ズボンを脱ぐとそのまま下半身があらわになる。

当時のヨーロッパでは下着は一般的ではなかった。日本ではふんどしが伝わり、誰でもつけるようになっていたが、当時のヨーロッパではズロースなど（女性向け）以外はなく、特に一般人で下着が普及するのは1635年前後以降だと思われる。その為、吐いていない方が普通なのだ。ソラはズボンを適当にかごの中に突っ込む。

「でも・・・それ・・・何？」

半蔵が豊んでいたふんどしを見つめる。

「そう言えば、そっちにはないのか・・・これは・・・ふんどしだな。」

「ふんどし？」

「拙者達は当たり前だが・・・戦争でな・・・という前に寒い。服は脱いだか？」

「うん。」

そう言つてソラを見る。確かに脱いだようだ。金髪と相まって肌が白く感じる。

「白い肌だな。」

「そう？」

半蔵はじつとソラを見とれているが・・・寒さが体にしみる。今は冬なのだ。

「こっち来い。」

そう言つと半蔵は湯船の前に来ると岩場の真ん中にしつらえた湯船を見る。岩の中に埋まっているものの、組石で作られており、下で焚くようになっていいる。無論中板は設置されている。当時最先端の風呂『五右衛門風呂』である。下に木の板があり、熱さに耐えられるようになっていいるが、板をずらすと石が熱く火傷する。量産が出来ない上に熱さの調節が難しいが、湯船が小さければ結構速く熱くなる。もう一つの欠点はこの風呂一つに月一人、下の窯に付いていなければならぬ所だ。

『どうですか！火加減は？』

向こうから宿主の声が聞こえる。

「あ・・・。」

そう言われて半蔵はしゃがみ込むと指を湯船に入れる。ほどよい熱さだ。少し熱いがすぐにでも入れる。

「ああ。良い湯加減だ！後は良いから・・・お主は他の客の世話にでも。」

半蔵が声を上げる。

『お言葉に甘えて。』

そう言つとしたの方から走り去って行く声が聞こえる。会話が終わる頃にはじつと湯船を見下ろす・・・湯船は半分埋まった所にある。

「お湯？」

「ああ。」

ソラの声に半蔵は頷く。

「大丈夫？」

「先に入るぞ？」

そう言つと、半蔵は先に湯船に入ってみせる。

「熱くないの？」

「このくらいなら熱くない。」

そう言われてそろそろと指を湯に当てる。確かに熱いが・・・火傷はしない。当時の湯の温度は・・・温度計もない為、尺度もない。その為、経験と勘がモノを言う世界でもある。

「ほら！」

そう言つと半蔵は立ち上がると、ソラを持ち上げ無理矢理湯船の中につける。初めての感覚にじたばたする。

「あ・・・あうあうあうあうあうあああ・・・。」

正確にはソラはじたばたしようとしたが、半蔵に捕まれているは、早々にも暴れる事も出来ない。しばらくすると・・・落ち着いてくる。

「熱いけど・・・それほどでも。」

ソラは不思議そうに湯船を見つめる。

「だろう。暖かいだろ。」

「裸で暖かい。」

しばらくすると自分から湯船の中に体を入れる。

「これが風呂だ。」

「うん。」

この江戸初期以降風呂は各地に広まり、憩いの場として活躍していく。その暖かさにじつとソラは使っている。

「でも水浴びじゃないけど・・・じつとしていいの？」

ソラは不思議そうに見渡す。水浴びでは入った段階で体を擦る。

「少し長く入っていた方が・・・垢が浮きやすい。」

そう、当時の風呂で石鹸を使わずに体を洗う方法とはこの「湯に長く入って垢を浮かせる作戦」である。その為、二人とじつと湯船に浸かっている。まあ、戦闘とかではこれを行うと湯船が汚くなるので、やってはいけないが、当時はこういう入り方だった。

「でも・・・どうしてお湯に？」

「いくつか説があるが、ちょうど信濃の山奥で自然に湯が沸く温泉なるものがある。一度入ったが・・・あれはこうこういいうお湯とも

違うモノがある。」

「そんなのがあるの?」

ソラは自分の入っている湯を見つめる。

「これは流石に違う。でもな・・・そう言う自然に出来た薬湯なるものがあり、それに浸かれば生傷が治るのだという。それを聞いた大名達がこぞって自宅にも作らせたのが始まりだという。」

「そうなんだ。」

そう言っただけでソラは湯を見つめる。ある意味水不足さえするヨーロッパに置いてこの水の使い方は・・・かなり贅沢だ。確かに水浴び自身はいくつもあるが、湯を使った事例は少ない。

「でも気持ちいいだろ。」

「うん。」

「では出るか。」

「へ?」

「長く入ると湯あたりするし、それにもう一つやる事があるのでな。」

「

ん?」

不思議そうにする中、半蔵は湯から身を乗り出すと手酌で近くの岩に湯を当て始める。

「ほら・・・出る。」

「うん。」

そう言っただけで、ソラは湯船から出る。

「ここに座る。」

当時の風呂場ではまだ腰掛けはなく、近くの岩場に座るほうが主流であった。ソラは頷くと、半蔵が湯を当てた岩場に座る。少し冷たいが・・・暖かくはある。素直にソラはその場に座る。半蔵は周囲を見渡すと掃除用の水桶を発見し、それを湯船に入れ、湯を側に寄せる。

「で・・・何を・・・?」

ソラは振り返って見ると、宿主から受け取った端布を桶に入れ濡

らしている。

「少し・・・じつとしていろよ。」

そう言うと同半蔵はソラの前に回り込む。こうやってみると、確かに肌は白く・・・幼い顔も相まって女性にも見えるが・・・男だ。流石に船に乗っていただけあって・・・幼い中にも・・・筋肉の発達は流石に見える。だが肌は所々が黒く・・・苦勞の後が伺える。下の方・・・少しおお・・・いや・・・そう言うのは・・・不謹慎だしこれでは衆道（当時で言う同性同士の愛の事）だ。だが・・・これほど・・・いや自信をなくすほどではない。頭を振り上半を見つめる。表情が可愛いが・・・だが・・・だからこそ・・・半蔵は腕を取ると二の腕あたりを端布越しに握り・・・そこには幼いながらも鍛えられた筋肉を感じる。その腕を少し力を込めると強く擦り上げる。

「うい・・・いいひひひ・・・半蔵・・・。」

くすぐったそうに半笑いしながら半蔵を見つめる。

「だから・・・じつとしている。」

そう言うと同半蔵もゴシゴシと擦る。その間くすぐったそうにしているソラを尻目に擦った後の布を見つめる。かなり黒くなっている。それをお湯につけると布を擦り合わせている。当時の衣類（端布とは服とかに使った布のちぎれたモノで、余り物の布を指す。雑巾は大きめの、端布は小さめなどに使う。）繊維は手編みの為に荒く太い。だからと言うわけではないが、風呂で皮膚をふやかせれば、十分汚れが取れたのだ。布を桶につけるとかなり・・・黒い。やはり水浴びばかりで拭いてはいないようだ。当時の衛生に関しては一般人であろうとか成りうる。病に対する恐怖もあるが・・・予防法などが武士などから伝わっている事が大きい。実際武士などよりも農民や市民の方が詳しい事さえ大きい。その為か、匂いなどは本来こういう宿ではうるさく、匂いだけで泊まるのを断られた旅人も多かった。

「ほら・・・こんなに。」

そう言つて半蔵は布を見せる。数回擦つただけで真つ黒となり元の模様が見えなくなるほどの、黒さ……であつた。

「え？」

半蔵は軽く桶の湯の中で汚れを落とすと今度は反対側の腕を取ると桶の湯を腕に流し、強く擦る。すると今度もまたかなりの垢がぼろぼろと出てくる。

「コ……これ……いつまでやるの？」

「全身だ！全身！……じつとしてるよ。」

ブーツとソラの体……今日は洗濯日和だつたようだ。ゴシゴシと擦るその半蔵の目は夢中に成つた人のそれであつた。

「はあ……はあ……もう……。」

「も……もう……流石にいいぞ。」

ソラは息絶え絶えに岩の上で寝そべり、上を見つめる。

「もう……ぼく……。」

ソラにとつて全身を洗われるのは……しかも湯で洗われるのは初めてであつた。いや産湯を除く。半蔵はその様子を見つめる。半蔵もまた、兄弟子に体を洗われた事がある少年時代を思い出す。あの頃は……平和だつたな。半蔵はぶるつと体を震わせる。

「流石に拙者も湯冷めしてきた。」

そう言つと半蔵はもう一度風呂にはいる。流石にもうぬるいかもしれないが……無いよりはましだ。

「もう一度……入るといい。気持ちいいぞ。」

その言葉に無言でソラは立ち上がる。その顔は口を半開きにし、笑いと疲れとも言えない顔であつた。ソラはそのまますつと風呂にはいる。体に湯が染み渡るようであつた。

これもまた……ソラにとつて初めての体験である。こんな風にお湯を感じた事はなかつた。だが顔は疲れ果て……くすぐつたさで脱力し、もうこれ以上は……。

「暖まつたら……でるぞ。これ以上宿主に迷惑はかけれまい？」

「う．．．はい。」

ソラは軽く頷くと、顔の半分までお湯に浸かった。この方が速く．．．で．．．寝て．．．。ほんとうに．．．。

ブ！

つい水面に浸けてしまった顔を慌ててソラは起こす。

「大丈夫か。」

そう言うと半蔵はソラを抱え、無理矢理湯船の外に抱えて出す。

「あ．．．。うん。」

「出よう．．．か。」

「うん。」

ソラは眠そうな顔を、無理矢理にも眼を開き答える。半蔵はその返事を聞き、足が着く高さに降ろすと自身も風呂から出る。半蔵が先立って脱衣場に行くとそこに二つあった手ぬぐいを一つソラに渡す。本来なら手ぬぐいを使って体を洗うのが本当なのだが、ソラの垢の量を計算し、半蔵は端布を頼んでいた。手に持っていた端布を見ると、それはもう真っ黒で、汚れが取れそうにない。攻城隊になると洗っても汚れが折れないので、処分するのが普通だが．．．大体この状態でもしばらくは洗って使うが．．．そう言う物がしまえるだけの場所は旅中にはなかった。ハンゾは手ぬぐいで軽く体を拭くとふんどしを付け始める。ソラも手ぬぐいで体を拭くと、もう汚れは少ないようだ。今まで白っぽい肌だったソラの肌は透き通るような白さに変わっていた。これで少しは．．．。

「気持ちよかったか。」

「うん．．．。」

弱い口調で頷く。その声に半蔵はソラの顔を見ると．．．どこかすっきりしたような顔をしていた。空を見るともう夜半過ぎで外も静かになっていた。

半蔵達が部屋に帰るともうそこには布団が敷かれていた。布団もまた高級品と言いたい所だが、詰める物がどうであれ庶民にまで存

在していた。半蔵はじつと布団を見る。やはり綿布団だ。西洋では羽毛などが主流という話もあるが、日本では木綿がメインであった。その為、柔らかい寝心地は結構一般的でもある。

「これ……。」

白い布で縫われた布団にソラは少なからず興奮していた。只西洋の布団は高級品で、綿が入ったものなど珍しく、布だけを被り寝る事も珍しくなかった。そうでなくとも綿自身も貴重で、薄い掛け布団もまた多かった。

「寝るぞ。」

「はい。」

そう言つと数枚の服などを脱いでいく。

「あれ？」

ソラは気が付いたように内地の一番上を見つめる。黒い服に見えるが……質感が違う。実際ソラと半蔵は数泊野宿はしているが、その時でも内地は脱ぐ事はなかった。その為初めて脱ぐ所を見たと言つてもいい。

「これか？」

そう言つて脱いだ帷子かたひざを見せる。忍者用の特殊な帷子で様々な素材を配合する事により想像も絶する堅さと軽さを実現した特注品である。只これをそのまま着るのは冷たい為、その間に布をかぶせ、冬用の帷子にしてある。

「帷子だ。防具みたいな物だ。」

「鎧？」

ソラは真つ先に浮かんだ防具の名前を言ってみる。

「まあ……そう言っわけではないが、ある程度なまくらな刃程度なら通さぬし、その下に更にもう一枚着る。それである程度までの打撃にも多えらえる。」

ソラは半蔵の脱いだ帷子を見つめる。チキンと畳んである。

「ソラ！」

ソラはびくつとなる。つい帷子に触れようとしたからだ。

「す……すまない。寝よう。拙者の武具とかを触れて欲しくないからな。」

そう言つとばつが悪そうに半蔵は布団にはいる。その言葉にソラもまたしずしずと布団の中に入る布団の中は柔らかく……ふわふわしている。

「ごめん。」

ソラの入った布団から声が聞こえる。

「いいんだ。」

そう半蔵が答えるが少し気まずい……訃音期が周囲を支配する……半蔵は半身をおこし、ついていた明かりを消した。半蔵はまた布団に体を沈める。

「ソラ……。」

「ん？」

ソラは暗い中にも半蔵の方を見る。半蔵は上を向いているようだった。

「どうだ。平和は。」

「え……。」

ソラはじつと目をこらし、半蔵を見るが、微動だにしていない。

「これが……平和だ。」

「これが？」

「ああ。元々こういう生活は大名とかの偉い者専用でしかしなかった。だがこうして平和になればそれが徐々に、庶民にも使えるようになる。」

「……。」

「平和になれば、争う必要が無くなり、みんなが楽しく笑って、ゆつくり生きられる。」

「……。」

「こうして楽しい事もいっぱいできる。いろんな珍しい物も見られる。楽しめる。生きていて楽しくなる。」

「……。」

半蔵が今度はソラの方を見ると・・・ソラはこちらを向いたままだが・・・ソラの目は閉じられ、寝息を立てている・・・よう見える。

「もう・・・寝たか・・・。」

「うみゆ・・・もう・・・ありがとう・・・。」

寝言か・・・はつきりしない声が・・・ソラの口から聞こえた。

その言葉にはずそうとした目をもう一度戻すが・・・もうソラは寝ているように見える。

「・・・おやすみ。」

半蔵は眠ろうとしてまぶたを閉じようとしたときに・・・ふすまがことごとと動く。その事に目がめると、半蔵はじつとふすまを見つめる。そこには小さな書き置きが置かれていた。それを確認した半蔵はもう一度布団に潜り直した。

「おはよう。」

ソラが目を覚ますともう半蔵は起きており、出発の準備をしていた。

「おはよう。寝れたか。」

「はい。」

ソラははつきりとした声で答える。ソラにしても久々のすつきりした朝だ。人生が生まれ変わったような気さえする。

「本当に・・・。」

ソラにとって初めての連続だった。

「もう少しと言いたい所だが・・・急用が入った。」

「え?」

半蔵は急いで仕度しているようだ。ソラの荷物は少ないとはいえ、仕度はしなくてはならないようだ。

「里に戻らなくてはならなくなった。会議だというのが・・・。」

「

え?」

「僕は？」

「いや・・・京に行きたいのだろう。」

「うん。おじさんに付いていく。」

「・・・少し急ぎの旅になると言うだけだ。今までより更に強行軍となる。それでも構わぬか。」

「うん。」

急いでいても・・・半蔵はソラの顔を見る。確かに急ぎ・・・付いてこられるかわからないが・・・置いて行かれるよりはましだ。

「なら参ろうか。花の京まで・・・疾風怒濤に参ろうか！」

「はい。」

ソラは大きく頷いた。何となくやる気が出る。何か付いていきたくなる・・・今の半蔵の顔はそれだけの偉大な男に見えた。仕度を終えた二人は一階に下りていく。そこには手に包みを持った宿主の姿があった。

「オヤジ、昨日はすまないな。」

「いえいえ。これ。」

そう言っただけ包みを半蔵に手渡す。半蔵が早速包みを見るとそこには幾つかの握り飯があった。食べやすいように海苔が巻いてある。

ソラの目の前に宿主がしゃがみ込む。もう笠は付けている為に、上から見下ろすことは出来ない。

「坊や。昨日はすまなかったな。」

その言葉にソラは訳もわからず頷いた。そのうなずきを見ると宿主が立ち上がる。

「それは・・・お詫びの品です。」

宿主は立ち上がるとすまなさそうにお辞儀する。

「いいや・・・気にはおらん。すまないが。」

「わかりました。また・・・こちらにお寄りの際には。」

「・・・わかった。では。」

半蔵もまたお辞儀をすると、半蔵は歩き始めた。ソラも半蔵を見習いぺこりとお辞儀すると・・・また駆け足で付いていった。その

足取りは軽いようにも見える。宿主はじつとその様子を・・・見つめていた。

「半蔵様・・・。」

この宿主の言葉は・・・この頃の宿屋とかのおおくは影や草と呼ばれる忍者の諜報員も少なくない。忍術などはないが情報のやりとりなどが主な仕事である。その中に置いて一番上の長などの顔を知るものは少なく、情報も送られてくるのに遅くなる事は良くあった。また影の数は多く、上位陣もまたその多くは把握していないのが普通だ。そんな彼のそんなつぶやきが半蔵達の耳に聞こえていたかどうか・・・わかるものはどこにもいなかった。

外伝2・5 座敷牢に凜と咲く（前書き）

緊急指令をうけつとた半蔵は旅を早め、旅路を急ぐ。そして最所の目的地”京”へと向かう。

外伝2-5 座敷牢に凜と咲く

「結構……もう……歩けないよ……。」

ソラはじつと橋を見つめる。大阪の大都市を抜け、ずっと川を上って……大都市を完全に無視する形で山奥まで抜けてしまった。流石に……大阪の町は大きかったけど……なんか……。

「そう言うな。急ぎの旅だと言っただろうに。」

半蔵はここ十日ほど、旅を続けている間もほぼ歩きっぱなし出、流石に健脚である。忍者の業務のほぼ半数以上は飛脚と同じ、いやそれ以上の移動（山野含む）を要求される。と言うのも至極単純だが” に行つて偵察し、詳細を知らせよ” という命令が多い。この頃はまだ手紙さえ中々届かぬ世の為、その度ごとに現地に行かなくてはならない。そして、情報を聞いて歩いて、歩きながら整頓してまた帰る。帰る間に情報を整頓して報告する。ここまでが要求される。その間偵察に二週間以上人に見つからない為に山道を強行軍する必要があったり、様々なことが要求される。その為、忍びの仕事に慣れれば慣れるほど持久力は要求される。またその為の手法の研究や新しい技法はすぐに試され実用化する。この素早さ事が忍者が忍者たるゆえんである。それに慣れた半蔵からすれば、一週間ぐらいの強行軍は慣れた物であった。だが、あまり長時間歩く事になれていないソラからすれば、この強行軍は全力で走つた十日と一緒である。

「でも……これは……。」

実際ソラは宿を出発してから一日で歩き疲れ動けなくなり、それ以来大阪に着くまでの間ほぼずっと半蔵がソラを背負つて移動し、大阪から再度歩くが、もうソラの足の皮がめくれそうになるほど、歩けなくなっていた。

「わかつている。無理するな。拙者でも……ほら……あれが……」

。。。
「半蔵は優しく言うが、実際ソラの体力もかなり無くなっていた。実際野宿しているときに半蔵はソラの足を揉んだり、手持ちの傷薬を塗ったりしていたが、静養が必要であっても。。。任務とは半蔵にとってそう言う物である。」

「京だ。」
川向こうに大きな。。。塔が建っているのを、そろそろ歩くソラが見える。大阪にも少し小さくとも塔は。。。
「あれが。。。京。」

ソラは更に歩こうとするが。。。痛みで顔を歪める。流石に大阪から出発して二日の旅路で出来る限りは歩いたが、足が止まると半蔵が背負っていった。。。だが決して旅自身は以外で休む事はなかった。江戸初期の旅行では普通、一刻（二時間）前後で小休憩を挟むのが通例だが、それをしなかつたのも原因の一つである。

「背負うか？」
ソラは最初いやがったが、そうせざる終えない自分が。。。歩けないから仕方がないと言えば仕方がないのだが。。。
「ウウ。。。ん。。。お願い。」

申し訳なくて嫌がる事も考えたが。。。ソラの体力的に無理だった。半蔵はもう慣れたのか、ソラを背負い、先を急ぐ。

「先を急ぐ旅になるとは。。。。」
「いや。。。いいんです。」
ソラは寂しそうに答える。

「でも。。。あれが京の町？」
背負ってもらって、目線が高い位置から街道の先を見つめる。確かに細々とした建物などがひしめく、山間の町だ。

「ああ。あれが京の町だ。」
何か思い入れがあるように京の入り口を見つめる。

「半蔵はさんは京都に来たの？」
「よくな。」

半蔵は少し歩みを遅くして、負担を掛けないように歩く。流石にこのあたりあたりから人通りも多く、速く走ればそれだけで目立ってしまう。

「大阪と・・・どっちが大きいの？」

道すがら見たあの大きな都市を思い出す。

「京都はこう見ても・・・。」

半三は前にある都市を見つめる。多くの死人や、戦争があっても・・・この年は生き延び、何事もないように生きている

「500年・・・だったかな・・・それ以上前からある。」

「でも・・・。」

ソラは前の都市を見つめる。川越しのあの山間の都市はいかにも小さくも見えるが・・・。

「京は大阪とかみたく・・・正確に言えば陰陽師達作り上げた一大都市だ。今でも、天皇の住まう俺の知る・・・もつとも美しい都市だ。」

そう言うつと半蔵は街道沿いを登り始める。

「大阪・・・大きいじゃん。」

ソラはあの・・・街道から見えた平原いっぱい・・・リスボンなどと同じぐらいの町を思い浮かべる。石でないのが欠点であるが。

「昔聞いた話だが・・・。」

半蔵は周囲を見渡す。ちょうど・・・岩があり、座れる場所でもある。半蔵はそこまで行くと、ソラを降ろした。

「休むの？」

「目的地はもうすぐそこだからな。」

半蔵はソラを見つめる。日は高く、宿はすぐにも取れる。

「昔、この国の首都はもつと港に近かった。」

ソラは半蔵を見つめる。

「だけど、数多くの妖怪が訪れ、殺戮を行い・・・荒廃し、死の町になった。だから」

「だから？」

「二度、首都の位置を変えて・・・その度に多くの人足をつかい・・・それでも・・・何か難がある度に・・・町は荒廃した。ある日は病が流行り、死の都市になり、ある日は盗賊に町が荒らされ・・・そして町に住まう民は嘆き悲しんだ。」

・・・ふと・・・ソラは自分のふるさとを思い出す。確かにあの町ではたびたび盗賊に襲撃されていた。

「最初の町は今で言う清の国の技術をそのまま使った。だが盗賊は跋扈し、夜になれば妖怪が跋扈した。」

半蔵はじつと京都の町を見つめる。

「二番目の町は地形が原因だと言って・・・それでも収まらなかった。」

ソラは・・・じつと半蔵を見つめる。その間も・・・ずっと・・・思い出しては語り続けた。

「そして・・・陰陽術と、武人達が力を合わせ・・・それでも・・・まだ少し・・・病は残った。そこで・・・町を守護する物を作った。」

半蔵の顔はまじめそのものだった。ソラはじつと半蔵の顔を見つめる。

「それが・・・”結界守護”と呼ばれる物だ。その・・・。」

ソラは・・・じつと・・・難しそうに・・・半蔵を見つめる。

「すまない。」

「・・・。」

更に訳がわからない顔をしているソラをじつと見つめると、半蔵は無言でソラを抱え上げ、肩車をする。

「みて見る。今日は、大阪に負けない大きな町だぞ。」

半蔵の声にソラは少し背伸びをする。確かに、大阪と同じように広い盆地の中いっばいに町が広がる・・・。

「大きい。」

ソラは素直に感想を漏らす。

「それでは行くか。その足、医者に診せねば成るまい。」

「うん。」

「ここ数日のソラの足の痛みはひどいが……それ以上に京の町が楽しみでもあった。」

京の冬は寒く冷える。京の町中を歩く半蔵達がふと足を止める。雪も多く、実際雪が止んだこの町では雪が所々積もっている。

「これは？」

ソラが不思議そうに地面に転がっている雪を見つめる。確かに雪は西日本でも降っていたが、雪がこうも積もっているのはここまで無かった。半蔵はその言葉にソラを地面に降ろす。

「雪。初めてか。」

ソラのいたリスボン近郊では山間でもそんなに雪が積もる事はなかった。

「うん。こんな白いの初めて。」

「もう少しで着くから、そこで……ほら……あそこ。」

半蔵が指さした先に多くの建物が並ぶ大きなお屋敷がそこにはあった。当時の武家屋敷は多く、公家屋敷も存在する。その多くは別邸であり、京に来た際に滞在する拠点になっている。

「あの……壁？」

ソラがその建物を不思議がるのは門はあるものの後は壁で……その向こうが見えなかったからだ。

「屋敷だ。」

半蔵の言葉にソラはいぶかしがる。

「だって……。」

ソラはあまりにソラの……上方向に建物が無い為に何があるのかわからなかった。ヨーロッパでは大きなお屋敷は上にも高いのが普通で、三階以上は当たり前である。だが、日本の屋敷で二階は珍しく、平屋が多い。その為、日本では二階がある設計自身が珍しいが、西欧ではそれが逆転する。

「中は広い。」

半蔵達が門の前に来ると門番が二人棒で行く手を遮る。

「お前達。ここはどこだかわかっているだろうな。」

屈強な男達がじつとこちらを睨む。

「拙者、見張りやその他には用はござらぬ。拙者は只一人、凜殿に。」

その言葉に門番達が驚いて・・・お互いを見つめる。

「すまないが・・・中で確認を取る。」

そう言う一人が走って建物の中に入っていく。

「どうして・・・。」

半蔵が門番を注視している間にソラは半蔵の裏からじつと奥の建物を見つめる。確かに大きい、歩いてすぐに玄関があり、その奥の様子はわからない。只、横に広いのはわかる。半蔵達の話し声が止んだのを見てソラは上を向く。

「横に・・・広いの？」

「みて見る。」

そう言う半蔵はわざと門の外の壁沿いを指さす。そこには入ろうとした時にはわからない、視界の果てよりも長い壁がずっと張り巡らされていた。

「広いだろ。」

京都の町は建物自身がかなり小さいが、貴族の建物となると話は違う。その大きさは一つの町を越すほどに大きく、また、空間の使い方の贅沢さは他の建築を上回る。

「すいません。」

その声の正面に二人が向き直ると、門番の男が礼儀正しくお辞儀をしている。

「何用か聞いて参れと。」

もう一人の門番が帰ってくると、息を切らしながらもじつと半蔵を見つめる。

「それは・・・。」

声を出そうとしたとき、門の奥から老人が一人、表に出る。

「ほう……。」

門番達が老人の姿を確認すると、慌てて背筋を伸ばす。

「お主……珍しいのお。」

じつと老人は、半蔵を見つめる。

「お久しぶりです。翁。」

「挨拶は良い。何用だ？」

老人は厳しい目で半蔵を見つめる。

「だから……凜殿に……。」

「あいつが今どんな感じなのか……お主が一番知っておろつ。」

「知っていても会いに来るのは自由でございましょう。」

半蔵が翁の声に食い下がる。

「まあよい。あ奴も暇をもてあましておろつ。本来なら……。」

「だから……。」

「ついてこい。」

そう言うつと老人はくるりと背を向け、建物の中に入っていく。その後を半蔵は付いていく。ソラも一緒に付いていくが、壁の向こうは立派ではあるが今までの建物みたいな……。少し歩くと門から見えた玄関にたどり着く。玄関は先日見た宿の大きさの半分ほどの大きさもあり、無駄に広い。半蔵は端によると、ワラジを脱ぎ始める。それを見てソラは靴を脱ぎ始める。その様子を老人はじつと見つめる。

「何か……。」

ソラはブーツを脱ぎながら周囲を見渡す。広い割になにもない……。王宮みたいな絢爛豪華さはない。むしろ……。素朴で質素に見える。

「さて……。」

半蔵が立ち上がるつとするとそれを老人の手が制する。ソラもブーツを脱ぎ終わり……。ブーツを半蔵の横に置いた。

「お主……足を見せて見る。」

そう言うつと老人はしゃがんでソラの足を見る。先日も皮がむけ、

傷が付いている。

「これでは床の間も汚れよう。この子も会わせるのか？」

「はい。この子は珍しい……」

そう言い説明しようとするのを翁がまた手で制する。

「確かに珍しいが、それと畳を汚すのは違う。おーい！」

その声に奥から女中が一人走ってくる。

「はい。」

「足袋を持って参れ。」

「はい。」

そう言つと女中が、すぐに……いや建物に入り笠を脱いだソラの金髪が目にとまり、じつと見ながら奥に走っていく。

「これは……半蔵殿。これはかなり無茶をさせましたな。」

翁はソラの足を見つめている。かなり傷跡が多く、生々しい。

「それはまあ……。」

「薬はまたいずれとして……しばらくここで滞りなく事を済ませますかな？」

「いやそのつもりはない。伊賀の山中で所用があるので今日は拙走に。」

「そうか……なら、また寂しくなるな。」

「はい。」

奥から女中が、真っ白い足袋を持ってくる。それをソラの元に来ると、手際よく履かせていく。当時靴下はあつたが贅沢で、ブーツに素足の方が多かった為、ソラにとって足袋は事実上初めてである。ソラはじつと足の足袋を見つめる。白く、女中用のものではあるが、ソラにとってはぴったりである。

「そいつはくれてやるから……行くぞ。」

そう言つと翁は立ち上がり、ゆっくりと建物の奥にあっていった。

「これ……。」

「畳が汚れぬようにだが……そいつは畳で足をすり切れなくても

良い。重宝するぞ。」

そう言う半蔵の足は素足ではある。だがこの室内用の足袋は実際武家社会でかなり重宝している。と言うのも当時の畳の目は細かすぎて、子供の足がすり切れる事態が横行していた。掃除をしても怪我による血や足の膿まで一緒にこすりつけ、匂いがきつくなる（頻繁に代えるほどの財政的余裕は当時の貴族等にはなく、侍は気にはしなかった。）

「うん。」

そう言う二人は急いで老人の後を付いていった。

建物の中を歩いて二十分ほどくと流石にソラも疲労の色を隠せない。その間多くの部屋を横切り、またその大きさは無駄に広い。また中庭をまたぐ為、実際かなり広がった。

ソラの顔にまたも疲労の色が濃くなる。木の床は滑りやすく、神経を使うのに、更に道のりは長く、緊張を強いられる。

「ここだ。」

そう言う老人が足を止めるとそこには中庭の奥の部屋にふすまがあった。あまりにも似たようなふすまが多く”ここだ”と言われるても、それを判別する事はソラにとって難しかった。

「拙者達は……」

「わかっている……後はどうぞ。」

そう言う翁はくるりと背を向け、奥に引つ込んでいった。残ったのは二人だけである。

一息呼吸をおき、ふすまを開けるとそこには木で出来た格子があり、出れないようになっていて、中に一人の女性が座っていた。その女性性は清楚で、美しい着物をまとい、じつと部屋の中央で座っていた。

「お久しゅう。」

女性がこちらを向いて声を掛けると、その女性の流れるような黒髪と、美貌に思わずソラは息を呑む。髪の毛は腰よりも長く、座った姿では一部が畳にかすり、細長い顔は少し寒さで白いが、その分

蒼白さを際立たせ、顔の端正さを引き出していた。体は着物の外観からは判別出来ないが、細身である事は分かる。正に京美人の装いであった。

「久しぶりだな。凜。」

「はい。半蔵様。」

半蔵は座敷牢の前で、座ると、ソラは格子を掴み、じっとその女性を見つめる。

「この子は？」

女性は変わった物を見るようにソラを見つめる。

「異国の子でな、幹花に救われたとか言っておったぞ。」

半蔵が笑いながら話すと、鈴の顔がきらきらと輝く。

「へ、幹ちゃん。こんな子まで……。」

「いや……そうではないが……詳しい事はこれで。」

そう言つと半蔵は手紙を座しきろうの中に少し折り曲げて、入れてみる。それを見た凜が、スツと近づいてくる。実際近寄ってみると……かなり大きい。大の大人ほどの大きさもある……。その様子に更にソラは驚き、呆然としてしまう。

「この人は？」

ソラは口を開いたまま……目線の先をじっと彼女に合わせたまま、しゃべっていた。

「この方は、凜殿と言つて、幹花殿の妹君で、この屋敷の主の側室になりかかった娘だ。」

「そくし……つ？」

「わからなくて良い。」

半蔵が即答する間も凜は手紙をじっと読んでいる。その最中に頬から涙が時折こぼれてくる。

「あの子らしい……。」

ぼそつとつぶやいた後……凜は目の前の少年を見つめる。金髪でかつ勝つ……装には見えないが落ち着いた良い子だ。

「半蔵はん。」

「ん？」

「この手紙によると……この子……ワシン所で引き取れ……
言ってますのんが……。」

「そうか？」

半蔵が不思議そうな顔をして凜から手紙を受け取ると、その部分
をみる。

”この子は筋も良く、勘も働きます。もし半蔵様が引き取らないよ
うであれば……この子の事をお願い致してもらえないでしょうか。
……”

「確かに。」

半蔵はその部分をあえて読んで、ソラに聞かせる。まだソラは日
本語は聞いたりある程度話す事は出来ても、文字まではわからな
かった。

「でも……幹ちゃん……今のこの状況……知ってしまっしや
るうか？」

凜は周囲を見渡す。周囲は確かに座敷の中に宥がくまれ、早々で
る事はできない

「それはない。」

半蔵は断言する。もし日本を発つ前にこの状況を知れば幹花は全
てを捨てても助けに来ようとするだろう。それほどまでに彼女は
この妹や姉を愛していた。

「だとすると……どうします？」

「元より……この子が自分から拙者を離れるまでは置いておくつ
もりだった。だからもしその時があれば……。」

じつと側でソラは、半蔵を見つめる。

「その時はそっちに無理矢理にでも行つて……。」

「行けばどうなるのか……。」

そう言つて半蔵はわざと顔を近づける。実際には確認しづらいが、
この広大な敷地の中に、ほんの少し……監視の視線を感じる。

「分かっていますし、拾ってくれた旦那さんへの恩義もあります。」

だから……お気になさらない……でしょうか。」

「そうだな……すまない。」

半蔵はに頭を下げる。

「そうだ……ソラ……。」

「はい？」

「少し、凜の相手をしてやってくれ。異国の話でも聞けば、気も和らぐ。拙者はこの内の物から薬を。」

「それなら……清十郎さん！清十郎さん！」

その言葉にすり足で、先程の翁がやってくる。

「凜様。どうなさいました？」

翁は凜の前で片膝を付く。

「半蔵殿と一緒に、薬を取ってきてくれまへんか？この子の足に薬を塗ってあげたいのですが……。」

「……在庫は……少しありますな。では半蔵殿……こちらへ。」

そう言うと翁と半蔵は奥へ行ってしまった。

「お姉さん？」

ソラは驚いた顔で、凜を見つめる。凜はソラを牢屋越しに頭をなでる。

「ほんと……綺麗な髪。変わった色ね……。」

優しく、優しく、ソラの頭を撫でる。まるでいとおしい子供をなでるような優しく、ゆっくりと凜は撫でる。

「お姉さん……何か悪い事したの？」

「悪い事？」

「だって牢屋……。」

「そうですね……。少し昔話をしましょうか。」

そう言うと凜は

私たち3人は昔、ある武家の娘でした。戦乱の中に母と一緒に数多くの国を渡り……生きていました。父は戦争で滅ぼされたり、

再婚相手は反逆者として討たれたり……。でも最後に母は父と残って、死んでしまいました。その時逃がされた私たちは飲まず食わずの生活をしていました。その時はちょうど人に出会わぬように、人から逃げるように森の中をさまよっていました。

「もう……。歩けないよ。」

「何言っているの？歩かないと敵が！」

一番上の姉は小刀を手に提げ周囲を見渡し、様子を見ていた。

「だってこの子が……。」

私はもう飲まず食わずに三日も夜通し歩き……。もう体力的にも限界でした。

「もう歩けないよ。」

真上の姉に同調し頷いて見せた。

「でも……。分かった。そこで。」

そう言うと、森の中にちょうどあった切り株を指しました。それを見た二人はよろよろと切り株の上に座りました。姉も、一緒に腰を下ろしました。

「もう……。どうしよう。」

当時、戦国中後期ではこうして逃亡中にたれ死ぬのは普通であった為、食べ物知識はれっきとした生存術なのですが、なにぶん私たちは何が食べられ、何がダメなのか、分からなくて……。もう足も動きませんでした。

「もう動けないよ。どうしたらいいの？どうすればいいの？」

ぼろぼろになった着物は草の汁で汚れ、ぼろぼろであった。それは3人とも同じ装いであった。真上のお姉ちゃんは切り株に寄りかかり、地面に腰を下ろし、ソラを見上げる。雨でも降れば水がとか言うだろうが……。それも数日無かった。泣きそうな声で言う姉を私は只みているしかありませんでした。

「そんな事言っただって分からないじゃん！私……。かあさ……。」

一番上の姉は涙をぼろぼろと流していました。もう私も泣きそうでしたが、私の頬から……。のどが渴きすぎて流れる事がありませ

んでした。

「お姉ちゃん……！……あれ……！」

真上のお姉ちゃんが、指さした先に誰かがいた気がしました。私は立ち上がりフラフラとそこに歩いていきました。

「待つてよ……。」

その後を付くように三人は歩いていくと、そこには木々の間の切り株に花が生えていました。その花は光が差して凄く……綺麗でした。

「桔梗？」

一番上の姉が言うと三人はその側に寄り、花を見つめました。ちょうどその時は春の初めで花は生えていないように見えました。

「桔梗の花だ……。」

真上のお姉ちゃんもその言葉を思い出しました。そう。父と母が好きな花でした。

「春の日の……。」

一番上の姉がまるで讒言のように口から漏れるように言葉が出てきました。それは思い出深いものでした。

「大木の幹に咲く花よ……。」

真上のお姉ちゃんがぼろぼろ涙を流して次の句を言いました。

「凜と咲く花、我らは生きる。」

「母様！」

最後まで言い切った時、三人は抱き合って泣いてしまいました。私たち三人が再婚相手の元へ行く時に三人と私たちの心意気を詠ったあの詩でした。

「花の命は短けれど、人の命をかくいうや。我らは泥をすすりても

」

「生きて恥をさらしても、生き延びてこそ花は咲く。」

「だから……私たち……は……生きて……。」

三人は抱き合って泣いていました。その時、一番上の姉がハッとした顔で周囲を見渡しました。そこには幾つかの花が咲いており、

それは綺麗でした。

「お母様が昔……。」

”昔ね、私が遊びに行った時に花の蜜を飲んだ事があるの。”

”どうやって?”

”こつやつて……こつ。只……毒の花もあるから、気を付けて。これは大丈夫だけどね。”

そう言つて母がみつを飲んでいたあの花でした。

「花の蜜をのんで……。」

そう言つと姉は近くに生えた花を摘み、母に言われた手順通りに花の蜜を吸いました。確かに甘くはないけれど……食べれない事はない!

「これ……食べれるよ!」

「え!」

姉の声に私たちはよろよろと花に寄りました。一番上の姉は一心不乱に花を摘み、その時初めて花の蜜の味を知りました。それは……今でも思い出せるほどに……味が薄く……それでいて生きていた命の味でした。それで腹を少し満たし、しばらくするとどうにか歩けるまでに回復してきました。でも足はまだ痛む為に、切り株のそばで日に当たり、体を温めていました。

「私たち……生きましょう。」

「どこに。」

「いえ……私たちはもう、家も何もありません。」

一番上の姉の言葉に驚いてみました。

「もう一人つて事?」

真上の姉が不安そうに一番上の姉の顔を見ました。その顔は決意に満ちた顔でした。

「男子には、元服の儀なるものがあるそうです。私たちももう三人で生きていくために……。」

「名前……変えるの?」

私は不安でした。その時まだ私には、母からもらつた名前があり

ました。

「もし私たちの出身がばれれば、あのサル共めの事です。きっと殺しに来るかするでしょう。ですから……。」

「名前を変える……か。」

そう言つて真上の姉は切り株の上の桔梗と呼んだ花を見つめます。

「だけど……私達……いえ、私は母様が好きです。ですから……さっきの詩の上から順の名前にしませんか？」

「え？」

「私が上の句……春日の日。」

そう言つて一番上の姉、春日は自分を指さしました。

「じゃ……じゃあ……私が……幹の花……幹花？」

そう言つて素つ頓狂な顔で、真上の姉、幹花は私たちを見渡しました。

「じゃあ、じゃあじゃあ私は生きる？」

私の言葉に姉たちが笑っていました。

「凜ですよ。」

「凜？」

「凜というのは背筋を伸ばしてきつぱりとした様の事。あなたにはその名前が似合いますよ。」

「姉様。」

私たちはもう一度抱き合いました。

「もし苦しい事があつたら……この言葉を思い出して……立ち上がりましょう……そろそろ行きます。もう……。」

そう言つと三人はよろよろ遠き、今度はゆっくりとした足取りで、踏みしめるように歩いて……その場を去りました。

「ありがとう……母様。」

そう言つてお辞儀をしてその森の切り株を去りました。それからして、私たちは人家にたどり着き、そしてこの町まで来ました。そこでこの旦那様に拾われ、半蔵はんに助けられました。しばらくこの家にいた後、三人は様々な修行をし……ちょうどその頃は半

蔵はんの息子さんも一緒だったでしょうか。その方達と修行をしました。それは厳しい修行でしたが、私たちは齒を食いしぼり、生きてきました。そして……

「どうした？」

半蔵が声を掛けると、凧達は驚いたように振り向いた。

「いえ……話し込んでいたもので。」

凧が申し訳なさそうに答えるが、ソラはびっくりした顔で見つめていた。

「それなら……と言いたいが、その床の間で話すのはちとな。」

そう言つて半蔵は廊下を見つめる。冬も寒く冷える床の間では白いソラの肌が更一層に冷えてしまします。

「でもここは……。」

凧は中を見ると、そこには七輪はあるが……。牢で中に入れな
い。

「すまない。」

半蔵は頭を下げる。

「半蔵はん。」

凧はじつと見つめるが……。少し諦めたような目で、見てくる半蔵をどうにも出来なかつた。

「分かりました。後はゆっくりりさせてもらいます。」

そう言つと凧は体半分ほど、後ろに下がる。

「そう言えば、さつき女中達が……。このあたりにまた旅芸人の一座が来ていて、浄瑠璃をしているとか……。その子にそう言う所に連れて行ってください。きっと喜びます。私からは何も出来ませんが……せめて……。」

「分かつた。そうさせてもらおう。」

そう言つて半蔵はソラを立つように手で合図をする。

「そう言えば、この手紙があるのなら……。お姉様にも会われるので?。」

「そうだな。そのつもりだ。」

この時の姉は一番上の姉、春日を指す。

「……まあ皆さんと違って私はのんびり屋やから……。」

「そうか？」

優しく答える半蔵の顔は……微妙でもある。実際彼女の監禁の理由を知っているだけに、彼にとってはこの状態は心苦しい。

「手紙は書いて……後で。」

「分かり申した。ではこの子の手当を終えて、しばらくしてから発つでしょう。」

「半蔵はん……。」

「でも……。」

半蔵はソラを連れて無理矢理……その場を去った。分かっている。自分が原因だと言う事も……。でも、それでも……。この場にいる事さえ心苦しかった。ソラの中から見ても、半蔵の顔は泣きそうであった。

「これで……手当は終わりました。」

そう言つと翁は足袋を脱がせたソラの足を見つめる。薬が塗り終わり、足は痛みがあるものの、前ほど芯まで響く足の痛みはなかった。

「すまないな。」

「いえ。」

翁は固く口を締め、答えた。

「これでしばらく歩けるの？」

「いや、また背負って行くさ。薬を塗ったら、本来は半日から一日放置せねばならない。歩かないでな。」

「そうなんだ。」

ソラは感心したように答える。確かに今までがいかに強行軍だったかと思い知らされる。

「半蔵殿……。」

「何でしょうか。」

「いつまで……あの状態を続けなくてはならないのですか？」
翁はぼそりとしやべった。

「奥方様の危機の表れだ。止めようもなかった。」

「分かっています。」

「だから……分からないとはいえるが……。どうしようもない
と言えばどうしようもない。」

「分かりましたが……側室殿……いや凜は私たちが守ります。」

翁にとつてもあの子は大切でもあった。彼が勤めてしばらくして
来たこの子達は、本当に孤児であったが……それがこつも綺麗に
なり……旦那様も嬉しかった。翁も感動するほど美しかった。だ
けど……。

「そうか。」

「親方様もおつもりです。」

半蔵は詳細を調べただけに、それがつらかった。だが今はそんな
るしかなかった。

「ではこの子を連れて……もう行きます。」

「分かった。」

翁は頷くと立ち上がり、薬箱をしまう。

「これからも……すいませんが……。」

「分かっている。暇があれば寄つて……。」

「お願いします。表だつては言えないので。」

「分かりました。」

半蔵は立ち上がると、ソラを背負う。最近ソラを背負うのが慣れ
てしまった気がする。

「ありがとうございます……おじさん。」

「うむ。ではな。」

戸を開けると、すぐ側の玄関で一度ソラを下ろし、ブーツを履か
せる。半蔵も急いでワラジを履く。

「お主ら……気を付けて帰れよ。」

「世話になった。」

「ああ。」

そう言つとソラがブーツを履いたのをみて、またソラを背負つた。「では。」

そう言つと半蔵はソラを背負つたまま、軽く挨拶をして、京極家の門を出た。

「で……どこに行くの？旅芸人つて？」

「そうだな。言つて休ませるか。拙者も旅芸人の一座は珍しいからな。」

と言つてしばらく、京の大通りを歩いてきた。人の数は多いがあまり周囲に気に掛ける人は少なかった。ここは天下の往来でもあり、いろいろな人が通るからだ。

「芸人……みてみれば分かる。」

「そうなの？」

「派手な……あれか。」

指さした先にはのぼりが掲げられており、大きく一座と書かれている。

「あれ？」

ソラが指さした先には確かに旗があり、きらびやかでもある。

「行つてみるか。」

そう言つて入り口に立つとそこには広場に仮組みした小屋があり、簡単に組まれた舞台があつた。まだ人はおらず、準備中にも見えた。「そうだな……。」

半蔵は手持ちの財布の中身をみる。もうそろそろ路銀もつきかかない。元々飲み道楽する為の路銀分しか無く、強行突破して更に野宿でしのいだが……流石に心許ない。だがまだ、目的地である地点までは遠い。二日以上はかかる。しかも大阪、京都区間での野宿は出来ない（治安問題があり、盗賊に襲撃される可能性がある）為、宿には入つておきたい。

「お客さん・・・見そびれた口で？」

半蔵は思いにふけっていると、入り口で声を掛けてくる男がいた。「見そびれた？」

「はい。今日の分は終わっているのですね。」

半蔵は思い出したように空をみる。もう西日に傾き始め、もう一刻もしないうちに夕暮れになる。今日はここで一泊か。目の前の男は派手な衣装をしており、どう見ても旅芸人の一人であろう。この当時の旅芸人は昼間に講演を行う時が多い。特にこの冬では午前によって終わりの時さえある。その為、芸の時間は分からない事が多い。

「それは残念だ。この子にな。旅芸人を見せてやりたかったのだが・・・。」

半蔵は残念そうに中を覗く。中には腰掛けがあり、演芸舞台が設置されていた。だが屋根はなく、青空での見学であった。

「それは・・・そうですね・・・拙者とかで良かったら・・・簡単なもので良かったら・・・。」

「それはすまない。行くぞ。ソラ。」

そう言つとソラを下ろし、歩いていくと近くの席を指さす。そこにソラが座り、半蔵は横に座る。

「演目は何かある？」

「拙者が出来るのは・・・白雪の舞い。ですが、楽団衆は今、飯に行つておりましてな。」

旅芸人は基本的に勧業主、座長、団員、楽団員に分かれている。

場所を手配する勧業主、人寄せなどの裏方を行う座長・・・これは団員と兼用する事が多い。芸をする団員、そして毎などの踊りで必要な音楽を裏で行う楽団員である。

「それは・・・芸が出来るのは・・・。」

「後はこれぐらいですな。」

そう言つと旅芸人は三つの輪っかを取り出す。

「さてはさてさて、ご覧ください。手酌の輪の舞。」

そう言つと横に向き、輪を次々に上に投げる。輪っかが空に舞つと、次々と落ちてくる輪っかを受け止めては投げるを繰り返し、輪っかが空中で幻想的な風景に見えてくる。

「おおー。」

半蔵が驚くと・・・ソラはぼーっとみていた。あまりの事に驚いているようだ。

「驚いていただいて光栄です。本来なら20人ほどが立ち替わり、芸を行うのですが・・・。」

「分かつている。でもまあ・・・この子もほら。」

あまりの事に呆然としているソラがいた。確かにリスボンとかにも大道芸人はいたが・・・それはあまりみた事がないソラにとつて新鮮な感覚であった。

「そうだな。拙者もまあ何か・・・。」

そう言つと半蔵は立ち上がり、周囲を見渡す。だが、芸に使えるものはなかった。

「どうした！何してる？」

声が聞こえる遠くから男が一人・・・。

「すみません座長。ちょうど子供が一人いたもんでつい。」

奥から出てきたのは少し歳がいった大男である。

「またおめえ、只で芸を見せやがって。安くなるぞ。」

そう言つと大男は観客席をみる。

「すまえねが・・・え・・・は・・・半蔵様？」

「ん？おお・・・。久しいな。」

そう言つと慌てて演舞台をおり、男は半蔵の前にひざまずこうとするのを半蔵が手で制する。

「ど・・・どうしたんですか座長。」

「てめえ。つべこべ言わず・・・。」

「拙者もそういつつもりで来たのではない。」

半蔵は改めて手で制した。旅芸人の一座という者の多くは忍者崩れがいたり、情報収集や人集めの手段として用いられる事が多く、

忍者とのつながりも多い。また芸の一部は忍者等の修業時代に身につけた物が多く、この頃は忍者の頭領ともなれば大上司が大恩人である事が多い。

「この子に芸を見せて・・・やりたくてな。こういうのは大きい所を中心にまわるのだろ。」

「は・・・はい。」

男は慌てて頷く。

「この子は？」

「ん。今の旅の連れだ。」

そう言つて半蔵は壇上に上がると周囲を見渡す。

「どこまでやれるか分かんが・・・おぬし。」

そう言つて半蔵は先程芸をやつた男を指さす。

「何でしょうか。」

「先程の輪つか予備含めいくつある？」

「十程は。」

その言葉に何かに気が付いて、奥に男が走つていった。

「でも半蔵様どうして・・・。」

「そうこつ言つな。旅芸人とかをみるのが珍しいのは本当だ。楽しそうではないか。」

奥から走つて男が輪つかを銃程持つてくる。それを半蔵が受け取ると、少し揺らして重さなどを確認する。

「これならいけるか。」

そう言つと軽く投げる。

「ソラ。見ていると良い。」

そう言つと半蔵は輪つかを投げ始める。先程の男と同じように最初は三つの輪つかでジャグリングを行つていた。

「さて・・・行くか！」

そう言つと半蔵は一部の投げ方を変える。そうすると三つで回っていた輪がこつそりと一つ増え、しかもそれが輪の外に漏れ、後ろ側に落ちようとしているのを、後ろを見ずにキャッチする。そして

もう一回投げると今度は前の方から飛び出し、何故が空中で輪っかが戻ってきてキャッチされる。しばらくこれを繰り返すと半蔵は輪っかを投げるのをやめ、

呆然となつているソラを含めた4人の様子を見つめる。

「すご……。」

パチパチパチ。

「流石……。」

全員が驚いた顔でなかで中一人だけ、手を叩いて喜んでる者がいた。

「ほんまに……相変わらず凄いお方。」

その言葉に三人が横を向くとそこには女性が一人、いつの間にかソラの横に座つて、手を叩いていた。

「お主……。」

ソラが横を見ると、もつと驚いてしまった。それは……。

「凜……さん？」

着物は質素となり、髪の毛は後ろで髪留めでとめているものの、その顔は間違いなく凜だった。

「ほんとに、半蔵はん……芸人も。」

「そう言う物ではない。でも出てきて良かったのか？」

「いえいえ、ちょこちよこ外に出なければ息苦しゅうなります。」

ソラはもう……あまりに驚きが多すぎて……何を言ったらいいのか……分からなくなつた。あの牢……木の柱で出来ており、自分が見ても脱出不可能に見えた。でも……ここにいる。

「いつもごうなのか……ア……すまないが……その二人。」

「あ……はい。」

旅芸人の二人もあまりの展開に啞然としていた。

「少し席をはず……。」

「すいませんがこれ……これで少し餅でも食べて来まへんか。」

そう言つて凜は懐からお金を取り出すと、二人に手渡す。

「ア……はあ……分かりました。」

「すまない。用が終わったら。」

「分かりました。ではごゆっくり。」

そう言つて二人は演舞場から奥に行った。奥には芸人達が仮に泊まる宿泊所がある。

「お主……。」

半蔵は凧を見つめる。

「何を驚かれはるんですか。」

ソラも驚いた顔で見つめる。確かにそれほど……時間はかかっていない。

「いや……まあ……追っ手が来なければいいなと思ったただだ。」

「

「どうやって出たの？」

ソラは目を丸くして凧を見つめる。外見だけで言えば、お姫様みたいで何も出来なさそうに見えるが……。

「それはちよつと……教えてもうたるとちよつとね。」

凧は口を濁すものの、半蔵は理解していた。

「早々。これ……。」

そう言つと凧は持っていた鞆をソラに手渡す。

「これは？」

ソラに見覚えがあつた。しま達が使つていた玉だ。色は違つものの、大きさは一緒ぐらいだ。

「これ、欲しいのやる。少し奮発して買ってきましたん。」

「いいのか。」

「何を言います。あと……これ。」

そう言つとソラと一緒に手紙を渡す。

「春日姉さんに渡しておいてください。」

「お主の姉さんは今……。」

半蔵は輪っかをその場に置いて、舞台を下りる。

「分かっていきます。ですけど……幹ちゃんががんばって私が何もしないのは、おかしいです。」

「大恩あるあの家に恩返しをしたい。只それだけです。それに……」

「それに？」

半蔵が聞き返す。

「あの人を愛してもいます。離れるわけにはいきません。もう少しあそこにいようとします。」

「お主も人をやつと愛せるようになったか……それがいい。只……つらいぞ。」

半蔵が答えると凧もまた頷いた。

「これからどうするんです？半蔵様は。」

「それはちよつとな。只……ソラは連れて行くつもりだ。お主の身の上をこの子にさせるわけには……。」

「まあ……そうでっしやる。」

凧は頷くと、半蔵にも、少しお金を渡す。

「これは。」

「半蔵はんは大丈夫でも……この子には贅沢をさせていないように。少しこれで身支度……してやってください。幹花ちゃんも喜びます。」

「あ……わかった。」

そう言つと凧はしゃがみ込み、ソラを見つめる。

「ほんま……姉様好みのいい子供。」

そう言つと突然、凧はぎゅつと、ソラを抱え込むように抱きしめる。

「本当に幹ちゃんも、素直になればいいのに……。」

ソラは抱きしめられている間……髪の毛の花の匂いを忘れる事はなかった。

「でもまあ……程々にな。」

「見せてな。」

半蔵が呆れる中、凧はソラの笠を取つてみせる。そこにはやはり、金髪の髪の毛があった。だがしばらく眺めると、凧はまた笠をかぶ

せる。

「姉様の前にも連れて行くの？」

「分かん。あそこに入れるか・・・分からないのな。」

「でしたら・・・まあ・・・いいです。」

「すまないが今夜は宿を取る。これで。」

「分かりました。私もそろそろですんで失礼します。只・・・幹花の事・・・頼みましたよ。」

「ああ。」

頷くと凜は名残惜しそうに二人を見つめ、去っていった。

「あの人・・・本当に・・・あの家に囚われているの？悪い事・・・しているの？」

ソラはフラフラと、いろんな店をちよこちよこ見ながら帰って行く凜の背中をじっと二人で見送っていた。

「ふ・・・他の者からするとそうかもしれない。でもな・・・いつでも出られる、あの家でも・・・牢に入れられても・・・あいつは帰って行ってしまふ。それが俺はありうるんじゃないかと思う。それぐらい・・・。」

「愛って事？」

「まあな。」

そう言い見送る半蔵の目には、実際凜の固い決意が見て取れたのであった。

外伝 2 - 5 座敷牢に凜と咲く（後書き）

今回はかなり変わった時間に投稿してしまい・・・又遅れて申し訳
ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6031t/>

異聞 真田信繁伝

2011年12月29日14時47分発行